
紺青のユリ

Josh Surface

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紺青のユリ

【Nコード】

N5575Q

【作者名】

Josh Surface

【あらすじ】

『紺青のユリ』

これは古代ローマ皇帝ネロの母親、ユリア・アグリッピナ自身によって書かれた、人類最古の回想録である。”OST: Agrippina The Younger” <http://www.julystation.com/Agrippina.htm>

第一章「私」第一話

ここに、『紺青のユリ』という名の回想録がある…。

著者は、古代ローマ皇帝ネロの母親であり、そのネロによって亡き者とされたユリア・アグリッピナその人である。この本は、今までたった一人の男性にしか触れられなかった、世界最古の女性による回想録だそうだ。

昨夜、私はこの本を読み終えた。

遙か彼方の国、それも遠い昔の話であるにも関わらず心から彼女の辿った生き方に恋をしてしまった。

今夜、私はこの本を皆さんに、そのままお伝えしようと思います。

コーヒーカップや紅茶を片手に、いや、ワイングラスを片手にでも、いやはやバーボンでもウィスキーでも構わないかな？この彼女自身の素直な回想録を、優雅なひと時の中でくつろぎながら愉しんで欲しいです。

さて、今回この回想録を発表するにあたり、協力してくれた世界中の友人達へ、この場を借りて、心から感謝の言葉を述べさせて頂きたいと思います。

まずはイタリアに住むジョルジョ・チェリくん、君の緻密なまでの分析と探究心が無ければ、本日こうやって実を結べなかったと思う、ありがとう！次に、彼の同僚である古代文書研究家のアドルフ・ナポリターノくん、クラウディウス文字で書かれたこの回想録を、最後まで諦めずに解読してくれたこと、本当に喜ばしい限りです！

ギリシャに住む女性心理学者であり、古代ローマ研究家のイレーネ・バルツァさん、貴方の女性らしい観点と感性、それを上回る情熱無くしては、きっと、これ程まで素晴らしい回想録はできなかつたでしょう！そして、スロベニアに住むラテン語と日本語にも堪能なフーゴ・シユテファンくん、君の実にわかりやすい翻訳が無ければ、私はきっと人生の半分を損していたに違いありません。ありがとうございます！

その他、多くの手伝って頂いた世界中の友人達に、最後まで付き合っただけで、心から感謝します。

本当に、本当に、ありがとうございます！

では、そろそろ、この『紺青のユリ』の表紙を、貴方と共にめくることにしましょう…。

西暦2011年01月31日 月曜日

Josh Surface

第一章 「私」第一話

それは、百合の雫が教えてくれるのだから、目を閉じる事よりも目を開く事のほうが、きっと容易いのかもしれない…。

私が一番最初に思い出として残っているのは、優しい陽の光を浴びた草原。

何歳の頃かは正確に憶えていない。けれど、その場所はきっと、私が生まれたゲルマニア州のオツピドウム・ウビオルム（現在のケル

ン)にある何処かだと思う。お昼寝から起きた私は、目を擦りながら眺めてた。

遠くの方でお父様やお母様、そして三人のお兄様達みんなが、ポツンポツンと、それぞれのどかに散歩していた。生まれたばかりの妹は、私の隣で幸せを一人占めするように、安心してスヤスヤ寝ている。小さい頃の私は、お兄様やお母様の話によると、寝起きは常に泣いていたそう。とにかく不安を泣き声で訴えてたそう。お母様かお父様があやしにこなければ、泣き止む事はなかったらしい。

でも、なんでだろう？

その時の私は、不思議と不安じゃなかった。とても落ち着いて、ずっとずっと眺めていた。時折、短いプクプクした自分の足を、クロスさせたり、足の指を触ったり、そばにある草を、自分の指で遊んだりして、でも、やっぱり遠くにいるみんなを眺めていた。

感触は今でも残っている。

冷んやりと柔らかい土、青々しく茂っている草の茎、そばにあったいい匂いの百合の花。澄み切った瑞々しい空気、遠くの方まで誘われる青色の空、それらを小魚が渡るように流れる雲。

そして、その記憶は、妹が目覚まし、百合の雫を一滴浴びて、キヤッキヤと笑ってる所で終わる。

後々、お母様にも三人のお兄様にも尋ねた事があったが、(妹はさすがに赤ん坊すぎて憶えてないだろうけど...)みんな口を揃えて憶えていないと言う。

これが私の最初の記憶で、大切な思い出。

続
く

第一章「私」第一話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス（紀元前12年 - 63年）年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ（17年 - 30年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后（紀元前58年 - 29年）年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝（紀元前42年 - 37年）年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス（紀元前14年 - 23年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年 - 20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

第一章「私」第二話

三歳くらいの頃…。

多分、家族みんなでローマにいた頃。

ユリアと呼ばれていた私はいつつも泥だらけだった。私の普段着である小さなトウニカを汚しては、道という道を駆け巡り、転んでも膝の傷は舐めて走り続け、木登りだってお兄様達にもこれっぽっちも負けた記憶もなかった。

お母様であるユリア・ウイプサニア・アグリッピナは活発すぎる私が理解できない様子で、いつも泥だらけにしてくるトウニカを見ては血相を変えて私を叱りつける。

今日もお母様に見つからないところで小鳥の巣にある卵の数を数えて、一人だけで木登りを楽しんでいる。ところがお母様の勘は本当に鋭く、すぐさま見つかってしまった。左手にはまだヨチヨチ歩きの妹ユリア・ドルシッラを連れ、お腹の中には三女のユリア・リウイッラを宿しながら、召使いも使わず直接私に木登りをやめるよう訴えている。

「ユリア、降りてきなさい。そんな先まで登ったら危ないでしょう！」

「大丈夫です、お母様。このユリア・アグリッピナには不可能な事はございません！ユリウス家の名誉に恥じぬよう、この大木を制覇してご覧にいきます！」

「そんな名誉はいりません！貴方の大きなお尻は、ローマ中のみんなに見られてるのですから、既にユリウス家の不名誉です！」

「大丈夫ですって、お母様！」

私はゆらゆら揺れる枝の先で、両足で思いっきり何度もジャンプをして無事を示した。

「はぁ！危ないでしょう！ユリア！」

そのお母様の驚く声を聞いた12才のネロ・カエサルお兄様が、急いでこちらに駆けつけてきた。トウニカからはみ出たブルラ（男児用の御守り）を胸元にちゃんとしまい込んで、お母様から事情を聞き、私の説得をし始める。

「ユリア。危ないから降りておいで！」

「大丈夫です！ネロお兄様！」

私はもつと上の方まで登ってみたくなり、不安定な枝からヒョイッとジャンプしてさらに上の枝まで登った。

「ああ！見てられない！」

お母様は顔に手を当てて怖がってる。

実は、内心お母様を驚かせているのが楽しくてしようがなかった。ネロお兄様は腰に手を添えて、どの位の高さに私がいるのかを見ているようだ。すると今度は次男で11才のドルスス・カエサルお兄様が、トコトコと首を軸にブルラを回しながらやってきた。案の定、お母様には大切な御守りで遊ぶな、と頭を叩かれ怒られてる。頭をさすりながら、口をポカンと開けたままチラツとこちらを見て、ネロお兄様から事情を聞いているのか聞いていないのか、後ろ手を隠しながらプラプラさせて遊んでる。

「ネロ兄さん、ユリアは自分でちゃんと降りれるよ。」

くせに偉そうな事ばかり言わないでよね！」

「な、何だと?! でかいケツ女のくせに木登りとかしやがって! それが兄に対する言葉か?!」

「だったら、登ってきなさいよ! 怖がり!」

「うるさいな! オタンコナス!」

「オタンコナスとは何よ! 馬面!」

「二人とも! こんなところで喧嘩するの、やめなさい!」

ネロお兄様はドルススお兄様を肩車させて、小鳥の巢のある下辺りまで登らせようとしている。カリグラ兄さんは抱きかかえたドルシツラをお母様に渡して、サンダルであるソレラをポイ、ポイっと脱ぎ出して、両手両足を使つて勢い良く登ってきた。

「ユリア! 待つてる! 今行つてやるからな!」

「おい! ガイウス! ユリアを刺激するな!」

「大丈夫だよ、ネロ兄さん。ドルスス兄さん、ちょっとどいて。」

「え?」

するとバランスを崩したドルススお兄様が地面に倒れた。慌てて駆け寄るお母様だが、倒れた勢いでドルススお兄様の鼻から鼻水が出ていたらしく笑い始めた。それを見たネロお兄様も笑つてる。気になつたカリグラ兄さんも、見せて見せて!と言わんばかりにもう木登りを飽きている。

「たっははは〜! 本当だ。ドルスス兄さんの鼻水、8の字になつてる!」

カリグラ兄さんの声を聞いた私は…。やっぱりドルススお兄様の鼻水が気になつた。けれど、今度は降りるのが怖くなつてしまった。

「お母様……。降りれなくなっちゃった。」

「ほら見なさい！」

「ええ?! 本当か? ユリア!」

「本当です、ネロお兄様……。」

「おケツから、降りればいいじゃん!」

「ガイウス、お前余計な事言うな。ドルシツラをあやしてる。」

カリグラ兄さんは、鼻水を拭いてるドルススお兄様に怒られてる。でもどうしよう? さっき迄いた下の枝まで足が届かない。伸ばせば伸ばそうとするほど怖くなり、ついには右足からソレラが脱げてしまった。

初めて、自分がかかなり高い所まで登った事に気が付いて震えた。

続く

第一章「私」第二話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス(紀元前20年?31年)年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ(紀元前44年-20年)年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

第一章「私」第三話

「ユリア！思いつきりジャンプするんだ！」

辺り一体に響く低くて大らかな声。

馬の蹄が地響きのように私を包む世界中を揺らしてくる。ゲルマニクスお父様の声だわ！私は顔に両手で目を塞いで、裸足のままジャンプした。

「危ないっ！」

お母様の金切り声が聞こえた。
でも、私は気にしなかった。

「ヨシっと！」

馬に乗ったお父様の両腕に、見事にお尻から着地した。

「只今、ユリア。」

「お父様！おかえりなさいませ！」

まるで太陽のように暖かく山のように大きくて、青空の様に清々しいお父様はニッコリと大きな笑顔で微笑んでくれた。

「ユリア、お前お尻が大つきくなったな。」

「嫌ですわ、お父様のエッチ！」

「ガッハハハ！お尻が大きい事は女性にとっていい事なんだ。きっと良い子供を産むだろう！」

私はお父様が大好きで、直ぐに首元へ両腕でいっぱい抱きしめた。いつも抱きつくとお父様のお髭がチクチク当たって痛いけど、その匂いが大好きで堪らなかった。そして、いつも必ずホッペにキッスを三回するのが私とお父様の約束。

「お父様、お帰りなさいませ！」

ドルシツラをあやしなながら、カリグラお兄様が一番最初にお父様の元へやってきた。

「おお！ガイウスか！大きくなったな。」

「お父様、お帰りなさいませ。」

次に、ネロ兄様が背筋をピンと伸ばして、ゆっくりと清楚な顔付で挨拶をした。

「ネロ〜！随分と背が高くなってきたな。」

お父様はそんなお兄様の髪の毛をワザと乱す様に撫でてあげるのが常だった。ネロお兄様はそれが嬉しくてしょうがなかったみたい。

「お帰りなさいませ、お父様…。あ！」

ドルスス兄様はペコつと頭を下げた。つと同時に鼻水がヤッパリ垂れてしまう。

「ドルスス！また鼻水が出ているのか？ガツハハハ！」

「また出ちゃいました。」

ドルススお兄様は、お父様と一緒に笑うのが大好きだった。

「貴方…。」

すると、お母様がサファイアのような緑色の瞳を潤わせて、右手でお腹を支えながら近付いていく。

「ネロ、ユリアを頼む。」

「はい…。」

私はお父様からネロお兄様へ渡されると、お父様とお母様は恋人だった頃の様に互いを強く抱きしめあって、互いの愛を確かめ合うように安らぎを感じていた。子供心にも嫉妬してしまうほど、二人の愛情は深く結びついていた。

「今帰ったぞ、お前。」

「貴方も…。よくぞご無事で。」

お父様とお母様は子供の前でも憚らず、威風堂々と口づけを交わっていた。一方、ドルスス兄様は私の脱げたソレラを拾ってきてくれて、ネロ兄様はご自分の太腿の上に私を乗せてはソレラを丁寧に履かせてくれる。お父様の馬のそばでは、カリグラ兄様がマジマジと馬を眺めており、ドルシツラは親指を咥えながらギュッとカリグラ兄様のお尻のトゥニカを握ってる。

「おっし！ユリア、履けたぞ。」

「ありがとう！ネロお兄様、ドルススお兄様。」

私はネロお兄様の太腿から、ジャンプして地面におりて、ソレラのつま先をトントンと二回つついた。

「ユリア、ところで卵の数は何個あった？」

鼻水をしっかり拭いたドルススお兄様が尋ねてきたので、私は何も言わず答えずトウニカの下に隠しておいた卵を取り出した。

「うわ！三個もあるじゃんか！」

「そうよ、ドルススお兄様。」

「すごいなユリア！」

「私はタダでは転びません事よ、ネロお兄様。」

「あははは、ユリア。『タダでは落ちません』だろ？」

「ええ、そうでしたわ、ネロお兄様。」

これが私達、ユリウス家の血を引く家族。

続く

第一章「私」第三話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年 - 20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

第一章「私」第四話

家族揃つての夕食。

お父様はそんな時でも、奴隷や召使いに何かをさせる事を禁じている。

「よいか？我が子供達よ。自分達のは必ず自分達で用意し、自分達で片付けるのだ。ローマのルールはローマだけだ。戦場に出て多くの国を見てきた父さんは、全く違う考え方を持っている。召使いや奴隷達は確かに顔や骨格や言葉が違つとしても、肉を切れば同じ赤い血を流し、同じ白い骨が見える。」

お母様は妹のドルシツラを抱きながら、私達子供の前では、出来るだけ平和の心で接したがっていた。

「貴方何も今言わなくとも……。」

しかしお父様は軍人だ。

それも多くのローマ兵から慕われる現実主義の人格者だ。

「いいや、食事の時だからこそ言わなければいけない。そして、我々が口にする動物達の肉も同じだ。同じ血を流し、同じ白い骨を持っている。だが、明日は我が身だ。いつ我々が奴隷となり、食用とされるか分からない。だからこそ、自分達でできる事は自分達で行うのだ。分かつたな？」

「はい！」

「だがな、子供達よ。自分達で行う理由には、もう一つある。」

「何でしょうか？お父様。」

兄弟の中で、長男であるネロお兄様だけがいつも質問を許されている。もちろん、例えば私が質問してもカリグラお兄様が質問してもきつとお父様は許してくれるのだが、これはお母様が決めた教育方針なのだ。

「それは、メシが美味く感じるのだ！ガツハハハ！」

だから、私はお父様が大好き。

幼心にお父様のお話はどこか怖かったけれど、大きな笑い声とキラキラ輝いた瞳をクリクリさせてながら、最後にはとつても大きな心で優しく包んでくれる。

「さあ！メシを食おうじゃないか！」

食事の間は、お父様は不思議と自分から多くを語らない方だった。むしろ私達子供の話、出来るだけ笑顔で聞こうとしてくれていた。まるで、いつも何かを心に刻んでいるような潤いに満ち溢れた瞳で。

「ガツハハハ！ユリアは卵を三つ手に入れたのか？」

「はい…お父様。僕とドルスが昨夜見た時は二つしか無かったのですが…。」

「あ、本当は三個あったのですが、カリグラが一つ欲しいと言ったので、一個あげて二つになりました。」

「ところが、ユリアが今日は三個を持ってきたので、一つ増えています。」

「そっかそっか！ガツハハハ！」

「全く、そのお陰で木から降りれなくなるんだから。将来が心配です。」

「お母様、私は大丈夫ですわ。」

「何を言ってるの！あまりそうやって調子に乗ると、本当に助けが

必要な時に、誰も助けてもらえなくなったらどうするのです?」

「そうだぞ、ユリア。お兄様達がいなかったら、僕しか木登りが得意なのはいないんだからな!」

「ガイウスお兄様に助けてもらえなくなつて、大丈夫ですもの。大体、お兄様があそこで私をバカにするから降りれなくなつたのです!」

「何だと?! ユリア! お前は本当に妹のくせに偉そうな口答えばかりじゃがって!」

「これ、カリグラ! お父様の前で、ユリアとケンカするのやめなさい。」

「はい…お母様。」

「ガツハハハ! まあよいではないか。」

今から考えれば、死と隣り合わせの戦場の中で生き抜いてきたお父様の心の癒しは、家族揃つて食事をする時間であり、だからこそ、召使いにも奴隷にさえも、その時間を誰にも邪魔されなくなつたのかもしれない。食事を終えた後も私達は、焚き火を囲んでお父様の巡ってきた遠い国々のもつても興味深いお話を聞いてから眠りについていた。

「ユリア…。」

「はい、お母様?」

「こちらにいらつしやい。」

すると、お母様は私の手を引っ張つて台所の隅に連れてかれる。この場所は私達子供にとって、お母様からお叱りを受けてお尻を叩かれる場所だった。当然、私は今日の事でつきり怒られるのだと思つていた。

「お、お母様。木登りの事でしたら、今後はもう気をつけますから

…。」

「いいえ、その事ではありません。」

「あ！ガイウスお兄様とのケンカですか?!」

「違うわ、お母さんからプレゼントがあるのです。」

「え？プレゼント?」

お母様は微笑みながら、私の方を見ながらため息を一回ついた。

「本当は男の子のためのお守りだから、女の子の貴女にあげるのはおかしいのだけれども、でも、誰かに似て…お転婆さんでしょう?」

「誰かって、誰です?お母様。」

するとお母様は、大きなお腹を抱えながらも、私と同じ目線にしゃがんで、頭を撫でてくれた。

「あたし…。貴女のお転婆はね、私の幼い頃そっくり。そこでね、今夜お父様と話し合って、貴方にこれを持たす事にしたの。」

それは、お兄様達が持たされているお守りのブルラ。お兄様達の貝殻よりも小さな貝殻だった。

「ブルラを?私に?!」

「ええ…。どうせ駄目と言っても、貴女は言う事の聞くような子じゃないのですから。せめて、このブルラを肌身離さず持ちなさい。そしたら、私も少しは安心できるでしょ?」

お母様は私の首元にブルラを垂らし、貝殻の部分をトウニカの中へしまってくれた。私は嬉しくて嬉しくて、お母様に抱きついた。

「ありがとう、お母様！私はこのブルラを一生、肌身離さず付けま

す！」

「あははは、良いのよ。男の子は成人になる頃外すのですから、貴女も成人になったら外しなさい。」

「いいえ、一生外しません。」

私は本当にこのブルラを死ぬ間際まで一生外さなかった。皮肉にも、このお守りのお陰で、私は家族の中でたった一人だけ生き残る事になってしまったのだ。

続く

第一章「私」第四話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルスス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>

アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス（紀元前12年 - 63年）年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ（17年 - 30年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后（紀元前58年 - 29年）年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝（紀元前42年 - 37年）年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス（紀元前14年 - 23年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

第二章「父」第五話

「お父様、ヒステール川（現ドナウ川）って、何処にあるのですか？」

「うん？ユリア。ヒステール川はな、この先をずっとずっと、北に向かうとあるのさ。」

私は夕暮れ時になると、お父様の肩に乗る事を楽しみにしてた。山のような大きな大きなお父様の肩に乗ると、まるで自分も大きくなつたような気がしたから。

「あの、大きな大きな雲よりも、うんとうんと先ですか？」

「ああ、うんとうんと先にあるんだ。」

同じように、カリグラ兄さんも望んでいるの知ってたけど、私が必ず先。時々、お父様の首に抱きついて、後ろで待ってるカリグラ兄さんにベロをべーって出して勝ち誇ったりもした。

「お父様、そこはどんなところなのですか？」

「まるで海のように広くて、灘らかで、小鳥達が楽しそうに囀るよ
うな川だ。」

お父様はいつも遠くを見つめていた。そして、子供達の質問に丁寧に答えてくれた。私は、お父様と過ごす夕暮れが堪らず好きで、いっつもほっぺにキッスを三回していた。

「ユリア……。お父さんはいつだってユリア達の事を愛している。だから、お前達とこうやって一緒にいる事が、本当に嬉しくて嬉しくて堪らないのだよ。」

そう語ると、お父様はいつも瞳に涙を溜める。幼い頃から、それが嬉しくて泣いてる事が分かっているから、私は敢えて何も言わず黙ってお父様のお顔を抱き寄せる。きつと自分が一丁前にも、母親になった気だったのかもしれない。でも、お父様は何一つ嫌がる事なく、むしろ喜んで私に抱かれて涙を流す。

「お父様、大好き。」

「ありがとう、ユリア。」

それが、”ゲルマニアを征服せし者”という、個人名のプレノーマンを受け継いだ『ゲルマニクス・ユリウス・カエサル』お父様の魅力だった。

「やあゲルマニクス。」

「うん？ピソじゃないか！どうした？まあ上がれ！」

「ありがとう。」

「ネロ！ドルスス！ユリアを頼む。」

私はヒョイっと、お父様の肩から外されて、長男のネロお兄様に預けられる。最近、お父様がローマにお帰りになってから、あのピソという人がいつもお父様を訪問してくる。お父様はいつもの様に快く受け入れていた。

「はい、ユリア。」

「ありがとう、ネロお兄様。」

ネロお兄様は、いつも私を太腿に乗せて歩かせてくれる。そして、ドルススお兄様がお父様のお仕事の話の邪魔にならないように、庭の外で遊ぶように連れてってくれるのが定番。

「カリグラ！ユリア！こっちで駆けっこをしよう！」

「はい！ドルススお兄様！」

しかし、カリグラお兄様はさっきの仕返しと言わんばかりに、私のソレラを無理矢理奪って家の方に放り投げてしまった。

「ユリアのバーカ！」

「ガイウスお兄様！もう！」

すでにネロお兄様もドルススお兄様も、駆けっこを始められていたのでカリグラお兄様のいたずらには気づいていない。私は泣くのが癪なので、ケンケンをしながら放り投げられたソレラを探した。

「全く！本当にカリグラ兄さんは子供なんだから！もう！」

家のそばの茂みの中を探していると、ようやく裏返しになってる自分のソレラを探し当てた。

「どういう事だ！ピソ？！話が違っじゃないか？！」

私は家の台所付近から、テーブルをバンッと叩くお父様の大きな声を聞いた。

「ゲルマニクス、もう少し頭を使え。ティベリウス皇帝陛下は、何も撤退するとは命じておらんだ。エルベ川からライン川まで部隊を移動されたいのだ。」

「それを撤退と言わずしてなんと云うのだ？！」

「だからこそゲルマニクス、お前の中東への派遣が役に立つではないか。『ローマの生きる英雄』であり、『ゲルマニアを征服せし者』

であり、軍旗を二つも取り戻した男なのだぞ。」

「…。」

「今やお前の存在は、このローマ市内においてあの『黄金の鷲』をカエサル様の為に取り戻した、百人隊長であったヴォレヌス様とプツク様の人気に匹敵する勢いなのだぞ。今、ここで小アジア遠征に行かなかつたらどうするのだ?!」

「ピソ…。お前もヒスパニアの総督だったならば、若いローマ兵達にとつては時期早々である事ぐらい分かるのか?!」

「フン！」

私は自分のソレラを履くことも忘れて、ピソとお父様のお話に耳を立てしまった。

「たった軍旗を二つ取り戻したことは、榮譽でも名誉でも無い。むしろ、その軍旗を取り戻す為に一体いくらの若いローマ兵達の命と、敵達の命が奪われたと思っっているんだ?!」

「それがどうしたというのだ! 数は問題ではない。」

「数は：問題ではないだと…? 貴様! それでも軍人か?!」

「問題なのは亡くなった命の数ではなく、如何にローマの名誉の為に命を捧げられたか? という事だ! 我らローマ市民の宿命である事を、忘れてはあるまいな?!」

「忘れるわけがなかるう!」

お父様はいつになく怒ってらっしゃった。いつになく激しい怒りを眉間にシワを寄せながら、齒茎を見せて現されている。私は怖かつたはずなのに何故か聞かないフリをする事や、見ないフリをする事が出来ないで震えていた。

「ティベリウス皇帝陛下は、昨年この私にシリア属州の任命を下さった。ゲルマニクス、これがどういった意味だか分かるな? お

前の手で、小アジアのカツパドキアとコマゲナを、我らローマの属州にするのだ。『我ら、ローマの為に！』」

しかし、お父様は掛け声を繰り返さず、ピソの提案を沈黙と義憤の中で拒絶した。現実主義者であるが、同時に人道主義でもある、これがお父様の本当の姿だ。

続く

第二章「父」第五話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>

アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア(5 - 43年)年の差 + 10歳年上>

アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第二章「父」第六話

『ローマの生きる英雄』

『ゲルマニアを征服せし者』

お父様を称える言葉は、ローマ市民の数だけあると言っても過言ではない。

だが、娯楽に飢えた市民とは裏腹に、たとえ軍人であろうとも敵にも味方にも憐れみを忘れないのが、ゲルマニクスお父様の最も尊敬すべき処。

「ピソの奴め！何が『我ら、ローマの為に！』だ。」

「貴方…。他に聞こえたらどうするのです？」

「別に構わん！わしはあやつの打算的な、物の言い方が気に食わないだけだ！」

「そうは言っても、ティベリウス皇帝陛下から直々に命が出されているのですよ。断るわけには…。」

「分かつておる！しかし、今の若いローマ兵にはシリアは荷が重すぎるのだ。それも撤退から目を反らす為への遠征など…。」

お父様は争いの過酷さを知っているからこそ、臆さず争いに批判的になれる。そしてご自分の兵を大切にしたいからこそ無謀な争いを避け、己の命や守るべき家族の為に戦うよう若き兵隊へ檄を飛ばしていたという。幼いながら隠れて聞いたこの事は、私の一生を変えたる出来事。でもこの時は、父が再び戦場へ行かなければいけない事だった事実のほうがとつてもショックだった。

「ユリア？」

「ドルススお兄様…。」

「お前、さつきからどうしたんだ？」

「いえ…。」

「落ち込んでるのか？」

「はい…。」

「またガイウスに虐められたのか？」

「え？あ、虐められましたけど…。」

「ガイウス！！！」

「はい！？ドルススお兄様？」

「お前！またユリアを虐めたな？！」

「え？ソレヲを投げただけで、ユリアを虐めてないですよ。」

「お前！それがいじめっていうんだよ！」

ドルススお兄様は本当に優しいお方。

妹想いで、真っ直ぐで、決して疑わないお方。

「あ、でも、ドルススお兄様。私がショックだった事はそんな事ではないのです。」

「何？」

「お父様が…。」

私は堪らず泣いてしまった。

また戦場へ行かれ、長い間お帰りになれない。その寂しい想いが、あの頃の私の想いを締めつけていた。

「ドルスス！どうした？」

「ネロ兄さん…。」

「ドルスス兄さん、ユリアを虐めたんでしょ？」

「バカ！お前と一緒にするな。」

「どうした？ユリア。」

幼い頃の私の涙はまだまだ無垢なもので、寛容的な優しさに触れるとまるで洪水のように溢れてしまう性分。優しさに弱い性格だった。ネロ兄さんは私を抱え上げてあやしてくれるけど、私はますます大声で泣いてしまったのだ。

「貴方：ユリアの泣き声が。」

「うん？珍しいな。どれどれ。」

親にとって泣き止まぬ子供とは、てんかんの疑いを持たなければいけないこと。特にお父様もお母様も、ガイウスお兄様を無事出産されるまでに、二人の未熟児を死産させてしまっているからなおさらだった。幼い子供の泣き声はいついっ神経過敏になってしまつたもの。

「どうした？子供達よ。」

「お父様、ユリアが全く泣き止まぬのです。」

「ドルススありがとう。」

「お父様、ひよつとしたら。」

「ネロ、むやみやたらに口走るでない。」

「はい…。」

「僕は虐めてないですよ！」

「あつはつはつは。ガイウス、お前はそんな子じゃない。安心しろ。」

本当は虐めたけど…。

「どれどれ、ネロ、ユリアをこちらに。」

お父様の大きくて太い両腕が、私を空高く舞い上がらせる。私は一瞬、鷹のように空を飛翔出来たような気がして、すっかり切ない想いは消えてしまった。そしてお父様はいつもの様に、私をヒョイっ

と肩に乗せた。

「ほづら！もう大丈夫だ。」

「本当だ…。」

「さすがお父様だ。」

「僕だって…いつかできるよ。」

お父様の事が大好きで大好きで仕方ないから、だからこそピソなどの話には従わず、生き延びて欲しかった。でも、幼い私が抵抗できる術は泣くくらいしかなかったのだ。

「ユリア！お前は本当に高い処が大好きだな？がっはっはっは。」

「だって、見下ろすのが大好きなんですもの。」

「そっか！うんうん、いい事だ。」

私はいつもの様に、お父様のほっぺにキッスを三回した。

「ユリア…。この世で最も無用な物はなんだと思う？」

「何でしょうか？お父様。」

「無知と欲望の奴隷になった争いだ。」

「…。」

「これほど無用で醜い物はない。奴隷を雇う事は、己が欲望の奴隷になっている証拠なのだ。争いを求めるといふ事は、己が怖くて弱く、自分の考えが正しいと思い込んでいるからだ。」

「はい。」

「だから父さんはお前達には、争いや身分や奴隷など必要のない、本当の平和を謳歌できる未来に生きて欲しい。空を見てみる！あの広大さは誰にでも平等にあるのだ。」

でも私はふと一つの疑問が浮かんだ。

「曇りの時でも？」

「く、曇りの時か．．．。」

「うん。」

「あは、がっはっはっは！ああ！曇りの時でもみんなに平等に曇りだ！ユリア、お前は本当に頭がいい！」

お父様は、泣きわめいていた私に優しく接してくれたが、すでにある心の中ではシリアへ遠征に行く事を、決めてらしたのかもしれない。

続く

第二章「父」第六話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母後の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス(紀元前20年?31年)年の差+35歳年上>
二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ(紀元前44年-20年)年の差+59歳年上>
二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

第二章「父」第七話

「うわあ！」

「どうした？ガイウス？！」

「左手が！ネロ兄さん！」

私達がいつもと同じように、自宅の庭で遊んでいると、カリグラお兄様が突然苦しみだした。

「大丈夫だ、ちゃんと息を吸って！」

「ううう、怖いよ。」

「泣くな！男だろ？おい！ドルスス！お母様を呼んできてくれ！」

私は”それが”いつも信じられなかった。普段はいつも私の事を100パーセントの力でいじめるくせに、それが出てくると、すぐに弱気になって甘える。ズルいと思った。

「ガイウス、取り敢えずこの木の枝を口に咥えろ！！！」

ネロ兄さんは、冷や汗をかきながら、カリグラ兄さんの口に、真一文字に横へ、枯れ木を咥えさせ、舌を噛ませない様にした。

「ガイウス！！！」

お母様が血相を変えて飛び出してきた。ドルシツラから手を離し、ドルススお兄様に連れられてる。私はお兄様の目配せで、ドルシツラをあやすように言われた。置いてきぼりにされたドルシツラが泣きそつになる前に、まるで魚でもすくいあげるように、私の両腕の中へ抱き寄せた。

「ネロ！ドルスス！すぐに家に運ぶのです。」

「はい！」

カリグラ兄さんは、枯れ木とお母様の手を啜えながら、目がトロロンと頂垂れている。まるでいつも私を虐めてる時と、全く違う様子に見えた。

「ガイウス兄さん……。」

夕刻が過ぎて、お父様もお戻りになり、カリグラお兄様の事で、お母様と台所で色々なお話をされている。私達は不安になりながらも、見守っていた。

「ガイウスは連れて行く。」

「でも、貴方！戦場でもし引きつけを起こしたらどうするのです？」

「それが現れても、男は自分の名誉をわざわざ汚すような事はしない。」

「無理をさせるといいますか？！」

「ガイウスは、自分が何を求めているのか？そして何を求められているのか？はつきりわかっている子だ。ぬるま湯の環境よりも、厳しい環境の方が、こやつのはそれは暴れたりはせんだらう？」

うちの家族では、「てんかん」という言葉は禁句だった。カエサル様もまた、実はてんかんの気質があるお方だった為に、うちの家族は掛かりやすい傾向にあると信じられている。ましては、二人の男の子を未熟児として失ってるお母様としては、カリグラお兄様のご病気には、神経を尖らせていた。

「普段のあの子は元気があるのに、どうしてこんな宿命に……。」

「悔んでも仕方ない。お前も稚児をそろそろ授かるのだろう？シリ
ア遠征途中に、レスヴォス島というとても居心地の良い島がある。
どうだ？一緒に行かんか？」

「子供達はどうするんです?!」

「稚児を産むまで、みんなでそこで過ごすのだ。」

「そうはいきません!」

「だが、お前をローマに置いては行けぬぞ。それにわしは稚児をこ
の手で抱かねばならない。」

「子供達には、『ローマにて教育を受けさせる。』これは、私と婚
約された時に、お約束された事ではありませんか。」

お母様が、レスヴォス島まで行く事を躊躇されたのは、お兄様達の
教育が疎かになってしまう事だった。アグリッパ様の血筋を受け継
いでる、お母様ならではの冷静さ。ローマを離れては、最高級の帝
王学を教える師範がない。ましては遠征の同行になれば、半端の
無い額を請求される。

「分かった!ドルスツスとクラウディウスに頼もう!」

「ええ?!」

「あの二人だったら、見事にやり遂げてくれるはずだ。」

お母様が驚くのも無理は無かった。

ドルスツス・ユリウス・カエサル様は、当時帝位していたティベリ
ウス皇帝陛下の実子。お父様とは皇帝継承のライバルとされたお方
一方、クラウディウス叔父様は、お父様の実の弟で、生来吃音と身
体半分の自由が効かない方。だが、お二人とも、実はとつてもとつ
ても心優しい方で、ユリウス家にとって、面倒見の良い紳士だった。

「ガイウスとドルシッラと腹の稚児は、わしはどうしても連れて行
かねばならぬ。だから、ドルスツスにはレスヴォス島までついてき

てもらおう。ネロとドルススとユリアはローマに置いて、弟のクラウディウスに面倒を見てもらう。どうだ？」

「…。」

「嫌か？」

お母様はこちらをチラチラ見ながら、特に私の方を見ては懸念されていた。

「ユリアは…？あの子は、貴方と離れる事はきつと嫌がるでしょう。」

「

ユリアがか？」

私はお父様と離れ離れになる事は嫌だったけれど、でも、立ち上がって、しっかりと背筋を伸ばして、こう告げた。

「お父様、お母様、どうかご安心ください。私、ユリア・アグリッピナは、ユリウス家の名誉に掛けて、ネロお兄様とドルススお兄様の三人で、このローマにおいて立派に成長してみせます！」

ネロお兄様とドルススお兄様も、すぐにあとに続くように立ち上がって、お父様とお母様へ膝を下ろした。

「ネロ、ドルスス、ユリア。お前達は本当に立派な子供だ！」

お父様は喜んで、私達を大きな両腕の中に入れて抱擁してくれた。その時も、涙を恥ずかしげもなく流されている。その後ろで、お母様も涙を流して泣いてくださっている。子供が親を喜ばす事や、安心させる事は、時には必要な事だと、私達は帝王学から既に学んでいたからだ。

「ユリア、お前はきつと世界中から愛される、いい女になるぞ！」

いつものように、お父様はご自分のあご髭を私に摺り寄せて、私はお父様のほっぺたに三回キッスをした。

「お父様…。」

お父様のあご髭がチクチクするたびに、切ない私の弱まった心が、悲しく泣いているのを感じていた。

続く

第二章「父」第七話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>

アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス(紀元前20年?31年)年の差+35歳年上>
二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ(紀元前44年-20年)年の差+59歳年上>
二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

第二章「父」第八話

「ガイウスお兄様…?!」

「へへーん！ユリア、羨ましいだろう？僕はこれから戦場に行くんだ！かつこいイだろう？」

いつもの苛めっ子のお兄様とは見違えるほど、威風堂々したまるで百人隊長の姿をされていた。しかし、根はやっぱり子供だ。真紅のマントを鳥の翼のように、翻しながら浮かれて走り回ってる。そこへネロお兄様とドルススお兄様が、クスクス笑いながら私のそばにやってきた。

「ガイウスはあんな事言ってるけど、なあ？ドルスス。」

「うん！僕らがいなかったら、あいつ、一人で胴鎧のロリ力だっつて着れなかったんだぜ。」

よく見ると、お兄様達はお顔が真っ黒い。

「そのお顔、どうされたんですか？ドルススお兄様。」

「ああ、昨日からネロ兄さんと一緒に、軍靴のカリガをあいつの為に作ってたんだ。」

「カリガ？」

「ああ、ドルススと二人で切り抜いた皮を紐で編み上げてたんだ。ガイウスのくるぶしに合わせるのと、靴裏に鉄鋌を打つのが結構大変だったけどね。」

「ほら、これだよユリア！」

そう言うとドルススお兄様は、カリガと綺麗に磨かれた鉄の脛当てを見せてくれた。

「これが、軍靴のカリガなのですね？まるでガイウスお兄様のあだ名みたい……。」

ドルススお兄様とネロお兄様はお互いに目を合わせて、またクスクスと笑って答えてくれた。

「あつはつはつは！ユリア、あいつ、ガイウスのあだ名カリグラはこのカリガからきてるんだよ。」

「ええ？！そうなんですか？」

「お父様の兵隊さん達があいつのマセた軍服姿をからかったんだよ。ところがだ、何故かガイウスがマセた軍服姿を連れて戦場に出るとお父様の軍団は必ず勝つことができたらしい。だから今じゃあいつはお父様が率いるローマ軍から”カリグラ様”って祀り立てられてわけさ。」

「へえ……。」

なんだか私は悔しかった。

ガイウスお兄様は持病があるにもかかわらず、ネロお兄様とドルススお兄様を差し置いて戦場に出て、しかも何もしてないのに勝った気であるなんて！ズルいと思った。

「おい！ユリア。そのカリガをこっちに持って来い！」

「何で？私が?!」

「男が戦場に出る時は、女が男の手伝いをするもんだろ？」

「はあ？今でもオネシヨしている人に？」

「ああ！こいつ！また、言っではいけない事を言ったな!」

「だって事実は事実でしょ？べっつだ！」

「待て！ユリア！」

私は素早くカリグラ兄さんから逃げ出し、カリグラ兄さんは部屋中
至る所から追いかけてようとしてくるけど、胴鎧のロリ力が重たいら
しくうまく追いかけて来れない。わたしは思いつきりほほを膨らま
せて馬鹿にした。

「ちくしょう！女のくせに男を侮辱しやがって！」

そこへブドウや果物をいっぱい運んできたお母様がやってくる。部
屋中を散らかして追いかけてこをしている私とガイウスお兄様を見
るなり、お母様は雷を大地へ落とすように怒鳴り始めた。

「これ！二人とも！何の騒ぎですか?!」

「あ、お母様！ユリアの奴、また僕のオネシヨの事をからかうんだ
よ。」

「違うの！お母様。ガイウスお兄様が偉そうに手伝えて言うから
…。」

「もう！今日は忙しいってのに。」

「そうだよガイウスお兄様！」

「違います！ユリア！今日は貴女がいけません。」

いつもは怒られないはずなのに…。今日は違つたみたい。ちよつと
ショック…。

「いいですか？ユリア。ガイウスは今日これからローマの為に戦つ
のです。その兄をいかなる理由があろうとも女性である貴女は、ロ
ーマ市民がガイウスへ畏敬の念を持たせる為に応援するのが務め
です。絶対にからかつてはいけません！」

「でも、ガイウスお兄様は本当には戦わないのですよね？私もロリ
力を着て、ユリウス家に恥ない戦いができますわ！」

「何を馬鹿な事を言ってるの!？貴女は女の子でしょう?!」

「お母様、戦には男も女も関係ありませんわ！」

「ユリア、お前はただ単にロリ力を着ただけなんだろう?! 僕には分かるんだからな! オタンコナス！」

「何ですって?! オネシヨカリガ！」

「あああ! また言ったな! もう、ゆるさんぞ！」

「ユリア、いい加減になさい! 台所でお尻をはたきますよ！」

すると、私は突然宙に浮いた。

お父様がまたもや私をかばって抱っこしてくれたんだ!

「そっか、ユリア。お前もロリ力を着て、お父さんと戦いたいか？」

「はい！」

「うん、いい返事だ。お前なら黄金のロリ力が似合うだろう！」

「黄金ですか?!」

「ああ。全て黄金でできているんだ。背中には、真紅のマントの代わりに白い羽根で編んだ翼をつけてな。」

「うわー! お父様、とっても素敵です！」

「がっはっはっは! そうだろう！」

しかし、お母様は私に優しすぎるお父様を懸念されている。

「貴方…。ユリアを少し甘やかし過ぎませんか？」

「いいんだ。これから女性はローマ男子の陰になって支えるのではなく、勇ましく自己主張して行かなければな! 少なくとも、打算的な男どもよりマシだ！」

「貴方…。」

既にお父様の後ろには、切れ長の鋭い目つきをしたピソが立っていた。

「打算的な男とは…私の事ですか？ゲルマニクス。」
「ピソか…。もう、来てたとはな。」

私は、ピソの蛇の牙のように輝くあの鋭い目つきが嫌いだった。

続く

第二章「父」第八話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？31年）年の差+35歳年上>
二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>
二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

第二章「父」第九話

「ユリア、お母さんのところに。」

「はい、お父様…。」

私は床に降ろされると、ピソはネズミを丸呑みしようとするへびのように、冷たい目線を私に向けてきた。

「ほほう？これがお前の長女か。なかなかいい眼をしているな。何と言う名前だ？」

「ユリア・アグリッピナさ。」

「なんだ、お前の奥さんの名前そのまんまじゃないか。」

「何か問題でも？」

「いや…。」

顎をイヤらしくさするピソは、品定めでもするように視線で汚そうとする。私は堪らずお母様の足元へ駆け寄って隠れると、今度はカリグラお兄様が私を守るように目の前へ立ちはだかり、ピソへ膝まづいてご挨拶をした。

「ピソ様、本日はわざわざのご訪問、このガイウスにとって有り余る光栄でございます。」

「おお、そなたが人気のガイウス”カリグラ”様か。何とも可愛いらしいロリカを身につけて。」

「可愛らしいなど。ローマの為に戦場へ向かうこの私、ガイウス・ユリウス・カエサルにとっては、少々生温いお言葉かと心得ますが？」

なんと！ガイウスお兄様はゲルマニクスお父様よりもずいぶん目上

のピソに対して、堂々とした態度で自分へ畏敬の念をいだかせるよう強要したのだ。

「これはこれは！ガイウス様、申し訳ない事をした。かりにもそなたはこのローマにおいて、絶大なる人気を誇るゲルマニクスのご子息の一人。これから戦場へ出向く者に対し『可愛らしい』などと、口が裂けても言うべきではござりませぬな。失敬…。」

びっくりした。

カリグラ兄さんは本当に、軍服姿になると例え相手が目上であつても構わず対等に扱うよう求める。これが、あの毎日オネシヨをしてるくせして、偉そうに私を虐める同じ兄とは思えなかった。あ、偉そうなのは変わらないかも…。

「ガイウス、ユリアをネロのところへ連れて行きなさい。」

「はい、お母様。」

カリグラお兄様はピソに何も言わず背を向けて、お母様の後ろに隠れていた私の手を取った。

「ユリア、おいで。」

「はい…。」

でもピソは、決してカリグラお兄様から目を離さなかった。むしろ恨みの壁画にお兄様を刻み込む様に、ジッと微動だにせず見つめている。すかさずその姿に気が付いたお父様は、カリグラお兄様を守るようにピソの視線を遮る。

「っで、何の用だ？」

ピソは愛想笑いをして、お父様を見下しながら諂い出してききた。

「いや、何…ゲルマニクス。今回の遠征では、ティベリウス皇帝陛下のご子息である、ドルスツス様をレスヴォス島まで連れて行くそうではないか。」

「それが…何か？」

「いや、ドルスツス様は次期皇帝後継者。また、昨年からはスエビ族とケルススキ族対立の調停のためにイリリクムへ派遣されてらしゃる。いくらローマにおいてお前の人気が強固な物であろうとも、いささか勝手過ぎはしないか？」

「ならば今回のシリア属州に向けた遠征も、幾分急速で勝手過ぎはしないか？」

ピソは顔を動かさず、しかしゲルマニクスに鋭い視線を向ける。

「この遠征の案は、ティベリウス皇帝陛下直々に提案された物である事を、まさか忘れてるわけではあるまいな？ゲルマニクス。」

「もちろん。エルベ川からライン川までの撤退に対し、このゲルマニクスが隠れ蓑にされている事も、重々理解しているつもりだ。」

「貴様、ティベリウス皇帝陛下を侮辱するつもりか？」

「とんでもない…。今回の案が、願わくば、去年、シリア属州の総督に任命されたお方による、独断の案でない事を確認したいだけ。」

「若造が…。」

だが、お父様は何も答えず、ただ、ピソの面前に瞬きせずに近付いていく。とてつもない迫力だ。しかし、シリア属州の総督である老人ピソも、決して瞬きをせずに対抗している。二人は一触即発の状態。

「若造のゲルマニクスが単なるローマの人気取りではない事は、こ

の僕がしっかりと証明するぞピソ総督！」

そこへ颯爽と救いの主が我が家へ訪問。

朝日をしっかりと浴びた陽気な笑顔を携えながら、あのドルスツス様が凜々しく立ってらした。

「ドルスツス!!!」

「ゲルマニクス！」

お父様はいつものように目を黒く輝かせ、陽気な笑顔のままのドルスツス様へ近付いた。ドルスツス様も砕けんばかりの笑顔を見せながら、お父様と共に互いの肩を確かめ合うように何度も叩き合った。

「がっはっはっは！久しぶりだな！？お前とは、いつ以来だ？」

「確か…ユリアちゃんが生まれた年だったかな？」

ドルスツス様の性格はとっても優しい。昔から私達の名前に『くんや』ちゃん』をつけて呼んでくれるとってもお茶目な紳士。

「おお！お前が、ノルバヌスとともに執政官に就任した時か?!」

「あっはっはっは！そうだそうだ！共に剣闘士試合を開催した、あの時以来だ！」

肩を叩き合う二人の若者に、シリア属州総督の初老は水を差すようにドルスツス様へご挨拶をした。

「お久しぶりでございますな？ドルスツス様…。」

「久しぶりだな、ピソ師匠。」

ピソはドルスツス様にとっては戦術のいろはを教えてくれた師範で

もあつた。一瞬、お父様とピソ間に凍りつくひと時を感じた。だが、それを察したドルスツス叔父様はすぐさま、持ち前の陽気な性格で互いの懸け橋となつて拗れた関係を修復してくれたのだ。

「ピソ…。このローマで大人気の若造ゲルマニクスの無礼を、どうか、ここに僕に免じて許してはくれぬか？」

「…。」

「なんせ、お前に無礼なゲルマニクスは、この、皇帝継承者であるワシの妻、リウィツラの兄貴なんだから！」

さすがお茶目な紳士のドルスツス様。

お父様を遜せる事でピソに畏敬の念をいだかせるように取り計らつた。ピソは少しだけ歯ぎしりをしながらも、深々とドルスツス様へ頭を下げて心得を表した。

「承知しております…。」

「安心しろ、ピソ師匠。今回のレスヴォス島までの同行は、父上から既に了解を得ている。ゲルマニクスのカミさんが元気な赤ちゃんを産んだら、とつとイリリクムへ帰るよ。」

ドルスツス様はとっても格好良かった。

青空に流れる雲のように清々しい性格で、そよ風のように人の間に入つて仲直りさせる心得を、生まれ持った時から知ってらっしゃる方だった。

続く

第二章「父」第九話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス（紀元前12年 - 63年）年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ（17年 - 30年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后（紀元前58年 - 29年）年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝（紀元前42年 - 37年）年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス（紀元前14年 - 23年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年 - 20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

第二章「父」第十話

「では、ドルスツス様。私は、この辺で…。」

「うむ、父上には宜しく頼むぞ、ピソ師匠。」

「承知いたしました。」

深々と頭を下げて立ち去ろうとするピソだが、何かを思い出したように立ち止まり、お父様へ一つの提案をする。

「ゲルマニクス。レスヴォス島へ着いてからは、シリア属州の習俗など分かりにくい事もあるう。互いに戦いを共にする身として、正餐を一席もつけるのはいかがかな？」

お父様は少しだけ沈黙されて答えなかったが、笑顔を絶やさないドルスツス様に促される。

「いいじゃないかゲルマニクス。父上より年上のピソ師匠が、ああやって謙って年下のお前に懇願しているんだ。」

「そうだな…。」

「結構。では、くれぐれも道中は気をつけて…。」

そう言うと、再び何かを企んでるような嫌らしいにやけ面を見せながら退散していく。お父様はジツとピソに頭を下げずにいた。不安を募らせて見つめていたお母様は、ピソがしっかりと立ち去った事を確認した後お父様へすぐさま心配そうに駆け寄った。

「貴方、どうしてピソ様にあんな無礼な態度を？」

「ピソ”様”だと？あいつに”様”などと呼ぶ必要はない！」

「しかし、かりにもあの人は元老院議員でもありますよ？」

「ふっははは！全くだゲルマニクス。お前のカミさんであるウイプサニアちゃんの言う通りだ。馬鹿の一つ覚えみたいにご老体を睨むんじゃないっつーの！」

「フン！ワシは、あやつの…」

「『あやつの打算的ところが、気に食わない。』だろ？」

「そっだ…」

「どうせ年寄りの老いばれなんだ。今更、下手な事などできやしな
いさ。」

「そうか？年寄りほど腹黒い心は掴みにくいと言っじゃないか。」

「確かにお前は正論だよ。ただなゲルマニクス。お前は何をやって
もローマでは目立つ男なんだから、くれぐれも自重しないと。」

「ワシがか？」

「ああ！立ちシヨンしても”あの、ゲルマニクスが！”って言われ
ちまう時世なんだぜ。あの剣闘士試合を開催した後、二人でローマ
の郊外で立ちシヨンした時もそうだったの、忘れたわけではあるま
いな？」

ドルスツス様はイタズラっぽい笑顔で同意を求めている。お母様は驚
いて、目を白黒させてる。

「お二人でそんな事をされたんですか?!」

「そうそう。最後までシヨンベンのキレが悪かったのは、こいつ。」

ゲルマニクスの方だったよ、ウイプサニアちゃん。」

「まあ！はしたない。ドルスツス様？子供達の面前ですことよ。」

「おっと、これは！失礼失礼！あっはっはっは！」

「あっはっはっは！お前の人気は下がる一方だ、ドルスツス。」

ようやくお父様の緊張が解れてきた。私も子供ながら朗らかな気分
になってきた。カリグラお兄様はドルスツス様の言葉に反応した。

「えっへへへ。お父様たちが立ちションだつて。」

「男の連れションって言うんだ、ガイウスくん。」

「がっはっはっは！そうだ、ガイウス。」

「全くもう！ドルスツス様ったら。ガイウスに変な事を教えなくてくださいね？この子はすぐ真似するんですから。」

「お母様、ガイウスお兄様でしたら真似しなくても十分なさつてますわ。」

「うん？どうしてだい、ユリアちゃん？」

私がそう言つと、ドルスツス様はちゃんとしゃがんで私の目線になつて頭を撫でてくれた。

「だつてね、ドルスツス叔父様。お兄様はいつつ寝ながらさされてますもん。オネショ。」

カリグラお兄様は私の言葉で目と口を大きく見開いて赤面した。ドルスツス様とお父様は顔を見合わせて腹から大きな声で大笑いしている。

「ユリア！いい加減になさい！」

お母様の厳しい叱責の音が響く中、カリグラお兄様は赤面しながら口をアヒルのように尖らせた。と思つたら今度は顔を思いつきりクシャクシャにして、ついにはとうとう泣き出してしまったのだ。

「うわー！ー！ん！」

「あっはっはっは！悪い悪いガイウスくん。」

「どれどれ、よしよしガイウス。父さんが抱っこしてあげるぞ。」

お父様はカリグラお兄様を抱っこして、外へ出て行ってしまった。

「ユリア！あんた！お母さんがあれほど言ったのに、まだ分かってないの？！」

「まあまあ、ワイプサニアちゃん。怒らないで。」

「いいえ、ドルスツス様。ユリアには今日という今日は、キツくお仕置きをしないとダメなんです。こつちへいらっしやい！」

私はカリグラお兄様の本当の事を言ったまでなのに……。何でお仕置きされないといけないの？なんだか、私も口をアヒルのように尖らせて、だんだん泣き出してしまった。

「うわー！ー！ーん！」

「泣いたってダメですからね！こつちへいらっしやい！」

「お母様！ー！私は、わー！ん！本当の事を言っただけなんです！ー！！」

「いいからいらっしやい！」

そう言うと右手を引つ張られて、あの『お仕置き』台所の隅に連れてかれた。お母様はトウニカのスカート思いつきり捲り上げて、私のお尻に思いつきり十回赤い手形がつくほど叩かれた。ローマ市内に響くんではないかってほど強烈な音を響かせて。

「ユリア！分かったわね？！」

「グスン……。はい……。お母様。」

「全くもう！」

お母様は、置いておいたブドウや果物を再び持って、外へ出て行ってしまった。

「やれやれ。痛かった？ユリアちゃん。」

「グスン…。はい。」

ドルスツス様は笑顔でニコニコしている。でも、私はドルスツス様に私のお尻にお仕置きをされてる姿を見られた事の方が、もっと泣きたいくらい恥ずかしかった。だって、お父様の次に大好きな方だったから。

続く

第二章「父」第十話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>

アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年 - 20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

第二章「父」第十一話

「ドルスツス様！お久しぶりでございます。」

「おお！ネロくん。こんにちは！」

「ドルスツス様！こんちわ！」

「よう！ドルスス！こんちわ。」

ようやくネロお兄様とドルススお兄様が、ドルスツス様とご挨拶をされていた。私はぐずりながらネロお兄様のそばに付いた。

「ユリア…。またお母様に叱られたのか？」

「はい、ネロお兄様…。」

「たははは、しょうがないな。」

お守りのブルラをクルクル回しながら、ドルススお兄様は鼻水を垂らしていた。

「そう言うお前もブルラをちゃんとしまっでないと、またお母様からゲンコツもらうぞ。」

「あ、やべえ！」

そそくさとウニカにしまつて鼻水を拭いた。するとドルスツス様はお二人の真つ黒な顔に気が付く。

「なーんだ？二人とも。顔が真つ黒じゃんか。どうしたんだ？」

「はい。ガイウスの履くサンダルのカリガを、一晩中二人で皮で編んでたんです。」

「へえー！そいつはやるもんだな〜。」

「靴裏にも鉄鋏を打って、脛当ても磨いてたから真つ黒になっちゃ

つて。」

「弟想いで偉いんだな、お前達。」

「ガイウスのためだけじゃないんですよ。お父様の勝利も願って、一生懸命二人でやってみたかったんです。」

「そっかそっか。」

やっぱりお兄様達は男性だな。

ドルスツス様には実際に着られる胴鎧であるロリカの重さや形状、見栄えの良さや輝かせ方の極意に興味があるみたい。私かというと、未だにお母様から叩かれたお尻がヒリヒリ痛くって堪らない。

「つまり、かたびらの取り付け方が重要なんですね？」

「そうそう後ろ手に持っていくと、この脇の部分で引っ掻き傷ができるから出来るだけ前に寄せるんだ。」

「なるほど。」

私には全く興味のない話。

でも、さっきお父様がお話してくださった黄金のロリカにはとっても興味がある。いつか絶対に着てみたいと思った。すると泣き止んで親指を舐めてるカリグラお兄様を抱っこしながら、お父様が突然扉を開けて伝えにきた。

「おーい！クラウディウスがやってきたぞ！」

「え？叔父様が?!」

「クラウディウス叔父様がいらしたんですか？」

「ああ！あやつ、頑張って杖を持って来たぞ！」

「おお！クラウディウス兄さん！って事は、うちのリウィツラと一緒だな？」

「ああ！妹も一緒にきてる。」

クラウディウス叔父様！

ドルスツス様とは対照的なお人だけれども、とても優しい方。生来の持病のため、どうしてもギリシャ文字の発音をされると吃音になってしまっただけれども、とつても博学で好奇心旺盛な紳士。

「本当だ！リウィツラ叔母様も一緒にいらしてる！」

「うちのユリアは妹が大好きなんだ。」

「そうかそうか！」

リウィツラ叔母様はゲルマニクスお父様の妹で、とつてもチャーミングなお話し方をされる叔父様想いの淑女。私にはいつも新しいトウニカや蜂蜜のいっぱい入った香水を持ってきてくれる。お母様の次に憧れてる女性。

「妹め、あやつかなりめかし込んでるな…。」

「今日はウィプサニアちゃんには負けない！って張り切ってたからな。」

「全く、それに付き合わされたんだな？クラウディウスの奴は。」

「あははは！すまぬ。」

鼻をかんだ後に杖を落としてコケる叔父様。その様子に慌てる叔母様。

「あ…。コケた。」

「あやつ、大丈夫か？」

「いや、立派じゃないか、ゲルマニクス。あの精神は素晴らしい。いい弟を持ったな。」

「ああ…。あやつは自分が不幸である事を、決して悔やんだりしない精神の持ち主だ。」

後ろを振り返ると、ドルシツラを抱きながらお母様が陽射しを手で避けながら何事か？と見ている。私はさっきまでお仕置きされていた事もスツカリ忘れ、お母様に駆け寄っていった。

「お母様！お母様！クラウディウス叔父様が、リウィツラ叔母様とご一緒にいらっしやいます！」

「本当に？」

私は嬉しくなって今度はお母様の右手を引っ張って、みんながいるところへ連れていった。

「お母様！早く！」

「あっ！ユリア、そんなに焦らせないで。」

そう！

みんなみんな家族や兄弟や姉妹想いで、優しい心の持ち主ばかり。それもこれも、全てゲルマニクスお父様という人柄あつての事。ローム市民から言われてる以上に私達は幸福という光の中で、互いを思いやる気持ちに包まれながら心の奥から幸せに暮らしていたのだ。

お父様が亡くなるまでは…。

続く

第二章「父」第十一話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母後の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス(紀元前20年?31年)年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ(紀元前44年-20年)年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

第三章「母」第十二話

ユリア・ウィプサニア・アグリッピナ

私の母。

幼い頃は私と同じようにお転婆で、後先の事も考えないような勝気で、しかもかなりのワガママな女の子だったらしい。しかしお父様との劇的な恋愛結婚が、彼女のこれまでの価値観を覆すキツカケとなった。

とてもお父様に忠実な方。どんなときでも男性を引き立てる心得を常に持ち、男性を引き立てられない女性はローマ人にあらず、と考えるほど変わった。また教育と躾には人一倍厳しく、そして何よりもその有り余る子煩悩さが、時折心配性な母親のイメージを醸し出してもいたらしい。けれど決して常識を逸脱したり、野心や妬みの炎に自ら焦がすような女性ではなかった。少なくとも、お父様のゲルマニクスが亡くなるまでは…。

「クラウドイウス、よく来たな。」

「いえいえ、今日はゲルマニクス兄さんのシリアへの旅立ちの日…。ご挨拶せねばと思い、こうやって足を運びました。」

「ありがとう…弟よ。リウィッラ、今日はわざわざありがとうございます。」
「ゲルマニクスお兄様。お元気そうで、何よりです。あら？ガイウスちゃん？まあ！可愛い胴鎧のロリカ！軍靴のカリガはどうしたの？」

「タツハハ、ちょっとな。」

カリグラお兄様ったら、まだお父様の中で甘えて親指を舐めてる。もう！リウィッラ叔母様がいらしてるのに恥ずかしい…。

「あらー！ユリアちゃん？大きくなって、更に可愛くなって！」
「リウィツラ叔母様、お久しぶりでございます。」
「お久しぶりね。」

そう言うてくださると、やっぱりドルスツス様と同じように私の視線に合わせてしゃがんでくださり、頭を撫でながら話しかけて下さった。

「あら？御守りのブルラ？」

「はい。お母様から頂きました。」

「うちのユリアはお転婆で男勝りでしょ？木登りばかりするから、念の為に持たせてるのよ。」

「フフフ、やっぱり！ウイプサニア姉さんが考えそうな事だわ。」

「まあ？フフフ、どういう意味よ、リウィツラ。」

「ゲルマニクス兄さんからも、うちの旦那からも、姉さんは人一倍心配性だって…。」

「まあ！お二人とも。男性なのに、おしゃべりなんだから。」

「悪い悪いウイプサニアちゃん。」

するとスタイルの良いリウィツラ叔母様は立ち上がって、お母様にご自分の外衣であるパルラを見せつけるように少しだけ靡かせる。

「あら？リウィツラ。貴女、また新し外衣のパルラを買ってもらったの？」

「ええ…。うちの旦那が、自分へのご褒美をなさって。」

「とつてもいい生地ね？」

「でしょう？コス島の物をわざわざ取り寄せたの！」

「ええ！あのコス島の！？貴女って本当に贅沢ね。」

「そう言われると思って、お姉様の分も買ってきたの。」

「まあ！私の分も!?」

「今日は、ゲルマニクスお兄様と、ご一緒に旅立ちの日でしょ?ですから。」

「まあリウィツラったら…。ありがとうございます。」

「本当は素敵なストラを見つけたんですけど、きつとお姉様はお腹が大きくなつてるとでしょうから、パルラの方が良いかと思ひまして。」

「貴女つて本当に優しいのね。お気遣い…。ありがとうございます。」

その後は、私は妹のドルシツラをあやししながら、お母様と叔母様のお話にジツと耳を傾けていた。やっぱりお二人のお話は、女性の美容や洋服のお話に尽きている。いくらお転婆な私でも興味が無いわけではない。

「ええ?ミヨウバンつて、結構髪を傷めるの?!」

「ええ…。特にお姉さんの髪は、緩やかなウエーブがかかってらっしゃるでしょ?酢と混ぜて使うのは、頭皮も傷めるから、気をつけないと。やっぱりブナの木を灰にして、ハトのあれとまぶした方がいいみたい。」

「やっぱり…。お隣の方もそう仰つてたの。でも、最近はハトのあれがなかなか手に入りにくいじゃない。」

ハトの”あれ”とは、”糞”の事。

私が若い頃は、まだまだ髪の毛を脱色する為にハトの”あれ”を使うのが効果的と思われていたっけ。

「今日は、姉さんの為に美容クリームも持ってきたのよ。」

「ええ?!どうして?」

「もう!お姉さんは本当に気をつけないと。レスヴォス島は、夏になると日ざしが強くなって乾燥しやすいのよ。お肌を守るには、モ

リングアの樹脂が入ったコレが一番！」

「モリンガって、スーダンやエジプトでしか取れないじゃない。」

「そうよ、舶来品なんだから。ちゃんとロバの乳で洗った後に、顔に染み込ませるように、大切に使ってね。」

本当にリウィツラ叔母様は、お化粧や美容に関してとつても贅沢にされてるお方。でも、それはドルスツス様とご結婚前に若くして以前の旦那様を亡くされていたので、せめて、心の癒しになるようドルスツス様が配慮されている優しさでもあった。

「ところで、お姉さんはお腹の子供、名前は決めてあるの？」

「いいえ…。男の子だったら、きつとあの人が決めるでしょうから。」

「あら、まだ男の子とは決まってないのだから、お姉さんも色々と考えてみたら？」

「そうね…。」

「ひよっとしたら、女の子かもしれないし。」

お母様は優しくお腹をさすって、優しい眼差しで見つめていた。

「もし女の子だったら…。リウィツラ、貴女の名前にするわ。」

「ええ?! 私の名前を?」

「ええ、ユリウス家を表すユリアに、貴女のリウィツラで…。ユリア・リウィツラにするわ。」

「フフフ、きつと綺麗な子が産まれるわ。」

「貴女みたいに、化粧に贅沢な? フフフ。」

お二人の上品な笑い声は、のどかな午前中の陽射しに輝きと安らぎをもたらせてくれる。私もいつか、このお二人のように素敵な淑女になりたい…。幼いながらそう願っていた。

続
く

第三章「母」第十二話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>
>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベ

リウスの長男

<リヴィア(5 - 43年)年の差 + 10歳年上>

アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第三章「母」第十三話

青々とした草達が風のメロディを奏でる頃、私達はようやく又マ・ポンピリオ広場を抜け丘を登り始める。お父様の馬には静かになつたカリグラお兄様が、胴鎧のロリカと軍靴のカリガを履いてちよこんと乗っている。

私かというと、リウイツラ叔母様の許可を得て素敵なストラを着せてもらい、ドルスツス様の馬に乗せてもらった。その横にはネ口お兄様とドルススお兄様が一緒に歩きながらついてきてる。

お兄様達はずっと歩きながら、改良版のバルナツソス・ゲームをしていた。バルナツソスとはギリシャにあるアポロとコリキアンの二神たちを祭っている山で、どれだけ自分が役職、学問、文学の知識を持っているか、それぞれをギリシャ語で100文字以内で説明して勝負するゲーム。ギリシャ語にまつたり100文字を超えた場合は当然負けになる。

このゲームを考えたのが、初代ローマ皇帝であるアウグストゥス様の文化補佐であり、新世代の詩人や文学者のパトロンだったガイウス・キルニウス・マエケナス様。マエケナス様は非常に柔軟な考えを持つお方で、子供の頃から政治の仕組みや知識欲を刺激し合えるよう配慮された知的なゲームをいくつも考案されていたのだ。

「ダメだ、ドルススのギリシャ語が聞き取れない！100文字を超えたか分からないよ。」

「そう？僕はネ口兄さんの方が早過ぎて分からないよ。」

するとドルスツス様がニコニコしながら二人に指導してる。

「ゆっくり話して、相手の呼吸に併せて話してごらん。そうしたら互いの発音を理解し合う事ができるし、相手の言葉を耳だけじゃなく、口を動かして口で覚えるんだよ。」

するとお父様も口を挟んできた。

「ネロ、ドルスス。お父さんはギリシャ語はそれ程得意ではないけれど、でも呼吸を相手に併せるのは分かるぞ。」

「どういう事ですか？」

「戦術でも呼吸法は大切なんだ。戦いになれば相手だって緊張して呼吸が荒くなる。相手を負かそうとして気合が入りすぎると、焦って肝心な所でミスをしてしまうのさ。冷静に状況を判断する余裕を得る為には、何よりも呼吸法を身につけるの一番なのさ。」

「なるほど！さすがお父様。」

「すごい！」

お二人のお兄様達は、お父様の言葉に感激を受けていた。

「それに、女性を相手する時にも、呼吸法は大切なんだ。」

ドルスツス様はびっくりして、お父様へ尋ねた。

「それは本当か？ゲルマニクス。」

「ああ、相手の呼吸に併せて動けば、倍以上の快樂を得られるし、子宝にも恵まれやすいのさ。」

「確かに！お前の所は本当に子宝に恵まれてる。それは良い事を聞いた…。うんうん。」

私は、お父様が何の話をしていたのかを理解したのは、翌年にリウ

イツラ叔母様がドルスツス様との双子の赤ちゃんを産んだ時だった。

「貴方！子供の面前です！言葉には気を付けてください！」

「すまなかつた〜！」

お母様の耳は本当に地獄耳。

後ろの、しかも、クラウディウス叔父様とリウィツラ叔母様と一緒に馬車の中にいるというのに、お父様達が子供の面前で成熟な話をしている事をすぐに感知する。

「全く…」ローマに耳あり”とは、ウィプサニアちゃんの事もしれん。」

「あつははは。あやつは本当に教育にはうるさいからな。」

丘をようやく超えると、そこには壮大な信じられないような光景が私達家族を待ち受けていた。

「こ、これは！」

「いやはや、すごい数だな？ゲルマニクス。」

「ま、まさか？ドルスツス。お前が？」

「ああ。そのまさかだ。チョロつと二、三人に噂を流したらこの通りだ。」

そこには何万人というローマ市民が、シリア属州へ遠征に行くゲルマニクスお父様の雄姿を一目みようと、何と見送りにやってきていたのだ。

「ローマ市民のみなさん、ありがとう！」

お父様は手綱を左手に持ちながら右手で軽く挨拶をしただけだった

のだが、それに対する反応は、まるで山へ訪れた風のうねりのように、お父様は市民達からの手厚い歓喜の声を独り占めにしてしまう。

「ゲルマニクス……。この人気は本物だ。アウグストゥス様がいずれお前に皇帝継承を願ってらしたのは、この人気をかなり見越してたからこそなんだろうな。」

「びっくりだ。ピソが嫌味の一つを言いに来たのも、この光景をみてしまったら、分からなくもないな。」

「言つたる？お前はいつでも目立つ男なんだよ。」

その歓声を聞きつけたお母様は、馬車を止め、懐妊している大きなお腹を押さえながら外へ飛び出してきた。

「こ、これはどういう事です？」

「我々家族の為に、彼らはわざわざやってきたんだ。」

「まあ！」

その光景の壮大さに飲まれたお母様は、お父様へ笑顔をこぼして何度も情熱的な口づけをかわしている。お父様の偉大さや威厳さそして謙虚さに惚れて、お母様は結婚したんだってこのときを感じた。目の前の両親の仲睦まじい姿は、私の一つの目標としてこれからずっと追いかける事になる。

続く

第三章「母」第十三話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア(5 - 43年)年の差 + 10歳年上>

アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第三章「母」第十四話

丘の上にある雲達が風の絵筆に広げられ、そろそろ夕陽が一面を染め上げる頃、ゲルマニクスお父様の、シリア属州へ出発する時間が訪れてきた。

「弟のクラウディウスよ。ネロとドルススを頼むぞ。」

「分かりました、兄さん。」

「妹のリウィツラよ。ユリアを頼む。」

「ええ、お兄様。ご安心くださいませ。」

「うむ。」

「ネロ、ドルスス。妹のユリアを頼むぞ。」

「はい、お父様。」

「分かりました、お父様。」

しかし、何故かお父様は私にお声を掛けては下さらなかった。それはきつと、すでにお父様の心が戦へ帰還する軍人になっていたからだと思う。

私が今でも後悔している事があるとすれば、それは、この時にお父様に甘えて三回ホッペにキスをしなかつた事。何故かその時は多くの人が見守っていた事もあって、恥ずかしくてできなかつたのだ。

「ユリア、こっちへいらっしやい。」

お母様はゆっくりとしゃがんで抱き寄せてくれた。お母様の温もりを感じた時、自然と涙が出そうだったが、グツと堪えて我慢した。

「偉い子、良くできましたね。」

微笑みを浮かべて応えるお母様は、私のユリウス家としての心構えを褒めて下さった。そして、私に右頬を差し出して、私からのキスの催促をしてきた。私は嬉しくなってホッペに三回キスをした。

「そうよユリア。自分がどんな苦境の時でも、人に喜びを与えられる女性である事。これを忘れてはダメ。」

「はい、お母様。」

「それと、リウイツラ叔母様からは、私が帰るまでの間に、淑女としての心構えを磨いて貰いなさい。」

「え?!」

「今日だって素敵なストラをリウイツラから着せてもらってるでしょ? 貴女はとつても女性らしものが似合うのだから。」

「本当に?! お母様! お化粧もしてもいいのでしょうか?」

「ええ。リウイツラと一緒にいっばい学びなさい。」

「ありがとうございます! お母様!」

今思えば、お母様はとても賢明な方だった。自分が留守の間、男勝りで木登りが大好きな私が、調子に乗って怪我をされたりするのが心配だったから、興味の対象を危険がない女の子が喜ぶものへ変えさせるため、わざわざ私にお化粧を許したんだと思う。

「リウイツラ、ユリアは元気だけど、とても素直な子だから。いっばい教えてあげて頂戴。」

「ええ勿論です義姉さん。ユリアちゃん、一緒にいっばいおめかししよ〜ね!」

「はい、リウイツラ叔母様。」

この時も、お母様は私の虚勢を張る性格を見抜いて、わざと遠回しに素直な子であるようにと躰をしたのだと思う。普段は家族の中で

は滅多に褒めたりしないからだ。

「ねーたん、ねーたん。」

妹のドルシツラがお母様の腕の中で、キヤツキヤ言いながら両手を伸ばしてる。そんなドルシツラを見て、私はお母様と一緒にいられる妹が羨ましいと思った。

「ウイプサニア、そろそろ行こう…。」

「はい、貴方。」

お父様は手綱をクイッと動かしたまま、ローマ市民へ右手を上げて馬を歩かせて進み出した。その後ろから、ドルスツス様も馬に乗ったままついて行く。時折、ドルスツス様だけはこつちを向いてウインクしてくれ、お母様は馬車からずっと手を振ってくれた。

「ユリアちゃん、お母様に手を振ってみたら？」

「うん。」

私はずっとお母様へ手を振っていた。けれども、お父様はカリグラ兄さんを抱えたまま、あの山のような背中を向けたままだった。私はリウイツラ叔母様の左手を握りしめながら、山のような大きなお父様の背中をジツと見つめていたけどそれでもお父様はこちらを振り返らず、大きな夕陽が滲ませると同時に徐々に遠くへと小さくなっていく。私はそれがとっても寂しくて寂しくて、リウイツラ叔母様の手をしっかりと握りしめて我慢した。

「ユリアちゃん…。」

リウイツラ叔母様も、私の幼い手を握り返してくれた。温かかった。

それでも、どんどん小さくなるお父様の後ろ姿に、私は心細くなつて諦め掛けて俯いた。すると、リウィツラ叔母様が握った手を揺らして、私に何かを気付けようとしてくれた。

「ユリアちゃん、ほら、見て！」

お父様は馬の向きを変え、私に大きく手を振ってくれた。丘に沈む夕陽と溢れる涙で滲んでも、私はお父様が笑顔で私だけを見てくれているのが分かった。

「お父様ーーーー！」

私もいつばいお父様に手を振った。ずっとお父様は私のためだけに、ずっと手を振って下さった。私も向こうの丘にお父様が沈んで行くのを見守りながら、ずっとずっと振っていた。

「ユリアちゃん、良かったね。」

「うん！」

オレンジ色に染まっていた空は、静かに夜を迎えようとして紫色へ変わろうとしている。すでに星達が輝きも見せ始めていた。とても透き通るような美しさに満ち溢れた夜空へと変わっていく。

だが、これが私とお父様との最期の別れだったのだ。

続く

第三章「母」第十四話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス（紀元前12年 - 63年）年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ（17年 - 30年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后（紀元前58年 - 29年）年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝（紀元前42年 - 37年）年の差 + 57歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス（紀元前14年 - 23年）年の差 + 29歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア（5 - 43年）年の差 + 10歳年上>

アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年-62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年-69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第三章「母」第十五話

赤子。

私が生まれて初めて感じた印象は、本当にその言葉しかなかった。透き通るような白い肌が陽の光を浴びると、薄く赤みを帯びたベールに包まれ、粒らな青い瞳が何度も瞬く。神秘的な輝きを醸し出している妹リウツラの存在は、私達ユリウス家にとつての新しい財産になった。ネロお兄様、ドルススお兄様、私、ドルシツラは、リウツラを抱えたお母様とみんなで中庭に集まっている。それは一時的にお母様たちが戻ってきて、ゲルマニクスお父様とカリグラお兄様だけがシリアに留まつてらっしやてるからだ。

「おかーたま、また笑った。」

「本当だね、また笑ったね。」

妹のドルシツラはレスヴオス島から帰ってきたら、いつの間に言葉を覚えて話すようになっていた。これもまた私にとつて財産に思えた。ドルシツラが話せる事は、私の中で姉という役割を持たせてくれるから。もう、お転婆なだけではいけないんだわ、などと勝手におませになってただけかもしれないけれど。

「リウツラって、お母様のお腹ん中から生まれたんですよね？」

「ええ、ドルスス。子供は母親のお腹の中で九ヶ月の間過ごすのよ。」

「って事は、肉の中から生まれてきたってことでしょう？うえ、気持ち悪い。」

「あはは、貴方だつてそうやって私から生まれてきたのよ。そうそう、一番なかなか出てこなかったのは、貴方だつたはね？ドルスス。」

「うげ！」

ドルススお兄様は気持ち悪いと言ったが、私はとっても神秘的で愛に満ち溢れている事だと感じた。お母様は心から幸せだったに違いない。愛するゲルマニクスお父様との結晶とも言える愛を、自分のお腹の中で何カ月も育める事ができたのだから。私もいつか愛する男性と巡り逢い、愛の結晶を自分のお腹の中で育める事を想像した。そうになると、やっぱりお父様のような優しく情け深く強い男性がい。

「ユリア、リウィツラを抱いてみる？」

「わ、私ですか？お母様。」

「ええ、貴方だっていずれ母親になるのですから。」

私がおどおどしていると、お母様の腕の中に抱えられたリウィツラが突然泣き出した。お兄様達と私は慌てふためいたが、ドルシツラだけはなぜか全く動じずリウィツラの口に自分の小指を舐めさせていた。

「おかーたん、おっぱい、おっぱい。」

「はいはい、良くできましたねドルシツラ。リウィツラはお乳が欲しいのですね？」

するとお母様は、私達が目の前にいるのにも関わらずストラの間から、豊かな乳房を出しては泣き喚くリウィツラの口元に押し付けた。まだ何も理解していないようなリウィツラでも、お母様が注ごうとする母乳をすがる様に食らい付き、勢い良く喉と口を動かして飲み始める。

「貴方達も、こうやって育ってきたのよ。」

「おかーたん、おっぱい。」

ドルシツラはおもいつきりはしゃいでいたのだが、お兄様達は茫然としてしまっている。今考えればあの頃のお母様は、本当に私達兄妹に実践しながら家族のあり方や、人間愛の在り方を教えてくれたのだと思う。お兄様達は自分達の頬を赤らめて見ていたけど、私はなんだか母性愛と神々しさと色気を感じてしまった。リウイツラが乳房から納得して離れると、お母様は器用にストラの中へ美しい胸を戻して私へニッコリ微笑む。

「はい、ユリア。もう大丈夫だから両腕をまん丸の輪にしてごらん。」

「両腕を…輪にですか？」

「ええ、おつきな太陽神アポロ様を描くように…。」

私が両腕でおつきな輪を作ると、リウイツラの首の位置だけを気にしながら、お母様はスポンとその上に乗せた。後は腕の輪の大きさを調整してくれると、あるところでピタツとリウイツラを包み込む場所に当たってくる。そしてびっくりするほど柔らかく、リウイツラが私を安心してくれているのが分かった。

「よく覚えておきなさいユリア。この輪の大きさは、色んな人によつて違うのよ。」

「はい、お母様…。」

と、答えてみたものの、その大きな意味は当時分かってなかった。ただ、お兄様達よりも先にリウイツラを私に抱かせてくれた事は、女の子として大切な事なんだろうなっと感じたことだけは覚えている。お兄様達もリウイツラを抱っこしたいと言い出し、お母様は私からスツと妹を持ち上げて、私とは違った方法で、丁寧に赤子の抱

え方を教えていた。まだ、私にはじんわりとあの輪の感覚が残っている。

「ウイプサニアちゃん？いるかい？」

ああ！ドルスツス様の声だ！

私は懸命に玄関へ向かって走り出した。お父様の実の妹であるリウイツラ叔母さまの旦那様。そして、お父様の次に憧れている、私の理想の男性像。その笑顔はお父様と同じように時期皇帝継承だけあって、常に輝いていた。

「おお！ユリアちゃん、相変わらず元気だね。」

「ドルスツス様も、ご機嫌麗しく…。」

「おや？随分と淑女らしくなったね！」

お父様とお母様がレスヴォス島へいかれていた間、私はリウイツラ叔母様から、お化粧の仕方や淑女のマナーを楽しく愉快に学んでいた。ドルスツス様はいつものように視線を私に合わせて微笑んだ。

「さあ、これからみんなで父に会いにいくぞ！」

私はこうして初めて、時の二代目皇帝であるティベリウス皇帝陛下に会う事になる。

続く

第三章「母」第十五話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス（紀元前12年 - 63年）年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ（17年 - 30年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后（紀元前58年 - 29年）年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝（紀元前42年 - 37年）年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス（紀元前14年 - 23年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア（5 - 43年）年の差 + 10歳年上>
アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第三章「母」第十六話

「そりゃ、旦那様。みんな真面目に働いてまっさあ。ですがね、一に『引き締め』二に『引き締め』って毎日言われちゃ、あっしらだつてストレスだつて溜まりまっさあ。」

「しかし、お前達の取り分は食うに困るほどのもんではないだろ？」

「ええ、そりゃ安定したものがありませんよ。でもね、華やかさがなんでしょう。シケてるでっす。初代皇帝のアウグストウス陛下のよくな、誰もが『ここは花の都ローマ！』と叫ばんばかりの、華やかさがなんでしょうさあ。」

リウィツラを抱えたお母様と、私とドルシツラは同じ馬車の中から商人達の会話を耳にした。

「だからこの間の、ヌマ・ポンピリア広場から見たゲルマニクス様とウィプサニア様、それに盟友ドルスツス様の『レスヴォス島への旅路』は、感動したわけです。何というかあっしらローマ市民に安らぎを与えたっちゆうか。」

「確かに。あのブチューっとな熱いキスをした瞬間は美しかった！」

お母様はリウィツラをあやししながら、聞こえてくる商人達の会話にしっかりと口元を微笑ませた。そして、つくづく私達ユリウス家はローマ市民から愛されている家系なんだと私は思った。

「外にいる人たちは私達がここにいる事を知ったら、びつくりなさるでしょうね？お母様。」

私は嬉しくなつて、馬車の外から掛けられた布のそばに近付いた。

「おやめなさい、ユリア。」

「え？何がですか？お母様。」

「貴女のオツムで考えてる事は、その大きなお尻でお見通しです。」

「おしりでおみとーし。」

妹のドルシツラは、お母様の言葉をそのまま繰り返しながら、言葉を覚えてるようだった。

「どうせ貴女の事だから、きっとその布をめくる魂胆なんでしょ？」

「そ、そんな事ないですわ、お母様。」

見破られてる…。

「隠したってダメよ。貴女がその布をめくったら、私も貴女のトウニカをめくってアウグストウス皇帝陛下様の廟の目の前で、お尻を百回叩きますからね。」

「はい…お母様。」

私は渋々お母様の言葉に従った。

今思えば、躰とはいえ由緒あるアウグストウス皇帝陛下様の廟の目の前で、子供のお尻をめくって叩くわけがない。だが、この頃のお母様の美德は、それを子供に覚悟させるほど慎ましさを重んじてる方だった。ドルスツス様と同じように、ユリウス家が何をしても目立つ家族である事を熟知しているが故に、慎ましさを極める事が、理想的な女性像を世間に知らしめる手段でもあったのかもしれない。とにかく極度に家族の姿を世間に晒す事を嫌がっていた。

「それにしてもお母様、まだまだ馬車は進みませんね。」
「きつとお父様がいらっしやらないから、手続きでドルスツス様が直に宮殿へ出向かれていますのでしよう。」

そっぴいながらお母様はリウィツラをあやしていた。でも、なんだかその様子は少し落ち着かない様子にも感じる。きつと昨日、ドルスツス様とリウィツラ叔母様の三人で、居間でお話されていた事に関係しているのかもしれない。

「ええ？ピソ様が？どうしてローマにお戻りに？」

「ウィプサニアちゃん、残念ながらそれは多分ゲルマニクスの事だと思う。」

「あの人が？！何かピソ様にご無礼でも？！」

「落ち着いて、義姉さん。」

「どうやらゲルマニクスの奴、あの後シリア属州に着くもピソ師匠との正餐に一回も顔を出さなかったらしいんだ。」

「なんて事……。」

「ピソ師匠も一応はシリア属州の総督なわけだから、部下の手前上、そんなことされたら面目丸つぶれで不機嫌になったらしくてね。最初のうちは牽制し合っていたが、徐々にお互い討論から口論へと変わって今じゃシカトしているよ。」

「ゲルマニクス兄さんったら……。一度、これだ！って決めると、融通が効かないっていうか、頑固っていうか。」

「僕も師匠とゲルマニクスの間に何度も入ろうとしたんだけどさ、ガイウスさんの『あれ』もある事だから、神経質になってるのかもしれない。」

カリグラお兄様の『あれ』は、もちろん『てんかん』の事。不吉な言葉になるのを避ける為に、うちでは『あれ』と呼んでいる。三人はしばらく沈黙していたが、いつも冷静なお母様が二人より先に口

を開いた。

「ドルスツス様、私やっぱりローマに帰らず、あの人のそばにいたほうが良かったのかもしれない。私、今回のピソ様との事と、他の事も含めて、なんだか嫌な予感がしてなりません。何とかあの人のそばに行く事はできませんでしょうか？」

お母様の不安は、そばで聞かないフリをしている私達も不安になった。

「しかし、セイヤヌスがな…。」

「セイヤヌス?!」

リウィツラ叔母様は明らかに、その名前に対して嫌な顔をした。

「貴方、あのトカゲも今ローマに帰ってきてるの?!」

「おい、リウィツラ。口を慎め!」

「いいえ。貴方、私は申し訳ないけれど、明日のテイベリウス皇帝陛下への謁見は辞退するわ。あのトカゲとは目も合わせたくない!」

いつも穏やかで華やかなリウィツラ叔母さまも、体中を摩って毛嫌いを表すほどの名前。エトルリア地方出身であり、己の野望や野心の為、私達ユリウス家を破滅に追い込んだローマの親衛隊長官ルキウス・アエリウス・セイヤヌス。私はこの時始めて政敵の名前を知ったのである。

続く

第三章「母」第十六話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルスス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス（紀元前12年 - 63年）年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ（17年 - 30年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后（紀元前58年 - 29年）年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝（紀元前42年 - 37年）年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス（紀元前14年 - 23年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア（5 - 43年）年の差 + 10歳年上>
アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年 - 20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年 - 29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年 - 65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第三章「母」第十七話

「ウィプサニアちゃん。セイヤヌスから許可が出たから、このまま宮殿まで馬車を進めるよ。」

「ありがとうございます、ドルスツス様…。」

ドルスツス様は少しだけ馬車に被せた布を開いて、お顔だけを見せて伝えてきた。昨日、お母様達がお話しされてる中で出てきた、リウィツラ叔母様がお嫌いになつてるトカゲの名前も出てきてる。

「家内のリウィツラは、先にアントニア義母さんの所へ行つてるから、後でみんな遊びに行こう。」

「はい…。」

「大丈夫、いざつて時にはアントニア義母さんが助けしてくれるはずさ。」

ドルスツス様もお母様の不安を普段通りに振舞つて消し去ろうとしてらつしやる。しかし、あのアントニアお祖母様の名前を出すくらいなのだから、お母様がお父様の元へ戻られることを懇願することは、当時としては深刻だったのかもしれない。

「お母様、この後アントニアお祖母様の所へ行かれるの？」

「ええ。ぜひみんなでいらつしやいておつしやてたのよ。」

アントニアお祖母様は、お父様、リウィツラ叔母さま、そしてクラウディウス叔父様の実の母親。若い頃に不慮の事故で旦那を亡くされて以来、ずっと独身を貫いてらつしやる。そして、あのクレオパトラ様と悲恋の末に命を絶つた、アントニウス様の実の子供でもあった。

「ユリア、あんまりアントニアお祖母様にクレオパトラ様のお話をせがんでダメよ。」

私はアントニアお祖母様からアントニウス様とクレオパトラ様の、あの情熱的なエジプトのお話しを聞くのが大好きだった。何せ私が心底クレオパトラ様に憧れているから。しかし子供は幼ければ幼いほど、いつの時代も無神経な故に残酷。何せ、実の孫から自分の父親の愛人の話をしてくれとせがまれるのだから…。今考えれば、お祖母様は本当に心の広い方だったと思う。だから私の無礼な要望にヤキモキしていたのは、いつもお母様のお仕事だった。

「どうしてですか？」

「家柄に関わる事なの。」

「どうしてですか？」

「どうしても。」

「お話しを伺う事が、家柄に関わる事なのですか？」

「アントニアお祖母ちゃんだって、毎回毎回ユリアに同じ話をせがまれたら、いくらなんでも疲れちゃうでしょ？」

「でも、お祖母様は、いつだって話してあげるって言ってくださいました。」

「今日はおよしなさい。」

「どうしてですか？」

「どうしてもです。」

「お母様???!」

「ダメと言ったらダメです。」

「お母様?!」

「うるさい?!」

ビクついた。

ドルシツラは、お母様の大きな怒鳴り声に怯えて泣き出した。

「お願いだから！今日だけはジツとして頂戴！」

「…。」

私も必死に泣くのを堪えてる。

でも、お母様の苛ついた声は今までの中で一番本当に怖かった。ネ口お兄様とドルススお兄様が、心配になって一緒に見に来てくれた。

「お母様？どうしました？」

「ああ！良かったネ口。悪いけど、ドルシツラをあやして頂戴。」

ネ口お兄様は泣き喚いてるドルシツラをあやしてるけど、ドルススお兄様は馬車の窓辺からチラチラお母様と私の様子を伺ってる。お母様はリウィツラをあやししながら、私の背中に苛立つ溜息を何度も浴びせるものだから、私はますます涙が堪えられなくなり、一生懸命に口をへの字にして目に涙を溜めた。ドルススお兄様はニコニコ微笑みながら質問をしてきた。

「ユリア、お前、お母様をまた困らせたんだろ？」

「困らせてないもん。」

「本当に？」

「困らせてないもん！」

「本当に本当か？」

「ハア！！もう、そんな事はどうでもいいから！ドルスス！ユリアを外に出して頂戴！」

「はい、お母様。おいで、ユリア。」

プイ。

私はドルススお兄様の優しさに反抗した。ドルススお兄様に怒っているわけではないのだけど、でも、なんだか嫌だった。

「ほら、どうした？おいで。」

私は意地でも、両手を広げるドルススお兄様の所に行きたくなかった。

「何だよ？怒ってるのか？」

次の瞬間、私の左頬はいつぱいのお星様を飛び散らして震えていた。

「何度言ったら分かるの！？ユリア！ということ聞きなさい！！」

お母様からの初ビンタ。

私は怖くて痛くてとうとうわーわー泣き出した。それに歓呼するよ
うに、馬車の中はユリウス家の三姉妹私、ドルシツラ、リウィツラ
による泣き声の猛襲となった。ドルススお兄様は微笑みながら、私
を抱っこしてあやしながらつぶやく。

「やっぱりお前、お母様を困らしたんじゃないか。」

「だって……。ううう。」

この事は、後にカリグラお兄様がローマ皇帝として帝位された時、
私達三姉妹が宮廷に呼ばれた時、ローマ市民から『泣き虫ユリアン
三姉妹』としてからかわれるキツカケとなる。私は親指をなめな
がら、ずっとならずとお兄様に甘えていた。

続
く

第三章「母」第十七話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア(5 - 43年)年の差 + 10歳年上>
アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第三章「母」第十八話

それは想像を絶するような美しさだった。

大理石でできた支柱達も、壁達も、床も、屋根も、モザイク画達も、あらゆる全てが気品と優雅さに溢れている。ここでの奴隷達でさえも、主人の虚栄を満たす為の影なりに一級品ばかり集められてる。私はただ、ドルススお兄様に抱っこされながら、少し薄暗いアウグストゥス様の宮殿内の天井をわくわくしながら見上げるばかりだった。

「お兄様、すごいですわ。」

「なんだ？ユリア、もう泣き止んだのか？」

「だってとつても素敵なんですもの。」

「あははは、現金だな。」

後にクラウディウス叔父様から伺ったところによれば、それでも初代皇帝アウグストゥス様の時代に比べれば、随分と節制されていたとのこと。簡素な気品と優雅さは、二代目皇帝ティベリウス皇帝による神経質な政策が行き届いている証拠だったらしい。私は思わずドルススお兄様の抱っこから降りて、自分の足でしっかり歩きたくなった。

「お兄様、降りしてくださいさる？」

「ああ、勿論だよ。」

ドルススお兄様はゆっくりと私を床へ着地させると、私は自分のストラをたくし上げながら、前にいるお母様の歩調に合わせて、背筋を伸ばしてゆっくり歩いた。

「ほら、ドルシツラ。もう平気だよ。」
「はい、おにいたま。」

ネロお兄様に抱っこされていたドルシツラも泣き止み、お兄様の右手を掴みながらトポトポ歩き始める。格調高さに溢れているアウグストウウス宮殿こそ、世界の中心なんだと思わされた。

「よく来たな、ウイプサニア…。」

この声は聞いた事がある。

蛇の様な鋭さと冷徹な眼つきをした初老。お父様が声を荒げてた相手。元老院議員でもあり、シリア属州の総督ピソだった。

「ピソ様、ご機嫌麗しく…。」

「ぞろぞろと、随分と宮殿には似つかわしくない背丈ばかりだな？」

ネロお兄様はすぐさま察してピソへ挨拶の為に頭を下げ、ドルススお兄様もドルシツラもすぐに頭を下げた。ピソは満足気に嫌らしい笑みを浮かべてる。

「さすが人気者のゲルマニクスの家族だけある。名ばかりだけでなく、礼儀が行き届いているものだな？」

お母様も、粗相の無いように再び頭を下げる。

「左頬に平手の跡を残した女子を除いては…。」

「え?! ユリア?」

だが私は、何故かポカンと外から外部者のように眺めてた。頭を下

げなければいけない事は分かっていた。でも何処かで、お父様が背中を後押ししてくれたのかもしれない。

「ピソ様、すみませんでした！ほら、ユリア、ピソ様にご挨拶を。」

ネロお兄様がすぐに背中に来て、私の頭と身体を軽く屈折させた。だがその時でも、私はピソの目をしっかりと見たままでいた。

「…。」

「フツ…。ウイプサニア、この長女は大した肝っ玉の持ち主だ。まるで、お前の頑固な旦那とソックリだ。」

冗談を言ったつもりなのかもしれない。

その言葉と裏腹に、瞬きもせずに私を見下しながら眺めるピソ。お母様は目を合わせず頭を下げたまま。お父様が何故、この蛇に謙る事ができないのか。その時の私は頭では理屈を理解できなくとも、きっとユリウス家の血筋が何かを理解していたから、頭を下げることは決してしようとしなかったのかもしれない。

「ピソ様、我が長女のご無礼をお許しを…。」

「まあ、良い。セイヤヌス様とティベリウス皇帝陛下が謁見の間でお待ちだ。」

背中を向けたピソだが、この蛇は今でも私を許さず、背中から睨みつけている。どんな者でも容赦しない男だから。私はお母様に怒られて睨まれると思った。ところが、頭を下げたままのお母様の口元には、今まで見た事の無い歯軋りする仕草が、一瞬垣間見れたような気がした。そしてお母様は、まるで私の存在を消し去ったように

背中を向けて、ピソの後にゆっくり歩いていく。

「ネロお兄様、寒い…。」

「うん？ユリア、どうした？」

その時私が肌で感じたことは、何とも言えない異様な冷たい風だった。

格式や品格という優雅さを隠れ蓑にしている人間のエゴ。それも羊の皮を被った狼達を更に飼い馴らしているローマという魔物。薄暗い宮殿内から肌を伝わって感じた冷たい風は、親も兄弟も姉妹も、そして私自身も我が子も翻弄されていく、ひよつとしたら『ローマの魔物』の息吹だったのかもしれない。

続く

第三章「母」第十八話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>

アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア(5 - 43年)年の差 + 10歳年上>
アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第三章「母」第十九話

”華やかなれど、そこには美しさは無く、永遠の灯火として、執念だけが物悲しく残る。”

私へ最期に遺した母の言葉。

あれ程まで私達家族の事を、親戚の事を、そして何よりも父の事を思ってた母でさえ、ローマという魔物には敵わなかった。皮肉にも母の死でそれを悟る事になるとは、幼い頃には想像すらできなかった。

「謁見！！ティベリウス皇帝陛下！」

ひよろつと細長い中年男性の声が高々と響き渡った。若干他の人よりも両目の位置が開いてる印象。時折、下唇をベロで舐めるのが癖みたい。肉体もそれほど腕力があるようには見え、むしろ華奢に見える。リウイツラ叔母さまがおっしゃてたとおり、あの人はトカゲのセイヤヌスだ。一同に頭を下げたまま皇帝陛下を迎え入れる。すると、謁見の間の左奥から大きな初老が歩いてきた。

「フー…。」

お腹は大きく膨れ上がり、ガニ股気味の歩き方。ため息を何度もつき、時折、痰を詰まらすように喉を鳴らしてる。一方、実年齢のわりには気味が悪いほど、サラサラした潤いのある白髪交じりの前髪を、ぺつたりと眉毛の上で揃えている。顔全体には拭き切れていない油が無数に輝き、鼻筋と眉間を中心に不格好な皺が無数に広がっている。目の下にはだらしなくマが不健康そうにあり、覇気も無く、まるで喰われるために生きる事を諦めた大きな牛みたい。椅子

に座るにも面倒臭そうな仕草。あれが「鋼鉄の巨人」と呼ばれたテイベリウス皇帝とは思えない。少なくとも私の印象ではそう感じた。

「テイベリウス皇帝陛下。本日はご機嫌麗しく、この度は私共ユリウス家をお招きいただき、御礼のほど…。」
「…で？」

テイベリウス皇帝の一言は意外だった。宮殿内は冷んやりと静まり返るのだが、その静けさに、またそれか？と言わんばかりにテイベリウス皇帝陛下は再びため息を二度つく。セイヤヌスは、そのため息にすぐ様反応し、少し慌てた様子でテイベリウス皇帝のそばで耳を貸す。

「あ、はい。ただいま。」

テイベリウス皇帝から耳打ちされ、咳払いをしたトカゲは、再び下唇を舐めてから言い直した。

「長き挨拶は無用。簡略明確にお伝えしろ。」

「あ、はい…。私共ユリウス家はこの度は無事に、レスヴォス島にて三女のユリア・リウィツラを授かった事を、テイベリウス皇帝陛下へお伝えすべく、報告に参りました。」

「で？何を申されたい？」

セイヤヌスの詰問は、まるでお母様の言葉を覆すようだった。昨夜のドルスツス様とのお話しでは、お母様もお父様のおられるシリア属州へ、お戻りを懇願される事だった。

「父上。この度ゲルマニクスとウィプサニアの間に三女も生まれ、ローマでは、少なからずも和やかな雰囲気にも包まれております。ゲ

ルマニクスもさぞ喜んでいられる事でしょう。彼に一家団欒の機会を与えるのは、如何でしょうか？」

ドルスツス様はお母様をご自分で懇願し難いと判断し、軽やかな口調で提案された。だが、ティベリウス皇帝の返事はどうしてもシンプルだった。家臣のセイヤヌスにまたもや耳打ちをして、二三度手を振って事を済ませる。

「話は終わった！」

ティベリウス皇帝はお母様に対して見向きもせず、まるで自分にかかる八工を尻尾で無意識に振り払う牛のような無関心さだった。

「本日の皇帝陛下への謁見は以上で終了する！」

何も言わず椅子から面倒臭そうな様子で立ち上がる。お母様は驚いた様子で、必死に引き止める。

「お待ちください！ティベリウス皇帝陛下。実は、本日はお願いがあつて参りました。」

「…。」

「家族全員とは申しません。せめて、私とこの三女のリウィッラだけでも、夫のそばに…。」

塞いだのはあのピソだった。

馴れ馴れしくお母様の肩に両手を置いて制止する。

「これ、ウイプサニア殿。陛下は毎日の激務でお疲れである。ワガママを申されるな。」

「しかし！」

再びピソはお母様の肩をポンポンと軽く叩いて制止する。

「もう良いではないか。ゲルマニクスは頑張つとるよ。わしがちゃんと見ているのだから。」

「しかし！」

「夫のそばにいたい気持ちは、どの妻だって同じだろう。お前は知らんだろうが、ゲルマニクスはローマの人気者らしく頑張つとるよ。それに、いくらゲルマニクスが人気があるからと言って、お前達家族だけを特例に許すわけにはいかんだろう？」

ピソはニヤリといやらしい顔で皮肉を綴ると、お母様は自分の肩に置かれたピソの手を、まるで汚らわしい虫でも払いのけるように振り払い、凍てつくような鋭い視線で睨み返した。

「属州の総督がドルスツス様のように信頼できるお方なら、私もこのような懇願はいたしません！」

ピソ様とお母様の間に緊張感が走る。

しかしそれだけでは無い。お母様の挑発的な発言は、皇帝からの絶対的な信頼を勝ち得たいセイヤヌスの野望にも、そして面倒臭そうな様子だったテイベリウス皇帝にも一矢を報いてしまった。

「ウィプサニア！皇帝陛下の面前で、それはどういった発言だ？！」

トカゲのセイヤヌスがまず吠えた。危機的状況を察したドルスツス様は、すぐにお母様の背後に回って援護されるのだが。

「まあまあ、ウィプサニアちゃん。落ち着いて。きつと、あはは……。三女のリウィツラちゃんを産んだばかりだから、お疲れなのでしょう。」

う。」

テイベリウス皇帝は決して自分から自分の意見を言わない。全て一番信頼できる親衛隊長官セイヤヌスに法令厳守の立場から発言させていた。しかしそんなテイベリウス皇帝でも、今の発言は許し難いものだったらしく、低く酒焼けした声でドルスツス様の援護を制止した。

「ドルスツス、お前は黙ってなさい。」

続く

第三章「母」第十九話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>

アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア(5 - 43年)年の差 + 10歳年上>

アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第三章「母」第二十話

どう猛さを秘めた牛魔皇帝ティベリウスの一言は、他の者を圧倒させる力があつた。目の下にある分厚いクマの皺をキツく硬めながら、お母様の方へ淡淡とした表情で睨みを返している。

「セイヤヌス、答えてやりなさい。」

用心深さにかけては他の皇帝よりも長けているらしい。目下の者に対しても、決して奢つた口調で相手を抑え付けるような言動はしない。だが、それは同時に誰も信頼していない言動である証拠。代わりに激情的に弱者を抑制するのは、野心あふれるトカゲの親衛隊長官セイヤヌスの十八番だつた。

「ウイプサニア！ピソ総督は聡明にして寛大なお方である。また、その実績と経歴は、現在のシリア属州までの活躍を踏めば一目瞭然である！お前の今の発言は、皇帝陛下より直々に提案され、元老院共々決議されたものを侮辱するものとも考えられる！」

「いえ、私はただ、自分の夫であるゲルマニクスのそばで支える事だけを懇願したのであります。ピソ様や皇帝陛下を侮辱など、滅相も……」

「黙れ！ウイプサニア。親衛隊長官である、このセイヤヌスが発言中であるぞ！貴様はこの私も侮辱するのか?!」

「ちよつと待つてください、セイヤヌス様！それでは議論の本質が外れております！」

ドルスツス様は流石に義憤に駆られ、お母様を守る為にセイヤヌスの発言へ抵抗されようとした。しかし、威圧的な態度で睨みを効かせるティベリウス皇帝の、『父親』という名の壁を越える事はでき

ない。末妹のリウィツラを抱えるお母様の手は震えていた。

「め、滅相も…ごさいません…。」

あれ程大らかで躰に厳しいお母様も、そしてその太陽のような性格で、人の架け橋となるドルスツス様でさえも、牛魔の現皇帝、トカゲの親衛隊長官、そして蛇であるシリア属州総督の前において、なす術がないように見えた。

「何事ですか?!」

甲高い女性の声が謁見の間に響き渡る。

「大の大人の、それも男が寄ってたかって一人の女性を陰険に虐めるなんて!」

薄暗い宮殿の中からコツコツと足音を立てて近寄ってくる女性。一際、その身に纏ったストラは輝きと威厳を際立たせ、既に70は越えているであろうに、決して衰える事なく背筋をしっかりと伸ばし、大母后として気品をあらゆる所に携えて歩いてくる。

「アウグストウス様のいらした頃には、考えられない光景です!」

牛のような無関心さを持つのがティベリウス皇帝なら、実母の大母后様は、実年齢にそぐわぬ妖の美しさを秘めた女神アルテミスのようなお人。

「はい…。」

さすがの皇帝も母親の前では肩なし。さっきまでの威圧的な態度か

ら一転して、初老のくせにどこか甘えた態度で影を薄めていった。

「セイヤヌス。貴方が親衛隊長官である事を踏まえた上で、私の可愛い孫であるドルスツスを、引き続きウィプサニアと共に過小評価するのですか？」

「いえ、大母后様……。」

トカゲのセイヤヌスは圧倒されて膝まづいた。大母后様はそのままピソにも目を向けた。

「ピソ、私の夫は常に、どんな時でも私の意見に耳を傾けた方だった。そなたも過信せず、女性の訴えにも真剣に耳を傾けるのべきではないですか？」

「仰せのままに、大母后様……。」

ピソは鋭い眼差しを閉じたまま、ゆっくりと床に膝まづいて答えた。威厳を振り回す大母后様であったが、例え息子であっても皇帝への畏敬の念を忘れていなかった。

「テイベリウス皇帝、一つお聞かせ願いたい。ローマの男子が弱者である女性に、言葉の刃を向ける法律がいつから成立されたのか？」

牛魔皇帝は完全に法律に飼育されている。その上をいく法律を熟知した大母后の発言には、実の息子であり長男である牛魔が抵抗できるすべはなかった。この大母后無くして、現皇帝の帝位は無かったのに等しいのだから。

「いえ……母上。そのような法律は……ございません。」

「はて？では、そなた達を取り出したはその刃、向けるべき相手が違っていたという事なのであるうか？」

「いえ、セイヤヌスは収めるべき言葉の刃を取り出したままでです…。」

しかし、牛魔ティベリウス皇帝は自分から何も発言していない。全てセイヤヌスのせいにしていた。

「そうですか…。」

だが、大母后様は満足していた。ゆつくりと辺りを見渡し、謁見の間にいる全ての者に聞こえるよう、皇帝へ進言をされた。

「では、国を治めるべき皇帝のカエサルとして、家臣の乱心をお治めください。」

これが、初代皇帝アウグストゥス様の奥方であり、現皇帝の母親として現在のローマの実権をしっかりと握る、大母后のアウグスタ称号を持つリウイア様その人であった。

続く

第三章「母」第二十話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>

アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア(5 - 43年)年の差 + 10歳年上>

アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第三章「母」第二十一話

「まあ可愛い子。名前は？」

「あの…リウィツラです。」

「あら、私の名前からの影響で？」

「ええ、まあ…。」

本当はドルスツス様の奥様である、リウィツラ叔母さまから付けたのだけれど、お母様は多分恐くて言えなかつたんだと思う…。

私達は大母后リウィア様の計らいにより、謁見の間での難を逃れて大母后様の間に招待されている。とても由緒ある、そしてギリシヤ文化を取り入れた優雅な作りの間。私はジロジロと色々な物を羨ましそうに眺めていた。

「レスヴォス島は綺麗だったでしょう？」

「はい…。とても素敵な場所でした。」

「私はよくあそこの海で泳いだものです。まあ気取り屋が多いのが難だけれども。フフフ…。」

お母様は大母后リウィア様に合わせて微笑んだ。無邪気なりウィツラはキャツキャと笑ってる。その笑い声に、さっきまでの威厳振りかざしていたリウィア様はすっかり顔を和ませていた。本当にこの人が70歳をすでに迎えている容姿に見えない。せいぜい50代くらい。私は勇気を絞って大母后様に質問してみた。

「大母后様は、どうしてそんなに若々しいのですか？」

その一瞬、お母様もドルスツス様も凍りついたような蒼ざめた表情

をしていた。リウィツラを抱っこしている大母后様の目は真ん丸に見開いて、私をじっと見ている。

「アツハツハツハツハ！」

次の瞬間、泡が弾けるように大母后様の大きな笑い声が鳴り響いた。一同も様子を見ながら苦笑し始めるが、あまりの笑いに、大母后様だけがあっけらかんとして、目尻に涙を溜めて笑い続けている。

「貴女、お名前は何っていうのかしら？」

「ユリウス家の長女、ユリア・アグリッピナと申します。」

「アグリッピナちゃん？素敵な名前ねえ。そうね、一番は水泳よ。」

どんな時にでも海で泳ぐようになさい。そうすれば、筋肉はちょうど良く引き締まって、お腹や背筋もしっかりと引き締まるの。」

「水泳…ですか？」

「ええ、とにかく海で泳ぐ事です。アクア様のお力で随分と変わります。」

後でお母様が冷や汗で肝を潰したと語るほど、私の素朴な疑問は、幼さ故に無垢で残酷な質問だったのだが、大母后様は優しく答えて下さった。

「申し訳ございません、大母后様。うちのユリアが大変失礼な事を…。」

「あら？私の年齢に関わる事は、そんなに失礼な事なのかしら？」

さらにお母様は凍りついてしまった。

「いいえ！滅相もございません！」

「フフフ…冗談よ。いいのよ、そんなに堅苦しくしなくても。この

子、アグリッピナちゃんは見込みあるわ。」

「ありがとうございます。」

私は褒められたと思って有頂天になった。ドルススお兄様は私に対し、意味が違うよつとでも言いたげに、険しい顔で小さく首を横に振った。

「男共は種だけ蒔くだけ蒔いて、とつとと自分の戦場に引きこもるでしょ？ 私達女がどれだけ腹を痛めて子供を産んでののか、心を痛めて子育てしているか、ちつとも分かってないんだから。この子達の未来を守る為に、私達女はローマ内部で戦っているのです。アグリッピナちゃんのように、時には臆さず立ち上がる勇気も必要です。」

大母后様は立ち上がり、リウィツラをお母様に戻されて、御自分のストラをゲルマン人の奴隷に整えさせる。しかし、奴隷は誤って大母后様の髪の毛に触れてしまった。

「痛っ！」

「申し訳ございませんでした、大母后様！」

「気を付けなさい。」

「はい。」

すると、先ほどまでの和やかな表情から一転して、また再び威厳にあふれた鋭い表情に戻ってしまった。

「さて、夫であるゲルマニクスの所に行きたいという貴女の懇願だけれども、あの子もセイヤヌスもピソも、あまりいい顔はしてなかったわね？ なんで貴女は夫のそばにいたいわけ？」

「あの…。」

ドルスツス様は、言い辛いお母様の代わりにお父様とピソの確執を説明された。その話に冷静に耳を傾ける大母后様の目は、なぜかキラキラと輝いてる。

「そう……。あの子はきっとゲルマニクスのお守りのつもりで、ピソを総督に任命したのでしょうけど、まだまだピソも子供ね。」

「ゲルマニクスの兵団は彼に忠誠を誓っております。このままピソ様との確執が続けば、事態が芳しくなくなる事必至ではないでしょうか？」

大母后様は人差し指を口許に付けながら、推敲を何度も繰り返しているようだった。

「分かったわ。何とかしましょう。」

「ええ?!」

お母様とドルスツス様は驚いて、お互いの目を疑った。

「シリア属州の攻防は、ティベリウス、あの子の計算違いもあるでしょう。まあ元々はゲルマニクスの人気にあやかっているのも事実かと言って、政治的にも戦略的にも疎かにすべき問題ではありません。問題は、法律的に夫であるゲルマニクスの元へ行く事が、違法でないという事です。」

お母様の目は明らかに輝いた。ドルスツス様も喜んでらっしゃる。

「本当ですか?!大母后様?!」

「あら、私が嘘を付くとても?」

「いいえ!滅相もございませぬ。」

「フフフ…。冗談よ。」

大母后様はちょっとした意地悪をするのがお好きらしい。

「エジプト入国する場合には、皇帝の承認が必要になるには分かっているはね？」

「はい。アントニウス様の一件からですよ。」

「そうです。エジプトは皇帝の私領になっているからです。けれどシリアに関しては、皇帝から直々にゲルマニクスへ指揮官として命令が出されてあるわけなのだから、すでに皇帝からの承認をもらっているという事になります。皇帝が自分への反逆罪の要因になるという証拠を出さない限り、家族を皇帝個人の感情だけで引き裂く権限は行使できないでしょう？」

私は幼いながらも、多角的に物事を冷静に捉えて、解決策を見出すリウイア大母后様にびっくりしてしまった。この人は単なる神格化された自分にすがって生きてるわけではない。それもそのはず、自分の息子を皇帝として帝位させる前に、夫であるアウグストゥス様を皇帝へと導いた方であるのだから。

「まあ家族全員つてなると、皇帝としてのあの子の面子も潰す事になるでしょう…。」

「…。」

「どうです？そのアグリッピナだけはローマに置いて行くのは？」

え？！

大母后リウイア様の突然の提案に、一同がビックリした。

続く

第三章「母」第二十一話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア(5 - 43年)年の差 + 10歳年上>
アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第三章「母」第二十二話

「ユリア…一人をですか？」

「ええ。」

神威に溢れた女神アルテミスのような輝きを放つように、大母后様の目がキラキラと高揚感が湧いてくるように輝いている。私は不安になった。でも、なぜか目尻に寄せられた優しいシワが、不思議な安心感も与えてくれる。お母様は少し口を開けたまま、大母后様と私の顔を行ったり来たりして、決断できない様子。

「なにも人質にして、とって喰らおうとしてるわけじゃないの。」

「もちろん、重々承知しております…。しかし、この娘はまだ四歳です。」

「あら？年齢は関係無いわ。私が同じ頃には、クラウディウス氏族の家をたらい回しにされたものよ。ウイプサニア、貴女が思ってるよりも、このアグリッピナちゃんは立派な女性ですもの。」

お母様が心配するのをよそに、大母后リウイア様に女性扱いされた私の心の中では、不思議な高揚感が湧いてきた。もし大母后様と一緒にしたら、どんな事が待っているのだろうか？考えるだけでもワクワクが止まらない。

「フウ…。まあ、いいわ。少し家に帰ってからでもいいから、考えてらっしゃい。」

「はい…。」

「では、リウイア大母后様、ウイプサニアちゃんとは、この辺で。」

ドルスツス様がうまく引き際を作ってくれた。しかし、大母后様は

きつい表情でドルスツス様に苦言した。

「ドルスツス…。貴女は次期皇帝継承者なのですよ。もういい加減、その言い方をおやめなさい。」

「はい？」

「テイベリウス皇帝であるあの子は、未だに貴方の母親を忘れられないのよ。」

「母さんを…ですか？」

「そうです。皇帝陛下のご気分が悪くなる様な言い方は、本日からおやめなさい。」

私は大母后様の注意がなんだったのか、当時は見当がまるでつかなかった。後でネロお兄様から伺った事によると、お母様の名前である UIP サニア を馴れ馴れしく呼ぶ事が、テイベリウス皇帝の機嫌を損ねる事らしい。なぜなら、お母様とテイベリウス皇帝の前妻は同姓同名のユリア・ウィプサニア・アグリッピナ。二人は腹違いの姉妹であり、年齢はお母様とは一回り違うのだが、ドルスツス叔父様のお母様はアウグストゥス様の盟友アグリッパ様と、最初の結婚相手 で キケロ の書簡の宛名人として知られる テイトゥス・ポンポニウス・アツ テイクスの娘 ポンポニア との間 に 生まれ た の だ。 だが、テイベリウスとドルスツス叔父様のお母様は、跡継ぎ継承の為に初代皇帝から無理矢理離縁させられた。そして、テイベリウス皇帝はアウグストゥス様の娘と再婚させられたのである。そのことがいまだに、テイベリウス皇帝の心底に深く遂げとして残っているらしい。

「分かりました…。」

「以後気をつけるのよ。」

「はい…。」

私達は大母后様の間から離れ、宮殿を後にした。私はお母様から手

をしつかりと握られたまま、腕を引つ張られるように外へ連れてかれる。私はきつとまたお母様から叱られるのだと思った。

「ユリア…。」

「お母様？」

馬車のある場所へ行くなり、面前で私はお母様から物悲しい抱擁を受けた。お母様はしゃがみながら、まるでさすがのように私を抱きしめ、目尻には大粒の涙が溜まっている。

「ユリア…ごめんなさい。」

「え？お母様？」

ネロお兄様もドルススお兄様も、ドルスツス様も、みんな重たい表情で私を見ている。お母様は小刻みに肩を震わせながら、それ以上はなにも言わずにすぐ馬車へ乗り込んでしまった。ネロお兄様がしばらくの間、窓際でお母様とお話をされると、サーっとお母様は實際の布で馬車の中へ閉じこもってしまった。離れたネロお兄様は一生懸命取り繕った笑顔を見せながら、優しく私へ話しかけてくる。

「ユリア…お兄ちゃんの馬車へおいで。」

「え？どうして？お母様は？」

「お母様は…今はあまり体調が良く無いんだよ。」

私はネロお兄様に手を取られて連れてかれる。でも、ずっとシコリを残されたような気分で、お母様の馬車を眺めている。物悲しいその馬車の姿は、まるで一切の想いを外の世界と断ち切るように壁を作って拒絶していた。

そう、私は知らなかったのだ。

お母様はゲルマニクスお父様に会いに行く為、私を大母后リウイア様へ預ける覚悟をされた事を…。

続く

第三章「母」第二十二話 (後書き)

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ(15年 - 59年)>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス(紀元前15年 - 19年)年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア(紀元前14年 - 33年)年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ(6年 - 31年)年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス(7年 - 33年)年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ(12年 - 41年)年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ(16年 - 38年)年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ(18年 - 42年)年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア(5 - 43年)年の差 + 10歳年上>

アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第三章「母」第二十三話

アントニアお祖母様。

私の大好きなおばあちゃんって言うてもまだまだ若い50代。ギリシアのアテナで生まれているのか、あまり派手な服を選ばず、しつとりとした落ち着きのあるチョイス。でも背はすらっと高く、性格はまるで子供心を忘れていないお転婆さん。何より自然な笑皺がとつてもチャーミングな女性。あ！因みに御本人の前で、『お婆ちゃん』とか『お祖母様』は禁句になつてて言っちゃいけないかったんだ…。

「ウイプサニア〜！よくいらしてくれたわね〜。」

「いつもいつも、アントニアお義母様お招き本当にどうも、ありがとうございます。」

「いえいえ、いいのよ。娘のリウィツラもすでに料理して待ってるわよ。」

「本当ですか？！私も何かお手伝いしなければ。」

「今日は、ほら！お客様なんだから。あら〜！こちらがリウィツラちゃん？」

「はい…。」

私達家族は、謁見など宮殿へ出向く時には、必ずアントニアお祖母様の所へ立ち寄る事が恒例になつている。

「娘の名前からつけてくれたなんて、とっても嬉しいわ〜。」

「こちらこそ、とっても光栄です。」

「ゲルマニクスに似てなくて良かったわ。だってあの子に似るとイビキがうるさくなるから。」

「ウフフフフ…。」

「アハハハハ！」

お母様は先ほどの宮殿よりも、随分とリラックスしているようで本当に良かった。アントニアお祖母様とは血の繋がりは無くとも、実の子供の様に可愛がってもらっているからだと思う。

「ドルスツスさん。いえ、皇帝継承者なのだから、ドルスツス様とお呼びした方が宜しいかしら？」

「お義母さん、何か照れ臭いですよ。それに僕とゲルマニクスはまだライバルですしね。」

「あの子は意外に頑固でしょ？ドルスツスさんのライバルだなんて、まだまだですよ。」

「いえいえ、僕の方こそ見習わないと…。今宵はお招き、本当にありがとうございます。」

「今日はうちのゲルマニクスの代わりに、可愛いウイプサニアに付き合って宮殿まで連れていってくださって、本当に心より感謝しております。」

私達もご挨拶をした。まずはネロお兄様から。あ！もし、お姉さんと呼ばなかったり、お祖母様などと口走ったら、しっかりと『くすぐりの刑』で怒られる…。

「アントニアお姉さん、本日はお世話になります。」

「はいネロくん、貴方はいつも本当に礼儀正しい子ね。」

「アントニアお祖、いや、アントニアお姉さん。こんにちわ。」

「ありゃ？ドルススくん、また鼻水が…。」

「鼻水ですか？垂れてないですよ…。」

それでもアントニアお祖母様は、自ら自分のトウニカの裾をギュッと伸ばして、ドルススお兄様の鼻を拭く振りして、『くすぐりの刑』

を始めた。

「うっひゃひゃひゃひゃー!」

「ドルススー!ー!今言ったな!？」

「ウヒヤヒヤヒヤ!アツヒヤヒヤヒヤ!」

「誰がー!ーババアだつてー!ー!？」

「そんな事、ウヒヤヒヤヒヤ!言ってないっす!アツヒヤヒヤヒヤ!マジ本当に!くすぐりたい!」

「お前!ー!今、『祖母』の『祖』まで言ったる!ー!？」

「すいません!アツヒヤヒヤヒヤ!申し訳す!ー!アントニアお姉さん!ー!」

「よっしや!それでいい!」

ドルスツスお兄様はようやく刑から解放された。その後に、次女のドルシツラは一生懸命ご挨拶をした。

「おばーちゃん、こんにちわ。」

「ハイハイ、コンニチチチワ。よくできまちな。ねえ?ドルシツラちゃん。」

ドルシツラはキャッキヤ喜んでる。

そして私はゆっくりお祖母様に気が付いてもらつよう、じっと待ってた。

「あれ?!ユリアちゃん!ー!もう!こんなに綺麗になって!待ってたんだから!」

「アントニアお祖母様!」

私は堪らずお祖母様に抱きつく、お祖母様はいつつもほっぺにキスしてくれる。実は私がお父様のほっぺたに三回キスするように

なったのは、アントニアお祖母様から教えてもらったから。

「あ！そう言えば、ユリア今言った。」

「え？」

「ユリアちゃん？言っちゃったわね。」

ニヤニヤとアントニア様が笑ってらっしゃる。あ！あれ程気を付けてたのに……。気が付くと私は『お姉さん』によって刑の餌食としてくすぐられ、頬っぺたが痛くなるほど笑った。

続く

第三章「母」第二十三話 (後書き)

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ(15年 - 59年)>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス(紀元前15年 - 19年)年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア(紀元前14年 - 33年)年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ(6年 - 31年)年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス(7年 - 33年)年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ(12年 - 41年)年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ(16年 - 38年)年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ(18年 - 42年)年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
上>

アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア(5 - 43年)年の差 + 10歳年上>
アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第三章「母」第二十四話

「ええ？リウイア大母后様がユリアちゃんを?!」

「はい…。」

「相変わらずあの年増雌キツネは、一体何を考えてるんだか…。」

アントニアお姉さんとはとても自由奔放なので、言動も結構荒くなる時がある。私達は、居間でリウイツラ叔母さまがお作りになった料理を、美味しくみんなでいただいている。

「確か、アントニアお義母さんも昔、リウイア大母后様の元で…。」

「ええ、ドルスツス様。ひたすら、色々なお稽古を習わされたの。」

『強い子供を産める母体の育成』だとか言ってるさ。Agoge、つまりスパルタ教室なんて影で呼んでたわ。」

ネロお兄様はゆっくりと耳を傾けながら、失礼の無いように聞いている。ところが、ドルスツスお兄様は食べながら聞いているので、時々こぼしたりしている。

「スパルタ教室…ですか?」

「ええウイプサニア。ギリシャ語で、『スパルタ』は本来は『指導』や『訓練』という意味で使うでしょ?」

「はい…。」

「けれど、別の意味である『押収』『誘拐』で呼んでたの。私達幼い子供を、物や道具のように扱ってたからね。」

「お母さんも幼い頃はスパルタ教室でそうだったの?」

「そうよりウイツラ。あの雌キツネは私達をいびるのが、何よりも楽しかったはずなのよ!」『ローマの子供はローマのもの』とでも勘違いしちゃってるじゃないかしら?」

ゾクつと寒気がした。

あの時、大母后様から感じた笑顔の安らぎを、もしそのまま信じてたら…。

「あら、いけない！ドルスツス様の面目で、お祖母様の悪口言っちゃったわね。」

ペロをペロツと出しては、自分で頭にゲンコツを落として、あどけなさで戒めていた。ドルスツス様は大らかな性格で微笑んできた。

「あははは。大丈夫ですよ、お義母さん。」

「他言無用でお願いね？」

「もちろんですよ。」

リウィツラ叔母さまは親身になって、お母様へアドバイスされている。

「ウィプサニア義姉さん…。それなら絶対に、ユリアちゃんを大母后様には預けないほうがいいって…。」

「でも…。」

ドルシツラは…自分の世界に入り込んで、砂いじりと同じ要領で料理と戯れている。たまに私が口元を拭いてあげたりしてる。三女のリウィツラを抱っこしながら、私を見つめるお母様の表情は苦渋の表情だった。ドルスツス様は、再びお母様の心情を察して代わりに状況を説明した。

「お義母さん…。実は、大母后リウィア様は、ウィプサニアちゃんの提案を拒否した父上の、面目を潰さない為の提案がこれだったん

です。」

「ええ?!何それ?!つて、事はゲルマニクス兄さんに会いに行く為の人質つて事じゃない?!」

人質?!

私はますます胸が曇っていき、どんどん怖くなっていく。

「リウィツラ!!ユリアちゃんがいる前で、なんて事を口走るの!」
「あ...。」

リウィツラ叔母さまは、私に気を遣って顔だけで謝ってくれた。私はなんとか笑顔を作ったが、私が大母后様の所に行かなければ、お母様はお父様をご安心させられない...。

「私は国家反逆罪になりたくないから、正直、ティベリウス皇帝の悪口は言いたくないのですが...。」

「大丈夫よ、ウィプサニア。誰も言いませんよ。ねえ?」

ドルスツス様もリウィツラ叔母さまも、しっかりと頷いた。

「アウグストゥス様がお亡くなりになった年、母はティベリウス皇帝によつて年金を停止され、それが原因でこの世を去りました...。どんな事情であれ第二の妻です。それをいとも簡単に、まるで厄介者でも捨てるかのように...。」

お母様は必死に涙を堪えながら、自分の悲劇を語っている。私もお母様の言葉を一つ一つ刻みながら聞いている。

「だから、私はその頃からティベリウス皇帝の周辺は信用できませんし、ピソ様もセイヤヌス様も、まるつきり信用できません。母が

窮地に立たされている時に、何もしなかったリウイア大母后様も信用できません！」

しばらくの沈黙の後、アントニアお姉さんは膝を叩いた。

「ヨシッ！この件は私に任せなさい！あの雌キツネの鼻の穴を開けてやるわ！」

続く

第三章「母」第二十四話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア(5 - 43年)年の差 + 10歳年上>

アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第三章「母」第二十五話

「つまり、このユリア・アグリッピナが、ティベリウス皇帝陛下の面目を保つ為にローマにいる事が重要であって、何処の氏族に留まるかは、さして重要ではございません。」

アントニア様のはっきりした声が宮殿内に響き渡る。人さし指を口許に当てて推敲する大母后リウイア様。昨日とは打って変わって、まるで天敵にでも出くわしたような鋭い目付きで見つめてる。ようやくアントニア様が懇願を終えると、一つの溜息と二つの微笑みをついては浮かべてきっぱりとした表情で答える。

「分かりました。確かに…アントニアの言う通りです。では、ウィプサニアが旅立った翌日の朝より、毎日必ず護衛の者を連れてかせます。ユリア・アグリッピナに対する命の保障と生活の保障はいたしましょう。」

「ありがとうございます。」

アントニア様は感謝の言葉を大母后リウイア様へ伝えると、横にいた私にそっとウィンクをしてくれる。これによって私はいぶ気分が落ち着き、私はすかさずリウイア様へ感謝の言葉を述べた。

「ありがとうございます、大母后様。」

「良いのよ、アグリッピナちゃん。楽しみ待ってるわ。」

結局、アントニア様の所に住みながら、大母后様の『スパルタ教室』へ通う事になった。宮殿を後にした私達は、大母后リウイア様へ一矢報いたアントニア様が満足そうに腕をまくつてた。

「さすがに法律に飼育されてる母后だこと。ユリアちゃん、これでもママのウイプサニアが旅立っても、私と一緒にだから安心よ。」

「はい！お姉さん。」

「うーん、いいお返事。」

お母様は、私と離れてもいいから、それほどお父様のことが心配なのだろうか？私の事は…寂しくないのだろうか。

「ユリアちゃん、きっと大丈夫よ。美味しい料理をいっぱいご馳走してあげるからね！」

「はい！お姉さん。」

「うーん、いいお返事。」

パラティヌスから離れた郊外にある、アントニア様のご自宅である住居のドムスへ戻ると、心配してわざわざリウィツラ叔母さまが駆け付けてくれた。アントニア様は大母后様の鼻をへし折ったと笑いながら語っている。でもリウィツラ叔母さまは私の事を深く気遣ってくれた。

「ウイプサニア義姉さん、本当にユリアちゃん一人にして大丈夫？」

「私は良いんだけど、この子の事を思うと…。」

幻を眺めるようにお母様は私を見つめている。でも分かっている。お母様が私に求めている事は、今度はお母様の面目を保つ事だって。

「だ、大丈夫です、リウィツラ叔母さま！大好きなアントニアお姉さんの所にお世話になりますし、大母后リウィア様の所で、しっかりと『強い子供を産める母体の育成』を学んできます。」

リウィツラ叔母さまはドルスス様と一緒にイリリクムへ再び派

遣される為、以前のように今度はローマにはいられない。そして何より心配されていたのは、大母后リウイア様のスパルタ教室ではなく、実の母親であるアントニア様の自由奔放な性格の事だった。

「本当に？うちのお母さん、この通り自由奔放だから、ちゃんと躰できるか心配なの。」

「ちよつと！リウイツラそれどういう意味よ？」

しかし全くリウイツラ叔母さまはアントニア様へ耳を貸さない。そのまま心配そうな顔をしたまま、私にしゃがんでずつと話しかけてくれた。

「無理だったら別に無理しなくても良いのよ、ユリアちゃん。叔母ちゃんが別の安心できる人探してあげるから。」

「失礼ね！リウイツラ。ユリアちゃんを私が預かるのが、そんな心配なわけ？」

「だって母さん、自由すぎるから。」

「その自由すぎる母親から、あんたは生まれてきたんでしょ！？」

「私はお父さん譲りだから慎重なの。」

「慎重過ぎても、あの人は落馬したのよ！」

その時、あたり一体の空気が重苦しくなった。右手を握りしめるお母様の手肌から、険しい緊張感を感じる。

「慎重になることは確かに女性として大切な事よ。でもね、慎重になり過ぎた場合は、周りが全く見えなくなるの。ちよつとした事でも怯え、今度は疑い深くなり、実の家族同士でさえ敵意を持つ事だつてあるの！」

「そんなこと絶対にないわよ。こんなに私達仲がいいのだから！それこそ母さんの方が考え過ぎだって。」

「いいえリウィツラ、人間の心に『絶対』なんてあり得ないわ。揺れる水面のように、人の心は色んな表情に変化していくの。例えばそれが自分自身で揺らしてなくとも、悪意を持った誰かに揺らされる事だってあるの。」

後から考えると、この時のアントニア様の言葉は見事に未来を予言していたのかもしれない。お母様のこと、リウィツラ叔母さまのこと、そしてご自分の未来のことさえも。

「だから、何にでもバランス良く、全体と詳細を見極めなさい。」

「はいはい、分かりました…。」

「リウィツラ！『はい』は一回で十分！」

「はい！」

アントニアお姉さんの説教が終わると、今度はお母様へ声を掛けた。

「そして、ウイプサニア。」

「はい…。」

「これからの貴女や貴女の家族を守っているのは、このユリアちゃんである事を忘れないで。」

「お、お義母さん…。」

「自分を責めてはダメ。自分の貫きたい意志に正直になるという事は、同時に自分の精神の強さを試されているという事。自由には必ず責任が付随する事を忘れないで。」

「はい…。」

いよいよお母様達はお父様の所へ。

私だけをローマに残して旅立って行く。

続く

第三章「母」第二十五話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス（紀元前12年 - 63年）年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ（17年 - 30年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后（紀元前58年 - 29年）年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝（紀元前42年 - 37年）年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス（紀元前14年 - 23年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア（5 - 43年）年の差 + 10歳年上>
アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年-62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年-69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第三章「母」第二十六話

「寂しいか？」

「ちよっぴり。」

「でも、これからアントニアお婆ちゃんところで、美味しいもん食べれるじゃん。」

「うん…。」

ドルススお兄様は私を元気付けようとしてくれた。でも、寂しさは募るばかりで消えない。

「これな…、ドルシツラのを改良したんだけど。」

「何？」

二本の指で持っているのは、木彫りでできた小ぢやな小指サイズの鳴子だった。クルクル回すとポンポンつと音が鳴って可愛い。

「もし、寂しくなったら、夕方これを太陽の方角に向けて叩くんだ。そしたらその先にお兄ちゃん達がいるから。」

「うん！ありがとう！」

すると、やつぱりドルススお兄様は鼻水が垂れてきた。私も涙をためながら鼻水をすすり、二人で笑っていると、そこへネ口お兄様がやって来た。

「ユリア、お兄ちゃんからは新しいサンダルのソレラをあげるよ。」

「本当に?!」

「リウィツラ叔母さまから貰った物には、遠く及ばないだろうけど…。でも、大母后様のスパルタ教室で体操なんかしたらきつと靴紐

とか切れるだろうから、靴紐とか使わなくても履けるソレラを作ったよ。」

「うわ！すっごく格好いいです。」

「履いてごらん。」

「うん！」

そのソレラは子供ながらも、柔軟性と創造性に溢れたサンダルだった。

「お兄様？！勝手に靴がしまつていく！」

「だろ？」

「これ、魔法ですか？」

「いや、ピタゴラス様の本を読んで研究したんだ。紐の編み方をうまく変えて、手足も使わずに靴がちゃんと履ける方法を作ってみたんだ。」

つま先からくるぶし全体まで覆いかぶさって、つま先をトントンと地面で蹴ると、ゆっくり紐がしまつていく。

「ネロ兄さん、これ昨日作ってたんだ。」

「ああ。結構時間掛かっちゃって。」

私は二人の兄の気遣いに涙がこぼれそうだった。本当にいつでも妹想いの優しいお兄様達。そこへトコトコとドルシッラが歩いてきた。

「おねーたん、おねーたん。」

「何？」

「おみあげ！おみあげ。」

するとブドウを三粒を掌に乗せてくれた。

「ええ?!これをお姉ちゃんの為に?」

「うん、うん!」

「ありがとう!」

あまりの可愛さにギュッとドルシッラを抱きしてしまった。すると妹のドルシッラはキャツキャと喜んで調子にのったのか?居間に置きっぱなしになってる果物から、器用にブドウを三粒取り、口の中に含んで身を食べてから種を皮に入れて渡してきた。

「はい、おみあげ!おねーたん。」

「あ、ありがとう...。」

「も、もしかして...?」

やっぱり...。

さっきくれたブドウも皮に種しか入ってない。

「ちゃっかり身の中を食べちゃったんだ...。」

「自分の食べた残りカスを、ユリアに渡してるだけって事が...。しかし器用なことするなあ。」

「う、うん...。」

「ユ、ユリア。きつと意味が分かってないんだよ、ドルシッラは。」

「あ!ドルスス兄さん、ドルシッラブドウ落つことした。」

すると匂いを嗅いだ後、

臭そうなしかめっ面をした後、トボトボやってきて私の掌に異臭を放つブドウを乗せた。

「おみあげ!はい、おねーたん。」

「あ、ありがとう...ドルシッラ。」

ちゃんと汚い泥んこが、べとっとブドウについでる。

「ドルシツラのやつ、案外しっかりしてるのかもよ。」

「え？何で？」

「落つことしたもん、食べないもん。」

「そういえば、ユリアはいっぱい食べてたな〜！」

「ええ?!嘘でしょ？」

「よくお母様に怒られてた。ユリア!食べちゃダメ!って。」

シヨック…。

妹のドルシツラよりもバカだったなんて。そこへ、アントニア様とお話を終えたお母様がやって来た。

「ネロ、ドルスス、ドルシツラを連れて用意しなさい。」

「はい。」

「は〜い!」

「ドルスス、そうやって言葉を伸ばさないの!」

「へい!」

お兄様達はドルシツラを連れてあつという間に行ってしまった。お母様は腰に手をおいて、微笑みながら私の取り残された姿を見ている。何だか私はまた寂しくなってきた。

「ユリア…。」

「お母様…。」

お母様の微笑みはとっても美しく、目尻に溜めた涙は陽の光を浴びて宝石のようだった。

「お父様とピソ様が落ち着いたら、必ず迎えに行くからね…。それまで、ずっと良い子にしてるのですよ。」

「はい…。」

「アントニアお義母様のブドウの木は貴重だから、おてんばして木登りしないでね。」

「はい…。」

「大母后様の言う事は、しっかりと聞くように。」

「はい…。」

「それと…。」

突然お母様は私を抱きしめて、わんわんと泣き出した。私はとっても泣きたかったけど、我慢してお母様の頭を優しく撫でることしかできない。だって私まで泣いちゃうと、お母様と離れたくなくなっちゃうから。

「ユリア、本当にごめんね…。」

これが、優しくかった頃のお母様の最後の記憶であり、そして、私にとって最も幸せだった母との最後の記憶。

続く

第三章「母」第二十六話 (後書き)

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ(15年 - 59年)>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス(紀元前15年 - 19年)年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア(紀元前14年 - 33年)年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ(6年 - 31年)年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス(7年 - 33年)年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ(12年 - 41年)年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ(16年 - 38年)年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ(18年 - 42年)年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス（紀元前12年 - 63年）年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ（17年 - 30年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后（紀元前58年 - 29年）年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝（紀元前42年 - 37年）年の差 + 57歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス（紀元前14年 - 23年）年の差 + 29歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア（5 - 43年）年の差 + 10歳年上>

アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第四章「大母后と祖母」第二十七話

お母様達がゲルマニクスお父様の元へ旅立ってから一週間。私は毎朝から大母后リウイア様のスパルタ教室で教育を受けている。

「はい！顔を付けて。」

水中の中で私はしっかりと眼を閉じて息を我慢した。だんだん苦しくなっていく。ついには我慢ができず、顔を上げて息をすると怒られる。

「アグリッピナちゃん。まだ全然ダメよ。もう一回！」

「ハアハア、大母后様！水の中で息ができなくて、ハアハア、とても辛いです。」

「当たり前でしょ？水の中なんだから。」

「眼を閉じていると怖いし。」

「しょうがないわね。」

ストラをスルスルつと脱ぎ捨て、トウニカも裾からゆっくりめくり上げて脱いだ。現れたのは、70代とは思えない、若々しく女性らしい大母后様の肉体だった。

「綺麗……。」

「フフフ……。当然です。貴族達は年を取ると美食家とは名ばかりの暴飲暴食家になるけど、私は違うわ。アグリッピナちゃん、アイデアの話って知ってる？」

「アイデアですか。」

「そう。ギリシャのプラトン先生が提唱されたの。」

美しい身体に片手ですくった水を浴びながら、私にイデア論を語ってください。

「元々、私達の魂は、かつて天上の世界にいてイデアだけを見て暮らしていたそうよ。でも、その穢れのために地上の世界に追放され、肉体であるソーマという名の牢獄セーマに押し込められてしまった。」

右足をゆっくりと水の中にいれて、その温度を確かめてる。

「そして、この地上へ降りる途中、忘却をあらわすレテの河を渡ったため、以前は見ていたイデアをほとんど忘れてしまったの。」

ストーンと身体を水の中に沈めさせた大母后様は、さらに手で身体に水を浴びせている。

「でもね、イデアに似た物を見たり、聞いたり、味わったり、感じたりすると、その忘れてしまっていたイデアをおぼるげながら思い出すそうよ。」

「へ〜。」

大母后様は一度水の中へ潜り、そして起き上がった。

「つまり、自分達の意識を外界ではなく魂の内面へと向けることで、かつて見ていたイデアを想起する事が可能になり、物事の真髄を認識することができるって事なのよ。」

「へえ〜。でも、大母后リウイア様。」

「うん？」

「それが水泳や息継ぎと、どう関係あるのですか？」

「とっても関係してるわよ。」

フフフッと微笑みながら、大母后様はゆっくりと私の顔を見ている。

「貴女は水が怖いから眼を閉じているし、息継ぎが怖いから息を止めたままにしている。」

確かに。

「それは自分の意識を外界に向けてるから惑わされてしまってるの。」

「自分の、意識を？」

「ええそうよ。意識を外界に向けるのではなく、アクア様を恐れず眼を開けて、怖がらず水の中でも息をしてお覧なさい。そして今行っている事が、次の何に役立つのか？考えながらやってみるの。そうすれば今の苦しさをなんてどうでも良くなるし、アイデアを感じる事が出来るはずよ。」

「次の何に役立つのか…。はい！分かりました！」

大母后様の学校では、駆け足の基礎訓練と基本的な泳法を教えるもらっている。アントニア様やリウィツラ叔母様が恐れるよりも厳しくなく、むしろ上達すると褒めてくださるので嬉しかった。お転婆で活発だった私にとってはむしろ苦痛どころか楽しく、さらに帰る頃ときには果物をご褒美としてくれるのだから、意外に一人ぼっちでもすんなり慣れて楽しんでいた。

「大母后リウィア様、本日もありがとうございます。」

「アグリッピナちゃん、今日も頑張ったわね。」

午後までそれらを終えると、私は護衛の二人クツルスとセリウスに付き添われ、アントニア様のご自宅であるドムスへしっかりと帰る。

その間にもローマ市民から色んな褒め言葉を貰ったので、気分は全然悪くなかった。

「ユリアちゃん！お帰りなさい！」

「アントニアお姉さん！只今。」

「クツルス、セリウス、ありがとう。お帰りなさい。」

「はい。」

護衛の者をしつかりと追い払い、誰もいなくなる事を見計らうと、アントニアお姉さんは門番のセルテスへ用心深く扉を閉めるよう指示を出して話出す。

「で、今日のお義母さんはどうだった？」

「今日は一緒に水泳を教えていただき、しかもとっても綺麗でした。ご老体には全然見えません。」

「かぁー！あの人は単に自分の肉体を見せびらかしたいだけなのよ。まあいいわ。それと他には？」

「あとアイデアの話をしました。」

「やっぱり！で、ユリアちゃんは正直アイデアの話は分かったの？」

「まあ、なんとなく。」

アントニア様は上を向いて何かを閃いたようで、奥の部屋から解放奴隷のシツラとリツラへお香を持ってこさせて部屋中に焚き出した。

「アイデアに関する事は、私をもっとしつかりと教えましょう。」

続く

第四章「大母后と祖母」第二十七話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウヰツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>

アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス（紀元前12年 - 63年）年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ（17年 - 30年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后（紀元前58年 - 29年）年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝（紀元前42年 - 37年）年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス（紀元前14年 - 23年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア（5 - 43年）年の差 + 10歳年上>
アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第四章「大母后と祖母」第二十八話

アントニアお姉さんは、突然床にあぐらをかいた。トウニカからすらつとした細い両足が綺麗に整えられてる。

「ユリアちゃんも、私と同じようにあぐらをかいてごらんさい。」
「はい。」

私もアントニアお姉さんの真似をして、自分の両足の裏同士をつきあわせた。

「そもそもアイデアとは何かを自分の中で決めなければ、本当に意味が無くなってしまものなの。」

「アイデアを、自分の中で決めるってことですか？」

「そうよ。例えば大母后リウイア様にとってのアイデアは、己の可能性を極限まで自分自身の力で引き出す事に意義があると仰ってるわけ。つまり理想や可能性を引き出す為に、アイデアを見つめる力を養いなさいってことね。」

「へ。」

「そしてそれは創り出す力なの。私もそれは習ったわ。でもね、もう一つ私は自分で見つけた力があるの。」

「何ですか？」

「そこに在る物を思う力よ。」

なんだか難しくくてよく分からなかった。

「ユリアちゃん、今難しくくてよくわかんないって思ったわね？」

「あ、ばれました？」

「顔に書いてあるもの。」

図星。

しっかりとアントニア様にはばれてる。

「つまり今は無いと思ってるけど、実はすでもう持っているだっ
て思う力の事云うの。例えばお魚。彼らは水の中では平気に泳げる
でしょ？でも、水から出しちゃうと、パクパク口をしながら苦しん
で最後には死んじゃうわよね？」

「はい。」

「彼らは自分達が水の中にいると意識してなかったのかもしれない。
そうなる、私たちも本当は目に見えなかったり意識してないだけ
で、お魚にとっての水のような物に守られてるかもしれない。」

そっか…。

だからさつき水の中で息継ぎが苦しかったんだ。

「私達には家族があります。でも、目に見える紐で一人一人わざわざ
繋げなくても、みんな家族だって分かるわよね？そう云う事を、
アイデアを意識しながら捉えていきましようって事。」

アントニア様のアイデアのお話は最初わかりづらかったけど、例えを
出してくれたので分かりやすくなった。

「では、何をすればいいのですか？」

「別に何もしなくてもいいの。」

「え？何も？」

「ええ、そうよ。ただあぐらをかいて目を閉じ、リラックスして自
分の両親や兄妹の事を感じるだけでいいのよ。」

「なんだか、あぐらかいてると行儀が悪そうな気がしますけど。」

「フフフ。その代わりに、上半身の背筋はピーンと伸ばさないとダメ

よ。」

「はい。」

「これはシリアの先に在る国の人が教えてくれた『ヨーガ』という方法なの。基本はこうやって目を閉じて、時折、大きくお腹から深呼吸するのだけれど、余計なことを考えたり邪念が出てきたりしたら、手足を伸ばしたり、身体を大きく横へ揺さぶったりしてね。」

大母后様の教育とはまるつきり違っていた。とっても楽チンで、時折、食べたい食べ物とかが浮かんでくる。

「食べ物が浮かんだ場合、どうすればいいですか？」

「アハハハ。さすがユリアちゃんね。その時は食べちゃいなさい。」

「はい。」

私は桃やお肉を食べてみた。

そうしたらお腹が空いて、なんと鳴ってしまった。

「あら？お腹空いてるの？」

「えへへ、はい。」

「それじゃこれが終わったら、ご飯の用意しましょうね。」

眼をつぶってイデアを思い浮かべる『ヨーガ』を終えると、アントニア様と料理専門の解放奴隷リツラとシツラと共に夕食の用意を始める。アントニア様はお父様と同じように、解放奴隷の彼女達には料理を作ってもらうが、決して彼らに自分の分の料理の用意や食事の用意はさせない。自分の食べる物は自分で用意して、生き物の命を奪った事をしっかりと噛み締めながら食べるように教わった。

「ゲルマニクスはあの子らしい言い方だけど、私達は誰か別の命の犠牲の下に生かされてるって事。そしてその命は新しい命を生み出

すの。そうやってユリアちゃんも私の孫として産まれたの。だから命を軽視したり、驕り高ぶった人間になってはダメ。そうなっはアイデアに近づく事すらできなくなるのよ。だから常に感謝をして、自分の手でしっかりと食べる事を忘れないでね。」

アントニア様はとっても自然体生きてらっしゃった。普段は奔放な発言が多い方だけど、芯はとってももしっかりして、さらに異文化に対しても研究熱心で肩に力が入っていない生き方をされている。

「さあ！食べましょう！」

「はい！」

大母后様とはとっても対象的だった。

続く

第四章「大母后と祖母」第二十八話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス（紀元前12年 - 63年）年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ（17年 - 30年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后（紀元前58年 - 29年）年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝（紀元前42年 - 37年）年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス（紀元前14年 - 23年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア（5 - 43年）年の差 + 10歳年上>
アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第四章「大母后と祖母」第二十九話

大母后リウイア様は、裸体のままうつ伏せの状態でオリブオイルを全身に塗られ、奴隷達にマツサージをさせている。ピタピタと弾けるように大母后様の肌が若さを増していく。私も奴隷達にマツサージされながら、大母后様の横で寝ている。

「大母后様…。」

「なに？アグリッピナちゃん。」

「アウグストウス様って、どんなお方だったんですか？」

「あの人の事、興味あるの？」

「はい。私の曾祖父ですから。」

「そうよね、アグリッピナちゃんはウイプサニア側からであっても、ゲルマニクス側からであっても、私にとっては血縁関係になるわけだしね。」

「軍神アグリッパ様は私のお爺ちゃん、アントニウス様も私のお爺ちゃんです。」

私はこの時に大母后リウイア様から、自分は曾孫だと言われていることを理解していなかった。それなのに自分の中に流れることばかり夢中に話して。それでも私の曾祖母である大母后リウイア様は、期限が悪くなるどころか微笑ましい顔で私を見つめてくれていたのだ。

「それだけ高貴な血が入っていれば、誰だってローマ市民は喜ぶわよね。分かったわ、アウグストウス様のお話をしましょう。まだ、誰にも話していないお話を…。」

結婚した時のオクタヴィアヌス、つまり後のアウグストウスはとっ

ても短気で激情しやすいタイプになっていたのよ。人の云う事は聞かないし英雄気取りだったし、自分の思い通りにいかなければ、すぐに非難するような人だったわ。そのくせ落ち込むと半端無く落ち込んで、一人では立ち上がれない人だったの。結婚した当初もうちの氏族をあてにしていたし、本当にこの人は大丈夫なの？てなくらいに面倒臭がりで、なのにあれこれ指示を出して、それこそアグリッピナちゃんのお爺ちゃまのアグリッパが困って私に相談乗るほどだったわ。

ある時、あの人へマをしたの。あの人自身の命取りになる事が起きたの。貴族から元老院にはオクタヴィアヌスの死刑宣告を出すように言われてしまい、流石にあの人は蒼ざめて狼狽えて、どうすればイイか分からなくなってた。私はいい加減飽きてしまってお説教を始めたの。そしたらローマ市民でもない女のお前に何が分かるんだ！なんて叫ぶから、あたしは頭きて、あの人のお頬をめいっぱい叩いたのよ。そしたらワーワー泣き出してしがみついていたのよ。”リウィア、僕を助けてくれ！”ってね。

私は流石に大笑いしちゃったわ。

結局男って自分に実力が無くなると、空威張りもできないようなくらい弱虫なのよ。それを必死に隠して生きているわけ。カエサル様は自分の弱さを寛容力と度胸でねじ伏せて愛されたけれど、オクタヴィアヌスは何をしても愛される所と愛されない所がはつきりしてたわ。だから私はあの人に、自分の器が小さい事をちゃんと教えてあげたのよ。男の器は女の器量と母性で大きくなるものなのよ。

それからあの人には人の話を聞くようになったの。例え政敵の意見であれ貪欲に勉強して、自分がどのように見られているのか？どの発言をすれば、どのような結果が生まれるのか？元々色々考えるのが好きな性分だったから、戦いよりもそっちのほうが得意なのね。

とまあ、私の平手打ちがあの人的人生を変えたってわけ。

「凄いですね。あの初代皇帝アウグストゥス様に平手打ちなんて…。」
「それはそうよ！だって夫が死刑になるかもしれないのに、オタオタされたら堪ったものではないでしょう？」

「アウグストゥス様を死刑から救われたんですよね？さすが大母后様。」

しかし大母后リウイア様は私の顔を見るなり、目をまん丸に見開いてお腹から笑い出した。

「アツハハハハハハ！アグリッピナちゃん。いくら私でも死刑からあの人を救うのは無理な事よ。」

「ではどうやって救ったんですか？」

「その時は、ウエスタの巫女達に頼んだのよ。」

「ウエスタの…巫女達？」

「あら？アグリッピナちゃんは彼女達を知らないの？」

「はい、全く。」

「まあ！それは良くないわ。今からウエスタの神殿まで行きましょう。」

そう言うと、大母后リウイア様は早々と全裸のまま身支度を始められた。

続く

第四章「大母后と祖母」第二十九話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア(5 - 43年)年の差 + 10歳年上>

アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第四章「大母后と祖母」第三十話

私と大母后様は、ウエスタの巫女達が暮らす住居のカーサ・デレ・ウエスタリを訪問する事になった。

「いらつしやい、リウィア。」

「お久しぶりです、オキア神官長。」

私達を出迎えてくださったのは、聖職者団ウエスタの最高神祇官であるオキア神官長様。年齢はいくぶん大母后様よりも若く見えるけれど、話ぶりを聞いていると、大母后リウィア様がわざわざ敬称でお名前を読んでらっしゃるので、ひよつとしたら大母后リウィア様より上かもしれない。

「オキア様、こちらはゲルマニクスの長女ユリア・アグリツピナちゃん。」

「はじめまして、私はユリア・アグリツピナと申します…。」

「はじめまして、アグリツピナちゃん。私は聖職者団ウエスタの最高神祇官のオキアです。今日はわざわざカーサ・デレ・ウエスタリを訪問してくださって、本当にありがとうございます。」

「こちらこそ、オキア様。ありがとうございます。」

ウエスタの巫女達の住居であるカーサ・デレ・ウエスタリは、パラティーノの丘のふもとを利用して建築された集団住居で、三階建てのとても清楚で気品溢れる構造になっている。入り口までの床には大きな石畳で仕切られ、一階は屋外に迫り出しており、その屋根が二階を行き来する道になっている。全ては白い大理石で建築されており、初めて見た印象は人が出入りできるアーチの窓がとっても多いことだった。

「さあ、参りましょう。」
「ええ。」

大母后様は大理石の白い手すりのある階段を登りながら、その横にいるオキア様とニコニコして談笑なさっている。不思議だったのは、ここで務めるウエスタの巫女達と通り過ぎる度に、大母后様はわざわざ彼女達のために避けてお辞儀をしていた事。あの国家の母がある。

「それで…、あの頃のあの人の話になって、今日はアグリッピナちゃんにウエスタを紹介したかったの。」

「そうだったの…。昔からリウイアはここが好きでしたからね。」
アトリウムの二階の道まで上がると、まるで何かを見つけたような驚きの顔をして、大母后はくるりと私の方を向き、わざわざしゃがんで話し掛けてくれた。

「アグリッピナちゃん。私は寄る所があるので、この後はオキア様から説明してもらいなさい。分かった？」

「はい、大母后様。」

するとオキア様が二度ほど大母后様の肩を軽く叩いて、早く行くよう即してる。幼いながらも私は、あの大母后様がまるで子供のようにワクワクしている事が分かった。

「ここはね、火床を司る女神ウエスタ様に仕える巫女達が集まっている場所なのよ。」

「火床を司る…？」

「そう。火は扱い方を一歩間違えれば、大火災にだって繋がるかも

しれないでしょ？」

「はい。」

「それは人々の心にあるものと一緒。心の在り方や扱い方を間違えてしまえば、大変な事が起きてしまいかもしれない。だから私達巫女は、ローマにとって決して絶やしてはならない聖なる炎を守るため、女神ウエスタ様に日々仕えているのです。」

よく周りを見てみると、私と同じくらいの背丈の巫女達もいた。オキア様は私の目線に気が付かれ、そっと私の肩に手を置いてくださった。

「あの子達はね、ローマ市内から選ばれた選りすぐりの巫女達ですよ。これから学び手としての10年、勤め手としての10年、そして教え手としての10年という長い長い三つの時期を過ごすの。」

「え？30年間もですか？！」

「そう30年間も……。国教に遵ずることを学び、また悪を正すことに奉仕するため、結婚や子育てといったものから一切解放されてるわ。でも、その間は禁欲を守ることを誓わなければいけないの。そうやって、私達ウエスタの巫女達はローマの『最後の良心』を守っているのです。」

「ローマの『最後の良心』？」

「ええ。いかなるローマ法であっても、皇帝であっても、女神ウエスタ様を穢し、侮辱する事は許されない事。その女神様に仕える身である私達は、人の過ちを正す重要な聖職者なのです。」

「大母后様は、死刑宣告されたアウグストゥス様を救う為に、ウエスタの巫女達へ懇願されたと伺いました。国家の母である大母后様の上をいく、オキア様は何になるのですか？」

オキア様は私の質問にすこし驚いた表情をしながら、でもすぐに、とっても慎ましく穏やかな笑顔を見せてくれて答えてくださった。

「そうね…。リウイアが国家の母ならば、私はローマの母になるの
でしょう。けれども、それは女神ウエスタ様の代理であってどちら
が上という事ではないのですよ。」

「…。」
「とても大変だけれども、でもローマ市民の女性にとっては憧れで
あり、大変名誉ある事なの。あのリウイアや、貴女のおばあちゃん
であるアントニアも、二人とも幼い頃に自ら巫女に立候補したこと
あるのよ。」

「ええ?!大母后様や、アントニア様も?!」

「ええ、二人ともとっても小っちゃくて可愛かったわ。」

「つて事は、オキア様は大母后様よりもお年を召されているつて事?
!すごい…。きっと大母后様はあれほど喜ばれて、ここへ私を連れ
てきたのは、幼い頃に自分も巫女に成りたかったからだったのかも
知れない。」

「そうそう、アグリツピナちゃん。六月には、ウエスタリアという
お祭りが開かれるの知ってる?」

「いいえ、存じ上げておりませんでした。」

「その時にフォルム・ロマヌムにあるウエスタ神殿の倉が七日から
十五日の間、一般の為に開かれるの。」

「ウエスタ神殿の倉がですか?」

「そうです。そして六月の九日には、ウエスタの聖獣である口バを
みんなでスマシで飾るのよ。ローマの主婦達がウエスタ様に供物を
捧げに来るから、お母様のウイプサニアにお願いして、妹さん達を
連れていらっしやいな。みんなで華やかに飾り付けをしましょう。」

「はい!」

すると丁度、大母后様がお戻りになられた。満面の笑みで軽やかな

歩調だった。

「ただいま、オキア神官長。」

「おかえりリウィア。今年はどうでしたか？」

「みんなとつても立派でカワイイ巫女達だったわ。」

大母后様は、どうやら今年の巫女達に激励をされに行ったようだ。

その後、私達は巫女達の住居を隈なく歩き、そしてこのカーサ・デレ・ウエスタリとウエスタ神殿がいかに神聖な場所であるかを教わった。

「アグリツピナちゃん。今後いかなる時にでも、ウエスタの巫女達を重宝するよう、そしていつでも彼女達を敬いなさい。彼女達は自分達の命を掛けて、聖なる炎を守っているのですから。」

この教えが後に訪れる波乱な人生において、どれほど助けになった事か。私の運命は常にウエスタの巫女達を重宝する事で、ローマの『最後の良心』に救われてきたのだ。

続く

第四章「大母后と祖母」第三十話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>

アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア(5 - 43年)年の差 + 10歳年上>
アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第四章「大母后と祖母」第三十一話

ローマ市内に建築されたアントニア様の住居であるドムスは、幼い頃に家族から一人だけ置き去りになった私にとつて、寂しさを紛らわせてくれる、優雅で素敵な記憶ばかりを残してくれた。

玄関にはいつもシケリア人である陽気な門番のセルテスと、キャンキャンいっつも吠えるペロがいる。なんとペロは、主人であるアントニア様に対しても吠える飼い犬のだが、セルテスがかんぬきで門を閉めるとピタツと吠えるのをやめ、前脚をクロスさせてしゃがむ。私はこのペロが大好きで、大母后様のスパルタ教室が終わると一緒にじゃれて遊んでた。

玄関を入るとすぐにあるアトリウムは、アテネ生まれのアントニア様らしくとつても明るくていつも晴れてるような雰囲気の作りになっている。そばにはモザイクの壁画とコンクリート。天窗は珍しくウエスタ神殿のように丸くなっている。本来、住居であるドムスの天窗は四角にするのが当たり前のだが、ウエスタの巫女に成りたがったアントニア様らしく、このドムス自体をウエスタ様へ捧げる神棚のララリウムとして意味を込められてるそうだ。四本の大理石円柱に囲まれた水槽のインプルウィウムには、いつも綺麗な水が溜まっている。時々百合の花を散りばめられていた。お客様がいらつしやらない時は、ペロと私のちよつとした遊び場。

そして何よりも豪華なのは、アントニア様ご自慢のお庭。お庭はもちろんどムスの中にあり、とつてもりっぱな噴水と井戸も設置してあるのだ。お庭の周りには、柱頭に鉢形装飾や柱基を持たない14本の大理石円柱で囲んでおり、それぞれの円柱には七色の色付きラタンや、ランプの反射板である円盤状のオスクラムが吊るされて

る。ただ豪華なだけではなく、果物や野菜がしっかりと取れるようになっていのも、健康食大好きなアントニア様のアイディア。

「ユリアちゃん？どこ？」

庭でブドウを摘んでいると、二階の台所からアントニア様の私を呼ぶ声がした。

「はい、ここです。」

お母様達がお父様の元へ行かれて、もう半年以上の月日が流れた。毎朝から大母后様のスパルタ教室を行き来し、お昼にはアントニア様と一緒に料理のお手伝い。最初は心細かったけれども、次第に慣れてくると、意外に一人の時の方が楽だったりしてた。

「アントニア様！」

「ユリアちゃん。ここね、良かった。今日は豆がギリシャからいっぱい入るから、サラダをメインにしましょう。」

「はい。」

アントニアお姉様のご趣味は、オリーブオイル使ったドレッシング作り。今でもこれから先も、まさかサラダに油を入れるなんて発想は、アントニア様だけだったと思う。

「今夜はバジリコと...。」

「アントニア様、今夜も実験ですか？」

「もちろんですよ。女性の知恵は料理で学ぶもの。」

ドレッシングには色々な種類があった。台所はドレッシングの入れ物で溢れてる。ちょっとしたドレッシング聖女と化している。時に

は乾かしたパンを粉上にまぶしたり、干しぶどうを切り刻んだり。たまに南の国の辛い食べ物を入れてとんでもない実験をして失敗したり。

「ユリアちゃん、そのペペラドレッシング持ってきて。」

「ペペラ…ペペラ…。はい。」

名前付も非常にユニークで、音感だけで決めている。だからちゃんと音で覚えていないと間違える事もあり、文字を書きたがらないアントニア様らしい感じだった。

「あら？誰かしら？」

アントニア様のもう一つの特技は、とにかく耳がいい事。お母様もお父様からローマの地獄耳と呼ばれていたが、アントニア様はそれを上回る。時には外にいるネズミの気配も感じられる程敏感なお方だった。

「誰かいらしたんですか？」

「郵送つばいけど、うーん。ちょっと違うかしら？」

「え？」

そばにあった手拭きでしっかりと手を拭くアントニア様はストラをすばやく軽く羽織り、トゥニカの腰元を紐を結んだ。私もすぐさま手を拭いて、後について一階に降りて行った。やっぱりペロはキャンキャン吠えてる。

「セルテス？」

「兵士2人組のようです、アントニア様。」

「だいじょうです、開けなさい。」

「はい。」

門番のセルテスが扉を開くと、そこには顔の表情を陰しくさせた兵士2人組が立っていた。

「アントニア様。シリアよりウイプサニア様からの手紙とお品をお届けにまいりました。」

「ありがとうございます、ご苦労様。」

しかし、兵士2人組はお互いの顔を見合わせて、帰ろうとはしなかった。

「どうしたのです？」

続く

第四章「大母后と祖母」第三十一話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア(5 - 43年)年の差 + 10歳年上>
アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第四章「大母后と祖母」第三十二話

直ぐに兵士2人組の雰囲気を感じ取ったアントニア様は、私に心配かけないように気を遣ってくれた。

「ユリアちゃん。」

「はい。」

「二階の台所でシツラとリツラの二人で、続きのドレッシングを作ってくれる?」

「はい、アントニア様。」

シツラとリツラはガリア系女性の解放奴隷料理人。シツラはノツポで神経質で早口、リツラはデブで穏やかで笑ってばかりだった。このコンビがとっても美味しい料理をいつも作ってくれる。

「リツラ?シツラ?」

二人はお庭奥に設置された、神棚のララリウムでお香を焚いていた。アントニア様はとても信仰深い方で、神々へのお祈りは欠かさないのが日課だった。当然リツラやシツラも、アントニア様がしっかりとお祈りできるように用意されるのは務め。

「あー、ユリア様、突然大声を出されて雷でも降ってきたのかと思いまして、全く一体全体どうされたのですか?」

「あのねシツラ。アントニア様がお前達二人と台所でドレッシングを一緒に作ってくれて言われたの。」

「ドレッシングですか?アツハハ。少くしなら、私も覚えてますよ。」

「あー、リツラ。あんたはなんでもかんでも、そうやってアツハハ

つて最後に笑って済ませばいいと思って。ユリア様がお怪我されないようにやらないと！」

二人は神棚のラリウムへお祈りを済ませると、一目散に私を連れて二階の台所へ連れて行ってくれた。

シツラは黙々と野菜を切り刻んでいるが、リツラは鼻唄を歌いながらオリブオイルと果物の汁を器用に合わせてる。二人とも対照的なしっかりした働き者。だからこそアントニア様が旦那様を亡くされてから、二人の真面目さを認められて奴隷から解放させられたのだ。

「ポツピランティ〜ン？、タットラランティ〜ン？」

「リツラ、その歌は何？」

「え？今の歌ですか？ユリア様。アツハハ。私達が生まれた村に伝わる歌なんですよ。ねえシツラ？」

「あー、正直もうしますと、歌が上手くないのに料理の時に歌うなんて、はしたない蛮族でしょう？あー、ローマに来てからというもの、私の考えは変わりましたけどね。」

シツラは目をクルクル回して、リツラの能天気ぶりに呆れている。

「でも、愉快でたのしそう！私にも教えて？」

「アツハハ。イイですよ、ユリア様。」

「あー、それはなりません、ユリア様。ユリウス氏族である方が、私達のような蛮族の歌なんて、めっそもございませんし、覚えるもんじゃ無いです。」

「アツハハ。いいじゃない、シツラ。たかが歌。」

「そうよ、シツラ。私も覚えたい。」

「あー、しかし、蛮族の歌なんか……。ユリア様に勝手に教えてしまつたら、アントニア様がビツクリしてお叱りになるでしょう。あー、

それに私達はやっとご解放奴隷にさせてもらったのですから…。」
そっか。

シツラもリツラも私とは身分の違う解放奴隷。迷惑を掛けちゃいけないんだった。私は申し訳なさそうに謝った。

「ごめんなさい、シツラ、リツラ。」

「あー、ユリア様?!今何を??」

「シツラ…。アツハハ…。まさか?私達は謝られたの?!」

すると二人とも汗をかきながら慌て始めた。オロオロしてどうしたら良いのか戸惑ってる様子。そして即座に二人は謝ってきた。

「大変失礼致しました!どうか!どうか!この度の無礼な振る舞いを、お許し下さいませ。」

「え?」

「私共々はアントニア様の寛大なお心遣いにより、他の者達よりも幾分自由を許されている身。されど、それは十二分に理解しているつもりではございますので…。」

二人の怯えた姿に私は戸惑ってしまった。どうしてこれほどまで恐縮するのかがよく分からない。ちょこっと謝っただけなのに、二人は決して私に顔を見せることなく、ずっと頭を下げて私に謝り続けている。

「二人共々、顔を上げなさい。」

ようやく台所へ上がってきたアントニア様が、主人として二人に声を掛けてくれた。その声に二人は驚き、更に低く低く頭を下げて、自分達の無礼に対する許しを懇願していた。

「アントニア様！お許し下さいませ。」

「二人とも、およしなさい。」

「もう、シッラ！リッラ！私は気にしてないから。」

「いいえ！それは無理でございます。」

「あー、幼いユリア様に恐れ多くも、頭を下げさせてしまったのですから。」

「シッラ、リッラ。ユリアはもういいと言っているのです。これでも頭を上げようとしなないのですね？」

「はい！アントニア様。」

頭を上げようとしなない二人を見兼ねたアントニア様は、推敲した後に私へある提案をしてきた。それも普段とは違った威厳のある言い方で。

「ユリア・アグリッピナ。貴女はこの二人の無礼な振る舞いに対し、ユリウス氏族としての寛容な精神で、彼女達の身分相応の罰を与えなさい。」

「え？『身分相応の罰』ですか？アントニア様。」

「ええそうよ、これもあなたが大きくなっていくために必要なことなの。」

突然解放奴隷に罪を与えろといわれても、どうすればいいのかわからないし、何だか自分の身分の怖さを感じてしまった。するとアントニア様は、さっきリッラが歌った蛮族のメロディを口笛で吹きながら、私へウィンクをしてきた。あ！これがヒントか！アントニア様の仰る罰が何であるかを気付いた私は、この二人に対して罰を与えることにした。

「シッラとリッラ。無礼な振る舞いに対して、私にあなた達の歌を

教える罰を与えます。」

すると、二人とも不思議に思いながら、お互いの顔を見合わせていた。まるで拍子抜けした様子で。

「分かりましたか？」

「あー、はい。ユリア様。」

「でも、そんなものでいいのですか？」

「それでいいですよ、リツラ、シツラ。ユリアちゃんは素直な気持ちであなた達に謝ったのですから、たとえ身分が違つと言っても、素直に受け止めるのが同じ人間としての義務でしょう？」

これが、アントニア様流の人道主義的な寛容と恩情と罰の与え方。

私はアントニア様から解放奴隷の扱い方を教わった。

続く

第四章「大母后と祖母」第三十二話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>

アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス（紀元前12年 - 63年）年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ（17年 - 30年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后（紀元前58年 - 29年）年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝（紀元前42年 - 37年）年の差 + 57歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス（紀元前14年 - 23年）年の差 + 29歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア（5 - 43年）年の差 + 10歳年上>

アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第四章「大母后と祖母」第三十三話

リツラとシツラから蛮族の歌を教えてもらった私は、アントニア様と一緒に楽しくサラダ・ドレッシングを作っている。アントニア様は蛮族の歌を大はしゃぎで歌っていた。

「リツラ、これは料理の時にはとつてもイイわね？」

「そうでございましょう？アントニア様。アツハハ。」

「あー、アントニア様、あんまりリツラをお褒めにならない方が、宜しいかと思えます。この子は調子に乗るくせがありますので、はい。」

「あら、シツラもやってみなさいよ。」

「あー、大丈夫です。」

「アツハハ。アントニア様、シツラは歌に自信が無いのですよ。」

「そうなの?!シツラ。」

「恥ずかしながら…。」

今日のお食事はギリシャから届いた豆と、エジプトから届いた香辛料のソース。パンとチーズと卵、そしてアントニア様のドレッシング。さてさてどんな味がするのか…。

「さあ、いただきます。シツラとリツラ、それからセルテスもいっつらっしやい。みんなで食べましょう。」

それにしても、さっきの兵士達の様子が変わったけど、アントニア様はどんなお話をされたんだろう？私達は御祈りをした後に早速サラダを食べた。?...。アントニア様...。辛い。

「うーん、これは...。」

みんな黙ってる。

アントニア様も無理しながら食べてるご様子。しかし、段々大粒の汗が流れてきた。

「辛い！！ユリアちゃん、食べちゃダメ！」

「もう…食べじゃいまだ。」

「シッラ、お水と葡萄酒！」

「あー！はい。只今。」

今日のアントニア様の実験は、残念ながら失敗に終わってしまったが、その他の料理はさすがシッラとリッラの手だけあって美味しく頂いた。

「ユリアちゃん、これは貴女のお母さんから届いた物よ。」

さっきの兵士2人組がシリアから届けてくれた物だった。中には珍しい布でできた橙色外衣のパルラが入っていた。

「まあ、素敵ね。ウィプサニアは本当に貴女の似合う色を知ってる。」

「はい…。」

更に木箱に入ってたのは、ドルススお兄様が鳥の羽根で作ってくれたプレスレットと、ネロお兄様を作ってくれた踵を留めないサンダルのソックスを送ってくださいました。その横には、小さな土の塊が一つ。

「これは何かしら？」

「さあ、何でしょう？アントニア様。」

「幼子の…手形がいつぱいついてあるわね？」

「あ。それは多分、妹のドルシツラが果物を作ったんだと思います。」

「あっはっはっは！可愛いわね、ドルシツラちゃんは。」

私はドルシツラもいよいよ大きくなってきたんだと感じた。しかし、相変わらずガイウスお兄様からは何も無い。カリグラとかお父様の兵士達から呼ばれて調子に乗ってるんだ。

「良かったわね、ユリアちゃん。」

「はい。」

私はネロお兄様が書かれた手紙を見つけた。アントニア様のお顔を拝見して伺ったら、イイわよつと笑顔で答えてくださったので、早速お庭に向かってクルクル巻かれた手紙を開いて読むことにした。暫くすると足元にはペロもやってきた。

「ペロも一緒に読む？」

ユリア・アグリッピナ。

アントニア様のところで元気にやってるかい？一人で寂しくないか？こちらはとつても熱くて凄い所だ。お母様はやはりお父様と一緒にいられることで、とつても調子が良い様子だよ。これも全てお前が大母后様の所で、スパルタ教室に通ってるおかげだな。僕とドルススはお父様のお力で、先日やっと修復作業が終わったアレキサンドリア図書館で、いつぱい本を読ませてもらってるんだ。ここはいつぱい本があつて、本当に勉強になるよ。お母様には法律の本を読むように勧められてるけど、目を盗んで大好きなギリシャ発明の本を読んでる。あらゆる知識が学べるんだ。ドルススは芸術の本から

鳥の羽根のブレスレットを、僕はサンダルのソックスを作ったよ。ドルシツラはどうやら、林檎を作ったみたいだ。暫くしたら元の属州に戻って、そっちに家族で帰るから、そしたらみんなで遊ぼうな。

「暫くしたら元の属州に？」

私は少し不思議に思った。

お兄様達は、今はカッパドキアやコマゲナを攻略する為に、小アジアにいらっしやるはず。別の属州にいるってこと？何か変なの。

「?!」

私のそばに突然黒い影が天井から飛び降りてきた。ペロは直ぐにキヤンキヤン吠えて私を守ってくれたが、痩せこけてボロボロのトウニ力を着た素足の青年が、恐ろしい形相で私を立っただま睨んでいる。私は余りにも恐くなって、声も出ないほど怯えてると、その青年は私のそばに近付いて呟いた。

「騒がなければ、命だけは助けてやる。」

青年は素早く庭にある井戸から水を汲んで、木筒で出来た水筒に水を入れてる。ペロが大きく吠えてくれたので、その異変に気が付いた門番のセルテスがやって来た。

「おい!! 貴様何をやってるだ!？」

「チツ！」

セルテスが掴まえるよりも早く、青年は素早く庭の円柱から屋根へと登って逃げてしまった。私は心臓が止まりそうなくらい怖かった。

「ユリア様、お怪我はありませんでしたか？」

「あわわわわ。」

「どうしたのです?!」

アントニア様が駆け寄って、私を自分の我が子のように抱きしめてくれて、喋れるまで落ち着かせてくれた。さすがに温厚なアントニア様でも、今回のセルテスによる警備の不備は許せず、警備を増やすように一喝した。

「いいですか?!今度このような事があつたら、貴方を即刻奴隷へ戻しますよ!分かりました?!」

「分かりました…。」

しかし、これが、後に私を皇妃へと導いてくれる、奴隷から官僚まで登りつめたマルクス・アントニウス・パッラスとの出会いだった。

続く

第四章「大母后と祖母」第三十三話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>

アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス（紀元前12年 - 63年）年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ（17年 - 30年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后（紀元前58年 - 29年）年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝（紀元前42年 - 37年）年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス（紀元前14年 - 23年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア（5 - 43年）年の差 + 10歳年上>
アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年-62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年-69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第四章「大母后と祖母」第三十四話

「まあ?!アントニアの家に?!」

大母后様は目を大きくして驚いてる。昨日、私のそばで井戸から水を盗んだ蛮族の話をしたから。

「もつとしつかりとした基盤の元に、ローマ市内の治安維持法も改正しなければダメね。しつかしその蛮族もかなり度胸のある男だわ。アントニアの家に堂々と水を盗みに行くなんて。」

「あつという間でした。」

「ふゝ。だからあの義娘、アントニアには再婚しなさいって何度もあの人と勧めたのよ。」

「アウグストウス様とご一緒に?」

「ええ。けれどあの義娘は『私は夫を生涯愛しているので、再婚はいたしません』って。頑固なあの娘らしいはね。」

” 女性は優しく在るべき。” と常に語るアントニア様。

実は再婚されなかったのには、もう一つの理由があつた。それは、健全なローマ人の育成と真の平等と平和という壮大な夢。承知の通り、ローマ市民というのはあくまでも男性のみに与えられた権限であり、私達女性にはそういった権限が与えられていない。そのおかげで、アントニア様は宮殿の政治的なしがらみから離れ、客観性を持ってローマ人の本来在るべき理想の姿を形成する計画を立ててらっしゃった。

” 女性は賢く在るべき。” と常に語る大母后リウイア様。

一方、長寿を全うされたリウイア大母后様も、アントニア様と同様にローマ市民の女性地位向上及び真の平等と平和を、いかに男性の威厳を損なわずに内助の功で達成させる壮大な夢があった。事実、後にテイベリウス皇帝やセイヤヌスから私達を護ってくれたのは、晩年に私達を再教育してくれた他ならぬ大母后リウイア様。形や姿勢は違えど、お二人の根底にある人道的な情熱に、私は幼い頃多くの事を学んだと自負している。

「ところで、貴女のお母様ウイプサニアから何か届いたんですって？」

「はい。お母様からはストラとお兄様達からは、図書館で読んだ本から作ってくれたソツクルとネツクレスです。」

「まあー図書館。へえー何処の図書館？」

「確か…アレキサンドリア図書館と申してました。」

「アレキ…サンドリア図書館…？」

この頃の私は、本当にナイーブで何も分かって無かったのかもしれない。けれど、大母后様は図書館の名前を聞いただけで、直ぐにピーンと何かに気付いたらしくとつても険しい表情になっていた。

「アントニアの所に、兵士は来てましたか？」

「はい。」

「やはり…。」

「今日の教室はお開きにしましょう。これからアントニアの所へ貴女と一緒にいきます。」

大母后様はこの間のアントニア様が私に言ってくれたように、険しい表情のまま一つの誓いを守るよう言われた。

「でもいいですね？アグリッピナ。貴女は、今後如何なる事がある

うとも、誰にもアレキサンドリア図書館の事を話してはなりません。いいですね？」

「分かりました、大母后様。」

「さあ、アントニアのドムスへ行きましょう。」

私は一抹の不安を感じた。

確かにネロお兄様を書いて下さった手紙には、どうもシリア属州にはいらつしやらないご様子。しかし、アレキサンドリア図書館が一体何処にあるのかも分からず、そして、お母様やお父様がそこへ行かれた事が、今後どういった意味を成すのか？この時までには、まるつきり分かって無かった。

続く

第四章「大母后と祖母」第三十四話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア(5 - 43年)年の差 + 10歳年上>
アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年-62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年-69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第四章「大母后と祖母」第三十五話

「だ、大母后様!？」

「アントニア…。お義母さんでイイわよ。今日は忍んで貴女の所に來てるのですから。」

「はい、お義母さん…。」

さすがにアントニア様も緊急を要する大母后様のご様子から察し、直ぐにアトリウムの隣部屋へと案内された。

「ユリアちゃん、二階の台所でシツラとリツラに遊んでもらいなさい。」

「はい…。」

しかし実はこの二階の階段からは、下の話している様子が伺える場所があるのだ。以前に歌ばかり唄って料理をしていたリツラが、アントニア様の呼ぶ声が聴こえず怒られた事があったので、密かにセルテスに頼んでリツラの聞こえやすいように改良してもらったらしい。

「それにしても、アグリツピナは本当に頑張ってる娘だこと。勝気で負けん気の強さは、私達が思っていた以上ね。」

「でしょう?お義母さん。幼い頃にこの手で抱いた時に、ウイプサニアの兄妹の中で、全く泣かずにケラケラ笑ってたんですから。」

「上の…三男坊のカリグラとか呼ばれてるガイウスでしたっけ?アグリツピナは喧嘩してはガイウスを泣かせてるそうじゃない。孫のドルスツスの話じゃ、彼女の男勝りで負けん気の強さは賞賛に値するって。」

「ええ…。」

え?!ドルスツス様がそんな風に褒めてくださったの?嬉しい。

「ウツボを飼って首飾りをしていた貴女とは大違いだわ。」

「もつお義母さんだったら。その話はよしてくだささい。随分と昔の話なのですから。」

ウツボに首飾り?!

さっすがアントニア様。発想がアバンギャルドで自由というか、大胆というか…。

「さて、本題に入りましょうか?」

「はい。」

「貴女の実子であるゲルマニクスとその家族が、エジプトへ入国した事は本当なの?」

「…。」

「アントニア、素直に答えて頂戴。」

「はい、本当の事です…。」

お父様とお母様達がエジプトに?

アレキサンドリア図書館ってエジプトにあっただんだ。それを聞いた大母后リウイア様は大きいため息をつかれた。

「フー…。ウイプサニアには、エジプト入国する事を、あれほど皇帝の承認が必要である事を念を押したはずだったのに…。どうしてまた?」

「兵士の話では、やはりピソ様との確執が誰の目から見てもかなり悪化している様子です。うちの子ゲルマニクスを慕う兵士達の、ピソ様への反乱も避けられない状況を打破する為だとは思いますが、うちの子は一度言い出したら頑固な所があります…。」

誰もが知っている有名なローマ人による反乱の話。そして私の曾祖父の大胆な不倫の話。

あの神君カエサルの右腕であるアントニウス様が、エジプトの女王クレオパトラ様と共闘して属州エジプトの大穀倉地帯を盾にローマへ弓を向けるようになった。その戦いに勝ったのだ、もう一人の曾祖父アウグストゥス様。その後の戦いの教訓から、エジプト長官には解放奴隷のみが就任させるようになっていた。エジプトは当時でも首都ローマの食料供給を支えていたという重要性から、ローマ皇帝の名目上私領となっている。当然、権威をもつ貴族や元老院議員がエジプトを握った場合、帝位を篡奪する可能性があるからなのだが、それらを懸念した大母后リウイア様ご自身が、エジプトへ無断で入ることを禁じるよう、アウグストゥス様へ提案なされた政策でもあった。

「フー。きっとゲルマニクスの頑固さは貴女譲りね。」

「ええ？そうかしらお義母さん。」

「そうよ。まあ、それもあつたからうちの夫は早々とゲルマニクスを養子にさせたのだけれど…。」

「問題はウィプサニアの方…と、仰りたいのですよね？お義母さん。」

「ええ…。」

お母様のことだ。

「ウィプサニアは未だに、自分の母親をティベリウスに放置されたと恨みを持っているわけ？」

「残念ながら。」

「って事は、当然私への恨みもあるわけね？」

「ええ、そのようです。」

「いいわよ、仕方ない事ですから。しかし、ゲルマニクスもウィプサニアも、本当に二人共似たような性格なのに、全く長く続いているわね？」

「それには、私は奇跡としか言いようがありませんが、個人的にはウィプサニアのゲルマニクスを思う気持ちは、分からなくもありませんですけどね。」

「あなたは見持ちの堅い女ですもの。」

大母后リウイア様は右手小指の先を啜えながら、壁の一点を眺めながらじつと考え事をされている。きつと多角的な観点から推敲されており、しばらくの間はアントニア様との間に長い沈黙が流れている。そして何かの対策を思いついたらしく、ようやくアントニア様へ目を向けた。

「アントニア。」

「はい、お義母様。」

「暫くはお互いに静観した上で、貴女はウィプサニアとゲルマニクスの壁になり、私はティベリウスとピソの壁になり、互いの架け橋になれるように最善を尽くしましょう。」

「それは、ウエスタ神官長オキア様の考えられた”我が身を先に差し出して、人の壁となり橋となれ、されば光の道開かれん。”ですね？」

「ええ。決してユリウスとクラウディウスの両家が争うことを避けなければいけません。それはローマ国家にとつても、全世界にとつても得策ではないからです。その為にもオキア様にも十分注意するよう、私から伝えておきます。」

お二人にとって、本当にオキア様の存在は大きいのかもしれないと思っただ。

「いまや私腹を増やしたい貴族やおべつかばかりの元老院が、我も我もと両家へ集まってきました。もしも両家の誰かが、彼らの口車に乗ってにルールが取り除かれてしまったとき、これはローマの陥落を招く遠因になりかねません。せつかくあの人が作った揺るぎないローマの平和を乱すことを、この両家から決して出すわけにいかないのです。」

「たしかに。もうこれ以上ローマでの内戦を繰り広げてはいけませんね。」

「とにかく大事に至らない事だけを考えましょう。私はまた、貴女の女狐になつてあげるから。」

「女狐だなんて、お義母さん。」

「いいわよ。アントニア。今更隠さなくなつて。あんたが幼い頃から、教室の陰であたしの事をそう悪口言つてたのは知っていたんだから。」

「ええ？！どうして知ってるんですか？！」

「ほら！やっぱり。」

「あ！お義母さんつたら引つ掛けてしたのね？悔しい！」

そういうと、二人は明るく笑い出して、女性特有の流行の話になつていった。宮殿の時とは別人のような二人の寛容精神に、私もお二人の様に素敵な女性へなりたいと心底憧れを抱いた。

続く

第四章「大母后と祖母」第三十五話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>

アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス（紀元前12年 - 63年）年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ（17年 - 30年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后（紀元前58年 - 29年）年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝（紀元前42年 - 37年）年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス（紀元前14年 - 23年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア（5 - 43年）年の差 + 10歳年上>
アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第四章「大母后と祖母」第三十六話

「では、くれぐれもアグリツピナの身の安全を。」

「はい、大母后様。」

ようやくお二人のお話が終わり、二階にいた私はアントニア様に呼ばれ、大母后リウイア様の見送るために一階へ降りて行った。すると大母后リウイア様は背の低い私の為に、わざわざしゃがんで頭をなでながら言葉をかけてくださった。

「アグリツピナ。貴女はユリウス家の長女として、これからいっばい色々な勉強をし、立派な女性になるのよ。だから何事にも動じず賢くありなさい。賢くいる事は身の安全を守り、そして他の者達からの尊敬を得る事ができるのですから。」

「壁や橋という事でしょうか？」

「そう！よく分かってるわね。あなたって本当にお利口さん。また、明日会いましょう。今度は女性として素敵な事を教えるわ。」

するとおでこにチュッとキスをしてくれた。私はとつても嬉しかった。その後、警備の事でアントニア様へ助言をなされると、リウイア様は静かにお戻りになられた。ふと気が付いたら、あれだけいつも誰に対しても吠えるペロが、一切リウイア様には吠えず懐いてシツポを振っていたみたい。

「セルテス、かんぬきを。」

「はい、アントニア様。」

するとアントニア様は私の顔を見て、ニッコリ笑ってきた。

「ユリアちゃん、聞いてたな？」

「てへへ、暴露しました？」

アントニア様は私の頭をわざとじゃれ合うように撫でてくれた。

「私も昔はよくその手を使ってたの。あの人に褒められたかったから。でも、きつとりウィア様の事だから、何もかもお見通しね。く〜！もう、あそこ迄暴露したら陰口言えなくなるじゃんか。」

でも、私は女性の賢さによる威厳というものが、年齢を問わずに輝きを放つ事に心を奪われ、そして何よりも大母后リウィア様の根底に、人道的な愛情と優しさがしつかりと流れていることにも感激をした。

「うん？つて事は…ユリアちゃん、私のウツボの話も聞いてたわね？！」

「あ、いや、首飾りなんて知りません！」

「こんにゃろ〜！」

またしてもアントニア様からくすぐりの刑を食らってしまった私。たまにお腹に口を当ててブーって鳴らしたり、鳥のように私を宙に浮かせてくれたり、本当に愉快で自由奔放で優しい人なのがアントニア様。

きつと、後で考えれば、お父様やお母様が無断でエジプトへ行かれた事は、かなりの大事になっていたのかもしれない。それらを危惧したりウィア様とアントニア様は、幼い私にできるだけ負担を与えないようにしてくれていたのだと思う。きつと笑う事で、その日常の重りから自分を解放してくれる事を、アントニア様は体現して教えてくださったのだと思う。

「夕食を終えた後に、セルテスがインスラから買ってきたギリシヤのゲームでもしましょうか？」

「インスラって何ですか？」

「そっかユリアちゃん、ローマに来てからすっかりとインスラをまだ見た事ないんだ？」

「はい。」

「インスラは下層階級のプレブスや中流階級のエクイテスといった平民達が住む、コンクリートでできた四階建てのアパートよ。」

「へえー。」

「平民の人達がひしめき合って生活しているから、いつも活気付いているの。リツラとシツラにはいつも行ってもらってるのよ。」

すると解放奴隷のリツラとシツラも二階から降りてきた。アントニア様のお話に耳を傾けていたらしく、インスラの説明をわざわざ私にしてくれた。

「あー、私達が買ってくる食材も、アントニア様ができるだけ新鮮で安い物を買ってくるように言われているので、インスラの一階のお店で仕入先を聞いてくるんです。」

「へえー！すごい。」

「アツハツハ！そうするとですね、何処が安いのか、分かるんですよ。」

「あー、たまにリツラは、大衆食堂のタヴェルナで道草してますがね、はい。」

「こら！リツラ。」

「アツハツハ……。すみませ〜ん、アントニア様〜。」

ところがシケリア人のセルテスだけは、真面目に私へインスラの危険な部分も説明してくるのだ。

「ただ、インスラは上階になるにつれ家賃は低くなり、社会常識を逸した平民が多く住んでいることもあり、平気で窓から物を落とす輩もいますので危険ですよ。」

「そうなの？」

「はい。以前は余りにも人が集まるものだから、インスラもかなり高く建築されていたのですが、そのぶん構造上に問題があつて簡単に崩れ落ちてしまったそうです。火災と倒壊の危険性があることから、アウグストウス様は建築する際の高さの基準を決められたのですが、それでもインスラの火災や倒壊事故は後を絶たないですね。」

「あー、時折、中の階段が混雑して、上の階に住んでる人が待ちきれなくて、隣のインスラからジャンプして登っている人も見かけますです。」

私はきつと大きな宮殿のような物をイメージしていたと思う。幼い頃の興味は本当に真っ直ぐで怖いもの知らず。一度行って見てみたいって思うと、その事ばかり考えてしまう。でも、そのインスラが立ち並ぶ所で、井戸から水を盗んだ青年にばったり出会うのだった。

続く

第四章「大母后と祖母」第三十六話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア(5 - 43年)年の差 + 10歳年上>
アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第四章「大母后と祖母」第三十七話

リウイア様の開いている教室の中で、ギリシャ語教室は特に厳しい。水泳や体育はさほど厳しくは感じないのだが、それ以外の事に関しては本当に鬼教師と変わる。一語一句間違えれば、孔雀の羽が先に付いた小さな杖でビユウッと頭をはたかれる。

「痛っ。」

「やり直し。」

ギリシャ語に関しては、発音、喋り方、動き方までそのフォームと完璧さを求められ、そして勿論、丁寧に教えてはくれない。口酸っぱくいつも言われる事は、自分の血の中に流れているユリウス氏族とクラウディウス氏族を意識すれば、自然とできるはずだということだけ。

「いい？アグリッピナ。」

「はい。」

「教養とは誰かに教わって養われるものではないのです。」誰かの教え”を、”自らの手で養う”事に意義があるのです。教えられたものに従うのは下の者達のやり方。覚えさせられた物に単調さを感じるのは責務を放棄した者達のやり方。自らで養い作り上げる事が、貴女を賢くしてくれるのです。」

自分が間違いに気がつけるまで、とことん何度もはたかれる。おかげで帰る時には髪の毛には孔雀の羽カスだらけになってる事もしばしば。でも、今考えれば、この厳しさがなければ、私はとつくに宮殿内で殺されていたと思う。

「昔のアントニアもそうだったけど、怒られるから間違えないようにしようと思って思ったら駄目。怒られたら自分を全くの大理石だと思ひ、むしろ怒られることは、自分の身をギリシヤの彫刻のように美しく削ってくれる事だと感謝しなさい。」

これは見事に当たっていた。

戦場では刀や鎧が武器や防具になるが、宮殿の者達とのやり取りの中では、完璧なフォルムと血の威厳が武器や防具となる。その為、一語や一句のミスが自分の命取りになる。リウエア様が女性地位向上にその長い生涯をかけて奮闘されたのは、女性が単なるローマ市民の添え物や子供を生む道具ではなく、ローマ国家の創立者ロムルス様がサビ二人女性を略奪した後、約束されたように、自由で重要な存在であると考えられたからだ。実のところ、リウエア様以外でこれほどまで堅実に女性地位向上を考えていた女性は、ウエスタのオキア様とアントニア様以外にはいなかった。

「宜しい…。今日はこのくらいにしましょう。」

私は内心ホツとした。だが、すぐに暴露で頭をはたかれた。うちのお母様が怒るより怖い人がいたなんて…。

「いつでも心は優美でありなさい、アグリッピナ。」心の乱れは、己の醜聞を招く”。分かりましたか？」

「はい…。」

リウエア様の教室を終えた私は、いつものように笑顔で桃を貰って、二人の護衛兵に守られながら、アントニア様のドムスへと帰る。帰路は今でも目を瞑っても覚えているくらい暗記してる。しかしこの日はどうしても、昨夜リツラやシツラ、そしてセルテスが語っていた集合住宅のインスラに行ってみたかった。護衛はこの間の盗賊の

一件から、リウイア様よりアントニア様へ贈られたクツルスとサリウス。クツルスは大男で寡黙だが、サリウスは細身だがとても几帳面。

「あの…サリウス、今日はインスラのある所から帰ることはできないのですか？」

「アグリツピナ様。私共はリウイア様より、貴女様を無事にアントニア様のドムスまでお届けする命を受けております。できればお控え頂けるとありがたいのですが…。」

「でも、どんな所か一度でいいから見てみたいのです。」

「しかし、それにかなり遠回りになりますし…。」

「どうしても…駄目？」

サリウスは私のワガママに面喰らっている様子。するとクツルスがギョロつと私を見て、それから初めて喋ってきた。

「アグリツピナ様、あすこは本当に危険で野蛮でっさ。それでもご覧になりたいのですっか？」

「うん…。それでも…見てみたいの。」

すると、クツルスはしばらく黙って考えてから頷いてくれた。

「分かりやっした。」

「おい、クツルス！」

「サリウス、責任はワシが持つ。」

「しかし！」

「さすがは皇族の長女様だとは思わんか？セリウス。」

「クツルス…。何かあったらどうするんだ？」

「おいセリウス。我々護衛兵にとって、守るべき主人に何かあったらではダメなのは分かっているだろう。例えばどんな状況であろうと

も命を賭けてお守りする。これは基本中の基本ではないか。」

「だがな…。」

「ワシたちの育ったインストラならどうだ？」

「まあな。」

するとクツルスは私にわざわざしゃがんで語りかけてくれた。

「その代わりにアグリッピナ様。行くからには、どんなことが起きるかわかりやせんので、あっしの言う事をちゃんと聞いていただけますか？」

「勿論！分かったわ。うん…お願い。」

訛りの酷い言葉だったが、その風貌からは想像できないほど優しい声だった。どこかお父様のこえににているようで。サリウスはクツルスの命で私の前を任せ、クツルスは私の後ろからしっかりと護衛してくれた。いつもとは違う細道を抜けて、徐々に足元の道が沼地のような野蛮な作りになると、それなりの酷い悪臭が私の周りを漂っている。すると、クツルスが優しく指を差して教えてくれた。

「ユリア様、あちらに見える建物がインストラです。」

「あ、あれが…インストラなのですか？」

それはとっても大きな建物で、しかも汚れていて、想像していた物はだいぶ違っていた。

続く

第四章「大母后と祖母」第三十七話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス（紀元前12年 - 63年）年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ（17年 - 30年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后（紀元前58年 - 29年）年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝（紀元前42年 - 37年）年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス（紀元前14年 - 23年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア（5 - 43年）年の差 + 10歳年上>
アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第四章「大母后と祖母」第三十八話

確かにシツラやリツラやセルテスが語るように、インスラは四階建の立派な集合住宅。住んでる人々や、その周りで働く人達には活気が溢れていた。けれど…街中から漂ってくる異臭と、不衛生な環境と埃っぽい空気。あらゆる角には、無造作に捨てられた生野菜のゴミや食べカスの廃棄物。正直、自分が想像してた街並みとだいぶ違っててガツクリした。

「クツルス…。す、すごい所ですね。」

「はい、ここはインスラの並ぶ中でも、一番活気に溢れてて、大衆食堂のタヴェルナも、彼処が一番美味いんです。」

「そ、そう…。」

クツルスの瞳は活きいきしてる。サリウスも満更じゃない様子。みんなこれが当たり前なんだ。

「あれ?!アグリッピナ様?」

すると聴き覚えのある声が聞こえた。

「アツハハハ!シツラ、本当だ。アグリッピナ様だわ。」

え?!?!シツラにリツラ!?

しかし、私達に近付こうとした二人を制止したのはクツルスだった。

「お前達、何者だ?!」

「あ…私らは、小アントニア様の…」

「シツラ、リツラ！」

「え？」

「クツルス、大丈夫です。彼女達は小アントニア様の解放奴隷料理人です。」

しかし、クツルスはギョロした視線で二人を疑っている。するとサリウスはどうやら二人を知ってるみたいで、クツルスに話して彼の信頼を勝ち得た。

「あー、こんなみすばらしい街に、わざわざいらしてどうしたんですか？」

「そうですね、アグリッピナ様。アツハハハ！」

「ええ、少し見てみたかったので、サリウスとクツルスに無理言って連れてってもらったの。」

「あれま、それは偶然だ事、アツハハハ！」

「え？」

シツラとリツラは何やらニコニコして笑ってる。

「ここは貴女様のお父様が、たまにいらしてた所なんですよ。」

「ええ?!」

ゲルマニクスお父様が？

するとクツルスはビックリしたように目をクルクル大きく見開いて、私の顔を覗き込んだ。

「何?!するつてーと、アグリッピナ様とは、あの…ゲルマニクス様の…」

「そうよ、兵隊さん。ゲルマニクスはアグリッピナ様のお父様なのですよ。」

「ええ?! 本当なのですか?!」

サリウスもビツクリして私の顔を覗き込んだ。すると二人は突然跪いて頭を下げ、喜びを露わにする。クツルスはいても立っていられなくなつたようで、突然私を肩に乗せて大声で周りにいる街中の人達へ叫び出した。

「おーい! みんな聞いてくれ! ここにおられるお方は、あのゲルマニクス・ユリウス・カエサル様の長女であられるユリア・アグリッピナ様だぞー!」

「おい! クツルス! 少しやりすぎだぞ!」

「ガツハツハツハ! いいじゃないか? サリウス!」

ビツクリした。

クツルスの笑い方がお父様そっくりだったから。まさか、クツルスはお父様とは仲が良かったの? 気が付くと辺りからいっぱい人がやってきて、私の姿を見るなり歓喜の声を一斉に掛けてくれた。

「アグリッピナ様。こちら辺に住む奴らはみんなみんな、貴女様のお父様の大きな愛によって助けられた人達なのでっさ。」

「お父様の大きな愛?」

「ええ。あの方は戦場が終わると、ご自分の兵士達を連れて、こちら辺一体のインストラに遊びに来るんでっさ。」

サリウスも少し嬉しそうにその後を覚えてくれた。

「そしてみんなで夜通し遊びほうけて、お話をしたり。それはそれはみんな楽しい時間なのですよ。」

「あつしとゲルマニクス様の腕相撲は、今のところ…13勝13敗1引き分けでっさ!」

本当にお父様の話になると、みんなが揃って笑顔になっていく。あの老婆はお父様の熱烈のファンで、私と握手を求めてきては泣きじやくり、これでプルートー様のおられる冥府でも御加護になると喜んでいて。シツラモリツラモ、辺りの騒然とした活気溢れる街に驚いた様子で呆然と見てるだけだった。

「さあ！みんな集まれ。大衆食堂のタヴェルナでアグリツピナ様にご馳走を用意しよう！」

想像したより…あれ…だったけど。意外に…良い所かもしれない。

続く

第四章「大母后と祖母」第三十八話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>

アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア(5 - 43年)年の差 + 10歳年上>

アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第四章「大母后と祖母」第三十九話

クツルスとセリウスの育った街にあるインスラには、大衆食堂のタヴェルナが一階にあった。とても賑やかで和やかな雰囲気、集まる人達はとつても気さくで、自分達の愉しむ時間をそっちのけで私の為に色々ともてなしてくれる。私は桃が二個入った果実の袋をテーブルに置いて、彼らの輝く笑顔に魅入っていた。

「それにしても、みんな本当に楽しそうね？クツルス。」

「そりゃあそうでっさ。特にここ一体の団結力と叫びたら、ローマ市内の何処よりも負けませんぜ！それもこれもみんなゲルマニクス様のお陰でっさ。」

サリウスは笑いながら、クツルスとお父様の最初の出逢いを語ってくれた。

「最初の頃は、それはそれはみーんな皇族なんて大嫌いで、皇族出身に対するイジの悪さは人一倍だったんですよ。クツルスだって最初は飲み屋の門番。皇族から睨まれるのも嫌だったので、何度もゲルマニクス様を追い返したんです。」

「そうでっさ！だがあの人は本当に頑固というか、優しいというか自分の亡くなった兵士の出身がここだというから、甲斐に飲ませてくれてテコでも動かなかったんです。きつたない地べたにあぐらかいて、店の前からどきやしないから、力尽くで退かそうとしたんでっさ。」

「はっはっはっはっは！そしたら、クツルスはヒョイッと投げられてしまったんですよ。」

タヴェルナに集まったみんなが一斉に笑い出して、その中にいた八

百屋が笑いながら口を挟んできた。

「アグリツピナ様。クツルスの野郎は、こーんなちつちゃい頃から本当に力持ちで、誰にも負けた事なんてなかったんでさ。それが、アツハハハ！ゲルマニクス様に転がされた時には、アツハハハ！もうなんとというか、面目丸潰れ状態で、みんな本当に腹を抱えて笑いましたっさ！」

クツルスは照れ臭そうに笑ってる。几帳面なサリウスも、まるで昨日の事のように思い出してる様子で笑ってる。シツラは私の肩を優しく指でつつき、八百屋の方を指差して説明してくれた。

「あー、アグリツピナ様。今さっき話しに入ってきたあの八百屋の親父が、昨夜お話しした仕入れ先を教えてくださいれる人です。」

「アツハハハ。そうそう。どうやら話したくて堪らない様子なんです。」

みんなみんな、とっても個性的で面白かった。私もみんなの和やかな笑い声に、自然と頬を緩ませていく。その時、ふと、タヴェルナの入り口に目を向けると、顔や身体中泥だらけの、とっても見窄らしい格好をした小さな女の子がこちらを覗いていた。

「？」

タヴェルナの中にいる人達は誰も気付かない様子だけど、明らかに平民や奴隷の様な衣服ではなく、何処かで見かけたようなボロボロのトゥニカだった。年の頃は、多分、私よりも下で、妹のドルシツラくらい。

「駄目だよ、アクイリア。こっちおいで。」

「にーたん、お腹空いた。」

「ここは駄目なの。入ると怒られるから。」

同じようなボロを身にまとった男の子が、必死にその女の子をあやしている。年のくらはいは、大体カリグラ兄さんくらいだろうか。

「さあさあ、クツルス。そろそろ小アントニア様のドムスヘアグリッピナ様をお連れしないと…。」

「ああ、分かっている。みんな！今夜から小アントニア様のドムスで警護を任されたぞー！ー！」

すると、タヴェルナにいる大人達は一斉に喜んで、クツルスを応援し出した。中には自分の我が子の様に泣き出す老婆や、クツルスと同年代の男性達は笑いながらふざけ合っていてじゃれ合っている。

「それにしても、クツルスさんは人気者なのね。」

「ええ、アグリッピナ様。あいつは昔から人好きでこの街を愛している奴なんですよ。そんなあいつを貴女様のお父様は、自分の分身の様に付き合ってくれます。僕らが非力ながらもリウイア大母后様の護衛配下に入れたのは、ゲルマニクス様のご友人でらっしゃる、ドルスツス様のご推薦あつてのことなんです。」

家族の中でも、もちろんいつも優しいお父様が、ローマの街でもこんなに愛されていたなんて。本当に嬉しかった。

「あー、サリウスさん？そろそろ本当に小アントニア様の所へ戻らないと、私達も食事の用意をしないといけないので…。」

「ああ！そうでしたね。おい！クツルス！いつまで遊んでるんだ？行くぞー！」

「おう！さあさあ、アグリッピナ様。前をどうぞ。」

私は大母后リウイア様から帰りにいつも頂いてる果実を入れる袋を持って、タヴェルナの出口を出ようとする。しかし、多くの人が集まってきた、なかなか外に出れなくなって、少しだけ揉みくちやにされそうになったその時、目の前にポロポロのトウニ力を着た青年が横切った。

「フン！ごめんよ。」

「え？」

やっそこ表に出て、サリウスもクツルスもやっとなってきた。私の身が一番に考えてくれて、大丈夫と答えた後に、今日大母后様から頂いた桃が全部盗まれてしまった。

「無い！！桃が無い！」

「ええ?!」

「大母后様から今日頂いた桃が全部…。」

「何個頂いたんです？」

「三個だクツルス。確かに俺がこの目で見ていた。そのうちの一個はアグリッピナ様ご自身が…。」

「さっき、このインスラに来る前に食べ終わったの。」

「タヴェルナに出る時には、二個あつたって事か。」

その時、またもやあの鋭い視線を感じた。そう、この間、小アントニア様のお庭にある井戸から水を盗んだ、ギラついた目付きをした青年。彼がタヴェルナの入り口の裏から、壁に寄りかかりながらこちらをニヤニヤ見ている。そうだ！絶対にあいつが盗んだんだ！

続く

第四章「大母后と祖母」第三十九話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルスス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>

アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア(5 - 43年)年の差 + 10歳年上>

アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第四章「大母后と祖母」第四十話

「今度そんな不届き者がいたら、あつしが必ず捕まえてみせます！」

「ありがとう、クツルス。」

「いいえ、街の名誉に関わるのでっさ。確かにここいらはお世辞にも住み心地よい所とは言えませんが、それでも唯一安心してられるのは、やはりここに住むもの達の人情なんでっさ。」

「人情？」

「ええ、アグリッピナ様。」

「サリウス…。」

「私達平民にとって、ローマ市内に貧しくとも住める事は、これは名誉の何物でも無いのです。ですから、少なくともその名誉がある限り、我々は互いを敬い、生きていく為に大切な尊厳だけは失わないうよう、互いに助けるよう務めてきたのです。」

「『人の物、盗むべからず』でっさ、アグリッピナ様。」

クツルスはウィンクをして微笑んでくれた。

「単純ですが、みんながそれを守れば、当然いがみ合いも生まれないう。そして互いを尊重して信頼する事が出来る。そしてその信頼を街の人々が勝ち得たからこそ、六月のウエスタ祭りで使われるスミレやマトウタ祭りの捧げ物は、この街で仕入れた物が使われるようになったんです。」

サリウスやクツルスはそう語ると、この街に特別な感情を示すように誇らしい眼差しで見つめていた。私はこれをきっかけに、この街の人たちと交流を続けるとになり、同時に自発的な制止の心得を、今後この街の人達を通して私は学んでいく事になる。

「分かった、クツルス…。今日の事はこれでお終いにしましょう。私もこれ以上クツルス達の街の人を疑うのは嫌だし、それに食べちゃえば、いずれ無くなる物ですしね？」

クツルスとサリウスはお互いを見つめあって笑い出した。

「アツハハハ！」

「ガツハツハツハ！さすがゲルマニクス様の長女様であられる。腹ん中入っちまえば同じでっさね！」

シツラもリツラも一安心の様子で胸を撫で下ろしている。そして私達は小アントニア様のドムスへと帰る事にした。さっきのニヤニヤしていた青年はもういなくなっていた。もう一度振り返ると、小さな女の子がニコニコしてお兄さんと話している。きっと可愛がられているんだろうな。

「お帰りなさい、ユリアちゃん！」

「只今、アントニアお姉様。」

「宜しい！フッフ…。今日は道草してきたんだって？」

「え?!あ…。」

さすがアントニア様はローマきつての地獄耳と言われるだけあって、私がクツルスとセリウスの育ったインスラへ道草したことが知られていた。

「私共は、本日よりアントニア様のドムスを警護する事になりました…。」

「クツルスとサリウスね?どうぞいらっしやい。」

「え、あ?はい…。」

「あなた達の話は、よく息子のゲルマニクスから聞かされてました。」

二人は平伏して頭を下げている。

「それにしても、大母后リウイア様があなた達を選んでくれて良かったわ。ユリアちゃんは幼いながらも好奇心旺盛な女の子だから、今日はきつとインスラに行くんだろうなって思ってたの。」

さすが、アントニア様…。

私の性格はすでに見抜かれている。

「サリウスとクツルスなら、ユリアちゃんをしっかりと守ってくれるだろうと安心できたのよ。」

「自分達はゲルマニクス様のご友人でらっしゃる、ドルスツス様のご推薦があつて、大母后様の元に務めております。」

「まあー！さすがドルスツス様！あの方はうちのリウィツラの二番目の旦那様なのよ。」

「そうだったんですか！？さすが、アントニア様。」

「これでこの二人が我が家を護ってくれば、心から安心ね。」

今夜からアントニア様のドムスを警護として仕える事に、二人は誇りを感じているようだった。

「イヤー、サリウスさんとクツルスさん。実は先日ある盗っ人が、中庭のそばにある井戸から水を盗んでいったのですよ。しかもアグリッピナ様がいる前で堂々と。」

門番のセルテスが事の事情を説明すると、それまで穏やかな表情だった二人は途端に険しい表情を浮かべてる。

誰にもまだ言っていないけど、私は昨日の青年と、今日の桃を盗んだ

青年は同じ人だと思ってる。

「アントニア様、この中庭から…堂々ですか？」

「ええ、そうみたいね。」

「失礼致します。」

するとサリウスは マジマジと屋根や辺りを観察し、しばらくすると機敏な動きで屋根までヒョイッと登っていく。何箇所か屋根の上を歩き回り調べた後、再び中庭に降りてきては床や円柱などを丹念に調べ、指先に着いた何かを嗅いだのちに、手を払って結論を語り出した。

「年は18〜9歳。男性で背はやや高め、痩身。手足は長く、瞬発力に溢れています。どうやらこの盗っ人は、毎晩南西よりやって来て、この井戸から水を盗んでいるようです。」

「ええ?!」

私達一同は驚いた。

何よりもサリウスが調べただけで、あの青年の人物像を見事言い当てたのだから。そして支柱と屋根の部分の返しを指差す。

「あそこの死角になってる返しに、足を載せて屋根に飛び乗ったのでしょうか。盗っ人のものと思われる足跡が、粘土を焼いたタイルの屋根瓦粉に、いっぱい付いてありました。」

「まあー!!」

「こちらをご覧ください。」

井戸の付近まで案内された。

「こここの場所だけ、やたらと赤くないですか？」

「本当だわ。」

「これは全部屋根瓦のタイルの後です。盗っ人は一気にここまでジャンプして、付近の円柱から登って行ったのでしょう。」

アントニア様は余りにもビツクリして、頭を抱えながらリツラの肩に寄りかかっている。クッルスもサリウスに続いて険しい表情で分析する。

「アウグストウス様が防災対策として義務付けた、インストラの二階を行き来する通路のポルティコを経由して行けば、造作も無い事でしょう。」

あのニヤニヤしていた青年なら、身軽にやりそうな感じがした。

続く

第四章「大母后と祖母」第四十話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>

アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア(5 - 43年)年の差 + 10歳年上>
アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第四章「大母后と祖母」第四十一話

「それで？」

「これ以上はクツルスやサリウス達の街の人を疑う事になるので、やめにしました。」

今日はリウイア様から、自分の生活を通して権威や威厳、寛容や畏敬を身に付ける練習を教わってる。

「うん、なかなかです。しかしその場合は”疑う”という言葉を使うのではなく、”街の名誉を守る為に”と言った方がいいでしょう。」

「”名誉を守る為に”…ですか？」

「ええ。”疑う”という言葉は、あなたにとって素直な気持ちを表したのでしょうけど、何をあなたが重んじたのかを言葉で表す事よりもいっそう大切なことなのです。”疑うのはやめた”事と、彼らの”誠実さを大切にした”事があるならば、この場合、あなたが当てるべき焦点は、あなたの品位を保つ為に後者の方にした方が良いでしょう。」

大母后リウイア様は、時折指先にぶどう酒を濡らし、机の上に世の中の縮図を描いて説明してくれた。

「アグリッピナ。この世には自分の意見と同じような人達もいれば、そうでない人達もいる。そして人は如何様にも、自分の好きなように解釈する。なれば、その中で賢く生きて行く為には、泳ぎ方を学ばなければ、己の目的に到達する事はできません。」

「うーん、私はちょっとよくわからなかった。」

「フフ：ちょっと難しいかしら？そうね、あなたがまだまだここへ来た頃の事を思い出せば、少しだけ分かるでしょう。」

「ここへ…来た頃ですか？」

「水に顔をつける事すら億劫だったでしょ？」

「はい、最初はとつても怖かったです。」

「それは怖いという先入観があつたからでしょ？」

「はい、ありました。」

「でも、今なら息継ぎも泳ぎ方も、イデアを意識するようになって上手くなってきたわよね？それは、あなたがアクア様を理解しようとしているからです。」

確かに…。

「人と付き合うことも同じです。相手に先入観を持つて接すれば、それだけ相手を理解する事が難しくなります。しかし先入観を持たずイデアを意識するように、あなたの身体に流れている氏族としての血を意識しながら相手に接すれば、自ずと相手はあなたに畏敬という念を持つはずです。」

私の体内に流れる血。氏族として受け継がれている血脈。大母后リウエア様は本当に教えるのが上手な方だと思った。なぜなら難しいお話の後に、必ず俳優のように色んな人に変身されて、状況を見事に演じてくださるから。

「例えばね？もしあなたが”疑うのはやめた”って発言して、あなたには悪意なんてこれっぽっちも無かったとしてもよ、中には、”ケツ！最初から疑ってたのかよ！”って捉える人もいるって事よ。」

「そっか…。」

「でも、あなたが”街の名誉を守る為に、この話は終わりにしましょう。」って言えば、”そっか〜！さすがアグリッピナ様だ！最初

から私らの事を考えてくださったんですね？ すごいやー！” っつて、みんな平和的に喜ぶでしょ？”

「アハハ！なるほど！」

大母后リウイア様の誰かを演じる時の顔は、とても表情が豊かで色んな人に見えてくる。意外にユーモアもあつたり、モノマネが得意だったり。最初の頃の怖かったイメージからは、今ではとつてもかけ離れている。

「まあね、ここローマに住む人達は上下階級横の隔たり共にプライドの高い人ばかりで、だから一つの所に力が集中する事にはとつてもアレルギーを持っているの。一つの失言が、その人の運命を左右する事だつてあるのよ。自分の虚栄心を満たす為だけの行動は、いずれ多くの人々に反感をくらい、自分の命を脅かす事になりかねない。だから、感情に任せて自分を見失つてはダメ。」

どうしても感情的になりそうだった時には、目を細め、奥歯を噛み締め、自分が大理石の彫刻になった気分、決して表情に表さないように務めること。その一方で、相手が感情的になつてきている時には、自ら水のように柔軟な姿勢を持って、現状の把握と自分と相手の双方に足りないものは何かを考えなさいと、今日の授業の最後に教わつた。帰り仕度をしていると、今日も大母后リウイア様ご自身が微笑みを浮かべながら、わざわざ数個の桃を持ってきてくれた。

「アグリッピナ。今日もどうせインスラのそばを歩くのでしょうか？」

「あ、いえ…。その。」

「フフ…。言い訳なんかしなくていいわよ。その大きな丸い瞳は、色んな事に興味いっぱいなのだから。」

くれぐれも気を付けなさい。そして、この”アウグスタの桃”は、ちゃんと同じ氏族であるあなたのお腹の中にしまうのよ。」

「はい、分かりました。」

見破られてる…。

今考えれば、大母后様は曾祖母として、本当に子供の私を大切に扱ってくれていたんだと思う。ネロお兄様とドルススお兄様が亡くなり、ウイプサニアお母様が流刑されてこの世を去った後、大母后りウイア様は残されたカリグラ兄さんや、私を含めたドルシツラとリウイツラを引き取って下さった時にも、その寛大な御心は決して揺らぐ事は無かったのだから。私はいつものように護衛兵のクツルスとサリウスに連れられて、インスラへと寄り道をした。

「ガツハツハツハ！あっしはアグリツピナ様がこの街を気に入って下さって、本当に何よりです。」

クツルスはまたも私を肩に乗り上げて、街の様子を見せてくれた。すると昨日見かけたあの蛮族が、インスラの防災通路であるポルテイコから、こつちをニヤニヤ眺めている。私はおびえて震えていると、サリウスは私の異変に気付いてくれた。

「アグリツピナ様、どうなされましたか？」

続く

第四章「大母后と祖母」第四十一話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア(5 - 43年)年の差 + 10歳年上>
アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第四章「大母后と祖母」第四十二話

「うん？どうしましたか？アグリッピナ様。」

「なんでもないので、サリウス。」

知らぬ間に、あたしは震えていたみたい。足がガクガク。

「クツルス、今日はそろそろ引き揚げよう。」

「え？どうしてだ、サリウス。」

「俺達の仕事はアグリッピナ様の安全をお守りし、心の平穩のままにアントニア様のドムスへお連れする事。そうだろうか？」

クツルスもさすがにあたしの怖がった様子を見て、異変を感じたらしい。私をゆっくり降りして、険しい表情で辺りの様子を疑い出した。

「サリウス、几帳面なお前がそう言うからには、何かがあるんだろう？？」

「まあ、その事はいずれ後で話そう。」

「分かったサリウス。アグリッピナ様、ではあっしの前をお歩きください。」

「はい、クツルス。」

辺り一面を一気に二人の緊張感が包み込むと、さすがに周りの人達も気軽にクツルス達へ声を掛けにくくなっている。私は胸にリウイア様から頂いた”アウグスタの桃”を必死に抱きしめながら、二人の警護に頼りつきりになると、インストラの角からひよっこり、あの妹位の小さな女の子が桃を美味しそうにかじっていた。

「?!」

私はすかさず袋の中を見ると、既にあつたはずの桃が無くなっていた。やっぱり！私は本当に恐くなって怯え出した。その女の子が桃を食べ終わると今度は誰かに何かをねだっている。

「おにーたん、おにーたん。クルクル馬車やって。」

「ああイイよ、アクイリア。」

ポルティコでニヤニヤしていたさっきの青年が、今はとても優しくうな眼差して自分の細い右腕にあの女の子をぶら下げてクルクル回して遊んでいる。その横には、ネロお兄様と同じ年位の男の子もいた。みんな見窄らしい格好だったけど、でも目はくつきり輝いて楽しそうだった。

「アクイリア！楽しいか？」

「アハハ！うん！たのちー！」

女の子はとっても楽しそうだった。それを見ていた私は、なんだか急に家族が恋しくなり、私一人だけローマに残された中で一番寂しい思いになった。彼ら三人を見てたら少しだけジワリと涙目になり、それに気が付いたクツルスが優しく微笑みながら涙を拭いてくれた。

「ありがとう…。」

「さあ、アグリッピナ様。今日は帰りましょう。」

「はい…。」

しかしサリウスはその間もジツと彼ら三人を見つめている。まるで何かに刻み込むこむように、冷静に、彼らの姿を記憶している。そこへクツルスもサリウスの見ている先を見ながら話しを始める。

「蛮族の路上生活孤児共か？」

「ああ、多分そうだろう。」

「クロアカ・マキシモの連中か？」

「ああ、シツラの話じゃインスラにある防災通路のポルティコを使
つて、空き室になっている上の階を寢床にしている者もいるらしい。

」

「けど、あいつらは何処かの奴隷になる予定だったわけだろ？幾ら
ここが管轄区域の中では、比較的緩い方だとしても、どうやってク
ロアカ・マキシモから入ってきたんだ？それにいずれ奴らを放つて
おく訳にはいかないだろう。」

「我らの街に彼らのような存在がある以上、今までの様にはいかな
い事は確かだ。この事は上に報告する前に、我らの手で何とかしな
ければ。」

クツルスとセリウスもようやく、大母后リウィア様から貰った桃や
アントニア様の井戸から水を盗んだ盗つ人が、あの青年である事を
わかっていたようだった。

続く

第四章「大母后と祖母」第四十二話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルスス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>

アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス（紀元前12年 - 63年）年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ（17年 - 30年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后（紀元前58年 - 29年）年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝（紀元前42年 - 37年）年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス（紀元前14年 - 23年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア（5 - 43年）年の差 + 10歳年上>
アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第四章「大母后と祖母」第四十三話

それは門番のセルテスの叫び声から始まった。

「サリウス様！！そちらです。」

次にペロの物凄い吠える鳴き声。私やアントニア様は、その夜の静けさを切り裂く大声に、飛び上がるほど驚いて目を覚ました。

「何事です?!」

下からは物音が響いて、度々何か割れる音がしてきた。アントニア様は私を抱きかかえたまま、身体をビクつかせて震えている。シツラが急いで二階の寝室に上がり、アントニア様へ事の成り行きを知らせにきた。

「あー、アントニア様！蛮族の盗っ人です！今、サリウスとクツルスが必死に…。」

「シツラ！アグリッピナをリツラと一緒に！」

「あー、それが…リツラも一緒に！」

「ええ?!」

あの大らかで歌が大好きで、太っちょでいつも笑ってばかりのリツラが?! 私達はアントニア様に連れられ、恐る恐る階段の間隙から下の様子を覗いてみた。するとカッカして怒ってるリツラが、この間買ったばかりの取手のついた鉄鍋をグルングルン振り回していた。

「あんだね?! いつもウチのパンを盗んでた蛮族は！今日という今

日は許しませんよ!!」

「リツラさん！危ないから、そんな物振り回さないで！」

「クツルス！リツラを止める！」

「こらー！こらー！こつちこいや！盗っ人！」

「だ、ダメだ！サリウス。リツラは完全に我を失ってる！」

本当だ…。

すっごく暴れてる。なんていう人。盗っ人の青年も青ざめた顔で、逃げ回りながら圧倒されている。これじゃどつちが捕まえる人か分からない。

「あー、リツラは普段穏やかですが、料理に関しては人一倍拘りを持っているので、それを盗っ人に奪われて憤慨しているのでしょう。」

「まあー！」

リツラはドタドタと足音を立てながら、フライパンをクルクル右手で振り回しながら、徐々に盗っ人の青年を追い込んでいく。セルテスも門のかんぬきの長い棒を持って、盗っ人を追い詰めていた。

「サリウス！回り込め！」

「分かった、クツルス。」

すると、リツラが振り回していたフライパンは手元をすっくと離れ、勢いよく宙を飛んだ。

ゴン！

クツルスの頭へ見事命中。気を失ったクツルスは地面に倒れ、サリウスとセルテスが心配する。

ガツン！

今度はセルテスの手から離れたかんぬきが、盗つ人の青年の顎へ見事命中。盗つ人の青年もクラクラして床に倒れた。すかさずリツラは盗つ人の身体へ全体重を乗せて取り押さえる。必死に逃げようと足掻いてる盗人であるが、さすがのリツラの体重を跳ね返すことはできなかつた。

「もう逃げられないわよ！」

「ハハハ、リツラ。倒す相手を間違つたようだな。セルテス、見事だつた。」

「いや…私は何も。」

サリウスは静かに盗つ人の所へ近付いて、リツラと交代して両手首を後ろ手に縛つて取り押さえる。未だにクツルスは気絶して倒れる。ひたいには徐々に大きなタンコブができてきた。

「クツルスの旦那は大丈夫だろうか？」

「そいつは昔から頭だけは頑丈だから平気さ、セルテス。」

だが、倒れたクツルスのそばで様子を見ているセルテスは心配そう。

「しかし、泡吹いてまっせ。」

「どれ？あ！本当だ。こんなの唾つけときゃ治るって、普段は豪語してるくせに…。肝心な時の、それもリツラのフライパンに負けるとは、クツルスもローマの男として情けない奴だ。」

「アハハハ…。すみません、つい手が滑って。」

サリウスはグイグイっと盗つ人立たせて、頬を二三度はたいて素性

を吐かせようとしている。

「おい！貴様。クロアカから我らの街にたむろしていた蛮族だな？
名前は何というんだ？」

「う…うう。」

「答える！貴様の名前は？！」

するとサリウスはその盗っ人に暴力訴えて、素性を吐かせようとする。

「パ…っす。」

「何だ?!」

「ギリシャのアルカディア王の末裔、パッラスだ…。」

その言葉に一同はビックリした。

続く

第四章「大母后と祖母」第四十三話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルスス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア(5 - 43年)年の差 + 10歳年上>
アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第四章「大母后と祖母」第四十四話

「いいかげんな事をぬかすな！貴様のような蛮族で見窄らしい格好をした盗人が、どうして、ギリシヤのアルカディア王末裔の血など引いてると言えるんだ?!」

「ケツ！平民以下のお前なんかにわかる訳無いだろうな！愚弄な護衛兵どもめ！」

「貴様！」

アントニア様はしかし、少しだけ何かを推敲している様子。その横で気絶したクツルスを看病しているリツラ。セルテスも青年の話に信用していない。

「なぜ?!わざわざアントニア様のドムスから、井戸の水やパンを盗んだ?」

「この金持ちは余りにも無防備だったからさ！丸い天窓からアトリウムを抜ければ、すぐに井戸はあるし、バカみたいにそこのおチビちゃんはインスラで桃を自慢げに丸かじりしてるしよ！」

おチビちゃんて…。あ、あたしの事だ。

「あんなのじゃ盗んでくださいよ！って言ってるようなもんだぜ！それにだ！平民以下のくせに、インスラに住む連中達は、井戸の水を俺達には近寄らせてもくれやしない！だから金持ちの家だったら井戸があると踏んだのさ！」

セルテスは、青年の話聞いて憤慨していた。

「こういう孤児どもは平気で人の物を盗むし、自分さえよければい

いという考えだ。まともに働きもしないくせに、自分の意見は一丁前。懲らしめる必要がありますよ、サリウスさん。」

「ああ、そうだな。」

「ふざけるな！俺の王族の血が、お前達を生涯呪うぞ！」

「まだそんな嘘をついて！アグリッピナ様の桃を奪ったくせに、更には呪いなどのたうちまわり！このセルテス、さすがに怒りを覚えました！」

「うるさい！黙れ！アルカディア王族の血は、ローマの皇族なんかより偉大なんだ！」

ようやくクツルスが起き上がった。

リッラは大きなタンコブを冷やし布で抑えてあげてる。セルテスはクツルスに近寄り、サリウスは冷静沈着に一つの提案をする。

「パッラスとかいう輩よ。貴様が本当にギリシャのアルカディア王族の血を受け継いでいる末裔というならば、その誇り高き精神を我らに見せてもらおうじゃないか……。」

「な、何……?!」

「貴様は、確かに皇族であるアントニア様のドムスに盗みに入ったのは間違いない。自分でも自白している。それなのに言い逃れをしてあわよくばそのまま逃げるつもりか？」

「!?!」

「王族の末裔である証として、盗みを犯したそれ相応の覚悟と代償を支払うべきだろう?」

大きなタンコブを抱えたままのクツルスは、パッラスを睨みつけながら、恐ろしく低い声で更なる提案をする。

「サリウスの言う通りだ。貴様のような蛮族で盗つ人を我が愛する街から出してしまっただけでも、あっしらはアントニア様に申し訳

が立たぬ。指の一本くらいは覚悟したらどうだ？」

ええ？！

しかし、アントニア様は何も言わずに何かを考えている。

「ケツ…！愚弄な平民以下の兵士ども！俺が指一本でビビってると思うなよ！王族の末裔として右腕の一本をくれてやらあ！感謝しろよ！」

「よし、いい心構えだ。サリウス、俺にやらせてくれ。」

私はこの青年が強がって言ってるのではない気がした。

「ただし、一つだけ頼みがある！」

「何だ？」

「俺には腹を空かせた弟と妹がいるんだ。そいつらに今夜の食いもンだけでも届けさせてくれ！」

あ！あの女の子と男の子の事だ…。

しかし、セルテスはこの青年を信用せずに、生意気な態度に怒りをぶつける。

「ふざけるな！誰がその手に引つかかるか？！そうやってまんまと逃げるつもりだろ？！それにお前が届けようとしているのは、アントニア様から盗んだ物ではないか！？」

「分かってる！だけどこれは本当なんだ！あいつらは俺がいないと飢え死にするんだ！お前ら平民以下の奴らに俺の腕の一本くらいやるんだから、それぐらいいいだろ？！」

「このガキは調子こいて！さあ！サリウスさん、クツルスさん、早く！」

「そうだな…クツルス。」

「ああ…。」

私は恐くなって思わずアントニア様へしがみつく。しかし、アントニア様はいつもと違って、無表情のままずっと目を瞑って考えている。

「ア、アントニア様…?」

するとアントニア様は、キリツと目を見開いて三人を制止してくれた。

「およしなさい!」

良かった…。

やっぱりアントニア様は優しいお方なんだ。

「パッラスとやら。貴方が本当にギリシャのアルカディア王の末裔であり、今夜、飢え死にするであろう妹や弟がいるのなら、彼らに食べ物を届けた後、彼らを連れて必ずここへ戻り、あなたの右腕を兄妹の前で差し出す事を約束なさい。」

ええええ?!

私はアントニア様が、もっとも冷酷だと思った。

続く

第四章「大母后と祖母」第四十四話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア(5 - 43年)年の差 + 10歳年上>

アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第四章「大母后と祖母」第四十五話

「アントニア様！こんな蛮族を信じてはいけません！こいつらの様なローマの面汚しには、見せしめが必要なんです！絶対にこいつは逃げます！」

「恐れながら、セルテスの言う通りでございますアントニア様。本当に覚悟があるなら、今、腕を切るのと同じ事！」

「黙りなさい！セルテス、サリウス！」

アントニア様は本当に険しい表情を見せた。

「皇族の血を引く私の名誉を穢すつもりですか？」

「いいえ！！そんなつもりはございません。」

「いいですか？！我がドムスの物では飽き足らず、ユリアが大母后リウイア様から頂いた”アウグスタの桃”までも、この者は我が一族を見下す様に奪ったのです。この者がアルカディア王族の末裔ならば、その覚悟はあるはず。それに私は、何もまんまとこの者を一人で逃すつもりは毛頭ありません。」

すると、アントニア様はクツルスに目で合図を送った。

「クツルス。貴方が、この者と一緒について行き、この者の兄妹達をここへ連れてきなさい。」

「あつしがですか？」

「ええ。彼らも王族の末裔ならば、兄の名誉ある生き様を見る事に戸惑いも躊躇も無いはずです。」

「分かりました。」

「いいですか？その代わり、決してその者や兄妹達に危害を加えてはなりません。分かりましたね？」

「分かりました。」

青年は下に俯いたまま困っている。

「それとも、やはりお前の語った事は嘘であったのか？パッラス。」
「違う！本当だ！」

「宜しい。それならば私のドムス内で起きた事は、いかなる人間であろうとも私の指示に従ってもらいましょう。以上！」

すると、パッラスは観念した様子で両肩をおろす。サリウスとクッルスはパッラスを縄で縛り始め、セルテスはアントニア様のお厳しい対応に恐れをなしていた。

「私は調べ物がありますので、決して寝室には入らないように。シツラとリツラは、ユリアと一階の寝室で一緒に待ってなさい。」

そう言うとアントニア様は駆け足で階段を昇り、自分の寝室へ閉じこもってしまった。私は心の何処かで、アントニア様がこの青年を許すのだろうと期待していた。けれども、現実には過酷な罰則を与えるのみ。

「さあ、アグリッピナ様……。」

「あー、私達と一緒に。」

私は連れて行かれてるパッラスのうなだれた背中を、哀れみの思いで見ている。だが、どこかで彼の目の輝きは消えてないようにも思えた。

「あー、それにしても、あの新しいフライパンは台無しになったね。」

「アハハ…。とっさに物音がしたときに掴んだのが、あのフライパンだったの。」

「あー、しかしさすがサリウス様だわ。あの蛮族の盗っ人がどのように入ってくるのか、ちゃんと予想していたのですから。」

「アハハ…。本当だ！」

「あー、でもクツルス様は、あんたの飛ばしたフライパンは予想出来なかったみたいね？」

「アツハハハハ！確かに！」

リツラとシツラはユーモアでなんとか重苦しい空気を和ませてくれるが、私はアントニア様の対応やパツラスの妹の事などと考えると、なぜか気持ちが沈む一方だった。そんな私にペロはヒョコヒョコついてきて、クーンと鳴いている。

” おにーたん、おにーたん。クルクル馬車やって。”

” ああイイよ、アクイリア。”

昼間に見た妹想いのパツラス。さっきとは別人の様に優しく、頼りにされているんだと。でもアントニア様は非情にも、その二人の目の前で…。想像しただけでもドルシツラと同じくらいの、あの女の子が泣き叫ぶのが目に浮かぶ。

「アグリツピナ様…？」

「あー、どうされました？」

「ううん、何でもない…。」

これが生まれ持った階級の運命なのかと思うと、私はいたたまれない気持ちでいっぱいになる。けれどもアントニア様の言う事は絶対。一族を愚弄する事は許されない事なのだ。罪は罰をもって制される。これはどこの国でも一緒なのかもしれない。

「ペロ…。」

ペロはしゃがんで、私の足元に頭を重ねて一緒にいてくれた。さすがのシツラやリツラも、私の気持ちに沈んでいる事にそつと距離を置いてくれた。しばらくの時間が経つと、ペロは外の方へ顔を向けて唸りだし、一目散で門の方へ行つて吠え出した。シツラもリツラもその後をついていく。

「さあ着いたぞ。」

「パツラス兄さん？ここはどこ？」

「おにーたん、おにーたん。どこ？」

「アクイリア…、イイから入りなさい。」

どうやらパツラスは自分の弟と妹を、クツルスと共に連れてきたみたい。私はこれから起きる事を考えると、恐くて恐くて一階の寝室から表へ出れなかった。

続く

第四章「大母后と祖母」第四十五話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルスス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア(5 - 43年)年の差 + 10歳年上>
アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第四章「大母后と祖母」第四十六話

「おにーたん…。」

「兄さん。」

パッラスはサリウスとクツルスに両肩を掴まれ、膝を床へつけさせられた。

「フェリックス、アキュリアの事は頼んだぞ。」

「どういう事だよ！？兄さん！」

「俺は、ギリシャのアルカディア王の末裔として、誇り高く死を選んだ。」

「お、おにーたん?!」

サリウスは、この後に及んでまだローマに愚弄を続けるパッラスに呆れていた。クツルスは、腫れ上がったタンコブを抑えながら、その眼差しは真剣そのもの。

「パッラスとやら…。別にお前の命までも奪うつもりはないぞ。」

「いや、いずれこんな日が来るのは分かった。あんた達の街を愚弄した分も入ってる。どうせなら、一気にやってくれ。俺たちの故郷アルカディアがローマに落とされた時からの覚悟だ！」

「とても勇敢で、高貴な覚悟だ。だが、アントニア様がお前に与えたせめてもの慈悲だ。感謝しろよ。」

「アントニア様…か。」

ちょうど書物を眺めながら、アントニア様が二階から降りてきている。パッラスの弟と妹はセルテスにすっかり抑えられ、事の重大さに叫んでいる。弟は自分が身代わりになるといい、妹はおにーたん、

おにーたんと泣き叫び続けている。

「お前達！静かにしろ！」

二人はパツラスの張り裂ける声に身体をビクつかせた。クツルスはサリウスの合図で短刀を取り出し、パツラスの右肩上に短刀の先を乗せる。

「フェリックス…。アキリアには、クルクル馬車…やってあげるんだぞ。」

クルクル馬車…？

この前見た右腕に妹を乗せる遊び。あの優しい眼差し。クツルスは短刀をググつと握り返し、左手で肩を抑える。

「いくぞ…。」

「アルカディアの名にかけて！この命を捧げる！」

自分の意思なのか、それとももつと違う何かだったのか？血脈といえは安易に聞こえるかもしれない。

「待ちなさい！」

体全体が魂で揺さぶられ、私は気が付くとサリウスとクツルスへ制止するよう叫んでいた。自然と出てきた言葉に、ただ辺りにいる全ての人間は驚いている。

「ア、アグリッピナ…様？」

「大母后様から頂いた”アウグスタの桃”は、このパツラスとやらへ、私、自らが与えたのです。その事に関しては、彼には罪は問わ

れる必要はありません!」

「しかし、アグリッピナ様?」

私は彼らを見殺しにして、書物を持っているアントニア様へ彼らの代わりに膝まづいて懇願した。

「アントニア様…。どうか、このパツラスに御慈悲をお与えできませんでしょうか?」

「アグリッピナ、それはどういう事です?」

アントニア様は書物を眺めたまま、この時から初めて、私を愛称ではなく大人としての名前ですっきりと呼んでくれた。

「故郷では誇り高き者たちだったのであるならば、彼らの血でアントニア様のドムスを穢す事で罰するよりも、彼らの流した汗で、アントニア様へ奉仕する事で罰したほうが、彼らの為にもなり、また、アントニア様の為にもなると考えるからです。」

サリウスもクツルスも、幼い私の言葉使いにビックリし、シッラもリッラも、小鳥が頭に乗っかっても気がつかないほど呆然としている。ただ、一人を除いて。

「アッハハハハ!」

突然アントニア様は大声を出して笑い転げてしまった。私は何だかよくわからないまま。

「ごめんなさいね、アグリッピナ。あまりにも言い回し方が大母后リウイア様そっくりだったから、笑っちゃった。」

「大母后リウイア…様に?」

ようやく書物から目を離れたアントニア様は微笑んでいた。

「やっと見つかった!!」

「へ?」

「ごめんなさいね、サリウスとクツルス。騙すつもりは無かったんだけど、時間稼ぎをして欲しかったの。二人とも、パッラスを離さない。」

サリウスとクツルスはアントニア様の命に従って、取り押さえられていたパッラスを離す。だが、一番びっくりしているのは、二人に離されたパッラス自身だった。

「パッラス、貴方は元々私の所へ来るはずだったのよ。」

「え?!」

「ほら、ここの書簡にしっかりと貴方の事が書かれているの。アルカディアの末裔と聞いてピーンときたのよ。確かうちで雇うはずの奴隷が二ヶ月前に逃げたのを。その貴方が私の家から盗みに入ってたなんて、なんてお笑いなのかしら。」

パッラスもフェリックスも、そしてアクイリアも事の重大さに気づいていない。

「まあ、私としては本当に王族の末裔であるかの覚悟も見たかったので、ギリギリまで待つつもりだったけれど。まさか、桃を”貰った”アグリッピナに貴方が助けられるとはね。」

「…。」

「どう?パッラス。その救われた命を大切にして、アグリッピナちゃんと言ったように、この家で働くつもりはない?」

私は嬉しくなって、アントニア様へ笑顔を見せた。

「もちろん、貴方達三人一緒よ！」

続く

第四章「大母后と祖母」第四十六話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルスス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
上>

アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス（紀元前12年 - 63年）年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ（17年 - 30年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后（紀元前58年 - 29年）年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝（紀元前42年 - 37年）年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス（紀元前14年 - 23年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア（5 - 43年）年の差 + 10歳年上>
アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第四章「大母后と祖母」第四十七話

「結局、奴隷として働くのだろうか？」

「ええ、当たり前じゃない。」

「嫌だと断つても選択肢は無いんだろう？」

「いいえ、あるわよ。奴隷が嫌だと言うなら好きになさい。ただし、今度捕まった時はただでは済まされないうでしょう。ねえ？サリウス、クツルス？」

「はい。」

「それは当然だ。」

アントニア様は微笑みながら、パツラスの反抗的な態度を交わした。もちろん、サリウスもクツルスも短刀に手をつけている。

「そこのおチビちゃんも毎日お腹を空かしているようだし、あなたの名誉に重きを考えるよりも、どんな形であれ、三人一緒に生きていられるほうが、今よりもまだ幸せじゃないかしら？」

パツラスはアクイリアという妹を優しく眺めると、みすばらしい衣服を纏いながら兄を慕う彼女の姿があった。彼は二度頷き、ようやく狂犬としての牙を抜いた。

「分かりました、アントニア様。」

「宜しい…。」

アントニア様は、私に微笑んでウィンクしてくれた。そして再び書物を確認しながら

「セルテス、シツラ、リツラ。彼らになすべき事を一から叩き込み

なさい。」

三人はアントニア様の命に従って、彼らを奴隷の住む寝室へ連れて行く。サリウスもクツルスも、念のために彼らの後に着いていく。その様子を眺めているアントニア様は、書物を片手に満足そうな顔を見せていた。

「アントニア様。身勝手な行動、お許しください。」

「いいのよ、アグリッピナ。それにしても今日は良くできました。」
「？」

「さすが！あの女狐に毎日教育されてるだけあるわ。大母后リウィア様のスパルタ教育も伊達ではなさそうね。双方をたてる寛容の精神、見応えたつぶりだったから。でもアグリッピナは、本当は、あのおチビちゃんを助けたかったのでしょうか？」

「それは…その。」
「いいのよ。それでも感情的にならず、理論的に解決策に導けたのだから合格点よ。」

「はい！ありがとうございます。」

アントニア様は、私の言い方が大母后様にそっくりと仰っていただけだいたけど、これはゲルマニクスお父様の事を思い出し、しいてはアントニア様の人道主義の精神があったから。

「ほら、おチビちゃんに挨拶してらっしゃい。お話したいんじゃない？」

「はい！」

アントニア様は本当に本当に何でも見抜いていた。幼い私の寂しい心を、まるで水のせせらぎで流すように。

「いいかい？アキュリア、フェリックス。これから僕達三人は、この主人であるアントニア様の元で暮らす事になるんだ。今までの様にワガママは言えないけど、一生懸命にアントニア様へ尽くす事だけを考えて、常にアントニア様へ感謝の想いを忘れずにいよう。」

「はい、お兄様。」

「あい！おにーたん。」

三人の慎ましく平和的な姿を眺めていると、私も家族と離れて独りで過ごしている今の現状に、ちよっぴり寂しさが募ってきた。それに気が付いたサリウスは、みんなに私の存在を知らしめるため、自ら先導を切って語り始める。

「パッラス。今日のお前の命はもちろんアントニア様の意思もあるだろうが、その立役者は、このアグリッピナ様である事を、深く心に刻まなければなるまい。」

「…。」

「アグリッピナ様の寛容の精神は、お前だけでなく、残り二人の兄妹も救ったのだから。まずは、礼を言うべき相手は、”アウグスタの桃”をお前達に”与えた”このお方からじゃないか？」

パッラスは私を見るに、目つきは厳しく表情は険しかったが、サリウスの言葉に従った。

「はい…。アグリッピナ様、本当に心から感謝しております。」

「アグリッピナ様、ありがとうございます。」

しかしアキュリアは何も言わず、ジッと私を怖がって見つめている。そんな彼女に対して、私は今まで自分の為にしゃがんで同じ目線で接してくれた大人達のように、彼女の目線に合わせてしゃがんで、アキュリアに微笑みを浮かべながら声をかけてみる。

「アクリリア、これからよろしくね。」

すると彼女はとつても輝くような笑顔を浮かべて、私に可愛く頷いてくれた。これが幼くしてこの世を去った、とつても愛らしい奴隷アクリリアの笑顔との出会いだった…。

続く

第四章「大母后と祖母」第四十七話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア(5 - 43年)年の差 + 10歳年上>

アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年-62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年-69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第四章「大母后と祖母」第四十八話

「おねーたん、おねーたん。桃は？桃は？」

「こら、アクイリア。身分をわきまえなさい。それに、アグリッピナ様だろ？」

「…ごめんなさい、おにーたん。」

「いいよ、そのまま平気だから、フェリックス。」

「すみません、アグリッピナ様。」

「アクイリアには身分なんて分からないでしょうし、それにアクイリアは桃が、大好物なんだもんね〜！」

「うん！桃〜！」

私はアントニア様の真似をして、アクイリアをコチヨコチヨの刑にした。彼女もキャツキャ笑って喜んで。お腹へのブーは、私と一緒に笑いが止まらなくなるほど。

「アグリッピナ様、どうして僕らを助けてくださったのですか？」

「うん、フェリックス。やっぱり独りだと寂しかったからかな。」

「アグリッピナ様も寂しいのですか？」

「そうだね…。」

フェリックスは将来から考えられないほど、この頃は何でも興味を持ってた純粋な男の子だった。それに比べ、兄のパッラスは…全く。将来には考えられないほど、この頃は奴隷のくせに反抗的で、あるきっかけがなければ、ずっと私とは犬猿の仲だったかもしれない。

「こら、フェリックス。俺達は奴隷なのだから、むやみにアグリッピナ様に話しかけるな。」

「はい、兄さん。」

「いいじゃない、パッラス。私が話したいのだから。」

「いえいえ、そういう訳には。私達には仕事があるのですから。」

「ちよつと！それじゃまるで、私が仕事中の奴隷に話しかけるなって言われてるみたいじゃない！」

「そんな事は一切言っておりません、アグリッピナ様。思い過ごしでございます。」

年が上だからって…。

すると必ずクツルスからパッラスヘゲンコツが落ちる。

「痛っ〜！」

「おい！お前はアグリッピナ様に対し、何という反抗的で無礼な態度をしているんだ！」

「す、すみません、クツルスさん。」

「いくらアグリッピナ様が年下でも、お前の主人である事には変わらないのだから、お前こそ身分をわきまえるべきだ！」

「はい…。」

「べ〜っだ！」

多分、パッラスとの兄妹喧嘩のようなやり取りは、寂しさを紛らわす意味でもそれはそれで重要だったかもしれない。彼ら三人が奴隷として来てからアントニア様のドムスも賑やかになり、とつても愉しくなっていた。私は大母后リウイア様のスパルタ教室へ行くときも彼ら三人を引き連れ、寄り道は決まってクツルスとセリウスのインストラ。

「それにしても、あんた…いや、アグリッピナ様はこのインストラが大好きだな？」

「そうね、最初は野蛮で汚くてくっさい所って思ったけれど、あんに桃を取られてから、だんだんと好きになってきちゃった。」

「嘘だろ？意外にあんたは大人に気を遣うから、サリウスさんやクツルスさんの息抜きの為にも、わざわざここに来てるんだろ？あんた大人の平民に気を遣うなって。」

何なの？

この生意気な言い方は。

「あんたは奴隷なら、主人である私にその言葉の使い方に気を遣うたら？」

「ハイハイ。でもな、俺だってギリシャのアルカディアの時にはなあ。」

「農奴を持ってたつて言うんでしょ？あんたつて、いつもワンパターンの。」

「ケツ！これだからローマの女は嫌いだ！」

「ふん！」

パッラスとはいつも平行線だったが、この日を境にパッラスは私のことを認める事になる。そう、それは私がお兄様達よりも最も得意としていたものだった。

「どうせ、お姫様のおんたは、高い所とか自分独りで登った事無いんだろ？」

「あら？奴隷は木登りが得意で、私達皇族は木登りが下手でも？」

「ああ、やれるもんならやってみなって。その木があるから、そこからインストラのポルティコに登ってみるよ。」

私はポルティコまでの距離を確かめて、タヴェルナの壁に積み上げられた無数の混酒器であるクラーテールを足場に、これならいけると確信してソツクルを脱いでパッラスに渡した。

「お、おい！まさか木を使わずに登るのかよ？」

「大丈夫、私にはお母様からいただいたお守りのブルラがあるから。」

ストラも脱いで綺麗にたたんで、チュニカの裾を腰まで捲り、腰紐でギュツと縛って、跳ねるようにポーンポーンとポルティコまで軽々と登った。

「すごい…。」

「結構気持ち良いのね。ねえねえ、パツラス！何ならこの木のてっぺんまで登って見せようか？」

「ええ?!」

私はパツラスが答える間も無く、生来の木登り好きの血が騒ぎ、気が付くと、リウイア様の所で身体を鍛えられて腕力もそれなりについていたらしく、ひよいひよいつとてっぺんまで登っていった。高さは大体インストラの二階程度。

「どう？パツラス、これでもまだ文句ある？」

「俺が悪かったです！アグリツピナ様！危ないから、早く降りて来て下さい!!」

「べ〜っだ！あんたも登ってきなさいよ、パツラス！」

「こんなところ、サリウスやクツルスの旦那に見つかっちゃったら、また雷が…。」

「サリウスー！クツルスー！助けてー！パツラスが私をいじめるの！」

「あ、きたねえ！」

どうやら昔っから、高い所に登ると私はお転婆になってしまっらしい。案の定、勘違いしたサリウスとクツルスの2人にパツラスはこ

じびびく怒らねていた。

続く

第四章「大母后と祖母」第四十八話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス（紀元前12年 - 63年）年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ（17年 - 30年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后（紀元前58年 - 29年）年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝（紀元前42年 - 37年）年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス（紀元前14年 - 23年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア（5 - 43年）年の差 + 10歳年上>
アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年-62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年-69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第四章「大母后と祖母」第四十九話

怒られたのはパッラスだけではなかった。サリウスもクツルスも、そして私も。原因はやっぱり私の木登り。街中の人が目撃してしまつたから。

「もう！あんた達は何やってるの！？」

さすがに怒髪天のアントニア様は、インストラへ寄り道するのを暫く禁止した。さすがにサリウスやクツルスも、お咎めを受けて猛省してる。

「アグリッピナ様、しっかしあんなに木登りが上手だなんて、僕驚いたよ。」

「でしょ？フェリックス。兄妹の中でもガイウスお兄様よりも誰よりも上手いんだから！」

「あ！僕知ってる。ガイウスお兄様って、カリグラ様って言われてるお兄様でしょ？カリグラ様よりも木登りが上手なの？」

「そう！」

「すっごいな〜。」

「へへ〜ん。」

ゴン！

痛い！誰？あ！アントニア様。

「こら！アグリッピナ。へへ〜んじゃありません。木登りなんか危ないから、自慢げになるんじゃないありません。」

後ろからやってくるのがアントニア様。本当にこの人は地獄耳。そ

の後はキツくこつてり絞られる。どうやらアントニア様は、お母様からくれぐれも私に木登りだけはさせないでくれと言われていたみたい。その話を大母后様のリウイア様へ話をすると、アントニア様の事を鼻で笑っていた。

「アハハハハ！アントニアだつて、昔は木登りばかりしてたんだから人の事言えないのに。」

「本当ですか?!」

「あら、聞いてないの？それじゃ教えてあげる。あの子は昔っから不思議な子で、本気で空を鳥のように飛べるって思つてて、空飛べない事を理解するまで相当時間掛かったんだから。まだまだ、木登りで競い合つてるアグリツピナの方が現実的でマシよ。」

さすが、アントニア様。

ウツボに首飾りをさせていただけある…。

「フッフ…。それに、日々の鍛錬を毎日欠かさず行っていたんだから、そのぐらいの高さじゃ全然物足りなかつたんじゃないかしら？」

「はい、もつと高い所まで登つてみたいと思いました。」

「いい子ねえ。そのうち嫌でも高い所に登れる日が来るから大丈夫よ。」

大母后リウイア様の予言は本当的中した。それが木登りで無い事は確かなのだが…。所で、大母后リウイア様はいつもピッツィノ葡萄酒を愛飲されていた。後に側近から聞いた事によると、どんな時にでも欠かさず飲んでいたんだとかで、美容だけではなく健康にもいい葡萄酒。ゲルマニクスお父様、リウイツラ叔母様、クラウディウス叔父様も、そしてテイベリウス皇帝陛下やその長男であるドルスス叔父様も、幼いころから風邪を引くたびにハーブかピッツィノ葡萄酒を飲まされてたらしい。

「リウイア様。その葡萄酒、とても美味しそうですね。」
「フフフ…。相変わらず何でも興味があるのね、飲んでみる？」
「はい！」

その葡萄酒は、アドリア湾岸へ流れゆくティマウス河水源近くの、岩山の上で栽培された新鮮で栄養分たっぷりの葡萄から採られており、時には医療目的にも利用されているとのこと。

「？つ…。大人の味デスね。」

「仕方ないわよ、貴女はまだまだ子供なのだから。でも、大きくなったら、できるだけ飲むだけ飲むようになさい。」

「はい！」

「今日はいつもの桃ではなく、そのピッツィノの葡萄を持って行きなさい。奴隷のおチビちゃんもきつと喜ぶでしょう。」

多くの人は大母后リウイア様は抜け目の無い、威圧的で冷たいお方だと語る。しかし、それは国家の母の外観を語っているに過ぎず、私の幼い頃から見てきた大母后リウイア様は、寛大な心とユーモアもすっかり持ち合わせ、それでいてどんな時にでも努力を怠らない素敵な女性である。そして今でもアウグストウス様を心よりしっかりと愛されていらっしやるお方。

「アングツピナ様。今日もおとうかれーさまでした！」

「アラまあ！よく言えましたんね、アクリリアちゃん、はい、今日は葡萄を貰ってきたんだよ。」

「うわーっ！すごい。」

「北の方から取れた、とっても美味しいぶどうよ。」

「おいちいー！」

アクイリアは、私にとって初めて自分の身の回りの世話をしてくれる奴隷のはずだったのだが……。妹のドルシツラそっくりなその愛らしい姿に、私は身分や隔たり無く接してしまった。そして、ようやくアクイリアが私の名前を辛うじて言えるようになった頃、あの悲しい事件が私達に訪れてくる。この事件をキツカケにアントニア様はこのドムスを離れ、元々住んでらしたパラティヌスのドムスへお戻りにもなるのだ。

「アグリッピナ。ちょっと悪いんだけど、クラウディウスの所へお使いしてくれないかしら？」

「クラウディウス叔父様の所へですね？」

「ええ。全くあの子は足が悪いから、なかなかこっちへ来るのも大変でしょう？ パッラス、フェリックス。貴方達も一緒にアグリッピナへ着いていきなさい。サリウス、みんなをお願い。私は今日はお客様が来るから忙しくて、アグリッピナ、よろしくね。」

「はい！」

私は一人残されたアクイリアにすっかりとお留守番するように事付けをしなかった。本当にあの時、なぜアクイリアも連れて行かなかったのか、私は大人になっても今でもずっと後悔している。

続く

第四章「大母后と祖母」第四十九話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルスス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス（紀元前12年 - 63年）年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ（17年 - 30年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后（紀元前58年 - 29年）年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝（紀元前42年 - 37年）年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス（紀元前14年 - 23年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア（5 - 43年）年の差 + 10歳年上>
アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第四章「大母后と祖母」第五十話

騎士階級であるエクイテスのクラウディウス叔父様。身体に障害をお持ちのため、政治的な事からは離れてらっしゃるが、生真面目で勤勉でとても優しくかった。

「こんにちわ、アグリッピナ。」

「こんにちわ、クラウディウス叔父様。」

「こないだよりは随分と大きくなつたね？」

「ありがとうございます。」

「大母后リウィア様の所で、色々教わってるそうだね？」

「はい。」

アントニア様とクラウディウス叔父様が一緒に住まれてなかったの
で、家族から疎ましい存在であつたと色々な人が噂にしていたが、
実際のクラウディウス叔父様は、ご自分で自ら引き下がる人であり、
いざという時には家族の為に無理をされる勇敢な方であつた。

「アグリッピナ、これは奴隷で私の召使も兼ねてるナルキッスス。」

ナルキッススは何も言わず一礼し、私もアントニア様のパツラスと
フェリックスを紹介した。彼らも何も言わずに一礼した。叔父様が
住まれている所はアントニア様のようにドムスなのだが、自分の研
究の書物を保管する場所として空きになったインストラを利用して
いる。

「今日は母上も忙しいみたいで、色々大変なのでしょう。」

「はい、その為にお使いにきました。」

「本当にお利口だな、アグリッピナは。」

グツと優しく微笑んで、私の頭を優しく撫でてくれた。私は微笑みながら、アントニア様に渡された書簡を叔父様へ渡す。

「ふむふむ、なるほどな。そっかそっか、しかしそれにはあれが必要になるのだが…。」

「叔父様？」

「うん？いやね、母上が用意して欲しい物が、今はここに無いのだが、多分もう少ししたら届くだろう。それまで、ここで待っていてくれないかい？」

「分かりました。」

叔父様はジツと書物を読みながら色々書きものをされて、私は叔父様が収集されている書物を眺めて静かに待っていた。そんな私を気遣って、フェリックスは時折私に話しかけて冗談を言ってくれた。するとナルキッススは険しい顔で、パツラスとフェリックスを諫めてきた。

「おい！主人と立場を入れ替えるサートウルナーリア祭でも無いのに、奴隷がそんな対等な会話をしていいと思ってるのか？」

「なんだと？お前も奴隷じゃないか。偉そうに指図するな。」

「ケツ！その訛りはアルカディアだろう？同じギリシヤ人奴隷のくせに、プライドだけ高いな？！」

「なんだと?!」

その声に気が付いたクラウディウス叔父様は、こつちを向きながらパツラスとナルキッスを止める。

「まあまあ、やめなさい。ナルキッスス、奴隷をどのように扱うかは、それぞれ主人の自由意志だ。」

「しかしクラウディウス様、恐れながら身分をわきまえない奴隷は、奴隷としての価値が無いに等しいと思われます。一度奴隷となった場合には、如何なる場合でも身分をわきまえて行動し、言動することを順守するのが決まりかと…。」

「別に決まっている訳ではないのだよ。君は前にいたアエノバルブス家でそのように教わったのかもしれないが、私はもっと君達奴隷には寛容的であるべきだと思っている。ナルキッスス、君だってもっと頑張れば解放奴隷として扱いたいもんだな。」

「え？私を解放奴隷としてですか?!」

「ああ。昨日戦った敵は、今日の友となるのが、本来、人間として互いに共存共栄できるあるべき姿ではなかるうか?」

ここでも、やっぱりアントニア様の教えがしつかりと守られている。奴隷を物言わぬ道具などとは一切考えていない。特にクラウディウス叔父様は、ご自身が身体に障害を持っているからこそ劣等感に対して人一倍寛容なのかもしれない。

「しかし、パッラスとか言ったね？君のギリシャ訛りは美しいな。少し地元の言葉を喋ってくれないかな?」

パッラスは突然ギリシャ語を話し出した。叔父様も何とかついて行くのが精一杯なほど。私はパッラスが単なる奴隷で無い事は分かっていたけど、やっぱり言葉を喋るとまるで違つてるように見えてくる。言葉の響きとは、自然とその人の品の良さまで表すようだ。でも、またラテン語に戻ると、生意気な態度になるのがパッラス。

「それにしても… ドミティウス様は相変わらず遅い方だ。」

叔父様の言葉に肩をビクつかせたのは、誰よりもその名前におびえたナルキッススだ。

「ク、クラウドイウス様？ドミティウス様って…?!」

「そうさ、今こちらに向かってらっしゃるのは、ナルキッスス。君の元主人だったアエノバルブス家のドミティウス様だよ。」

そう、私はこのときに、将来の政敵となるナルキッススと三番目の旦那になるクラウドイウス叔父様と一緒に、将来私が初めて結婚した一番目の旦那のお父様と出会っていたのだ。

続く

第四章「大母后と祖母」第五十話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>

アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア(5 - 43年)年の差 + 10歳年上>
アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第四章「大母后と祖母」第五十一話

「うん？どうやらドミティウス様が着いたみたいだな。」

外の方では馬車の忙しない音が聞こえるが、パッラスはあんまり浮かない顔をしている。

「ねえねえ、兄さん。今つて馬車通つていいの？」

「いいや。市内には日昇時から日没時まで馬車の乗り入れは禁止されているはずだ。」

「つまり…日中は馬車で市内を通っちゃいけないんだよね？」

「ああ…。それなのに、うん？この音は、まさか、二輪馬車？」

震えたナルキッススが、パッラス達の会話を聞いて止めに入った。

「おい、パッラスとか。お前、ドミティウス様に余計な事を抜かすなよ。お前らの命なんて、ドミティウス様からしたら八工の命にもなりやしないんだからな。」

「…。」

クラウディウス叔父様も、あんまり良い顔をされていない。しかし家族や親戚の付き合いは怠つてはならない。アエノバルブス家のルキウス・ドミティウスは、祖母であるアントニア様のお姉様の旦那様なのだから。

「よゝ！クラウディウス。待たせたな！いつへっへっへ。今日も野獣どもが人肉を食い荒らしてたわ。」

まるで樽のような腹に、垂れ下がったアゴ、そして似つかわしくな

い外衣のトーガ。この品の無い人物が服に負けてしまってる。勿体無い。

「わざわざのご足労、ありがとうございます、ドミティウス様。」
「いつへっへっへ。イイって事さ、うちの家内は今日も忙しいらしくな。それよりもクラウディウス。急遽で悪いのだが、5千セステルティウスほど貸してくれないか？」

5千セステルティウスといえば、ローマ市内で暮らす家族4人、奴隷2人の年間食費。ドミティウスって人は相当な浪費家だった。

「これはまた、急な話ですな。」

「明日は奴隷どもの剣闘士と猛獣シヨールを闇開催するんだが、ちと友人と賭けをする事になつてな。その掛け金が足りないという訳だ。」

「なるほど。ナルキッスス例の物を。」

叔父様はしつかり者だった。既にドミティウスがやってくる時点で、返済無期限の融資させられる事を分かってらっしゃった。

「残念ながら、今のところ用意だてできるのは4千500になります。ですが、いかがでしょうか？」

「何？足りんのか。何とかならんか？」

「残念ながら……。」

ナルキッススは必死にこちらに向かって顔を隠すように怯えていた。

「うん？お前？うちで飼っていた、あのウスノロか？」

ビクついた。

そして、蒼ざめた顔を上げてドミティウスの方へ向くと、コックリ頷いた。

「何だ、まだ生きていたのか。そうだ！クラウディウス。足りない分は、こいつをもらっていくのはどうだ？」

「と、申しますと？」

「このウスノロの奴隷なら、猛獣ショーでは楽しめそうだ。」

しかしクラウディウス叔父様は険しい眼差しでドミティウスに向かって、足を引きずりながら歩いていった。

「ドミティウス様、ナルキッススは私が手塩にかけて育てている奴隷です。彼がいなければ、私は何一つできません。どうか、このクラウディウスからこれ以上手足を奪わないでいただけませんか？」

その気迫は、普段穏やかな叔父様の雰囲気を一気に吹き飛ばす物だった。さすがにドミティウスも観念したよう諦めたご様子。

「仕方ないな……。しかし金が足りんと、話にならんからな。」

そして辺りを物色し始めると、今度はパッラスとフェリックスの二人に標的がいった。

「なんだ、ここにもあまり物が2つもあるじゃないか！」

私の存在など無視されている。

そして余りにも暴力的なドミティウスの発言に、みんなが圧倒されていた。

「一匹のウスノロより、二匹のすばしっこいネズミの方が愉しめる

な。」

「ドミティウス様、そちらの奴隷達はうちの母上の所有するものです。」

「つまり！俺の家内の妹のもんだろ？お前の手足ではない訳だあな？！え？クラウディウスよ！」

「…！？」

「あの家内の妹のアントニアには、俺から言っておけば良いはずだろおが?!」

この時のドミティウスは、恐ろしい形相を見せていた。さっきの叔父様が牽制した態度に、実はプライドの高いドミティウスは既に憤慨していたのだ。一度は引き下がったのは、圧倒的な態度と金の為だった。

「安心しろ、ネズミども。たっぷりオリブオイルを塗りたくって、ライオンに放り投げてやるからな、いっへっへっへ。」

続く

第四章「大母后と祖母」第五十一話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルスス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>

アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア(5 - 43年)年の差 + 10歳年上>

アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第四章「大母后と祖母」第五十二話

「やめてください!」

「うん?」

獣の様に鼻息を荒くしたドミティウスが、こちらに気が付いた。

「そのもの達は私の為に雇われた奴隷です。ドミティウス様のお目にかかるような価値のあるものではございません。」

「お前は…誰だ?」

「彼女はユリア・アグリッピナ。兄のゲルマニクスと、アグリッパ様の血を受け継いでるウィプサニアの長女です。」

クラウディウス叔父様はわざわざそのような言い回しをしてくれた。だが、このドミティウスには通じなかった。

「なぐんだ。あのクソ生意気なゲルマニクスの長女か?俺の親友がほとほと奴の頑固さに困っていてよ、全く可哀想だったらありやしないんだ。ピソって言うんだけど、お前さんなら知ってるよな?」

まさか!

ピソって。お父様と断絶緊張状態にある、あのシリア属州の総督ピソ?!

「良い所に会ったのかもしれないな。ゲルマニクスに恥をかかされっぱなしのピソの慰めの代わりに、その奴隷達は俺がもらっていく。」

世の中には自分の理屈が全て正しく、ケダモノの様な魂しかないのに、やたらと頭が切れる人種がいる。このドミティウスと、いずれ

私の一番目の旦那になるドミティウスの息子がそうだった。こうなると手の施しようがない。例え血脈があるうとも、彼らは自分の飢えた心を満足させるまでは、あらゆる理屈を重ねて牙をむき出している。

「サリウス！」

私は自分の恐怖を切り裂く様に叫んだ。その声にドミティウスも気付いてこっちに向かってくる。だが、それよりも先に現れたのが几帳面なサリウスだった。

「お前は何者だ?!この私が誰であるか知つての事か?」

「恐れながら、私達は国家の母である”アウグスタ”様に使えていたものでございます。」

「だからどうしたと言つのだ?!貴様、このワシに身分をちらつかせるつもりか?!」

「いいえ、とんでもございません。」

「イイか!ワシは按察官のアエディリス、法務官であるプラエトル、そして3年前には執政官であるコンスルの官職に就任したのだぞ!二匹の奴隷を持っていくぐらい、お前の様な輩に何かを言われる筋合いはない!」

「確かにドミティウス様の仰る通りでございます。」

もう、さすがのサリウスも窮地に追い込まれた様に見えた。

「だが、しかし…。今回は、大母后様より”アグリッピナ様に関わるあらゆる妨害は…実力でこれを排除しろ”と命を受けております。」

「なに?」

するとクツルスがノツシノツシと入って来た。やっぱり私の事が心配で着いて来てくれたんだ！

「ドミティウス様。言っている意味がお分かりでしょうか？」あらゆる『妨害』は、『実力』でこれを排除しろ”という事です…。」

さすがクツルスの巨大な身体は、ドミティウスのだらしない身体を軽々凌駕し、静かに睨みを効かせてる。そして最後にクラウディウス叔父様も、機転を効かせてある提案をした。

「ドミティウス様…。如何でしょうか？先月と先々月にお貸しした3千セステルティウスの返済を無しにする条件で、本日はこの場をお納めいただけませんかでしょうか？」

しかしドミティウスは何も答えない。借りた事などしらを切るつもりなのだろうか。

「では、仕方がありません。この事は白日の元に…。」

「まあ待て！」

ドミティウスはそれは困るといったような表情でクラウディウスに懇願し始めた。

「分かった、分かった。今日はその分だけで良い。そのかわり、本当に返済しなくて良いのだな？」

「はい。」

「へっへっへっへ。クラウディウス…。お前は随分キトクな奴だなあ。いっへっへ。イイだろう。おい、ウスノロ！お前が馬車に運ぶんだ！」

「え?!」

ナルキツスは動揺していたが、クラウディウスは首を横に振り、クツルスに対処しよう命じた。

「あつしがお持ちますよ、ドミティウス様……。」

クツルスの険しい眼差しと身体は、奴隷達三人の壁となった。

「……。腑抜けた野郎共だ！このローマが！過去何度も腐った奴隷共の手によつて、弱体化された事を忘れたわけではあるまいな！！？イイか？！奴隷は奴隷だ！物言わぬ道具だ！戦利品にも、飼いならず事も我慢ならぬ存在だ！お前らのやつてる事は立派な反逆罪だ！忘れるな！」

私は幼く無垢な自分だった。

欲望を抑えきれない人間の皮を被った獣が押さえつけられた時、弾き出された欲望は、新たな命を奪い犠牲者を生む事を、まだ何も知らなかった。

続く

第四章「大母后と祖母」第五十二話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>

アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス（紀元前12年 - 63年）年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ（17年 - 30年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后（紀元前58年 - 29年）年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝（紀元前42年 - 37年）年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス（紀元前14年 - 23年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア（5 - 43年）年の差 + 10歳年上>
アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第四章「大母后と祖母」第五十三話

「お前達二人が素直にドミティウス様に従っていれば、うちの旦那様もアグリッピナ様も、あんな風に批難の対象にされる事はなかつたんだぞ！」

「何だと？ナルキッスス！身勝手な事を言うんじゃないか！」

「身勝手だと？お前達の方が身勝手じゃないか！ギリシヤ人種は重宝されるからって、調子に乗ってるんじゃないよ。」

「元はといえば、お前がクラウディウス様に迷惑をかけて、更にはアグリッピナ様にも迷惑をかけたんじゃないか！」

「けっ！好きに言ってるがイイ。しかしドミティウス様は絶対にお前達の顔は忘れないからな。」

ナルキッススとパッラスは同じ年齢同士でいがみ合っていた。横では心配そうにフェリックスが眺めている。

「ナルキッススとやら、もうその辺でイイだろう。」

「クツ…。はい、クツルスさん。」

「ドミティウス様は確かに身分の高いお方だ。だが、己の欲望の為に他人の物を奪うのは、些か度が過ぎていると言えよう。」

当時、アウグストゥス様が亡くなって五年が経ち、一切の娯楽を禁じたティベリウス様の厳しい引き締め政策の中、微妙な均等で平和が維持されている帝国において、人々の野生的な本能が、少しずつ芽を出していたのは確かであった。

「ではアグリッピナ、この品を母上に。」

「はい、お届けします。」

「大丈夫だとは思いますが、くれぐれも気を付けなさい。」

「叔父様、ありがとうございます。」

「本当に大きくなった。今は一人で寂しい時もあるけど、そんな時には、色々な書物を読むといい。世界が知らずに変わって行く事に気が付くだろうからね。」

「はい、今度読んでみます。」

私達五人は叔父様のインスラからゆっくりと帰っていった。パツラスとフェリックスは大切に品物を持つてる。ようやく気分がだいぶ落ち着いてきた二人だが、私は帰る道中、変な胸騒ぎがした。そしてそれは、慌てているシツラとリツラの二人の大きな声で、的中してしまった。

「あー、アグリッピナ様!!!」

「アワワワ! たたた大変です!!!」

胸騒ぎは身体中をゾワゾワとさせていた。

「ど、どうしたのですか?」

「アワワワ、アキリアちゃんがいなくなったのです!」

「ええ?!」

パツラスもフェリックスも茫然自失となった。あいにくアントニア様はお出かけ中との事。

「ど、どうでしょう?!」

「セルテスや他の者達は誰も見てないのですか?!」

「あー、私達がアントニア様から料理の事付を受けて作ってる間は、ペロと仲良く遊んでいたようなのですが…。」

「セルテスは?!」

「いいえ誰も見かけてないです。」

「そんな！」

パッラスとフェリックスは自分達奴隷の寝室に駆け足で戻り、アクイリアを大声で名前と呼んでみたが、出てくる気配はなかった。

「セルテスが見かけてないとするれば、まずオモテに勝手に出られる訳がない。」

「アントニア様が出かけた時にひよろつと外に出た可能性は?!」

「それはあり得ません、クツルスさん。私はしっかりとドミティウス様がいらっしゃるまでの間は、誰もこの門から出入りするものはいませんでしたので。」

一同は呆然となった。

「セルテス、ドミティウス様とは…アエノバルブス家のドミティウス様か？」

サリウスは静かに注意深く確認している。

「はい…。アエノバルブス家のドミティウス様でございました。恐ろしい剣幕でお怒りのご様子でした。」

「畜生!!!あの豚野郎！」

パッラスは怒り狂って叫び出した。

しかしクツルスはそんな彼を両肩に手を添えて、落ち着くようになだめると、サリウスはまだ決めつけるなど冷静に対処していた。

「アグリッピナ様、ご安心を。私とパッラスで探しに行つてまいります。クツルスとフェリックスがここに残りますので、宜しいですか？」

セルテスやシツラやリツラは、一体何が起きているのか分かっていなかった。サリウスは後ほど説明すると言葉を残し、パツラスに感情的になるなとしきりに言い聞かせて外へ連れて行った。

「アグリッピナ様、一階の寝室でお待ちください。」

私はフェリックスと一緒に待つ事になった。フェリックスはずっと私を心配そうに見ている。駄目だ。さっきからの胸騒ぎが、本格的に悪い方向にしか向いていない。感情的になって慌てている自分が抑えきれなくなってきた。そんな時に、大母后リウイア様の言葉が浮かんできた。

” どうしても、感情的になりそうだった時には、目を細め、奥歯を噛み締め、自分が大理石の彫刻になった気分で、決して表情に表さないように務めなさい。”

「きつと大丈夫だって。」

「アグリッピナ様、本当に？」

「ええ、フェリックス。アキリアはきつと何処かで迷子になっているのかもしれない。」

私は必死に自分を大理石の彫刻になれるよう務めていた。でも、数時間後、彫刻になったはずの私は、あっという間に感情に流されて砕けてしまった。

続く

第四章「大母后と祖母」第五十三話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>

アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア(5 - 43年)年の差 + 10歳年上>

アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第四章「大母后と祖母」第五十四話

アクリリアの失踪から小一時間が経ち、暫くしてお戻りになったアントニア様も明らかに動揺されていた。だが、やはり同じように奥歯を噛み締め、目を細めて気丈に振る舞ってらした。今宵はアントニア様にとって大切なご友人を迎賓する会。

「アグリッピナ、直ぐに服をきてらっしゃい。」

「はい…。」

フェリックスはジッと私を見つめている。私は後ろ髪を引かれる想いだっただが、自分の立場を考えるしかなかった。今日はシッラが一緒に着こなしを手伝ってくれる。

「あー、アグリッピナ様。本当に綺麗です事。」

「ありがとうございます、シッラ。」

私は精一杯の笑顔を見せた。

するとシッラは私の前で泣き崩れてしまい、どうする事もできない状況。

「ど、どうしたの?!シッラ。」

「あー、アグリッピナ様。どうしてそれ程まで気丈でおられるのか…。私は幼いながらも、いかなる時にも笑顔を振り撒くアグリッピナ様の心中を察しますと、涙が湧き上がってくるのです。」

「…シッラ。きつとアクリリアは無事に帰って来ますよ。いつもの様に、”おねーたん、桃は?”ってがめつくね。」

「あー、そうですね。…きつと帰って来ますよね?」

「またもやシツラは泣き崩れてしまった。私だって本当は泣きたい。叫びたい。でも、今は無理。我慢しないとイケない。」

「アントニア様のご友人の方々は、本当に多種多様で裕福な方々ばかり。リウイア様が以前に教えてくれた、”先入観を持たずに、自分の血脈を常に意識して接する”を実践すると、人の本質とは見かけだけではないという事だった。おべっかを使う者や、笑顔に妬みを隠す者、私を通してゲルマニクスお父様に挨拶してる者や、本当に私を見てくれる者まで。」

「まあー！大母后様自らの教育を?!」

「私も昔は厳しくしごかれたのですが、孫娘のアグリッピナは一つも泣き言を言わないんですよ。」

「それはそれは！とても将来が楽しみです事。」

「ガイウスお兄様がカリグラという名のマスコットにされている気分が、少しずつ分かって来たような気がする。成人になって気付いた事だが、大人同士の会話には、共通の話題となる子供が時々必要になる。それ程まで大人は自由のように見せて、窮屈な世界を生きているのだ。」

「アグリッピナ様…。」

「後ろの壁あたりから、誰かの声がある。私は他の方々に気がつかれないよう、静かに注意深く近寄ってみる。」

「フェリックス？どうしたの？こんな時に呼び出して。」

「ごめんなさい、アグリッピナ様…。僕はやっぱりアクイリアの事が気になっちゃって…。」

「今はサリウスとパッラスが探しに出掛けてるでしょ?」

「でも、きつとアケイリアのやつ、今頃寂しくて泣いてると思うから、僕探しに行ってくるよ…。」

「貴方はこれ以上、アントニア様を心配させるつもり？」

フェリックスは俯いてしまった。

でも、フェリックス以上に探しに行きたいのは私だって同じ。

「辛抱強く待ちましょう。」

自分へ言い聞かせる言葉だった。

悲しい位、細い光にすぎるような想い。

「また今度いらして下さいな。」

「はい、そうします。何かお困りな時には、ぜひ相談に乗りますので。」

「いや〜ワシらは今年こそ、アントニアちゃんには、今年こそ結婚してもらわないと!」

「フフ…考えておきましょう。」

最後のお客様をお見送りされたアントニア様は、ため息を尽きながらセルテスに門を締めるよう命じる。

「ふ〜。あそこの夫妻は本当に夜まで話好きなのよ。」

「みたいですね。」

「たまに話し足りなくて、戻って来る事もあってね。」

さすがにお疲れのご様子で、アトリウムにある小さな椅子に腰掛けて、両手を顔で覆った。

「それで…サリウス達からは？」

「ごいません…。」

「あたしも迂闊だったの。アクイリアをちゃんと連れていけば良かったのに…。」

「いいえ、私が悪いんです。」

「…アグリッピナ。いいえ、あのおチビちゃんを引き取ったのは私なのだから、貴方は自分を責める必要は無いのよ。」

ペロが門の方へ唸り出すと、ドンドンと大きな門を叩く音がした。私とアントニア様はお互いに顔を見合わせる。

「またあの夫妻？」

アントニア様がセルテスに命じて門を開けると、そこには悔し涙で目を落としたパッラスと、物悲しく険しい顔をして、小さな布切れを抱きかかえたサリウスが立っていた。

続く

第四章「大母后と祖母」第五十四話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
上>

アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス（紀元前12年 - 63年）年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ（17年 - 30年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后（紀元前58年 - 29年）年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝（紀元前42年 - 37年）年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス（紀元前14年 - 23年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア（5 - 43年）年の差 + 10歳年上>
アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年-62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年-69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第四章「大母后と祖母」第五十五話

「そ、それで…、アキリアは…そのまま…グッス…馬車に引きずられて…。」

パッラスは溢れる悔し涙を抑えきれず、アキリアの最期を話してくれた。

「街の者達の話では、ドミティウス様の二輪馬車が何度も回り込んで、まるで狩をするように…アキリアを…」

「サリウス！もういいです。」

アントニア様はサリウスの話を止めた。余りにも無惨な亡骸になっ
てしまったアキリアが、私には今でも信じられずにいた。あの玄
関の外に置かれた布切れを開けると本当にアキリアが居るのだろ
うか？

「アントニア様…アキリアは俺達の本当の妹なんかじゃなかった
んだ…。こいつは生まれた時から、母親と父親を知らずに育ったん
だ…。でも、精一杯生きてきたんだ。」

ふと見ると、フェリックスの様子がおかしい。目を大きく見開いて、
ジッと私を見つめて硬直している。私はすぐさま大声で叫んだ。

「フェリックス?!」

するとフェリックスは突然倒れて身体を引き付けを起こしている。
クッルスがとつさに抱きかかえた。

「クツルス！フェリックスの口を抑える！」
「わかつてる、分かつてるぜ！」

シツラとリツラはお互いの身体を震わせて見ている。時折、フェリックスの喉から水を吐き出すような音が、二度、三度聞こえてくると、サリウスは鋭い目付きでパツラスを睨む。

「てんかんだ……。パツラス、なぜ黙っていた?!」
「そんな嘘だ！」

ガイウス兄さんと同じ症状で、目はトロンと垂れ下がって、身体中が硬直し始めている。アントニア様は険しい顔でゆっくりと目を閉じている。

「今回初めてなんだよ！」
「嘘をつけ！明らかに今までだってあった症状だぞ！」
「し、知らないよ!！」

目を見開いた険しい表情のアントニア様は、突然パツラスに近付き頬を叩いた。

「お前はまだ己の保身をするつもりなのか?!」

驚いたパツラスは口を開いたまま、頬を抑えてビククリしている。

「血の繋がらない娘を引き取り、弟のてんかんを騙し騙しこなし、やれる事といえれば偉そうな態度と盗みと嘘！その結果がこの有様だとなぜ分からののか?!なぜ自分一人できると過信した?!」

膝からガクツと碎けたパツラスは、自分の無力さをまざまざと感じ

ずにはいらなかった。

「パッラス、覚悟しておき！私はお前を絶対に許さない！私が死ぬまで、お前とこの弟は私の奴隷としてこき使ってやる！だから、夜明けになる前に早く！外のおチビちゃんを葬ってきなさい！」

そういうと、アントニア様は必死に堪えて二階の寝室へと駆け込んでしまった。一瞬、私はアントニア様を鬼の様に冷たい人だと感じたが、よく考えると、二度とこのような事が起きないように、全ての責任はアントニア様が持つと仰ってたのだ。

「サリウスさん、アントニア様のドムスにアキュリアを入れるわけにはいかない。早く弔ってあげないと。」

「だが、セルテス。ローマの街のなかで遺体を埋めたり焼いたりすることは禁じられている。」

「それなら郊外にユダヤ人の知人に頼みましょう。彼なら良い泣き女と、郊外の良い場所に土葬してくれるはずですので、私も行きませよ。」

しかしクツルスの事態は芳しくなかった。

「サリウス、悪いがフェリックスは俺達の街に一旦連れて行く。症状がよくなるまで知り合いに預けておくよ。」

「分かった。そうしてくれるとありがたい。」

パッラスは未だに床にうち塞がれたまま。

「ほら！パッラス！いい加減に立つんだ！」

茫然となったパッラスは、サリウスに腕を掴まれて、無理矢理身体

を起こされようとしている。

「血が繋がらなくとも、お前の妹であった事は確かなんだ。しっかり兄貴として、責任を果たせ。」

「…。」

パツラスは全ての気力を失ったまま、ふらりふらりと立ち上がった。

「待ちなさい、パツラス。」

手に二つの袋を持ったアントニア様が、二階から戻ってパツラスを止める。

「少ないけれど葬儀費用。セルテスの友人に渡してあげて。これは小麦粉でできたお菓子。地獄の番犬をなだめるため、あのおチビちゃんに供えなさい。」

「はい…。」

「それと…剃刀。あんたの髪の毛を叩く時に剃るのです。」

「それは…？アントニア様。まさか?!」

「ギリシャでは自殺者、子供、そして奴隷階級の人間は土葬と定められてたそうだけど、あんな幼くて可愛い子が最期まで奴隷だなんて、不憫でしょう？火葬にしてやんなさい。」

アントニア様の心優しいお気遣いに、それらをひしつと掴み、パツラスは身体中を震わせて涙を激しく流し、感謝の言葉を何度も何度も伝えていた。

続く

第四章「大母后と祖母」第五十五話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルスス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>

アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア(5 - 43年)年の差 + 10歳年上>

アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第四章「大母后と祖母」第五十六話

” おねーたん！桃は？ ”

” はい、あるよ。 ”

” 今日もいつぱいらね？ ”

” 一緒に食べよっか？ ”

” うん！ ”

食いしん坊のアクイリアだったけど、でもいつも可愛かった。木登りが得意な私が、時折インストラのポルティコの上に登ったりすると、目を輝かせて私と同じ真似をしようとする。

” アングツピナ様、凄い！ ”

” へへん！すごいだろー！ ”

” あたしもやる！ ”

” アクイリアはまだ子供だから無理だよ。 ”

” やだ！やりたい！ ”

” 危ないからダメだよ。 ”

” やだやだやだ！ ”

” ダメだったらダメだよ。もう。フェリックス、パツラスなんとかしてやんなさい。 ”

できないとアクイリアはギャーギャー泣いて叫ぶ。どっちが奴隷で主人だか分からないほど。でも、とても可愛かった。セルテスは馬車の手綱を持ちながら、俯いたパツラスに話掛けている。

「アントニア様は、ちゃんとギリシャ式で葬ってやりなさいって事だ、パツラス。」

「ええ…そうですね。」

「どうだろう？遺灰は私に任せてくれないか？」

「？」

「それでも、私の先祖様はシラクサでセリヌンティウスの名前で石工をやっていたんだ。そこまで上手くできるか分からないが、アクリリアちゃんの可愛い大理石の像を作ってあげるよ。」

「はい、ありがとうございます。」

馬車はゆっくりとローマ市内を抜けて、郊外のある三叉路抜けたところに出ると、セルテスはゆっくりと馬車を停めた。

「ここです。ここに、知り合いのユダヤ人がいます。」

サリウスは黙ってアクリリアを抱えている。私はリツラの手に引かれながら馬車を降りると、パッラスは私の顔をジッと見ていた。私もパッラスの顔をジッと見ていた。

” アングツピナ様、今日もおはようございます。”

” アクリリア、よくできたねー！”

” 今日も、だいぼこう様のところですか？”

” うっん、今日はクラウディウス叔父様のインストラまで、お使いに行く事になったの。ああ！アクリリアは、この前のブドウが欲しいんでしょ〜？！”

” うっん…。”

” どうしたの？”

” いつ帰ってきますか？”

” え？”

枯れた涙は既にパッラスから去っていた。けれど、どうしようも無い虚無感が彼の身体から元気を奪っていたのは確か。

「アグリッピナ様…。」
「パッラス…。」

くたびれた目元から、再び涙が流れそうだったので、私は首を横に振って堪えるよう命じる。小さくため息漏らしたパッラスは、二三度頷いて、再びサリウスのそばにいた。

「やあセリヌンティウス。」

「イーサク。元気だったか？」

「いきなりきてどうしたった？」

「緊急でな、子供を一人弔いたい。」

「なら、昼間まで待つてくれた。」

「いや、それがギリシヤ人の奴隷の子供で、火葬にして欲しいと。」

「火葬?! それは無理だった。ギリシヤ人の奴隷は…。」

「アントニア様が、死後に解放されたんだ。」

イーサクという人物は、伸ばしたヒゲを摩りながら、色々考えて答える。

「そいつはくずいぶん急だった。」

「殺されたんだ。」

「分かったった。それならうちのカカアに泣き女やらせるから。ギリシヤ式だと少し値が張るが、それでもいいだったか？」

「パッラス!」

アントニア様から渡された葬儀費用を全額イーサクに渡すと、イーサクは硬貨を数え出して、多すぎると幾らか突き返した。

”ねえー、アングッピナ様はすぐ帰ってくる?”

”うーん、どうだろうね。”

”…。”

”アキリア…。”

”早く…帰ってきて下さい、アングッピナ様。”

”うん、分かった。そうだ、アキリア。寂しくなったら、これを鳴らしなさい。”

”何ですか？”

”ドルススお兄様が作って下さった、鳴子。こつやつて回すとポンポンって鳴るの。”

”うわあ〜！面白い。”

”お利口さんに待ってたら、これをアキリアにあげるから。”

”本当に？”

”ええ、本当に。”

リッラは寂しそうにサリウスの抱きかかえるアキリアを見つめている。リッラの手からその悲しみが伝わってくると、私は手をギュッと握り返し彼女を元氣付ける。

「アキリアちゃんは、アグリッピナ様達がお出かけになった後も、ずっとアトリウムで鳴子を鳴らしながら、ペロをとても可愛がってくれて。」

「リッラ。もう、感傷はお止しなさい。死者はいくら偲んでも、生き返ったりしないのです。」

「アグリッピナ様…。」

サリウスは、気丈に振舞おうとしている私の言葉に目を細めていた。すると、床に一つの玉がアキリアの遺体から転がってきた。拾い上げるリッラ。

「なんでしょうか？これ。」

「鳴子の…。」

私はいてもたつてもいられなくなって、泣き出してしまった。今
ま
で大理石のように気丈に振舞おうと務めていたがもう、無理だった。
アクイリアはずっと今でも、私の帰りを待っていてくれたのだから。

続く

第四章「大母后と祖母」第五十六話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルスス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア(5 - 43年)年の差 + 10歳年上>
アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第四章「大母后と祖母」第五十七話

ユダヤ人のイーサクは、ギリシャ語で神々の名前を口にし、そしてしめやかに葬儀を始めた。髪の毛を剃ったパツラスは、今までとは見違えるほど聡明な横顔。王族の末裔であつた事は、本当なのだと教えてくれている。

「ふむ、ではその髪の毛は後ほど火とともに。」

ギリシャでは、魂の去つたあとの肉体は汚れているため、まず火によつて浄化しなければならぬという考えがある。魂が天界に帰るために、魂の俗な部分を焼き尽くし、清らかな部分にするためには火が不可欠であつた。

「これをそこに置いてつた。そうじゃ。」

「パツラス、アキリアを……。」

サリウスは布で優しく包まれたアキリアを手渡し、パツラスはそつと薪のうえに遺体を乗せ、水で綺麗に顔を拭いてあげる。そしてアントニア様から手渡された小麦粉のお菓子をアキリアの口に供える。

「子供だから、地獄の番犬も許すだろうたつた。一応、硬貨も目に乗せておきなさい。」

硬貨をアキリアの両目に乗せると、パツラス自身が火を灯す。イーサクは香油や香料を火の中に投じる。これは死者が天国に行く間に必要な装備との事。イーサクはわざわざ敬意を表わすために火の回りを3周回り、火が燃えているなかに葡萄酒を注ぎ、パツラスに

自分の髪の毛を投じるように促す。パッラスは無言で放り投げ、ジツと火を見つめていた。

「うちの力カアが今夜は泣き女だからった。」

そう言うと、イーサクの奥さんがやってきて、最初はシクシクと、徐々に激しく泣いてくれた。あまりやりすぎて、時折喉を枯らし、イーサクからギリシヤ式だと咎められている。

「では…。」

火が燃え尽きると葡萄酒で完全に火を消し始める。

すっかり小さくなったアクイリアの遺骨を、イーサクは両手で優しくかきよせ、骨と灰を拾い集めて壺のなかに納める。遺骨を葡萄酒で洗い、さらに油を塗っている。

「後で石の骨壺を作るから、とりあえず、木製の骨壺にいれて置いてくれ。」

「セルテス、分かったった。」

木でできた骨壺に遺灰を入れられ、近くにあった花や花輪も添えられていた。あんなに可愛かったアクイリアは、とつても小さくなってしまった。

「イーサクさん、その奥様、本当にありがとうございました。」

「いや、イイってことった。ただ、奴隷だった子供は生まれて初めてだったから、なれないところもあったけど。」

私達は夜明けとともに、イーサクの住む場所から離れ、馬車でゆっくりとローマ市内へ向かった。私は馬車に揺られながら、そばで骨

壺を抱きかかえて歩いてるパツラスに馬車へ乗るよう勧めた。

「アグリツピナ様…。」

「今日くらいは、立場を忘れましょう。さあアクイリアをコッチへ。」

「ありがとうございます。」

なぜか不思議だったのは、パツラスの素直な態度が、私の悲しい心も救ってくれるような気がした事。

「アグリツピナ様…アクイリアは幸せだったのでしょうか？」

「きつと幸せだったと思う。本当にあの娘は食いしん坊だったけど、頼りがいのあるパツラスお兄ちゃん、優しいフェリックスお兄ちゃんに囲まれて、絶対に幸せだったと思う。」

「僕…これからは真面目に働きます。奴隷とか王族の末裔とか、昔の事に拘るんじゃないで、一生懸命真面目に生きて行く事をしてみたいです。」

すると、横にいるリツラが安らかな微笑みを浮かべて話掛けてくる。

「貴方はアントニア様に飼われて幸運だったのよ。私とシツラ違って元々は奴隷。でも、アントニア様ほどのローマで奴隷に対して寛容なお方はいないわ。しっかりと働けば、それを評価してくださるのがアントニア様なんだから。それに、アグリツピナ様だって本当に優しいお方。あそこまで奴隷の為に涙を流して泣いて下さる方なんて今迄見たことなかったわ。」

朝日を浴びてるパツラスの横顔に、少しだけ元気が戻ってきた。彼はずつと遠くの明けゆく空を眺めて、心の中でアクイリアと何かの約束をしたのかもしれない。

「アグリッピナ様、本当にありがとうございます。このご恩は、絶対に一生忘れません。貴女がこれから何かあつた時には必ず、このパッラスがお役に立つように助力させていただきます。」

一つの命の灯火が消える頃、一つの結束という火が灯される。これが私とパッラスの誓いの始まりだった。

続く

第四章「大母后と祖母」第五十七話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア(5 - 43年)年の差 + 10歳年上>
アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第四章「大母后と祖母」第五十八話

次の朝、石を削る音から始まった。ガリア人でありながら、シラクサで王族の石工職人セリヌンティウスを先祖に持つ門番のセルテス。アントニア様から許可を頂いて、アクイリアを表した骨壺の代わりとなる石像を作っている。

「セルテスの集中力って凄いのね。」

「ああ、アグリッピナ様。気付きませんで、すみませんでした。」

「いいのよ、それにしても本当にアクイリアそっくり。」

「一度見たものは頭の中に刻み込まれて、後はどうすればできるかを考えるだけなんで。」

「アントニア様も凄く感心されていたし。」

「あはは……。まさか自分の石工技術がこんな時に役に立つなんて何か皮肉に感じますよ。アクイリアにブルラでなくとも、お守りの一つでも持たせてやればよかった……。」

「お守り……。」

お母様からもらったブルラを握りしめ、自分が恵まれている環境に生まれた事を感謝した。

「セルテス、アクイリアの右手に桃を持たせる事できる?。」

「桃ですか……。」

セルテスは顎を摩りながら、しばらく考えを巡らせて頷いた。

「やってみましょう、なかなか良いアイデアです。」

「ありがとう、きっとアクイリアも喜んでくれるわね。」

「ええ、私もやり甲斐が出てきましたよ。」

再びセルテスの石を削る音がなりだした。一つ一つ優しく、命を生み出す音が。

「ただいま帰りました。」

「クツルス！フェリックスはどうか？」

「はい、だいぶよくなってきましたよ。後二日くらいですっかり元気になりますでしょう。」

「良かった。」

「アグリッピナ様、他の皆さんは？」

「セルテスはアキリアの骨壺用の石を削ってて、サリウスとパッラスはアントニア様と一緒に宮殿へ。」

「宮殿へ…ですか？」

「ええ、アントニア様はこのドムスを引き払うそうよ。」

「そうなんです…。」

クツルスはアトリウムをぐるりと見回し、感慨深い表情を見せている。

「今回の事で、お亡くなりなられた旦那様との大切な思い出がまったドムスへ戻られるみたい。」

「という事はパラテイヌスへお戻りに？」

「ええ。でも、みんな一緒よ。その事を大母后様へ懇願されに行つたの。」

「ガツハハハ！そりゃあ良かった！」

私はクツルスの笑い方がお父様そっくりで本当に心が和んだ。

「そうそう、セルテス。その石像ができたら、我が街のインストラにあるタヴェルナにみんなが飾って欲しいとよ！」

「ええ？本当ですか？」

「ああ、あそこの街の人間はアクイリアの事を知ってたんだってよ。だから是非ってよ。」

「それは本当に嬉しいです、分かりました。」

ペロが私のそばにやってきて、またペロペロつま先を舐めてくれる。私はそんな姿を見ながら、もう哀しんでるだけではいけないんだってふっと湧いてくる感じがした。

「ペロ、アクイリアは本当にみんなから愛されてて良かったね。」

セルテスの石を削る音が再び鳴り出すと、ペロがクーンと鳴いて、私の顔にペロペロしてきた。綺麗な毛並みを摩りながら、澄み切った空を見上げ、私はアクイリアの為に最後の涙を笑顔で流した。

続く

第四章「大母后と祖母」第五十八話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
上>

アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア(5 - 43年)年の差 + 10歳年上>

アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第四章「大母后と祖母」第五十九話

「そう、そんな事があったの。」

「はい…。」

「そうね、奴隷との距離感は自分自身で決めるしかないでしょう。確かにギリシャの絶対的な奴隷制に比べたら、幾分寛容的な政策であるのは確かだけでも、でも、それは各個人の扱い方によって様々に変化しているのは確かだね。」

私は大母后リウイア様に、アクイリアの一件の事を話した。

「今回の一件は、双方の奴隷に対する見方や考え方の違いが引き起こしたものだと言つても過言ではないでしょう。人間関係において共通認識である事でさえも、この前教えたように如何様にも自分の好きなように解釈をするのが人間です。」

「はい…。」

「アグリッピナ、貴女は人から与えられた物をどのように使いますか？」

「物ですか？例えば…どんな物でしょう？」

「そうね、何でも良いのよ。目に見える物でも、目に見え無い物でも。」

ちと難しい…。

「フフ…。まあとにかく、人は与えられた物でさえも、様々な扱い方があるのは確かだね。大切に扱う者もいれば、乱暴に扱う者もいる。几帳面に扱う者もいれば、大胆に扱う者もいる。たったこれだけでも四種類の考え方があつたでしょ？」

「本当だ…。」

「その為にも、常に自分が何に属し、自分の発言が何を意味しているのかを考えないとね。」

私は一つ、リウイア様の言葉が妙に引つかかってしまい、恐る恐るリウイア様はどのようなにお考えなのかを聞いてみた。

「リウイア様は、やはり奴隷達は…『物』という考え方なのでしょうか？」

しかしリウイア様は、静かに顔をあげて、どこか昔の頃を思い出しているような表情を見せた。

「ローマの法を厳守する国家の母としてなら、その通りと答えるしかないけれど…それ以外ならば、その通りとは断じて言えないわね。」

「リウイア様…。」

「私も幼い頃、今のアグリッピナのような体験を何度も味わった事があるの。その度に何度も自分に言い聞かせてきたけれど、人の扱い方は本当に様々。自分の愛犬は可愛がるのに、奴隷を次から次へと”壊す”者もいたのよ。少なくとも、私には耐えられなかった。」

多くの奴隷達が、きつとリウイア様を通り過ぎたのだと思った。

「だからね、大切な事は胸の中にしておきましょう。その事を探してくれたアグリッピナと、今日の私が出会えたように、貴女もきつとそれを探してくれる誰かと出逢えるでしょう。」

大母后様が書かれた回想録にも、奴隷達に対しては、一貫して国家の母としての姿勢を崩されなかった。でも、この事は、私とリウイア様だけの秘密。

「そうそう、来週からアントニアがパーティヌスへ戻ってくるのでしよう?」

「はい!」

「良かった。実は孫のドルスツス達の長女リヴィア・ユリアも貴女と一緒に此処で勉強する事になったから。」

「リヴィア…さん?」

「あら?会ったこと無いのかしら?アントニアから見れば、アグリッピナと同じ孫なのよ。」

そう、このリヴィアが、後のネロお兄様のお嫁さんになる人。そばかすが鼻筋にあり、高飛車で高慢ちきでいじめっ子。なんでも自分が一番で、何でも知っていないと気が済まない女の子だった。

続く

第四章「大母后と祖母」第五十九話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルスス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア(5 - 43年)年の差 + 10歳年上>
アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第五章「パラティヌス生活」第六十話

アントニア様とご一緒にパラティヌスのドムスへ移った翌日、私は大母后様の教室でリヴィアに会った。

「おはよう。」

「おはようございます。」

「貴女が…アグリッピナね？」

「はい。リヴィア…さんですか？」

「そうよ。へえ、何だか貴女って、思ってたより随分と貧相な顔。」

「え？」

10才年上のリヴィアは、いきなりトゲを出してきた。考えて見れば、自分と近い年上の同性と会ってなかったなので、その嫌味が生まれて初めて強烈だったのは今でも覚えている。

「あの有名なゲルマニクス叔父様の長女と聞いたから、どんな娘かと思ったら、大したことないじゃない。」

「…。」

「まだまだ子供ね。」

晩年の彼女と、初めての出逢いの頃を話したら、覚えてないと言っていたけど、でも、多分そうよ、とも言ってた。

「二人とも揃いましたか？」

「ああ！おはようございます、大母后様！本日も素敵なストラですね。」

「そう？ありがとうリヴィア。」

「おはようございます、大母后様。」
「おはよう、アグリッピナ。」

大母后様は微笑んでらしたが、内心私はあんまり気分が良くなかった。これからずっと、このリヴィアの嫌味に付き合わされるのかと思うと。でも、同時に私の勝気な性格に勇気を与えてくれたのも事実。

「この意味は分かるかしら？」

「”時を流れて、されど涙を捧げぬ”です。」

「リヴィア、さすがね。上手な発音でした。」

「大母后様！アグリッピナはまだまだ分かってないみたいです。」

「すみません…。」

彼女は毎回口元を上げて、勝ち誇った目線を送ってくる。どうしてあのリウィツラ叔母様とドルスツス叔父様から、こんな高慢ちきな娘が生まれたのか不思議だった。でも、水泳とか体力勝負とかでは一度も負けた事無かった。

「さっすが！アグリッピナ！更に速くなったわ！」

「ありがとうございます、大母后様。」

「ぶっは！」

決まってリヴィアが私より後にいるから、そんな時は決まって私もお返しする。顎をツーンと上げて、勝ち誇った笑顔で見下して。相対リヴィアは悔しくて悔しくて、何度も練習してきているようだけど、途中で諦めて嫌味攻撃に変えてきたのは驚いた。

「アグリッピナ。あんた水泳が少し位得意だからっていい気になってない？」

「別に。」

「何、その言い方？水泳ばかりして、水の中に年上に対する尊敬の言葉を忘れてきたんじゃないの？」

「嫌味の言葉を、泳ぎと共に忘れてきただけです。」

「あんだ、元々頭ん中空っぽなのよ。あたしはこれでも次期皇帝継承者の長女よ。畏敬の念くらい持ったら？」

「そういったことは、強要する物ではなく、他人に自然と思わせるものだ、大母后様から教えてもらったはずでは？」

「まあー！年下なくせに生意気。あたしに説教するつもり？！」

とにかく、会えば嫌味合戦。勝気な性格では誰にも負けない自負がある。けれど、ペチャクチャ喋るリヴィアの甲高い声がうるさくて堪らなかった。そして大母后様の前ではコロリと態度を変える。でも、よく考えたら、二人とも同じ境遇で、両親共に出ていたから寂しさを紛らわすには丁度ストレス発散のいい相手だったのかも知れない。

「うん、今日はアグリッピナ、貴女の方が良くできました。」

「え〜？！どうしてですか？大母后様！」

「そうね、リヴィアのも悪くはないのだけれど、少し偏り過ぎる部分があるのよね。私情を挿まず多角的に物事を見つめるようになさ
い。」

「はい。」

「コラ！リヴィア。返事は簡潔にしっかりと！」

「はい、すみませんでした。」

大母后様にとって、リヴィアは直接的な自分のひ孫になるのだから、時折、私には見せない大母后様の家族の顔が出るのも面白かった。

「アグリッピナを少しは見習いなさい。注意が散漫だから、こんな

簡単な事もできないのよ。」

「べ〜っだ!」

私が勝ち誇った笑顔でリヴィアを見下すと、今度は無言で孔雀の羽で大母后様から頭をはたかれる。厄介で勝気な女の子2人を、大母后様は毎日何も言わずに教育を施してくれた事には本当に感謝。

「ねえ、アグリッピナ。あんたの桃と私の桃、取り替えない?」

「何で取り替えないといけないわけ?」

「あたしのは透き通った形のいい桃で、とつても美味しいんだから。」

「

「本当に?」

「本当だって。」

私が桃をリヴィアにあげると、もう絶対に返さない約束をさせられて、リヴィアの桃は目を閉じないと見えないと言われ、此処においてくから目を閉じて探しなうて言われた。しばらくすると、遠くの方でリヴィアの笑い声が聞こえる。

「アグリッピナのバーカ!」

「あ!嘘だつたんだ!」

あたしはまんまと騙された。

続く

第五章「パラテイヌス生活」第六十話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウィプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルスス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス（紀元前12年 - 63年）年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ（17年 - 30年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后（紀元前58年 - 29年）年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝（紀元前42年 - 37年）年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス（紀元前14年 - 23年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア（5 - 43年）年の差 + 10歳年上>
アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

第五章「パラティヌス生活」第六十一話

「もう！リヴィアって本当にムカつく！」

「どうしたんですか？アグリッピナ様。」

「年上なのにすつごく意地悪いの、パッラス。」

あたしは何かと愚痴をいつもパッラスに聞いてもらった。その度に、パッラスからは相手と同じ立場で怒っても意味が無いです、と笑われたけど。

「そんなの分かってるって。でも、やり方が卑怯すぎると思わない？透き通った桃なんて！」

「アツハハハ！自分もそうすれば、アグリッピナ様から桃をすんなり貰えたのかもしれないね？」

「パッラス！！あなたまでひどいじゃない！」

「アツハハハ、すみませんでした。では、代わりにいい案をお教えしましょう。これなら、必ず相手の桃をゴツソリいただけますよ。」

「え？！本当に?!」

「ええ、もちろん盗みなんかじゃありません。」

アルテミスゲーム。

アルテミスとは、ギリシヤ神話に出てくる狩猟・純潔、そして月の女神。小アジアにある商業都市エペソスにはアルテミス神殿がある。ここの神殿に祀られてある女神の神像胸部には、多数の乳房に見える卵形の装飾を付けた外衣がまとしてあり、それを見たギリシヤ人がこのゲームを考案したらしい。

「ゲームのルールはこんな感じです。円形の中に、互いに同じ数だけの石を一つずつ交互に埋めていき、先に石を埋めた方が勝ち。円

形の面積からはみ出して置いたり、重ねて置いたりしてはダメ。相手の石を如何に残させるかが勝負。」

「自分の石が残ったらダメなのね？」

「そうです。最後に相手を負かす時には、大きな声でアルテミスと言ってください。」

「うわゝ本当だ。パッラスが勝った。」

「いいですか？必ずある事をすれば、先手であるうが、無かるうが相手は必ず負けます。」

「ええ?!本当に?!」

「まず、全ての石を対角線上に置いて…。」

パッラスは何とエペソス人からこの必勝法を教えてもらったらしい。これなら桃を全部賭けたって負けやしない。きつとりヴィアの事だから、自分が負けるわけ無いって思うはず!私は意気揚々とリヴィアに果たし状を手渡した。

「何ですって?!」

「だから、桃の全てを賭けて闘いましょう。私が負けたら大母后様から頂いた桃は全部差し上げます。でも、リヴィアさんが負けたらその桃は全部貰います。」

「いいわよ。」

「もちろん、透けてるとか透明とか、お腹の中に入った桃とか、そういう屁理屈は無し。今リヴィアさんがその手にしてる誰にも食べられていない新鮮な桃を全部貰います。」

「もう!しつこいな。あたしが負けた場合じゃなくって、あんただって負けたらその桃は全部頂くからね!」

「ええもちろん!アルテミスゲーム、始めましょう。」

まんまとリヴィアは引っかかった。けれど私はパッラスから教えてもらった方法で、先に面積の中心に石を置き、後はリヴィアの石の

対角線上に同じ石を置いてった。すると見事にリヴィアはどこにも置けなくなる。

「アルテミス！」

「えええ？！何で？！どこにも置けないじゃない！」

「あたしの勝ち〜！」

「ま、まぐれよ。もう一回！！」

「イいわよ、何度でも。」

とつても気持ちが悪かった。

何度やっても、結果は同じ。今日は全部リヴィアの桃を貰った。リヴィアは相当悔しかったらしく、次の日、大母后様に言いつけてきた。

「へえーアルテミスゲームねえ？面白そうじゃない。アグリッピナ、私とやってみましょう？」

「はい。」

大母后様にルールを説明して、三回勝負になったが、一回目の途中で大母后様は必勝法に気が付き、二回目以降は私が惨敗だった。

「アルテミス！アツハハハ、また私の勝ちね？アグリッピナ。」

「はい、私の負けです。」

「えええ？！大母后様？どうやって勝ったんですか？」

「フフフ…。秘密よね？アグリッピナ。リヴィア、その位自分で考えなさい。貴女は年上でしょ？」

でも、リヴィアはさっぱり分からなかったみたい。ネロお兄様と結婚した後でも私に負け続け、ようやく気が付いたのは彼女の晩年だった。

続
く

第五章「パラティヌス生活」第六十二話

「アルテミスゲームってどうなってるの?! 大体水泳ばかりしかできないアグリッピナが、何で毎回勝つわけ?」

「へへ〜んだ!」

リヴィアとは毎回こんな調子。

普通ならもう諦めるのに、一つの事に拘り出したら、一気にそっちへ傾いてしまう。

「ユリア!」

「え? お兄様?!」

「お兄様って誰?」

「ネロお兄様!!」

「ユリア!」

「ドルススお兄様!!」

その時はあまりの嬉しさに、我を忘れて桃も放り投げて、一目散に駆け寄った。長男のネロお兄様と次男のドルススお兄様が帰ってらしたから。二人は前よりも幾分背も伸びて、凜々しいお顔になっていた。

「元気だったか? ユリア!」

「はい! ネロお兄様。」

「ユリア、お前少し背が伸びたんじゃないか?」

「ドルススお兄様も、お鼻は平気なようぞ。」

「あははは。お父様が僕らをアレキサンドリアまで連れてってくれたお陰で、ドルススの鼻水は治ったみたいだよ。」

「ところで、あの子はだれ?」

いけない！すっかりリヴィアの事を忘れてた。高慢チキだから紹介しないとうるさいんだった。

「あ、お兄様。あの子はリウィツラ叔母様とドルスツス叔父様の長女でらっしやる…。」

「リヴィアです！リヴィア・ユリアでございます！ネロ・カエサル様〜！」

痛っ！！

リヴィアは私とドルススお兄様を突き飛ばした。ネロお兄様の両手を、ああああ。目がウルウルしてる！これが世に聞く…。

「愛の神クピード様の仕業だな。」

「ドルススお兄様。」

「あの子、ネロ兄さん惚れちまったようだよ。」

時に私は神様を恨んだ事がある。

他愛ない事ならこれが生まれて初めてだけど。しかもよりによってリヴィアが？それはネロお兄様はとっても素敵なお方だけど…。

「ネロ様、とっても素敵な髪型ですね？長旅はお疲れではなかったですか？」

「あははは、ありがとうリヴィアさん。」

「リヴィアさんだなんて！そんな呼び捨てにしてくださいな〜。」

ダメだ…。

クピード様の矢で完全にやられてる。リヴィアの舞い上がった姿は初めてだった。あんな高慢チキでも乙女の心は持つてるんだ…。

「これじゃ、どっちがアポロ様でどっちがダプネー様かわかんないや。」

「どつという意味なのです？ドルススお兄様。」

「その昔、アポロ様がクピードー様の矢を馬鹿にして、クピードー様が怒って黄金の矢をアポロ様に、そして鉛の矢をダプネー様に打つたら、すっかりアポロ様は理性を失ってダプネー様に求愛し続け、ダプネー様は拒絶した末に月桂樹になったのさ。」

「へへアポロ様ってそうだったんですか。」

「でもこれじゃ逆パターンだよ。ユリア：お前が間違えて黄金の矢をリヴィアさんに打つたんじゃないの？」

「いいえ、ドルススお兄様。所詮リヴィアさんは、ボックスの女性信者のマイナスですよ。」

リヴィアなら自分で黄金の矢を自分に打つてそう。とにかくベツタリとネロお兄様にくっついて、終いにはアントニア様の所に一緒に住むと言い出す始末…。

「えええ?!」

「という事で、今日からリヴィアと同じ部屋になるから、アグリッピナ、いいわね？」

「……。」

「よろしくね、ユリアちゃん！」

うげ。

ネロお兄様の前でのぶりっ子だ！今までアグリッピナって呼び捨てだったくせに！まあアントニア様からしたら、同じ孫だから可愛かったのしょうけど、そうと決まったら、あつという間に自分の衣服を持ってこさせて、ネロお兄様のそばでおべっかばかり。

「ウフフ…。本当にネロ様はご発明がお上手。妹さんの、ユリアち

やんが羨ましいですこと。」

「ありがとう、リヴィア。僕も今回の満更じゃないと思うんだ。」

ありゃ、ネロお兄様？

お顔を赤らめてらっしやるの？お兄様ったら、まんまとゴルゴン三姉妹の一人、メデューサの罠にはまって…。翌年、リヴィアはまんまとネロお兄様と結婚する事に成功した。

続く

第五章「パラティヌス生活」第六十二話

「へえー。」

「つまり、この計算式を使うとさらに、ここからこっちになって、こうなるわけ。」

「おお、なるほど！」

ドルススお兄様とパツラスはとっても気が合つらしく、ドルススお兄様がアレキサンドリア図書館で覚えてきた演算や計算式をパツラスに教えていた。

「つととなると、こっちはこのままの数で置いてていいわけですね？」

「その通り！さすがギリシャ人だけあるよ、パツラス。お前頭の回転が速いよ。それに比べて…ユリア。」

「はい…お兄様。」

「何でこんな簡単な計算もできないんだよ？お前、これ途中式が迷路みたいだし、全然何て書いてあるか読めないし。」

昔っから、私は人を迷わすのは好きだったけれど、何かを解くのは面倒で苦手だった。ギリシャ人が何でこんなものを発見したのか、サッパリ。

「お兄様、だってよくわからないんですもん。これとこれが一緒になると増えるの？減ってもいいじゃない。」

「そりゃあ、そういうルールになってるからだよ。」

「そんなルール誰が決めたんですか？」

「昔の…偉い人だよ。」

「もう、死んじゃった人なんですよ？」

「そうだよ。」

「だったら、今日くらい減ったって、その人が生き返って怒りにきませんよね？」

パッラスは横で苦笑してたけど、ドルススお兄様は多分呆れていたと思う。そのうち相手にされなくなつて、パッラスの弟フェリックスと遊んでろつて言われるようになった。

「フェリックス…計算とか分かる？」

「じえんじえん。サツパリ。」

「だよな？大体、何で減つたもの同士合わせると、増えちゃうわけ？」

「うーん、あれじゃないっすか？敵国が、ローマに負けて兵士の人数が減つたもの同士、ローマの支配下になれば、奴隷達が増えるって事では？」

「なるほど！そういう事ね！スゴくよく分かった。」

全然分かってなかった。

多分、何でも良かったのかもしれない。分かったふりであれば満足だったから。でもフェリックスと私はそれから、色々な話を話すようになった。とにかく彼は発想が面白い。誰にも思いつかないような奇想天外で。

「ではアグリッピナ様、質問いきますよ。」

「待つてました、フェリックス。」

「問題！ある所に毒に侵された旅人がいて、川に出くわしました。向こう岸まで日没まで渡らないと毒が身体中に回って死んでしまいます。近くには橋も無く、壊れ掛けの小舟が一台。その旅人は全く泳げません。しかし、なんと旅人はある方法で、毒が身体中に回ってしまう日没前に、見事、向こう岸に渡ってしまったのです。どう

やっつてでしょうか？」

「うーん。小舟で途中まで行って、その後泳いだ。」

「ぶつぶぶ！その人はアグリッピナ様みたいには泳げません。」

「そっか。うーん、カエサル様に頼んで橋を作って貰った。」

「ぶつぶぶ！それじゃとづくに死んじゃってるじゃん。」

「分かった！その川はアイデアの川で、毒が回るのを待って、死んで見事に渡った。」

「ぶつぶぶ！ていうか、死んじゃったら意味ないじゃん。アグリッピナ様の発想は物騒だよ。」

「うーん。ルビコン川だった。」

「うーん。悪くないけど、惜しい！」

「えー！えー！本当に?!」

「答え！浅瀬だった。」

「そっかー！それは思い付かなかった！」

「アグリッピナ様は頭を柔らかくしないと、ニッヒヒヒ。」

今考えればバカバカしい問題ばかりだったけど、そのバカバカしさが時には子供達の流行りになるのも事実で。フェリックスとばかりやって遊んでいたら、ドルススお兄様とパッラスが混ざってお互い問題を出すようになってきた。

「そっか、後ろの荷馬車を引いてる人が、前の人にとって兄弟じゃなかったら、姉妹って事か！さっすがだ、フェリックス。」

「ハイハイ！ドルススお兄様、私も考えました！」

「おお、本当か？ユリア。」

「本当に大丈夫ですか？この間もアグリッピナ様は自分の答えにわけ分からなくなっちゃって。」

「今度は大丈夫！自信あるんだから、フェリックス。」

私は思い付いた問題を、胸を張ってみんなに出題する。

「三人の男の子がいます。目の前に二つのりんごがあります。一刺しでみんなで等分にするには、如何すればいいでしょうか？」

へへへん。

これなら計算が得意なドルススお兄様もパツラスも答えられまい。

「そんなの、それぞれのりんごを三等分して…。」

「駄目ですよ、ドルスス様。アグリツピナ様は『一刺しでみんなで等分に』って言ってるんですよ。」

「なに?!一回だけしか切れないのかよ。」

「一刺しです。」

「そしたら、りんごを二つ並べて一気に…。」

「そうすると、四等分になっちゃいますよ、ドルスス様。」

みんなは一生懸命考えに考えたが、結局誰も答えられなかった。パツラスも目が回るほど考え抜いて、ドルススお兄様は大の字になつて疲れてる。

「もう、降参。ユリア答え教えてくれ！」

「やった〜!!」

「一体何なんだろ? 答えって。」

「答えは簡単よ、フェリックス。三人で二つのりんごを、一刺しでみんなで等分するには…。」

ドルススお兄様、パツラス、フェリックス。みんなが興味深く私の顔を覗いてきた。答えを知りたいらしい。

「一刺しで…誰か1人殺せばいいの。」

「…。」

「…。」
「…。」

ゴン！

痛ったい〜！ドルススお兄様から強烈なゲンコツを喰らった。

「だつてえ〜！1人殺せば、残りの2人みんなで仲良く等分に…。」

ゴン！

「ユリア〜！バカあ！」

痛〜い！またゲンコツ喰らった。

せっかく良いアイデアだと思ったのにな…。

続く

第五章「パラティヌス生活」第六十四話

「あ、小鳥。」

「本当ですね。」

「…。」

「アグリッピナ様…また、物騒な問題考えてませんか？」

「もう！酷いなフェリックスは。お兄様のゲンコツ痛いから、もう、考えないようにしてるよ。」

嘘だった。

今度はどうやってたら、ゲンコツをもらわないで、上手くドルスお兄様とパッラスの2人を、奇想天外な問題で困惑させるかしか考えてない。そうだった意味では私もあの高慢ちきのリヴィアとあんま変わらないのかも。

「あ、あっちの方へいった。」

ちょっと待って、今逃げられたら、せつかくの案が消えちゃう。

「フェリックス！追いかけるのです。」

「分かった！」

私達2人にとって、このパラティヌスは広大で贅沢な遊び場だったと思う。本当はいけなただけど、ある人とある人の銅像の頭に、どっちが先に鳥のフンがかかっているか賭ける、ロムレスゲームというのをフェリックスと私は考案した。とはいうものの、フェリックスはあんまりにも賭け事が上手いから、ものの見事にカモにされていた。

「あ、あそこに止まった。」
「え？」

私はその光景を見てビククリした。

パッラスと同じくらい男性が神殿脇にある緩やかな階段に腰掛け、さっきの小鳥達と戯れながら会話していたのだ。その笑顔はとっても優しく、謙虚で聡明な顔つき。小鳥達は一切怯えず、その者の人差し指に止まったり、肩に止まったり、時には頭の上に止まったり。

「うん？」

私達は呆然としながら、口をポカンと開けたままでいた。気が付いたその男の人は、優しく微笑んでこっちへおいでと手招きしてくれた。

「私はコルドバ出身のルキウス・アンナエウス・セネカ。君達は？」

「私はユリア・アグリッピナ。それと、こっちはアントニア様の奴隷フェリックス。」

「こんにちわ。」

「あなたは、ルキウスさん…でいいの？」

「セネカでいいよ。ここでは、ルキウスって名前は多いからね。」

するとセネカは再び人差し指を伸ばして、頭の上に乗ってた小鳥を誘導した。まるで意思疎通が出来てるかのようになり、小鳥はセネカの言う通りに動いている。

「セネカ、あなたは鳥占官のアウグルなの？」

するとセネカは目を見開いて大きく笑った。その笑い声に反応する

かのように、周りにいた小鳥達もチュンチュンと笑ってる。

「僕がアウゲルに見えるほど、年取って見えるかい？」

するとフェリックスは即答で答えた。

「見える…。だってジジイくさいもん。」

フェリックスは齒に衣着せぬ発言でも有名だった。素直といえばそうなのだが、私は奴隷らしくありなさいと静止した。

「あはは、全然構わないよ。」何であれ伝え方や行い方次第で、その事柄の価値そのものが大きく変わってくる。これは人の世話をする場合によく当てはまる。」

「？」

「さっき思い付いたんだ。」

「あなたは一体何者なの？」

「僕は、そうだな…学生とでもいっておこうかな？ストア学派の哲学者アッタロスさんの所で色々な勉強をさせてもらっているんだ。」

「へえー。」

多分、私は哲学者が何なのか？さっぱり分かってなかったと思う。きっと鳥使いの名手ぐらいにしか考えてなかった。本当に鳥占官のアウゲルと関係があると思ひ込んでいたから。

「ユリアー！」

ドルススお兄様がやって来た。

私達をずっと探していたみたいで、走って来た。

「お前達、勝手に離れちゃ駄目だろう。うん？」
「やあ、こんにちは。」

セネカは鳥に囲まれながら、ドルススお兄様に挨拶をした。ドルススお兄様も不思議に思いながら、挨拶する。

「セネカです。」

「あ、僕はいいつの兄のドルスス・ユリウス・カエサルです。」

「ユリウス？って事は、君達はユリウス家のものなのか？」

「はい。父はゲルマニクスで、母はウイプサニアです。」

「おおお！ゲルマニクス様のお子さん達か。」

セネカは喜ぶように起き上がって、ドルススお兄様へゲルマニクスお父様の事を褒めちぎっていた。でも、鳥のフンが肩や頭にあった。

「フンばかりでばっち。」

フェリックスの言った通りだと思った。これが後の盟友となる哲学者セネカとの初めての出会いだった。

続く

第五章「パラティヌス生活」第六十五話

ネロお兄様とアントニア様に、私は今日会ったおかしなセネカの話をした。

「へえー鳥たちと話せる人がいるんだ。」

「鳥占官でもない限り、そんな事できる人なんて…。」

「年齢はパツラスと同じくらい、だったかな？」

「私はそれ以上年上に見えました。けれどフンばかりではつちくて。」

「まあー！」

アントニア様はおかしなセネカの風貌を言ったら、ビックリして転げ落ちそうになってた。

「しかし…ストア派の哲学者アッタロスから習っているなんて。最近はそのなにストア派が面白いのかしら？」

「どうやらそうみたいですよ、アントニア様。僕とドルススがアレキサンドリア図書館で勉強していた時も、ストア派の哲学者の方々がいっぱいいました。現皇帝ティベリウス様の政策は、非常に健全で理にかなっていると。」

「まあ、確かに世に秩序と平和を均等にもたらしているのだから、健全といえば健全ですけどね。」

私はお兄様達の難しい話が良く分からなかった。つまり、おかしなセネカは何者なのか？それを知りたかったのに。ご飯を食べ終わっても、ネロお兄様、ドルススお兄様、アントニア様は同じような話ばかり続けてた。私はつまらなかったもので、一人でペロと遊んでいた。

「どうしたんです?」

「あ、パッラス。お兄様達、難しい話ばかりでつまらないの。哲
役者の話ばかりで。」

「それは…哲学者の事では?」

「あ、そうそう哲学者。で、哲学者って一体何なの?」

「そうですね、何というか…人生の案内人でしょうか。」

「人生の案内人?」

「ええ。例えば、ここローマ市内を初めて来た人は、どこに何があ
るのか、またどこが危険な地域なのか?分かりませんか?案内人
がいればローマ市内を楽しむ事が出来ます。」

「ええ、確かにそうですね。」

「それと同じ様に、彼らは人生の生き方を案内してくれる為に、僕
らが考えられないような事まで、じっくり常に色々な事を考えては
案内してくれるんです。」

でも私は納得がいかなかった。

「そんなの、生きて行くのにそんなに必要なの?」

「うーん如何なんでしょうか…。」

「だってアレクサンドロス大王だって、『運命は自分の剣で切り拓
くものだ』って仰ってたし。頭ばかり使って身体使わなかったら
意味ないじゃない。」

「確かにそうかもしれないですね。」

「それに小鳥と戯れてて、何かちょっと危なそうじゃない。きっと
”おかしなセネカ”もそうだって。」

「あははは…”おかしなセネカ”。アグリッピナ様は、あまり哲学
者がお好きで無いのでしょうか?」

「だってよく分からないもん。」

「だったら直接その疑問を投げかけてみては如何でしょうか?」

「誰に？」

”おかしなセネカ”にですよ。」

パッラスはウインクしてくれた。

確かに悪くないかも。でも、道案内って事は。

「お金…取られるのかな？」

「あっはっはっは！むしろ、喜んで答えてくれますよ。」

私達は次の朝、昨日セネカがいた場所へと向かった。すると今日は小鳥とはまるつきり話をしてなくて、階段の端を行ったり来たりして考え込んでいる。

「パッラス…。やっぱりおかしいよあの人。階段降りるのか登るのが迷ってるんだもん。」

「あははは…。」

さすがのパッラスも苦笑していた。

「セネカさん？」

「うん？やあ！君達は昨日の。」

「アグリッピナです。」

「ゲルマニクス様のご長女でらっしゃる。本日は如何なされました？」

「貴方って哲学者なんでしょ？一体何なの？哲学って。」

あごをさすっていたセネカは驚いた顔をして、固まっている。

「このパッラスは人生の生き方を案内してくれる人だって教えてくれたけど…。そもそも先の事なんて誰にも分からないじゃない。」

何だか先の事ばかり考えてたら、惨めにならない？」

するとセネカは目を閉じて考え込んでしまった。暫くしてから目を見開き手をポーンと叩いて、突然感謝の言葉を浴びせてきた。

「ありがとうございます！アグリッピナ様。実は僕もお師匠のアッタロス様から同じような事を投げかけられてたのですが、確かに『未来を気づかう心は悲惨なり』ですよ！」

うん？

何だか私の質問が誤魔化されてるみたい。

「で、それで…哲学って何？」

「フフフ、私にも分かりません。」

「えええ?!」

「偉大なるソクラテス様は、考え過ぎて奥様から冷や水を浴びせられたそうですしね。それにそれが分かったら、哲学者はもういらないでしょう。」

「はあ?!?!」

「でも、アグリッピナ様。『何故』とか『何』と疑問持つ事は大変素晴らしい心構えだと思いますよ。」

「ほ、本当に？」

まんざらでもなかった。

「『まだ感じやすきうちに心を訓練するは容易なり』です。きっと貴女は立派で聡明な方になるでしょう。」

「あの、リウイア大母后様みたいに?!」

「ええ！貴女は人に何かを与える事のできる存在です。」

私は満足してパッラスと帰った。
パッラスは微笑んで良かったですねっと言ってくれた。

「パッラス、私は哲学が何だか分かった！」

「何です？」

「人を褒める仕事なのよ。」

「え…？」

全く分かってなかった。

しかも私は褒められたのいい気になって、当分の間はずっと勘違いしてセネカの真似ばかりしてた。

続く

第五章「パラティヌス生活」第六十六話

「ムフフ…。」

「ユリア？あごなんかさすって何やってるんだ？」

「ドルススお兄様、なぜ鳥は空を飛ぶのか知ってます？」

「はあ？」

「ムフフ…私には分かるんです。それは…彼らが飛びたいからなんです！」

アトリウムに沈黙が訪れた。

「ユリア…。お前、頭大丈夫か？」

「え？」

「どうせ、”おかしなセネカ”の真似でもして、お兄ちゃんよりも頭イイと思わせようとしてるだけなんだろう？」

ギク。

何故にドルススお兄様は私の心を？うーむ…。

「困った奴だ。お前は昔から格好いい人とか偉い人とかと出会って直ぐに憧れて真似するんだから。」

「そ、そんなことないですもん！私は真剣にアトリウムをグルグル回って考えて。」

「グルグル回ってもお前の場合は目を回すだけだろ？大体、人の真似ばかりしていると、自分の事が疎かになってしまっぞ。」

「むぎゅ…。」

ドルススお兄様の妙に説得力のある言葉は、後の晩年を予言しているようだった。頑なにご自分の主張を守ったばかりに、ドルスス

お兄様は無残な死を迎えられてしまったのだから。

「あはは、なーんだ。ユリアは今度は役者ごっこか？」

「あ、ネロお兄様。違いますう！哲役者です！」

「ユリア、哲”学”者。」

「むぎゅ……。」

「あはは、どれどれ。ユリアの哲学を聞かせてくれないか？」

そういうと、ネロお兄様は優しく私に微笑みを掛けてくださった。ドルススお兄様は、ネロお兄様の人の良さに呆れ返ってる。私は得意げになって、あごに手を当ててウロチヨロし出して、ネロお兄様に疑問を投げ掛けた。

「ムフフ……。ネロお兄様、何故に鳥は空を飛ぶのか知ってます？」

「うーむ。何でだろう？」

「さっきと同じじゃん。ユリアは、あごさすって、ムフフって言いただけなんじゃない？」

「もう！ドルススお兄様！」

「あはは、ドルスス。静かにしてやれ。」

「はい。」

「そうだなー。きつと翼があるからだよ。」

「翼？」

「ああ。僕らにとって足や手があるのが当たり前の様に、鳥にとつては翼がある事が当たり前。だから飛べるんだよ。」

気が付くと私とドルススお兄様は、ネロお兄様の話に夢中になっていた。一つ一つの言葉が魅力的で、一つ一つの仕草が美しく、そして全ての動作が端麗だった。

「やっぱりすごいな、ネロ兄さんは。鮮やかな演説だった。」

「本当に、ネロお兄様は素敵。」

「来年は僕も成人式を迎えるだろ？だから勉強だつていっぱいしておかないと。」

「それに比べてユリア、お前の哲役者ごっこはどうした？」

「あ！忘れてた。」

「そんなに哲学者になりたいんだつたら、ヒゲ描いてやろうか？」

「もう、やめてください！」

「あはは〜！冗談だよ。」

「むぎゅー！」

するとあの高慢チキが、いつもの様にネロお兄様を呼ぶ声が聞こえてくる。

「ネロ様ー！どちらにおられるのですかー？」

「まただ…。ネロお兄様、またぶりっ子リヴィアの野郎がやって来ましたよ。」

「ユリア、お前のリヴィアさんに対する口の悪さは何とかならないのか？」

「フン！だつていつつネロお兄様をリヴィアは独り占めされてるんですもん。」

こちらに気が付いたりヴィアは、わざとしおらしく身体をクネクネさせながら、頬を赤らめ目に潤いを浮かべながらやって来た。ぶりっ子め！

「まあー！ドルスくん、ユリアちゃん、こんにちは。」

「こんにちはは、リヴィアさん。」

「…。」

「ユリアー！」

ネロお兄様から初めて厳しく怒られ、悔しいから目を閉じて大げさに挨拶する事にした。

「ごうんにちわゝ、リヴィアさん。」

「オホホ、相変わらずユリアちゃんは面白い子で。」

後でめちやくちや怒られた。

「所で、ネロ様！さっきお父様とお母様から連絡がありました、二人の子供を身ごもったそうなんです！」

「ええ?! 本当ですか?」

「しかも、誰かをローマへ亡命させるのに成功されて、イリリウムからローマへお戻りになられるんですって!」

ドルスツス叔父様とリウィツラ叔母様に二人の子供が!? シリアへ向かう時にお父様から教えられた方法実践したとドルスツス叔父様から聞かされたのは、四年後の亡くなる直前だった。

「早く見たい!」

「でしよう? ユリアちゃん。」

ゲルマニクスお父様とドルスツス叔父様の両家族には、これから幸せな時間がきつと訪れるのだろうと、この時は誰も彼もが信じて疑わなかった。けれど、この直後、私は家族の絆を切り裂くような見えてはいけないものを見てしまい、そしてそれが、両家族にとって不幸の始まりを告げる啓示になるのである。

続く

第五章「パラティヌス生活」第六十七話

「お帰りなさいませ、ドルスツス様！」

「わざわざのお招き、ありがとうございます、アントニア様。」

「いえいえ。」

「ただいま、お母さん！」

「お帰り、リウィツラ！」

ドルスツス叔父様とリウィツラ叔母様はとも仲睦まじくアントニア様の所へやって来た。リヴィアが言つてた通り、リウィツラ叔母様のお腹は双子の赤ん坊を身籠つてるようで、とっても大きくなつていた。

「この度イリリクムでのご活躍、パラティヌスでも本当に話題になつてましてね。対立調停ではスエビ族のマロボドウスという輩を見事、ローマへの亡命に導かれたとかで。」

「いや、相手側のケルスキ族が頑固で骨折れましたが、意外にスエビ族の方は話が分かる奴が多かったですよ。まだ色々と手続きをしなさいといけませんし、今回は元老院の方々から何やら呼ばれたのと、リウィツラが産気つきそうなので、一時的戻ってきたんです。」

「そうなのよ、お母さん。」

後に今回の対立調停の成果から、ドルスツス叔父様はこの年の夏に、元老院から略式凱旋式の決議を得たのだった。

「それでもドルスツス様がローマにお戻りになられたというだけでも、みんな大いに喜びますわ。ご活躍、大変に素晴らしく、かつ、人道的で本当にご立派でした。」

「ふー、お母さん？この人の話ばかり。私だって頑張ってるわよ

」。

「ゴメン、ゴメン、リウイツラ。あなたも本当に大きくなって。」

「二人つて意外に重たいのね。」

「何言ってるの。あんななんか、なかなか出てこなかったから、二人分の重さでしたよ。」

「えー！？！ウツソ？！」

「アハハハ、ウソよ！」

その時にちょうど、リヴィアは二階から走ってやってきた。

「お父様！お母様！お帰りなさいませ！」

「リヴィア！元気だった？！」

「はい！お父様！」

「やい、リヴィア！お前元気だったか？」

「あああ！お母様。私は、本当に本当に寂しかったのですよ。」

「寂しがり屋の鼻垂れ娘のくせに、格好つけて大母后様のところで勉強するなんて言い出すから、お前は。ちゃんと行儀良くしてたのか？」

「はい！」

ビックリした。

リウイツラ叔母様の話し方は、まるで男っぽくてぶっきらぼうな感じ。それでもリヴィアは母親に絶対的な安心感を持ってベタベタ甘えてた。

「ユリアちゃんには迷惑掛けてなかったか？」

「はい！ユリアちゃんと、とーっても仲良くしてました。」

「よっし！いいぞ。」

もう、リヴィアは嘘ばっか…。

でも、この時ばかりは、高慢チキでぶりっ子なりヴィアが羨ましかった。

リヴィアと私は、この後に起こるセイヤヌスの狂乱の一件から、彼女の晩年までずっと犬猿の仲だった。けれど、皇后メッサリナに彼女が処刑を命じられた時、私と彼女はお互いのしがらみを捨てて昔を懐かしむように色々な話をした。その時、彼女は幼い頃から実の母親に特別な愛を持っていた事を独白してくれている。彼女の不幸は、盲信するあまり、母親への期待に答えないという行為そのものだったのかもしれない。私とは真逆の人生だったから、最後の最後で仲良くなれたのだけれど。因みにアルテミスゲームの必勝法には、本当に最後まで悔しがってたっけ。

「ネロくん！ドルススくん！元気だったかい？！」

「はい！ドルススス叔父様。」

「お帰りなさいませ、ドルススス叔父様。」

「お？ドルススくんは、もう鼻水が治ったのか？」

「なんだかエジプトのアレキサンドリアで随分鍛えられました。」

「そうかそうか！」

いよいよ私の番！

「ユリアちゃん！元気だった？」

「リウィツラ叔母様！お久しぶりです！ドルススス叔父様、この度はとても素晴らしい偉業、心からお祝い申し上げます。」

「ユリアちゃん、随分大人っぽくなったな。ゲルマニクスが帰ってきたら、さぞ喜ぶだろうに！」

「あ、お父様！」

するとリヴィアに邪魔と言わんばかりにドンと私は押されて、彼女

はネロお兄様を無理矢理紹介し始めた。もう…。

「こちらゲルマニクス叔父様のご長男でいらっしやるネロ様！とても素敵なお方なんですよ。」

「あはは、リヴィア。もう何度も僕らは会ってるよ、なあ？」

「はい。」

「本当ですか？！ネロ様！良かった〜！本当にネロ様は仕草や手つきがとても端麗で美しいのですよ〜！」

「アハハハ、ネロくん、なんだかりヴィアがお世話になってるみたいで、ありがとうな！」

「いいえ、こちらこそいつもリヴィアさんにはお世話になっております。」

「もう、ネロ様ったら〜。いつになったら私の事呼び捨てにしてくださいさるの？」

「アハハハ…。」

「あ、それでそれでねえ、お母様。ネロ様って手先がとっても器用でしって…。」

呆れ返るほど…。

リヴィアのネロお兄様アピール大会は続いていた。

「ところで、アントニア様。ゲルマニクスの奴は最近どうなんです？」

「ゲルマニクスお兄さん、ネロくんやドルススくんの話じゃ、シリアからアレキサンドリアに勝手に行っちゃったみたいじゃない…。」

アントニア様は少し顔を曇らせて、ため息を吐いて答えにくそうにしていた。

「そうなのよ。大母后様からもウィプサニアには注意がいったはず

なのにな。その事については、大母后様と私で互いに連携を取って、既に防衛策を考えているのよ。できるだけ元老院の方々にも理解してもらえよう根回しをしてね。」

それで、アントニア様がパラティヌスのドムスへお戻りになられたのかも分かった。それほどまで、ゲルマニクスお父様が無承諾でエジプトへ行かれたのは大きな事だったのだろう。

「兄さんって本当に頑固っていうか、マイペースっていうか。」

「かあ。ゲルマニクスにはあれ程『存在自体が目立つんだから、くれぐれも用心しろよ』って言ったのにな。」

「本当にゴメンなさいね、ドルスツス様。」

その事を知らなかったネロお兄様とドルススお兄様は、アレキサンドリア行きが、それほどまで問題視されていた事実には愕然としていた。

続く

第五章「パラティヌス生活」第六十八話

ネロお兄様、ドルススお兄様、そして私の三人は、パラティヌスの端にある崖から空を眺めていた。薄い雲達が、まるでお魚の大群のように、海原のような青い空をゆっくり遊泳しているよう。けれども、私達家族にとっては重々しく、穏やかな時間ではなかった。

「ネロお兄様……。」

お父様の無承諾によるエジプト訪問。お兄様の話によると、毎日ピソとの牽制で疲れていたお父様への、お母様からの提案だったらしい。ネロお兄様は非常に長男として、責任を人一倍に感じている。

「僕は素直に喜んで、本当に馬鹿だったよ。長男としてとても恥ずかしいよ。」

「ネロ兄さん、今悔やんでも仕方がないよ。アントニア様もおっしゃってるように、”これまでのことを嘆くよりも、これからをどうするか？考えなさい”でしょう。」

しかし、ネロお兄様は頷くどころか、首を横に振ってドルススお兄様を否定した。

「ドルスス、世の中が全てその道理で運ぶなら、誰も彼もが幸せだ。だがな、エジプトへ行くことはもっと別の話だ。アントニウス様の一件から、ある意味アレルギーになっているのだから。」

「でも、アントニア様や大母后様が連携を取って、防衛策を立ててるとおっしゃってるじゃないですか。」

「アントニア様はな。だが、大母后様は侮れない。」

「お兄様?!」

私は感情的にだが、お兄様の発言を遮るように声を荒げた。しかし、ネロお兄様は、あの時のお母様のような目ついで、私を憐れむようにみつめている。

「ドルスス、見てみる。ユリアが良い例だ。あのお方はユリアを人質にローマに残して、今みたいに手なづけたんだ。」

「兄さん、それはなんでも言いすぎだ！ユリアのお陰でお母様はお父様と一緒にいられる事ができたんじゃないか。それにユリアは大母后様の所で本当に教養だって身につけてる！まだ、ちよつと計算に弱くて馬鹿だけど。」

ギク。

ドルススお兄様、そんなズバリ馬鹿って言わなくても……。

「でも、もし大母后様が本当にユリアを人質にしてローマに残したのなら、わざわざそんな事しないよ！兄さんは神経質過ぎるんだ。」

「なんだと?!」

「じゃあ聞くけど、それを知ってたとして、未来の家長として、ネロ兄さんは何ができたんだよ?!兄さんはお父様やお母様を止める事ができたのかい?!」

「出来たさ！少なくとも、踏みとどまらせる事ぐらいはさ！」

「はあ?!あの状況下でかい?お父様の兵士達もみんなピソ様との牽制にうんざりしてたじゃないか！」

「ピソ様なんて言うな！ドルスス、貴様、兄の僕に向かって!」

「兄さんが分からず屋だからいけないんじゃないか！」

「何だと?!この野郎！言わせておけば、調子に乗りやがって!」

凄まじかった。

私は初めてお兄様達の喧嘩を目の当たりにした。殴り合い蹴り合い、

相手の髪を引っ張り合い、まるで狼の縄張り争いのようになって、床にへばってしまった。私は怖

「あわわわ、パ、パッラス!!!」

気が付くと、一目散でパッラスが向こう側からやってきて、お兄様達の喧嘩を必死になって止めてくれた。

「ネ口様！ドルスス様！どうかおやめください！」

「うるさい！ネ口兄さんは分からず屋だから、口で言っても分からないんだ！」

「黙れ！ドルスス！分ならず屋はお前の方だ！お母様やお父様の事を心配している僕が、どうしていけないんだ!？」

「お二人とも、おやめください！アグリツピナ様が怯えています！」

「うるさい！パッラス！これは兄弟二人の問題なんだ！」

「そうだ！止めるな！家族を守る為のことなんだ！」

「でしたら！ここはポメリウム内の神聖な場所です！家族を守る為なら、ご兄弟仲良くなさってください！」

パッラスの大きな声に、お互い息を荒くしながらも、我に帰って争う事を一応やめる感じだった。ポメリウム内では、政務官を警護するリクトルが手にしているファスケスからも、斧部分を外さなければならぬほどの神聖な場所。クレオパトラ女王様でもポメリウム内には入る事さえ禁じられていた。アクイリアがローマ郊外で火葬されたのも、当然ポメリウム外でなければいけなかったから。つまり、宗教的かつ政治的な理由も含めたローマ本体となるのがポメリウム。それ以外はローマの領土されている。だから、パッラスは聖なるポメリウム内で争う二人を諫めたのである。

「ネ口様、アントニア様が午後から付き添って欲しいとの事でした

が…。」

「そうだった。」

「さあ、参りましょう。」

ネロお兄様はドルススお兄様をきつく睨んで、クルリと背中を向けてパッラスと歩いてしまった。私は床に尻もちしたまま、怖がってドルススお兄様を見てた。

「ユリア、ゴメンな。」

「いいえ…。」

「ネロ兄さんとはお前の知らない所で、たまに喧嘩はしているから、そんなにビックリしなくて大丈夫だよ。」

「…。」

「ただな、俺はネロ兄さんがユリアの事をあんな風に言うのが許せなかったんだよ。お前一人だけ置いてけぼりにされてさ。」

私はドルススお兄様の優しい心遣いに、今までずっと我慢していた寂しさを吐き出すように大泣きした。でも、昔の幸せはどんなに泣いても戻ってこないのだから。

続く

第五章「パラティヌス生活」第六十九話

しばらくしても、ネロお兄様とドルススお兄様はギクシヤクした関係が続いてた。アントニア様も見兼ねて、ドルススお兄様に仲良くするように賤けてる。建国の英雄ロムルス様とその弟レムス様の悲劇にならぬように、弟が兄を敬うのは当たり前だからと。

「イイさ、仕方ないよ。」

「ドルススお兄様。」

「アントニア様が心配されてるのも無理ないよな。レムス様は兄弟で決めた事を覆して挑発をして、それでポメリウムの一線を超えて殺されてしまったのだから。」

「でも、お兄様。ロムルス様とレムス様は新しい王国を建築する際、鳥達で決められたんですよね？」

「うん。」

「その時に、ロムルス様はパラティヌス丘に祭壇を、レムス様はアヴェンティヌス丘に祭壇を置かれ、でも実は先に鳥達が止まったのは、レムス様を選んだアヴェンティヌス丘だったんですよね？」

「あはは、ユリアは本当に大母后様の所でちゃんと勉強してるんだな。お兄ちゃんがちっちゃい頃は、どっちがどっちの丘なのか？ こんがらがってたよ。」

「あはは…。」

「その通り、先に神の使いである鷲が6羽止まったのは、レムス様を選んだアヴェンティヌス丘の方だったんだ。けれど、その少し後に、ロムルス様を選んだパラティヌス丘へ6羽よりも2倍の鷲が止まったんだ。」

「それだったら、やっぱり弟のレムス様の方が選ばれたんじゃないの？」

「何に重きを置くか、だったんだろ？ 結局、ロムルス様が勝つ

たのだから、みんなは『血』と『数』を選んだんだよ。だから、あの時止めたパツラスもアントニア様も、パラティヌス丘にいるのだから、兄を敬うのは当たり前と言ってるようなもんさ。」

私はその寂しそうなドルススお兄様の横顔が見ていらなかった。ご自分が後に生まれてしまっただけで、その運命が既に決まってるなんて。私はレムス様は、ご自分の運命と闘おうとしていたのでは？と思えてならなかった。

「お兄様、必ずしもみんなが言ってる事が正しいってわけじゃないと思いますよ。レムス様だってご自分の方が正しいと最期まで思っ
てらしたんでしょ？」

「ユリア…。」

「私はネロお兄様もドルススお兄様も同じくらい大好き。だからどつちが偉いとか、6羽よりも2倍の18羽止まったとか、関係ないです。」

ドルススお兄様は涙を浮かべて喜んでる。やっぱり嬉しかった。

「ありがとうな、ユリア…。お前は本当に優しいな。」

「そんな事ないですよ、お兄様。」

「でも…計算だけは、もうちょっと頑張ろうな。」

「え…？」

「6羽の2倍は12羽だ。」

たはは…。

相変わらずドルススお兄様は手厳しい…。でも、お兄様のわだかまりはどこか消えたようで、その後はすっかりネロお兄様と仲良くなつた。むしろもっと仲良くなって、周りの人達を明るくさせてくれた。ドルススお兄様は、意外に人に気を遣う優しい人なんだと分か

った。

「何だよドルスス、その計算式どこで見つけたんだよ。」

「パッラスが教えてくれたんですよ、ネロ兄さん。あいつ、すつこく勉強家で色々な計算式を覚えてるんです。」

何かお兄様達が羨ましく思った。思いっきり喧嘩できて、その後は思いっきり前以上に仲良くなれて。これが男の人なんだって何となく感じた。

「ふ〜。あの二人が仲良くなってくれて本当に良かったわ。」

「アントニア様！」

アントニア様は腰に片手をついて、一安心のような表情を優しく浮かべてお兄様達を眺めてる。

「男の子ってね、いつつも何処かで争ってないと駄目なのよ。兄弟でも仲が良いだけでは成長しないのよ。」

「へえー。」

「ゲルマニクスだって、弟のクラウドイウスと取っ組み合いの喧嘩を始めた事があるの。その時に私が怒ったのは、クラウドイウスの方だったのよ。」

「ええ?! どうしてですか?!」

「クラウドイウスは『兄さんは五体満足に生まれた。僕はそうじゃない!』って泣きべそかいたからよ。私は『だから何?! 親からもらったのは身体だけなのか?!』って叱ったわ。」

アントニア様って凄い…。

「それからクラウドイウスは一生懸命勉強するようになったの。ゲ

ルマニクスが容姿端麗で体力に自信があるなら、自分が自信の持てるものを探そうってね。そういう懸命な姿が、今では長男のゲルマニクスからも一目置かれるようになったってわけ。」

そんな理由があつたんだ。

でもアントニア様は頭を抱えてる。

「しかし、そのおかげでリウィツラが男勝りになってしまったのよ……。」

リウィツラ叔母様は、確かにあの高慢ちきのリヴィアと話す時だけはとつても男っぽい。

「ゲルマニクスとはしょつ中取つ組み合いの喧嘩はするは、一度思い込むと全然周りが見えなくなつて強情になるし、そのくせ騙されやすいから。昔なんか知らない人にずつとついてっちゃつた事もあつたのよ。」

「ひええええ！」

「今はあんなに女性らしさに目覚めてるけど、本当に私は産み方を失敗したんじゃないか？つてぐらいにリウィツラは本当に困つたちゃん。」

すると、そこへ突然険しい表情を浮かべていたサリウスとクツルスが走つて向かつてきた。

「アントニア様！先ほど、ピソ様がローマへご帰還されました！」

「何ですつて?!」

ゲルマニクスお父様とは口論ばかりしているピソが、自分の仕事を放棄するかのようにな地に離脱してきたのだ。その衝撃は、これから

訪れる数多くの悲劇の始まりでもあった。

続く

第五章「パラティヌス生活」第七十話

『引き締め』

この言葉は、当時ティベリウス皇帝の統治下を表す言葉。ローマ市民においては、パンの代わりとして口にするぐらい、誰もが一種の流行り言葉にして冷やかすようになっていた。

しかし、今日は違った。

まるでそれらを吹き飛ばすような共和制最高の名門たるクラウディウス家の正餐が開かれたのである。ティベリウス統治下で、これほど豪華絢爛で盛大にパラティヌス丘で開かれた正餐は皆無だったかもしれない。事実、この正餐の記録は、後の「セイヤヌスの狂乱」の起因ということで「記憶の抹消」であるダムナティオ・メモリアエにされてしまうことになるのだが……。

「あつはははは！イヤー、やはりティベリウス皇帝陛下も人の子でしたな。ドルスツス様は本当に素晴らしいご活躍をなされた。」

「これはひよつとしたらゲルマニクス様の人気を追い抜け追い越せかもしれませんぞ。」

「いやいやそうなるとまずいのは、あんたの所ではないかい？」

「それはおぬしもそうだろう……。」

元老院のご老人方も、今日は満足そうな笑顔を浮かべてる。ひよつとしたら、皇帝が大母后リウエア様とご一緒に参加されてる正餐は、これが最初で最後だったのかもしれない。ティベリウス皇帝にとつて、ご自慢の子息であるドルスツス叔父様が、元老院からイリリクムでの和平対立調停の成果を認められ、略式凱旋式の決議を得たからだった。

「ピソ様がローマへご帰還されて、ゲルマニクスの連中が呼ばれないのは、クラウディウス氏族の皮肉か？」

「その発言は葡萄酒を水と薄めて飲み込んだ方が良いでしょう。あそこにおられるのは、ゲルマニクス將軍の母君であるアントニア様とその孫達なのだからな。」

「これはこれは…。」

また、ピソのローマへの帰還は、一部の関係者には多いに喜ばれていた。私とネロお兄様とドルススお兄様も、仕方なくアントニア様の命で正餐に参加する事になった。勿論、あの高慢ちきのリヴィアも正装してやって来てた。

「ユリアちゃん、貴女のストラみずばらしいわね。」

「これはリウィツラ叔母様から頂いたものですけど。」

「あら…。通りでアテネを彷彿させる質素さ。さすがお母様の選択。」

「どうも…。」

その後に堂々とティベリウス皇帝陛下がやって来た。今夜は盟友ピソの帰還とあって、舌も滑らかに大声で話されてる。

「ピソ、元気だったか？」

「ティベリウス皇帝陛下もお変わりないようで。」

「そういえば、今夜はドミティウスも来ているからな。久々に共に明け方まで呑み食いしようじゃないか。」

「陛下お好みの葡萄酒を用意させました。」

「ほう、これは素晴らしい。おい、ドミティウスは何処だ?!」

そういえば、あのトカゲとリウィツラ叔母さまから呼ばれていたセ

イヤヌスの姿が見えない。私は少し疲れてしまい、ドルススお兄様に断つて外の空気を吸いに行った。しばらく誰もいない所を歩いていると、物陰から聞き覚えのある笑い声が聴こえる。リウィツラ叔母さまだ！

「あら、ごめんなさい。」

「大丈夫ですか？」

「あ、あなたは．．？」

「一度、ドルスツス様との婚約式の時に、リウィツラ様にはお目にかかりましたセイヤヌスです。」

叔母様は大きなお腹抱えながら、だいぶ葡萄酒をお飲みになられるのか、足元がおぼつかない感じだった。私は何故かつい聞き耳を立ててしまった。

「あっははは！トカゲのセイヤヌスさんではないですか！」

「トカゲ？」

「あらごめんなさい。エトルリアのウォルシニイ生まれのセイヤヌスさんでしたね？えっと、『エトルリア人はイタリア古来の民族で、我々の祖は初期の王制ローマの王だった』でしたっけ？私、それを聞いて寒気がしちゃったわ。」

「それは失礼いたしました。リウィツラ様へのお目通しで、自分はさぞかし緊張していたのでしょうか。」

「うっそ．．．。貴方はそんな人ではないわ。上のものにヒーコラするような、お・ひ・と！」

「さあどうでしょうか？エトルリア人は海の民でもあつたんですよ。それには誇りも持っていました。見方によっては、忠義を尽くす覚悟がいつでもあるってことです。」

するとセイヤヌスは自分の右腕の傷を見せる。リウィツラ叔母様は

少し悪戯っぽくその傷を人差し指でたどりながら、ずっとからかっている。

「船を海の上で乗り回すのと、女性を乗り回すのではわけが違うわ。」

「船荷が一杯の方が勇敢になれるってものです。」

「二つも既に乗っているのに？勇敢になれるものならなってみなさいよ！あっははは！」

リウイツラ叔母様は葡萄酒を指先につけて、笑いながらセイヤヌスにピンピンと飛ばした。セイヤヌスは険しい表情のまま、その侮辱に耐えながら苦笑している。それでもその悪戯をやめない叔母様に剛を煮やしたのか、いきなり杯を取り上げ、自分の頭から葡萄酒を被り、口元にしたたる葡萄酒を舌先で舐めながら味わい、ゆっくりと叔母様と口づけを交わしてしまった！

「う、ううん…。」

リウイツラ叔母様？！

葡萄酒が回っているせいなのか、唸ってばかりの叔母様はなかなか離れようとしなかった。むしろセイヤヌスの身体にしがみつくように、叔母様はますます息を荒くしているが、ようやく自分が何をしているか気がついて、セイヤヌス突き飛ばした。

「な、何をするわけ！？」

「これは、貴女が悪いものではありません。私はただ、葡萄酒を被っただけなのですから。」

「汚らわしい！」

「では、改めて清めましょうか。」

「止めて頂戴…！！人を呼びます。」

「いいですよ。でも、呼ばれたくないのは、本当はあなたの方なのだから。」

怪しく微笑むセイヤヌスに、リウィツラ叔母様は誘惑に負けるよう抱きついて、再び激しく口づけを交わし始める。私は、子供が見てはいけない、大人の暗部を見てしまった。

続く

第五章「パラティヌス生活」第七十一話

リウィツラ叔母様はアントニア様の部屋で横になって寝てる。顔には水を含んだ布を被せて。相当酔っ払って唸っている。

「うつつ…頭が…回る。」

「全くなんて子だい?! 妊娠中に葡萄酒かつ喰らって気を失うなんて。リウィツラ、あんたどうかしてるよ!」

「母さん…あんまりキンキン怒鳴らないでよ。頭に響くんだから…」

叔母様は頭から布を取り、リツラやシツラに助けてもらいながら、体を起こした。

「これが怒鳴らずにいられますか?! もし転んでお腹の子供達に何かあったらどうするつもりだったの?! セイヤヌ様があんたを見つけて連れてきてくれたから良かったものの…」

「それは、大丈夫よ…」

リウィツラ叔母様から突如笑顔が消えていた。そう、まさか叔母様とセイヤヌがあんな事を…。できれば夢であって欲しかった。私は叔母様とドルスツス叔父様は心から愛し合ってる夫婦だとずっと思っていたから。

「リウィツラ、大丈夫か?」

「あら、貴方。ええ、もう大丈夫。少し疲れてしまっただけだよ。」

「無理するなよ。お腹の子供達に何かあったら大変だからな。」

「そうよ、お母様。今は一番大変な時期なので。くれぐれも飲みすぎないでね。ここにお水置いておくから。」

「ありがとう、少し一人にしてくれない？」

アントニア様、ドルスツス叔父様はお互いに顔を見合わせ、少しため息をついて頷いた。けれど、リヴィアは心配そうに眺めてるが、叔母様はその眼差しを面倒臭そうに背けていた。

「お願いだから独りにしてちょうだい！私は少し休みたいの。もう！」

リウィツラ叔母様は明らかに苛立って、その剣幕は普段とは違っていた。しかしアントニア様はあまりのリウィツラ叔母様の身勝手な言動に、今にも破裂しそうに怒りを露わにしそうだったが、さつとドルスツス叔父様が感付いてアントニア様を外へ出し、みんなは腫れ物から逃げるように、部屋から出て行った。私もドルスツスお兄様に手を握られて出て行った。

「なんて！ワガママな娘なのかしら？！親の気も知らないで出て行けどなんて！あそこの部屋は私の部屋よ！」

「まあまあお義母さん、落ち着いてください。リウィツラは少し酔っ払ってるんですよ。」

「あの娘は本当に！恩知らずというか、自分勝手というか！」

すると、部屋の中から扉に向かって何か投げつけられた音がした。何の音であるかすぐ気がついたアントニア様は、閉められた扉の外からリウィツラ叔母様へわざと聞こえるように大声を張り上げて叫んだ。親子げんかのはじまり。

「あんたみたいなの！馬鹿な娘はどんなに探したって見つからないわよ！孫娘達の方がよっぽど素直で良い娘じゃない！」

「うっさいなー！だいたいそうやっていつも決めつけてばかりじ

やない！クソババ！」

「クソババ？！何？！その言い方？！それが親に対する態度なの？！自分の部屋にも戻れないくせに、親の部屋に閉じこもって偉そうに叫ぶんじゃないわよ！」

「この性格はどっかのクソババ譲りだから諦めたら？！だいたい自分が産んだ子が妊娠中なのにいたわる気はないわけ？！」

「はあ？！あんたがバツクス様の真似して葡萄酒飲みすぎるからでしょ？！自業自得って言葉を知らないわけ？！」

「あー！うるさい！うるさい！たらうるさい！妊婦は酒飲んじゃいけないっての？！」

「そうは言っていないわよ！馬鹿みたいに飲むからって言うてるだけでしょうが？！」

「その馬鹿ってのが余計なんだよ！」

「なによ？！馬鹿な娘に馬鹿って言って何が悪いの？！」

「うるさい！うるさい！たらうるさい！」

凄まじかった。

アントニア様が昨夜私に教えてくれたリウィツラ叔母様の男勝りで強情な性格が、本当だった事を身をもって知った。

「何事ですか？！アントニア。」

「あ！リウィア大母后様。」

まずい！

大母后様が心配なさってわざわざ様子を観にきてくれた。しかも、後ろにはティベリウス皇帝陛下までできてしまってる。

「お父様！？」

「どうしたんだ？ドルスッス。何を騒いでるんだ？」

「あ、いえ。その、リウィツラのやつが妊娠中なのに葡萄酒を飲み

過ぎたらしく…。」

すると、大母后様がクイツと細い眉毛を上げて扉を見る。

「それで、アントニアの部屋に閉じこもってるわけなの？」

「はい…大母后様。」

「全く、情けない。妻の狂乱ぐらい自分で何とかできないのか？ドルスツス。」

しかし、そのティベリウス皇帝の言葉に反応したのは、大母后リウイア様だった。

「あんたも人の事言えないでしょ？」

「母さん、何もそんな事を今ここで言わなくなつて…。」

「貴方が偉そうに自分の子供に説教してるからよ！ロードス島へ勝手に逃げたお前に、ほつたらかきにされたまだ八歳のドルスツスを育てたのは、一体誰だと思ってるわけ?!」

「それは、お母様ですけど…。」

「私の育てたドルスツスに文句があるって事は、あたしに文句があるってことかい？」

「違いますけど…。」

「大体、最近のあんたのだらしない身体は何だい？！葡萄酒ばっかりかつ喰らつて、毎日酒焼けした声になって！昔の『鋼の巨人』の異名は落ちぶれたものね！」

「…。」

今度はティベリウス皇帝陛下と大母后様が一触即発状態になりそうだった。と、いうよりも、ローマの女性の気の強さは何処の家族でも変わらないのかもしれない。ティベリウス皇帝陛下は、大母后様と喧嘩を避けるように、近くを通りかかったセイヤヌスを見つけて、

その場から逃げていった。

「おお！セイヤヌス。」

「皇帝陛下、如何がなさいましたか？」

「ちようど良かった。ドミティウスを見かけなかったか？」

「アヘノバルブス家のですか？」

「そうだ。うん？セイヤヌス、お前何だか葡萄酒臭いぞ？」

「申し訳ございません、皇帝陛下。先ほどつまづいてしまって。」

テイベリウス皇帝はセイヤヌスの肩を組んでその場から去ってしまった。荒いため息をつくりウィア大母后様は、我が子に呆れ返っている様子。アントニア様も閉ざされた扉を険しい顔で眺めてる。

「アントニア。お互いに子育てには失敗したようね。」

「本当ですわ、リウィア様…。実の子供より孫の方がお利口だなんで。」

何とも気まずい雰囲気になってしまった。

「そうだ！向こうでみんな楽しんでみましょう。私の部屋にはたくさんのお菓を用意させるから！」

「リウィア大母后様のお部屋ですね？！良い考えです事！みんないらっしやい。」

「アグリッピナの好きな葡萄酒もあるわよ。」

私達アントニア様の孫と、リウィア大母后様の孫息子であるドルスツス様は、ついていく他無かった。でも、私はあの閉ざされた扉が気になっている。あの中で、リウィツラ叔母様は、自分のなされた事に独り苦しんでいるのではないかと…。

続
く

第五章「パラティヌス生活」第七十二話

次の朝、外はまるで私のもやもやした気持ちを表すような雨模様。冷たい青色がパラティヌスの神殿たちを凍えさせるのを見ていると、色々な荷物を抱えたセルテスがこちらへやってくる。

「アグリッピナ様。」

「セルテス。どうしたの？」

「実は、このほどアントニア様から許可を頂いて、わたくし結婚する事にしたんです。」

「結婚?!」

「ええ、セリアという素敵な女性に一目惚れしまして。そして偶然にもセリアのお父様は、アクイリアの骨壺の石像を見てくれてたんです。意外に色々な人から評判を得まして。本格的に職人にならないか?とシラクーサへ誘われました。」

「本当に?凄いいじゃない!」

「自分は石工なんて、もう、とつくに諦めてたんですがね。アクイリアのお陰でもう一度頑張れるようになったのは、不思議な感じですよ。」

「ついでにお嫁さんまで見つけて?」

「あはは、そうですね。でも、僕は彼女も大切にしたいんです。とっても純粹で、凄く素直で。それに…パラティヌスには、私よりも優秀な門番がいますしね。」

私は少しなんだか淋しくなっていました。セルテスのいつも笑顔の挨拶が大好きだったから。でも、解放奴隷の彼にとつては、今がとっても大切な時期なんだと思ったから、笑顔で見送る事にした。

「セルテス!頑張つて。いつか私の石像も作ってくれる?」

「勿論です、アグリツピナ様！お約束しますよ。」
「ありがとうございます。」

セルテスはわざわざしゃがんで、ギユツと抱きしめてくれた。そしてセリアという女性に、しっかりと愛されているという自覚を持った素敵な笑顔で何度も挨拶をして去っていく。すれ違いにこちらへやってくるドルススお兄様と出くわし、多分、色々な挨拶やら説明をして、セルテスは二三度担いだ荷物を背負い直して、自分の道を進んで去って行った。

「セルテス、結婚して石工になるんだってな。彼が門番じゃないと、何かしっくりこないよ。」

「でも、セルテスは本当に才能のある職人になれると思いますよ。」

「あのアクイリアの石像を作ったんだもんな。本当に命が宿っているようで、初めて見た時はビックリしたよ。」

「うん…。」

雨はさらに強くなって、風と共に横に流れる様に降っている。私はそれを見ながら、まぶたに焼き付いた、リウィツラ叔母様とセイヤヌスの逢引がどうしても浮かんでしまう。

「どうしたユリア？そんなにセルテスがなくなるのが淋しいのか？」
「？」

「ううん…。」

「どうした？」

「お兄様…。何と云うか、結婚や信頼って何なんでしょうか…？」

「はあ？お前、突然何を言い出してるんだよ？」

「なんとなく…。」

「なんとなくって、誰か好きな奴でも出来たのか？」

「ううん。」

「それじゃ、またセネカの真似事か？」

「うん。ちよつとした乙女心って言うか…。」

「乙女心って？お前、まだまだ五歳だろ？好きな奴もいないのに、なんで乙女心だったり、いきなりすつ飛んで結婚の事で悩んでるんだよ?!」

「ちよつと。」

「お前…ひよつとしたら、熱でもあるのか？」

そう言うと、ドルススお兄様は私のおでこに手を当てながら真剣に心配してくれる。私はあまりにも真剣なお兄様のお顔を拝見していたら、笑いがこみ上げて仕方なかった。

「お兄様ったら…。熱なんかありませんよ。」

「じゃ、どうしたんだ？何かあったのか？」

また再び、リウィツラ叔母様とセイヤヌスの情事が目に浮かぶ。

「前に…アントニア様から『紐でお互いに繋ぎとめておかなくとも、家族や兄弟姉妹を理解する事ができる』って教えてもらったんです。でも、ずっと一緒にいるわけじゃないから、誰が何をしているかなんてわからないですよね？」

「うん…。」

「でも、結婚して、家族を持つ事は、お互いに信頼し合って、始めて成り立つんですよね？」

「うん、父さんや母さんのようにな。」

「でも、それって運命の巡り合わせですよね？もし少しでも相手の事が信頼できなかつたら？もし相手が少しでも自分の事を信頼してくれなかつたら？」

「ユリア…。」

しがみつくようにセイヤヌスへ抱きつかれたリウィツラ叔母様。私は昨夜の事が、対岸のトロイアで起きた火事とは到底感じられなかった。

「その時は、晴れになるまで待てばいいさ。」

「ネロ兄さん？」

「ネロお兄様?!」

私達の話の後ろからこつそり聞かれてたみたいで、腰に手を置いて微笑みながら優しく答えてくれた。

「少しでも相手の事が信頼できなかつたら、自分から相手を信じればいいさ。少しでも相手が自分の事を信頼してくれなかつたら、信頼してくれるように頑張ればいいのさ。ようは諦めないって事だよ。いずれ天気が晴れになって、青空に大きな虹が架かるんだからさ！」

ネロお兄様の外を見つめるお姿は、本当に眩しくて凛々しくて美しかった。自分が信じて疑わないという事を実践されているんだって…。

「うわ！」

「雨がこつちにやって来た！」

「やーん、ビショビショになっちゃった〜。」

私達三人は、矢のように飛んでくる雨から逃げる。

「ネロ兄さん。」

「だ、大丈夫…。そのうち晴れるって！」

「本当に？」

「あ、ドルスス？お前疑ってるんだろ？」

「だってネロ兄さんの例えがさ……。もつと晴れそうなときに言ってくればカツコウついたのに。ユリアなんてビショビショだよ。」
「トウニカまでビツシヨリ……。」

「ユリア、早く着替えないと風邪引くから。」

「はい、ドルススお兄様。」

「え、お前達帰っちゃうの？」

「あつたり前でしょ？ネロ兄さんの言う事聞いてたら、ユリアも僕も風邪引いちゃうよ。」

すると、突然雨は止み出して、雲が川を流れるように向こうへ行つてしまつと、太陽の光がパラティヌスのあちらこちらに降り注いでくれた。

「うわー。」

「凄いー。」

「ほら！晴れただろ？」

「うん！ネロお兄様凄い！」

「あ！ネロ兄さん！ユリア！あれ見てみなよ！」

そこには七色に輝く虹の橋が、水滴で輝いたローマ神殿の空にかかっていた。まるで桃源郷のように、うっとりするほど綺麗な虹の橋。

「ネロお兄様の言う通りだったな？ユリア。」

「うん！」

「ユリア……。どんな時でも、この虹の橋を忘れないようにしような。」

「はい！」

私達三人はお互いに手を繋いで、ずっとずっと虹の橋を眺めていた。それが、三人で手を繋いだ最後の記憶。そして、私が今まで生きて

追求めた光景こそが、この時に見た、ローマに架かる信頼という名の虹の橋かもしれない。

続く

第六章「亡父」第七十三話

父ゲルマニクス・ユリウス・カエサル。

三十四歳の若さでこの世を去った。

気が付いたら、今の私は十歳もお父様より年齢が上になってしまっている。

私個人は、何度も自分に親しい人達の死を目の当たりにしてきたはずなのに、幼い頃に体験したお父様という大きな太陽の消滅だけは、自分の心の中でぼっかりと穴が空いている状態。いつも思い出そうとすると、自分の心臓を抉られるような気分になってくる。

セネカにそれを相談すれば、『死自体よりも死の随伴物が人を怖れさす』と案じられ、ブルスには『無理に過去をほじくり返す必要は無いのでは?』と問われる。けれども、二人が共通して言う事は、本当の事実を知る者は、私しか残されていないのだと。

だから、今回は勇氣を持って記憶の扉を開く事にしようと思う。そこに何があり、何が起こっていたのか。そして幼いながらも父ゲルマニクスの死によって、何を感じ、何を思い、再び生きて行こうと思えたのか。身近で見守ってくれていたパツラスの話や、私の最後の夫でもあったクラウディウス叔父様が書き残した歴史書を確認しながら、亡き父の姿も添えて、筆を進めてみることにする。

10月10日。

私は何度もこの日に神々を呪った。後にウエスタ神官長になった親友のソリアは、なんたる冒瀆だといつも叱るのだが、私がこの日に

神々を呪うのには、それなりの理由がある。それは、父ゲルマニクスがこの世を去った時に、虫の知らせも、神々のお告げも何もなかったからだ。

私達兄妹三人は、呑気にもその事を全く知らず、いつものようにパラティヌスで浮かれていた。特にドルスツス叔父様のイリリクムでの偉業を追いかけるように、お父様が小アジアのカツパドキア、コマゲナをローマの属州に編入したという報告を受けていたからだった。

「それにしても、ゲルマニクスお父様はやっぱり偉大な方なんだな。カツパドキア、コマゲナをローマ属州に編入させるなんて。」

「本当ですね、ネロお兄様。」

「でも、ネロ兄さん。ユリアがまだウイプサニアお母様のお腹にいた頃の、オツピドウム・ウビオルムは大変な時期でしたよね？」

「そこって、私が生まれた場所でしょ？ドルススお兄様。」

「うん、そうさ。」

「あの時は、ひよつとしたら、僕ら家族はローマ兵士達に殺されてたかもしれないんだよ……。」

「ええ?!」

私がお母様のお腹にいた頃は、初代皇帝アウグストゥス様が崩御され、テイベリウス様が帝位された年。しかし、同時に東方地域パannonia地方と、ゲルマニアでローマ軍団による反乱、蜂起が起こった年でもあった。

承知の通り、ローマ軍団は給料をもらい、ある程度の定年に達すると退役金を得て退役するという職業軍人達。戦がなければ給料も低い土木工事などの人足となるので、不満を抱える者も少なくなかった。事実、当時は退役金不足対策として、兵役満期でも除隊出来な

いようになつていた。それでも彼らが耐えていたのは、アウグストゥス皇帝陛下の治世があつたからこそ。彼らのローマ軍団としての誇りを刺激されていたからだ。しかし、ティベリウス様に帝位されると、彼らは手のひらを返すように待遇改善の声をあげ、暴動で自分たちの要求を飲ませようとし始めたのだ。

「でも、お父様はローマ軍団がティベリウス新皇帝陛下へ楯突く事など許さず、むしろ忠誠を誓うように説得したのさ。お父様は恥も外聞もかなぐり捨てて、一人一人に声を掛けては、何度も何度もローマ兵士達を説得してたよ。」

「僕も覚えてるよ、ネロ兄さん。それでも、時々僕らが寝ている所へ、脅かすようにローマ兵士達がやってきては、お父様へ不満を述べたり、お父様を崇拜している者達は、今こそティベリウス様を討つ時だ！つてお父様が皇帝になるべきだ！つて物騒な事も叫んでた人もいたつげ。」

「そうそう、そこで待遇改善を約束する文書をわざわざお父様は作成されて、自分の財産を投げ打つてでも退職金を彼らに支払うよう約束したんだ…。」

ネロお兄様とドルススお兄様の細かい描写を添えたお話を聞いていると、まるで自分もそこにいたかのような錯覚さえ覚えた。勿論、私はお母様のお腹の中にいたのは事実なのだが…。

《オツピドウム・ウビオルム 初冬》

冬の訪れをいまかいまかと待ち焦がれている寒さが、ここオツピドウム・ウビオルムに冬営するローマ第一及び第二十軍団へ容赦無く雨と共に降り注ぐ。憔悴しきっているはずの彼らなのだが、ローマに対する反乱の意志は、冬でも鋭い眼つきで睨む狼のようだった。

「我が栄光の輝きと、最上の誇りを有するローマ兵の兄弟達よ！ここに
あるのは、ティベリウス皇帝陛下から直々に承諾を受けた、貴
様達の待遇改善を約束する文書だ。モゴンティアクムに冬営するお
前達の兄弟とも言える第二、第十三、第十六、そして第十四軍団の
兵士達もこれに了承した！これを見ても、まだなお、貴様達はこの
ワシに信義に反し、ローマへ刃を向けると言うのか？！」

だが、第一及び第二十軍団のローマ兵士達は、ゲルマニクスの懇願
に首を立てに振る事はしない。むしろ憐れみの目で見つめるかのよ
うに、ゲルマニクスへ詰め寄ったのだ。

「ゲルマニクス様。奴らとあつしらは携える信義が違つのです。待
遇改善など二の次であり、我々が求める事はただ一つ。あなた様こ
そ次期のローマ皇帝に値する方であると考えているからです。なぜ
それが分かつて下さらないのですか？！」

「分からぬわけではない！だが、我々はいつこの間まで、ティベリ
ウス様に率いる兄弟として、共にゲルマニアで戦つたではないか！」
「我々の魂は、クラウディウス氏族から帝位した途端に、偉大なる
カエサル様の名前を、鞍替えして使うような輩と共にあるわけでは
無いのですぞ！我々の命は、カエサル様の血を引く勇者と共にある
のです！その勇者こそ、ゲルマニクス様、あなた様なのです！」

彼らの身体は冷え切っていた。

しかし、怒りに満ち溢れて肩をあげている猛者どもの身体からは、
闘志とも似た死を決意させる気迫がこみ上げていたのである。

続く

第六章「亡父」第七十三話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>

アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア(5 - 43年)年の差 + 10歳年上>
アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年-62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年-69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

<カッシウス・カエレア（紀元前12年-41年+27歳年上>
後の兄カリグラ刺殺犯

第六章「亡父」第七十四話

《オツピドウム・ウビオルム　？初冬》

ゲルマニクスの所有する別荘のヴィッラは、たいそう立派な作りになっている。その寝室には、薄明かりの中でゲルマニクスが寢床で一点をぼうつと眺めていれば、そばではお腹が少し膨らみ始めた妻のウイプサニアが、雨を見ながら布をたたんでいる。

「あなた、雨はまだ止みませんね。」

「うん。」

「ネロヤドルススはもう寝つかせました？」

「うん。」

「ガイウスもまだまだ子供だから、せめてカリガだけは…って、あなた？」

「うん。」

「もう、さつきから神々へ捧げられた羊のような返事ばかりで！全く聞いて下さない！」

「うん？すまんすまん。」

ゲルマニクスにとって、それは痛手だった。自分が率いる兄弟とも思えるローマ軍団の反乱が、自分が思っていた以上に広範囲に広がっていたからだ。確かにローマ兵士一人一人同じ目的で動いているわけでは無い事は、頭では十分に分かっているはずだった。だが、苦楽を共にし、時にはその勇敢な意志に窮地から救われれば、嫌でも自分と同じ方向を向いていると錯覚してしまう。これが階級社会による価値観の違いであると。

「クツルスは、あいつは…元気かな？」

「突然、どうしたのですか？」

「ワシはなんだか、腹を割ってクツルスやサリウス達と酒を飲みたくなってきたよ。」

しかし、軽いため息をついて嫌悪感を表すウイプサニア。

「私は勘弁して欲しいですね。あの方達と飲まれるときのあなたは上機嫌で、大はしゃぎで、朝まで止めどなく飲まれて。それに、あの方々と付き合うようになってからのあなたは、言葉遣いも振る舞いも、野生的でまるで変わってしまったのですから。」

しかしゲルマニクスは立ち上がり、いたずらっ子のように目を輝かせ、ウイプサニアの後ろから急に抱きしめた。

「わっ！」

「けれど、お前は野生的な所が嫌いなわけではなからう？」

頬を赤らめるウイプサニアの口元は緩み、ゲルマニクスは後ろから首筋をなぞる様に唇で辿る。満更でもないウイプサニアも、自分を抱きしめるゲルマニクスの腕を優しく掴んでる。

「ワシもお前の野生的な所は好きだ。」

「んっもう！それです。その”ワシ”ってご自分を卑下なさる言い方はおやめください。」

「どうしてだ？」

ウイプサニアはゲルマニクスの目の前に立ち、優しく瞳を見つめながら、右手の人差し指と中指を滑らすように、ゲルマニクスの耳上の髪の毛を整えてあげる。

「あなたは素のご自分のままで十分魅力的な男性ですわ。私が貴方と出会った時から、これは運命的な出逢いだと何度も思いました。なぜならば、あなたには誰もが持つことの出来ない、高貴な輝きがあるからだ。」

「高貴な輝き…か？」

「ええ、なんと言うのでしょうか、存在感のようなものでしょう。例えば貴方がどの階級にしようとも、貴方の魂から湧き上がる自然な魅力は、誰もを惹きつけるだけの力がありますもの。」

ウィプサニアの潤いを増した瞳は、夜空に輝きを見せる星達の様である。その瞳に見つめられたゲルマニクスも、ウィプサニアの腰元を自分に引き寄せる。

「でも、ワシを惹きつけたのはお前だけだ。」

「また！せっかくの百年の恋も醒めます！」

「ガッハハハハ。すまんすまん。うん？」

するとゲルマニクスは突然しゃがんで、ウィプサニアの膨らんだお腹に耳を当てる。

「今、蹴ったぞ！」

「まさか、まだまだですよ。」

「次こそは女子かな？」

「さあどうでしょうね？フフフ。」

「また男だと喧嘩が絶えなくなるぞ。ウィプサニア！お前のような美しい女子が欲しいな。」

「貴方ったら。」

二人の幸せな時間へ水をさすように、ある老兵が礼節を欠いていきなり寝室へ飛び込んだ。

「きゃあ！」

「随分と立派なヴィツラですな？ゲルマニクス様。」

「何のようだ？ここはプライベートな場所。貴様の無礼にもほどがある！」

「無礼はどちらでしょうか？ゲルマニクス様。あなた様は先ほど、テイベリウス様が承認されたという文書の中に『アウグウトス様からの遺贈金は、二倍にして支払う』と書かれていると言われた。だが、あつしらはどうしたらそれを信じる事ができるのでしょうかね？」

「何だと？」

「若い連中は待遇改善など二次、まずはゲルマニクス様が次期皇帝になるべきだ！などと、目に見えないものに命を掛けたくなる。だが、あつしらの様な老兵は、目に見えるものがなければ、自分の命を掛けてまでも奪い去るのみ。どちらにして、ゲルマニクス様、あなた様があつしらか連中かの意見を飲むようには思えないのです。」

「…。」

「外は冬を迎える寒さしのぎが精一杯の連中ども。だが、あなた様がどんな高貴な血脈の持ち主であろうとも、バカにしちゃいけませんよ。まさか時間を稼ぐだけ稼いで、誰かをお待ちになってるわけではないですよね？」

老兵は下から舐める様にゲルマニクスを見上げ、瞬き一つせず早急の答えを求めているようであった。

続く

第六章「亡父」第七十五話

《オツピドウム・ウビオルム　？初冬》

「分かった。目に見える形で行おう。貴様達の除隊の手続きも明日からここで行う。」

「本当ですね？あつしら年寄りを騙そうなんてしたら、許しませんよ。せめて死ぬ前には孫の顔ぐらいは拝みたいんですから。」

「ワシの言葉に二言は無い。」

ゲルマニクスがティベリウス承認の文書と叫んだものは、実は彼自身が自作したものだ。忠義を自分に示してくれるローマ兵士にも、そして忠義を示さなければいけないローマにも、自分を犠牲にし、自分が両者の架け橋となることで、今回の反乱をゲルマニクスらしいやり方で鎮圧しようとしていた。これは彼の母親であるアントニアが、ウエスタの神官長オキアから学んだ教えでもあった。老兵は深く頭を下げ、静かにその場を離れていく。

「あなた…。」

「どうだろう。納得してもらったかな？」

「大丈夫なのですか？」

「寝室までやって来るなんて、彼らの我慢も限界なのだろう。とにかく明日には自分の財産から全ての遺贈金を支払い、除隊を願うものにも手続きを取る。そうすれば、事は万全に終わるはずだ。」

「そうだと良いのですけど…。こんな事が毎日続くようでは、安心して子供達と寝る事さえ出来ないです。」

「分かっている、ウイプサニア。もうしばらくの辛抱だ。」

「はい、分かりました…。」

だが、この反乱鎮圧はゲルマニクスの予想に反する結果となつてしまふ。翌日、大勢の老兵や古参兵士達が、激しい冷たい激しい雨に晒されながら、除隊の手続きを希望するためにここオツピドウム・ウビオルムで辛抱強く列を作り並んでいた。だが、憔悴し切つた彼らを逆撫でするように、そこへ招かれざる客人達が訪れてきたのである。

「おい！押すな！おめえ、横入りする気じゃあるめえ？」

「ち、違つよ爺さん！後ろから急に押されたんだ！」

「何だと?!」

列を乱す彼らは、元老院からゲルマニクスの元へ派遣された使節団であつた。

「おいおい！何なんだ！？ふざけるじゃねえぞ！何でブクブク太つた豚どもがこんなところまでやつて来てるんだ?!」

「何かの連絡か何かじゃあないのか？」

「馬鹿野郎！そんなのんきな事を奴らがすると思うか?!わざわざあんな口クでもねえカツコウで着飾りやがつて！ゲルマニクス様が見せた文書を破棄するためにやつてきたに違いねえ!!」

「ええ?!」

「まさか？いくらなんでも!？」

「いいや、そうだ！みんな！考えてもみる！大体、何で今日まで除隊の手続きを引き伸ばしやがつたんだ?!昨日でも一昨日でもよかつたはずじゃねえか?!」

動揺していた兵士達の間にも、まるで病が移りゆくように、誤解は偏見を生み出し、妬みや恨みは怒りを暴き始める。

「確かに、そうだ!」

「信じるだの、落ち着いてくれたの綺麗事ばかり並べやがって！ローマ第一軍団ゲルマニカを馬鹿にしてんじゃねえか?!」

「結局！ティベリウスの馬鹿野郎に忠義を示せて事は、ゲルマニクス様も！結局お高く止まった、あのブクブク太った豚どもに飼い犬にされてるに違いない！」

「いいや違う！ゲルマニクス様はきつと金持ち連中どもに騙されているんだ！我々を守ろうとしているのにも関わらず、元老院から派遣された使節団に騙されているんだ！」

「そうかもしれないねえ！若い連中の言う通りだ！」

「もういい加減騙されるな！」

「みんな！武器を持って！」

「俺たちは懸命に今まで忠義を示してきたんだ！金持ち連中にこれ以上騙されてたまるか！」

特に第一軍団の老兵を中心に、疑心暗鬼に駆られたローマ兵士達はそこらじゅうを暴力で訴え、使節団の目的が自分達の望みを破棄する為にやってきたのだと思い込んでいた。三度、彼らの面前に立ったゲルマニクスの発言や説明さえも、彼らは無礼な言葉で遮る始末だった。

「とにかくだ、兄弟！約束通り、除隊の手続きはこのまま行っ！そして、この文書で約束された事はワシの命に代えても守る！だからこれ以上暴力で訴える事はやめてくれ！以上だ！」

「答えになってないぞ！ゲルマニクス様！我々はあなた様と共に、今こそティベリウスを打つ時と信じているのです!!」

「おい！ゲルマニクス！年食ったわしらの目は誤魔化されないぞ！今すぐに金を払え！でなければ、その豚どもの命は無いと思え！」

ただ、ゲルマニクスの大権を通知に来た招かれざる客人達は、ローマ兵士達が叫ぶ物騒な内容に驚愕している。

「ゲルマニクス殿、貴方は一体何の約束をされたのでしょうか？」
「あなた方には関係の無い事だ。ワシとあいつらの約束だ。」
「まさかテイベリウス新皇帝への反乱や蜂起に加担されるおつもりではあるまいな？」
「そんな事は断じてあり得ない！」

我慢の限界が来て不平不満を並べているローマ軍団と同様に、ゲルマニクス自身の中にも、眠っていた猛虎が今まさに、目覚めようとしていたのであった。

続く

第六章「亡父」第七十六話

私の知っているゲルマニクスお父様は、大きく笑い声を上げて、ご自分の事を『ワシ』と、わざと庶民的な言い方をされる方だった。けれど、後々に色々な人から聞いた話によれば、実はとても綺麗なギリシヤ語も使う事ができ、上品な佇まいの時もあったらしい。つまり私には生前見せてくれなかった、もう一つのお姿があったという事。お父様の弟であるクラウディウス叔父様はこんな事も教えてくださった。

「ゲルマニクス兄さんのいた世界の男子たるものは、血脈だけで己の力を誇示する様な愚か者は尊敬に値しないのさ。だから普段のがさつで野暮つたい喋り方は、明らかに兄さんの天性ではなく、親友のクツルスさんの影響を受けて覚えた平民の言葉だ。けれども、兄さんが本当に激怒した時には、恐ろしいほど丁寧な言葉で、冷酷に感じるほど相手を圧倒させるんだ。」

幼い頃からアキレウス様を密かに崇拜し、アレキサンダー様に憧れていた父ゲルマニクス。再び、ネロお兄様とドルススお兄様のお話そしてクラウディウス叔父様の残してくれた歴史書を元に、私の知らなかったお父様のお姿を追ってみる。

《オツピドウム・ウビオルム　？初冬》

その日の夕方、生真面目で有名な百人隊長カツシウス・カエレアは、ゲルマニクスから厳重な警備を任されていた。彼は個人的にもゲルマニクスの家族達の警備も兼任するほど、ゲルマニクスからの信頼

を勝ち得ていた人物。だが、そんな生真面目な彼にも苦手な人物がいる。

「プリアポス！プリアポス！」

「?!」

「お前のアレは大きいのだろうか？だから予に見せてみる。」

「カ、カリグラ様？ですか?!」

「へへん。」

それは、ゲルマニクスの三男ガイウス・ユリウス・カエサル。即ち後の狂帝カリグラであった。幼い頃は、父ゲルマニクスの戦場において、必勝祈願的マスコットとして、軍靴のカリガを着せられローマ軍団から可愛がられていたのだが、とにかくワガママで悪戯好きで活発な男の子だった。

「カリグラ様、只今自分は職務中でありまして、そのような不作法な事は…。」

「なんだよ！イイじゃんか。それでもローマ兵士かよ？」

「あ、いえ…はい。」

カッシウスはローマ兵特有の男子。血脈だけで全てを鼻に掛け、威張りくさる人間は大っ嫌いだった。ゲルマニクスには高貴な血脈があれど、そんなところは一切見せなかつたので常に尊敬している。だが、男子のくせに水泳を嫌い、親の七光りで無理難題を押し付けて来るカリグラにはほとほと参っていた。

「予は、アウグストゥス様、アントニウス様、そしてアグリッパ様の血を受け継ぐ高貴な生まれの男子だぞ！お前はそれを知った上で断るつもりか?!」

「あ、いえ…。ただ、カリグラ様。やはり今はどうにかお許し願ひ

ませぬでしょうか？」

「ダメだ！僕がヤレ！って言ったらプリアポスはやらないとダメなんだ！」

もはやここまでコケにされると、苦手意識は自然と高まるばかり。ましては、ギリシャ神話に出てくる男性生殖力の神プリアポスと馬鹿にされれば、奴隷扱いをされたようつで殺意さえ覚えてくる。

「ガイウス！いい加減にしないで。」

「お、お父様?!」

その静かで丁寧な口調でカリグラを叱りつけるゲルマニクスの様子は、カツシウスにとって明らかに今までとは違っているように感じた。

「お前は何を勘違いしているのですか？己を神々の子でも思っているのですか？」

「ごめんなさい、お父様。」

「足りません。侮辱されたカツシウスにも心から詫びるのです。」

カリグラは目を強張らせ、深々とカツシウスに頭を下げて謝る。すると、ゲルマニクスは顎だけでカリグラに自分の部屋へ戻るよう指図した。

「済まなかった、カツシウス。」

「あ、いえ…。」

「あいつはいつもあんな風にお前を茶化しているのか？」

カツシウスは答えにくそうに口を閉ざしたが、ゲルマニクスはその様子を察して小さく頷く。

「分かった。悪いがとにかく今夜も頼む。今は並ならぬ状態と化している。万が一の時には、貴様だけが頼りだ。」

「お任せください、ゲルマニクス様。」

ゲルマニクスは暫く歩いていたが、再びカツシウスの元へ戻り、あの質問を投げかける。

「カツシウス、貴様はどのように考えているのだ？」

「と、言いますと？」

「貴様も外の奴らと同じように、何か不満でもあるのか？」

カツシウスは少し考えて、それからゲルマニクスに答える。

「私なら、銀の皿に盛り付けられた料理を残さず食べ上げ、皿は綺麗に洗って持ち主にお返しします。」

「うん、そうか…。それを聞いて安心した。ありがとう。」

ゲルマニクスは普段通りの笑顔に戻り、自分の寝室へと消えていった。

続く

第六章「亡父」第七十七話

《オツピドウム・ウビオルム　？初冬　ゲルマニクスのヴィッラ》

「全くなんて事をしたものだ！そんな約束をすれば、彼らがつけあがるに決まってるだろうに。」

「だが、私は彼らの言い分も分からなくもないです。一方的に強制や強要をされた者達が、その不平や不満を抱えたまま戦場に挑めば、お互いの足を引っ張りかねないと思うのです。」

今朝到着した元老院の使節団の団長プランクスは、ゲルマニクスが自発的に作成した偽文書の存在に頭を抱えていた。

「テイベリウス新皇帝にはこの事態を収集出来なかった時、お前は何と申すつもりなのだ？」

「言い訳など考えておりません。如何なる事があるうとも、自分の率いる軍団の不始末は、自分の手で片づけるだけです。」

「自らの財産を投げ打つてでも、彼らの意見を汲み取ってやりたいのか？」

「はい。」

「ローマ兵想いなのだな。」

こうなるとゲルマニクスが一步も譲らぬ性格である事は、誰もが知っている事実。

「分かった…。私もお前の提案に助太刀をさせてくれ。この事の真相は内密にし、元老院の方々には根回しをしておく。」

「ありがとうございます、プランクス団長。」

「ただな…。お前はそれで良いのかもしれないが、いきり立った彼

らが次に何をするか検討もつかない。せめて我々の妻やお前の妻や子供達だけでも、この場から避難させてはどうか？」

「…。」

だが、その進言に反論を示したのが、ゲルマニクスの妻であるウィプサニアであった。ゲルマニクスは目を閉じたまま何かを推敲している。

「冗談ではありません！どうしてローマ兵の反乱を恐れて、わざわざ私達が逃げなければいけないのです？それは子供達への教育の障害にもなり兼ねません！」

「ウィプサニア殿、逃げるのでは無く、身の安全を守るための避難ですぞ。」

「避難も逃避も変わりありません！」

「そうかもしれないが、現状は貴女が考えるほど甘い物ではないのだ。」

「…。」

「ゲルマニクス、やはり少なくともモゴンティアクムまで避難したほうがいい。」

「あなた！私は反対です。」

すると、ゲルマニクスは妙案を閃いたように、険しく目を見開いて立ち上がった。

「ガリア属州はどうだろうか？」

「あ、あなた！？」

「ガリア属州のところだと？！」

「ええ、そうです。少なくとも、今の彼らよりは安全だ。」

ゲルマニクスの淡々と話す丁寧な言葉の奥深くに潜む冷酷さは、流

石に感情的になっていたウイプサニアさえも閉口させてしまう。

「ゲルマニクス！何を言い出しているのか自分でも分かっているのか？！いくら味方が信頼に値しないからとは言っても、ガリア属州民は我々ローマ人からみれば、蛮族もいいところだ！それではまるで自分の家族を危険に晒し、かれらの人質になるようなものではないか？！」

「違います、プランクス団長。そんなつもりは毛頭ございません。ただ、ローマ兵の彼らは銀の皿を取った気だけなのです。それが自分達が獲得した主導権だと言わんばかりに。やはりカツシウスの言う通り、銀の皿は洗って持ち主に返すのが筋でしょう。」

団長のプランクスは口を開いたまま、驚愕した表情を変えられずにいた。

「ゲルマニクス、お前は一体何を企んでいるのだ？」

「躑ですよ、躑。」

その瞳に宿した光は、明らかに猛虎を目覚めさせたゲルマニクスの決意を感じさせていた。

続く

第六章「亡父」第七十八話

《オツピドウム・ウビオルム 初冬 真夜中》

雨は既に取り上がり、冷んやりとした空気が辺りを包む頃、妻ウィプサニアを中心とした長兄ネロ、次男ドルスス、三男カリグラ達は、逃避の準備のため、荷車へ荷物を乗せたりしていた。

「お母様？」

「ガイウス、軍靴のカリガは置いていきなさい。」

「で、でも…。」

「仕方ないだろ？今はとにかく急がないと。」

「ドルスス兄さん。」

「大丈夫。また、ドルススと兄さんで作ってやるから。」

「分かったよ、ネロ兄さん…。」

百人隊長である生真面目なカッシウス・カエレアは、それでも寂しそうに地面に置かれたカリガを見つめるカリグラを不憫に思い、仕方なく日頃の苦手意識を捨てた。

「カリグラ様、貴方様のカリガは私がお持ちしましょう。」

「え？本当か？」

「ええ、大切な軍靴なのですから。」

「カッシウス、良いのですよ。この子は常にお前には迷惑ばかり掛けているのですから…。」

「ご安心下さい、ウィプサニア様。」

「本当にありがとう…。ほら！ガイウス。あんたもちやんと感謝の意を伝えなさい。」

カリグラは、少し気まずい感じでカッシウスを見上げ、口を尖らせて感謝する。

「ははは、無理なさらずに。毎日私を男性生殖力の神プリアポスと呼んでいたのですから、急に感謝だなんて無理でしょう。」

「それだけじゃない…。」

「え？」

「プリアポス神像は、豊かな実りを嫉妬する者からの邪視を防ぐ役割もある護符なんだ。」

カッシウスは、そのカリグラの言葉に嬉しくなって、目尻に涙を少し浮かべながら微笑んだ。

「カリグラ様…。私は貴方を一生涯、護符としてのプリアポス神像の如くお護りしましょう。」

さつきまでの曇った顔から笑顔を取り戻したカリグラ。カッシウスに大きく抱かれて荷車へ載せられると、ちょこんと膝を整え、ジツとカッシウスを笑顔で眺めている。

「プリアポス、大丈夫か？」

「はい、カリグラ様。大丈夫でございますよ。」

二人の友情はこの時に始まった。後にカッシウスがカリグラを何度も刺殺するまで…。

「うん?!」

「おい！荷車の音だ！みんな起きろ！」

「元老院の使節団の豚どもが逃げるぞ！！武器を持って！」

「クソ！俺達の待遇改善要求をやっぱり破棄しに来やがったんだ！」

反乱分子は使節団の逃避だと勘違いして、一斉に荷車へ刃を向けようと向かう。百人隊長カッシウスは軍靴のカリガを抱えたまま、幼子を胸に抱いたウィプサニアと三児を守るために必死に攻防している。

「カッシウス！貴様、なんでそんな元老院の豚どもを守るんだ！」
「何?!」

「お前にはローマ兵としての誇りはないのか?!」
「何を貴様らは抜かしておるんだ?!」

「所詮お前も豚どもから金をせびっているんだろっよ！その腕に抱えた戦利品はなんだ?!俺にもよこせ！」

「これは軍靴のカリガだ！」

「騙されやしないぞ!!」

「貴様ら！それでも栄誉ある第一ゲルマニカ軍団か?!」

カッシウスは彼らを一括した。だが、その際に反乱分子の一人である老兵は、鋭い刃でカッシウスの右肩を斬りつける。大事にしたたカリグラの軍靴を地面に落とし、激痛に大きく叫ぶカッシウス。その声を聞いたカリグラは荷車から飛び降りて、カッシウスを庇った。

「カッシウス!!!みんな!!!カッシウスを殺さないでくれ!!」

「何!?子供の声?」

「おい!これは軍靴のカリガ!」

「ま、まさか!!!?カリグラ様か?!」

「ガイウス!!!」

「ドルスス!ガイウスを守るんだ!」

「ネ口兄さん!!!」

そこには怯えたカリグラの姿、必死に美しき兄弟愛で守ろうとする

ネロとドルスス。そして傷を負った状態のカツシウスは、必死に立ち上がり反乱分子へ一喝する。

「汝らが…刃を向け、命を奪おうとした相手が誰なのか?! まだ分からねぬのか!？」

そして死すら恥じぬ高潔な態度で、ローマ兵達を憐れむように睨みつける懐妊中の母ウイプサニア。

「一体どういうことなんだ?!」

「なぜ?! ウイプサニア様やカリグラ様達が真夜中に?!」

「まるで自分達から逃げるように…。」

「守るべきものに刃を向け、己の私欲に魂を奪われた亡者どもたちよ!」

「もういい、カツシウス。」

一同は、ゲルマニクスの言葉に息を呑んだ。普段の平民の言葉遣いでは無く、その言葉はやけに丁寧で冷淡であった。幕僚達と共に静かに騒ぎの中心へ向かってきたゲルマニクスは、自らの腰に携えた剣を無言で抜いて地面に突き刺した。

「あああわわ! あれは?!」

「どうしたんだ?! 爺さん?!」

「アウグストウス様が施行した、十分の一刑の合図!」

老兵が驚くのも無理もない。

十分の一刑とは、ローマ軍隊において反乱や上官への不服従など重大な逸脱行為に対して行われた兵士に対する罰則。兵士の中から十人に一人を選び、その一人を他の九人で棍棒・石打などでリンチにすることを命じられる。撲殺から逃れた残りの九人も、馬の飼料を

喰わされ、一般兵士と同じテントでの寝泊りは許されず、野営地の外での野営をさせられた。刑罰は兵士の階級や年齢などは一切関係なく無作為に行われ、この刑はローマ軍においては極刑として扱われていた。

「そりゃ、そうだろう…。俺たちは勘違いして、ゲルマニクス様の家族を襲っちゃったんだから…。」

「なんて早とちりをしちゃったんだ…。」

だが、ゲルマニクスは暫く反乱分子達の様子を見ながら、静かに語りだした。

「妻や子供達は、私にとって新皇帝ティベリウス様の治める国家ローマに比べたら重要ではない。貴様達の栄光の為なら、いかなるものも犠牲にする覚悟は常にある。だが、今夜、私の愛する家族を貴様達から遠ざけ、ガリア属州へ行かせようとした意思是、貴様達の蛮行を、この私一つの命だけで食い止めるためだ。」

反乱分子達はゲルマニクスの意思に愕然として次々に膝を落とした。ローマ市民として誇りを持っている兵士達は、自分達が見下していたガリア人よりも信頼が出来ぬと、ゲルマニクスに無様にも公言されたからである。

「私は、服従を破った兵士達にさえ『我が市民諸君達』と呼びかけた神君カエサルや、そのお姿だけであらゆる兵士達に畏敬の念を抱かせた神君アウグストゥスには決して及ばない。だが、ローマ人によって与えられた屈辱は、ローマ人によって晴らされなければならぬ。ローマ人の誇りを失った罪深きお前達に家族が殺されるくらいならば、神々にも禁じられているガリア属州民に、名誉ある行為を任せたほうがマシだ！」

すると、ゲルマニクスはカツシウスに無言で合図をして、自分の家族をガリア属州へ向かわせるよう合図した。すると反乱分子達はゲルマニクスの本気さを感じ取り、泣きながら必死になってウィプサニアの一団を止めようと懇願し始めた。

「待つて下さい！ゲルマニクス様！」

「蛮族のガリア人の所へなどに、ゲルマニクス様のご家族を向かわせないで下さい！」

「カリグラ様は、あつしらにとって勝利のご加護。そんな愛くるしいご子を、蛮族の人質などにさせないでください！」

「どうか！この罪深きローマ人の我々を、敵の血で血を洗い清めるため！我々を導いてください！」

彼らはようやく己の恥に気がつき、奪い去った主導権という幻想であった銀の皿をゲルマニクスへ返した。だが、ゲルマニクスは地面に刺した剣を抜いて、無造作に彼らの前へ放り投げる。

「己の恥を背負ったまま生きることを選ぶのか、もしくは己の誇りの為に生き抜いた証を今夜ローマ人としてここに示すのか。私は貴様達の意味を尊重し、貴様達に下す裁断はこのローマへ信義を示す、私の刃に全てを託すがよい。」

ゲルマニクスはそのまま自分の寝室へと帰っていく。ローマ軍団はゲルマニクスの言葉に従い、自発的に今回の暴動の首謀者達を、自らの手で次々と斬首した。その首謀者の中には、孫の姿を一目みようと早期の除隊と二倍の遺贈金を願う為、ゲルマニクスの寝室へ欲を出して押し入って脅した老兵の姿もあった。

続く

第六章「亡父」第七十九話

《ウルピア 第五及び第二十二軍団 冬の陣営》

「これは…。一体どういうことなんだ？」

「きっと彼らもまた、彼らなりのやり方で、貴方様へ銀の皿をお返しになったのでしよう。」

オツピドウム・ウビオールムの第一ゲルマニカ軍団と第二十軍団ローマ兵士達によって自発的に行われた『裁断』の噂は、ゲルマニクスの軍団で一番最初に反乱の声を上げたウルピア在中の第五及び第二十二軍団へも伝わり、彼らは自分達の『不服従という恥』を背負い切れず、ゲルマニクスがウルピア陣営へ到着する前の深夜、互いに同じ食事を食べあつた者同士が刃を向け合い殺し合った。

「惨い…。何もここまでする事はなかるうに。」

「恥の上塗りをするくらいなら、貴方様の腰に携えた信義と同じように、自発的に国家ローマへの忠義を自らの手で取り戻そうとしたのでしよう。きっと、貴方様の存在とは、貴方様が考えるよりも、神君カエサルや神君アウグストウスとはまた違った影響力が、少なくとも貴方様の率いるローマ軍団の中では、あるのかも知れません。」

「本当に、馬鹿な奴らだ…。」

「ゲルマニクス様…。」

ゲルマニクスは、ウルピアの血生臭い無残な現状に深く心を痛め、兵士達の前でも涙を流す事に躊躇せず、即座に死に行く者たちを火葬で弔う。また、その実直な姿が、ローマ兵士達の心を揺るがし魅了した。高貴な血だけで威張り腐り、自分達を道具の様に扱う輩で

はなく、心の奥深くから、自分達の事を考えてくれているのだと。

「せめて、失われた彼らの魂が清められる事を願って、ワシはこいつらの為に立ち上がらなければならぬ！」

ローマ人によつて与えられた屈辱は、ローマ人によつて晴らされなければならぬ。彼らのローマ国家に対する信義を全身で感じたゲルマニクスは、彼らの罪深き血を敵であるゲルマン人の血で清める事を約束した。

「我が栄光の輝きと、最上の誇りを有するローマ兵の兄弟達よ！ワシは貴様達を勝利へ導く時が来た！貴様達の国家ローマに対する謀叛の記憶を、己の欲に駆られた恥を、そして昨日までの友をその手で亡き者とした罪を！ワシは貴様らを率いて、ゲルマン人の血で清める事を約束する！さあ、武器を持って！貴様らの求める己の光栄が、我らが愛するローマの繁栄の為へと変える時が訪れたのだ！立ち上がれ！『我が国家ローマの為に』！」

ゲルマニクスは見事に勝利を獲得した。更にローマ兵士達の汚名や、自分の率いる軍団による反乱という不名誉の回復ばかりでなく、神君アウグストゥスが在命中であった時に、トイトブルク森の戦いでゲルマン人から二万人のローマ軍団を失ったローマ人の敗北感までも、ゲルマニクスはその大胆不敵な性格で回復させたのである。

こうして、一時的にガリア属州に避難していた母ウィプサニアと長兄ネロ、次兄ドルスス、そして三男のカリグラ達は、父ゲルマニクスの勝利の話を聞き、再びオツピドウム・ウビオールムへ戻り、私はローマ軍の勝利の栄光と共に生まれた…。

再び10月10日。

「それにしても、ローマ兵士達が襲いかかってきた時は、本当に怖かったんだぜ、ユリア。僕とネロ兄さんはその場にいたんだからな。」

「ああ、本当に怖かったよ。それに、いきなりガイウスの奴が荷車から飛び降りて、傷付いたカツシウスを庇ったんだから。」

「ガイウスの事だから、ひよっとしたら自分の軍靴のカリガを落とされて、それを守る為だったんじゃないの？ネロ兄さん。」

「いや、ドルスス。僕はちゃんと聞いたよ。あいつの魂の叫びを。」

だが、私はカリグラ兄さんの事なんてどうでも良かった。もう！とにかくお父様が、そんな高貴な喋り方をした事があるだなんて！考えただけでも、胸がルルンしてくる。やっぱりアントニウス様や、大母后リウイア様の血を受け継ぐ軍人。更に自分が生まれた時に、お父様がゲルマニアで勝利を収めたなんて！最高のプレゼントじゃない。

「うん？」

「どうした、ドルスス。」

「ネロ兄さん、ユリアの奴、泣いてるのかな。」

「無理も無いよ。自分がひよっとしたら、生まれなかったかもしれないという話は酷だったから。」

私を憐れむお兄様方の心をよそに、私はお兄様方の手を取り、満面の笑みを浮かべて顔を見上げた。

「違います、お兄様方！私は猛烈に、涙が溢れるほど感動しているのです！」

「ええ?!！」

「どうして?!」

「だって格好いいじゃありませんか!お父様はティベリウス様の名を語って、自分の財産まで投げうつて、ご自分の兵士達に譲歩なされたんでしょ?窮地に立たされたのに、ゲルマン人との戦いで勝利して覆したんですよ!」

「うん、それは確かにそうだけど…。」

「でも、ユリア。本当に危なかったんだぜ。一歩間違えれば、僕達はローマ兵士達に殺されていたかもしれないんだ。」

「何を言ってるのドルススお兄様!今、こうして私達が生きてられるのは、お父様の勇敢な功績があったからではないですか!では聞きますが、お父様が、ただローマ兵士達へ譲歩しただけで終わらせたとしたら、私達家族はどうなっていたと思います?」

ネロお兄様、ドルススお兄様は私の質問にビックリしていた。二人は考えてみたが、答えられなかった。

「分からないな。」

「なんとかなってたんじゃないの?ネロ兄さん。」

「うーん。」

「もうお兄様方のお馬鹿さん!」

「何だつて?!ユリア!」

「お馬鹿さんつて…。」

私は偉そうに人差し指を突き出して、威張り腐って答えた。

「それこそ、ティベリウス皇帝はローマ軍が犯した国家反逆罪の責任と偽証罪で、お父様だけでなく私達家族みんな殺されていたかも知れませんか!」

「確かに…ユリアの言う通りだ、ドルスス。だってお父様は勝手に名前を偽って待遇改善の文書を偽造されたのだから。」

「そっか！ユリア、お前数字がてんでダメだけど、意外とそういう事には頭がいいな。」

「でしよう？！だから！私が生まれたオツピドウム・ウビオールムでの、お父様の機転があればこそなんですよ！もう！お父様最高！私が生まれたオツピドウム・ウビオールム最高！私は神々から祝福されて生まれたんですわ！蛮族のガリア属州なんかで生まれてなくて良かった〜！」

「え？何でそうなるの？ユリア！」

「あゝあ。こんな事、お母様が聞いたら、きっと台所でユリアのおケツを十回叩くでは済まされないぞ。」

「ユリアの奴、全く聞いてないよ、ネロ兄さん…。」

私はお父様が亡くなっていたというのに、その事も知らないで、自分の出生の話しを聞かされ馬鹿みたいに浮かれていた。

もちろん、この話しがきっかけだけではないけれど…。いや、やっぱり、この話しがきっかけではあつたかも…。後に私が、クラウデイウス叔父様の皇妃になった時、叔父様に無理矢理頼んで、自分の『生地』でありユリウス家にとつても『聖地』であるオツピドウム・ウビオールムを、ローマの植民地格上げと共に、コロニア・アグリッピナと名前を変更してもらった。もちろん、それに因んでやっぱり、私の名前を入れたのは言うまでもないけど…。

「ネロ兄さん…。ユリアは頭が良いんだか悪いんだかよく分からないよ。」

「自分の妹の事を、そんな風に言いたくないけど…。でも、ある意味、今回はドルススの言う通りかもな。」

「あいつのオツチヨコチヨイな性格を見ると、なんだかカリグラと呼ばれて調子に乗ってる弟のガイウスと、段々と大差ないように思えてくるよ…。」

もちろん、当時のお兄様方は私の未来の事など想像もつかず、はいでる私の姿に、ただただ、呆れて口をポカーンと開いたままだった。

続く

第六章「亡父」第八十話

「そういえば、ユリアってお父様の倉庫見た事あるのかい？」

「倉庫って？ネロお兄様。」

「お前見た事ないのか？でっかい容れ物だよ。」

「あはは、でっかい容れ物が、ドルスス。」

「あれ？違うの？」

「ドルススお兄様、本当は知らないんじゃない？」

ドルススお兄様はどうやら私に知ったかぶりしたらしい。

「よし、そんなユリアや、こんなドルススの為にも、今から見に行こうか？」

「ネロ兄さん、今から?!」

「今からですか?!」

「ああ。きつとユリアもドルススも、お前達ビツクリするぞ。」

私達三人は、クツルスとサリウスの護衛のもと、お父様の倉庫へと向かった。まず、以前に大母后リウエア様に連れてってもらった、ウエストの巫女達が暮らす住居のカーサ・デレ・ウエストリへ向かう。

「えっへん。ネロお兄様、ドルススお兄様。左手に見えますのが、ウエストの巫女達が暮らす住居のカーサ・デレ・ウエストリでございます。」

「お？なんだ。ユリアがガイドしてくれるのか？」

「はい。ネロお兄様。」

「良かった。ユリアが普通のガイドしてくれて。」

「え？ドルススお兄様どうしてですか？」

「だって、お前の事だから、フェリックスとのインチキ問題みたいに『左手に見えますのが、私、神々から祝福されたユリア・アグリッピナの左手でございまーす。』なんて言い出すんじゃないかと思つて。」

「もう！ドルススお兄様の意地悪！」

「あはは。」

「私だって真面目な時はあるんですから！フン！」

「ごめんごめん、ユリア。」

「機嫌直してあげなよ、ユリア。ネロお兄ちゃん、お前のガイドもつと聞きたくなつたな。」

「本当ですか?!」

「うん。」

「僕もだよ、ユリア。」

「ドルススお兄様ったら、しょうがないな。」

お兄様方はお互いに顔を見合わせて、微笑んでいた。多分、二人はユリアの遊びに付き合っただけ程度だったのかも。

「では、気を取り直して…。ここは、火床をつかさどる女神ウエスト様に仕える、巫女達が集まっている場所です。火は人々の心にあるものと一緒。心の在り方や扱い方を間違えてしまえば、大変な事が起きてしまうかもしれません。だからウエストの巫女達は、ローマにとって決して絶やしてはならない聖なる炎を守るため、女神ウエスト様に日々仕えているのです。」

「おおお！」

「おお、ユリアすげー！」

お兄様方は私の説明に感心して、驚いた魚の様な顔で拍手をしてくれた。もちろん、オキア様の説明をそのままパクっただけなんだけど…。

「因みに、私、ユリア・アグリッピナは、大母后リウイア様のご好意により、以前に聖職者団ウエスタの最高神祇官であるオキア神官長様にお会いした事があるのでーす。」

「ええ?! オキア様にか?」

「うおおマジか?!」

「マジっす。とっても上品で綺麗な方でしたーす。」

私は顎を空高く上げて、胸を大きく広げて威張った。

「オキア様曰く、ウエスタの巫女達は、ローマ市内から選ばれた選りすぐりの処女なのでーす。学び手としての10年、勤め手としての10年、そして教え手としての10年という長い長い三つの時期を過ごすのでーす。」

「なるほど、ドルスス。合計30年なのでーす。」

「つまり、ユリアは計算が苦手だから、あえて合計を足さなかったのでーす。」

「もう! ドルススお兄様。私は合計はもう分かってましたでーす!」

二人は私の得意気に語る説明に感心しながらも、語尾を伸ばす私の言い方を面白がって、真似して伸ばし合いつこしていた。しばらく歩くと神君カエサル様の神殿が威風堂々とした面持ちで見えてくる。

「右手に見えますのが、かの神君カエサル様の神殿でーす。御遺体は名誉を受け、フォルムのレギア前で火葬に付され、私達のひいおじいちゃんのアントニウス様、当時のアウグストゥス様、そしてレピドゥス様が、火葬した場所に神君カエサル様へ捧げた神殿を造ることを決議され、8月18日、アウグストゥスによって奉献されたのでーす。」

「おおお!」

「昔は神殿の基壇に半円形のスペースがあつて、よく見えるようにその中心に祭壇が配置されていたのですが、この祭壇に庇護であるアサイラムを求める人達が後を絶たなかったため、神君アウグストウス様は、基壇で完全に囲ってしまったのでーす。」

「まさか…。ユリアは、大母后リウイア様に連れてってもらつたのか？」

「もちろんでーす！中にも入りましたよ。」

「ええ？！入っちゃダメなんじゃないの?!」

「私は特別にいらしてもらつたのでーす。」

「ユリアお前、本当に意外にすごい体験してるんだな…。」

私達はカエサル神殿を曲がり、ウエスタ通りから、ティベリウス皇帝の宮殿壁を左手に見ながら歩くと、勝利の女神の下り坂道が私達を迎えてくれた。

「さあもう少しだ！ユリア、ドルスス、用意はいいかい？」

「うん、大丈夫だよ。」

「ワクワク…。」

下ってしばらく進むと、ロマヌラ門の中にアグリツパ倉庫とゲルマニクスお父様の倉庫があるという。すると、下り坂の真ん中に、何やら道に迷つた二人の男性がいた。

「誰だろう?」

「迷つてるのかな?」

「ユリア、お前ガイドしてやれよ。」

「ええー?!なんで私が?」

仕方なく迷子の二人にクツルスと近付くと、二人はどうも地方からやって来た青年だった。歳はパツラスやこの間出会った”おかしな

セネカ”と同じ位…。

「どうしましたか？」

そのうちの一人は、後の盟友となる…と書くと、セネカと違ってプライドだけは軍人らしく高く、女となんか生涯通じて盟友になれるか！と、本人は嫌がるかもしれないので、悪友にしておく。皇帝となる我が息子を、セネカとともに補佐する事になる、若い頃のセクストウス・アフラニウス・ブツルスの姿であった。

続く

第六章「亡父」第八十一話

少し訛りがある、礼儀正しい純朴な青年。

これがブルスに対する私の第一印象。あらゆる相手も威嚇するよ
うな目つきや、幼子さえも怖がらせる左腕の大きな三つの傷跡すら、
この時にはもちろん無かった。因みに、この時ブルスの横にいた
もう一人の青年は…誰だったかな？とにかく当たり障りの無い男の
子だった。

「実は、僕たちは迷子になってしまったのです。公共浴場へ行けと
の命令だったのですが…。」

「はい、自分らは命令で。」

「命令？自分ら？貴方達は軍人なのですか？」

「ええ、僕はアニケトウス。こいつはブルス。僕らは共にガリ
ア・ナルボネンシス属州のウアシオ・ウォコンティオルム出身なん
でさ。」

「はい…自分もです。」

「そうね、少しこことは違う訛りがあるものね。」

「訛り？失礼な。僕たちはこれでも騎士階級のエクイテスに属して
るんだけど。おチビちゃんの君に、偉そうに言われたくないな。」

彼は私の位には気付かない様子。でも、ブルスは全く違った。察
しがいいのが彼の性分。

「おい、アニケトウス。無礼な振る舞いはやめろ。」

「え？」

「ここに在られるお方は、高貴なる血脈を受け継ぐ皇族の方だ。」

すると、ブッルスはアニケトウスの頭を頭をグイグイと地面へ押し付け、深々と挨拶をした。

「一体誰なんだよ？ブッルス。」

「知らないが、とにかく言葉遣いがとても綺麗なお方なんだ。」

すると、ネロお兄様とドルススお兄様がやってきた。

「おーい、ユリア。何してるんだ？」

「ドルススお兄様、何だか勝手にこの人達が頭下げてきて。」

「ユリア、ここは坂道だから、頭をあげてもらいなさい。」

「はい、ネロお兄様。」

「頭をおあげください。」

すると、二人はゆっくりと頭をあげた。ネロお兄様は優しく尋ねた。

「君達は、騎士階級のエクイテスなんだろう？なぜそこまで深々と礼節を重んじるんだい。」

「自分の親戚の叔父さんから話を聞いておりました。パラティヌス丘付近で護衛をつけて歩いている者がいたとしたら、それは殆どが皇族出身だと。」

「そうなのか？！ブッルス。」

「ああ、アニケトウス。お前も、叔父さんのお話を聞かなかったか？」

そうそう、もう一人はアニケトウスだった。彼は後に、我が息子の一番最初の家庭教師になるのだが、“ある不祥事”を起こして、私自身が解雇をした。その後に、代わりにブッルスが家庭教師を引き受けてくれた。この二人は、同じ頃に会ってたんだけ。

「その者の判断は正しい。」

護衛についてくれてるクツルスは、大きな体からあたりに響く声を発した。

「貴方達の目の前に在られるのは、神君カエサル様、大母后リウイア様、軍神アグリツパ様、アントニウス様、そして初代皇帝アウグストゥス様の血脈を受け継ぐ、ご長男ネロ・ユリウス・カエサル様、ご次男ドルスス・ユリウス・カエサル様、そしてご長女のユリア・アグリツピナ様である。」

「ええええ?!」

「やはり!自分が感じた通りでございます。という事は、三人のお父様は、あの軍人として名高いゲルマニクス・ユリウス・カエサル様!」

「うわわわあああ!」

アニケトゥスは、あまりにもびっくりして、口から泡を吹いて倒れた。

「この度のゲルマニクスお父様のご偉業、恐縮ながら、心より深く敬服しております。」

「ありがとうございます、そう言って頂けると、長女としても鼻が高いですわ。」

私は偉そうにブルスへ顎を上げた。しかし、すぐに後ろからドルススお兄様から、調子に乗るなと頭を叩かれた。

「どうだろうか?僕たちはこれからお父様の倉庫へ行くのだけど、君達も来るかい?」

二人は顔を見合わせて、ブッルスだけが首を横に降る。

「とても光栄な事ですが、自分らは命令されている身なのであります。」

「ええ?! 行かないのかよ? ブッルス。せつかくの機会だぜ。」

「大変心苦しいのですが、本日は...。」

「おい、ブッルス! 折角だからゲルマニクス様の倉庫に連れてってもらおうぜ!」

「黙れ、アニケトウス! 田舎者つて馬鹿にされるだろ?!」

思わず吐いた自分の言葉に、終始赤面して恐縮するブッルス。

「分かったわ、また次回に案内してあげるブッルスさん。」

「あ、ははは...。ありがたき幸せに...。」

「ところで、公共浴場へはちゃんと行けるのかしら?」

「え?」

「このまま迷ったままだと、そっちの方が田舎者として恥ずかしいわよ。」

「そうだよ、ブッルス。お前知らないんだろ?」

「確かに...。」

「教えて欲しい?」

「あ、いや...。」

「いいの?」

私は純朴なブッルスをからかうのが何気に楽しかった。

「あ、つまり。」

「どうなの?」

「かたじけないです。」

「なら、教えてあげる。」

「ありがとうございます。」

「この先に、ユーピテル司祭神であるフラメン・デアリス神官様の家が右手に見えるから、その向かい側のルペルカルの泉と洞窟を左に曲がるの。すると、イチジクの木ルミナルの間に道があるからそこからこつちへ戻るように入って行くと、土地の守護精霊ゲニウス・ロキの祭壇が見えてくるわ。祭壇には蛇模様の基壇があるから分かるはずよ。その先に公共浴場があるわ。」

「ありがとうございます！！」

「因みに、私はそんなところには、行った事すらないけどね。」
「へ？」

後年に、悪友と言えるくらい親しくなつて、彼の後ろ盾になるキツカケが大衆食堂であるタヴェルナでの大酒馬鹿飲比べ。多分、幼い頃から大母后リウイア様のお気に入りである葡萄酒をこつそり薄めないで飲んで、成長してから殆ど酔わなくなっていたため、何度ブルスが私に勝負を挑んできても、私に敵う事は無く、泥酔して殆ど負けてた。まあ、その話しは後ほど。とにかく、酒飲みで私に負けたブルスと悪友になつてから、腹を割つて彼に私の第一印象を聞いた事があつた。

”なんて生意気な皇族の小娘…”

だったそうなの。それを聞かされた時は、怒りを飛び越して大笑いしてしまった。人の第一印象なんて、よっぽどでない限り、同じように感じる事なんかあり得ないのでしょね。

続く

第六章「亡父」第八十二話

太陽を失った。

全てが真っ白になるという事、全身の力が抜けてしまう事、大きな心の支えがなくなってしまふ事、そして死を迎えた人が、決して二度と生き返る事が無い事を、私はわずか五歳で知る事になった。

「ゲルニクスが死んだ…。」

その知らせを伝えてきてくれたのは、いつも陽気だったドルスツス叔父様。現ローマ皇帝ティベリウス様のご子息であり、ゲルニクスお父様とは永遠のライバルと呼ばれていた。私達の祖母であるアントニア様は、何度も生死を確かめたが、シヨツクの余りに気を失ってしまった。

「そんな…。」

ネロお兄様も、ドルススお兄様も、居間の椅子に腰掛けて、床をジツと眺めながら静かに泣いている。でも、私は、何故だか全く泣けなかった。ただ、ぼっかりと心の中に穴が空いたようで、その穴が何もかも吸い込んでしまつて、大きな大きな不安だけがじめつと残っている。現実の事だと、思えなかったから。

「…。」

暗闇に包まれたアトリウムで、大理石円柱に囲まれた水槽のインプレウイウムに冷んやりした水の中に足をつける。時折中庭から、円盤状の反射板であるオスクルムが、そよ風に流れて踊っているのが

見える。心地よさそうな中庭だったけど、私は全く行く事ができない。ペロはドムス内の悲壮的な空気を感じとつたのか、私の側にやつてきて、ずっと前足をクロスさせて座ってる。

「ペロ、お父様がいなくなっちゃったって…。」

私は二三度頭を撫でて上げると、クーンと鳴いて、私の頬つぺたをペロペロと舐め始める。ペロの優しい気持ちだが、私の心の中にお父様との想い出を蘇らせる。

”ユリア！思いっきりジャンプするんだ！”

辺り一体に響く低くて大らかな声。

馬の蹄が地響きのように、世界中を揺らしてくる。ゲルマニクスお父様の声だわ！私は顔に両手で目を塞いで、裸足のままジャンプした。

”ユリア、お前お尻が大つきくなったな。”

食事の時のお父様。

決して奴隷を使わず、自分達で用意するように教えてくれた。

”自分達でできる事は、自分達で行うのだ。分かったな？”

”はい！”

”だがな、子供達よ。自分達で行う理由には、もう一つある。それは、メシが美味しく感じるのだ！ガツハハハ！”

一度だってお転婆な私を叱った事は無かった。むしろ嬉しそうに聞

いてくださった。

” ガツハハハ！ユリアは卵を三つ手に入れたのか？”

戦場から戻られたお父様は、私をいつも肩に乗せて、夕陽と一緒に眺めていた。

” ユリア……。お父さんはいつだってユリア達の事を愛している。だから、お前達とこっやって一緒にいる事が、本当に嬉しくて嬉しくて堪らないのだよ。”

” お父様、大好き。”

” ありがとう、ユリア。”

幼い私にさえ、ちゃんとありがとうと言ってくれる素敵なお父様。大きくて太い両腕が、私を空高く舞い上がらせる。私は一瞬、鷹のように空を飛翔出来たような気がしていた。

” ほつら！もう大丈夫だ。”

” 本当だ……。”

” さすがお父様だ。”

” ユリア！お前は本当に高い処が大好きだな？がっはっはっは。”

” だって、見下ろすのが大好きなんですもの。”

” そっか！うんうん、いい事だ。”

私はいつもの様に、お父様のほっぺにキスを三回した。

” ヨシっと！”

馬に乗ったお父様の両腕に、見事にお尻から着地した。

” 只今、ユリア。”

” お父様！おかえりなさいませ！”

まるで太陽のように暖かく、山のように大きくて、青空の様に清々しく、お父様はニッコリと大きな笑顔で微笑んでくれた。

” ユリア…。この世で最も無用な物はなんだと思う？”

” 何でしょうか？お父様。”

” 無知と欲望の奴隷になった争いだ。これほど無用で醜い物はない。奴隷を雇う事は、己が欲望の奴隷になっている証拠なのだ。争いだけを求めるといふ事は、己が怖くて弱く、自分の考えが正しいと思いついて入っているからだ。”

お父様は目尻に涙を溜めながら、いつも私を大事に大事に抱き締めてくださいました。

” だから父さんはお前達には、争いや身分や奴隷など必要のない、本当の平和を謳歌できる未来に生きて欲しい。空を見てみる！あの広大さは誰にでも平等にあるのだ。”

” 曇りの時でも？”

” あは、がっはっはっは！ああ！曇りの時でもみんなに平等に曇りだ！”

お父様がいなくなってしまうたら、遺された私達の家族には、晴天の空も、曇り空さえも、全く見えない夜ばかり。

お父様のウソつき…。

この世の中は、不平等ばかりじゃないですか。

続く

第六章「亡父」第八十三話

シリア属州のアンティオキア。
お父様が亡くなられた州都。

三大繁栄都市といえば、イタリア半島のローマ、エジプトのアレキサンドリア、そしてシリア属州の州都であるアンティオキアと言われている。平地に大きな市街地が広がり、オロンテス川は西側に流れ、シルピウス山は東側にそびえており、ローマの属州に編入されるまでは、難攻不落の都市を誇っていた。

クラウディウス叔父様が残した歴史書によると、お父様は敵に対しても非常に寛容的だった為に、オリエント地域でもその名を知らない人がいないほどだった。アンティオキアの広場で行われたお父様の火葬には多くの人が集まり、人種間の隔たりを越え、哀悼の意を込めて参列された。そして余りにも若すぎる突然の病死は、衝撃を持って多くの人へ多くの噂を抱え、伝わっていくことになった。

小さくなって骨壺に納められたお父様は、幼い三女のリウィツラを抱えたお母様、次女ドルシツラの手を引くお兄様のカリグラと共にローマへ無言の帰還される事になった。お母様は悲哀と病にやつれ果てていた。けれども、カリグラお兄様はその悠々たる姿を崩す事は一度もなかったらしく、涙を流す事のない気然とした態度が、私達家族を哀れむ多くの人々の心を揺さぶった。また、後にカリグラお兄様から聞いたことであつたが、この時に、ゲルニクスお父様の遺された偉業や名声という名の遺産の大きさを、痛烈に感じたという。

お母様はいち早く首都ローマへ帰還される事を望んでいたが、初冬

の海は波も激しく、何度も寄港が必要になり、翌年までかかる帰路であった。その為、寄港先でも、度々地元の人々がお母様達へ駆け寄り、お父様の突然の死を、溢れる涙を流しながら哀れんでくれた。幼かった次女のドルシツラだったが、行く先々で自分達家族を哀れんで、優しくしてくれた人々の好意だけは覚えていたらしく、幼いなりに笑顔を絶やさないように努力したらしい。この事が、後のドルシツラに大きな影響を与えてしまい、彼女が他人に対して笑顔で自分の心を閉ざすきっかけにもなってしまった。

さて、首都ローマのパラティヌス丘にある、祖母アントニア様のドムスの様子はどうだったかというところ、アントニア様はここ一週間、ずっと何も口にされていなかった。25年前にも、当時29歳であったアントニア様の旦那様を若くして亡くされ、そして、今度は自慢の息子であるゲルニクスお父様を失ってしまったのだから。誰からも愛された我が子を失った母親として、その失望落胆は計り知れないものがあるのかもしれない。女として旦那に先立たれ、今度は母親として自分の子供に逝かれ、アントニア様はさすがに参ってしまっている。そのアントニア様を気遣い、毎日通いつめてくれたのが、ドルスツス叔父様とクラウディウス叔父様だった。

「火葬されてから、ゆっくりとウィプサニア達は遺灰を抱え、帰ってくるそうです。」

「そう…。」

「私はネロくんやドルススくん、そしてユリアちゃんを連れて、港町タツラキナまでウィプサニア達を迎えに行こうと思います。」

「そう…。」

「ご安心ください。私が全責任を持って、彼ら三人を無事に届けますので。」

「そう…。」

ドルスツス叔父様は放心状態になっているアントニア様を何度も抱き締めて、元気づけようと努力されていた。残念ながら、リウィツラ叔母様はかなりの陣痛が激しく、こちらには来れない様子で、高慢ちきのリヴィアが代わりに来てくれた。もちろん、ネロお兄様目当てだったのだろうけど。一方、クラウディウス叔父様は、御自分の立場を理解しているのか、何も手に付かないアントニア様の代わりに、淡々とあらゆる事務処理を行っていた。後に、クラウディウス叔父様と私が結婚した夜、御自分の最も尊敬する偉大な兄への思いを、叔父様は初めて涙を流しながら語ってくれたことがあった。

「ドルスツス様、せめてあの子と一緒にローマに戻っていただけますか？ゲルニクスは、あの子は…本当に、ドルスツス様とは仲が良かったのですから…。」

「ええ。ゲルニクスは私の一番大切な親友です、今でも…。」

アントニア様は、その優しいお言葉に再び涙を流されて悲しみに身を閉ざしてしまった。涙は欠けた心から湧き上がるように溢れてくる。でも、私はまだ、涙が出なかった。とつても寂しくて、不安で、悲しいはずなのに、未だにお父様が亡くなられた事が、まるつきり現実感を与えてくれない。

「アグリッピナ様、お食事が出来ましたが、いかがなさいます？」

解放奴隷のリツラとシツラは、一生懸命、私達の為に、健康に気を使った調理をしてくれるのだけれど、誰もが口にする事ができなかった。当然アントニア様は、食事の時さえ、寝室から一步も出なかった。ネロお兄様とドルススお兄様も、まるつきり食欲が失せていた。

「ありがとう。」

とは言いつつも、私の中でも食する心はまるつきりない。全身に力が入らず、動きたくなかった。できる事なら、私はずっと寝ていたかったけど、できるだけ毎日、お兄様達やアントニア様のお顔だけでも拝見できるように、幼いなりちよこまか動いてたつもり。

「？」

ペロがムクつと起き出し、聞く耳を立てて、スタタタつと門の方へ歩き出す。私はその後に着いてった。新しい門番がかんぬきを抜いて開ける。

「アグリッピナ様、お忍びでアントニア様へ面会の偉い方がやってきました。」

「誰なの？」

「大母后リウエア様と、そのご子息ティベリウス皇帝陛下様です…。」

「え?!」

続く

第六章「亡父」第八十四話

アントニア様は、普段の気さくさを失われてしまった。まるで狂気に駆られ、オルペウスをも殺害したマイナス達の様に…。

「アグリッピナ…。」

「大母后リウイア様。」

リウイア様は私を見るなり、直ぐにしゃがんで全身で抱き締められた。唇は震え、頬から大粒の涙を流して、必死に泣く事を堪えようとされていた。小刻みに震えるリウイア様の肩が身体中に伝わってくる、私の切ない気持ち一段と膨らみ、ジワジワとお父様がいなくなつた虚無感に襲われてくる。

「アグリッピナ、無理しなくていいのよ。」

リウイア様は最初で最後の言葉を耳元で呟いてくれた。ギュツと私を抱き締めてくれるリウイア様の中で、私の涙腺はいよいよ緩み始め、今はここにいないお母様の代わりになる支えとして、リウイア様を抱き返し、言葉にならない言葉を発しながら、泣かせてもらった。リウイア様は私の髪を優しく撫でながら、再びご一緒に涙を流してくださいました。

「アグリッピナ…。アントニアは、いるかしら？」

「はい…。寝室に。一週間以上、何も…口にされてません。」

リウイア様は、その言葉に心を痛めた様子で目を閉じた。後ろにはあの恐ろしく大きなガタイのテイベリウス皇帝陛下が、物悲しい瞳を携えて立っている。以前見たときよりも、幾分、引き締まった身

体になられていた。

「ティベリウス、いらっしやい。」

「はい…。」

私はお二人をアントニア様の寝室へご案内した。二人の足取りは、それぞれ違っている。リウイア様は一步一步踏みしめるように。しかし、ティベリウス皇帝陛下の足取りは重いように感じた。

「アントニア様…ユリアです。本日はお忍びで、リウイア様とティベリウス皇帝陛下がいらっしやいました。」

けれども、返事はまるつきりない。私は再び寝室の扉越しに大声でアントニア様へ呼び掛けた。すると、中から寝室の扉へ何か投げられた音がした。

「アントニア…。貴女まで引きこもってるわけ？」

リウイア様は思いつきり寝室の扉を開こうとしたが、しかし中々開かない。ティベリウス皇帝陛下に指で扉を開くように指示をして、ティベリウス皇帝陛下は思いつきり右肩で扉を開けた。

「お義母さんの嘘つき…!!」

すると、寝室からはありとあらゆる物がアントニア様から投げつけられてきた。ティベリウス皇帝陛下は咄嗟にそれらをかわす事が出来たが、リウイア様は右のこめかみ辺りをぶつけられ、血を流されている。しかし、痛がる様子も束の間、実の息子にアントニア様を取り押さえる様に指示をする。

「アントニア！落ち着きなさい！」

「嫌です！どうして私ばかりなんですか？！離して！イヤーー！」

「テイベリウス！決してアントニアを離してはダメです。口を抑えなさい！」

リウイア様は御自分のストラを引きちぎって、まず自分の右こめかみを抑え、残りをテイベリウス皇帝陛下へ放りなげると、何も言わず黙々と実の母親の指示に従っている。その間もアントニア様はまるで子どもの様に暴れて、目と歯茎を剥き出しにして恐ろしい形相を露わにしている。私にはその姿がショックで、絶対にマイナデスに呪われていると勘違いした。

「アグリッピナ、解放奴隷に暖かいお湯と布を今すぐ用意する事と、アブサン酒を直ぐに作らせなさい。」

「は、はい！」

絶対にそうだ！マイナデスに呪われているに決まっている！私は慌てていたので、思わずペロの尻尾を踏んでキャインと吠えさせてしまい、そのまま転んで台所の手前の壁に頭をぶつけた。流石に慌ただしい様子に、庭で落ち込んでいたお兄様達も駆け寄ってくる。

「ユリア、どうしたんだ？！」

「あ、わああわ、アントニアああ様が、マイナデスの呪いに！」

「えええ？！」

私は直ぐにリツラとシツラに暖かいお湯を用意させて、こぼさない様にそれをリウイア様の元へ運んだ。頭の中は恐ろしい形相のアントニア様のお顔。

「ありがとう。あら、アグリツピナ？頭、大丈夫？！」

「ちよつと慌ててぶつけました。」

「これを当ててなさい。アブサン酒は作ってる？」

「あああ、はい！今すぐ！」

「ニガヨモギを多めに！それと木炭を入れないように指示するのよ！」

私はリウイア様の方を見ながらうなづいて、ちゃんと前を見てなかったから、また壁に頭をぶつそうだった所を、ネロお兄様が助けてくれた。

「ユリアは本当に慌てん坊だな。」

久しぶりに、ネロお兄様の笑顔が見れた。台所では、ドルススお兄様が二人の手伝いとして一生懸命ニガヨモギの皮をちぎってた。指を少し切ってしまい、傷口を舐めると物凄い大声で叫び出した。

「?!にげえー！なんだこの葉は?!」

「あー、それはニガヨモギです。とっても苦いので気をつけて下さい。」

「シツラ、もう少し早く教えて欲しかったよ。」

良かった、ドルススお兄様も、普段通りの様子に戻っていた。料理上手のリツラと几帳面なシツラは、流石に仕事は早かった。ドルススお兄様のお手伝いが邪魔なほど。

「シツラ、ナツメヤシは？」

「あー、こつちに。」

「乳香三杯！」

「あー、はい、一杯、二杯、三杯。」

「コウスイガヤの葉。」

「あー、コスタスは六杯つと。」

「サフラン入れるの忘れてるよ、シツラ！」

「あー、カメリアのワインは何処?!」

「スパイス棚の下！」

普段なら、苦味を取り除くための木炭を使うが、リウィア様の指示で全く使われない。味合わなくとも、こちらまで苦味が伝わってくるようだ。

「アグリツピナ様！容れ物用意して下さい！アントニア様のお好きな容れ物を！」

「あ、はい！」

アントニア様が風邪などで体調が悪くなった時、必ず薬用酒として使う縁起物の容れ物があった。亡き旦那様の遺品でもある。私は割らないように慎重に用意して、腕を捲ったシツラがアブサン酒を注いだ。

「出来上がりです！」

「よし、僕が持って行こう。」

「え？ネロお兄様？」

「ユリアは慌てん坊だから。」

「はい。」

そう言うと、ネロお兄様は慎重にすり足に近い歩き方で、足音一切立てずに、アントニア様の寝室へ運ばれた。私もその後についてつて、陰から寝室を覗いた。

「うああああああっつづくうー！」

まるで猛獣のように、口から血を流して暴れて叫んでいるアントニア様が、ティベリウス皇帝陛下から羽交い締めにされて苦しんでる姿だった。

続く

第六章「亡父」第八十五話

「あわわ！アントニア様?!」

「落ち着きなさい、アグリツピナ!」

「でも！アントニア様はマイナデスに呪われているのでは!?!」

「滅多な事を言うもんじゃありません。これはマイナデスの仕業ではなく、アントニアの心にある病のしわざです!」

「母さん！早く!」

テイベリウス皇帝陛下は、リウイア様へ合図を送った。すると、先ほどネロお兄様が慎重に持ってきたアブサン酒を取り、アントニア様の口を無理矢理開かせて飲ませようとする。だが、アントニア様は抵抗して、口を閉ざしたまま。

「アントニア！口を開きなさい!」

「うっがああああ!」

すると、リウイア様はたんまりアブサン酒を御自分の口へ含んで、強烈な苦味に目を閉じながら顔を振って耐えながら、アントニア様の鼻を摘まんで口移しで強制的に吞ませた。何度もその苦さに耐えきれず、吐き出そうとするものの、リウイア様はアントニア様の口を塞いでさらに吞ませる。

「うああああ!」

飲み切ったアントニア様はさらに苦しんで、暴れていると、隣ではアブサン酒の強烈な苦味に耐えていたリウイア様が、舌を出して吐き出していた。そして再びアントニア様の鼻を左手で抑えると、すかさず右手の指を二本伸ばし、アントニア様の喉仏へと突っ込んだ。

「我慢してよアントニア…。今、あなたは死んじやいけないんだから。」

何かを探しているように、何度も口に突っ込んだ右手をグリグリと回してる。しばらくすると、アントニア様は、何度か苦しそうに咳を始めた。

「テイベリウス！離れなさい！」

同時に、アントニア様を羽交い締めにしていたテイベリウス皇帝陛下が離れると、ゴボゴボとアントニア様のお腹の方で音が鳴りだし、リウイア様が指を勢いよく抜くと、一気に嘔吐を始めた。

「良くやったわね、アントニア。でも…もう一回行くからね？頑張らなさい。」

苦しそうに吐いてるアントニア様の背中を摩りながら、リウイア様は御自分の嘔吐物で汚れた指など気にもせず、再度、アントニア様の喉仏へ二本の指を突っ込んで嘔吐をさせた。本当に苦しそうに、吐き出しているアントニア様。私達三人はその光景に、ただ、何があったのか分からず怯えていた。後ろから、心配して駆け寄ったりツラとシツラが水と布を持ってきた。リツラは嘔吐物で汚れたリウイア様の右手を綺麗に拭きながら、シツラは嘔吐物で汚れたアントニア様の口の周りを綺麗に拭きながら質問をしていた。

「あー、大母后様？もしかして、リウイア様は…。」

「そうよ…。」

「まさか！御自分で命を?!」

「ええ。アントニアの旦那が死んだ時と、同じ事をしようとしたの

よ。」

アントニア様の亡き旦那様は、ティベリウス皇帝陛下の実の弟であり、リウィア様の実の子供。29歳という若さで落馬して、この世を去ってしまった、私達のおじいちゃん。後から分かった事だが、アントニア様は身内での不幸があると、そのショックに心が耐え切れず、自ら命を断とうとする傾向が幼い頃からあったらしい。アントニウス様がこの世を去った時にも、自殺紛いをして、騒がせたらしい。

「母さん、見つかったよ。」

「…。」

ティベリウス様が、わざわざアントニア様の嘔吐物から黒い何かを拾い上げた。直ぐにリッラはそれが何であるかに気が付いて取り上げた。

「お前達は、自分の主人がこんな物を買っていた事も気が付かなかったのか?!」

突然の大声で、リッラとシッラを叱責したティベリウス様は、彼女らを震え上がらせた。しかし、リウィア様は冷静にリッラの手に隠した黒い何かを取り上げ、ゆっくり眺めている。

「一体誰がこんな物を…。」

「母さん、危険だから。」

「分かったわ。直ぐに処分して頂戴。」

ようやくアントニア様は落ち着いたらしく、リッラが寢床へ静かに運んだ。リウィア様もティベリウス様も、汚れた手を井戸の水で洗

いに寝室を出られる。私達三人は一人の後について、綺麗な布を手渡した。

「ありがとう。」

テイベリウス様は優しく答え、アントニア様の爪で幾多も引っかかれた腕を拭いていた。

「君達は、ゲルマニクスの子供達だな？」

「はい。」

ネロお兄様が率先して答える。

「そうか…。」

テイベリウス様は、物悲しい瞳で何度も私達の顔を確認した。言葉は何一つ掛けてくださらなかったが、その寡黙な態度だけで、私達のお父様に対する悔やみの念を伝えて下さった。知らず知らずに、ネロお兄様が泣き出し、ドルススお兄様も泣き出し、そして私も泣き出してしまった。皇帝陛下は優しく何度も私達の頭を撫でてくれた。

「テイベリウス。そろそろアントニアを運びましょう。」

「分かりました、母さん。」

「リッラとシッラでしたっけ？後で使いの者を寄越すから、それまでにアントニアの衣類などを全て用意しておきなさい！」

「はい！」

「はい！あー、全てというと、何日分位でしょうか？」

「最低は三週間。最高でも二ヶ月以上よ。」

その指示に直ぐに従う二人だった。私達は涙を拭きながら、膝を床に付けて、両手を広げるリウイア様の元へ近付いた。

「怖かったです。でも、あなた達のアントニアは大丈夫よ。最高の治療方法で、必ず元の優しい頃のアントニアを連れて帰るから。」

「うう…リウイア様？」

「なに？アグリッピナ。」

「アントニア様は…ううう、本当に御自分で…その…。」

けれど、大粒の涙を流しながら、リウイア様は顔を横に振って否定した。

「そんな事、あるわけないでしょ。さつきも言ったように、これはアントニアの心の病の仕業です。この子の名誉の為に、口が裂けてもそんな事を言ってはダメよ、アグリッピナ。」

「はい、リウイア様…。」

「貴方、一番上のお兄さんネロでしたっけ？」

「はい…。」

「私達二人はしばらくアントニアを宮殿で看護します。その他の事は、ドルススが取り仕切ってくれるでしょう。だから、長男として、しばらくアントニアのこのドムスを守って頂戴。」

「はい、大母后リウイア様。」

それに続いて、ティベリウス皇帝陛下がネロお兄様にお声を掛けて下さった。

「ネロ君、私からは近衛兵を三千ほど出兵させよう。ゲルマニクスの遺灰を必ずローマまで無事に帰還させるよう、彼ら近衛兵には私が直々に命令を下しておく。だから、息子のドルススと一緒に港

町タツラキナまで、弟のドルススくんと妹のアグリツピナを連れて、ウイプサニアとゲルマニクスを迎えに行つてあげなさい。」

「はい、皇帝陛下殿！」

「うん、良い返事だ。」

私達三人は、結局、このお二人によつて助けられた。同時に、無力な子供なんだと思ひ知らされた。だが、このアントニア様の心の病に関する出来事は、ゲルマニクスお父さまを愛するローマ市民と、お父様の遺灰と復讐という紅蓮の炎を抱えたウイプサニアお母様には、ある一つの誤解を生み出すキツカケになつてしまつた。その誤解こそが、私達家族が崩壊する道を辿る事になる。運命を分ける警鐘は、私達の誰にも聴こえなかつたのかもしれない。

続く

第六章「亡父」第八十六話

私は天氣に恵まれた事がない。

身内に不幸が起きる度に、オリュンポスの神々は、まるで私の気持ちを逆撫でするように、ケタケタと笑いながら晴れにしてくる。ジメとした暗く沈んでる気持ち、小粒の雨でさえもいいから流してはくれない。アケイリアの時もそうだった。そして、私の大好きなお父様が亡くなった時も、冬だったというのに心地よい陽射しを持ってきて、私の沈んだ心を逃さないぞっと言わんばかりに照らし続ける。

「港町タツラキナまで、叔父さんがしっかり守るからな？みんな、気をしっかり持つんだぞ。」

「はい。」

「うん、いい返事だ。」

ドルスツス叔父様は、この時以来から御自分の陽気な性格は削り落とされてしまった。いつもとは違う誠意と信義に溢れる顔で、私達三人を勇気付させてくれる。叔父様の奥様リウィツラ叔母様は、御自分のお兄様であるゲルマニクスお父様の遺灰を心から迎えに行きたがってた。けれども陣痛がかなり酷くなってきたので、ご自宅のドムスで高慢ちきのリヴィアとお留守番。ところがである。足に障害を持つクラウディウス叔父様は、心の病で治療中のアントニア祖母様の代わりを立派に勤め上げるため、私達とご一緒してくれたのだ。

それまで、クラウディウス叔父様を心の中で小馬鹿にしていたローマの官僚達や、同じ騎士階級達でさえも、御自分の障害を物ともせ

ず、さらに道中、私達の沈んだ心をユーモアのある話で慰めてくれた姿に、多くの人々が評価を改めるようになったのである。

「ネロ、ドルスス、アグリッピナ。今日はとっても天気だな。」

「はい。」

「叔父様、まるで雲一つ無い青空ですわ。」

「うむ、これでは天にいらっしやるオリュンポスの神々も、喪服に着替える事ができないだろ。」

「どうしてですか？」

「うむ。雲一つ無ければ、着替える場所が無いからな。」

「あははは。」

叔父様のお話は捻りがあつて、とても知的。それが細やかな救い。ひよいと石を軽く投げるような雰囲気で、私達を楽しませてくれた。

「みんなはシチリア島にある、シラクーサを知ってるかい？」

「知ってます。ギリシャ哲学者のアルキメデスやエンペドクレスの出身ですね！」

「そうだよ、ネロ。」

「うん？クラウディウス叔父様。なんでシチリア島出身なのに、アルキメデス達はギリシャ哲学者と呼ばれるんですか？」

「良いところに気が付いたドルスス。実はな、今から800年前位に、ギリシヤ人による植民地化が開始されたのだ。ギリシヤ語ではシケリアと呼ぶんだ。」

「へえー。」

「もちろん彼ら二人はギリシヤでも活躍した哲学者であるが、実はギリシヤ人の血筋を受けた者が多いのも、シチリア島の特色なのだよ。今でもローマ属州になつてはいるが、彼らの話す常用語はギリシヤ語だ。」

「ええ?! 私達の言葉は分からないのですか?!」

「ああ。イタリア半島の南も、殆どの会話はギリシャ語なのさ。」

次に話してくれたのは、紀元前から伝わるシラクーサに今でも遣る、勇者メロティスの伝説。暴君ディオニュシオス2世に死刑を宣告されたメロティスには、たった一人の大切な妹がいた。せめて自分が処刑される前に結婚式を挙げさせてくれと国王に願う。だが、疑心暗鬼に駆られた暴君ディオニュシオス2世はメロティスを信用しなかった。メロティスの竹馬の友である石工職人のセリヌンティウスは、敢えてその身を身代わりとして差し出し、メロティスの言葉を三日三晩信じて待つ約束をした。メロティスが戻らなければ、セリヌンティウスが代わりに処刑される。メロティスは苦難を乗り越え、三日三晩を掛けて、セリヌンティウスとの約束を守るために戻ってきた。二人の友情に感動したディオニュシオス2世は、メロティスの処刑宣告も取りやめ、こうしてシラクーサに国王ともども信頼が回復されたというお話。

「それにしても、我が竹馬の友メロティスよ。その少女が差し出した紅い布を受け取った方が良いのではないか？」

「何故だ？セリヌンティウス？」

「お前のトウニカはこの三日三晩で既にボロボロになり、少女はお前の素っ裸を皆に見られるのが、たまらなく口惜しいのだ。」

「こうして、勇者メロティスは自分が全裸であった事にやっと気が付き、赤面してその紅い布で自分の身体を包んだとさ…。」

私達は叔父様のお話に、徐々に微笑みを取り戻してもらった。信じて待つ事の大切さ、信じてもらう為に懸命に努力する尊さを教えてもらいながらも、まさか、勇者メロティスが裸であったなんて…。

「これはいい！このアツピア街道はデコボコで、私のように脚の悪い者が歩くと、普通の人のように見えるな！」

時には、御自分の足が悪い事と、アツピア街道の石畳みが余りにもガタガタ揺れるのに引っ掛けて、普通の人より私の方が楽に歩けるぞ！などと戯けを演じてくださった。叔父様は、いつだって弱き者の味方なんだって、いつしか心が和やかになっていく。

「うん？何だ？あれは…。」

「空が、曇ってる。」

「雨雲？」

「違う…。煙だ。何かを燃やしている黒煙だ！」

ようやく、私達はお母様達がいる港町タツラキナに到着した。

続く

第六章「亡父」第八十七話

馬車に揺られながら、アツピア街道の細長い松の孤高達を何度眺め、この港町までたどり着いたのだろうか？

タツラキナ。

ローマとネアポリス（現ナポリ）の間に位置する港町。今から約300年以上前、ローマ帝国はウォルスキ族からこの土地を奪い、植民地化であるコロニーヤにした。それ以前は、ウォルスキ族から彼らの言葉で、ローマ神話の主神ユーピテルという意味がある「アングザー」と呼ばれていた。

彼らが主神ユーピテルの名を付けるかのように、ラピス山脈延長の頂が海岸へ突き出すかのように、その先端が到達した時点でこの町は位置している。「沼地の平らな都市」という意味のリウィウスとも呼ばれ、普段はとても、のどかな小さな港を有する港町。

でも、今日は全く形相が違う。タツラキナ全体で火事でも起きてるかのように、至る所から黒煙が空を舞い、大きな大きな青空を陰鬱な暗闇で塗りつぶしている。

「兄さんの為に、みんなが弔いの黒煙をあげているのか？」

「ええ、クラウディウスさん。あの黒煙は、全てゲルマニクスの為でしょう。」

クラウディウス叔父様も、ドルスツス叔父様も、その巨大な黒煙の大きさには驚きを隠せない。まるでトロイア戦争に出てきた巨大なアポロ神像も凌駕するほどに。みんな、お父様の存在の大きさ、そして多くの人々に慕われていた偉大さに涙を流している。でも私に

は、全ての希望を飲み込んでしまつ、魔物の様な不気味さに見えて恐ろしかった。

「どうした？ユリア。」

「…。」

「寒いのか？」

「ううん…。」

私は堪らずドルススお兄様に抱き付いた。あの魔物から自分の身を守るように。お父様を弔う煙だと頭では分かっているのに、心では不思議な違和感を感じている。

「さあ、みんなもう少してウイプサニアの所に着く。頑張ろう。」

「はい。」

馬車に揺られながら、タラツキナへ近付いていくほど、黒煙から発せられた異様な匂いが鼻を侵入してくる。すかさずパッラスは、私の為に小さい布で口を塞ぐよう渡してくれた。パッラスとフェリックスは元々孤児達なので、何を燃やしている匂いなのか、すぐに検討がついたらしい。

「ネロ、ドルスス。そろそろ町に着くから、そこにある黒い喪服のブラを、ユリアはその横にあるパルラをストラの上から羽織りなさい。」

クラウディウス叔父様に言われ、私達は長い黒羊毛からできた一枚布を、ヴェールの様に頭からすっぽり被る。肩あたりでゆったりとたるみを出して、胸元をしっかりと止める。私は上手く出来なくて、ドルススお兄様に何度も助けてもらった。

「よじつと。」

「うん、ユリア、いい感じだよ。」

「ありがとうございます、ドルススお兄様。」

クラウド、ウス叔父様は、喪服が黒いのはエジプト人の思想や信仰心からの影響だと教えてくれた。黒は冥府の亡者から自分の魂を奪われないように守る色。頭からすっぽり被るのは、口から魂を取られないようにする為。ようやく馬車が町の入り口に到着すると、そこは異様な雰囲気と、何かを掻き毟るような悲痛の叫び声に包まれていた。

「みんなどうしたんだろう?」

ネロお兄様が口元をヴェールで押さえながら、馬車から降りると、そこには上半身を裸にして嘆き悲しんで、多くの人々の海原が広がっていた。誰もが共に同じ悲しみを分かち合うように。まるで誰かに惑わされているように、枯れる事のない涙を流していた。

「ドルスス様?」

「ドルスス様ですよ!」

「あああ!クラウド、ウス様も一緒に一緒にいる。」

「ローマからのお迎えが、ゲルマニクス様の魂が、やっとやっと遺された家族を引き合わせたのです!ここタツラキナにゲルマニクスの家族がやっと到着したんです!」

「誰か?!ウイプサニア様へご連絡しろ!おい!その蛮族ども!道を開ける!ゲルマニクス様の遺された子供達だ!」

私達の周りを取り囲んでいるのは、まるでこの世の終わりに絶望した亡者のような表情をした、タツラキナの住人達だった。

続
く

第六章「亡父」第八十八話

「お母様…。」

「?!」

「お母様!」

「ネロ?!ドルスス?!」

「お母様!」

「ユリア!」

不安定だった私達三人の心は、やつれて細くなったお母様の両腕に、やっとたどり着く事ができた。今まで涙を流せなかったのが嘘の様に…。いや、ひよつとしたら、ずっとずっと我慢していたのかもしれない。両目から滝の様に涙が流れ、肩を抱きかかえられながら、涙で滲んだお母様に必死にしがみついていた。

「ウイプサニア…。」

「ドルスツス様…。本当に、本当にこの子達を…わざわざ。」

ドルスツス叔父様は、何かを言おうと口を開こうとしていた。けれど、あまりにもやつれたお母様の不憫なお姿と、ゲルマニクスお父様の亡き姿となった遺灰を見かけると、力の抜けた膝を床に落とし、静かに男泣きをされている。

「ゲルマニクス…。なぜ、お前が、俺よりも…先に、逝かねばならないんだ…?」

後ろで見守っていたクラウディウス叔父様は、顔を俯いたまま黙っている。

「答えて…くれよ。我が友、ゲルマニクス…よ。」

ドルスツス叔父様の悔しい想いは、その哀しみから溢れ出た涙で十分過ぎるほど。クラウディウス叔父様は険しい表情のまま、ドルスツス叔父様の右肩にそつと手を添える。

「お、お母さま。あれ、が…お父様のお姿？」

「そうよ、ユリア…。あの人…。私の心から愛する、あの人…。あんな、あんな…小さな骨壺の中…。」

お母様は再び泣かれてしまった。私は涙を滲ませながら、お父様の納められた骨壺を見つめた。それは、本当にとっても小さかった。あの山の様に大きな大きな背中を持ったお父様が、あんなに小さな骨壺に納められているなんて…。

「お父様、ネロです。」

「ドルススですよ、お父様。」

お兄様達は、涙を溢れんばかりに流して悲しんでいる。でも、私は信じられない。涙が溢れてくるのは、ただ、余りにも、周りで悲しむ人々が多いから…。こうやって大人になった今、お父様の骨壺をアウグストウス霊廟から取り出されたとしても信じられないだろう。私はこの目で、返事のしないお父様の亡骸を、しっかりと見ていなかったのだから。

「ネロ兄さん、もう、泣くのはもうやめなよ。長男だろう？」

「?!」

「お前、ガイウスか？」

「ああ、ドルスス兄さん。」

ネロお兄様とドルススお兄様は、泣きながらカリグラ兄さんへ抱擁を求めるが、カリグラ兄さんは何度もされていた様子なので、とても飽きているような様子だった。

「ネロ兄さんがこれからしっかりしなくてどうするんだ？」

「ガイウス…。」

「ドルスス兄さんも。いくら二番目の弟で家長の役割が無かったとしてもだよ、おいおいと男が涙なんか流すもんじゃねえさ。」

「な、何だと？ガイウス…。」

だが、カリグラ兄さんは冷静にドルスス兄さんを交わし、私の方へ近付いてきた。

「おい！ユリア。お前だつて長女だろう？いつまでも兄さん達に、未っ子気分で甘えてるなよ。」

「ガイウス…兄さん。」

「お前がそうやって甘えてるから、兄さん達が長男や次男としての自覚を持ってなくなるんだぞ！お前、大母后リウエア様の所で、何を勉強していたんだよ？」

「…。」

カリグラ兄さんは、普段と変わり無い態度で、やたらと責任感を持ち出してきた。私だつて違和感を感じているけど、お父様の死は、悲しくないと言ったら嘘になる。でも、カリグラ兄さんの言い方は、余りにも冷淡で、非情に感じられた。

「そ、そうね…。ガイウスの言う通りだわ。」

「お母様…？」

さっきまで泣き崩れていたお母様は、突然立ち上がって話し出した。

「ネロ、お母さんとクラウディウス様とドルスツス様は、大人としてとても大切な話があります。悪いんだけど、貴方は兄妹達を見ててちょうだい。」

「は…い。」

すると、お母様は床に膝を落としたドルスツス様を即し、クラウディウス叔父様と寝室へ行かれてしまった。それらを見ていたガイウス兄さんは、ニヤツと口元を緩ませ、不思議な言葉を吐いた。

「母さん、またあの話しかよ…。」

続く

第六章「亡父」第八十九話

「お姉ちゃん？」

「ドルシツラ？」

お母様の寝室には、横でハイハイしているリウィツラとドルシツラがいた。私はすぐに、涙を流しながらドルシツラを抱き寄せる。

「ユリアお姉ちゃん……。元気だった？」

「ドルシツラ……。あんたこそ元気だったの？」

「うん、あたしはいつでも平気だって。ガイウスお兄様が、いつもお側にいてくれたから。」

「そう……。それにしても、あんた大きくなったね。」

「ユリアお姉ちゃんこそ。なんだかちよっぴりごっつくなってるんじゃない？」

「そう？」

「このままじゃ、アマゾネスの女王ペンテシレイア様みたいになるんじゃない？」

「フフフ、言うわね。」

ドルシツラはとっても綺麗な笑顔をしていた。まだまだ四歳だつていうのに、不思議なくらい吸い込まれそうで。隣のおチビちゃん、リウィツラは寢床でゴロゴロ。私は彼女を抱きかかえたが、二歳の彼女は突然泣き出してしまった。

「ハイハイ、お姉たんが抱っこしてあげるね。」

「ドルシツラ、あんた大丈夫なの？」

「大丈夫！毎日リウィツラがグズるといつつも抱っこしてあげるんだから。」

見事なものだった。

以前、私がお母様から教えてもらった方法よりも、とっても上手に魚をすくい上げる感じで、あっという間にリウィツラを抱きかかえて、背中をポンポンしてあげると泣き止んでしまった。

「リウィツラは、自分のお気に入りじゃないと駄目なんだ。」

「そうなんだ。」

「あたし、今はいっぱい召使や奴隷達から色々な事教えてもらってるんだよ。今度、ユリアお姉ちゃんにも教えてあげるよ、ね？」

「うん、ありがとう。」

こんな時に、ドルシツラは明るくて素直で、そしてとても面倒見がいい。前はもつと、子供っぽかったのに。確かに、カリグラ兄さんの言う通り。いつまでも未っ子気分でお兄様達に甘えちゃいけないんだ。

「ユリア、ちよつとこつちこいよ。」

「ガイウスお兄様。」

カリグラ兄さんがキツイ目を見せ、寝室の外から人差し指をクイクイとさせ呼んでる。前よりも、何だか怖くなった感じがする。

「今、お母様がドルスツス叔父様やクラウディウス叔父様に話している事が何だか分かるか？」

「大人のお話でしょ？」

「バカだな、もつと頭使えよ。」

「え？」

「真実と復讐の話をしてるんだ。」

「はあ？何ですか、それ。」

「いいか、いずれ分かるだろうけど。お兄様達には喋るなよ。お父様はな、ピソに殺されたんだよ。」

…?!

お、お父様が殺されたって…?!

私は息が出来なくなつて頭がクラクラしてきた。

「そ、そんなの嘘でしょ?!」

「身内に嘘ついてどうする？実際にはピソの奥さんの入れ知恵みただけだな。」

「だって、お父様は病に倒れたって…。」

「僕はお父様のそばですつといたんだ！お父様は軍人だぜ！？なにまるで誰かに呪われたように、突然容体が豹変して衰弱していくなんておかしいだろう？お父様は、寝室で変な匂いがするって毎晩叫んでいた。お母様はお香をいっぱい焚いてたけど、とうとうその匂いがきつくなって、部屋中を調べてみたらドンピシャさ。ヒスパニアの怪しい呪い道具がゾロゾロ出てきたんだ。中にはネズミの死骸もあった。」

酷い話なのに、カリグラ兄さんはまるで狐を得意げに捕まえてニヤリと笑うように話してる。

「それにおかしいだろう？ピソの連中はお父様の容体がおかしくなる直前に突然ローマへ帰って行ったんだ。まるで逃げるようにな。」

「それはお父様が属州に編入させた報告じゃ…。」

「ばーか。そんなもん、シリア属州の総督に任命されたピソがわざわざ行くかよ？最も自分が嫌悪するお父様の功績を報告する為、あのジジイが年下のお父様の為に召使いの代わりなんて務めるわけないだろ？あいつらは、自分達が掛けた呪いにかからないように、一目散で逃げたのさ。」

「でも…そしたらそばにいたガイウスお兄様は何で呪われてないの？」

「え…?!」

「ずっとそばにいたんでしょ？」

「ああいたさ！」

「そばにいたのに、兄さんは何で呪い道具とかをし掛けてたの知らなかったの？」

「それは…。」

「何でピソを止めなかったの？」

「…。」

「ずっと眺めてるだけだったってことでしょうか？」

「うるさい！お前、妹のくせに生意気なんだよ！もしくは、もっと前からお父様の食事だけに毒を盛っていたのかもしれないぜ。」

「毒を?!」

「だって、お父様の葬儀の時に、上半身に赤い斑点がいつぱいできてたからな！」

呪い、もしくは毒殺…。

私は抱えきれない重い事実を、また抱えてしまった。以前見た、リウィツラ叔母様とセイヤヌスの情事。そして、今回はピソによるお父様の暗殺。私はどうすればいいんだろう？

「ガイウス！勝手な事を言うな。」

そこには、ドルススお兄様が立っていた。

続く

第六章「亡父」第九十話

「ケツ、ドルスス兄さんかよ。」

「そんな風評に惑わされてはダメだ。それこそ、僕達家族を危険に晒すぞ。」

「風評？危険？兄さんは何を言ってるんだよ。」

「分からないのか？ピソ様は現皇帝ティベリウス様の旧友だぞ。下手に疑えば、国家反逆罪で捕まってしまうぞ。」

ドルススお兄様は冷静だった。やっぱり計算の得意なだけあって、バランスを見ているんだと思う。

「確かにガイウス、お前の言う通り僕らもメソメソはしていられない。だからこそ、確証も無いことを、さもある様に言いふらすのは良く無いことだ！」

「何言ってるんだ！僕はずっと兄さん達がいけない間も、お父様のそばにいたんだぞ！そして見ていたんだ！」

「それはネロ兄さんや、僕だって同じだ。確かにお父様とピソ様は険悪なムードだったよ。けれど、だからと言ってピソ様が毒殺したとか、ピソ様の奥様が呪い殺したとかになるのは、余りにも馬鹿げているんだよ。」

「馬鹿げてるだって？！僕が見た事が、何で馬鹿げてる事になるんだよ?!」

「ガイウス、さっきユリアが言ったように、お前は実際にその目で見たわけじゃないだろう？見た気になってるだけなんじゃないのか？」

カリグラ兄さんは悔しそうに歯ぎしりしている。冷静だったドルススお兄様がカリグラ兄さんの盲点をしっかりついているからだ。

「ピソ様、ピソ様って…。そんな事で母さんが喜ぶとでも、思っているのかよ?!」

「?!」

「お父様が亡くなった事は事実なんだぞ! あんな病気や怪我一つ無い元気だったお父様が、急に体調崩して亡くなるなんて、呪いや毒殺以外に何かがあるって言うんだよ!?!?」

やっぱりカリグラ兄さんの推測だった。実際に自分が見たわけでも、その場にいたわけでも無かったんだ。

「ドルスス兄さんやユリアが、お父様が病で亡くなったと言い張っても、お父様を慕うこの世界では、誰も信じる奴なんかいやしないさ。僕はずっとアンテイオキアからここまでの道のりの中で、ずっと聞いてきたんだ。」

「何をだ?」

「勇者ゲルマニクスはピソに殺された。ピソは許してはならぬ!」
「ってね…。」

ようやく、あのお父様を弔う黒煙に、何故、私が異様な違和感と恐怖を感じたのかが分かった。お父様の魂を弔う意味だけでなく、ピソによる暗殺を信じる者達の、怨念を込めた呪いや祈りが込められていたからだ。衣服だけでなく、何か燃やしてはいけない物まで燃やしていたから、吐き気がするような異臭が漂っていたんだ。

「今日だって、いや、ずっと毎日さ。お母様のお顔とお父様の骨壺を一目崇めたいと申し出る者達ばかりさ。中にはこの世の終わりを救ってくれるのは、お母様しかない信じている老婆までいたんだ。」

「…。」

「考えが甘いのはドルスス兄さん、あんたの方さ！お父様がいなくなつたこれから、今までの様に生活できると思つたら大間違いだぜ！」

私は何だか怖くなつて、ドルススお兄様へ近づいた。けれど、お兄様は優しく笑顔で大丈夫と答えてくれた。

「ガイウス、お前はユリア達の兄だろ？それこそ、さっきのお前の言い草じゃないが、お前と一番近い妹を怖がらせて楽しいか？」

「何だと！？」

私はドルススお兄様にしがみついた。

「いつだつて何処だつてどんな時だつているんだよ。自分で知りもしないくせに、高い場所から、さも知つてるふりをして、嫌な雰囲気ばかりをばら撒くような奴が。典型的なのはお前だな？ガイウス。」

「いくら兄さんでも、言つていい事と悪い事があるんだぞ！」

「事実を言つたまでじゃないか。」

「僕はゲルマニカ軍団の勝利祈願の將軍なんだぞ！」

「將軍はお父様だ。成人式もあげてないお前が軍人なんかになれるわけないだろ？みんなから『カリグラ様』なんて煽てられて、調子に乗つてるんじゃないっつーの！」

だが、カリグラ兄さんの言っていた事は正しかった。と言うよりもお母様は確かにピソとその奥方を犯人としたてあげる為に、クラウディウス叔父様、そしてドルスス叔父様を説得されていたのだ。その大声は、隣の部屋から出てきた。

「待つてください、ドルスス様！」

「いや、離してください！クラウドデウスさん。この話を、黙って胸の内に秘めたまま、父やセイヤヌスやピソに会えと言われるのか？！」

「まだ、確証も無いことを、しっかりと調査した上で解決すべき事ではなからうか？」

「クラウドデウスさん。あんたは悔しくないのか？！あんたの兄さんであるゲルマニクスがピソの手によって殺されたんだ。」

「しかし、まだ分からないじゃないか。」

「いや絶対そうです！今回の事は病死にしては不明な点が多すぎる！まるでアレキサンダー大王が亡くなられた時と同じようだ。」

「ドルスツス様…。アレキサンダー大王の死だって、暗殺ではなく何かの病で倒れた可能性だってあるのですぞ。」

「クラウドデウスさん、僕に何を言っても今は無駄です。貴方には命に掛けても守りたい友がいないから、私の心中に水を差す事はかり述べられる。失礼する！」

その後を、お母様は静かに訪れた。突然クラウドデウス叔父様へ抱きついて泣き出し、どうか理解して欲しいと懇願している。どうやら私達の家族や親戚は、真二つに分かれようとしていた。

続く

第六章「亡父」第九十一話

その日の夜。

カリグラ兄さんが言った通り、多くのゲルマニクスお父様の死を嘆き悲しむ人達が、せめて遺灰を崇めたいと、続々と申し出てきた。

”ピソを許してはならぬ！ゲルマニクスの仇を！”

誰もが口々にお母様へそう告げている。お母様は涙を何度も流しながらも、その思いに報いる為、全てを掛けると誓われていた。

「私の愛おしく美しい子供達よ。貴方達のお父様は、不幸にも敵の卑劣な手段によって、あの、気高く美しき魂を奪われてしまった。だが、その無念の内の想いは、世界中で誰よりもゲルマニクスを愛するお前達の母親、このウイプサニアが聞き留めている。もう、安心なさい我が子達よ。私が、お前達の亡き父の代わりに、私達家族を襲った毒牙を、卑劣な手段を用いた愚かな者たちへ突き返しましょう。」

お母様は、私達などに話し掛けてはいなかった。まるで亡霊の様に通り過ぎ、私達家族を嘆き悲しむ人達に決意を述べてるようだった。カリグラ兄さんは、この決意の誓いを聞き飽きてる様子だったけれど、しっかりとその意志を受け継ぐ者として、演じて振舞っている。

「ネロ、ドルスス、ユリア。お前達は今までお父様の遺灰に付き添った事がないのだから、しっかりと私の言う事聞きなさい。」

「はい。」

「これより、アツピア街道を辿ってローマまでの帰還。お前達は民の前で、決して笑顔を見せてはいけません。尊い犠牲者の魂を弔う為に、常に俯き悲しむ姿を見せるのです。できるだけ涙を流し、人々からの同情を受け取る為に。」

「同情を…ですか？」

「そうよ、ドルスス。私達は今、大黒柱を失った家族なのです。ローマ帝国において、全ての人々から同情を受け取る価値を得た、唯一の氏族でもあるのですから。そして、それこそが、お父様の最期に遺された意志なのですから。」

「はい…。」

「いいわね、ネロ？ユリア？」

「はい、お母様。長兄として、家長として、立派に務めます。」

「やはり、ネロ。お前が長男で本当に良かった。私は、お前だけが頼りなのですから…。」

「はい！」

お母様はこの頃から、公然と兄妹同士でひいきをするような発言をし始めた。そんな気など本人は無かったのかもしれないけれど、虚栄心と支配欲の強いカリグラ兄さんは、度々、ネロお兄様をひいきする発言に、何度も歯ぎしりをしている。

「…。」

クラウディウス叔父様は、何度もお母様のお姿を嘆くように眺め、口を閉ざしたまま溜息をついている。晩年、クラウディウス叔父様が、皇后の私に語ってくれた事には、当時は、もはや弔いではなく、ある意味母ウィプサニアの陰謀説にとりつかれた、ピソへの復讐、しいてはその影で操るティベリウス皇帝に対する果たし状のようだったと。

「ご覧なさい、子供達よ。世界は私達家族の味方ばかりなのです。お前達は、あの者達の美しき弔う心を、決して平然と踏みにじってはいけません。」

きつと、最初は何気ない弔いの為に、平民は衣服を燃やしただけだったのかもしれない。けれども、それらが拡大するにつれて、その噂と風評と現皇帝に対する不満が入り混じったのかもしれない。今考えればお母様もまた、お父様が最期に遺した言葉の真意を、悲しみのあまりに見失っていたような気がする。だが、私はその真意を知る事になるのは、残念ながらお母様とネロお兄様が亡くなられた後だった。

「ドルススお兄様…。」

「大丈夫だよ、ユリア。お前はお兄ちゃんの手をずっと握ってたな。」

無理に泣く事もないよ。」

「うん。」

「ただ、ガイウスやネロお兄様には内緒にしておこうな。面倒になると、後が大変だし、今は家族が一丸となる時なのだから。」

「分かった。」

すると、生真面目で有名な百人隊長のカッシウス・カエレアが、お母様へある報告をしてきた。

「ウイプサニア様、ティベリウス皇帝陛下より派遣された近衛兵三千が到着しました。」

「分かりました。彼らをゲルマニクスの遺灰へ必ず弔いを行うように伝え、ゆつくりと休ませた後の明朝、彼らと共にローマへ帰還する事を伝えるのです。我が愛するゲルマニクスの、無念な魂と共に、彼らには榮譽ある護衛を務める事を誓わせた上で…。」

こうして、私達家族は、良くも悪くもお母様の強引な意志に背中を押されながら、ローマへと帰還する事になるのだが…。ローマへ到着した私達に待っていたのは、更なるお母様の復讐心を煽るような誤解から生じた悲しき運命の幕開けだった。

続く

第六章「亡父」第九十二話

ローマで私達に待っていたもの、それはティベリウス皇帝陛下及びリウイア大母后様による、父ゲルマニクスの国葬不参加表明だった。

「え？どうして？」

「何で…？」

「皇帝陛下並びに大母后リウイア様の意向は、産みの親であるアントニア様の病状が芳しくないため、実母を差し置いてお二人が国葬へは参加できないというものだ、以上！」

ローマ市民達は、明らかに不信感を抱いた。兼ねてからお母様がお父様の遺灰と共に携えてきたピソによる暗殺という疑惑と共に、噂は雪だるま式に大きくなっていく。

「一体どういう事だ?! お父様も大母后様も国葬に出られないなんて?!」

「ドルスツス様。ですから皇帝陛下は、ゲルマニクスの母君であるアントニア様の病を考慮した上での決断なのです。皇帝陛下が出ないとなれば、必然的に大母后様も国葬に出るわけにはいきません。」

「何故だ?! 故人を偲ぶ気持ちはないという事か?!」

「違います! 皇帝陛下のみ不在の国葬になどできないという事です。」

「今更、神威を重んじるといつのか?!」

ドルスツス叔父様は、心から憤慨している。私達だつてびつくりした。更に当時、市民から最も嫌悪されたピソと、皇帝陛下の右腕であるセイヤヌスまでもが相次いで不参加を表明。世論は誰もが皇族による父ゲルマニクス暗殺を疑いはしなかった。

「ドルスツス様、もういいです。」

「しかし！ウイプサニア…。」

「人の真意とは、言葉に固められた大義や守るべき神威の中にあるのではなく、その者の行動した結果によって現れるもの。私は十分にあの方々の考えが分かりましたから。」

お母様の鋭い眼光は、瞬き一つせず、何かを見切ったような冷たさに溢れていた。しかし、ドルスツス様は何とか両者の架け橋になるよう、せめて大母后様だけでも参加するよう、死力を尽くすと言って後にされた。

「子供達よ、良く聞きなさい。これがクラウディウス氏族の根底なのです。彼らは体裁だけを取り繕い、その傲慢さで物事を自ら有利な方へと進めていく。言葉の上に取り繕われた虚像に臆して、鵜呑みにしてはいけません。」

けれども、ドルススお兄様は勇気を持ってお母様へある事を伝える。

「お母様…。アントニア様が病に倒れた事は本当だと思います。僕も、ネロ兄さんも、そしてユリアもその場にいました。アントニア様は本当にショックのあまり、毒を飲んで自ら命を断とうとしていたのです。」

「毒を…ですって？」

「リウイア大母后様とティベリウス皇帝陛下が来てなかったら、今頃はきつと大変な事に…。」

しかし、お母様は自分の息子に落胆しているような溜息をついた。

「ドルスス…。では、貴方はお母さんの意見には賛成できず、彼ら

が言ってることは正しいと、そう言いたいわけですか？」

「いえ、そうではありませんが…。ただ、アントニア様が病に倒れた事は本当で、大母后様は責任を持って看護すると仰ってました。」

「ああ可哀想なドルスス。騙されてはいけません。もう少し頭を使つて考えなさい。大母后様はお医者様ですか？病を治すことができる専門家ですか？」

「いいえ。」

「では、専門の医者がアントニア様の病を治す為に国葬へ参加できないというのであれば、お母さんもちゃんと納得できます。では、大母后様は何の専門ですか？」

「…。」

私達子供は口を閉ざすしか無かった。

「アウグスタの称号を持つ『国家の母』が、何故、国家の為に尽くしたお父様という『英雄』の国葬に出ないのでしょうか？ドルスス、貴方があの女狐の代わりに答えられるのなら答えてみなさい！」

「…分かりません。」

「『国家の母』を自認するならこそ、いかなる事があっても、国家の為に尽くしたお父様の魂を弔う為に、参加するのは当然でしょう？！」

私は何だかこの時、とても嫌な気分になってきた。幼いこの頃には分からなかった事だが、大人になった今、思い返せば、お母様が何か違う目的の為に、お父様の死を利用していても考えられるからである。黒煙を眺めた違和感と同じように、この頃からずっとお母様には違和感を感じるようになっていった。

「でも、大丈夫よ。これでお母さんは確信したのですから。私は貴方達のお父様の遺灰がしっかりとアウグストウス廟へ納められるの

を見届けた後、裁きを受けなければならぬ卑怯者には、神々の意思と共に制裁をもつて償ってもらいます！」

翌朝から行われた父ゲルマニクスの国葬には、多くの元老院からの出席者と、多くの軍人と、多くのお父様を愛する者達が集まった。結局、不参加表明通りにクラウディウス氏族の皇族からの代表者はドルスツス叔父様のみ。叔父様は辛い立場でありながらも、ゲルマニクスお父様を謳った素晴らしい言葉を捧げてくれた。

「時には友として、時には兄弟として、そして時には競い合う軍人として、共に憧れたアレキサンダー大王の背中を追いかけるかのように、僕らは共に同じ時代を生きてきた。それら黄金のような時の流れが、頬を伝う涙と共に昨日の事のように思い出す。ゲルマニクスよ、お前は何て幸せ者なのだ。これほど多くの人に愛され、多くの人に弔われた。唯一の心残りは、お前が志し半ばで遺した、お前の愛すべき家族であろう。だが、今日は友としてお前に誓うぞ。安心しろ、僕が我が子以上に必ず守る。だから、そっちの空がここと同じように蒼く澄み切っているのなら、オリュンポスの神々と共に僕らをいつまでも見守ってくれ…。」

ドルスツス叔父様は天高くお父様の遺灰を掲げ、ゆっくりとアウグストウス廟へと納められる。これで、私達家族がお父様とは、二度と再開する事がなくなってしまった。私は右隣にいるドルススお兄様の手をギュツと握りしめながら、左隣にいるドルシツラの手を握り、これからは姉として生きていく事を、亡きお父様の優しい笑顔に誓った。

「少女」編 完

「乙女」編へ続く

第七章「狂母」第九十三話

ローマの人々は一斉に休業した。

それも三ヶ月以上に渡って。こんな事は前代未聞な事だった。ゲルマニクスお父様の為に喪に服するというのが、表面上の理由だったけれども、根底には、国葬へ不参加表明をした皇族への不信感を抱いた民意の表れだったらしい。

「ええ、八百屋もどこもかしこも街みーんな閉まってますですよ。」
「あー、だからできるだけ直接一番から仕入れ値を安くできるようにしてしまっす。でも、表立って赤ら様に商売なんてできない様子です、はい。」

料理人のシツラとリツラは、できるだけ何とかやりくりしている。だが、お父様の親友だったクツルスは、ドルスツス様同様に憤慨されていた。

「当然だ！皇族の連中はドルシツラ様以外、ゲルマニクスの国葬に参加されなかつたのだからな！」

「おい、クツルス。いくらなんでもそれは過激な発言だぞ。我々は大母后様からの命で、アントニア様一族を警護する身。少しは己の感情まかせな意見を自重しろ！」

「いいや、セリウス。今回はお前とは意見を反する。何故我が友の最期に在るべき方々がおられない?!」

「だからな、それはお前も見ただろう?!アントニア様の病状を！」
「ウイプサニア様が言うように、医者ならば不参加は分かる。だが、国葬なのだぞ?!」

「クツルス！いい加減にしないか。」

「いいや、セリウス。俺たちは魂まで皇族へ売ったわけでは無い！

飼犬や開放奴隷などになるつもりはない！」

さすがに今のクツルスの言葉には、嫌な雰囲気の流れた。彼には珍しく、シツラやリツラの下等身分を卑下する物言いだったから。

「クツルス。頭冷やしてこい。」

「ああ、そうさせてもらぜ！」

怒りを抑えきれないクツルスは、表に出て行ってしまった。太つちよのリツラは心配そうに見つめている。

「あー、リツラ。あんたがいくら心配しても意味が無いんだからね。」

「でも、シツラ。クツルスさんが、あれじゃ可哀想じゃないか。」

「あー、リツラ。やめなさい。」

「シツラ、あたしクツルスさんが心配だからちよつといってくる。」

「あー、リツラ?!」

すると、リツラは一目散にドタドタ走ってクツルスの後を追って行った。私とシツラとセリウスは目をまん丸にして驚いた。暫くすると、ははーんとニヤリとしたセリウスが話し出す。

「シツラ、リツラはクツルスの奴に恋しているのだな？」

「あー、恋と言われても何と言うか…。えええ?!リツラがクツルスさんに?」

「あの様子じゃ、本当に好きなんだろうね。」

「あー、こんな時にですか?全く、はあ…。」

恋?

何だろう?食べ物かしら?当時の私は何だかさっぱり分からなかつ

た。誰かを好きになるなんて、私には考えられない事。だってやっぱり理想的な男性像はお父様のような方でなければ。それに、お父様がこの世を去ったというのに、まだまだ私はどこかで幻を見ている気分が抜けていない。

「アグリッピナ様？どうしました？」

「あ、セリウス。ううん、何でもない。」

「あー、何だか最近アグリッピナ様はぼうつとする事が多いみたいですよ。」

「そう？そうかしら。多分、最近リウイア大母后様の教室に行っていないからかな。何だか身体がなまっちゃって。」

「あー、リウイア大母后様の教室に、ですか…。」

「あはは…。」

セリウスとシツラは乾いた苦笑をしている。確かにそうだ。お母様が大母后様の教室へ行かせる事を許すはずがない。だってあれだけ毛嫌いしているのだから。でも、私は個人的に大母后様へ、何故お父様の国葬へ参加されなかったのかを聞いてみたかった。

「おーい、ユリア。」

「あ、ドルススお兄様。」

「お兄ちゃんと木登りしに行こうぜ？」

「木登り？！本当に？！でも…今は大丈夫かな？」

「大丈夫だって。喪に服するので木登り自粛なんて聞いた事ないだろ？」

「うん！やったー！」

ドルススお兄様は本当に優しくかった。もちろんネロお兄様もいつも優しいけれども、今年の成人式を控えているから忙しかった。私達は奴隷のパッラスを連れて、お父様の倉庫があるパーティヌス丘下

の所で木登りをする事にした。

「ドルススお兄様。早く！早く！」

「ちよつと待てて！ユリア、お前速すぎだぞ！」

「お兄様こそ運動不足なのですよ、アツハハハハ！」

「なにを？！見てるよ！」

「もう、頂上まで着きましたわ！」

「え？！ウソ？！本当かよ…。あいつ絶対、アマゾネスのペンテシレイア様の生まれ変わりだ！」

私達兄妹二人は、喪に服している間の遊びは大体が木登りだった。そうして、木の頂上からパラティヌス丘の上の宮殿を眺めていた。

「ドルススお兄様。これからどうなってしまうのでしょうか？」

「うん。お母様はあくまでもピソとその家族を裁判で断罪するつもりだよ。」

「そうになると、勿論ネロお兄様もお母様の意向を受け継がれるわけですよ？」

「そうなるな。でも…僕はあくまでもクラウディウス叔父様と同じ意見。真相を調べてからでないとダメのような気がする。」

「私は個人的に、大母后リウイア様にお伺いしてみたい。アントニア様の看護っていうのは分かるし。私達とリウイア様が血の繋がらないとはいえ…」

「え?!」

「うん？」

「ユリア、お前何言ってるんだよ。大母后リウイア様は、僕たち兄妹の曾祖母だよ。」

「えええ?!」

「だってそうだろう？アントニア様の旦那様はティベリウス皇帝陛下の弟だろ？その兄弟のお母さんは誰になるんだ？」

「あああああああ？！！！リウイア様だ！！！！」

「だろ？お前、今迄気が付かなかったのか？」

「そついえば、ご本人から言われてたかも・・・。」

私は恥ずかしながら、この時初めてリウイア様と血が繋がっている事に気が付いた。

続く

第七章「狂母」第九十二話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス（紀元前12年 - 63年）年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ（17年 - 30年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后（紀元前58年 - 29年）年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝（紀元前42年 - 37年）年の差 + 57歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス（紀元前14年 - 23年）年の差 + 29歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア（5 - 43年）年の差 + 10歳年上>

アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？-31年）年の差+35歳年上>
二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ジュリア・セイヤヌス（17年-31年）年の差-2歳年下>
セイヤヌスの長女。アグリッピナの親友

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>
ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年-62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年-69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

<ティベリ・ゲメツルス（19年-38年）年の差-4歳年下>
俗称ティベリウス・ゲメツルス。ティベリウス帝の遺言より兄カリグラと共同統治を指示されるドルスツスの双子の息子の一人。

<ゲルマ・ゲメツルス（19年-23年）年の差-4歳年下>

俗称ゲルマニクス・ゲメツルス。ドルスツスの双子の息子の一人。

<ガイウス・アシニウス・ガッルス（紀元前41年 - 33年 年の差 + 56歳年上）>

二代目皇帝ティベリウスの長男ドルスツスの母の再婚相手であり、母ウイプサニアの支援者

<マルクス・コツケイウス・ネルヴァ（紀元前58年 - 29年）年の差 + 72歳年上>

後の五賢帝ネルヴァの祖父で、母ウイプサニアの支援者

第七章「狂母」第九十四話

私達家族は、パラティヌス丘アントニア様のドムスで暮らしている。未だにアントニア様はティベリウス宮殿からお戻りにならない感じだったので、お母様がアントニア様の代わりにドムスの長を務めているが、それが更に好感度を上げていたよう。

一方、相変わらずローマ世間では二つの意見で割れていた。

”一つ、皇族国葬辞退による現政権への不信感から、ピソを父ゲルマニクス暗殺の犯人として糾弾するべし。”

”一つ、感情的にピソを直接的に糾弾する事は、国家反逆罪になりかねない。事実を調査して確証を得てからピソを糾弾するべし。”

だが、どちらも一貫しているのは、少なくとも現政権に対する不信感の表れとピソ糾弾。私達家族も名目上の体裁では、お母様のご意向に従ってはいるけれども、本音は二つに分かれていた。

長兄ネロお兄様

お母様の意向と次期家長としての体裁のためがあつてか、赤ら様には対立できないご様子。ただ、リウイア大母后様には、あんまり好感触はお持ちで無い。

次男ドルススお兄様

体裁ではお母様に従ってはいるけれども、クラウディウス叔父様と同じ意見。ピソを糾弾するのは時期早々と考えてる。

三男カリグラ兄さん

完全にお母様と同じ意見。ピソ及びびにお父様の命を奪った者に復讐を願ってる。同時にお母様が狂い始めている事も知っていたらしい。

長女ユリア・アグリッピナ

クラウディウス叔父様とドルススお兄様と同じ意見。真相を調査する必要はあると思う。それと、何よりもリウイア大母后様に直接お伺いするべきだと思う。

次女ドルシツラ

カリグラ兄様と同じ意見。笑顔ばかり振りまいているけど、子供としては殺された父親の仇を打つのは当たり前と、カリグラ兄さんに教え込まれてる。

三女リウイツラ

良くわかってない様子。でも、あたしが抱っこしようとすると思がるから、多分妹のドルシツラや、お母様と同じ意見。

ペロ…？

大母后リウイア様にすぐ気が付くから、それほど悪い印象は持っていないみたい。ドルシツラが近付くと吠えるから、私と同じ意見だと思つ。

この頃のお母様はまさに飛ぶ鳥を落とす勢いの始まりを体现されていた。世論の全てがお母様に味方しているのは明らかで、ティベリウス皇帝陛下に不満を持つ元老院達も、自分たちの思惑を隠しながら、お母様へ訪問してきた。

「ドルススお兄様、今いらしたのは有名な元老院の方。私、アントニア様が開かれた祝宴で見かけました。」

「すごいな…。あ！あの人見た事あるよ。確か…。」

「軍神アグリッパ様の支援をされていた貴族の方ですわ。」
「えええ？アグリッパ様の？！ユリア、お前何で知ってるんだよ？」
「私一人でローマに残ってた頃にお会いしました。あ、おじさま！
ユリア・アグリッピナです。」
「おおお！アグリッピナちゃん。この度は大変だったね。」
「うちの亡き父のために、わざわざ母ウィプサニアの為にお越し頂き、ありがとうございます。」
「いやいや、こちらこそ。お母さんのウィプサニアの意見にはわたしも賛成してるから、安心しておくれ。」
「はい、おじさま。」

私はそのままドルススお兄様の元へ戻った。

「お前、気後れとかっていう言葉知らないだろ？」
「何ですか、それ？」
「ユリア…。僕はある意味、お前の性格を尊敬するよ。」
「フッフ…。ありがとうございます。ドルスス・ユリウス・カエサルお兄様も、ご来賓の方々に、ご愛想を振りまかれたら如何ですか？」
「フッフ…。ありがとうございます。貴殿のご忠告に感謝する。」

お母様を交えたピソ起訴に対する会合は、現実的にどのような手段を取られるのかが、お母様を支援する共和制支持者の元老院や氏族の方々と日々話されてる。

「英雄ゲルマニクスが亡くなった次の週には、ピソは何事も無くシリアへ戻っているのだ！これはもはやゲルマニクス暗殺に関与しており、確信的と言っても過言はなからう！」
「いやいや、感情的になるのは些か印象が悪い。彼には一応属州の総督という名義があるのだ。離れていた時期に、殺された確証を手

にしなければな。」

「ちよつと待つて下され。総督の名義があるのならば、何故ピソが一旦ローマへ帰還する必要があるのだ？問題はそこにあるのではなからうか。直接的にピソを起訴するには余りにも根拠と確証が現時点では少な過ぎる。」

「では、あんたはやはり調査する必要はあると申されるのか？」

「そうは言つたらん。調査をする必要も無く、誰の目から見ても彼を起訴に追い込む別の手立てがあると云つてるのだ。」

「何?!」

「皇族派は我らが感情的にピソを起訴すると思ひ込んでいます。それを逆手に取つて、彼らを取り囲むのが一番だと思わんかね。」

一同の共和制支持者の貴族や氏族達はうなづいた。そしてある貴族のご老人がお母様へある示唆をされた。

「ウィプサニア殿、如何だろうか？この際、直接的にピソの暗殺を起訴するのでは無く、法律に詳しい我々に任せては？」

「ピソは起訴されて当然であると、私も、亡き夫ゲルマニクスの意向も同じです。彼が何も罰せられず、生き残るような最悪の結果さえ免れれば、夫が最期に遺した真意を後世に残せるというものです。」

「つまりお母様は起訴イコール求刑はピソの死刑という事だ。ご老人はお母様の立派な応え方に感心して微笑んでいる。」

「では...。」

「あー、ちよつと待つてくだされ。」

だが、1人の中年の貴族が立ち上がり、お母様へ一つの確認をされる。

「これは確認なのだが、ウィプサニア殿。ゲルマニクス殿が遺された最後の言葉は、何か文書に残されているのだろうか？」

「え？」

「我々ローマ人は、故人の意思を尊重せねばなるまい。何か遺書などがウエスタの巫女へ保管を任せると思っただが…。」

「今更確認するまでも無い事だろう。」

「いやいや、相手は大母后リウイア様がいるのだぞ。油断大敵だ。初代皇帝アウグストゥス様がアントニウス様とクレオパトラと強引に開戦できたのは、宣戦布告の決議案を提出された時、元老院よりその根拠を求められ、ウエスタの巫女に預けたアントニウス様の遺書を当時のリウイア様が持ち出されて根拠にした事が起因なのだ。同じ轍を踏まないためにも、今回の起訴がゲルマニクス殿の遺書に反する事が無いよう、念の為にウィプサニア殿に確認されたいのだ。」

お母様は、暫く何も答えられなかった。

続く

第七章「狂母」第九十五話

「それは：私が亡き夫の死に託けて、故人を偲ぶべき事を見失い、クラウデイウス皇族派へ一個人の復讐を目論んでいると、申されておりますのでしょうか？」

一同の共和政支持者の貴族や氏族達は余りのお母様の言葉に肝を冷やした。

「それは、我が母や姉が現皇帝陛下及び大母后様より不当の扱いを受けていたからだ。そう申されたいのでしょうか？」

「い、いや…。そう言うわけではないのだが、万が一の事も考えてだね…。」

「ご納得いただけないと言つのであれば、今この場で我が命を断ち、遺書として貴方方へ預ける覚悟もできておりますか？ご覧になられますか？」

お母様はストラを捲り上げ、そのやつれた細い両腕を見せ、両手首を一同に見せる。すると先ほどお父様の遺書確認の提言をした中年貴族は、その恐ろしい威厳に後退りをし始めた。彼は寡黙のままに着席するしかなかった。再び貴族のご老人がお母様へ微笑んで諫める。

「ウイプサニア殿の覚悟は、わしらも誰の目から見ても分かった。どうかお気を鎮め下され。」

「ご心配をありがとう。でも、私は常に落ち着いております。」

「そうでした、申し訳なかつた。とにかくだ。今回の事で、クラウデイウス皇族派に民意の声を伝える為にも、我々が一丸となつて一矢を報いなければならぬ。その為にも、ウイプサニア殿も、我々

も、このように民意の声の為に、自分の感情を犠牲にして押し殺しているのだ。その事だけは個々にくれぐれも忘れぬように。ウィプサニア殿、わしら共和政支持者は君の味方だ。」

後になって考えてみると、実際には、皇族から完全なる共和政復興を願う支持者の思惑と、お母様の皇族への復讐という思惑が、父ゲルマニクス神話の誕生と共に一致した瞬間でもあった。

「結局、お母様に押し切られる形になってしまったな。」

「うん。本当にこのままで良いのかしら？ ドルススお兄様。」

「そうだな…。」

「何を二人はコソコソ話してるんだ？」

後ろにいたのはカリグラ兄さんだった。横にはドルシッラの手を繋いでいる。

「お姉ちゃん達は、何か最近怪しいよね？」

「ああ、ドルシッラの言う通りだ。家族の輪の中にも入ってこなければ、お母様とは出来るだけ会話を避けるようにしている。二人で何を企んでる？」

私はカリグラ兄さんの物の言い方にカチンときた。

「企んでるですって？ ガイウス兄さんはそんな言い方しか出来ないのですか？」

「何だと？」

「人の心を覗く時に、自分の心が澄み切ってなければ、他人の心も歪んで見える物です。ご自分の愚かな心を通して、私の心が歪んでるなどと決め付ける言い方は失礼です！」

「こいつ！ 生意気なだけでなく、暫く会ってないうちに屁理屈まで

身に付けやがって！それが兄に向かっていう言葉か？！」

「ガイウス兄さんこそ、自分は兄だ！兄だ！と偉そうにされるなら、こんな生意気で屁理屈を言う私のような妹からも尊敬される様な、立派な人間になられたらどうなんですか？！」

「ユリア、その位でガイウスを勘弁してやんな。」

ドルススお兄様は私とカリグラ兄さんの間に入って止めた。明らかにカリグラ兄さんは顔を真っ赤にしている。

「こんな事ぐらいで怒るなんて、ガイウス兄さんは、同じ名前でも神君カエサルとは大違いですね！」

「ユリア！よさないか。」

「この野郎！ユリア！妹の分際で俺を侮辱しやがって。」

「お姉ちゃん！それはガイウス兄さんに言い過ぎだつて！」

私はカリグラ兄さんに味方したドルシツラにも力チンときた。

「ドルシツラは黙つてな！あんたは私とガイウス兄さんとの喧嘩には関係ないんだから！あんたなんか、ガイウス兄さんにひよこひよこついでるだけじゃない！何も知らないくせに！」

「そ、そんな事無いもん。」

「ユリア！やめなさい。」

「いいえ、ドルススお兄様。最後まで姉としてドルシツラに言わせて。まだまだ幼いからって、何も知らないうちに誰かの後ばかりついてたら、自分を見失っちゃうよ！ドルシツラ、あんたはそれでもないワケ？」

私の発言は、たまに周りの人間を抑え付ける時があった。カリグラ兄さんはドルシツラの頭を摩りなが見下すように話しかけてきた。

「ユリア…。お前、それでもドルシツラの姉貴かよ？この娘はまだ四歳なんだぞ。」

「それが何よ！ガイウス兄さんはどうしてあたしばっかり、『お前は妹だから、兄さんの言うことを聞け』だの、『お前は姉だからドルシツラに優しくしてやれ』だの、ガイウス兄さんの言ってることは、自分に都合の良いことばかりじゃない！あたしだって！あたしだって、みんながローマにいない時、一人で寂しいの我慢してたんだからね！」

「それは仕方ないだろ?!」

「ほら！仕方ないって！そんなのずるいじゃない！」

私は不思議と泣き出してしまった。何でだろうか？きっとこれからのモヤモヤした不安が爆発しただけかもしれない。でも、流石にこの時だけは、いつもは勝気なお転婆としか私を見なかったカリグラ兄さんも、渋々ながら謝ってくれた。

続く

第七章「狂母」第九十六話

「ユリア、少し落ち着いたか？」

「うん…。ごめんなさい、ドルススお兄様。取り乱して泣いちゃって。」

「ううん、あれで良かったかもしれないな。お前は本当に強い女の子だよ。恥も外聞もなく、自分の感情を曝け出して、ちゃんと相手に訴えかけることが出来るんだから。」

そう言うと、ドルススお兄様は微笑みながら、羨ましそうな顔をしながら私のおでこをツーンと押した。

「僕は次男だろ？だから中々上手く伝えられないんだよ。どうしても、ネロ兄さんに気を遣ってしまっただ。」

「そうなんです…。」

「世間は『次男は楽だ。』なんて茶化すけど、そうでもないぜ。」

「今じゃドルススお兄様も、次男として鼻水流すのも楽じゃないですからね。」

「あははは！こんにやろ。本当にユリアは棘の出し方も上手くなつたな。」

「ガイウス兄さんほどでは無いです。」

それでも、ドルススお兄様が人と人の架け橋になろうとする、優しい心を持ち合わせた人だって事を知ってる。

「ガイウスだつて癲癇持ちながら、『カリグラ』という役割をローマ軍団の中でちゃんと演じ切ってるんだから、そこはあいつなりの家族思いでもあるんだぞ。分かってやりな。」

「うん！ドルススお兄様に言われたからそうする。」

「お前、それじゃさつきドルシツラに偉そうに言った事と矛盾してないか?!」

「それはそれ、これはこれですもん。」

「あゝあ。これだもん、ユリア・アグリッピナ様は。後で、ドルシツラに謝っておけよ。」

「はい。」

「お前、昔のお兄ちゃんみたいに伸ばしつてと、お母様にゲンコツ喰らうぞ。」

「あー！ドルススお兄様も今やつた〜！」

「あははは！」

「エッへ。あははは！」

二人でお腹から笑ったら、少し気分が晴れた気がした。この頃の私は、本当にドルススお兄様と仲が良く、色々な話をしていた。お兄様がいなかったら、私は心の何処かで感じてる重圧に押しつぶされてたかもしれない。

「ドルシツラ？」

「お姉ちゃん？」

「さつきは…言い過ぎて…」じめん。」

「いいよ、大丈夫！」

ドルシツラ。本当に吸い込まれるような綺麗な笑顔。はあ…。この子のキラキラ輝いてる笑顔を見ると、何故か不思議と抱き締めたくなる。

「お姉ちゃん？どうしたの急に？」

「なんでもない。暫くこうさせて。」

「もう…。ユリアお姉ちゃんったら。」

私は暫くドルシツラを腕の中で抱き締めてた。妹は生意気にも私の背中をポンポン軽く叩いて落ち着かせてくれる。全く、ドルシツラつたら…。

「全く、お姉ちゃんは甘えん坊なんだから。」

「なーに？？ドルシツラ、あんた私が一人でローマに残る時、何を
お姉ちゃんに何をあげたか覚えてるの？」

「え？？」

「自分はぶどうの実だけ食べて、皮の中に種だけ入れてくれたんだから。」

「えー？！ウソ？！」

「本当だって。しかも地面に落とした、きつたないぶどうも手のひらに乗せて。」

「やだー！信じらんない。あたしそんな事してたの？！全然覚えてないよ。」

無理もないか…。

一年位前とはいえ、まだまだ幼かったからね。

「ねえ、お姉ちゃん。」

「何？」

「何か悩みでもあるの？最近全然元気ないし…。」

「悩みか…。あると言えば、あるかもしれないけど。お父様が亡くなられた後だから。」

「うん…。そうだよ。でもさ、姉妹なんだから、たまには妹に頼つてもいいんじゃない？」

「生意気な事言つて。」

「でも…。お母様とは、最近、目も合わせないでしょ？」

やっぱり妹ドルシツラは、妹なりに姉の私を心配してくれているみ

たい。

「うん…。」

「お母様だって、ああやって気丈な振る舞いをされているけど、お姉ちゃんの事を心の何処かで心配しているはずだよ。」

「そうかな…?」

「そうだよ。お姉ちゃんはお姉ちゃんらしくあればいいんじゃない?」

「あたし…らしく?」

「お母様だって、少し位お姉ちゃんのオツチヨコチヨイなどころ見れば、きつとお腹から笑ってくれるって。」

「あんた?お姉ちゃんがオツチヨコチヨイって、どついう事よ?」

「ネロお兄様から聞いたよ。」 おかしなセネカ”に出会って、真似ばかりしてたんでしょ?」

「あー!ー!そんな話まで聞いているの?!」

「しかも、哲学者の事を”哲役者”って言ってたんでしょ?」

「だー!ー!誰からそんな事聞いたのよ?」

「ネロお兄様。」

「?…。ネロお兄様ったら。」

「あははは!」

「あははは!」

ドルシツラともお腹いっぱい笑った。考えてみたら、最近はローマがずつと喪に服してる三ヶ月間、お腹から笑える事がなかったから余計に良かった。私達は何だかんだいって家族の絆がある。でも、この時既に、次の悲劇の幕開けが始まってる事は知らなかった。

続く

第七章「狂母」第九十七話

「アントニア様がお帰りになられました！」？

セリウスのハキハキした声は、私達に元気を与えてくれた。元気になられたアントニア様を囲む為、クラウディウス叔父様、ドルスツス様、長女で高慢ちきのリヴィアもやってきたのだ。？

「アントニアお義母さん、お帰りなさいませ。」？

「ウイプサニア…。この度は本当に本当にごめんなさいね。息子の葬儀に出られなかったなんて、母親失格です…。」？

「いいえ、お気になさらないください。」？

「私は貴女の爪の垢でも煎じて飲むべきね。私も若くして旦那を亡くしたから、貴女の気持ちは世界中の誰よりも痛いほど分かっているはずなのに、やはり身内での死を向かえると…。」？

「…。」？

「ましてや、実の子の早過ぎる死と違ってしまつと…堪らなくなつてしまつてね。年長者としても失格。」？

お母様は目に涙をためながら、首を横に振って、アントニア様の両手をしっかりと握る。？

「お義母さん、そんな事はありませんです。あの人はお義母さんに育てられた事を、常に誇りにして生きておりました。その人道主義の心意気は、我が子供達にも着実に受け継がれておりますよ。」？

「本当に？」？

「ええ！もう一度、その回復されたお姿から、我が子達をしっかりとご覧になっていただけませんか？」？

「うん、そうするわ。」？

「ネロ、ドルスス、ガイウス…。」？

お兄様達は誇らしげに、アントニア様へお姿を見せている。？

「本当に…みんな、あの子の面影があつて立派だわ。」？

アントニア様は、一人一人に優しく声を掛けている。次は私達姉妹の番。お母様が私をジッと見つめている。そのまなざしに、なぜか背筋をピンと反り上げるような緊張感を虐げられた。？

「それに…ドルシツラ、リウィツラ達三姉妹。」？

え？？

「みんな、お義母さんの意思を受け継いだ子供達ですよ。」？

お母様？？

どうして私の名前を呼んで下さらないの？さっきちゃんと目が合ったのに…。？

「おやおや、ドルシツラも大きくなって。リウィツラもやっとヨチヨチ歩きが出来るのかしら？」？

お母様は私をまるで通り越しての紹介。私はとってもショックで、笑顔を失い俯くしかない。？

「…。」？

「そして、アグリッピナ…。」？

「はい？」？

「アントニアお婆ちゃんのところへおいで。」？

嬉しかった。？

アントニア様は私の事をちゃんとわかってらしたんだ。私は半べそかきながらアントニア様に抱きついた。？

「もう、アントニア様！」アントニアお姉ちゃん”で、なかったのでは？」？

「あははは、そうね。そうだったわ。」？

アントニア様は私をギュツと抱き締めてくれた。きつとずっとお父様と一番離れていた私を、不憫に思ってくれたからだと思う。？

「ウイプサニア…。アグリッピナは貴女がゲルマニクスといられる為に、たった一人でローマに残ってくれたのですよ。例え自分の我が子といえども、感謝の気持ちを忘れてはダメね。」？

「本当ですね、お義母さんの言う通りです。ありがとうございます、ユリア。」？

「いいえ、お母様…。」？

でも、私の心には、お母様の感謝の気持ちりが全く伝わってこない。私は誰にも悟られないように、なるべくアントニア様に明るく振舞っていると、突然後ろから、お父様の喪が明けぬうちに双子を出産されたリウィツラ叔母も迎えにいらした。？

「母さん?!」？

「リウィツラ?!」？

お二人は抱き合って喜んでる。？

リウィツラ叔母さまも凄くアントニア様の病状を心配されていたが、出産で酷くてそれどころではなかったらしい。？

「こつちが長男のテイベリ・ゲメツルスで、こつちが次男のゲルマ・ゲメツルス。」？

「まあ、本当に可愛いわね！リウィツラに似た女の子じゃなくて本当に良かったわ。」？

「あのね…。回復早々、母さんは余計な一言多いんだっつーの。もうこんだけ孫達に囲まれて充分ババアなんだから心配させないでよ！」？

「ババアって？！余計な一言って何よ？あんた、まさかこの間のクラウディウス氏族の祝宴でワイン薄めず飲み過ぎたの、もう忘れたわけじゃないでしょうね?!」？

「ダー！まだあの日の事を根に持つてるわけ？いい加減にしてよ。」？

リウィツラ叔母さまがセイヤヌスとキスされた日だ！

しっかし…。リウィツラ叔母様が毒付くと、さっき迄のしおらしいアントニア様のお姿は、まるで嘘のように普段の元気の良さを取り戻す。ひよつとして、口喧嘩って元気になる源なの??

「あんたが口悪いからでしょ?!病み上がりの母親掴まえて、イキナリ孫の前でババア呼ばわりはないでしょう?」？

「かぁー！そんなに元氣あるんだったら、何で兄さんの国葬に出なかつたのよ?!あんたがぶつ倒れたおかげで、ローマは大変な事になってたんだから。」？

「え?」？

「あんたが病に伏してるっていうから、テイベリウス皇帝陛下も大母后リウイア様も、兄さんの国葬に出られなかつたんじゃない!」？

え?!?!?

リウィツラ叔母さまの発言に、一同はビックリした。?

「何で…そうなるわけ？」

「それはそうでしょう？」『国家の母親』を自称する大母后リウエア様としては、病に倒れた母さんも自分の子供なんだから。放っておくわけにはいかないじゃない。」

しかしドルスツス叔父様は、リウイツラ叔母様に巷で噂されてる事を質問する。？

「でも、リウイツラ。巷では、人気を誇るゲルマニクスの当てつけだとか噂があるけど…。」

「はあ？あなた何言ってるの？！普通に考えたら、あんな聡明でバランスを考える人が、兄さんへの悪感情だけで出ないなんてあり得ないでしょ？」

「…。」

「あれほど抜け目無く、後の何に役立つのか常に考える人が欠席したのよ。うちの母さんが本当に心配で、出れなかつたに決まってるじゃない。」

お母様が私達に語った見解とまるつきり逆だった。？

「確かに…。リウエア様は、いつも以上に私を心配してくれて、いつも以上に優しく毎日私の看護をしてくれていたわ。」

「ほらね？そんなだけ献身的にしてくれてるんだったら、兄さんの葬儀に出られるわけじゃないじゃない。全く、あたし達の母親なんだからしっかりしてよね！」

初めて大母后リウエア様から水泳を教わった時、水を怖がる私にイデアのお話をしてくださった言葉を思い出した。？

”アグリッピナ…。今行っている事が、次の何に役立つのか？考えながらやっでご覧なさい。そうすれば、苦しさをなんてどうでも良くなるし、イデアを感じる事が出来るはずよ。”？

外界に惑わされず、内面のイデアを感じる事…。きつとりウィア様は、アントニア様の病状を心から心配して、外界に惑わされず、ご自分の内面のイデアに従ったんだと思った。後先の事など考えられないほどに。？

「まったく、五十も過ぎてる年齢なのに、孫の前で子供みたいに物投げてわめき叫ぶんじゃないっつーの。」？

「え?! あんた! どこでそれを?!」？

「エッへへへ。実は昨日リウィア様とお話した時に聞いてきた。

えつと、『お義母さんの嘘つきー!』だっけ?」？

「かあ〜〜〜!! ああ、お喋り女狐め!!!」？

一同は、赤面しながらも元気を取り戻したアントニア様のご様子に安堵しているが、お母様は何も喋らず静観したままだった。？

続く

第七章「狂母」第九十八話

ローマ市民からのデモとして長い期間行われたお父様へ喪に服す行為は、あらゆる組織や機関のマヒを引き起こしていた。さすがにテイベリウス皇帝陛下も、異例の声明を出すほど。

「元老院ならびにローマの自由市民達よ、いかなる神君、軍神と呼ばれた偉大なるローマ英雄達でさえ、時としてその命には限りがある。だが、我々の住むローマ国家は永続的に生きていかなければならない。故人を偲ぶ深い気持ちは分かるが、一日も早く、元の生活に戻る事もまた、故人を弔う上での最上の選択ともいえよう。」

再びローマは、否が応でも元の生活へと戻って行く。その後、テイベリウス皇帝陛下から、リウィツラ叔母様の双子出産に関する喜びの声明も発表されたのだが、ローマ市民にとって一番の関心は、やはりピソの父ゲルマニクス暗殺疑惑に関する裁判だった。

「おはよう、ウィプサニア。」

「ドルスツス様、おはようございます。」

「いよいよ、今日がピソ裁判初日になるね。」

「はい。」

「僕はこの日がくる事を本当に指折り数えて待っていた。あらゆるものを最大限生かして、今回の裁判に臨むつもりだよ。きっと良い結果になる事を祈っているよ。」

「優しいお心遣い、本当にありがとうございます。」

「ゲルマニクスの配下にいた四名の元老院議員達も、知識を結集させてる。僕はゲルマニクスの代わりにはなれないが、いつでもウィプサニアの味方である事は変わらないからさ。」

「ドルスツス様は、本当にお優しいお方。亡き夫もきつと喜んでい

る事でしょう。」

「うん…。そうだな。」

「…。」

すると、ゲルマニクスお父様の弟であるクラウディウス叔父様も、わざわざお母様を励ましにやって来た。

「ウイプサニア…。」

「クラウディウス様。」

「私は最後までこの裁判を傍聴し、記帳するよ。残念ながら僕の身分では、君に出来る事はこの位しかないが、それでも兄さんの想いを託された、ウイプサニアを応援しているよ。」

「心よりのお気遣い、誠にありがとうございます。」

お母様は勿論、私達子供も元老院で行われるピソの裁判を傍聴する事は不可能だった。そこで、クラウディウス叔父様が記帳された個人所有の裁判記録を開いて、当時の様子を綴ってみようと思う。

《ピソの裁判》

この私、クラウディウスは、今回行われたピソと彼の家族に対する裁判に関して記述を行う。彼らは、今は亡きローマの英雄であり、私の兄でもあるゲルマニクスへの毒殺容疑者として、兄の妻であるウイプサニアを中心とした、一政派の元老院の貴族達から嫌疑を掛けられ起訴をされた。

裁判初日。

その日がとうとう訪れた。

私とドルスッス様と一緒に、ウイプサニアの元へ挨拶をしに行く。

ドルスツス様の長所でもある、元来の陽気な性格はすっかり実を潜め、その顔には亡き友の妻ウイプサニアから託された執念と忠義一色だった。それもそのはず、彼と私が港町タツラキナで兄の遺灰とウイプサニアを迎えにいった時、ウイプサニアから世にも恐ろしい話を聞かされたからである。話は前後してしまうが、その時の事も書き残しておこう。

「我が愛する夫ゲルマニクスは、ピソによって殺されたのです。」

「な、何だと?!」

「そ、それは本当なのか?ウイプサニア。」

「はい、クラウディウス様。既に承知の事実でしょうが、亡き夫はあのピソと犬猿の仲でありました。しかし、共に国家ローマの為に忠義を尽くす軍人でもあります。しかし、ピソがシリアの属州の総督として任命されているとしても、その上をいく我が夫に託された大権は、如何なる事があっても守らねばなりません。」

「...。」

「しかしピソは、己が年長者である故の幼長礼節を強要し、嫌がる行為や規則をむやみやたらに変更して軍団の規律を乱し、事あるごとに夫へ非難を浴びせ続けたのです。」

ドルスツス様は険しい顔をしたまま俯いてる。私は自分が知っている事を確認してみた。

「その話は私も知っているよ。そこで兄さんは耐え切れずエジプトへ皇帝の承諾無しに行ってしまったんだろう?」

「え?どうしてそのような話になっているのですか?!シリアを離れ、エジプトへ行くように示唆したのは、あの憎きピソなのですよ!」

「何だと?!」

ウイプサニアの表情は、込み上げる怒りと無念さを露わにすると、既に泣き疲れているはずなのに、さらに肉体から振り絞るように涙を流し始めた。

「ピソです…。全てはピソが原因なのです…。夫は最後に、こう言い残しました。”後はドルスツスに頼む、無念を晴らしてくれ”と…。」

「ああ、分かっているよ、ウイプサニア。ゲルマニクスの無念は、僕が必ず晴らして見せる。」

今迄俯いていた顔を上げるドルスツス様は、眠っていた猛虎が牙を光らせている様な怒りに満ち溢れていた。その後、ウイプサニアからはピソの妻であるプランキーナの妖術まがいの様子など、ピソとその家族が兄の暗殺を企てた嫌疑を洗いざらい告白してくれた。だが、この私、クラウディウスは、常日頃歴史の研究をしているためか、多角的に公平に物事を検証する癖がついてしまっている。確かに兄ゲルマニクスの死は心から苦しい事だが、どうも一つの疑問が引っかかってしょうがない。

「一つ疑問なのだが…。なぜ、兄だけが毒殺され、呪われたのだらうか？」

「それ、どういう事ですか？クラウディウスさん。」

「いや、ゲルマニクス兄さんが本当に毒殺された、もしくは呪い殺されたとしたら、なぜ彼だけだったのだらうか？という疑問だよ。側には常にウイプサニアが着いていた。召使も使用人も元気であるのに、何故ゲルマニクス兄さんだけなのだらうか？」

だが、私の検証癖は、初めてドルスツス様を怒らせてしまった。時と場所を選ぶべきであった。あの時は、ゲルマニクス兄さんの突然の悲劇で、誰も彼もが感情的であったのだから。再び、裁判初日に

戻そう。

「確かに、こうやって日を置いて、しかも、昨日の妻が当たり前に言っていた真逆な解釈をすれば、少し冷静に物事が見えそうな気がしますよ、クラウディウスさん。」

「そうでしたか、ドルスツス様。」

「タツラキナでは本当に無礼な物の言い方、申し訳無かった。」

「いえいえ、貴方の指摘はごもつとでした。元来、私と兄では住む世界が違う。違う世界の者がしゃしゃり出て、高い場所から語るべき事では無かったのですから。」

「なるほど。」

「私は日頃から歴史の研究をしている癖で、一つの事象を多角的な見方で検証する癖があるのですが…。上から物事を語ってしまった、人の神経を逆なでしやすいタチなのかもしれません。」

「あははは。」

「ほら、私にとっては、ローマからタツラキナ迄のアップピア街道は、指先一つくらいだと…。」

「あははは！それは地図の上ではってことですね？クラウディウスさん。」

「ええ。」

「貴方は実に愉快な方だ。ゲルマニクスとは違ったユーモアがある。」

この私、クラウディウスの得意技といえは、自虐的な話題で人を笑わす事ぐらい。笑われる事には昔から慣れているもの。とにかく、ドルスツス様が裁判を前にリラックサされてとても良かった。

「こ、これは一体?!」

「何なんですか?!クラウディウスさん。」

我ら二人が、ピソの裁判が行われる元老院の目の前で目にした光景は、何千何万にもおよぶローマ市民が、自然と集まった怒涛の様なエネルギーであった。

続く

第七章「狂母」第九十九話

《ピソの裁判》

この私、クラウディウスは、ドルスツス様と共に、裁判の行われる元老院の目の前広場に集まった人々に圧倒された。彼らは兄ゲルマニクスの死が、ピソによる毒殺だと心から信じている者達ばかり。いきり立ち、その腹に抱えた怒りは、スパルタカス暴動の歴史を連想させるほど。

「改めて、兄を慕う人々の数に、私はビックリしてしまいました。」
「ゲルマニクス…。死してもなお、さらに多くの人々の心を虜にしていったのか。」

「ですね。本当に凄まじい人間の数だ。」
「それにしてもです、クラウディウスさん。我々は建物まで果たして行けるのでしょうか？」

「参りましたね…。」

すると、我々がいる場所とは反対側から、罵声が飛び交始める。ある者は喉を枯らしながら訴え、ある者は護衛の兵士の目を盗んで、何とか物を投げ込もうとしている。そう、今回被告として訴えられた、ピソとその家族が元老院へ到着した様である。

「おい！ピソ！貴様の様なローマ人の風上にも置けないやつは、即刻死刑だ！！」

「俺たちを見下しやがって！余裕ぶっこいてるんじゃないぞ！てめえ！戻ってから直ぐにドンチャン騒ぎしたそうじゃねえーか?!この裏切り者！レムス様の怒りを浴びちまえ！」

ここまで市民の怒りが頂点に達していると、さすがに呪われているのは、この者達ではないか？と皮肉の一つでも浮かんでくる。だが、ピソは動揺するどころか、堂々と胸を張って階段を登って行く。また、その堂々たるや姿が、怒りに満ち溢れていた群衆を逆なでしたのだろう。彼らは罵声を飛ばし始める。

「いいか？！ピソ！我らの救い主、ゲルマニクス様を亡き者にした罪は思いぞ！」

「元老院の豚ジジイ共が、いくら貴様を無罪放免にしようとも！俺たちローマ市民は黙ってねえーからな！」

「貴様のにやけた皮は！この俺が斬り裂いてやる！」

「丁度いい！肉屋の知り合いに頼んでやろうさ！！」

「あははは！！」

明らかに度の行き過ぎた罵声飛び交っているが、ティベリウス帝位より、娯楽の一切を奪われたローマ人達の捌け口の矛先が、ピソへと向けられた怒りや憎しみという事であれば、理解し難い状況ではない。

「さあ、ドルスツス様。今のうちに行かれてください。」

「クラウディウスさん？」

「貴方と一緒にに行けば、片脚を引き摺る愚か者の存在で、大変な騒動に巻き込まれますよ。」

「そうだな。彼らの勢いに後押しされて、我を見失っては裁判の本質が掴めなくなる。」

「ですね。」

「では…クラウディウスさん、後ほど。」

ドルスツス様は凜々しくも群衆に見事混ざりながら、裁判所へと入っていった。さて、世界の最も注目を浴びる裁判がいよいよ行われ

ようとしている。広場の血相とはまるで違つて、院内はやけに静まり返つていた。しかし、今回は開廷をする際に、裁判長を務めるティベリウス皇帝が異例の注意を發したのは意外であつた。

「今回の裁判を行うにあたり、元老院議員の諸君らには、一つ守つてもらいたい事がある。私とて、養子とはいえ、自分の弟の長男であるゲルマニクスの死には涙した。だが、裁判は公平かつ平等に行つて欲しい。ゲルマニクスの死に関するピソへの起訴が認められるのが国家ローマの法ならば、被告の弁護に立つ者にも、告発者と同等の権利が与えられることが保証されるのも国家ローマの法でなければならぬ。法の前には、万人は平等均等に弁論の権利を有するものだ。」

ティベリウス皇帝から告発者に対する牽制なのか？はたまた皇帝としての立場を明確にしたのか？その真意は未だにわからないところではあるが、この裁判が彼らにとつても『繊細な問題』であつた事は確かのようにだ。

「しかるに、ピソ殿のような聡明で偉大な功績をお持ちの方が、このような告発に巻き込まれる事態、ナンセンスと言わざるを得ない。」

ピソの弁護側の無能さは、誰の目から見ても明らか。これでは本当につまらない歌劇を見ているようなもの。ピソの威厳や威信を盾に飾り立てられた無駄な言葉を吐き出すだけで、何一つ弁護されていない。さすがにピソとは旧知の中である皇帝にとつても、時間の無駄な浪費と感じていただろう。

「もつよいー！」

一方、兄ゲルマニクス側の若き四人の告発者達は、見事な手腕で次々とピソを法の下に糾弾していく。これは明らかに共和政支持者の長老たちによる演出だろう。彼ら四人は正義という名の下に、法を熟知した長老達から、敢えて感情を押し殺して裁判へ挑むように示唆をされたのだ。

「さらに、ここにはシリアにおいてピソ被告が直々に承認した書簡があります。これを持ってすれば、シリアにおける被告の実状がどうであつたか、語る事を抜きにしても、明白になるはずです。」

「クツ！」

一つの理由には、裁判長のティベリウスも述べたように、冷静に告発することで均一均等に進めつつも、告発側に有利な評決の道へ導かれる可能性があること。もう一つは、若者に対してそのうぶさ故に邪知をしたがる年長者への牽制という演出だ。若者の心情は世論の風評を純粹に感じ取り、感情論に走り易いものである。だが、被告への悪感情を押し殺した四人の初々しさと不憫さに、皇族派の年長者達も心を奪われるだろう。結局のところ、裁判とは、法という名の脚本を元にした舞台劇であり、そこへ参加するものの心を掴むため、被告も原告も役者であるといえるのかもしれない。

「確かに、シリアでの軍に対する統率方法では、ゲルマニクス氏とは意見の衝突があつたことは認める。だが、だからといって、それがゲルマニクスを殺す私の動機にはならん！」

「では、属州の総督である貴方にお伺いします。なぜ、二度も、任地から離れる必要性があつたのでしょうか？」

「何？」

「その間に原告が軍に託した命令とは全く違った、軍の統率を混乱させるような命令書が被告より出されております。これが証拠となります。」

「ど、何処でそれを?!」

「そこには、原告ゲルマニクスの命令を無視せぬ者への処罰まで詳細に書かれております。また、今回問題となった原告によるエジプトへの未承認入国も、被告の原告に対する非協力体制によって生み出された状況による、被告から強要された結果だと考えられます。よって、被告は巧みな情報操作によつて、原告を国家反逆罪の烙印を押し為の罫であつた事はいうまでもありません!」

「馬鹿な?! さっきも言つたらう?! 我々は確かに衝突はしたが、敢えてそのような境遇に陥れる事など、国家ローマを守る軍人として、また、ゲルマニクスの戦友として断じて無い!」

「では、戦友として、原告が国家反逆罪に捉われる可能性のあつた、エジプト入国を何故止めなかつたのですか?」

上手い。

感情の抑制の効いた若者ほど、真つ直ぐに問題へ光を当てる。それも真摯な表情を携えて。

「以上の状況からも、ピソ被告の国政に対する違反行為は明らかであり、また、逃れようのない事実でもあります。」

そして裁判は、被告の自決という意外な結末を辿る事になる。

続く

第七章「狂母」第百話

《ピソの裁判》

この私、クラウディウスは、ピソの兄ゲルマニクス毒殺嫌疑に関する裁判の記帳をしている。元老院裁判が、法律という名の脚本に基づいた劇ならば、法廷はまさに舞台といえよう。では二日間の被告ピソは、この舞台劇ではどのような役者だったのだろうか？己の権威に慢心し、セリフを忘れて追い詰められ、焦りの中で四方八方へ噛み付く事しか脳の無い蛇である。

「断じてありえない！何故ゲルマニクスのエジプト入国を私が止めなかつた事で、私が奴に殺意があつたと変わるのだ！？慢心していたのはゲルマニクスの方であろう？！ローマへ刃を向けるために、エジプトへ入国したに決まっている！」

「では、原告ゲルマニクスは何故エジプトから再びシリアへ戻つたのでしょうか？」

「え？」

「もしも、ローマへ刃を向けるつもりならば、貴方が原告へ抑止力となれるはず。ところが原告はギリシャの衣服に身を包んで家族と健やかな時間を過ごすだけ。一方、貴方はローマの危機と知りながらも何も策を打たず、むしろシリアで、原告の指令した命令の撤回を強制的に行っています。」

「そ、それは！ゲルマニクスがシリアに不在だったから状況に応じた変更であつたのだ！」

「ならば、何故、原告ゲルマニクスがローマへ刃を向ける為にエジプトへ入国した理屈が生まれてくるのでしょうか？事実、原告はシリアに戻り、再度被告のあなたによって撤回された命令を再発令し、ローマへ刃を向けるどころか、二つの国を属州へ編入させている。」

これでもまだ、原告のゲルマニクスが国家反逆の意思があったと主張されるのですか？」

「！！！！！！！！」

さらに、彼の身を包む布から叩かれたものは、ピソのローマに対する忠義ある誇りではなく、ピソのローマへ晒した醜態という名の埃であった。彼は兄の軍に自分へ寝返るようを買収までもしており、属州の民が働いた悪事を無放置状態にさせ、さらに兄の死を知るや、妻のプランキーナと共に感謝祭と生贄を捧げる犠牲式まで行っていたという。これにはさすがの皇族派元老院議員達でも、呆れたようなため息を辺りに蔓延させた。原告側は、これらの動かぬ証拠を、丹念に一つ一つ提示しては、的確に窮地の崖へとこの蛇を追い込んで行く。

「これらの証拠を併せても、被告が作為ある理由で原告側を陥れようとした事実は明確であります！」

「待ってくれ！こんなのは原告側のでっち上げだ！！大体、この短期間の間に何故これら全てを集められるというのだ？！」

「はい？今、何と仰いましたか？」

「え、これら全てを短期間に集められるのかと……。」

「これら全てを……と、今仰いましたね？」

「え？」

「何故、貴方は一目見ただけで、”これら全て”と認識できるのでしょうか？」

「?!」

「つまり、これら全ての動かぬ証拠を、以前から認識していたという事の表れであります。」

「違う！嘘だ！私はこんなものは一切知らん！！」

醜態を晒すピソがいる一方で、そういった意味では、ウィプサニア

がこの舞台に一切姿を表さない事は、世界中の悲劇を一人で抱える哀母という演出は効果的であつた。主役不在の舞台劇の中で、不在故の存在感を誰もが雄弁に物語ってくれるからである。

「これにより、原告であるゲルマニクス殿の妻であるウィプサニアと、残された家族、及び実の母親であるアントニア様の心情を察すれば、計り知れない悲しみに苦しまれている事は、誰の目から見ても明白な事実。それでもなお、被告は罪の言い逃れをしようと醜態をさらけ出し、ローマ人としてはこの上醜い生き様としか思えない。」

二日目においては、ピソの妻であるプランキーナも、次第に彼から距離を置きはじめ。プランキーナは飛蚊の如く狙いを変え、古い付き合ひでもあつた大母后リウイア様の恩恵を盾に、己に集中した毒殺の嫌疑の罪も全て夫一人の企ててあつた事と証言し始める。さらに、息子達や彼の幕僚達も、ピソ一人だけに罪を重ねようと別の弁護人を立ててきた。どうやら役者では、ピソよりも一枚も二枚も上だつたらしい。身内の寝返りは、例えローマ市民や元老院議員内からの屈辱には耐えられてきたピソであっても、相当に堪えた流れであつたらう。

「それでもなお、貴方には殺意が無かつたと言えるのでしょうか？」
「何度も言わせるな！殺意など無い…。少なくとも、食事の席でゲルマニクスだけに毒を盛る事などは不可能であつた。なあ？プランキーナ？そうであつたらう？！」

「…。」
「何故だ？何故答えてくれぬ？！そつだ！使用人だ！シリアの奴隷達だ！あいつらに聞けば…。」

「貴方は、ローマ自由市民でもない、しかも属州の現地で調達した奴隷の証言を盾に、このローマ国家へ無実を証明するおつもりです

か？」

「?!」

ピソは度々旧知の友であるティベリウスにも、減刑を訴えるような目で懇願した。だが、裁判長を務めるティベリウスが開廷前に述べた通り、彼は法の元では誰もが平等である姿勢を崩さず、眉一つ動かさなかった。

「それが…旧知の友である私への仕打ちなのか？」

「…。」

「答えてくれ！何故だ?!何故、私だけがこうして苦境にさらされなければいけないのだ?!ティベリウス、お前は我が戦友では無かつたのか?!」

「…。」

外の群衆はますます孤立無援に追い込まれたピソへ、更なる追い討ちを掛けるかのように、彼の銅像をなぎ倒し、処罰に値する人間を処刑する広場まで引きずり持っていった。軍人ならば腹を決めろ!と言わんばかりに、兄ゲルマニクスを殺したピソを、決して許さない意思の表明であった。

「セイヤヌス。」

「はい、皇帝陛下。」

「外の騒ぎを鎮めてきなさい。」

「はっ!」

民衆の暴動になりかねない状況をセイヤヌスが制圧する為、裁判は六日間、休廷とする事となった。自分の旧知の友、妻、息子達、そして取り巻き達、彼ら全てに掌を返されたピソは、最後の手段としてセイヤヌスへ脅しを掛ける。これが彼の命運を分けたのかもしれない

続
く

な
い。

第七章「狂母」第一百話

《ピソの裁判》

この私、クラウディウスは、ピソの兄ゲルマニクス毒殺嫌疑に関する裁判の記帳をしている。二日間で窮地に追い込まれたピソは、最後の望みを捨て切れず、自分と共謀したセイヤヌスに脅しを掛ける。

「おい！セイヤヌス、待つてくれ！」

「何ですか？ピソ様。」

「一体どういう事なんだ？！話と違うではないか？！皇帝陛下からの恩恵は無く、貴族派からの後ろ盾も全くない。ましてはあの忌々しい平民共のうるさい声ときている！あははは…まさか、私はこのまま処刑されるわけではなからうな？」

「さあ…。」

「さ、さあ？！貴様、それが目上の者に対する態度か？！」

「目上の者？立場でいえば貴方は格下のはずだ。それがこのような状況で不躰にもこの私に対して礼節を欠き、何をのたうちまわっている？！」

「クツ…。」

「あれ程醜態を晒し、間抜けにも証拠を処分しない老人へ、みすみす差し伸べる手などあるものか？先ずは己の愚かさを恥じるがいい！！！」

だが、ピソも蛇の異名を持つ者。トカゲの異名を持つ若造から、己を蛇以下のトカゲの尻尾切りと扱われて黙っている男ではなかった。

「そうかい、それが貴様ら若造のやり方か…。ならば、こっちにも考えがある。あれらの証拠が私一人の一存だけで出されたとも思

うか？ゲルマニクスを疎ましく思っていたのは、私だけでなく貴様も同じだったはずだ。」

「何の…事だ？」

「セイヤヌス。お前は用心深い人間で有名だろうが、私はお前が指摘したように、あらゆる書簡を処分しない間抜けな老人でな。」

「?!」

「それだけではない。私がローマへ帰還した日に開かれたクラウデイウス氏族による祝宴にて、貴様は一体誰と戯れていたんだ?!」

「ピソ!？」

「皇帝陛下のケツの穴だけでは飽き足らず、今度は皇帝陛下の実際の息子の嫁リウィツラの唇を奪うとはな。お前は私の友であればこそ見逃してやったものを…。」

「何が望みだ?!」

「このまま貴様が非情に徹するならば、六日後の法廷ではその書簡及び貴様の悪行に関する証言を法廷に持ち込むつもりだ。それが公になれば、貴様も平気なツラをしていられないはずだ。だが、私の待遇を考慮してくれるのであるならば、書簡及び証言の辿るべき道を、セイヤヌス、貴様へ譲るのもやぶさかではないぞ。」

「分かった…。暴動を制圧し、再びここで会おう。その時に詳細を。」

「

「フッフ、お前は実に賢い若い世代だ。」

だが、ピソは六日間を待たずして、自らの喉を掻き切って自決した。セイヤヌスの話を信じればの話であるが、理由としては民衆の圧力に耐え切れず、また嫌疑を掛けられた自分の家族の保護も求めてという事であった。しかし、私が数年後調べた結果によれば、ピソの傷口はどう見ても不自然であったとの事。ここ、ローマでは神君力エサルさえも暗殺されたのだ。ピソが自決でない可能性は多いにあり、肅清があっても不思議ではない。

「原告側は、被告側へ以下の処罰を要求します！」

ピソの自決を経てまなお、被告の原告ゲルマニクスに対する殺害容疑の裁判は続けられ、原告側は故人である被告ピソへ「記憶の抹消刑」であるダムナテイオ・メモリアエを求めた。「記憶の抹消刑」とはその名の通り、その者の記憶及び記録、生きた証の存在自体をローマの歴史から抹消することであり、社会的な名誉を重んじるローマ人にとっては最も厳しい罰である。そしてピソの家族にも処刑を求めていた。皇族派の元老院議員達もほぼ、原告側の意見に賛同していた。

「ここまで提示されれば致し方ないだろう。」

「原告側は申し分無い仕事をしたのは疑う余地は無い。」

「彼らは悪感情を押し殺し、テイベリウス皇帝陛下が開廷前に示唆したとおり、冷静に公正に務めていたのだからな。」

元老院法廷では判決に先立って指導的な議員の意見を尋ねる。評決の前に最初に意見を述べたのが今年の執政官のバルバトウスとメッサリヌスだ。しかし、テイベリウス皇帝は評決前にさいし、判決に干渉してきたのであった。

「どうであろうか？ 執政官のバルバトウスとメッサリヌス殿達よ。」

ゲルマニクスは命を失い、その容疑を疑われたピソも自ら家族を守る為に命を絶った。その上、嫌疑が掛けられていたといえども、ピソもまた故人である。故人からその命ばかりか名誉までも奪う必要性があるのであるか？ また、原告被告双方ともに、証拠不十分の向きも否めない。よってピソの残された家族の処罰についても、これ以上、ローマ人の血を流す事は恥のなものでもないだろうか？」

テイベリウス皇帝陛下の正論は、いちいち最もであった。ピソも己

の命を持って家族の身を案じたということ。「記憶の抹消刑」は回避され、その息子もその身を守られ、ピソの妻プランキーナにいたっては、大母后「アウグスタ」の権威に保護され無罪となった。

「これにて、本法廷は閉廷とする！」

テイベリウス皇帝の均等を図った判決への干渉は、多少なりとも原告側では不服を申し立てるものもいた。しかし、やはりピソの自決という事実がぶら下がっている建前では、控訴も困難と判断し、原告側もこれで十分と判断した。一方、民衆は最もシンプルな反応であった。ピソが自決したことによって、ゲルマニクスの無念は晴らせたと大喝采で、中には泣きだして喜んでいた者までいた。

「クラウディウスさん、これで一応の結果が出た事になりますね。」

「ドルスツス様も、本当にお辛い立場でありながら、よくぞ抑制を貫き通されました。」

「ピソは我が師でもありました。だが、ゲルマニクスもまた、我が友。一筋縄では行かない気持ちは何度もよぎります。」

「でしようね…。」

「クラウディウスさん、浮かない顔してどうしたんです？やはり…ピソの自決にはきな臭いものを感じますか？」

「ええ、二日目のピソの様子から、どうしても自決を図る様には思えなかつたのです。彼は確かに追い詰められてはいました。また、身内からも掌を返されたような状況に陥りました。しかし、狼狽えながらもあれ程生に執着するほど、自尊心の強い貴方の師が、家族を守る為に命を絶つたなどと到底信じられないのです。」

「それには、父上の評決前の干渉もあつたからでしょうか？」

「あまりにもバランスが良すぎるのです。バランスが…。ですから後味が悪く感じます。」

「果たして、これからどうなっていくのでしょうか？クラウディウス

スさん。」

「本当ですね、ドルスツス様…。」

ローマ市内が喜びに包まれ、新たに兄ゲルマニクスの神話が増幅されていく瞬間である。それに便乗した原告側の貴族が、兄の銅像を神殿へ設けることを皇帝へ進言するが、それらの提案は速やかに却下される。あくまでもテイベリウス皇帝陛下は、法の下ではピソもゲルマニクスも平等であるというスタンスを崩す気はないのである。さて、兄の妻であるウイプサニアはどんな反応をするのだろうか？彼女に便乗して支援を申し出ていた、クラウディウス氏族に対する共和政支持者の貴族達も、彼らの今後の動向も気になる。兄はローマにて神格化されたのかもしれないが、残された我々家族は、やらなければならない事柄や思いもよらぬ人間達に翻弄されていくのかもしれない。クラウディウス著 自宅の寝室にて。

という事であった。

私も覚えているのは、民衆のお父様や私達家族に対する熱狂的な声。ピソがこんな経緯を経て自決したなどと知らなかった事もある。ただ、外や他所の血相とは別に、お母様のあまりにも物静かな佇まいが、不気味な雰囲気と存在感を出していたのは覚えている。まるで、嵐の前の静けさのように…。

続く

第七章「狂母」第百二話

お母様は毎日毎朝毎晩、食事時になると、同じ話の繰り返しをして
いた。

「もうそろそろ、ネロの成人式ね。」

「はい、お母様。」

「お前は本当に遅しくなつて。きっと死に追いやられたお父さんも
喜んでる事でしょう……。」

「は……い。」

「お父さんの名に恥ぬ、立派な男性になるのですよ。」

「はい、お母様。」

そうやってネロお兄様へ優しく微笑むと、今度は厳しく険しい表情
で私達を賤ける。

「いいですか、お前達。これからのユリウス家に甘えは禁物です。
あれ程ローマ国家へ人生の全てを費やしたと言っても過言ではない、
貴方達の誇るべきお父様が、聞くも無残な話で裏切られ、死に追い
やられ、果ては平民以下の扱いで葬儀をされたのです。」

これが教育と言えるものだったのか、それはお母様にしかわからな
い事。だが、一番幼い妹リウィツラも含め、お母様がお話してい
る時は、一切の遮断も戯れも失言も許されなかった。もしもお話の
腰を折るような事があれば、容赦無く頬を叩かれる。

「本質を見極めなさい。そして、決して惑わされては駄目です。信
じられる事は、今は貴方達の目の前にいる、お前達の母親でしかあ
りません。生きる為に、生き抜く為に、用心して、そして代々受け

継がれている高貴な血脈を、大切にするのです。」

アントニア様がお戻りになられてから、私達はいつしか別の部屋で食事を取るようになった。その理由にはお母様の毎度の躑ける言動が原因。アントニア様は実の息子を失った痛手から徐々に回復され、裁判の結果には納得のいくものだったが、お母様のお話で神経をすり減らすのには勘弁とでも言いたげ。お母様とアントニア様では、身内の死の捉え方が違うのかもしれない。

「アントニア様？」

「なに？アグリッピナ。」

「あの…その…。」

「どうしたの？」

「大母后様は…お元気ででしょうか？」

「ええ、相変わらずよ。」

私はどうしてもリウイア大母后様に会いたかったが、お母様の厳しい監視下の中では到底大母后様へ会いに行く事など不可能。話すらあからさまな嫌悪感と咳払いをしてくる。

「ウイプサニア？ウイプサニア？」

「はい、アントニアお義母さん。」

「貴方にお客様よ。」

「あ、ありがとうございます。」

一体、お母様は何をされているのかしら？あの裁判以来から更に貴族達の奥方らが、お母様の元へわざわざ挨拶しにくるようになった。

「ウイプサニア様、この度はお招きありがとうございます。」

「いえいえ、どうぞいゆるりと。」

「ウイプサニア様！お子さん達は元気？」

「ええ、とても元気よ。」

「私達も連れてきたからね！」

昼から夜にかけて、お母様達はずっと女性同士で座談会のようなものをしていた。私達子供は、彼女達の連れてくる子供達と遊ぶ事しばしば。大体が、一歳から五歳までの幼児の組と、六歳以上から十歳までの児童の組、そしてそれ以上を青年の組みに分かれていた。アントニア様も、各属州の王国の王子や王女等を頻繁に預かるようになっていったので、この頃の私達は、それはそれで楽しかった。

「つまりです、うちの旦那も含めて皆さんが仰るように、クラウデイウス皇族派には十分気を付けなければなりません。」

「あの方達が今のローマを牛耳っているのは明白な事実ですわ。このままではウイプサニア様のお母様やお姉様のように……。」

「これ！ウイプサニア様の前では過激な発言です事よ。」

お母様はいたって冷静にお聞きになられていた。

「いいえ構いません、皆さんのご承知の通りなのですから。私の母は私の父である軍神アグリッパ亡き後、初代アウグストウスの命でテイベリウスと再婚させられました。しかし、クラウディウス氏族の皇族派の連中は、元首への内乱を謀ったとして姦通罪で断罪したのです。その頃、ロードス島へ逃げ隠れていたテイベリウスは、何もすることなく静観しておりました。」

周りの貴族の奥方は、それはそれは非常に辛い表情をされて聞いている。

「私の姉にしてもそうです。12年前、まるで私の母がそうであっ

たからと言わんばかりに、なにも考慮せず、ユニウス・シラヌスと共に初代皇帝へ陰謀を企てたとして姦通罪で訴えたのです。なぜ、元首の娘である私の母が、そしてその娘が、内乱を謀る必要性があるのでしょうか？」

聴き入る奥方達の顔は険しくなり、お母様は彼らから一心の同情を買っていた。

「最も悲惨なのは、兄達ガイウスやルキウス、そして私の可愛い可愛い弟のポストウムスです。彼らはクラウディウス氏族の皇族派の連中によつて、次々と死を迎えさせられました。」

中には顔を背けて涙を流す方もいらつしやつた。

「そして、次は私の愛する夫までも……。彼らローマの魔物達は、どこまで他人の命を奪えば気が済むのでしょうか?!」

すると奥方達は力強くうなづきはじめた。

「いいですか皆さん、これは決して他人事ではないのです。ちょっとした平和の隙間に、彼らは同情する様な素振りで虫の様に身をかがめながら入り込み、気が付くと寄生を始め、跡形も無く食い漁つて不幸へ陥れてしまふのです。」

私の母ウィプサニアの根底にある、クラウディウス氏族に対する怨念や恨みは、幼い頃から隣り合わせだった悲劇の繰り返しで培ってきたものなんだと感じた。

「ウィプサニアの言う通りです。私達は断固クラウディウス氏族のみによる圧政を許す訳にはいきませんわ。これは私達の夫達に関わ

る問題なのですから！」

「そうですね！」

「冗談ではありません！許してはいけません！」

「しかし、そうなってくるとこれから如何すれば良いのか…。」

「相手がこちらを侵食する前に、私達から侵食すればよいのでは？」

「でもどうやって？」

するとお母様が立ち上がって笑みを浮かべた。

「わが子長男ネロが、もうすぐ成人式を迎えます。先ずは、あの子に元老院の議席を与えるよう働きかけ、相手の出方をみて見ましよう。」

「ウイプサニア！それはいくらなんでも早すぎませんか？」

「彼らがそれを拒否すれば、彼らの意図が明確になるでしょうけど、長男ネロが議席獲得を拒否された場合、民衆は黙ってはいないでしょう。」

「確かに…。」

「ならば、尚更ウイプサニアの為にも、私達の夫達に根回しをしてもらいましょう。」

「打倒、クラウディウス氏族による圧政ですわ！」

「ええ！」

最初は、ちよつとした主婦達の単なる集まりだったと記憶している。でも、お母様を動かしている怨念は、徐々に私達家族を蝕み始めてきた。そしてなによりも、そのお母様自身でさえも、この時既に、クラウディウス氏族とは違った別の虫達によって、ご自分の人生が寄生され始めている事に全く気が付いてはいなかったのである。

続く

第七章「狂母」第百三話

「ドルスツス様！」

「おめでとうございます、ドルスツス様！」

父ゲルマニクスの葬儀によって、長い間延期されていた、ドルスツス叔父様のイリリウムでの偉業に対する、略式凱旋式がようやく挙行された。

「本当に凜々しいお姿であられて…。」

「ゲルマニクス様亡き後は、やはりドルスツス様が次期皇帝継承となりうるお方です。」

「以前の陽気さもだいぶ取り戻されたご様子かしら？」

「いいや、幾分引き締まって、力強くなられたな。」

人々は、久しぶりに訪れたローマの華やかさに、心を和ませていた。略式とはいえっても凱旋式なのだから。この場にお父様がいたら、きっとご自分の事のように喜んだかもしれない。はしゃいで、クツルスやセリウス、ドルスツス様と一緒に明け方迄、インスラにある食堂のタヴェルナで飲み明かしたのかもしれない。でも、お父様はもういない。

「ユリア、ドルスツス様、本当にかっこいいな。」

「ええ、ガイウスお兄様。」

「僕もいつか凱旋式をやるぞ！もっと華やかに、そして豪華に！その時はユリア、お前とドルシツラとリウィツラの妹達も一緒だ。」

「本当に？！私達もガイウスお兄様の後に？！」

「ああ、僕が二輪の戦車に乗ってアポロ様になり、お前達は籠にいるんだ。きつとみんなローマ中が大騒ぎさ！」

「うわ！楽しそう！」

カリグラ兄さんとは、いつも口喧嘩ばかりだけど、こういった派手で豪華絢爛な所が好きなのは共通していたかもしれない。事実、ギリシャ文化や神話の殆どは、カリグラ兄さんから丹念に教えてもらっていた。もちろん彼の演劇台詞付きで。

「アキレウスにヘクトルを討ち取られたトロイアは士気消失していた。そこへ颯爽と、十二名の最強のアマゾネス女戦士軍団が現れた！彼女達を率いているリーダーの女王は……」

「ペンテシレイア！」

「そう！あつたり〜！ユーピテル様とユノー様の間に生まれた軍神マールス様の子供さ！彼女は贖罪の為にトロイアへ加勢しにきたんだ。」

「食材？つて食べ物欲しかったから？」

「馬鹿！違うよ、贖罪。罪滅ぼしだよ。」

「罪滅ぼし？なんで？」

カリグラ兄さんは得意げになって、吟遊詩人のように両手を広げ、たいそう大げさな言い回しでトロイア戦争を謳いだした。

「その昔、ペンテシレイア若かりし頃、彼女は己の妹を誤って弓矢で殺してしまった。その罪の意識に苛まれ、彼女は己の罪を清めるため、トロイア王プリアモスへ会いに行く。彼女はプリアモス王から自らの罪を清めてもらい、トロイアが滅亡の危機に瀕している今こそ、その時の恩に報いるべく立ちあがったのであった。」

カリグラ兄さんは木の枝を剣に見立てて、ぶんぶん振り回しながら派手に動き回っている。私は長い木の枝を持たされ、槍を振り回すように立ちまわれと命令された。

「ガイウス兄さん、なんでアマゾネスって言うの？」

私は長い木の枝をぶん！と振り回すと、お兄様はうまく立ち回って剣で交わす。

「色々な説があるけど、ギリシャ語で『胸がひとつしかない』という意味の「a-mazos」から派生したらしい。アマゾネス達は弓を引くときに大きな胸があると邪魔だから、幼い頃から片胸を切り落としてるんだってさ。」

「ひえー！」

けれど、トロイア戦争のアキレウスとペンテシレイアごっこはいつも私が負けなくてはいけなくてつまらなかつた。その代わりにパリとアキレウスごっこでは、私がカリグラ兄さんを弓矢で倒すので楽しかった事は覚えてる。この時はカリグラ兄さんも踵を抑えながら、英雄の死を讃えるように地面へ倒れて行く。私は迫真の演技を見せてくれるカリグラ兄さんに大きな拍手喝采をいつも浴びせた。だが、喜びもつかの間だつた。

「おい！ガイウス、ユリア！今すぐドムスへ戻るんだ！」

「ど、どうしたの？ネロお兄様？！」

「ドルスツス叔父様のお母様が…！」

ドルスツス叔父様の実のお母様が、略式凱旋式のわずか三日後、この世を去られてしまった。とても安らかな最後であつたとの事。後にテイベリウス皇帝陛下が最も愛していた女性と語っていた。しかし、初代皇帝アウグストゥス様に世継ぎ問題で無理やり離縁させられた経緯がある。葬儀には、私達家族、祖母のアントニア様、ドルスツス叔父様はもちろんの事、奥様のリウィツラ叔母様、その娘で

高慢ちきのリヴィラ。やはり大母后リウエア様とティベリウス皇帝陛下は不参加。

「アントニア様、父はやはり来てくれませんか…。」

「私も大母后様から頼んでみたのですが、公務がお忙しいらしく…。」

「やはり…。」

「お力になれなくて、ごめんなさいね。」

「いいえ。ただ、時々父には流れるべく赤い血があるのだろうか、と考えてしまう事があります。ロードス島へ引きこもって、帰って来た時も素っ気ない態度。ゲルマニクスの国葬も辞退。裁判は冷徹に静観。昔の父は何処へ行ってしまったのでしょうか？」

ドルスツス叔父様の嘆きは、今のお母様に対する私の気持ちと同じ。お父様が死去し、それ以来すっかり変わってしまった。いいえ、表面上はお母様なのだけど、内面的な何かが違う。

「きつと、皇帝陛下にはご自分のお考えがあるのでしょ…うね。私達には計り知れない何かが。」

「そ…うなのでしょうか…。」

ドルスツス叔父様は本当に私達の父親代わりをしてきてくれた。親身にお母様の心を気遣い、時には援助もしていてくれた。

「ドルスツス様…。」

「ウイプサニア！」

お母様はドルスツス様をまるで聖母のように抱擁し、心を痛めているドルスツス様の為に涙を流している。アントニア様は微笑みを残したまま、少し顔を背けながらその場を後にした。幼い私にはその

意図が見えなかったが、どうやら未亡人である母ウイプサニアに対してやり過ぎという思いが芽生えていたらしい。事実、この後にあるいざこざが起きるのだが…。

「どうかお気を鎮めください、ドルスツス様。」

「僕は、大丈夫だよ、ありがとう。」

「いいえ、どうかご自分に無理をなさらないでくださいという意味です。」

「自分に…無理？」

「ええ。わたくしごとながら、幼い頃から身内の死を体験してきた者として、心にその悲しみを閉じ込めておく方々のお気持ちは痛いほど分かるつもりです。しかし、それこそが危険な行為でございます。アイデアを見つめるように、ご自分の感情を解き放ってください。せめて、ドルスツス様のお母様と私は、同姓同名なのだから…。」

「ウイプサニア…。」

ひよっとしたら、ドルスツス叔父様は母ウイプサニアの大らかな憐れむような微笑みに、ご自分の母親の母性や面影を見つけてしまったのかもしれない。クラウドイウス叔父様も、母ウイプサニアとドルスツス叔父様のお母様は、名前だけでなく顔も雰囲気もとても似ていたと語っていた。

「母さん…。」

「ドルスツス…。」

「うっくうっく。」

「もう大丈夫よ、ドルスツス。」

ドルスツス叔父様は物陰に隠れ、母ウイプサニアに抱かれながら涙を流している。

「あ、あなた?!」

「え?」

「ウイプ…サニア?!うちの旦那に何してるのよ?!」

運命は常に皮肉が付きまとう。リウィツラ叔母様が偶然通りかかり、母とドルスツス叔父様が抱擁している姿を見つけてしまったのだっ
た。

続く

第七章「狂母」第百四話

「リウィツラ、何でもないんだ。ただ、ちょっとだけウイプサニアの肩を借りただけだ。」

「肩を借りてたですって?!あなた!どうして私にじゃなく、ウイプサニアの肩なんですか?!」

「いや、その、ウイプサニアはゲルマニクスを亡くしたし、幼い頃から不幸に合っている。だから僕の気持ちを理解し、和ませようと努めてただけなんだよ。」

「はい、ドルスツス様の仰る通りです。」

しかし、お母様の冷静さを装ったこの態度が、ますますリウィツラ叔母様をムカつかせたように。

「なんなのその言い方は?!まるで私は悪くないって言い方じゃない!妻がいる旦那に対して、なぜそんな事ができる訳?!」

「それは、お気持ちを察しただけです。」

「嘘おつしやい!他にも理由があつたんでしょ?!」

「いいえ。」

さらにお母様の言い方は、相手の感情を逆撫でするような冷静さだった。

「はあ?!何それ?!大体、ウイプサニア!あなたは最近何様のつもりなの?!兄さんが死んだ事いい事に、母さんのドムスで好き勝手に貴族連中の奥さん達を呼んで、やりたい放題じゃない!」

「お、おい!リウィツラ。そんな言い方は良くないだろ!」

「あなたは黙つてて!この際だからはっきり言うわ。ゲルマニクスはあなたの旦那である前に、私の兄であり、母さんからすれば息子

なの！母さんはね、あんた達家族に気を使って文句一つ言わないよ
うだけど、内心いい加減にしろって思ってるはずよ！」

「リウイツラ！！」

「いいえ！あなたは黙ってて！ウイプサニア、兄さんの名声を利用
して、ローマでもひっくり返すつもりなわけ？！」

「…。」

お母様はピクリとも動かず、瞬き一つせずにリウイツラ叔母様をジ
ツと見つめていた。

「リウイツラ…もうやめないか！」

しかし、さすがリウイツラ叔母様の気の強さは、止めに入ったドル
スツス叔父様の腕を払い除ける。

「大体、あなたもあなたです！兄さんの国葬の時に歓喜余って、ウ
イプサニアの家族を『我が子以上に守る！』なんて力説したそうじ
やないですか？！」

「当然の事じゃないか。突然やってきた悲劇に、誰だって誰かの助
けを必要とするだろう？！」

「そんな事を言うから、この女は勘違いするんじゃないですか！そ
れに、それを聞いた長女のリヴィアがどんな気持ちだったのか、あ
なたは考えた事があるのですか？！私が参加していたら、そんな事
は絶対に言いませんし、言わせません！」

「す、すまん…。」

しかし、それでもお母様は決してリウイツラ叔母様から目を離さず、
ジツと見つめていた。その堂々とした態度が、リウイツラ叔母様に
は理解できなく、首を横に振って傾げていた。

「ウィプサニア。あなたって兄さんが死んでから、まるで人が変わったよう。それとも…今のあなたが本当のあなたなのかしら？」

少しだけ、お母様の右眉がピクリと反応したようだった。けれど、それでも微動だにせず、ただ、黙っているだけだった。

「リウィツラ、もうその位にしなさい。」

アントニア様がやって来た。

「今日はドルスツス様のお母様の葬儀。死者を弔う日に醜い争いをするなんて、あなたは罰当たりもいい所だわ。」

「母さん！私は本当の事を言っただけですよ！」

「リウィツラ…。あなた、もう子供じゃないんだから、自分が言ってる事が全て本当の事だと決めつけるのはやめなさい。」

「だって！」

「だってじゃありません。ウィプサニアはドルスツス様の為に心を和ませようと努めていた。それだけだったのだから、あなたも信じてあげなさい。」

「そうは言ってもね！」

するとアントニア様はすかさずリウィツラ叔母様の頬をピシヤリと力強く叩く。

「お黙り！この子はまだ分からないのかい?!」

「か、母さん…。」

「死者を弔う日に、醜態を晒すな！と言ってるの!」

叩かれた頬を抑えるリウィツラ叔母様。

「ウイプサニアを見てご覧なさい！あなたに何を言われようとも、口を真一文字にして、声を感情的に張り上げず、ジツと堪えてるじゃないの！それなのにあんたはマイナデスのようにギャーギャーわめいて！夫を亡くした気持ちなら、リウイツラ！あんたが一番理解できるはずよ！」

「…。」

アントニア様の言う通りだった。

リウイツラ叔母様は、ドルスツス叔父様と再婚される前、お母様のご兄弟であるガイウス様とご結婚されていた。そして、ここにいるアントニア様、お母様、リウイツラ叔母様みんなが未亡人を経験している。

「リウイツラ…。ウイプサニアを悪く言う事は、同時にあんたの一番最初の旦那をも悪く言う事になるのよ！それにね、あんたが言うほど、私はウイプサニアに対して内心いい加減にしるだなんて思っ
てないわよ！あんたの方こそ、いつからそんなロクデナシになったのかい？今はゲルマニクスも死んで、ドルスツス様のお母様も亡くなられて、家族の繋がりがあある同士、互いに助け合う時じゃないの？！」

けれど、アントニア様に叩かれたリウイツラ叔母様は涙を流しながら訴えてきた。

「何よ！結局母さんは、私なんかよりも、ゲルマニクス兄さんやウイプサニアの方が可愛いんじゃない！」

「何を子供みたいな事を言ってるの?!」

「いつだってそう！私は言いくるめられて、我慢しなさい、我慢しなさいって…。兄さんは良くても私はダメ！ウイプサニアは良くても私はダメ！旦那は良くても私はダメ！結局、母さんこそ、自分が

言ってる事が全て正しいと決めつけてるじゃない！」

「まだ、分からないのかい！この子は！」

「ええ、分かりっこないわ！こんな頭の硬いクソババアの言う事なんて！」

またまた出た…。

リウィツラ叔母様のクソババア発言。アントニア様は怒って、もう一度頬を叩こうとしたが、すかさずリウィツラ叔母様はアントニア様の右手を避け、身体をプイと回転させ、その場から怒りながら去ってしまった。

続く

第七章「狂母」第百五話

若くして夫を亡くし、初代皇帝アウグストゥス様から再婚を勧められても、頑なに首を縦に振らなかつたアントニア様。一方、結婚五年目にして寡婦になり、二回目の結婚をティベリウス皇帝陛下の長男ドルスツス叔父様とされたリウィツラ叔母様。そして、幼い頃から身内の死を身近に感じ、ローマの英雄ゲルマニクスと結婚し、原因不明の病によって未亡人になつた母ウイプサニア。

「ウイプサニア、お客様よ。」

「はい、お義母さん。」

「私はクラウディウスの所に行つてくるわ。」

「クラウディウス様の所へ？」

「これからリウィツラが来るでしょ？色々と揉めると面倒だから、

クラウディウスの長男のダルサスに会いに行つて来るわ。」

「そうですか、分かりました。」

「リウィツラとは仲良くやってね」

「はい…。」

この頃の三人は、表面上仲良く角を立てないように取り繕っているが、根底にある互いの考え方は別々。そして、父ゲルマニクスが生きていた時の頃のように、心から笑い合える仲には、とうとう最後までなれなかつた。

「ユリア、いよいよ明日でネロ兄さんの成人式だな。」

「うん、ドルススお兄様。とっても楽しみです。」

「僕も後三年くらいしたら成人式だ。兄さんに負けないように頑張らないと。」

「頑張つて、お兄様。」

「そつだ！成人式終えたら、ユリアにこのお守りのブルラをあげるよ。」

「ええ？！本当に？！良いんですか？」

ブルラはローマ男性が成人を迎えると外すお守り。この時期はまだ男性しかなかったが、多分女性でブルラをつけたのは私が初めてだと思う。木登りばかりして心配ばかり掛けてたので、私も特別にブルラをさせられた。大人になっても何故か外せず、こうやって昔の頃を思い出す度に、今でも着けている小さなブルラを見つめている。ブルラをくれたあの頃のお母様は、本当に優しくかったのに…。

「何だかんだ計算の苦手な妹だけど、色々とお世話になってるからな。」

「もう！お兄様ったら。今じゃユリア・アグリッピナも、倍の数ぐらい簡単に計算して答えられますっつて！」

「本当か？じゃ、試しにやってみるか？」

ドルススお兄様はニタつと笑ってる。ところが、私はドルススお兄様より計算が得意なパッラスという奴隷から、81個の倍数暗記法を教えてもらっていた。とにかく重要なのは、答える時に計算している振りが必要。適当に指なんか使ったりして。

「それじゃ、4の八倍は？」

「えつと…32。」

「おおお！それじゃ、9の二倍は？」

「うーんと、18。」

「おおおおお！じゃ、9の五倍は？」

「それは…45。」

「ユリアー！何でいきなりできるようになったんだよ?!」

「へへ〜ん。あたしだって、いつまでも”計算苦手なアグリッピナ

” 呼ばわりされたくないですもん！ちなみにドルススお兄様、9の倍数の答えは、二つの数字を必ず足すと9になるのです。”

「えっ?! 本当か? えっと例えば9の五倍だと45。4と5を足すと9。9の七倍だと63で、足すと9! すごい!」

「えっへん!」

「それじゃ... 9の十倍は?」

え?!

しまった! それはパッラスからまだ教えてもらってなかった!

「お兄様、十倍なんてのは... どうも私好みでないので、もっと違う感じに...。」

「嫌いでも計算すればできるだろ? 3の十倍は?」

「えっと... うーんと、25?」

「やっぱり...。ユリア、お前計算してないだろ?」

「え?! してますよ!」

「何で25になるんだよ? それ、パッラスから教えてもらったんだろ?」

「え?! 何の事でしょう? オホホホ...。」

「オホホホ... じゃねえーよ。お前がこんな難しい事をスラスラ即答で簡単に答えられるわけないよなって思ったんだよ! 白状しろ!」

ギク! 暴露てた。

しょうがなく、私はパッラスから教えてもらった81の倍数暗記法を地面に書いた。

「これで、81個つと。」

「ちよつと待て! ユリア、これ81パターン全部覚えたのか?!」

「はい。あ、でも、ひっくり返しても同じやつや答えが同じやつは数にいれてません。」

「確かに：お前って記憶力はいいもんな。でもこれを覚えるの大変だったろ？」

「それは解放奴隷リツラがおしえてくれた、ガリアの歌に合わせて覚えました。」

「へえーどんな感じなんだ？」

私は得意げになって唄ってみた。

けれど、しかしである。気が付くとドルススお兄様は耳に指で栓をして、顔をしかめっ面してる。

「あはは……。ユリア、唄はもういいよ。」

「え？どうしてです？もつと謳わないと暗記法覚えられませんよ。」

「いやー兄ちゃんは十分、お前の記憶力には感心してるから、大丈夫！」

「本当にですか！？」

「本当に本当！」

私は昔つから唄が下手だった。

でも、それに気が付くまでは、自分の息子が生まれてくるまで待たなければいけない。

本当に音痴だったんだよな。あたしって。

「ドルススくん？何処かしら？」

「あ、リウィツラ叔母様の声だ。」

「はい！ここです、リウィツラ叔母様！」

「良かった！お兄ちゃんのネロくんの衣服のトガを手伝ってあげて！」

「はい！」

ドルススお兄様は駆け足で行ってしまった。私はちよっぴり寂しか

ったので、一人で地面にチョークを使って計算の練習をしていた。

「アグリツピナちゃん、お絵描きしてるの？」

「あ、計算式を書いてるんです、リウィツラ叔母様。」

「ああ！ごめんなさい。随分アバンギャルドな絵だな〜って思ってます。オホホホ……。」

「たはは……。あたしあんまり数字が苦手なんです。」

「うっそ！？あたしもよ。」

「ええ？！叔母様も？」

「ギリシャのアルキメデスだがアルテミスだが知らないけど、変なもの見つけっからめんどくさいっいたらありゃしない。あたしだったら、どんな服を選ぶかに頭使いたいわ。」

リウィツラ叔母様らしいな。

音が似てる哲学者と女神がごっちゃになってる。

「ねえーねえー。アグリツピナちゃん、これからお洒落しない？」

「ええ？！お洒落ですか？！」

「うん、だって明日ネロお兄ちゃんの成人式でしょ？計算よりもお洒落が大切！……！」

「うん！」

「今からあたしんちにおいで！いっぱい衣服あるから！」

「はい！」

こうして、何故カリウィツラ叔母様と仲良くなり、叔母様のお洒落教室へ無断で通うようになっていった。

続く

第七章「狂母」第百六話

女神ユウエンターズ。

それは最高神ユピテル、ユノ、ミネルワの3主神とならぶ、ローマにおける青春の女神。成年男子の保護神でもあり、少年の成人式には賽銭を奉るのが決まってる。カピトリヌス丘上にある「至上最高のユピテル神殿」の中にも、女神ユウエンターズの「社」がしっかりと与えられ、その最高神ユピテルとは密接な関係として位置づけられている。

「ネロ・ユリウス・カエサル・ゲルマニクス…前へ。」

「はい。」

ローマでは、成年に達した男子が、それまでの子供服のトガ・プラエテックスタから、正式の成人服であるトガ・ウイリリスと替える。それまでの子供服は神々の名の下に燃やされ、ブルラは家の守護神であるラールを祭る寺院に納められる。ブルラを身体から外すのは、新たな女神ユウエンターズこそが、成人男性の保護神となるから。

「ネロ兄さん、やっぱり凜々しいな。」

「本当に…。あー。ドルススお兄様、見て見て！高慢ちきのリヴィアのやつ、目がハートになってヤンの！」

「ユリア…リヴィアさんの話をする時だけ、お前は口が悪くなるな…。」

「そう？だってリヴィア生意気でムカつくんだもん。」

「そうは言ってもお前より年上だろう？」

「あんな高慢ちきはガキンチョだよ！」

「あはは…。」

そのまま、成人式を迎えた長兄であるネロお兄様は、お母様を支援してくださる貴族元老院議員の根回しもあり、通常ならば二十人委員を経てからなるべき国家財政、国庫の管理を職務とした財務官であるクアエストル候補として、元老院に議席を与えられる事になった。この知らせを聞いた時のお母様は、歡喜あまつて床にしゃがんで涙を流したほど。さらにそれだけではなく、同時に神祇官であるポンティフェクスにも任命され、父ゲルマニクスの遺児として異例の年齢で顯職を与えられた。つまり、お母様が毎日毎晩手塩に掛けて育てられた結果の賜物だった。

「お前達…。今、一番上のお兄様であるネロは、やっとローマの自由市民として、そして成人男性として、ローマ国家に携わる立派な男性になりました。お前達も、神君カエサル様や軍神アグリッパ様、勇者アントニウス様や初代皇帝アウグストゥス様の血を引く家族として、その名に恥ぬ立派な人物になる為に、常に精進を怠らぬように生きて行きなさい。油断こそが、お前達を蝕み、ローマの魔物へと己を陥れるのです。」

この時ばかりは、さすがにお母様を尊敬した。女手一つで、ここまで本当にネロお兄様を立派に育て上げたのだから。私達は正式の成人服であるトガ・ウイリリスを着られたお兄様に、素直に畏敬の念を抱かずにいられなかった。生真面目で、常にお守りのブルラをトウニカへ胸元にしまうほど几帳面。真面目で優しいけど、結構凝り性の発明好きで、頼んでもいないのにその日の晩には新しいサンダルのソレラをこさえたり。

「兄さん…。」

「ドルスス。」

「エッへへ、新しいトガ、すっごく似合ってるよ。」

「ありがとう…。」

ネロお兄様はドルススお兄様の耳元で何かを囁いた。

「ドルスス、お前となら一緒にもつと便利に着れるトガを作れるよ。」

「うん！ネロお兄さんなら間違いない！」

「着るのに一時間以上掛かるなんて、不便だよね？」

ネロお兄様とドルススお兄様は笑っていた。ドルススお兄様が鼻水をずっと垂らしてた頃から、二人はしょつ中一緒に何かを作ったりしてた仲間なのだから。私は二人の兄弟としての友情が、これからも永遠であると、この時は信じて疑わなかった。

「ガイウス…。それとも、”カリグラ”様と呼んだ方がいいかな？」

「ネロお兄さん、恥ずかしいよ。身内にカリグラって呼ばれるのは好きじゃない。」

「そっか、そうだよな。お前は幼い頃から、ドルススお兄ちゃんやネロお兄ちゃんがなし得なかった事を出来たんだ。妹達を守るのはお前の役目かもしれない…。」

「妹達を？」

「ああ、お前はお兄ちゃんやドルススお兄ちゃんにはない、大胆不敵な勇敢さがあるんだ。そこはきつと誰よりもゲルマニクスお父様譲りさ。」

「ネロお兄さん…。」

カリグラお兄さんとネロお兄様は強く抱擁された。何気にネロお兄様は長男としてしっかりと兄妹を見つめているのかもしれない。

「ユリア…。」

「はい。」

「お前には言いたい事がいっぱいあるから、後ででもいいかい？」
「うん！」

そうすると、次女のドルシツラへ言葉を言葉投げ掛けた。

「では、ドルシツラ。」

「はい、ネロお兄様。」

「お前の笑顔は、きつと誰しもを魅了する素敵に輝く宝石だよ。」

「ありがとう、ネロお兄様。」

「でも、時には悲しみも怒りも、兄妹には出していいんだからな。」

「はい……。」

「お前は、リウイツラの姉である前に、アグリツピナの妹なんだ。お前のお姉ちゃんは、小さい頃から家族の為に、自ら犠牲になってこのユリウス家の為に一人ローマに残ってくれたんだ。お前のお姉ちゃんアグリツピナがいなければ、僕達は一緒にいられなかったんだよ。」

ネロお兄様は私の事を初めてアグリツピナと呼んでくれた。成人式を迎えたからかもしれない。でも、それは一人の女性として認めてくれた事。ドルシツラの左手に必死にしがみつきながら、右手の親指をチューチューしている三女のリウイツラの番。

「リウイツラ？」

「ダー。ばう。」

「たはは……まだまだ分らないかな？」

「ダーネーロ。」

「？リウイツラ！もう一回言っでご覧！」

「ネーロー！」

「母さん！リウイツラが喋った！」

この時、初めてリウィツラはネロお兄様の名前を生意気にも呼び捨てにして話した。リウィツラは後から聞いてもすっかり覚えてないとかましたけど、私達家族は大喜びだった。三女のリウィツラは二歳になってもラテン語の一つも口にしないほど、無口で泣かない妹のところがある。言葉を覚えると一番やかましく成長したのはリウィツラ。次女のドルシツラの語彙や装飾語を盗んだと言っても過言ではないほど、生意気にも成長していく。

「我が愛しの妹、アグリツピナ。まだ五歳でありながらも、これほどできた長女はいないだろうな。」

「ネロお兄様…。」

すると、お兄様は私の耳元で何かを囁いた。

「お前の気持ちも分かるけど、お母様に逆らっちゃダメだぞ。」

「ネロお兄様…私は、ただ!」

「ほら、そこ。」

「はい。」

「長女として、お母様の孤独な気持ちを理解できるのは、ゲルマニクス兄妹の中でも、お前だけだよ。」

「…。」

「お母様は、本当は一番仲良くなりたいのはお前なんだから…。」

「どうして?」

「頭の中で、お前の名前を口ずさめば分かるさ。」

私は三度自分の名前を呟いてみた。お母様と同じユリア・アグリツピナ。そっか…。

「お前が産まれた時、お兄ちゃんは9才だったから覚えてるよ。今の三女リウィツラのように何も言えないのに、お母様に抱かれると、

誰よりも安心してケタケタ笑ってたっけ。」

「私が…？」

「ああ、お母様を独り占めしているお前を憎いとも思った事さえあるさー！アツハハハ。」

私の記憶に無い、けれど感覚で覚えているお母様に抱かれた私。絶対的な信頼の中で、あの三女のリウィツラを初めて私から抱かせてくれたお母様の母性が、身体からゆっくり伝わってくる。ああ、お母様…。どうして私は素直になれないのでしょうか？

「アグリツピナ。長女として、ドルシツラやリウィツラを守れるのはお前だけだ。それを忘れるな。」

「はい…。」

何度も自分は長女だって言い聞かせてきたのに、五歳にもなってまだまだ自分はお兄様達に甘えているんだって思った。きっとネロお兄様もそれを知ってわざと気付かせてくれたんだと思う。

「そして、来週からあたしがネロ様の奥方で、あんた達のお姉様になるから！ヨロシクね。」

おい！高慢ちきのリヴィア！

今は兄妹との大切な時間だろうが！つたく…。空気読めよ。こうして、「ついでに」ネロお兄様は高慢ちきのリヴィアとご結婚もされた。はあー…。

続く

第七章「狂母」第一百七話

「あはは！そんな事言ったの？あいつ。」

「はい、もう台無しでした。」

「タハハハ！もう、ごめんねアグリッピナちゃん。リヴィアには後でキツク言つとくから。」

今日のリウィツラ叔母様のドムスで開かれた、私と二人だけのお洒落教室は、ぶつちやけ愚痴言いまくり大会。身内だろつが、皇帝だろつが、葡萄酒飲みながら毒舌かますぞ！って感じ。さすがリウィツラ叔母様。

「あーアグリッピナちゃんでもいいかしら。」

「リウィツラ叔母様、もう！呼び捨てでいいですから。」

「そう？それじゃアグリッピナにしよう。その代わりあんたも私の事、叔母様やめてよ。」

「えー？それは無理。」

「何で？」

「だって一番下の妹と同じ名前なんですもん。」

「そっか…。それは、ウィプサニアに感謝しないと、いけないっか。」

お母様はレスヴォス島で三女のリウィツラを産む時に、その間に私達子供の面倒を見てくれた叔母様に感謝の気持ちを込めて、叔母様と同じ名前をつけたのだ。リウィツラ叔母様はゆっくり葡萄酒を注ぎながら、まだ、母と仲が良かったあの頃を思い出しているようだった。

「あ、叔母様？」

「うん？」

「葡萄酒入れ直しでしょうか？」

「あ、ごめんなさい。」

「大丈夫ですよ。」

私は混在酒器から葡萄酒を注いだ。もちろん水を多めに入れて。叔母様酔っ払うと大変だから。

「しかし、あんた本当に気が利くわね？うちのリヴィアなら絶対に無理よ。」

「それは…大母后リヴィア様のおかげです。」

「大母后リヴィア様？」

「あたし、お母様がお父様の所へ同行される代わりに、たった一人ローマで大母后様の教室に通っていたので。その時に色々な事を学びました。」

「そっか、そうだったね。あれには本当に感心したの。結構、他の奥様達も、あんたが泣かずに大母后様の所で一生懸命やってるって聞いて、あれで大母后様のイメージもガラって変わったのよ。」

「本当ですか?!」

「ええ、大母后様もえらく感心されてたし。肝っ玉が全然違っつて。」
「嬉しい！」

私はすっかり大母后リヴィア様に心底憧れていたから、大母后様の事を見直されたと聞いた時は、幼いくせに自分の事のように嬉しかった。

「私もウィプサニアの真似して、自分の娘リヴィアに大母后様の教室通わせてみたけど、ありゃダメね。リヴィアのやつは根性なしだから、水泳とかでんでダメだったでしょう？」

「あはは…。ええ、まあ…。」

インチキして私の果物を奪った事は、今日は暴露しないでおこつと。

「ねえ、アグリッピナ。あたしって女として魅力無いかな？」

「え?!いきなり如何したんですか？」

「もう、33歳でしょう?最近目尻に小皺もできてきたし、お肌も水が弾かなくなってきた、胸も昔より垂れてきた感じがするし。」

タハハハ…。参った。年齢の愚痴大会になってしまふのか。

「でもあたしって運動からつきしダメだし、面倒くさがり屋だしさ。どうしたらいいと思う?」

つと言われても非常に困る。

水泳がいいなんて年下の私が言えたもんじゃ無いし。

「アグリッピナは若いけど、でもお肌本当にすべすべしてるよね?羨ましいわ。」

「あはは…。あー!リウィツラ叔母様の、小さい頃ってどんな感じでしたの?」

何とか話をそらしてみた。

本当はアントニア様から聞いているから知っているけど。

「あら?私の幼い頃の話聞きたいの?」

「ええ、もちろん。聞きたいです!」

「そうね…。そう考えると、あたしも長女のリヴィアにはキツイ事言えないけど、あたしは本当は絵描きになりたかったのよ。」

「ええええええ?!?!?!」

「何、そんなに驚く事じゃ無いじゃない。」

驚いた。

絵描きになりたかっただなんて…。

「よく、ポンペイで遊びに行くとき、いっぱいフレスコ画があつて私も真似して描いてたの。そしたら結構上手いからやってみたらって親戚の知り合いの棟梁に言われてね。」

アントニア様はウツボに首飾り、お父様のゲルマニクスはわざと平民の喋り方をして、クラウディウス叔父様は歴史の研究に没頭してリウィツラ叔母様はフレスコ画の絵描きになりたかったなんて…。やっぱりこの家族は少し変わってる。

「ところが、フレスコ画の棟梁と喧嘩しちゃったの。」

「ええ?何ですか?!」

「透視図描いたから。そんなものは広告にはいらない!」って。」

「透視図?何ですかそれ?」

リウィツラ叔母様は目をキョロつとさせている。

「あれ?アグリッピナは美術の話とかでんでダメな感じ?」

「はい。」

「透視図っていうのは、簡単に言うと、平面の絵に奥行きのある絵を描いた絵の事。」

「へー。」

「例えばね、ここの部屋あるでしょ?手前の天井の線と、奥の天井の線、長さが違って見える?」

「長さが…?」

「同じ場所から、親指と人差し指でそれぞれの線の長さをそれぞれ測ってご覧。」

「あああ！本当だ！違ってる！」

「これが奥行き。これを作り出す為に、一点から放射線状に線を書くの。その線にさっきの天井の線みたいに横線とか縦線とかを結びつけると透視図の出来上がり。」

「へえ。」

「実際にやってみよっか？」

「はい！」

リウイツラ叔母様は、チョークを持ち出して、中庭の床に透視図を描き出した。上、右、左と三つの点を書き、それぞれから線を引き張ってきた。

「今から500年くらい前、ギリシャの演劇の舞台美術で、平面板を置いてその上に奥行きのある絵を描いたのが始まりなんだって。」

次第にその線に沿って色々な線を組み合わせて描いていく。絡み合った線の中には、円柱の支柱やらポルティコだったり。

「哲学者のアナクサゴラスとデモクリトスは、その透視図法に幾何学的理論を当てはめたいらしいけれど、私が見たのは、アルキビアデスが自分の家に飾った透視図。これがとっても素敵な絵だったのよ。」

リウイツラ叔母様は話しながら、みるみるうちにユピテル大神殿を横から見上げたようなダイナミックな絵を描きあげた。

「どう？こんな感じ。」

「すっごい！！！！本物みたい！！！！」

「そうそれ。それがいけなかったのよ。」

「え？」

「ポンペイのフレスコ画の描かれた壁に奥行きのある絵を描いたら、みんな本物だつて間違つて通るだろつて！棟梁がさ、怒つたのよ。透視図くらい描かせる！つてんだ。」

「あはははは！」

それにしても、リウィツラ叔母様は意外な特技の持ち主だった事にびっくり。何気に透視図を作る時には角度の計算もしていたから、本当に計算が苦手なわけじゃないんだつて思った。

「あら？誰かしら？」

「お客様ですか？」

「うーん、こんな時間に？」

それは、あの皇帝陛下の右腕であり、この間リウィツラ叔母様の唇を無理矢理奪つてたセイヤヌスの来訪だった。

続く

第七章「狂母」第百八話

「セイヤヌス…。」

「これはこれは、お邪魔だったかな？リウィツラ様。」

「こっちはアグリッピナ。ウィプサニアンとこの長女よ。」

「ほう？ゲルマニクスの。」

「あんたって本当にトカゲみたいに神出鬼没ね。」

「トカゲ…？」

「そうよ、一体何しに来たわけ？」

「いや、ちよつと君に頼みたい事があつてな…。」

「この間みたいに今日は飲みすぎてないから、変な期待は無駄よ。」

するとセイヤヌスは私の顔をジロつと見つめていた。まるで邪魔な仔犬がいるかのように見下した目つきだった。

「悪いが二人つきりで話せないか？時間は取らせない…。」

「あら？アグリッピナがいるとまずい話かしら！」

「リウィツラ叔母様…私。」

「いいから、アグリッピナ。ここにいて頂戴。」

「でも…。」

するとトカゲのセイヤヌスは、ゆっくりと叔母様へ近づいてきた。

「アグリッピナがいるとまずいのは、君のほうじゃないか？リウィ

ツラ。」

「…。」

二人は私がこの間二人が口付けをしていた事を知らないかと思ってるんだ。

「分かったわよ…。アグリッピナ、悪いけど二階の寝室に行つて頂戴。」

「はい…。」

「大丈夫よ、こんなトカゲすぐ追い出すから。」

「トカゲ…だと?」

あからさまの嫌悪感を出した後、セイヤヌスは私を用心深く観察していた。まるで顔の表情の中まで抉り取る様に。蛇のピソとは違った怖さがある。

「この娘は奴隷に連れてかせた方がいいな。」

「え?」

「まさか、ゲルマニクスの血を引く者がするわけではないと思うが、万が一、聞かれてまずい事がリウィツラ、君にあるのなら、君の奴隷に命令させたほうがいいぞ。」

「何よ、用心深いわね?」

「この娘アグリッピナは、並外れた度胸の持ち主だ。」

セイヤヌスという男は、とても用心深い性格で、自分の器以上の野望を持っているくせに、そのやり方は自分の器を超えるようなやり方は絶対に選ばない。常に抜け目の無いやり方で、人を陥れていったようだ。

「大丈夫です、セイヤヌス様。では、リウィツラ叔母様、後で。」

「ええ、アグリッピナ。」

私は一人でその部屋から出て、二階の寝室へ向かった。それにしても、セイヤヌスは私の性格を本当に見抜いている。何だかこのまま見抜かれたままだと悔しい。

「覗いてやるうつと！」

私はサンダルの上を脱いで、両手に被せ、素足でなるべく音を立たないように歩き、リウィツラ叔母様とセイヤヌスがいる部屋の扉に近付いて覗いた。

「頼みつて一体何よ？」

「いや、長女リヴィアとウイプサニアの長男ネロが結婚をしたそうじゃないか…。」

「ええ、そうよ。それが何か？」

「私にはジュリアという娘がいるんだが、そろそろ結婚の時期じゃないかと…。」

「アツハハハ！うちの双子の坊やはまだ産まれたばかりよ、言葉も覚えられないうちから、結婚なんて無理無理。」

「君の双子の息子達の話をしているんじゃない…。君の弟さんには、婚約していない長男がいるそうじゃないか？」

「ええ、それが何か？」

「うちの可愛いジュリアと婚約させて欲しいんだ。」

セイヤヌスは藪から棒に突然変な事を言い出した。リウィツラ叔母様は何も答えず、何度か葡萄酒を飲みながらセイヤヌスを見ている。

「なーんだ、頼みつて一体何なのか思ったらそんな事をわざわざ言いにここ迄来たわけ？あんたって本当にお馬鹿さんね。」

「お馬鹿…さん？」

「ええ。そんな事は直接弟のクラウディウスに頼めばいいじゃない私とアグリッピナの大切な時間を台無しにするほどのことではないでしょ？」

「…。」

「やっぱりトカゲよね？何か昔から思ってたんだけど、騎士階級のエキイテス出身のくせに、やり方がねちっこいんだよね。」
「ねちっこい…？」

大きなため息をついたりウィツラ叔母様は、再び葡萄酒をクイツと平らげて、腰に右手を置いて、左手でわざわざセイヤヌスを指差す。

「要するに、あなたの人生には、正々堂々という言葉は無いの？って言ってるのが分からないわけ。アツハハハハ！」
「…。」

セイヤヌスの右手拳は力強く握り締められてる。叔母様はさっきよりも葡萄酒を飲まれるペースが速くなって、何だかこの間の雰囲気になってきた。もっとお水を混在酒器にいれておけば良かったかも。

「そうか…。女も三十路を超えると、自分の本音に融通が効かなくなって、美の衰えに敏感に反応するものなのだな。」

あ！
言葉よりも、コップがセイヤヌスへ叩きつけられた。セイヤヌスの身体は葡萄酒まみれ。

「それが人に物を頼む態度なわけ？！あなた、一体何様のつもりさ？！頼んで欲しかったら口答えせずに、黙って私の言う事を聞きなさいよ。」

「…。」
「返事は？」
「はい…。」

すると、リウィツラ叔母様は満足そうに笑みを浮かべた。

「それで、宜しい。そこへ跪きなさい。」

「はい、リウイツラ様。」

すると、セイヤヌスは右手の握り締めた拳を腰に隠しながら、リウイツラ叔母様に言われたように膝を床につく。ところが、リウイツラ叔母様は、自分のソレラをポイポイっと脱ぎ捨て、右脚をセイヤヌスの顔に突き出した。

「今度は、私を満足させられるわけ？」

ストラからはみ出る太腿を曝け出し、スラッと長く美しい脚を伸ばして、叔母様はセイヤヌスを弄ぶように葡萄酒をまた飲んでいた。

続く

第七章「狂母」第百九話

セイヤヌスは握り締めた拳をゆっくり開き、その屈辱的な態度に我慢をしながら、突き出されたリウィツラ叔母様の右足を手に取った。

「さあ？どうしたの？貴方って私の為にプリアポスになる勇氣はないわけ？」

「プリアポス…。」

プリアポス…？

どこかで聞いた事ある。あ、確かカリグラ兄さんが、カツシウス・カエレアを侮辱して呼んでだけ。確か、男性性器の神の名前。叔母様?!まさか!

「満足か？」

「え？」

「私を膝まづかせ、自分の足を舐めさせて、それでリウィツラ、貴様は満足か？と聞いているんだ。」

今度は言葉よりも足が、セイヤヌスの顔を蹴りつけた。少し顔を強張らせながらも笑顔を取り繕ったまま声を荒げた。

「貴様ですって?!トカゲの分際で気取るんじゃないわよ!言葉の使い方には十分気をつける事ね!誰に物を言ってるの!？」

しかし、セイヤヌスは込み上げてくる笑いを堪えきれず、部屋中に轟くように笑い出した。

「な、何よ!？」

「哀れだな……。貧乏人の苦勞よりも、恵まれた環境で育った人間の不幸は、どの海よりも深いということなわけだ。」

「はあ?! 私が不幸ですつて?!」

「ああ……。貴様は誰よりも不幸な女だ。」

「ふざけるんじゃないわよ!」

叔母様は再度、セイヤヌスの顔を蹴りつけようとしたが、さすがにセイヤヌスもそれを避けて、叔母様のくるぶしをしっかりと握り、スラッと長い脚をさすり出した。

「ちよ、ちよつと!」

「貴様のお望み通り舐めてやるさ。拒む事はないだろう?だが、貴様の抱える誰にも理解されない孤独の穴は、これにより、よりいっそう深くなるわけだ。」

「?!」

「兄ゲルマニクス亡き後、貴様の母親も、貴様の旦那ドルスツスも、全てウィプサニアの為に尽くしている。貴様が必死に産んだ双子の坊や達も、ローマの民衆からの祝福もそこに、貴様の不幸は誰にも理解されないます。」

「……。」

「貴様の旦那は、自分の母親の葬儀の時に、貴様ではなくウィプサニアに抱きついて涙を流したって言うじゃないか。よくそんな事をされて平気でいられるな?」

どうしてセイヤヌスがそれを?!

それは叔母様が一番気にしている事。

「クッ! いい加減にして!」

「ああいいさ。それで気が済むのならば……な!」

そう言うとセイヤヌスは、叔母様の脚を無造作に放り投げた。叔母様はバランスを崩して床に倒れ、セイヤヌスはキチンと立ち上がり、ジッと見下している。

「知っているのか？ゲルマニクスの妻ウイプサニアは、ドルスツスの母親と瓜二つらしいじゃないか。未だに未練たつぷりのテイベリウス皇帝陛下から私はよく聞かされているぞ。それにローマの男はみんなマザコンだって言うじゃないか。ドルスツスの母親の面影を持つウイプサニアの好きにさせていたら、いずれお前の旦那がなびくのも時間の問題だな？」

けれど今度は叔母様が笑いを堪えきれず、床から立ち上がって笑い出した。

「バカじゃないの？あの人に限って、そんな事あるわけないじゃない！」

「ドルスツスはそうかもしれないが、今や未亡人となった野心たつぷりのウイプサニアは如何だろうな？彼女は既に狙っているかもしれないぞ。」

「バカな事言わないでよ。私がそんな事を許すわけないでしょ！？第一、母のアントニアだって許すわけないわよ！」

「ほほう？随分と身内には信頼されているのだな？リウィツラ様とやらは…。」

「ど、どう言う意味よ?!」

「信頼されている者が、己の立場を利用して、この私を跪かせたり、プリアposなどと呼んだりしているのは、満たされない欲求の捌け口を探しているようにも思えるぞ？それだけで十分不幸な女だ。」

「き、決めつけないで！」

「きつとアントニアも、ウイプサニアも、そしてドルスツスもお前を裏切るような事はしないだろう…。だがな、貴様は彼らを心底信

頼できるのか？」

恐ろしい言葉だった。

今迄の事が嘘の様に、セイヤヌスは立場を逆転させて叔母様を精神的に追い詰めている。叔母様は動揺を隠しきれず、身体を震わせながら立っているのがやっとだった。

「やがて貴様は気が付くだらう。自分の不幸が招いた結果に。自分が他人を信じられない状況に、悩み苦しみ、そして貴様は今のようにした様に、己の欲求の捌け口を探し始める。まるで埋められない穴を見て見ぬ振りしている様に。」

「あああ、あああやめて……。」

「信頼など、身内や他人が与えてくれる物ではない。事実、愛する貴様の長女リヴィアは、ウイプサニアの長男ネ口の元へと離れて行ってしまったではないか？」

叔母様は耳を塞いで顔を横に振って嫌がってる。

「だがな、この私は貴様の抱える孤独の味方だ。」

「え？」

「考えてみる、クラウディウス氏族だけで開かれたあの正餐で、葡萄酒を飲みすぎた貴様を心配したから、目を醒ましてもらう為に介抱したんだ。」

「うそ！」

「嘘ではない。少なくとも貴様の身内の様に、腹こもった子供だけを心配するような事はしなかったぞ。それが嫌で、リウィツラ。貴様はアントニアの部屋に閉じこもっていたんだらう？」

?!

叔母様?! そうなのですか?! 確かに、アントニア様もドルスッス

様も、高慢ちきのリヴィアも、叔母様の生まれてくる子供の事だけを心配してた…。

「それが、身内には理解されない貴様の不幸であり、この私だけが理解できる貴様の哀れな心の傷だ…。」
「…。」

叔母様は力を失って、床に膝をついてしゃがんだ。ボロボロと大粒の涙を頬から流して、哀れな自分を恨むように両手で顔を抑えながら崩れていく。私も震えるように、息を殺しながら涙を流していた。見なければよかった。ネロお兄様が言った通り、勝気性格が災いしている。

「どうすれば?! 私は…どうすれば…いいの?!」

「リウィツラ。安心しろ、私がお前の心を救ってやる。ウィプサニアを憎まずとも、身内を憎まずとも、貴様の旦那の心を振り向かせる方法でな」

「え?」

「私の出身であるエトルリアには海の民が多い。海の民を夫に持った妻は、彼らがしつかりと自分の元へ帰ってくるように、古来より伝わる秘薬を編み出したのだ。」

「え? 秘薬?!」

「それを少しずつ夫に飲ませれば、今以上に妻を愛おしく思い始めるのだ。」

「本当に?! そんな物があるわけ?!」

「私はエトルリア出身だ。嘘はつかん。だが、秘薬だけあって手に入れるには少々骨が折れる。どうだろうか? 私とお前との互いの信頼を築く為にも、我が娘ジュリアをクラウディウスの息子ダルスと婚約させるように、取り計らってくれないか? そうすれば、その秘薬を必ずお前の元へ届けよう。」

叔母様はわらをもつかむ勢いで、床に膝まついたまま、セイヤヌスの両手を握りしめて強く懇願し始めた。

「分かったわ！私のドルスツスだけは誰にも渡したくないの！あの人には見捨てられたくないの！貴方の望むように、弟のクラウディウスに頼みます！だから、お願い！その秘薬を必ず！あああ、これ以上、もう孤独なんて嫌！」
「分かった、約束しよう。」

なぜかわからないけど、ひよっとしたら大母后リウエア様の教えてくれた見方が、私にセイヤヌスの本質を見抜かせてくれたのかも思えない。私は…、私は…、このトカゲのセイヤヌスが心底憎いと思つた。そう思つたら、居ても立ってもいらなくなつて、片足のソレラを感情的に覗いてた扉に投げ付けてしまった。

「?!」

「誰だ?!」

私は自分のやった事に気が付き、すぐさまその場から離れて、廊下の隅に隠れた。勢いよく扉を開けて出てきたのはセイヤヌス。私は見つからない事を願いながらうずくまっている。辺りを見渡しているセイヤヌス。よく見ると、自分の手元にはソレラが片足だけしかなかった。さつき投げ付けたままだったんだ。

「…。」

お願い！どうかセイヤヌスに見つからないで！息を殺して、その事ばかりをユピテルに祈った。

「フン…。並外れた度胸を持った、鼠が一匹か。まあよい。」

拾い上げた私のソレラをその場で放り投げ、セイヤヌスは意気揚々と肩で風を切りながらその場を去っていく。私はその後ろ姿を確認した後に、自分のソレラを取り戻して、二階の寝室へと駆け足で戻った。こうして私は、リウィツラ叔母様とセイヤヌスの見てはいけない大人の暗部を、またもや見てしまったのだ。それも、自分の愚かな性格が災いして…。

続く

第七章「狂母」第一百話

リウイツラ叔母様…。

セイヤヌスとの二度による過ち。その頃の私と同じくらいの時に、甘えられるべき父親を亡くした事で、きっとリウイツラ叔母様は心を閉ざされていたのかもしれない。

”ゲルマニクス兄さんなんかに負けないから！”

”リウイツラ！いい加減にしるよ。お前は女なんだぞ！”

”だから、なに？”

勝気な性格で男勝りで、私の父ゲルマニクスとはいつつも兄妹喧嘩をされていた。その一方で、自分の孤独感を埋めるように、フレスコ画や透視図法にのめり込んでいく。

”もう、棟梁！”

”描き直すんだ！もっと平面図にしてくれ。”

”あのね、この透視図法って技術は、500年前のギリシャの舞台美術で使われていたんです。”

”ダメだダメだ。こんな奥行き出されたら、広告が本物に見えて目立たなくなるだろ？”

初めてご結婚されたのは、私の母ウィプサニアのお兄様であるガイウス様。しかし、その孤独感を埋める事なくガイウス様が死去。再婚されたティベリウス皇帝陛下の実の息子ドルスツス様の優しさに、叔母様はやつとご自分の孤独感を埋められる場所に出会えた矢先だった。

”私のドルスツスだけは誰にも渡したくないの！あの人には見捨て

られたくなの！あああ、これ以上、もう孤独なんて嫌！”

セイヤヌスの突然の来訪以来、私は気まずくなくて、リウィツラ叔母様のドムスへ行かなくなつた。叔母様はそれでも優しいから、いつでもいらつしやいと言つてくれたけど、本音ではきて欲しくなかつたのかもしれない。今日は、アントニア様のドムスで、身内だけの宴会。先日終わったネロお兄様と高慢ちきリヴィアの結婚式を、身内だけで行おうとしていた。参加者は、母を筆頭としたゲルマニクス家と、ドルスツス様とリウィツラ叔母様、ティベリとゲルマの双子。それにクラウディウス叔父様のご家族。なぜ、二回も結婚式の宴会をするか？それはアントニア様の強い願いがあつた。

「ネロ、リヴィア。二人とも、私の可愛い可愛い孫達。結婚は家族との結び付きを強くさせる物でしょうけど、同時にお二人の絆を強くさせる事も大切な。一番はそこが揺らがないように、お互いで努力していくのです。」

アントニア様の言葉に説得力があるのは、決して再婚をされないからだった。二人の愛を大切にしなさい。この言葉をしっかりと刻み込ませる為に、アントニア様は敢えて、二回も宴会をされるのであつた。

「クラウディウス、そういえばあんたん所の長男のダルサスって、誰かと婚約決まつたの？」

「うーん、リウィツラ姐さん。実はまだなんだよ。」

「もう、いい年齢でしょ？そろそろ誰か探してあげないと。」

「ダルサスのやつは、私と似てて、浮いた話には興味ないみたいなんだ。」

アントニア様も少しため息混じりに話し始める。

「この間、ダルサスとは二人っきりで話したんだけどね。ふう〜、親のクラウディウスに似てて、そっち方面は本当に疎いんだから。」
「母さん、そんなあからさまに言わなくなつて。」
「親のあんたが、カビ臭いパピルス書物に埋れて、葦のペンで一日中研究ばかりしているからですよ。」

リウィツラ叔母様。

本当にセイヤヌスに頼まれたことをされるんですか？私の心はハラハラしていた。

「それにしても、リウィツラが突然クラウディウスのダルサスを心配するなんて、どんな風の吹きまわし？」

「いや、知り合いの方からジュリアちゃんって、とても可愛い長女がいるようなんで、どう？って頼まれたの。」

アントニア様とドルスツス様は少し不思議な顔をしていた。それもそのはず、リウィツラ叔母様はそれほど交友関係が広い方ではなかったから。でも、クラウディウス叔父様は、ご自分の姉の優しさに素直に喜んでいた。

「リウィツラ姉さん…。やっぱりいつでも優しいんだな。きっとダルサスも喜ぶよ。」

「あはは、でしょう？うちのリヴィアだけ幸せになったら悪いじゃない？だから、どうか？って思って。」

ドルスツス様はそれでも、叔母様の心遣いを優しく受け止めようとされていたが、母親であるアントニア様は、ご自分の感じた違和感に素直に反応した。

「リウィツラ…。ジュリアって娘はどここの氏族の娘だい？ユリウス氏族には、私の知っている限りではいやしないよ。」

「あ、あー。うん、ユリウス氏族ではないの。階級が違うから。」

「え？階級が違う？」

「両親のね、今のクラウディウスと同じ騎士階級のエクイテスで、エトルリア出身らしいのよ。」

「僕と同じ騎士階級か。」

「いいでしょう？クラウディウス。ねえ？」

リウィツラ叔母様は少し焦ってるように薦めていた。しかし、今度はドルスツス様がエトルリア出身と聞いて反応された。

「エトルリア出身の騎士階級？まさか、セイヤヌスでは無いだろうな？リウィツラ。」

リウィツラ叔母様は見事に当てられ、動揺してカチコチに固まっている。アントニア様はやっぱりと、ため息つきながら顔を横に振った。

「その話はダメよ、リウィツラ。」

「…。」

「セイヤヌスは今は静観しなければいけない人物なんだ。確かに父さんの右腕としては有能だが、血生臭い噂もある。」

「でも、母さん。せつかくリウィツラ姉さんが持ってきてくれた話じゃないか。最後まで聞いたって。」

「クラウディウスは黙ってなさい。」

だが、アントニア様はクラウディウス叔父様の意見には、最初から聞く耳を持っていない。

「リウィツラ、あんた如何いつもりだか知らないけど、セイヤヌスはあんたもトカゲって嫌ってたじゃない。それが一体如何してこんなに心変わりするのかね?!」

「…。」

180度も女性が心変わりする時、それは必ずその根底に男か金が絡んでいるとアントニア様は睨んでいた。きっとアントニア様はすでにリウィツラ叔母様の秘密を、女性の勘で分かってらしたのかも知れない。貞操をしっかりと守る事が女性の一番の役目と生きていたアントニア様には、だからリウィツラ叔母様の抱えている孤独の穴を、生涯通じて感じる事は出来なかったのかも。

「言いづらいんだったら、あたしが言っただけようかしら?リウィツラ!」

「もうイイわよ!どうせそうやってあたしの意見をまた否定するんですでしょ?!」

「また癩癩起こすわけ?いい加減にして頂戴!」

「母さんがそうやってあたしをいつも追い詰めるからでしょ?!あたしだって起こしたくて起こしてるわけじゃ無いわよ!」

「だったら、当たり前前に考えても、おかしい事をいちいち言い出すんじゃないの!」

しかし、叔母様はもう勘弁がならない様子で、辺りの物を床へ落としました。

「いちいち指図すんじゃないよ、クソババア!てめえがいつつもそうやってかたっ苦しうあたしを育てたから、こっちは息苦しくてたまんねえーんだよ!」

「あんた!またしても孫達がいる前で!」

「母さん、やめなよ。リウィツラ姉さんもやめなつて!」

しかし、クラウディウス叔父様の言葉は右から左だった。

「そんなに貞操守ってる女が偉いのか？ あん？ ウエスタの巫女でもないんだから、なんでそんなに男に潔癖になる必要があるわけ？ そのせいで、少なくともあたしはちっちゃい頃から誰にも甘える事が出来なかったんだよ！」

「リウィツラ！ あなたはもう立派な大人でしょうが！ いい加減に自分のちっちゃい頃の事を持ち出すのはやめなさい！ 恥ずかしくないの？！」

「だったらうちの血脈はもっと恥ずかしいわよ！ お爺さんのアントニウスはお母さん達子供の事なんかお構いなしに捨てて、あのギリシヤ人のクレオパトラに溺れて欲望に走ったんだから！ 母さんは、そんなんでよく今でも生きてられるわね？！ 恥ずかしくないわけ？！」

最悪の言葉だった。

誰もが聞きたくなかった言葉で、誰もが胸が苦しくなる思い。中でもアントニア様は、本当に呼吸困難になってしまつて床に倒れてしまった。

「リウィツラ！ 今のは言いすぎだ。 アントニアお義母さんに謝りな！」

「貴方まで！？ 本当の事を言つてなにが悪いの？」

「リウィツラ！」

「貴方だつて思つてた事でしょ？ どうせ私と結婚したのは、こんな血脈に生まれた哀れな女だつて。 根底ではそう思つてるんでしょ？！」

「リウィツラ！ なにを言つてるんだ。」

「あんたはいつだつて上から憐れむのが好きな男じゃない！ あたし

が旦那のガイウスを亡くした時は『僕が一生守る』なんて格好いい事言つて、今度ウィプサニアが兄さんを亡くせば『我が子以上に守る』なんて格好いい事言つて！結局、あんたは誰かを憐れんでいるのが好きなだけなのよ！」

「…。」

叔母様は去つて行つた。

セイヤヌスが言っていた通りに、他人から信頼してもらいたい気持ちが大き過ぎて、自分から信頼できなくて、つい棘を出さずにはいられなかったのかもしれない。でも、今回は余りにも代償が大きかった。少なくともドルスツス様もアントニア様も、さすがにリウイッラ叔母様を許す様な表情はされていない。私のお母様ウィプサニアは一言もなにも言わず、散らばった料理や食器を片付けている。呼吸を苦しくさせながら、アントニア様は淡々と片付けている母へ感謝の言葉を述べている。ドルスツス様も、お母様へ謝っていた。

「大丈夫です。今日が身内だけで良かった事を感謝しなければです
ね。」

「本当ね…。ウィプサニアの言う通り。もし貴族や他のお客様がいたら、一家の恥を晒すところだったわ。」

「本当にありがとう、ウィプサニア。妻が本当に申し訳ない…。」
「良いんですよ、ドルスツス様。」

ネロ兄さんと高慢ちきりヴィアの宴会は重苦しい空気になったのに、お母様のドルスツス様への笑みは、まるで大理石の彫刻の様に美しかった。だが、私は何処かで、このお母様の笑顔や言動は不謹慎だと思つた。

続く

第七章「狂母」第百十一話

次の日。

「おい、アグリッピナ。」

「はい？」

クラウディウス叔父様が、足をいつもの様に引きずりながら、私の元へやってきた。

「クラウディウス叔父様。如何したんです？そんなに荷物を持って奴隷のナルキッススは如何されたんですか？」

「あいつには別の使いを頼んでおつてね。悪いんだけど、アグリッピナ。君に今日は折り入って頼みがあるんだ。」

「何でしょう？」

「姉さんの所へ行くのに、一緒に来て欲しいんだよ。」

「ええ？！あたしがですか？！」

「ああ。」

「どうしてまた、私なんですか？」

「姉さんから実は前に聞いててね、アグリッピナとは気楽に何でも話せるって。」

リウィツラ叔母様…。

でも、そう言ってくれたのは、きっとセイヤヌスがくる前のお洒落教室の頃の事ですよ？今は…。

「あの通り、母さんは昔から特に姉さんには厳しかったからね。親に反発するのは、認めて欲しいからなんだけど、素直に甘えられない。そんな気持ちを一番分かっているのは、多分、アグリッピナ、

君だけだろう…。」

びっくりした。

クラウディウス叔父様は、私の母ウィプサニアに対する複雑な気持ちを見抜いていたんだ。私は嬉しくて泣きそうだったけど、グツと堪えて素直に首を縦に振った。私はパツラスも連れて、一緒にリウイツラ叔母様のドムスへ向かった。

「リウイツラ様のご機嫌は大丈夫なのでしょうっか？」

「ダメでも、私が元気にさせるって、パツラス。」

「昨日は本当に凄かったからね。でも、安心しなさいパツラス。ローマの女はあれくらいじゃなきゃ務まらないものさ。」

「え？どう言う事ですか？」

「フフフ…。」

クラウディウス叔父様は不思議な笑みを浮かべている。

「パツラス、君は、ローマ人によるサビ二人の女性略奪の話を知っているか？」

「女性略奪?!」

「その昔、ローマ建国の王ロムルスは、自国のローマ人には男しかない事を嘆き、近隣国へ婚約をできる様に交渉した。しかし、異民族間での婚約を許さないサビ二人はコレを拒否。そこでロムルス王は海の神ネプトウーヌスの祭りを開き、未婚のサビ二人女性達を誘い出して略奪したのだ。」

「へえー。」

「捉えられ憤慨している女性たちにロムルス王は女性1人1人と話し、ローマ人を夫として受け入れるよう懇願した。さらに女性たちを選択の自由を提供し、そして結婚を承諾すればその後の生活は安泰で、市民権も財産権も得られ、何よりも大事なことは自由な人の

母になれるということを読いた。」

私もそんな事があったなんて知らず、クラウディウス叔父様のお話を聞き入っていた。

「当然、娘達を略奪されたサビニ人男性達は憤慨した。サビニの王タティウスは用意周到に準備を重ねてローマ人とサビニ人は争ったが、略奪されたサビニ人女性は誰一人帰ってこない。争いもピークになると、なんとそこへローマ人に略奪された女性達が、サビニ人とローマ人の争いの中へ割って入ってきたのである。」

クラウディウス叔父様は一つ咳払いをしてセリフを言い出した。

「あなた方は私達女性にとって、片方は父であり片方は夫である。このまま争いを続けるのなら、私達を先に殺しなさい。この争いの原因は私達であるのだから。私達にとっては、どちらかの一方を亡くし、孤児や未亡人として生きて行くくらいなら、死んだ方がマシだ！」と叫んだ。こうして、サビニ人とローマ人との争いは鎮まる。サビニ人のタティウスはロムルス王と和解し、サビニ人とローマ人が共に国家を形成する道を選び、ロムルス王と共に暗殺される五年後まで統治をしたという。」

「すごい。」

「さすがローマの女性は肝っ玉が違うんですね？戦場の中へ割って入るなんて。」

しかし、クラウディウス叔父様は微笑みながら、さらに言葉を添えた。

「しかし、不思議な事がもう一つ無いかな？二人とも。」

「不思議な事？」

「何だろっ?」

「なぜ、略奪された女性達がサビニへ帰らなかったのか?」

ああ!

確かに。

「ローマ人は女性に対して寛容だったからだが、それだけではない。とつても甘えん坊だったのさ。だから、サビニ人女性達は甘えん坊を放って、帰るに帰れなくなってしまったのさ。」

「あははは!」

「そっかー。甘えん坊なんだ。」

「この事はローマ人男性には内緒だぞ、アグリッピナ。」

叔父様はとつてもチャーミングなウイंकをしてくれた。そっか、アントニア様やリウィツラ叔母様、そして私にもある勝気な性格は、サビニ人とローマ人の争いの中へ割って入った頃から続く血なんだ。

「さあて、みんな用意はいいかい?大丈夫。きっとリウィツラ姉さんは葡萄酒を飲んでる事だろうから、騒いだりはしないだろう。私が言った通りにするんだぞ。」

「はい!」

「はい!」

私達は、孤独を抱えるリウィツラ叔母様の為に、ある事を決行するのであった。

続く

第七章「狂母」第百十二話

私とパツラスはお面を被って、リウィツラ叔母様の寢室側から大声で叫んだ。

「ローマ人が襲いに来た〜！」

「サビニ人は娘を隠せ〜！！！」

ドタバタと足音を立てながら、クラウディウス叔父様に渡された脚本通りに演じている。すると暫くすると、リウィツラ叔母様が、寢室からふらりと出てきた。

「貴方達は…誰?!」

「逃げる〜!!」

「ちよつと!?!私のドムスで何を遊んでるの?」

「逃げる〜サビニ人は今すぐ逃げる〜!!」

「あ、アグリッピナ?!」

やばい。

ばれちった。

「何をやってるの?」

「…。」

「もう一人は…母さん所の奴隷のパツラスね?二人とも何してるの?」

すると、ナルキッススが平面版を置いた。リウィツラ叔母様が大好きな、奥行きのある景色が描かれている美術舞台。すると、クラウディウス叔父様がギリシャの演劇者の様に仰々しく語りを始める。

「時は700年前、ローマ建国間もなき頃。ロムルス王はネプト
ウーヌスの祭りを開き、サビ二人女性を誘い出して略奪をした。そ
して彼女達を取り戻そうとサビ二人達はローマ人と同じに対面した
のであった。」

後からやって来たナルキッススが、二人の男女を連れてきた。きつ
と叔母様びつくりされるだろうな。パッラスは略奪をしたローマ人
を演じている。

「ああ、なんという事か。我らは理解されぬまま、彼らサビ二人
と戦わなくてはいけないのだろうか？」

私は略奪されたサビ二人女性達を演じている。

「いけません、彼らは私達の父であるのです。どうか、その刃を
収めることはできませんでしょうか？」

ナルキッススはサビ二人の男性達を演じている。

「ローマ人の卑怯者共め！今すぐ剣を抜け！」

パッラスは剣を仕方なく抜いて語り出す。

「サビニの女性達よ。元はと言えば、彼らが異民族間での婚約を
許さないから、こうする他なかったのだ。」

「ですが、彼らが負ければ私達は孤児になり、貴方達が負ければ
未亡人になります。どうか、どうかおやめください。」

パッラスは抜いた剣を眺めながら、ついにその剣を下ろした。

「サビニ人よ！我らと協定を結び、共に国家を形成しようではないか！」

ナルキツスも剣を下ろして同調する。

「おおお！分かった！ローマのロムルス王万歳！サビニのタティウス王万歳！」

すると、ナルキツスが連れて来た二人の男女がリウィツラ叔母様の前へやってくる。そしてクラウディウス叔父様はシメの言葉をリウィツラ叔母様へ捧げた。

「サビニとローマはこうして互いに妥協し、共に国家を形成していった。ローマの根底にあるのは妥協という名の寛容さである。我が女神ユーノに仕える者よ。どうか彼ら二人の若い婚約の証人として、目を開き、お手を掲げてください。」

リウィツラ叔母様はびっくりしていた。なんと二人の男女は、クラウディウス叔父様の息子ダルサスとセイヤヌスの娘のジュリアだったからだ。

「クラウディウス？！これは？」

「さあ、みんなも女神ユーノに仕えるリウィツラ様へ、婚約の証人としてなっていただけ様、懇願するのです。」

クラウディウス叔父様に言われた私達は、お面を外してお辞儀をした。

「やっぱり！アグリッピナ。パッラス！貴方は背が高いからすぐ分

かりました。そっちはナルキッススか。クラウディウスの奴隷には
気付きませんでした。」

すると、クラウディウス叔父様の息子ダルサスが語り出した。

「リウイツラ叔母様、この度、私、ダルサス・クラウディウスと、
ジュリア・セイヤヌスとの出逢いの機会を与えていただき、心より
厚く御礼申し上げます。」

「私、ジュリアは、ダルサス様を一目見てから聡明な方だと見受け
ました。これもリウイツラ様の眼力と言えるでしょう。」

リウイツラ叔母様は、手を顔に当てて涙を流していた。そしてしゃ
がんで子供のように泣いていた。哀しいからじゃない、嬉しいから
だ。自分を誰かが信頼してくれる、それだけで叔母様の一人で抱え
ていた孤独は、ほんの少しでも和らぐのかも。

「姉さん。息子のダルサスも、セイヤヌスの長女ジュリアも、二人
とも素直に婚約を納得したよ。これなら、母さんが強く婚約に望む
本人達の愛の絆の道理に合ってるだろう?」

リウイツラ叔母様は溢れる涙を拭きながら、弟のクラウディウス叔
父様による洒落た気遣いに感謝した。

「クラウディウス。我が愛しい弟。ありがとう。私はこれだけで十
分幸せよ。だから、ダルサスとジュリアも、本当に自分達の愛の絆
をしつかりと確かめ合ってから、もう一度決めても良いんだからね。」

しかし、クラウディウス叔父様はニコニコしながら笑った。

「あははは、姉さん。その言葉は私が100万回以上彼らにいった言葉だよ。彼らはきくと聞き飽きてるだろう。」

ダルサスもジュリアもお互いに手を繋いで照れながら笑ってた。

「本当に良いの？」

「はい、リウィツラ叔母様。」

「僕達は親に進められただけで婚約するものではありませんよ。」

叔母様は、また目尻に涙を溜めながら素敵な笑顔を魅せてくれた。

そして、その後には顔を振って鼻をすすり、腰に手を置いて男っぽく叫びだした。

「よっしゃー！今日はトコトン葡萄酒呑むぞ！みんなで宴会しよう！」

私は微笑みながら、クラウディウス叔父様を見上げた。叔父様も微笑み返してくれた。私達はこれで身内が再び仲良くなれる事だと思っていた。

「クラウディウス！あんたは今日は葡萄酒飲み干すまで帰さないよ！」

「えええ？！姉さんと飲み比べ？！勘弁してよ！」

けれど、この後の直後。

ダルサスとジュリアの結婚式の前日に、悲劇は突然やって来た。そしてリウィツラ叔母様は、二度と戻れない暗闇の道へと突き進む事になる。長女の高慢ちきリヴィアを巻き込んで…。

続く

第七章「狂母」第百十三話

「お母さんはまだ怒ってるのかい？」

「当たり前です。」

「ダルサスやジュリア達本人がそうしたいと願ったのですよ。」

「そうだけど、クラウディウス。あんたが無理矢理薦めたのでしょ
う？リウィツラのために……。」

「まあ、始めはですよ。でも、悩んでいたのはダルサスよりもジュ
リアの方でした。あの個性的な父親セイヤヌスを持つていれば……。」
「個性的？独善的の間違いではないの？」

「またそうやって皮肉を言っつて。本人達の愛の絆が一番大切だつて
説いてたのは誰ですかね？お母さん。」

「ふうー。はいはい、分かりました。」

リウィツラ叔母様はアントニア様のドムスでジュリアと編み物をして
いた。横でドルシツラと三女のリウィツラも手伝っている。私達
はセイヤヌスの長女と聞いて、確かに用心していたが、意外に素直
で人見知りもする女の子。高慢ちきのリヴィアとまるで性格が正反
対。

「あれがセイヤヌスの長女ね……。」

「ドルススお兄様も信じられない？」

「うんアグリッピナ。だいたいどうやったらあんな親に、あんな可
愛い子が産まれるんだよ、なあ？ガイウス。」

「ドルスス兄さん、あの女はきつとぶりっ子で騙してるんでさあ〜。
セイヤヌスの事だ、昔から鍛錬してたに決まってる。」

「そうかしら？」

「なんだとアグリッピナ？」

「私の女の勘から言っつて、彼女は本当にあんな性格だと思う。親が

強烈な存在だと、意外に賢く素直になるのかもよ？」

するとお母様がスタスタやって来た。

「それはどういう意味なの？アグリッピナ。」

「え？お母様？！」

「あははは、アグリッピナの奴はきつとお母様も強烈だって言ったんですよ。」

「ち、違うもん！もう、ガイウス兄さんったら！」

お母様は久しぶりに、ため息混じりながらも微笑み返してくれた。

「もういいから。あんた達は大人の会話の真似なんかしてないで、ドルシツラがしているように、ジュリアのお手伝いして来なさい。」

「はい！」

私達も編み物の手伝いに加わった。

ジュリアはとつても物静かで、いつも微笑んでいる。手先も器用で、私ができない事を丁寧に教えてくれる。ずっと長女だった私にとつて、なんとなく優しいお姉さんができたような気がした。

「ジュリアさんて、本当に手先が器用ね。」

「あ、ありがとうございます。アグリッピナ様。」

「アグリッピナにそんな恐縮しなくていいですよ、ジュリアさん。」

「え？」

「アグリッピナはすぐに格好いい人を見ると、憧れちゃう癖があるんですよ。」

「そんな事ないです、ドルススお兄様！」

「あれ??”おかしなセネカ”の時は？」

「あー！もう言わないでくださいー！」

「あははは！」

ジュリアは最初、階級の違いで遠慮がちなのかと思つてたけれど、本当に消極的で引つ込み思案で優しい性格はそのままだった。お互いに無いところがあるからなのか？私はジュリアとはこの後もずっと仲良い関係を続けていく。彼女がテイベリウス皇帝に静肅されるまでの間…。それも惨い、絞首刑にさせられるまで。

「ところで、ダルサスは何やってるのかしら？」

「ああ母さん、あいつにはポンペイまで買い物に行かせてるよ。」

「ええ？！一人で？」

「奴隷のナルキッススもついてるから大丈夫だって。」

「セリウスとクッルスはつけなかったのかい？」

「だって彼らは母さんの護衛兵でしょう？」

「そうだけど、ポンペイまで奴隷一人だけだなんて、私は心配だよ。」

「そう？昔、母さんには”男なんだから、ポンペイくらい一人で行け”って言われたけどな…。」

「あんたは本当にそういう記憶力だけは鮮明に憶えているのね。」

「フフフ…。カビ臭いパピルスに葦のペンで書いてますから。」

なんだかんだいっても、アントニア様は、クラウディウス叔父様の息子ダルサスとセイヤヌスの長女ジュリアとの婚約を認めたらしい。意外にも最後まで難色を示していたのはドルスス叔父様だった。やはりローマ国家で政治にも携わる者として、セイヤヌスの拡大し始めた勢力が、ユリウス氏族と身内になるのは危険視されていたからだ。子供達の私達には、まあ関係無く仲良くなってしまうものだけだ。

「アグリッピナ様、とってもお上手ですよ！」

「本当に？ありがとう、ジュリア。」
「いいえ、こちらこそです。」

本当に微笑みが可愛い女の子。私もジュリアみたいに笑えるようになりたくなってきた。うん、微笑みができるかもしれない！そう思ったら居ても立ってもいられなくなつて、自分の顔を確認したくなつた。

「おい？アグリッピナ？お前どこ行くんだ？」

「ちよつと！」

「ちよつとつて、途中でやってるのを放り出すんじゃないっつーの！」

「ドルスス兄さん、僕が見てくるよ。」

「おおガイウス、ありがとう。頼むや。」

私は鏡を探したけど見つからなかったから、玄関のアトリウムにある床の水槽インプルウィウムに映った自分の顔を眺める事にした。どうしたらジュリアのように優しい笑顔が出来るんだろう？私は向きを変えたり、歯を出さないように笑つたりしてみたが無理だった。なんとか近くなつたのは、下唇を歯で挟みながら笑う方法。

「アグリッピナ？お前、何やってるんだ？」

「??ガヴィウスお兄様！」

「うひゃー?!なんて顔してるんだ?!」

「へえ？」

水槽のインプルウィウムに映った私の顔は確かに酷かった。自分でもビックリしてバランスを崩し、すかさずカリグラ兄さんのテウニカの裾につかまったが、そのままインプルウィウムにザパーン！と落ちてしまった。

「アグリッピナ！あつぷ、お前何すんだよ?!」

「ガイウス兄さん、ごめんなさい!」

「ぼ、僕は、あつぷ！泳げないんだぞ！助けて〜!」

私はすぐに立てた。

なーんだ、インプルウィウムってそんなに深くないんだ。

「あはははは！ガイウス兄さん、大丈夫ですって。ここは足が床につくほど浅いんですから。」

「ダメだって、あつぷ！助けて〜!」

「ガイウスお兄様・・・?」

するとすぐにお母様が血相を変えて走ってきて、インプルウィウムへ飛び込んでカリグラ兄さんを抱きかかえた。兄さんは凍える様に身体を震わせている。

「アグリッピナ!!どうしてすぐにインプルウィウムからガイウスを出さなかったの?!」

「え、だってここは足がつくし、溺れる様な深さでもないですよ。」

でも、お母様は恐ろしい剣幕で私を叱りつけた。

「ガイウスは水に入ると癲癩になり易いのが分からないの?!気を付けなさい!」

知らなかった。

カリグラ兄さんが水泳が駄目な理由が、まさかそんな理由があったなんて…。お母様に叱られ、インプルウィウムの水面に映った私の顔は、ジュリアの笑顔とは程遠い、魅力に欠けたしよぼくれた表情

続く

だった。

第七章「狂母」第百十四話

「アグリッピナ様、今日も元気ないですけど大丈夫ですか？ドルス様……。」

「うん、ジュリア。この間、ガイウスの事で母さんにこっぴどく怒られたらろう？」

「ええ。」

「あいつはちよつと調子に乗るところがあるから、たまにはお灸を据えないとね。」

「でも……。」

この頃の私はいつもお母様とは噛み合わなかった。もちろんカリグラ兄さんの事は知らない事だらけというのもあるけど、私だけが疎外されているような感覚だったから。

「アグリッピナ様！」

「ワッ？！ジュリア。」

「今日はお花とお花を結んで、首飾りを作ってみました。」

「ああ！とっても素敵。」

「はい、どうぞ。」

「え？」

「アグリッピナ様に差し上げます。」

「ええ？！私に?!」

「ええ。その為にジュリアは一人で編んだのですからね。」

私はまたしても泣きそうなくらい嬉しかった。そして同時にジュリアが本当に可愛く思えた。彼女の天然さは本当に人の心を和ませる。私には持ってないもの。

「アグリッピナ様っていいなって思います。」
「ええ?! どうして? 私は絶対にジュリアの方がいいよ。」
「滅相もない。私なんかつまらない女ですもの。料理や編み物くらいしか得意なものがなくて、いつも父から怒られてました。」

あのセイヤヌスは英才教育をしようとしていたんだ。何気に私が不得意な物が得意で羨ましい。

「ですからね、初めてアグリッピナ様の活発なお姿を拝見した時に私はアグリッピナ様のようになりたいって思いました。」

「ええ? 私のどこがいいの?」

「駆けつこが得意で、木登りも上手で、水泳も得意で、面白い問題を出すところ。」

面白い問題?

あ、フェリックスから教わったインチキな問題か。

「あと、モノマネも得意でしょう? 私、アグリッピナ様がパッラス達の前で、大母后リウイア様の真似をされていた時は、御本人かとビックリしました。」

「あははは! あれはね、私が大母后リウイア様に憧れているから。本当に厳しいお方だけれども、でも、ちゃんと頑張れば褒めてくださるの。思っている事もちゃんとやってくださるし、私が抱えてる悩みも瞬時に気が付いてくれてね。寂しい時なんか…寂しい時なんか、とつてもひょうきんな顔で笑わせてくれて。」

あれ?

また涙が出ちゃった。何でだろう? 大母后リウイア様の事を思うと、今の私がいるここは、とつても不安に感じてしまう。今のお母様は、リウイア様とは正反対。何を考えているか分からず、私が悩んでい

る事なんかお構いなしに冷たい。

「アグリツピナ様…。いつもはとっても太陽の様の笑ってらっしゃるけど、本当は寂しいのですね？」

「ジュリア…。」

「分かりました。ちょっと待ってて下さいね。」

そういうとジュリアはゆっくり歩き出して向こうへ行ってしまった。私は草きれを引っ張って遊んだりしている。すると突然目の前が真っ暗になった。

「え?!何?!何?!」

「だーれだ?!」

とっても低い声が後ろから聞こえる。どうやらその人に目隠しをされているみたい。明らかに女性が低いを声を出してる様で。

「ばあ!」

あああ!リウイツラ叔母様。

ジュリアも一緒だ。

「ジュリアから聞いたよ。アグリツピナは今、便秘で落ち込んでるんだって？」

「便秘?!え?!」

すると、ジュリアが慌ててリウイツラ叔母様に耳打ちをする。

「あ!ごめんなさい。センチで落ち込んだのね。便秘とセンチじゃえらい違いだったね。」

「ありがとうございます、叔母様。ジュリア。でも、もう大丈夫。」
「本当かよ？アグリッピナ。」

「ええ。」
「あんだ、うちのリヴィアと違って笑顔で他人を安心させるところからな。」

さすがリウィツラ叔母様。

見抜かれている。すると、向こうの方でアントニア様が手を叩いてみんなに何かを呼び掛ける。

「さあ、みんな支度して！ウエスタの巫女の長である、オキア様の御引退式に出掛けるわよ！」

「ええ？！オキア様をご隠居されるの？」

「そうみたいね、つて。アグリッピナはオキア様知ってるの？」

「ええ。だって大母后リウィア様に無理矢理連れてってもらって、何度もお会いした事が。」

「へえー。アグリッピナってすごいよね。」

と、いう事は！

必ず大母后リウィア様もいらっしやるに違いない！どうしても、どうしても今悩んでいる事を聞いてもらいたい！

「リウィツラ叔母様。お母様に内緒で大母后リウィア様にお会いする事できませんか？」

「ええ？！ウィプサニアに内緒で？」

「ええ。」

とは言っても私はずる賢かった。

叔母様があんまりお母様を好んで無い事は明白だったから。ジュリア！あんだ、最高！リウィツラ叔母様連れてきてくれて！

「イイわよ！その話乗った。」

「本当に？」

「ええ。この間、弟のクラウディウスと一緒に私を元気付けてくれたし。こんなに素敵なジュリアと巡り合わせてくれたしね。」

リウィツラ叔母様は、私とジュリアの頭を撫でてくれた。私はジュリアと微笑んでいる。

「そっか…。アグリツピナは大母后リウィア様に憧れていたのか。今までゴメンね、あんたの前で女狐なんて言っちゃって。」

「あははは、それは大丈夫です。元々はアントニア様が言っていたのですから。」

「あのクソババは、昔っから口が悪いからな。」

叔母様も母親譲り…。

とは言えなかった。

「ヨッシ！ジュリア。あんたも手伝いな！」

「はい！私もワクワクしてきました。なんか犯罪を犯すようですね」。

ジュリアは…とっても天然だと思った。変な勘違いされないといいけど。とにかく、リウィツラ叔母様とジュリアは、聖職者団ウエスタの最高神祇官であるオキア神官長様の御引退式に、私が大母后リウィア様と会える為の計画を立ててくれたのであった。

続く

第七章「狂母」第百十五話

オキア神官長。

火床の女神ウエスタに仕える聖職者団ウエスタの巫女達の長であり、巫女達を束ねる最高神祇官である。ウエスタの巫女達は国教に遵ずることを30年間学び、また悪を正すことに奉仕するため、結婚や子育てといったものから一切解放されている。その間は禁欲を守ることを誓い、皇帝であっても、女神ウエスタ様を穢し、侮辱する事は許されない。その女神様に仕える身である彼女達は、人の過ちを正す重要な聖職者としてローマの『最後の良心』を守っている。

オキア神官長は30年間と更に57年間勤め上げられた神官長の身を、本日退く事になった。当然、幼い頃にお世話になったアントニア様も、大母后リウイア様もご出席される。私達はパラティヌス丘の力エサル神殿近くにある、聖職者団ウエスタの建築物カーサ・デレ・ウエスタリの前にやって来た。

「本日は、皆様の暖かい御心により、57年間勤めてきました神官長の身を退く事になりました。ウエスタの巫女となった者達も、また、そうでなくともローマに住む人達にも、全ての人達の身心に、常に良心という灯火が消えぬよう日々祈りを捧げ、ウエスタの巫女として完璧な純潔を守り通せたことを、心より皆様へ感謝申し上げます。今後は皇帝陛下と元老院議員の方々のご意向により、後任者の選定があるかと思われませんが、その際にもどうか、暖か眼差しで私共を見守り続けていただける事を、心よりお願い申し上げます。」

オキア神官長は本当に人々から尊敬の念を一心に浴びていた。優雅で穏やかで誰も心を受け入れる御心。今日、この日まで純血を守

り通した事は、本当に素晴らしい事だと思った。

「アグリツピナ、アグリツピナ。」

うん？後ろから小さな声で私を呼ぶ声がする。

「あ、リウイツラ叔母様。」

「ちょっとあんた、まったりとオキア神官長のお話を聞いている暇なんか無いんだから！」

「ええ、如何してですか？」

「今、ジュリアが大母后リウイア様の偵察をしているの。多分この後に、リウイア様が最後のしめをするはずだから、すかさずあの二階の通りの後ろ側に回り込むわよ！あんたは周りの人にばれないように、私のアンダースカートのカスチュラの中に隠れなさい。」

「えええ？！マジっすか？」

「今更なに言ってるの。あんたがリウイア様に会いたいって提案したんでしょ？こうなりゃ一蓮托生、同腹一心ってやつ。」

リウイツラ叔母様はノリノリだった。まさかこんな大体な方法だったとは。私はリウイツラ叔母様が周りをキョロキョロとみている間に、叔母様のストラを瞬時にめくってスカートのカスチュラの中へ入る。叔母様のスベスベして綺麗な足の動きに合わせて、私も歩いていった。けれど私はもたついて叔母様のお尻に触ってしまった。

「ひゃっ！」

「え？どうされました？御婦人。」

「い、いえ…。何でもございません事よ、失礼。」

「あれ？あの人どっかで…。」

叔母様は人混みをゆっくり抜けてく。私もやっと慣れてきて、叔母

様の歩きに合わせられた。

「アグリツピナ、もうイイわよ！」

「はい！」

私はゆっくりと叔母様のカスチュラから出た。すると目の前にはジュリアが拳動不審な動きで大母后リウイア様を観察している。この娘もノリノリだったんだっけ。

「こちらジュリア、こちらジュリア。リウイツラ叔母様、状況を確認中。目標を補足し、状況更に進行中。只今オキア様と入れ替わりました！どうぞ。」

「こちらリウイツラ、こちらリウイツラ。了解、引き続き目標補足と状況の進捗報告に務めるべし、以上。」

この人達は絶対に心から愉しんで、悪ノリしてやってる…。

「さあ、アグリツピナ。大母后リウイア様のお話が終わったら、私がかさず舞台裏で懇願するから、私のカスチュラの中に入って近づくのよー！」

「は、はい…！」

いつの間にか、この緊張感はゲルマニア突撃のような雰囲気になっていた。叔母様はまさに將軍。私は百人隊長であろうか。そして状況変化の報告がジュリアから報告されてきた。私は叔母様のカスチュラへ入り、早歩きの叔母様と歩幅を合わせて歩いた。

「オキア様は、これからどちらへ？」

「そうね、リウイア。私はスパルタに行ってみたいわ。」

「ええ?!あの猛者達がいた場所へ？」

「私は長い間、純潔を守り通してきたのよ。スパルタの歴史に描かれた猛者達に、身体を踊らせる想いをしてもらっていいでしょ？」

「わお。神官長とは思えない発言だ事。」

「フフフフ。私も神官長である前に女ですからね。」

リウィツラ叔母様はすかさず小走りで大母后リウエア様へ懇願した。

「お待ちください！大母后様！」

突然叔母様が駆け寄って止まるものだから、私はカスチユラの中で転けて、そのまま表に出てしまった。叔母様もそのまま転げ落ちてしまった。

「イタタタ。」

「リウィツラ？ドルスツスの妻のリウィツラですか？そこにいるのは？まあーアグリッピナ？！如何したんですか？騒々しい。」

「大変申し訳ございません。突然の急に。実はお一つお願いがあったて参りました。」

しかし、大母后様は厳しく細い眉毛を片方あげて睨んできた。

「今日はオキア様の御引退式である事を分かって、そのような無礼を承知で懇願しているのですか？」

「はい！」

リウィツラ叔母様は、私の代わりに跪いて頭を下げた。

「どうか、ここにいるアグリッピナの悩みを、大母后様自ら聞いていただけませんか？」

リウィツラ叔母様は真剣だった。

私の抱えていたすれ違いの想いを、きっと誰よりも分かっていたからだと思う。

「お願いがします、大母后リウィア様。少しだけの時間で良いのです。どうか、アグリツピナの悩みを聞いていただけませんか？！」

続く

第七章「狂母」第百十六話

「駄目よ。」

大母后リウイア様は、顔を私達から背けて断った。

「どうしてでしょうか?!」

「今は駄目なの。これは政治とバランスに関わる問題で、親御さんの承諾無しにアグリツピナに会う事はできないの。」

事実そうであった。

私は知らなかったが、お母様はゲルマニクスお父様の神話を支持する民衆と共和政支持者の貴族達からの後ろ盾を得た事により、クラウディウス氏族と牽制を始め距離を取り始め、今までに無いほど非難を繰り返している。それにより、帝政を支持するクラウディウス氏族皇族派と共和政を支持するユリウス氏族皇族派の微妙な対立が生まれてしまった。民衆は次期皇帝の継承者は、ドルスツス様でなくネロお兄様だとも言い出していた。また、ドルスツス叔父様はセイヤヌスとの対立が勃発した事により、クラウディウス氏族皇族派でありながらも共和政支持者である元老院貴族寄りの考えを持ち始めていた。国家の母であるリウイア大母后様としては、バランスを考えなければいけない。横ではオキア様が残念そうに眺めている。

「ほら、アグリツピナからもお願いしなさい。」

「あ、はい！大母后リウイア様！お願い申し上げます。私は母とのすれ違いを感じ、どうやって生きて行けば良いのか分かりません。

こんなお願いをすれば、リウイア様はそのくらい自分で考えられるはずだと仰るのは十分承知です。でも、私は心に映るリウイア様ではなく、この目で見たリウイア様を眺めて安心したいのです！どう

か、どうか、お願い申し上げます！」

ジュリアも何故か頭を下げていた。リウイツラ叔母様も。

「リウイア。どうやら貴方の負けね。」

「オキア様……。」

「リウイツラ、ジュリア、アグリッピナ。三人共顔を上げてついてきなさい。リウイア、貴女も顔を上げて私の部屋へいらっしやい。」

ローマの『最後の良心』を守護されてきたウエスタの巫女の長であるオキア神官長が、私達の願いを叶えてくれたのだ。オキア様のお部屋はとても質素で美しかった。本当に純潔を守り通してきた時間が刻まれている。

「私は政治には介入しません。明日の国家の行く末を決めるのは彼らなのですから。ですが、母が子の想いに心を閉ざす事には介入します。リウイア、貴女は大母后であるわけですが、国家の母でもあるわけですよ？アグリッピナは言ってみれば貴女の子供。それに貴女はちゃんと血の繋がった曾祖母じゃないの。自分の曾孫に顔くらい見せてやりなさい。」

振り向かれた大母后リウイア様は、とても美しく申し訳なさそうな表情を私に見せてくれた。私は居ても立ってもいられなくなって泣きながら抱きついた。リウイア様はちゃんとしゃがんで私を抱きしめてくれた。

「リウイア様、本当にワガママ言ってゴメンなさい。」

「いいのよ、アグリッピナ。私も変な意地を張ってゴメンなさい。」

「でも、どうしても、リウイア様から言葉を教えて欲しいのです。」

お母様とはずっとすれ違ったまま。お母様を理解しようとも理解で

きず、また、お母様にも理解されていないような気分になります。如何すれば良いのでしょうか？」

きつとリウィツラ叔母様も、そしてジュリアも一緒に来てくれたのは、私を含めたこの三人が、親との関係で悩んでいるもの同士だったからかもしれない。リウィツラ叔母様はアントニア様といつも口論してしまい、ジュリアは強烈な親であるセイヤヌスの存在にいつも怯えて消極的な生き方を選んでしまった。私も含めて、三人共親に理解されたがっていた。

「理解、理解ね…。私だったら、理解なんて願望に過ぎないって諦めるわよ。」

「願望？」

「ええ。だってアグリッピナが母親を理解したいって言ったけど、それは自分が望んでいる母親を理解したいからじゃないの？」

ああ！

そうだったかも。

「それは、その後に出てきたアグリッピナの言葉から、貴女の願う本質が見えてくるわ。『自分は母親から理解されてないような気分がする。』って。裏を返せば、自分に優しく接してくれてないって言ってるようなものじゃない。」

さすが大母后リウィア様。

聡明で頭の回転が速く、瞬時に私の見えてない所を的確に答えてくれた。

「いい？子が親に甘えるのは当たり前前とまっているかもしれないけど、親だって子供に甘えたいと思っているの。」

「えええ?!」

「そんなにびつくりする事じゃないわ。リウイツラ、貴女だったら既に子供を産んでるから、その気持ち分かるわよね?」

突然振られたリウイツラ叔母様は、人差し指を顎に乗せながら、上を向いて自分の体験を想い出していた。

「え、ええ。そうですね…、例えば…、そうそう!食事中の子供を眺めてて、あまりの可愛さに抱きしめたいって思っても、本人は食事に夢中で私を邪魔扱い。仕方なくしていると、食べ終わって満足したのか、今度は子供が甘えさせるって訴えてくる。もう!それならさつき十分に甘えさせて上げたのにつて、仕方なく抱っこしたら、そういう事は直ぐに子供に暴露で、もっと愛情込めて抱っこしろつてせがんでくる。そんな感じでしょうか?」

「あははは、まさにリウイツラが言った通りね。親心子知らず、子心親知らずかしら?親も子も、ちゃんとはよく見ているのよね、相手の事は。でも、自分の事は意外に良く見ていないの。私もそう…。見えているはずなのに、子心親知らず。だからね、その時は諦める事にしたの。」

「諦める?!」

「ええ。理解なんて概ね願望だつて。それよりも大切な事は、その過程である理解しようとする心、理解されようと努力する姿勢。理解できない、理解されないでふて腐れるのではなくね。」

そっか…。

お母様の私に対する愛情を、私は自分の見たいものしか見てなかったから、まだまだ足りないって思ってたのかもしれない。すると、オキア様がゆつくり歩いてきて語りかけてくれた。

「アグリッピナ、貴女はリウイアの教室でアイデアを見つめる勉強を

したわよね？」

「はい。」

「それなら、これもできるはずよ。」我が身を先に差し出して、人の壁となり橋となれ、されば光の道開かれん。」

ああ！

聞いた事ある言葉だ。確かアントニア様と大母后リウイア様がお父様の無承認によるエジプト入国でのお話をしていた頃。

「我が身を誰よりも先に差し出す事は、とても勇気がいる事で、そして時には人からの非難を浴びる事もあるの。特にここローマでは、新しい事には無関心で、古い事ばかりをもてはやす傾向にありますからね。」

確かにそうかもしれない。

ローマの民衆が求める事は、不平不満を口々に言う割には、不安定な未来への投資よりも、脈々と受け継がれている古来からのスタイルを豪華にさせる事の方が大きい。お父様が亡くなってから、お父様を神話のように扱う平民の数が異常に増えたのも頷ける。

「だからこそ、気付いた人の勝ちだと思ってご覧なさい。例え非難されようと、人よりも先に、愛する人を守る為に壁となり、そして人よりも先に、愛する人を守る為に橋となれば、光の道、すなわちイデアの示す導きに、己の魂を添える事ができるのかもしれないわね。」

私は本当に嬉しかった。

リウイア様の聡明な着眼点と、オキア様の『最後の良心』が導く自分のあり方に触れて。それも、オキア様の御引退式に。するとジュリアがオキア様へ相談をした。

「オキア様、私の父はとっても怖いのです。それでも私は壁となり橋となる必要があるのでしょうか？」

オキア様は暫く目を閉じて、そして真つ正面からジュリアを見つめる。

「それは、ジュリアの心がどの様に感じるかが大切でしょう。貴女がアイデアを見つめ、もしそれが必要と感じるならば、そしてやりたいと思えるなら、躊躇せずに取り組みなさい。やりたくもないのに無理にやっても逆効果です。」

「はい！」

「うん、いいお返事ね。」

でも、私にはもう一つ、大母后リウイア様にお伺いしたことがあった。

「あの…大母后リウイア様。どうして、ゲルマニクスお父様の国葬には参加されなかったのでしょうか？」

「アグリッピナ、それは大母后様もティベリウス皇帝陛下とご一緒に表明されたでしょう？うちのお母さんが病に倒れたから参加できなかつたって。」

リウイツラ叔母様は、さすがにその質問は禁句だと止めにはいっただけれど、大母后リウイア様は俯いたまま沈黙を貫いている。

「アグリッピナ。その事については、ウェスタの巫女の長である神官長として、私が貴女の誤解を解いてあげるわ。」

続く

第七章「狂母」第百十七話

「ゲルマニクスが亡くなってから、母であるアントニアが自ら毒で命を断とうとした事実は、子供や孫や親類になる貴女達が最も知らなければなりません。」

やっぱり。

アントニア様の自傷行為癖は本当だったんだ。

「アントニアも、自分の旦那が亡くなった時も同じように、その苦しみから逃れようと、自ら毒で命を断とうとしたのです。」

オキア様は、その頃の事を事細かに話してくれた。アントニア様のドムスで、お忍びでやって来たリウイア様とオキア様の目の前で、派手に癪癪を起こして死ぬと言い出したのだった。

「リウイアお義母さん！オキア様！どうして私が二度も同じような運命を辿らなければならないのでしょうか？！幼い頃に、父アントニウスをエジプトで亡くし、今度は我が愛する夫であるドルサツスを落馬で亡くし！何故ですか？！」

「だからといってアントニア！あんたが自分で自分を毒殺する理由になるとは思えないわ！」

「いいえオキア様！あの人がないこの世は、まるでアポロ様が全ての光を奪ったようなもの！耐えられません！」

「そんな事ないわ、アントニア。リウイア、早くアントニアを止めて頂戴！」

けれどリウイア様は慌てずそのままアントニア様の目の前で、その毒薬を飲み干そうとした。

「何をするの?!お義母さん!」

「あんたがそのまま死にたければ、勝手に旦那の後を追って、自分の貞操を守れら事に満足すればいいわ。でも、それと同時に私の命を奪った後悔も背負っていける覚悟があるのならね。」

「リウイア!やめなさい!」

「いいえ、オキア様。決して止めないでください。この目の前の馬鹿女が、自分が子供を遺して何をやるうとしているのか?わからせる為です!」

「リウイア…。」

「お義母さん。」

「果敢な長男ゲルマニクスは?まだまだ可愛いリウイツラは?障害があっても健気に生きてる次男のクラウディウスは?あんたがいなくなったらどうするんだい?特に長男のゲルマニクスはあんたの旦那の面影を遺してるじゃないか?」

「…。」

リウイア様は泣き崩れるアントニア様に近付いた。

「せめてあんたは子供に見守られながら、死ななきや駄目なんだよ。それがあんたが親としての務めであり、子供達の勤めでもあるんだから。」

「お義母さん…。」

「大丈夫、子が親より先に逝く事なんか、そうそうないわ。あんたの旦那の分まで可愛がってあげなさい。」

「ええ、お義母さんの言葉を私は信じるわ。あの子達に見守られながら死ぬのが、親としての勤めね…。」

「その時には、私も参加しましょう。」

「ええ?!オキア様が私の葬式に??」

「なァーに??」

「この中じゃ、一番先にお迎えがやって来そうじゃないですか…。」
「リウイア、あんた皇后だからってずいぶん失礼ね！」
「あははは！」

こうして必死になってオキア様とリウイア様は、アントニア様を説得して止められた。けれど、運命はまるで逆転し、アントニア様を遣してゲルマニクスお父様はこの世を去った。だからあの時、大母后リウイア様とティベリウス皇帝がアントニア様を救いにやって来た時、大母后リウイア様を嘘つきと呼ばれていたんだ…。

「でもね、私はやっぱりアントニアには嘘ついたわけ。あの子を食い止める為の言葉が、アントニアの心を台無しにしてしまったのは確か。」

オキア様は肩を震わせてるリウイア様にそつと手を添え、優しい言葉をつけたしていった。

「アントニアの病は今回はそう簡単に治るものでは無かったの。だから、リウイアは私の所へ来て毎日毎晩回復するまで必死に神々へ祈りを捧げていたわ。もちろん、公ではなく私を優先した彼女が民衆から批判される事も覚悟の上で。私は何度ももう一度考え直すようにも説得した。でも、リウイアもまた、深い傷を追った一人の女性よ。でも、その姿を容易に晒せない立場にいる事だけは、あなた方だけでなく、私はわかって欲しい。」

リウイア様は必死に堪えていた。
そのお姿がまた、私達を誰もがリウイア様にとって子供であるという事実を、大母后として背おられて生きてらっしゃると思うと、私達の頬には自然と涙が伝っていた。

「アグリッピナ、今回私が不参加した事は、私事を優先した私の失策である事は十二分に理解しているわ。でも、ゲルマニクスだって血の繋がった私の本当の孫。それだけはわかって頂戴。」

それ以上語れ無いリウイア様の想いも本当に伝わってきた。ひよつとしたら、これがオキア様が仰ってた事なのかもしれない。理解でき無いから嘆くのではなく、理解できないのなら、我が身を先に出して、人の壁となり橋となる事。

「本当に、本当に、リウイア様ありがとうございます！」

「私もよ、アグリッピナ。」

私は心から大好きな優しい曾祖母に思いっきり泣きながら抱きついた。

続く

第七章「狂母」第百十八話

セイヤヌスの長女ジュリア。

彼女はエトルリア出身の血を引いてるのに珍しく、とつても品性ある面立ち。眉毛は優しく緩やかなカーブ。目元もとつても垂れてて子犬みたい。身体は痩身で手足はすらつと長く、何より指先が細くて綺麗だった。髪はさらさらしたストレートのブロンドで、それを中央で分けておかつぱ。歩く度に彼女のさらさらした襟足が動きを併せていたのを見て、くせ毛の私はいつも羨ましく思っていた。でも、ジュリアは私を羨ましく思っている。

「アグリッピナ様、私は本当にカールの掛かった髪が羨ましいです。」

「そう？私はジュリアのストレートの髪の方が好き。朝なんかちゃんと手入れしないと、ユピテル様みたいだもん。」

「ウフフ。私だって寝ぐせすごいんですよ。雷が刺さったみたいですよ。」

「でも、水に付けければ直ぐに直るんですよ？いいじゃん。」

「だから、奴隷いらずです、ウフフ。」

あのウフフって笑う顔が、本当にジュリアを可愛くさせてるんだと思った。それにいつつもお花のアクセサリーをいっぱい作って、本当に女の子って感じがして。だってサンダルのソレラにもお花を付けちゃうくらいなんだから。

「ねえジュリア？私って、リウイア様の髪型できないかな？」

「リウイア様の？」

「やっぱり大母后リウイア様は私の憧れだし！」

すると、ジュリアはとっても真剣な眼差しで私の髪を手にとって見てくれた。

「まず、大母后リウイア様の髪型ですけど、アウグストウス様がお亡くなりになってから、ガラツと変わられましたね？」

「みたいね。この間ね、玄武岩でできたリウイア様の像を見たけど、私が生まれる前の頃の髪型らしいんだけど、前髪を全部一列に綺麗に整えて上げてたよ。」

「そうなんです。あの髪型はとっても流行ったんですって。」

「うん。この間、リウイツラ叔母様も言ってた。」

「今は、毛先から硬貨サイズの大きさをリングみたいに丸めて、顔の周りに整えていらっしゃるけど、あれはとっても時間と手間がかかるのです。」

「そっか…。」

「多分。リウイア様は、元々あんまりクセの無い方で後、わざとクセを作ってたっしゃるから、アグリツピナ様のクセだと、同じ方向にリングを作っていくのは難しいですよね。」

そっか…。シヨック。

「アントニア様の髪型はとっても自然よね？」

「ええ。緩やかなウェーブが掛かっていますけど、とっても自然に中央から分けて、襟足でしっかり纏めてらっしゃるから、シンプルで上品ですね。」

「うちのお母様は？」

「ウイプサニア様の髪型は中央から分けて、毛先を細かく丸めて、更に後ろで結んで編み込まずに流されていますよね？アグリツピナ様とはカールの掛かり方が違うからできるんですよ。」

「そっか…。」

「でも、大丈夫です！もし私がカールが掛かった髪型だったら、是

非やっつて見たかった編みこみがあるんですよ、ウフフ。」

「編みこみ？」

「名付けてオリンピア・ヘアー！」

「オ、オリンピア・ヘアー?!」

この間のスパイモードといい、やっぱりジュリアの発想は天然だと思っただ。

「多分アグリッピナ様みたいに活発な方でも、全然崩れない髪型なんですけどね。」

「本当に?!是非やっつて!お願い！」

実はこのオリンピア・ヘアー。まあネーミングはともかく…ここまですり込んだユニークな髪型は、私が初めてだったらしい。器用なジュリアでないと思いつかない発想。私のように、元々クセが強い人にとっては、細かく編みこんでくれた髪型はとっても見映えがよくなるらしい。ジュリアは私の好みをいっぱいふんだんに取り入れてくれて、独特のとても優雅な髪形を作ってくれと約束してくれた。

「ジャンジャジャン！」

「うわー!何これ?!」

「ウフフ。実はいつもお花のアクセサリを作る時に持っているんです。」

ジュリアがトウニカの腰に掛けていた布袋から出したのは、くし、ウールの糸、骨針、ウールの糸通しのヘアピン、そしてハサミだった。

続く

第七章「狂母」第百十九話

お日様が私達二人をキラキラと照らす頃、ジュリアは後ろから優しく私の髪の毛をくしでとかしてくれている。

「アグリッピナ様の髪って、本当に一つ一つが纏まったカールで素敵ですよ。」

「本当に？」

「うん。こうやって全部垂らしても、すごく綺麗。」

「私って、いつも結んでいたから、どんなのが自分の髪型に似合うのかあんまり考えたこと無いんだ。」

「そうなんですか？」

「うん。だって、面倒つちいじゃん。」

「ウフフ。でも、これからいっぱい気になってきますよ。」

「どうして？」

「だって恋されたら、どうするんですか？」

「恋？何それ？食べ物？」

「ええええええ?!」

ジュリアはビックリしてくしを落とす。私はジュリアの顔を振り向いて眺めてみると、顎が外れそうな勢いで、全身硬直していた。

「恋って…桃とかブドウとか果物じゃないの？」

「果物?!だ、誰がそんな事を?!」

「だって恋って、甘酸っぱいんでしょ？」

「あははは…。確かに、恋は甘酸っぱいものですが…。」

「それじゃ、やっぱり果物じゃない。」

「アグリッピナ様、恋は食べ物なんかじゃありませんよ。」

「じゃあ、何？」

「そうですねえ。例えば、この人の事憧れてるゝとか、格好イイ！とかって人いますか？」

「いたら恋なの？」

「ええ、まあ。」

「それならいる！」

「おお？即答！誰なのですか？」

「大母后リウイア様！」

「あははは…。」

「え？ダメなの？」

ジュリアは落としたくしを拾い、コホンと咳払いして説明してくれた。

「どうやらアグリッピナ様には、一から恋とは何かを説明しないといけないですね。」

「はい…。」

「クピード様の愛の矢は知ってますか？」

「ああ！知ってる。ドルススお兄様が教えてくれた。アポロ様とダブネー様の話でしょ？」

「なーんだ、知ってるじゃないですか。誰かに恋をすると、クピード様の矢が心に刺さったように、キュンってなるような感じですよ。」

「矢に打たれるって、やっぱり痛いのか？」

「ウフフ。心地良い痛みです。まあ、好きな人の事を想うとですけどね。私もクラウディウス様のご子息で、ご長男のダルサス様とお会いした時には、まるで呼吸ができなくなるほどでした。」

「へえ。」

ジュリアの頬は桃の様にピンク色に火照ってた。恋してる人って滑稽だなんて思った。

「アグリッピナ様も、ご自分の知っている男性でとかいませんか？心がキュンってなるような男性。」

「心が…キュンって、なるような…男性ねえ。」

私は頭の中で自分の知っている人を思い浮かべてみた。ネロお兄様。うーん、もう高慢ちきのリヴィアと既婚している。ドルススお兄様。うーん、優しいけどキュンってこない。やっぱり昔の鼻水垂らしていたのが原因？カリグラ兄さん。ダメダメ無理無理。あんな寝小便小僧、論外。するつと、いない。誰もいないじゃん。

「お兄様達には、やっぱりキュンってこないよ、ジュリア。」

「あははは…。あの、兄弟ではなくて、その…何というか。」

あ、いた。

その人の事を想うと、心がキュンって痛くなるの。

「ゲルマニクスお父様…。」

すると、ジュリアの髪をとかす手が止まった。そして気が付くと、肩を震わせ泣いている。

「どうしたの？ジュリア。」

「うつつ…。アグリッピナ様の事を思うと、あまりにも不憫に思いました。ゴメンなさい…。うわあーん。アグリッピナ様、とても可哀想です。」

あははは…。

参ったなあ、そんなに気にされても困るって。しかし、ジュリアは床にしゃがんでワンワン泣き始めて、鼻水まで垂らして。本当にこ

の子は心根の優しいんだなって思った。

「ねえねえジュリア、もう泣き止んで。あたし、もう大丈夫だから。」

「ううう…本当ですか？だって、胸がつまる様に苦しいって…。」

いや、ジュリア…。

あたしそこまで言っていないって。

「もう、大丈夫だよジュリア。だってね、お父様は大きな大きな樹木のようなもの。」

「大きな大きな…樹木？」

「うん。雨が降っても、嵐が吹き荒れても、お父様という大きな大きな樹木にいつつも守られているの。そして、こっやって目を閉じると、お父様の素敵な笑顔があたしを迎えてくれて、あたしの大好きな木登りもさせてくれるの。」

「アグリッピナ様…。」

これは本当。

大人になって、息子を産んだ母親になった今でもそう。目を閉じると、お父様はいつつも迎えてくれる。

「うわーーーーーん！アグリッピナ様ってなんて凄い人なんですよー！！ううう…。ますます可哀想〜！」

逆効果だったらしい。

でも、あのトカゲのセイヤヌスの子供だとしても、年下の私の為に涙を流してくれるのだから、本当にジュリアは心根の優しい子だと思った。

「さあ、ジュリア。続きをやって！」

「はい、アグリッピナ様！」

泣き止んだ彼女は、伸び切った鼻水を水井戸で流してきて、今度は光輝く様な笑顔で、丹念に二本の骨針をヘアピンのように使って、私の前髪を頭部で止めてくれた。

続く

第七章「狂母」第二百十話

「三箇所それぞれ分けるんです。まずは真ん中から両脇に掛けて前髪二つと、残りの部分を後頭部で一つ。」

「はい。」

「後頭部をゆつくりとくしでとかしたら、ウールの糸で軽くロバの尻尾みたいに止めて、今度は残った二つに分けた前髪を内側へねじるように、ウールの糸で止めた部分でクロスして止めるのです。」

「へエ。」

「そして前髪でそれぞれ一つずつ三つ編みを作り、残りの後頭部で三つ編みを三つ合計作って、それぞれを纏めるんですよ。」

するとジュリアは本当に器用な手つきで三つ編みを作り始めた。しかも決して頭皮を傷めない様に気を使いながら。優しく丁寧に作ってくれるので、私も安心して任せていた。時折、私が退屈になりそうだったときに、お花のアクセサリーで三つ編みの練習をしてください。お返しに私もフェリックスから教えてもらったインチキ問題を出したりした。

「次の問題です。」あるローマの属州にある部族で、どんなに晴れてても雨乞いの踊りをすると、後で必ず雨が降るといふ。どうしてだろうか？

「えええ？！凄いや！その部族！オリュンポスの神々に頼んだから？」

「ぶっぶっ！」

「ええ？なんだろう？ユピテル様が降臨されたから？」

「ぶっ！違います。」

「えー？！分からないです！何だろ？うーんと、ティベリウス川が反乱したから？」

「ジュリア…。ローマの属州だよ。」

「あ、そっか〜！」

「もう答え言ってるいい？」

「あーダメダメ！まだまだ！」

彼女が凄い所は、こうやって口では焦りながらも、私の髪の毛で三つ編みをする手は決してぶれなかった。彼女はどつやら両手には別の人格があるみたい。

「んーっと、アルテミスが降臨したから！」

「あのさ〜。神々が降臨しちゃったら、何でも出来ちゃうから問題にならないよ。」

「あ、そっか〜。ローマの水道を使った？！」

「ぶつぶ〜。本当の自然の雨です。因みにジュリアでも出来マッス。」

「えええええ？！私でも？！雨乞いの踊りを踊れば？！」

「うん。あたしでも、誰でも。」

「ますます分からない？！どうやるんだろっ？！んーっと、分からない…。」

色々考え込んでいるんだけど、既に器用な手つきで、両脇の前髪も三つ編みを作り始めている。

「時間切れ〜！答え！」

「ええ？！待って、待って〜。」

「あーダメダメ！」

「もう少しで出かかったのに…。」

「答え！」

「はい。」

”雨が降るまで踊ってたから…。”

「…。」

さすがにあたしのインチキな問題の答えにジュリアの手は止まった。大体、この答えを知った人は、あまりのバカバカしさに呆れて怒り出す。ドルススお兄様からは、”アグリッピナ”！お前が雨が降るまで踊ってなさい！”ってゲンコツもらっちゃった。

「アグリッピナ様凄い！！」

「え?!」

「やっぱり聡明なお方は考える視点が違いますね？神々に頼る考え方なんて平民の考え方。ますます尊敬しちゃいます！」

どうしてジュリアとはこうなるの？

「そっか、確かに雨が降るまで踊ってたからデスよね？問題にはすぐに雨が降ったとは言ってなかったし。」

何気にジュリアは問題の隙間をちゃんと理解している。そしてあたしの発想に興味津々な様子。

「それにしても、アグリッピナ様はどうやったらそんな発想出来るんですか？」

「うんとね、答えから考える様にして、それでその過程がわからない様に問題を作っていくの。そうすると、とってもシンプルな事なのに、盲点がわからないと人は難しく考えるでしょ？」

「へえー！やっぱり凄い。」

これは大母后リウイア様から教わった、なぜ、自分自身が望んでもいなかった様な状況に追い込まれているのか？などの、現状把握の確認方法を応用した形。大体が、足りない物に不平不満があるから

が殆ど。とにかく感情に流されずに、足りない物を一つ一つ考えて、意外にシンプルでフラットに物事を見れば、自分の努力の無さだったり浮き彫りになってくる。

「本当に頭の回転が速いんですね？アグリッピナ様は。」

「そうかしら？」

「ええ。多分、並の男性じゃ追いつく事は難しいかもです。」

「ええ？！でも、パッラスとかはちゃんと計算が出来て、物凄く早いよ。」

「きつと、パッラスとアグリッピナ様では違うのだと思いますよ。多分、パッラスはそんな風にはできないでしょうね。」

そんなものなのかな？

「さあ、最後の仕上げに入りますよ。」

「ええ？！もう三つ編み終わったの？！」

「はい。」

「ジュリア本当に早いよ〜！」

するとジュリアは、それぞれの前髪部分で作った三つ編み一本ずつと、後頭部の三本ある三つ編みのうちの二本を四本合わせて、クルリと下側から襟足の部分でウール糸で巻きながら止めて、残りの一本で束に纏めて完成させた。

「凄い！何だか軽くなった感じがするよ、ジュリア！」

「ええ。こうすれば、どんなに活発なアグリッピナ様でも、髪型がズレたりしませんよ。」

ジュリアは使い古しの反射板であるオスクラムを、小さくコンパクトな形状に併せて手鏡にしていたので、それを二枚で合わせ鏡にし

て、後頭部の部分を見せてくれた。本当に丁寧に綺麗に仕上がっている。しかも、ジュリアの名付けたオリンピア・ヘアーにすると、自分の顔が引き締まって見え、少しだけ大人になった気分がする。

「凄く…綺麗。」

「でしょ？アグリッピナ様も、ご自分のお顔に惚れ惚れされたですよ？」

「自分で言うのも何だけどね。」

「もう少し改良する事も出来るので、色々研究してみましよう！」「うん。」

ジュリアは自分のささやかな夢を語ってくれた。それは、いつか自分が考案した髪型を、多くのローマ市民に見てもらおう事。なぜなら、恥ずかしがり屋のジュリアにとって、人を影から輝かせる事ができたという、至上の喜びを感じられるからだという。私は彼女の優しい想いを胸に秘めながら、後に彼女のささやかな夢を叶える事になる。でも、その時は既にジュリアはこの世を去り、犬のように笑う彼女の優しい笑顔は、私の心の中でしか見る事ができなくなっていた。

続く

第七章「狂母」第二百一十一話

「へえ?!」

「まさか?!」

「うそ...」

「本当です...」

アントニア様は、口から泡を吹くように目を見開いて失神した。その話を聞いた叔父のクラウディウス様も、顎を外されたように驚いている。もちろん私達もあまりの唐突さに天変地異が起きたかのように様に驚きを隠せない。とにかくクツルスとサリウスは失神したアントニア様を寝室まで運んだ。今日はクラウディウス叔父様のご長男ダルスとジュリアの結婚式の前祝いとして、身内での宴会を開く予定だったのに。リウィツラ叔母様は眉間にシワを寄せながら、更にもう一度問いただした。

「こんな事つてあるわけ?」

「はい。確かに、昨日の夕方、ポンペイにてお亡くなりになりました。」

「その死因...。あなたのいう事は本当なの?」

「はい。その、戯れをされている間に、ナシを口で受け止めようとされて...」

報告にきてくれた召使いはそれっきり口を閉ざし、頭を下げ、ドムスからそのまま去っていった。リウィツラ叔母様は顔に手を起きながら、目の前で起きている現実に信じられない様子。お母様もどう反応したら良いのか戸惑いを隠せない。もちろん私達兄妹も。しかも、クラウディウス叔父様のご長男ダルス。その最後が呆気なかった。

「タハハ…。我が子ながら、ダルサスの奴が、ナシを喉に詰まらせて即死したなんて…。情けないやつだ。」

「クラウディウス…。」

リウィツラ叔母様は、苦笑いしながら両肩を落としたクラウディウス叔父様に手を添えている。私達も困惑して、泣いていいのか悪いのか分からなかった。カリグラ兄さんだけが、口元を少し歪ませて笑いを堪えている様子。その時、私はダルサスの婚約者の存在を思い出した。

「あ！叔母様！ジュリア！」

「あ！」

しかしもう、遅かった。

ダルサスの婚約者であるジュリアは、自分で編んだお花のアクセサリーをいっぱい持ったまま、いつもの優しい笑顔を携えてやって来た。固まってしまっている私達を見て、何が起きているのか理解出来ない様子で、迷子の子犬の様にキョロキョロしている。ペロはいつも優しいから、誰よりも先にジュリアの足元に来て、彼女を慰めている。

「ウフフ。どうしたのペロ？」

「ジュリア…。」

「アグリッピナ様、どうしたんですか？みんな黙ってしまってます？」

「ジュリア。」

「？」

私はダルサスの死よりも、不憫でならないジュリアの為に涙が溢れてきた。そして彼女にしがみついて、泣きながら真相を告げた。と

ころがジュリアは、口元を閉ざしたまま必死に堪えて、受け止めようとはしない。

「そ、そんなのウソです。」

「信じられないかも…しれないけど、本当なの…。昨日、ダルサスはポンペイでお友達とナシで遊んで、口でそれを受け止めようとして…。」

「アグリッピナ様、もう！冗談にしては度がすぎますよ。」

「ジュリア…。」

しかし、クラウディウス叔父様は、重たい表情でジュリアに事実を告げられた。

「ジュリア。息子は愚かにも、ナシを喉に詰まらせて即死したんだ。」

「そんな…。」

彼女の持ってきたお花のアクセサリーが床に落ちると同時に、力が抜けた彼女もペタンと床にへばってしまった。

ジュリアは顔を真っ赤にして、顔を横に振って涙を堪えて受け止めなかった。そして大粒の涙を流して叫び出す。

「ウソです！そんなの絶対にウソです！」

「ジュリア…。」

「私、そんなの絶対に信じません！だって、だって！ダルサス様は私に、この私に、生涯一緒にいようねって優しく誓ってくださいなんですよ！うっうっ…。どうして?!どうしてこうなるの?アグリッピナ様！何ですか?!」

「ジュリア!!!」

私も涙を止める事が出来なくなつた。そして次第に、周りのみんなも、不憫なジュリアの為に涙を流し始める。それはジュリアが始めて取り乱した瞬間だったから。彼女の初恋の相手でもあったダルサスのあまりにも呆気ない死が、彼女の可愛くて優しい心をクシャクシャにってしまった。例え敵対勢力と見られているセイヤヌスの長女だとしても、ゲルマニクスお父様という太陽を失つた私達家族にとって、ジュリアの優しさはそよ風のような清々しさをもたらしてくれたのは本当。だからみんなジュリアが好き。

「ジュリア、立ちなさい。」

「アグリッピナ様？」

「ちゃんとダルサスにお別れをしに行こう？」

「…。」

「ダルサスだつて、ジュリアを待つてるよ。私もついていくからね？」

「アグリッピナ様…。」

アントニア様の奴隷アキリア、お父様、ドルスツス様のお母様、そしてクラウディウス叔父様のご長男であるダルサス。共通している事は、いくら泣いても故人は戻らないという事。どんなに辛くても、立ち上がらないといけない事。力が抜けて床にペタンと座っていたジュリアだが、震えながらも頷いて立った。私は立派に立ち上がったジュリアに、抑えきれない涙を堪えてギュツと手を握る。ジュリアも涙を堪えながらニコっといったもの優しい微笑みを返してくれた。

「ありがとう、ジュリア…。」

その姿に感激したクラウディウス叔父様は、今までご自分を支えていた何かが崩れ去るように、華奢なジュリアの前で跪いて大泣きし

た。そばにいたりウィツラ叔母様も、立ち上がったジュリアを必死に抱きしめて泣いた。

翌日、夕方過ぎにポンペイでダルサスの葬式が行われた。とても細やかな葬式だったけど、ジュリアが一生懸命一人で編んだ花々のアケセサリーが、ダルサスの遺体を取り囲むと和やかな気分になってくる。不思議と悲しい為の涙は枯れ、旅人を送り出すような気分だった。火葬されていく孫のダルサスを眺めながらアントニア様は、ジュリアを優しく抱きしめている。

「ジュリア……。あなたはこれから生涯ダルサスの恋人になったのだから、困った時にはいつでもいらっしやい。」

「はい、アントニア様。」

その後、野心溢れる父親セイヤヌスに何と言われようと、ジュリアはアントニア様のお力添えもあって、自分を選んでくれたダルサスの為に貞操を守り続ける道を選んでいく。まるでしっかりと編み込んだ花々に守られながら。

続く

第七章「狂母」第二百二十二話

ここに、クラウディウス叔父様の遺した記録書がある。ちょうど、ご長男のダルサスを亡くした後の記述に、ご自分の姉リウィツラ叔母様の事が書かれている。叔父様は最後までリウィツラ叔母様の味方だった。私も同じ想いだった。けれど、後世のローマ市民感情では、決して許されない罪を犯した『毒婦』として、リウィツラ叔母様は語り継がれている。それは、英雄ゲルマニクスお父様の後を引き継いだ、ご自分の夫であるドルスツス様を毒殺されたから。

毒婦というあだ名でいえば、今の私も同じ。自分の息子を帝位させる為に、様々な人間を毒殺してきたとローマ市民から噂されている。私の真相は後に語るとして、今は、身近で毒婦と呼ばれてしまったリウィツラ叔母様の起因を、クラウディウス叔父様が残された記録書と、私が見てきた事実を元に書いてみようと思う。

もちろん、クラウディウス叔父様は、なぜリウィツラ叔母様が最も嫌悪していたセイヤヌスと共謀したのか、その真相は理解されていない。だが、私は知っている。そして、リウィツラ叔母様の名譽の為に、自分の夫を毒殺したという意識が始めは無かった事を、ここで改めて伝えたい。リウィツラ叔母様は私と違って心優しく、そして本当はとっても寂しがりやなのだから…。

クラウディウス叔父様の記録書から。

この私、クラウディウスは、姉クラウディア・リウィツラ・ユリアの功罪について、何故自分の夫であるドルスツス様の毒殺に至ったのか、その起因に触れたいと思う。リウィツラ姉さんと私の共通の母アントニアは、非常にざっくばらんな言動でありながらも、考え

は実に古風で、結局一度も再婚をせずに自分の貞操を守り通した。そのような母親からしてみれば、二度の結婚の上に、セイヤヌスの不貞を重ね、実の夫であるドルスツス様を毒殺したりウィツラ姉さんは、家族とあつても許され無かつたのだから。姉は最後まで身の潔白を母に訴えたが、母は姉に死刑を求めた。ひよつとしたら、母アントニアは親よりも女性である事を最優先にしたのかもしれない。いや、ひよつとしたら、親として家族の恥を自らの手で葬り去つたのかもしれない。その真相は母親アントニアにしか分からない。

初めて姉さんとセイヤヌスが親密な関係になつたのは、我が息子ダールサスを喪つた一週間後の事だつたらしい。思い出せば、勢力を伸ばしつつあつたセイヤヌスの長女ジュリアを、我が息子ダールサスの婚約者に勧めてきたのは姉のリウィツラだつた。もちろんジュリアの存在はセイヤヌスの存在を抜きに考えれば、非常に心地の良い時間が流れていたと言っても過言ではない。そして、この頃の姉は情緒が不安定で、事あるごとに母アントニアとは口論になつていった。

また、夫であるドルスツス様のお母様が死去された事により、兄ゲルマニクスの未亡人であるウィプサニアが、ドルスツス様を変に氣遣う様になつたのも、あの姉を孤独に追い込んだ原因かもしれない。しかし、それだからといって、私はあの姉が短絡的に自分の実の夫の毒殺をするとは、到底思えないのである。歴史研究家として、思い込みは危険。そしてあらゆる仮定を立てた上で、感情に流されず考察する事は大切な事であろう。ここに、姉が最後まで自分の無罪を主張した理由を示す証拠がある。それを元に、一体何が起きたのか？筆を進めてみよう。

我が息子ダールサスとジュリアが婚約した事で、セイヤヌスは我々の家族と親密な関係を築けると睨んでいた。しかし、ダールサスの悲劇により、物事はセイヤヌスの望む方向とはずれて行つた。ドルスツス様が不在の時を見計らつて、セイヤヌスは姉のリウィツラの元へ

怒鳴り込んできたという。

「一体どういう事なんだ?!」

「…。」

「お前達ユリウス家は、ああん?!この、この!私を侮辱しているのか?!?!」

しかしリウィツラは葡萄酒を飲みながら、冷静に対処している。

「仕方ないでしょ?事故だったのだから。」

「し、仕方ない?!そんなことでは済まされんぞ!お陰であのジュリアは、もう誰とも結婚などしたくないと言いついてる!」

「当然でしょ?婚約者のダルサスが亡くなったのだから。」

セイヤヌスは恐ろしい勢いでリウィツラの首元を締め上げた。

「ウツグググ…。」

「貴様!エトルリア人を見下しているのか?!」

「や、やめて!苦しい!」

「そんなに?!エトルリア人がローマを狂わせた事が憎いのか?!」

激情に駆られたセイヤヌスは、リウィツラの口元から垂れたよだれに気が付き、失っていた我を取り戻した。首元を締め上げられていたリウィツラは、苦しそうに咳き込んでいる。

「は!私は…なんて事を…。」

「ゴホ!ゴホツ!」

「リウィツラ…。」

「帰って…。」

「何?」

「旦那の…ドルスツスが…言っていた事は、本当だったわ…。あなたは…自分の事しか考えられない…畜生以下よ！冥界の神プルートーに呪われるがいいわ！帰って！！！！」

自分の本性に驚きを隠せないセイヤヌス。目の前で自分を罵倒するこの女を、何故今まで恐れて首を締めなかつたのか。カエサルを血を引くというだけで、恐れていたのかもしれない。だが、所詮人間だ。神ではない。

「このまま私が帰れば、リウィツラ…お前はその口を生涯嚙んでくれる保証は何処にも無い、そうだろう？」

「当然じゃない！あなたを告訴するわ！」

「ならば、貴様の言う通り、冥界の神プルートーに呪われよう…。賽は投げられた。」

「?!」

「冥神プルートーは何故、処女神ケレースを略奪して冥府へ連れて行ったのか知っているか？それは主神ユピテル様から、こつ助言されたからだ。」

セイヤヌスは不敵な笑いでリウィツラを見下ろしながら、いやらしく舌を動き回し、そして両指をまるでトカゲの足のように動かして、肉欲を露わにしながら近づいていく。

「『女は強引な男に惚れる』つとな…。」

「いや！！」

部屋中にありとあらゆる物たちが叩きつけられ、リウィツラのセイヤヌスを拒む声が、粉々に砕け散る音と共に広がる。だがついに、彼女のストラを引き裂く音が空を切ると、口を抑えられて悶え続ける叫びが何度もこだました。救いを求めるその悲痛の声は、何度も

肉欲の奴隷になった男の勇ましい鼻息で掻き消されていく。そして、セイヤヌスが果てた後も、雑草の様にリウィツラは小さく体を丸め、小さな声で泣いていた。

続く

第七章「狂母」第二百二十三話

どのぐらいの時をこのままで過ごしたのだろうか？既に陽はこの部屋から離れ、リウィツラは引き裂かれたストラを抱きしめたまま、脱け殻のように茫然自失の状態でした。部屋中には、あらゆる物たちが散々と散らばり、つい先週まで、アグリッピナやジュリア達と朗らかに笑っていた場所が嘘のよう。

「いけない、あの人が帰ってくる…。片づけないと。」

リウィツラは起き上がって、少なくとも自分の愛する夫に心配をかけるまいと思っただが、擦れた痛みがヒリヒリと彼女の下腹部を襲うと、思い出したくない罪悪感が襲いかかる。

「ああ、何て事を…。」

心の痛みだけではない。それさえも消し去るあの感覚が自分を苦しめている。悶え苦しんだ中で、自然と絡みついてしまった情けなさ。そうした小さな小さな要因という名の幼虫達が、身体中の幸福感を貪る様に蝕み、彼女の求め得る居場所から遠ざける。ただあの人に、もう一度振り向いて貰いたい。それだけが唯一の望みだったはずなのに。そんなリウィツラの心情を察する事なく、夫のドルスツスは戻ってきた。

「あ、あなた？」

「リウィツラ…。これは一体どういう事だ?!」

「何でも無いの。ただ、手を滑らせてしまった。」

せめて今日の事だけは、どんな形でもいいから、知られたくない。

その一心だけで笑顔で取り繕う事にした。

「ただ手を滑らせたただけではないだろ？一体、何の騒ぎだ?!」

「違うのあなた、これには理由があるの。」

「お前、また癩癩を起こしたのか?」

「いいえ!ただ、その...。」

セイヤヌスが来ていたなどとは、口が裂けても言えない。ましてトカゲに辱められたなどと弁解したところで、頭のいいドルスツスは来訪を許した自分を一生許さないだろう。

「テイベリとゲルマは何処だ?」

「え?」

「ゲメツルスの二人だ。」

「え、ええ。奥で召使いが...。ちよつと待つて、あなた?一体何を考えているの?!」

「ゲメツルスの二人を預ける。」

「はあ?!預けるつて、どうしてですか?!」

「もういい加減にして欲しいからだ!リウィツラ!君はどうして自分の事を我慢出来ないんだ?!内助の功という言葉を知らないのなら、せめて僕たち家族の前で癩癩を起こさないでくれ!」

だが、何気ないドルスツスの一言は、リウィツラの心を刃物でえぐる。

「僕たち...家族の?つて、どういう意味ですか?」

「...。」

「あなた!?私はその家族では無いつて事ですか?!」

リウィツラは跪きながら、ドルスツスの体にしがみついて懇願した。

見放さないで欲しい。その一点だけが、今の彼女の平常心を取り戻してくれるのだから。だが、ドルスツスの表情は険しく、寛容的ではなかった。

「リウイツラ…。今の君は、まるでモザイク画の一つが気に食わなくて、僕らが必死に作り直したものを全て壊している様だ！」

「そんな…。どうしてそんな酷い事を仰るのですか?! 私は何も壊してなんかおりません！」

「君の周りを見たまえ! この部屋に散らばり壊れた器の様に、君を取り囲む人間関係だつて壊れかけているじゃないか！」

リウイツラは叩きつけられた。

ひび割れた器だとわかつていたけど、でも、それを何故自分のせいばかりにされなければいけないのか? 母親は大人になれといい、夫は自分の心さえも理解しようとしぬい。

「昔の君はこんな事すらしない、非常に優しい女性だったじゃないか。いつだつて笑顔で僕を受け止めてくれて…。いつも元気が良く、そして大きな心で何事も捉えてくれた。母の様な安らぎを与えてくれた、あの頃の君は、一体何処に行つてしまつたんだ?」

だがリウイツラは、己の性分を抑える事は出来なかつた。頭の中でセイヤヌスの指摘する言葉が支配し始めていたからだ。

「私だつて母親である前に、一人の人間なんです! 辛い事や悲しい事だつてあります! それをなぜ、分かつて下さらないのですか?!」
「度が過ぎるんだよ…。君のは。他人を傷付けている事さえ、気が付いていないんだ。このまま君の情緒不安定が続けば、ゲメツルスの双子の二人だつて怪我をするかもしれぬ。だから、一時的にウイプサニアの所に預けるつもりだ。」

確定的だった。

天から神々が自分の頭部に目掛けて稲妻を落とすかの様に、セイヤ又スの言葉は全てを物語っている。

”それにローマの男はみんなマザゴンだって言うじゃないか。ドルスツスの母親の面影を持つウイプサニアの好きにさせていたら、いずれお前の旦那がなびくのも時間の問題だな？”

自分へ惨たらしい辱めを与えた獣以下のトカゲの言葉が、今はまるで世界の真理を物語る主神ユピテルの語る言葉の様に説得力を帯びている。ドルスツスの心は自分から離れ、そして今はウイプサニアへと移ろいでいる。ドルスツスがリウィツラに望む事は母性愛のみ。女としての孤独や苦しみには蓋をしようとしている。

ウイプサニア…。

兄を奪い、母のアントニアを騙し、長女のリヴィアを長男のネロと結婚させ、旦那のドルスツスを惑わし、そして今度はティベリとゲルマのゲメツルスまでも奪おうとしている。私は許さない。決して許さない。あの女が全てを変えてしまったんだ。

「少しの間だけだ、リウィツラ。ゆっくり休んでくれ。」

「ええ…。」

しかし、既にリウィツラの心の中には、ウイプサニアに対する憎しみが溢れかえっていた。

続く

第七章「狂母」第二百二十四話

「リウイツラ?!」

「セイヤヌス…。」

セイヤヌスは、リウイツラの凍りつく様な冷たい瞳に背筋が寒くなつた。この女は復讐に来たのだろうか?それとも堂々と告訴の宣言でもしに来たのだろうか?油断ならない。いざとなれば命を奪う事も止むを得まい。セイヤヌスは短刀に指を伸ばしていく。

「ウイプサニアの、あの女の思い通りにはさせないで!」

「?!」

「貴方だつたらできるでしょう?!」

「ど、どういう事だ?」

「あの女が全てを変えてしまったの。私の手元にあるべき細やかな幸せを、いまや奪い去ろうとしている。あなたの言った通りだったわ、セイヤヌス。」

セイヤヌスにとって、思いがけない誤算が転がり込んできた。この間は己の恐怖を克服する為、主神ユピテルが冥界の神プルートーに与えたアドバイス通りに行動した。そして結果はどうだろうか?この女は的確な憎しみの対象を見つけてきたのだ。誰かの言葉ではないが、貞操を守れないローマの女性は、面白いほど自分から転げ落ちる。

「リウイツラ…。それは、ウイプサニアの勢力と距離を置くというのだな?」

「距離を置くですって?!私は兄が亡くなってから、あの女が存在が気に入らなかつたのよ!あのすました顔。一切の感情を表さない

発言。心の中で勝ち誇った態度。そして知らず知らずに自分の掌へと誘い込む手口。」

「ほほう?」

「あの女なら、今のローマをひっくり返す事くらいやりかねないわ。そうなつてからでは、貴方達だつて困るでしょう?」

「しかし、いくらウイプサニアが共和政支持者である元老院を味方につけた所で、クラウディウス氏族の中心人物である大母后リウイア様を揺るがすまでには至らないだろう?」

「あら、そうかしら?あの女には兄の神話を信仰に溺れるローマ市民という民意をも味方につけているのよ。それに、アウグストゥス様は、元々自分の血を引く者に帝位を望んでいたはず。それが、直接の血縁関係のない養子テイベリウスが、今でも皇帝に居座っていると彼らに公言すれば、王政アレルギーを持つ者たちの反発は必至でしょ?」

セイヤヌスは、開き直った女ほど怖い物はないと痛感した。だが、気になるのはこの女の野心である。

「だが、リウイツラ。お前もウイプサニアと同じ立場にあるではないか。自分の夫は次期皇帝継承者。」

「だから尚更でしょ?私の夫もアウグストゥス様とは直接の血縁関係はないのに、このままではあの女に利用されるだけされてしまうから。それを阻止する為にも、貴方は私の助けが必要じゃないかしら?」

「なるほど…。分かった、ウイプサニアの勢力は何としても食い止めよう。」

リウイツラは噛み締めた歯をひたすら口の中で隠し、床のある一点だけを見つめていた。

「私はただ、夫の気持ちを取り戻したいだけ。あの優しかったあの人を、私の側で永遠にいて欲しいだけ。」

「永遠に？」

「ええ、永遠に。決して揺るがない、裏切りの存在しない世界で、私はあの人に愛され続けたいの……。」

セイヤヌスはその言葉を信じ、リウィツラにこの間の辱めを与えた事を詫びた。

「な、何よ！？突然？」

「悪かった……。己の思い上がりを恥じている。」

「な、何を今更！謝った所で、貴方を一生許すわけないわ！ただ、貴方の言った事だけは本当だったって事。私は無力のまままでやらねばならぬ。私にはいたくないから、貴方は私に告訴されたくないければ、ウィプサニアの排除に力を注げばいいのよ！」

「いや、エトルリア人として、いや、冥府の神に呪われた者として、果敢にも立ち上がったリウィツラにある物を贈りたい。」

「え？」

腰元の布袋からセイヤヌスは何かを取り出そうとしている。

「冥界の神プルトーは主神ユピテルの言葉に従ったが、強引に冥府へ連れられた処女神ケレースは一向に心を閉ざし、食べ物すら受け付けなかった。日々にやつれていく彼女の姿を不憫に思ったプルトーは、彼女の為に四つのザクロを用意し、それをケレースが口に含んだ事により、世界の四季が始まったと言われている。」

すると、掌には四つの小瓶が握られている。

「こ、これは？」

「エトルリアの妻達に伝わる秘薬だ。」

「え？」

「忘れたのか？ジュリアの婚約の力添えになってくれた暁には、お前にあげる予定だった夫の想いを取り戻すエトルリアの秘薬だ。」

あきらかにリウィツラの顔色が変わった。内心は藁をもつかむ思いなのであろうか、情緒が不安定なのは隠しきれない。

「これは、お前との信頼関係を築く為に、季節ごとにお礼として、これをお前に贈りたい。」

「…。」

「受け取ってくれ。」

「本当に…？」

「ああ。だが、倒された神殿を元通りにするには、焦っては無理だ。それは他人をなかなか信頼出来ないお前が、一番分かっているはずだ…。」

「…。」

小瓶を眺めながら頷くリウィツラ。

「先ずは今季の分だ。一週間に一度だけ、ドルスツスに少量ずつ飲ますのだ。」

「一週間に…一度だけ…。」

「そうだ、それも少量ずつ。焦って大量に飲ませれば逆効果だ。忘れるなよ。」

リウィツラはこれでドルスツスの心が、ウイプサニアから自分の元へ帰ってくるとは信じきれなかった。だが、何もしなければ、何も変わらない。

「リウィツラよ、私は確かにお前に酷い事をした。それは怒りに駆られてではなく、お前の女性としての魅力に勝てなかったからだ。処女神ケレースのように美しく、心が繊細で、誰かの助けを常に必要としている。」

「…。」

「私はお前の助けになりたい。処女神ケレースが世へ四季を広めたように、お前の心の中にある世界にも、四季を取り戻してくれ。」

「ええ…。」

セイヤヌスは信用ならないが使える。彼の望み通りにすれば、いずれ夫のドルスツスはこの薬で我を取り戻し、子供達を自分の手元へ取り戻す事ができる。

ウィプサニア。

兄の名で卑しく生きる女。

愛すべき夫の心を奪った寡婦。

そして、皇族に復讐を抱く未亡人。

お前をこの世から排除する為ならば、如何なる手段を使おうとも、後悔すら感じないだろう。

続く

第七章「狂母」第二百二十五話

この私、クラウディウスは、実の姉であるリウィツラ・ユリアによる夫毒殺の功罪について記述している。「功罪」と書けば、カエサルを引くユリウス家や、当時ウィプサニアを支援していた共和制支持者である元老院からも非難を浴びる事は覚悟の上。私自身、姉の夫であるドルスツス様とは、身内として仲良くさせてもらっていたので、姉がそのような愚かな行為に走っていたなどという事は、一個人として許せない気持ちでいっぱいだった。

だが、私は歴史研究者である。それもエトルリア史に関しては、ローマ人としてではなく、全ての歴史を網羅する一人の人間として、関わらなければいけない使命がある。例え、セイヤヌス自身が「記憶の抹消刑」であるダムナティオ・メモリアエの刑に課せられたとしても、歴史は華やかな輝きや自分の都合の良い部分を眺め為にあるのではないとを感じる。セイヤヌスには彼なりの正義と思想があったのだ。エトルリア人による王政ローマの復活という途方もない夢が。つまり、彼の野望を正義とみる者からすれば、姉の犯した皇帝継承者である夫のドルスツス毒殺という行為は、王政ローマ復活への暁だったのかもしれない。その事については、後ほどセイヤヌスの狂乱の時に、詳しく記述しよう。

さて、時として歴史とは残酷な生き物である。特に自分の身内同士が争う姿を目の当たりにした時、いずれ結果が訪れる事を覚悟しなければならぬ。姉はきつと自分の力だけで、本当はドルスツス様の心を取り戻したかったのだろう。そしてセイヤヌスに差し出された秘薬の効果など、始めは信じてはいなかったのかもしれない。だが、理解が概ね願望である事を忘れた時、人は自分以外の力に頼りたくなる物である。少なくとも、兄の長女であるアグリッピナは、

幼い頃から大母后リウイア様よりその事を教わってきたようだ。自分の母親ウイプサニアとのすれ違いを幼い頃から感じながらも、母親と衝突することなくそれらを一切口に出さずに我慢していた。きっと姉に足りなかったのは、その我慢だったのかもしれない。事実、姉が思うほど、ドルスツス様はウイプサニアと親密な関係では無かった。先ず第一に、戦友であり親友である兄のゲルマニクスに対する不義になるからだ。そして、現実的に考えても、セイヤヌスと牽制しあう消耗する日々の中で、ウイプサニアと不義をはたらくほど彼は暇では無かった。それに何よりもドルスツス様が常に気にかけていたのは、自分の子供達と妻であったのだから。それはドルスツス様の名誉の為にも、私自身が彼と会話した事を記述しておこう。それは、ある晩の事だった。

「クラウディウスさん…。」

「ドルスツス様、どうなされたんですか？こんな夜に。」

「悪いが、うちのチビ達をしばらく預かってくれないだろうか？」

「チビ達？」

ドルスツスの後ろについてきたのは、召使いに抱えられたティベリとゲルマのゲメツルス双子であった。

「こ、これは？」

「ええ。お恥ずかしいながら、家内がまたもや癩癩を起こしてしまつて…。」

「姉さんが？またですか…。」

「今までは、お義母さんのアントニア様と癩癩を起こす事が常だったのだが、今日は違ったのです。私のいない所、それも寝室で一人だけで…。」

「一人…だけで？」

「はい。」

この時、私は不思議な違和感を感じた。勿論、セイヤヌスがいたという事実は後になってから知ったのだが、それにしても姉が一人だけで癩癩を起こすなど、今まで一度も無かったからだ。むしろ、一人の時の姉は穏やかで、いつも葡萄酒を片手に透視図法を考えたり空想に耽っている。母親のアントニアでさえも、姉と口喧嘩した後には、暫く姉を一人にさせてなさい、そうすればケロっと元気になるから、という決まり文句を言うくらいだった。

「部屋はめちやくちゃで荒れ放題。一生懸命取り繕ってはいたけど、どうやら相当病んでいたらしい。」

「そうですか…。分かりました、暫く双子のゲメツルスを預かりましょう。ナルキッスス！」

「はい。」

「二人をレピダの所へ。」

ドルスツス様には悪いが、血の繋がる弟としては信じられない思いである。だが、姉の癩癩に耐え切れる人間も数少ないのは事実。特に、ドルスツス様のような元来生真面目で陽気な方には酷であろう。

「クラウドエイウスさん、妻のリウィツラはどうしたら元に戻ってくれるのだろうか？」

「元に？」

「ええ。最近のあいつを見てみると、どうもウィプサニアに対して嫌悪感があるようにしか思えなくて。ゲルマニクスが生きていた時には、あんなに二人は仲が良かったのに、今では二人が揃うと緊張感を強いられます。」

「確かに…。」

「私はただ、元気で優しく、大きな心で私を受け止めてくれてい

た、あの頃のリウィツラに戻って欲しいだけなんです…。」

「…。」

私は何も言えなかった。
少なくとも私達家族のバランスが、たった一人の死によって崩れたのは確かだったから。そう、兄ゲルマニクスの死によって。これほどまで、死してもなお、私達に影響を与え続ける兄の存在は、見方を変えれば呪いにさえ感じる。太陽を失った我々が、自分たちの足でこの闇から脱却するには、まだまだ時間が掛かるのかもしれない。

「だから、本当はウィプサニアに双子のゲメツルスを預けるつもりだったのですが、リウィツラの様子が更におかしくなったので、急遽、クラウディウスさんに頼ったというわけです。」

「ドルスツス様、あなたはとても賢明なお方だ。やはり、兄と張り合った仲だけある。姉の性格から言って、もし双子のゲメツルスを本当にウィプサニアへ預けたら、大変な事になっていたでしょう。」

「やはり…。」

「ええ。」

ドルスツス様は頭を抱えて悩んでらした。

「とにかく、暫く私が責任をもつて預かりますが、ドルスツス様も余り悩まず、姉と接して頂けるとありがたいです。」

「え？」

「母親の口癖ではありませんが、姉は暫く一人になると、ケロっと元気になるので、その時には今まで通りに接してやるのが一番の特効薬でしょう。」

「今まで通りに…か。」

「ええ。人は、特別扱いされる事よりも、意外に普通の扱いをされた方が、安心するものですよ。」

「確かに…。」

「ドルスツス様が、姉に元の元気な姿を求められるなら、尚更普通に接してやってください。」

「分かりました、クラウディウスさん。」

「姉には私から伝えておきます。」

「ありがとう。私もひよつとしたら、リウィツラの望んでいた自分を見せてなかったかもしれない。」

「仕方ありませんよ、最近は身内の葬儀が多かったですからね。」

「これ以上、増えないで欲しいものだ。」

「ええ。」

だが、次の身内の葬儀は、この年から三年後のドルスツス様ご本人であった。それも姉リウィツラによる毒殺という、歴史の皮肉に隠されながら。

続く

第七章「狂母」第二百二十六話

一月。

それは前後二つの顔を持つ年神であり、ローマ市民にとって出入り口と扉の神であるヤーヌ様が司る月。毎年ヤーヌ様の月が訪れると、今年一年間において都市ローマの長を務める、執政官二名が発表される。

今年はいベリウス皇帝が四度目の、そしてドルスツス叔父様は二度目の執政官に選ばれた。一昨年の父ゲルマニクス死去から続くローマ不安情勢の中で、ローマ市民からはティベリウス皇帝への反感が募る中、ご自分の息子と執政官を務めるといふ事は、ますます皇族派の基盤を身内同士で強固な物にしようとしていると、共和制支持者からの非難が強まった。

「我が息子ドルスツスは、この八年間の業績と属州における争いの終結や、略式ではあるが凱旋將軍としての名誉。また、私が二度目の執政官に在位した年齢と同じである事は偶然ではなく、これをもつてして、今後の活躍に値する人物である。どうか、元老院議員の諸君等も、この若き執政官に温かい眼差しで見守って欲しい。」

だが、同時にドルスツス叔父様への期待も膨らんだのは確か。クラウディウス氏族皇族派の中で、比較的共和制支持者と意見が一致している事、そして何よりも、皇族派から虎の威を借る、狐ならぬトカゲであるセイヤヌスの勢力拡大に関して、公然と危険視を宣言されていた。更に、父ゲルマニクスの国葬へ皇族派として唯一参加したという事も、ローマ市民からの人気に拍車を掛けた。

さて、私、アグリッピナはその頃何をやっていたかというところ…。

「あたし、今年は恋に全力を掛けます！」

「はあ?!」

「何を馬鹿な事?!」

「お姉ちゃん?!」

と、呑気な宣言を公然としていた。勿論、兄ドルルスからはいつものようなツツコミを受けていたけど。

「アグリッピナ…。お前、恋って何だか知ってるのか？」

「失礼な！ドルルスお兄様、そのくらい知ってます。」

「お前、ナシとか葡萄とか桃とか、甘酸っぱい果物じゃ無いんだぞ。」

「へっへーん、そんな事は知っています。だから言ったでしょ?」
「恋します」って。」

するとドルルスお兄様も目を見開いて驚いた。

「おおお！分かってんじゃん。」

「そういうお兄様はどうなんです？妹のあたしに偉そうな事言ってますが、恋をされているんですか？」

「うん？うん。ま、まーな。」

「えええ?!本当ですか?!」

「そ、そりやお兄ちゃんだもの。」

「ええ?!誰と何ですか?!」

「だ、誰と?!」

「ええ。だって恋は一人じゃできないいますし…。」

「そ、そうだな。」

とまあ、実は恋などした事ない兄妹同士、ほのぼのと暮らしていた。

とにかく私はジュリアから新しい髪型にしてもらってから、やたらと愛だ恋だの叫んでいたのは覚えている。

所でそのジュリアはと言うと、毎週アントニア様と一緒にウエスタの巫女達の所へ通っていた。不慮の事故で亡くなったダルサス様の為に、ジュリアは生涯貞操を守り続ける事を決意する。彼女の年齢では、すでにウエスタの巫女になる事は無理だが、その学びを模範として生きて行く事は可能であるとアントニア様が判断されたため。

「さあジュリア、ウエスタの巫女達と一緒に、今日も頑張ってるね。」

「はい、アントニア様。」

「終わったら、アグリッピナ達と果物を食べましょう！」

「はい！」

勿論、この決定に猛反発したのは彼女の父親であるセイヤヌス。ただまだ若い自分の長女が政略結婚として使えなくなる事に当然異議があるからだ。だが、ジュリアのダルサスに対する一途な想いは、父親から勘当をされようとも変わらなかった。

「ああ！ジュリア、お帰り！」

「アグリッピナ様！只今です。」

「どうだった？」

「とっても皆さん素敵なお方ばかりで…。私、本当は自信が無かったのですが、とっても勇気を貰いました。」

「そう！良かったね。」

「ある巫女達と話したら、『ジュリアさんは好きな人が見つかっただけでも幸せです』って、うっうっ…励まされて…うわーん。」

涙もろい、感激ジュリアが出てきた。

でも私も嬉しかった。ジュリアは本当に本当にダルサスの事が大好

きだったから。お葬式が終わった後でも、なかなか食事も喉に通らない日々が続いてたから。この子には、生涯ダルサスの為に貞操を守る事が一番似合っていると思った。

「もう、ジュリアは泣き虫なんだから。ほら、いつもの鼻水出てる。」

「あは、いつけない。」

「あはははー！」

時折、私がジュリアのお姉ちゃんになるのが面白かった。

「ジュリアさん、アグリッピナのやつ、今年は恋に全力を掛けますって宣言したんだよ。」

「ええ?! 本当ですかドルスス様?!」

「ああ。執政官の発表じゃないんだから、公言する事でもなかるうに。」

「素晴らしい事じゃないですか?!」

「へえ?!」

「だって、やっぱりアグリッピナ様だって女の子ですもん。恋のやつや二つぐらいしたい年頃ですよ。」

「へっへーん。」

私は鼻をこすりながら威張った。

「それに、アグリッピナ様は、とってもお美しいお顔をされていますよ。」

「はい！」

「ええ?! アグリッピナが?!」

「はい！」

すると何故かカリグラ兄さんが同意してきた。

「それは僕も認めるよドルス兄さん。意外にこいつの目鼻立ちつて、お母さん譲りだから。まあ性格は負けん気が強くてお転婆だからどうしようもないけれどね。」

「つるさいな。ガイウス兄さんは。一言多いんだよ。」

「ほらね？これでもう少しお淑やかだったら良かったのに。性格はペンテシレイア様だもん。」

そこへ九官鳥のように人のモノマネをする、末妹のリウィツラが私を馬鹿にして繰り返す。

「ペンテシレイア！お転婆！」

「リウィツラ！あーうるさい！」

「あははは、お姉ちゃん、本当の事だから仕方ないんじゃない？」

「たはは！妹のドルシツラまでに言われるとは、お前やつぱり性格変えた方がいいぞ、アグリッピナ！」

「うつつるさいな。寝小便ガイウス兄さん！」

「あ！お前！お兄ちゃんに向かってとんでもない侮辱しやがって！」

「べーっだ！」

カリグラ兄さんは一生懸命私を捕まえようと追いかけてきたけど、すばしっこい私は全力で逃げ切り、ドムスの屋根まで登ってカリグラ兄さんにあつかんべーをかましている始末。格好つけて恋の年にする宣言などしてみたものの、どうやらまだまだ私のお転婆ぶりが影をひそめる事はなさそうだった。

続く

第七章「狂母」第二百二十七話

「おい、アグリッピナ。」

「何？ガイウス兄さん。」

私は珍しくカリグラ兄さんから呼び止められた。普段はこんな事はないのに。

「お前、ドルシッラの事をどう思う？」

「どうって、別に恋なんかしてないんじゃない？」

「あのな…。恋とかそういうんじゃない、あいつの様子、最近変だと思わないか？」

「変って？」

「何と言うか…。姉として、何か変わった事はないか？って聞いているんだよ。」

「うーん、別に。」

カリグラ兄さんは、私よりもドルシッラと過ごした期間が長いからなのか、妹の事になると神経質なまでに気になり出す。

「そっか。」

「どうしたの？」

「いや、あいつ最近、俺に泣き言を言わなくなったんだよ。」

「兄さんに？」

「ああ。昔は何かあれば、俺に甘えて泣き言を言ってたのにさ。」

「良かったじゃない。あの子だって、末妹のリウィッラが喋るようになったから、お姉さんとしての自覚が出てきたんじゃないの？」

「はあ…。お前って、基本は楽観的だよな？」

「ガイウス兄さんが基本神経質なんですよ。」

まあ確かに、ここ最近のドルシツラの存在感は、影が薄くなるほど在り来たりの反応ばかり。

「俺が心配しても、あいつ意外に頑固で平気の一点張りでさ。だから、お前からそれとなく探ってくれないか？姉として。」

「あたしが？！今それどころじゃないもん。恋をするために必死だから。」

「また、恋の話かよ……。相手がいなきゃ無理なんだろう？それ。」

ギク。

確かにそうだけど。カリグラ兄さんは、昔からドルシツラの事になる人一倍心配性になる。その一割も私の事は心配したりはしないからムカつくけど。

「分かった。それとなくジュリアが来たら探ってみるよ。」

「おおお！ジュリアさんがいれば心強い。」

何よ。

あたしに頼んでおきながら、ジュリアの方が頼り甲斐があるなんてこれだからカリグラ兄さんとは気が合わない。

「頼んだぞ！」

「分かりました！つたく。」

それにしても、確かにドルシツラって泣き言を言わなくなったな、最近。やけに達観している感じで、いつもニコニコしているだけ。なんて言うか、ジュリアでさえも感情の起伏はあるのに、まるでドルシツラにはそれを感じない。

「アグリッピナ姉さん。」

「あ、ドルシッラ。」

ゲゲ！タイミング悪いよ。

ジュリアが来てから、もつと戦略的な計画を練ってからいこうと思っただのに。

「ジュリアさんが来たみたいよ。」

「ああ、本当に?!」

「どうしたの?なんか慌てて。」

「いや〜。なんて言うか、その…。恋!恋って難しいよね?あんたも女だから分かるでしょ?」

「アハハ、姉さんは相変わらずだね。あたしは幼いからよくわかんないよ。」

「そっか、そっだよね。」

「それに姉さん。そういう事って女神ウエヌス様から、自然と導かれてやってくるんじゃないの?」

「自然と?」

「うん。トロイアのパリス王子が、スパルタの王妃ヘレナに恋をしたように。」

あ、確かに。

「気負いしても無理って事かな?」

「どうなんだろうね。」

そう言うと、ドルシッラはまたニコニコして笑っている。うーん、確かにカリグラ兄さんが言った通り、サラッと交わしてて変だ。

「そんな事は無いですよ、ドルシッラちゃん!」

「ジュリア?!」

「はい、アグリッピナ様。」

「ジュリアさん!」

神出鬼没のジュリア。

でも、彼女のハツラツとした笑顔を朝から見ると、こっちまで気分が良くなってくる。やっぱり妹のドルシツラとは違うんだよな。

「恋や愛って、いっぱい色々な形があると思うんです。アグリッピナ様のように奔走されて掴み取る形や、ドルシツラちゃんのように、自然の流れでじっくり待つ形や、私のようにダルサス様を永遠にお慕う形など。」

「アハハ、なるほど。」

ルルンつと乙女のように目をときめかせるジュリアは本当に可愛かった。しかし、ニコニコしながらも醒めているのは妹のドルシツラ。

「所でジュリアさんは今日何しに来たんですか?いつものウエスタの巫女への教室の日では無いですよね?」

「ええ、今日はドルシツラちゃんにプレゼントもってきたの!」

すると、後ろ手に隠していた花を編んで作ったクッションを手渡した。ドルシツラは少し驚いた様子で、でも、またニコニコして感謝の言葉を述べている。確かに、カリグラ兄さんの言う通りかもしれない。

「ドルシツラ。私とジュリアは話があるから。」

「え? そうなの?」

「うん?」

「ほら、ジュリア来て!」

「あ、はい!アグリッピナ様。それじゃ、また後でね〜ドルシツラちゃん。」

「アハハ、ジュリアさんまた後でね。」

私はその後、ジュリアと直ぐに二人だけでドルシツラの事を相談した。

「ええ?!ドルシツラちゃんが?」

「うん。ガイウス兄さんは、いつもドルシツラの事を気に掛けているから、少しの変化が気になるみたいだけど、私から見ても、あの子って何だか笑ってるのに醒めている感じがするの。」

「とっても、綺麗な笑顔なんですけどね…。」

「うん。それは私も感じるの。でもよく見ると作り笑っている感じがして、何というか。」

しばらくジュリアは、辺りを動きながら考えていた。すると何かを閃いたようで顔を明るく輝かせた。

「そうだ!ドルシツラちゃんの髪の毛を整えてみましょうか?」

「ドルシツラの?」

「ええ。だって、やっぱり女の子なんですから、気にならないはずはないです!」

「そっか!」

「エッへん!とっても良いアイディアですよね?」

腰に両手を置いて胸を張る、ジュリアの自信は頼もしいと思えた。

「そうだね!あの子も何だかんだ言って私とは一歳しか離れてないし、ずっと末妹リウィツラの面倒ばかり見ているし、そのアイディ

「アはイイかも！」

「では、早速！」

そういって、ジュリアは自慢の美容袋を腰元から取り出して、張り切っていた。

続く

第七章「狂母」第二百二十八話

「アハハ、お断りします。」
「へ?!」

ドルシツラは、ニコニコしながら私とジュリアの提案をやんわりと断る。実は、ジュリアが妹の髪の毛を整えながら、それとなく本音を探る計画を考えていた。

「ど、どうしてよ?ドルシツラ。」

「だって、アグリッピナ姉さん。その間のリウィツラの面倒は誰が見るんですか?」

「はあ?そのくらいあたしが見るって。」

「ダメ。姉さんじゃリウィツラがぐずりだしたら無理でしょう?」
「そんな事ないって。」

「あの子、泣き出したら全然泣き止まないの知らないでしょ?それに、せつかくジュリアさんが髪の毛を整えてくれるのに、泣き出すたびに中断させたら悪いし。」

「そんなことないよ、ドルシツラちゃん。私は平気だから。」

「でも、やっぱり悪いからお断りします。」

参ったな。これじゃカリグラ兄さんから頼まれた、ドルシツラの本音偵察ができないじゃない。そうだ!

「だったら、あんたがリウィツラ抱いたまましてもらえばいいじゃん。」

「ええ?」

「ぐずりだしても平気でしょ?」

「オシッコの時は?」

「それぐらい私が行かせるって。」

「姉さんが??できるの?」

「失礼な、できるって!」

ペロのウンチだって、時々あたしが片付けてるんだから、そのぐらい楽勝だって。

「姉さん…。ペロのフンを片付けるのと違うんだからね。」

「な、なによ、ドルシツラ。お母様みたいな言い方して。」

するとジュリアがすかさず、私にウィンクしてきた。

「まあいいじゃない、ドルシツラちゃん。きっとアグリッピナ様だって、リウィツラちゃんの世話をしたいのよ。」

ナイス!

さすが年上ジュリア。

「そっか。考えてみれば、姉さんずっとリウィツラとは会ってなかったもんね…。」

「うんうん。」

「それじゃ、ジュリアさんに甘えて…。」

「うんうん。」

「姉さんリウィツラの相手よろしくね。」

「任せといて!」

大成功!!

大張り切りのジュリアは、テキパキと準備を始めた。さすが悪巧みな計画に参加すると、勝手にノリノリになるジュリアらしい。

「さーってと。」

とはいったものの、あの九官鳥リウィツラの相手となるのは私だが、はたして、あのチビは私を一番上の姉貴だと分かってるのかしら？ヨチヨチと庭を歩きながら、リウィツラが哺乳器を口に挟んでやって登場してきた。開口一番、私を見るなり何を言い出すかと思っただら、さっそくあたしへの侮辱。

「お転婆！お転婆！」

「アハハ、そうとう姉さんはリウィツラからお転婆だって思われるんだ。」

「こんにやろ。」

生意気な末妹め！これじゃ姉貴としての威厳が無いじゃんか。三歳なら、姉の名前くらい言えって。

「いい？リウィツラ。あんたの一番上のお姉ちゃんはアグリッピナ。分かった？」

「うん。」

「ヨシ！なら言っただらん？」

「ア転婆！」

「んもー！アグリッピナ！」

「お転婆！アハハ！」

「アハハ、姉さんのこと、お転婆だっけ！」

「お転婆ピナ！」

「こいつ…。」

絶対にわざとやってるな。

「ドルシツラちゃん、どんな髪形がいい？」

「うーんと、お母様みたいな感じがいいです、ジュリアさん。」
「ウィプサニア様のようにね…。」

ジュリアはドルシツラの髪をくしでとかしながら、色々と工夫を考えている様子。

「それには、もう少しだけ後ろ髪を伸ばさないと無理かな。」
「そうですね…。」

「あ、でも、その代わりに前髪は似せることができるから、そこからやってみようかしら？ねえ？ドルシツラちゃん。」

「はい、ジュリアさん。宜しくお願いします。」

気が付くとドルシツラも満更でもないらしく、リウィツラの事など忘れてジュリアと話し込んでいた。うんうん、このままいい雰囲気ですドルシツラの本音を引き出せれば…。後は、この調子乗ってる生意気なチビをどうするかだが…。

「お転婆ピナ！お転婆ピナ！」

さーて、どうやって調理してやるつか？姉貴を侮辱する罪は重いぞ、リウィツラ。イッヒヒヒ！

「アグリッピナ。」

「お転婆ピナ！」

「アグリッピナ！」

「お転婆ピナ！」

そこで阿鼻叫喚の階段から処刑するのは勿体無いので、アントニア様の教えてくれた刑を執行する事にした。

「リウィツラ。あなた、お姉ちゃんの名前今度わざと間違っ
たらお仕置きだよ、分かった？」

「うん。」

「はい、アグリッピナ。」

「お転婆ピナ！ニツヒヒヒ。」

カチーン。

このガキやゝ。末妹だからって舐めくさがりやがって！必殺！ア
ントニア様直伝「くすぐりの刑」ゝ！

「キャハハハハハハ！！！」

「コチヨコチヨコチヨコチヨコチヨコチヨゝ！」

「アハハハハハハハ！」

「どうだ？まだ言うか？」

「アグリッピナ！アグリッピナ！」

「え？聞こえないぞゝコチヨコチヨコチヨコチヨコチヨコチヨ！」

「キャハハハハハハハ！！！ゴメンちゃい！ねーたん！アグリッピ

ナねーたん！」

「ヨッシー！」

だが、しかしである。

度胸の据わった末妹リウィツラは、笑った勢いで鈍い音と共に漏ら
しやがった。

「…。」

「…。」

「…。」

「アハハ…。」

まるで猫が素知らぬ顔をして、猫をかぶるような誤魔化し方。

「出ちつた…。」
「じゃないだろ?!」

気が付いたら、私は頭にゲンコを入れてた。当然リウィツラは叩かれたところを抑えながら大泣き。駆け付けた妹のドルシツラはカンカン。更にはチビが放った異臭が辺りへ蔓延し、何事かとドルスス兄さんやカリグラ兄さんまでも鼻を抑えて飛び出してくる始末。リウィツラを泣かせて失敗した私だったが、どうやら、とりあえずはドルシツラの感情の起伏は取り戻せたみたい。

「つ、次の作戦を考えましょう、アグリツピナ様。」

「そ、そうね、ジュリア。」

「…。」
「…。」

私とジュリアも、チビの異臭に鼻を摘まんでいた。それにしても、リウィツラ…。あいつ、一体何食ったらあんな臭いウンチでできるんだろ？

続く

第七章「狂母」第二百二十九話

ジュリアとの「ドルシツラ本音偵察計画」はことごとく失敗に終わるも、その間に末妹リウィツラの言葉を覚える速さには驚かされた。それも一から綺麗な発音で教えてやると、まるで磨かれた大理石のように綺麗になっていく。あたしはいつしかそっちの方が楽しくなってきた。

「アグリッピナおねーたん。」

「違う違う、リウィツラ。アグリッピナお姉ちゃん。言っでござらん。」

「アグリッピナ…お姉ちゃん？」

「そうそう！上手い上手い！」

「美味しい？アグリッピナお姉ちゃん美味しい？」

「バカ。」

「バカ！アグリッピナお姉ちゃん？」

「…。」

「イッヒヒヒ。」

「コラ！わざと言っただな？！」

基本、リウィツラの性格はイタズラっ子。逃げ足も速いし、木登りもしようとする。結局、最後は私には負けるんだけどね、フッフィン。つまり、あたしの子分になる性質は十分にあるって事。

「もう！姉さん。リウィツラをお転婆にさせないでね。」

「してないわよ、ねえー？」

「ねえー、アグリッピナ。」

「お姉ちゃんをちゃんとつけるって。」

「はい、アグリッピナお姉ちゃん。」

「姉さん！」

「何？」

「もう、言葉遣いが悪いです。」

いつからこんな感じになったのか。ドルシツラは忙しいお母様の代わりをやるようになった。ある意味あの子自身の立ち位置が見つかったみたい。それでも、カリグラ兄さんは心配している。その日の夜、夕食後に私はまたもカリグラ兄さんに呼び止められた。

「どうだ？アグリツピナ。」

「どうって？」

「ドルシツラの事だよ。」

「あゝ。あの子なら平気なんじゃない？忙しいお母様の代わりにやっ
て楽しんでるみたいだし。」

「そうか？俺には無理しているようにしか見えないぞ。」

「まさか。」

「だってそうだろう？姉のお前が子供っぽいんだから。」

「うっさいな。大体そんなに気にするんだったら、ガイウス兄さ
んが自分で聞けばイイじゃない。」

「俺じゃダメなんだ。」

「何だよ？」

「何でも。」

そう言うと、カリグラ兄さんは少し悲しげに顔を背けた。確かに気が合わない兄だけど、寂しがりやなのは十分に伝わってくる。

「分かったわ。もう少しだけ続けてみる。」

「ほ、本当か？」

「ええ。ただし兄さんも、ドルシツラの事ばかりじゃなく、少しはあたしの事を褒めたり感謝したりしてよね。」

「え？」

「そういうのって、家族でも兄妹でも大事だよ。」

カリグラ兄さんは少し黙ったまま俯いて、それからいつもの表情に戻った。

「うつせえな、お前に言われなくたって分かってるよ。」

もう！

これだからカリグラ兄さんって大っ嫌い。兄さんはプイと背を向けて歩きだした。

「…。」

しばらく独りで庭をブラブラしていると、ひんやりとした夜風がやってくる。頭冷やすにはちょうどいいか？そういえば、ローマに独り残っていた頃、こんなひんやりとした夜風の中で、高慢ちきりヴィアにむくれてた私に、大母后リウイア様はとっても大切な事を教えてくれたっけ。

”アグリッピナ。今日は立ち向かう力を貴女に教えるわね。”

”立ち向かう…力？”

”ええ。世の中には理不尽な事が目の前に立ちふさがる時もあるでしょう？”

”はい、確かに。”

”でもね、その時は冷静によく考えて、それでも自分が正しいと思えたら、そしてそれでも相手が理不尽だと思えた時、その時には決して相手から目をそらさない事。”

”目を…そらさない事。”

”そう、目をそらさない事。いい？それで相手がそらすようなら、

貴女は正しい側に立っているのよ。”

さっきのあたしって感情的になって、目を背けちゃったな。ダメだ。でも、何でカリグラ兄さんは、そんなにドルシッラの本音が気になるんだろ？何かあったのかな？

「うん？」

空を見上げると、カエサル神殿方面がやけに明るかった。最初はまだ、夕陽が残っているのかと思ったが、どうも違う。おかしい。

「おい！アグリッピナ！」

「ドルスス兄さん?!」

「大変だ！火事だ！」

「ええ?!火事?!」

「どうやらウエスタの神殿付近からみたいだ！」

「あああ！ジュリア！」

今日はジュリアがウエスタの巫女達と会っている日だ！私はすぐさまドムスの中にドルスス兄さんと一緒に入り、外行きの服に着替えて二人で火事の現場へ向かおうとした。だが、ちょうど門からドムスに入ってきたのは、なんとお母様とネロお兄様だった。

「あんなたち、どこ行くの？」

「あ、お母様！」

「ドルスス、お前アグリッピナを連れて何処へ行くつもりなんだ？」

「火事の現場へだよ。」

ネロお兄様とお母様は顔を見合わせて、もう一度私達を見つめる。

「ダメだ。家にいるんだ。」

「え?!」

「ネロの言う通りよ、ドルスス、アグリッピナ。あんたたちはまだ、子供でしょ?下手したら怪我だけじゃ済まないわよ。」

「でも、ジュリアがまだいるかもしれないのお母様。」

すると、お母様はピンと眉毛を片方上げる。

「ジュリアですって?あのセイヤヌスの長女でしょ?」

「はい。」

「放っておきなさい。」

私はお母様の言葉に耳を疑った。

「ど、どうしてですか?!」

「貴女も知っているでしょ?セイヤヌスはクラウディウス氏族皇族派勢力の腹心なのよ。」

「そんな事知ってます!でも、ジュリアは私の大切な友達なのです。」

「

「アグリッピナ!あんたは自分が何を言っているのか分かっているの?敵に手を差し伸べているのよ!」

私は大母后リウイア様の言葉を思い出した。敵であろうとジュリアは私の大切な友達。

「ジュリアは私にとって特別な友達なんです!友達を見捨てると言うのですか?!お母様こそ、ご自分が何を仰っているのか分かっているんですか!?!」

私はお母様を理不尽だと思った。だから絶対に目をそらさなかった。

でもお母様は目を私から一瞬だけ反らした。私は間違っていない！
しかし、怒ったのはお母様ではなく、ネロお兄様の方。

「アグリッピナ！お母様になんて反抗的な態度なんだ！謝れ！」

初めてネロお兄様から怒鳴られた。でも、私は理不尽な怒りには決して屈しない。それは大母后リウイア様の教えだったから。

「ネロお兄様！今お母様に謝る事と、友達を救う事！どっちが今は必要な事ですか?!」

「アグリッピナ！」

ネロお兄様は私の頬を叩こうと手を上げたが、目の前で庇ったのはドルススお兄様だった。

「ネロお兄さん、やめなよ！」

「うっぐぐ…ドルスス！腕を離せて！」

「兄さんがアグリッピナに手を上げないと約束するなら、僕は離すよ。」

「ドルスス！」

「母さん、兄さん。僕らはジュリアを助けに行くよ。アグリッピナの大切な友達は僕の大切な友達でもあるんだからね。」

私達はお母様達を振り切って火事の現場へと向かった。そしてこの時一つだけハッキリした事がある。私やドルススお兄様は、お母様やネロお兄様の考えとは違う場所にいる事を…。これが後々の運命を大きく左右する事になっていく。

続く

第七章「狂母」第三百三十話

「ドルスス様、アグリッピナ様。私共がお供しましょう！」
「セリウス！クツルス！」

大母后リウイア様からアントニア様に派兵されている二人が、私達の護衛をしてくれる事になった。

「既に火事の現場へは、アントニア様も向かわれています。こちらです、ドルスス様。」

「ありがとう、クツルス。」

「セリウス、アントニア様はいつから？」

「はい、アグリッピナ様。火が上がった時から直ぐに駆け付けました。きっと、たとえ政敵の長女であっても、他人の子を預かる身としては、その責任は重いでしょう。」

だがクツルスは、さらに意味深い事を口にした。

「いや、むしろ、政敵だからこそな、セリウス…。」

「だな？クツルス。」

彼らはとても冷静だった。

確かに二人はお父様の親友だけれども、政治の局面を感情的な判断だけで動いたりはしていなかった。そういった部分は、ドルスス兄さんが徐々に学んでいくところだったのかもしれない。火事の現場は、カエサル神殿そばのレギア・ドムスからだった。

「これは酷い！」

「スゴイ炎だ！」

レギアとは王政ローマ時期の第二代目ローマ王、ヌマ・ポンピリウスによつて建築された当時の王宮。現在は大神官の公邸となり、ウエスタ神殿のすぐ横にある。火の粉は今にもウエスタの神殿と礼拝堂へと掛かりそうだった。

「ジュリアア！」

「ジュリアアさん！」

「ジュリアア！何処にいるの?!」

野次馬も多く、既にごった返しになってる為、どんなに大声で探してもかき消されてしまう。

「ドルスス兄さん、私はもっと近くまでいってみる。」

「おい！アグリッピナ！危ないって！」

私はドルスス兄さんの声を振り切つて、更に野次馬の足元を四つん這いで潜り、何度もジュリアの名前を叫んだ。すると、火事の現場から、大きな声で指示を出す女性の声が聞こえてきた。

「よいですか！決してウエスタの神殿へ火を近づけてはなりません！あなた達はローマ国家における勇敢な兵士なのです！何があつても食い止めるのです！」

大母后リウイア様だ！

消化活動をする兵士や民間人を、必死に自ら先陣を切つて励ましている。私は、その並ならぬ気迫に舌を巻いた。野次馬の話によると、誰よりも先に現場へ到着し、消化活動の指揮を取られていたらしい。

”ウエスタの後は頼んだわよ、リウイア。”

” ええ、オキア様。”

そうだ…。

確かウエスタのオキア神官長が引退される時、大母后リウイア様へウエスタの巫女達を守るように約束されていたっけ。

「あなた達！そこではうつと突っ立ってないで手伝いなさい！」

「は、はい！」

「はい！」

「うん？」

つい癖で手を挙げて返事をしてしまった。よく見ると、私と同じように手を挙げてるジュリアが左隣にいた。

「ジュリア！」

「アグリツピナ様?!」

私は堪らず駆け寄ってジュリアを抱き締めた。ジュリアも喜んでジャンプしている。

「アグリツピナ様?! どうしてここに？」

「火事があったから、心配してドルスス兄さんと駆け付けてきたの！」

「わーん、ありがとうございますー！グスン…嬉しくて涙が！」

私もほんのり涙が滲んだ。

それでも虚勢を張って、ジュリアの背中をポンポンと軽く叩き、滑らかなおかつぱの髪を撫でながら落ち着かせた。

「ジュリアとの喜びの対面は、十分に満喫したかしら？アグリツピ

ナ。」

大母后リウイア様は微笑んでらした。そしてこっちへいつらっしやいと手招きされた。

「はい！」

私はジュリアと手を繋いで、大母后リウイア様の所へ駆け寄った。リウイア様はわざわざしゃがんで、私達二人をヒシッと抱き締めてくれる。そして、すかさず緊張感のある声で私達に協力を求めてきた。

「ジュリア、貴女は編み物が得意だったわよね？」

「は、はい。」

「そこに牛腸製のホースがあるのだけれど、所々が切れて水がこぼれてしまっているの。すぐに編んでくれるかしら？」

「はい！リウイア様！」

「アグリッピナ。貴女は木登りが得意だったわよね？」

「は、はい！」

「あたしの旦那アウグストウスの神殿下にある消防隊第六分団の宿舎から、消防隊の増員を要請しているのだけれど、彼らがまだ全然やってこないの。ひょっとしたら野次馬に阻まれて来れないのかもしれない。」

「...。」

「そこで、木登りが得意な貴女だったら、神殿のポルティコの上に登って彼らを誘導できるはず。危険だけど、やってくれないかしら？」

「はい！お任せください、リウイア様！」

「ありがとう、ジュリア、アグリッピナ。」

するとリウイア様は立ち上がり、燃え続ける炎を目の前にし、私達の肩に手を添えて決意を口にされた。

「いい？二人とも。火床の女神ウエスタが与えし聖なる炎は、ローマにとつて『最後の良心』。その絶やしてはならない炎を、ローマ市民の命を奪う炎『最悪の邪心』へと変えさせるわけにいきません！なんとしてでも、みんなでウエスタの神殿を守るのです！」

「はい！」

「はい！」

悪魔のような雄叫びを上げる炎を見ながら、私とジュリアは大母后リウイア様の指示の元、生まれて初めての消化活動を経験する事になった。

続く

第七章「狂母」第三百一十一話

「アグリッピナ?!」

「ドルススお兄様!」

「お前、そんな所に登って何してるんだよ?!」

「消防隊員がどうやら野次馬のせいで現場まで辿り着けないようなんです!だからリウイア様からポルティコを通じて呼びに行くよう言われたのです!」

「本当か?!分かった!僕も手伝うよ!」

「私もだ!クツルスは野次馬を出るだけ散らばせてくれ!」

「セリウス、分かった!」

私は途中で合流したドルスス兄さんとセリウスで、二手に分かれて第六分団の消防隊員を誘導した。

「こっちへ!」

「あの先の、カエサル神殿横ですか?」

「そうです!」

日頃の鬱憤を晴らすかの様に、私はポルティコの上を何度も飛び跳ねて、駆けずり回っていった。途中で奴隷のパッラスとフェリックスも参加して、梯子を掛けて迂回路を作ったりもした。

「こっちの梯子から登れるぞ!」

「注水台車を下から通すんだ!」

「牛腸製のホースはまだか?!」

「こっちです!」

クツルスはリウイア様の指示に従って、群がっていた野次馬全員を

消化活動への参加を呼びかける。あまりの名演説だった事に、人々は父ゲルマニクスの面影を見たのか、積極的に参加するものが増えていく。

「アグリッピナ！こっちで一緒に手伝おう！」

「はい！お兄様！」

「パッラス、そのオケでアクア様を持ってきてくれ！」

「はい！フェリックス！水だ！とにかく水をみんなで運ぶぞ！」

「うん！」

戻った私達も一緒に、ローマ水道橋の様な陣を組んで、火災現場までアクア・リレーで水を送ったりした。けれど、炎はレギア・ドムスの屋根をついに壊し始め、屋根の瓦が焼け焦げて雪のように降り注いでくる。そのススで近くにいた人は真黒になっていった。

「このままではダメだ！クッルス、レギアの壁を壊せ！」

「セリウス、分かった！」

その間も勇敢だったのはクッルスだった。大きな体を武器に、木の大きなハンマーを片手に持って、全身に水を被り、隣のウエスタの神殿へ火が移らないように、勢いよく反対側の壁を叩き壊していった。クッルスの動作と合わせるかの様に、私達も掛け声を合わせながら応援し、その間に何度も何度もアクア・リレーで水を送っていた。自然とそれが一つのテンポやリズムへとなっていた。

「いいわよ！だいぶ火の手は弱まってきたわ！ウエスタの礼拝堂後からホースを辿らせて、注水台車から水を組み上げなさい！」

「礼拝堂に登っていいのでしょうか？」

「何をバカな事を言っているの？当たり前でしょう？！」

「しかし…。」

消防隊の殆どは解放奴隷だった。その為ローマの信仰に対し、後で自分達が穢したと訴えられる事に躊躇する消防隊員も少なくはない。私は居ても立ってもいられず屋根に登り、後ろ手からホースを持ってくるよう指示した。

「こっちから持ってきてください！」

「わ、分かりました！」

「アグリッピナ！」

「リウイア様、私なら礼拝堂の上に登っても大丈夫ですよね？」

「ええ！アグリッピナ、決してウエスタ神殿には水がかからない様に気をつけるのよ！『最後の良心』を絶やしてはダメよ！」

「はい！」

「兄さん！こっちのホース手伝ってください！」

「分かった！待ってる！」

セリウスとパッラスチームはカエサル神殿から注水を開始し、私達はウエスタの神殿と礼拝堂を経由して、挟み撃ちで火の手に水を浴びせた。すると、驚くほど鎮火して行き、辺りが段々と頼りない紫煙だらけになっていく。野次馬達全員によるアクア・リレーも大詰めに迎え、火の手が消える音が聞こえ始めてきた。

「鎮火したぞ！！！」

「やったー！！！」

クツルスの太い右腕に掲げられた木のハンマーに感化され、関わった全員が歓喜の声を上げて喜んでいる。私もドルスス兄さんと抱き合ってはしゃいだ。リウイア様はようやくホツとして、神殿の階段に腰掛けてる。私は兄さんと一緒に礼拝堂の屋根から降りて、リウイア様の元へ駆け寄った。

「ありがとう、アグリッピナ。」

「大母后様…。」

ご自慢の髪は乱れ、全身ススと水でビショビショだったけど、リウイア様の満面の笑みはとても美しかった。ご自分のストラを軽く手ぬぐい程度に引き裂くと、しゃがんで私のススだらけの顔を拭いてくれた。

「ジュリアー?!」

「アントニア様〜!ここです。」

「ああ、ジュリア…。良かった!」

アントニア様は、しっかりとしゃがんでジュリアを抱き締める。私も大母后リウイア様も、微笑みながら眺めていると、アントニア様はようやくくっちに気が付いた。

「まあ〜?!リウイアお義母さん?!アグリッピナまで!」

「アントニア、あんた一体今まで何処にいたのよ?」

「ずっと、ジュリアを探していました。」

「ジュリアは一生懸命手伝ってくれたのよ、貴女も自分の事ばかりでなく、少しは見習いなさい。」

「はい…。」

大母后リウイア様はこういう人だ。

本当は私達はリウイア様に言われて手伝っただけなのに、その事には触れずに、まるで自発的に協力したかのように仰って、年下から学ぶように催促する。これが『国家の母』として責務を常に感じているお姿だ。私はリウイア様から両肩に手を添えられて、消化活動に携わった全ての人へ感謝の意を述べられた。

「皆さん、今回は本当に迅速で協力的な消化活動により、甚大な災害になる事から無事に回避が出来た事に感謝します。お陰様でウエスタの神殿も礼拝堂も無事ですし、『最後の良心』である火床の女神ウエスタが与えし聖なる炎を消さずに済みました。これは本当に皆さんの協力あつての事です。」

大母后リウイア様は私の頭を撫でながら、さらに話を続ける。

「さらに、こんな小さな女の子からも、私達はローマに住む者としての勇気を教わりました。時として、災害の時には神に祈る事も不可欠でしょうが、自分達の身の回りのできるはずの小さな勇気が、これ程多くの人達の心を動かし、そして私達を現実的に対処できる知恵へと導いてくれるはずです。」

多くの人達はリウイア様の語る言葉に、耳を傾けざるを得なかった。

「この火災までの私達は、ひよつとしたら自分たちだけの事を考えて、堂々と聖道であるヴィラ・サクラを歩いていたかもしれません。いや、堂々と憧れを抱いた神君カエサルを自分にダブらせていただけかもしれません。ですが、今夜、私達は災害においても、見知らぬ者同士が謙虚に協力し合って助け合う事が出来ました。この美德を決して忘れないようにしましょう。本当にありがとう！」

私はすぐさまリウイア様の為に拍手をすると、多くの人々が我先に拍手喝采をした。奇跡的に一人の死傷者も出す事なく、そしてウエスタの神殿も守る事が出来たのだから、みんな誇らしげに思ったのかもしれない。この喝采はひよつとしたら今まで陰鬱で疑心暗鬼に陥りやすかったローマ市民の自分達へのものだったのかもしれない。

「アグリッピナ。私達のローマは、私達ローマ市民の手で守るのです。」

「はい。」

それから、数日後。

突如として大母后リウイア様のお姿は、公然に出る事が全くと言っていい程なくなってしまった。あれ程迅速な消化活動を指揮されたのにも関わらず、テイベリウス皇帝及びその側近からは、まるで火の粉を消し去った様に、あの夜のご活躍については触れられなかった。一説によれば、この一件以来、皇帝派の氏族と母后派の氏族での派閥争いが勃発し、敢えてリウイア様は沈黙を守られているようだった。

「アグリッピナ…。」

「ドルススお兄様。」

「大丈夫だよ、きっとまたリウイア様は、あの時の様に元気なお姿を見せてくれるさ。」

「本当に？」

「ああ！」

けれど、兄ドルススの言葉が現実になる事はなく、再び私が大母后リウイア様にお会い出来るのは、今から八年後の母ウィプサニアが追放された年、つまり、リウイア様が亡くなる前年であった。

続く

第八章「暗雲」 第三百三十二話

ウエスタ神殿横のレギア・ドムスで起きた火災から二ヶ月後、今度は神君カエサルが暗殺されたポンペイウス劇場から火の手が上がった。だが、その鎮火に命がけに取り組んだ男こそ親衛隊長のセイヤヌス。この事で皇帝ティベリウスの更なる信頼を強固のものにする。

「恐れながら皇帝陛下…。今までは大隊単位でローマ市内に三ヶ所、郊外に六ヶ所と、親衛隊は分かれて駐屯しておりました。しかし、それでは今回の様な火災や、前回の火災時の時にも、迅速な活動を行う障壁となってしまう。ここは合理的に一ヶ所に集中させてみては如何でしょうか？」

「ふむ…。」

「その為には、まず親衛隊兵舎カストラ・プラエトリアをローマ市の北東に建設する事が急務かと。」

「なるほど。元老院の承認後、すぐに行動に起こしなさい。」

「承知いたしました。」

これは同時に、セイヤヌス自身の掌握していた親衛隊の勢力と威信を高める事を象徴していた。そして、ますます権力争いは複雑かつ異様な形相を見せ始める。クラウディウス叔父様が残した記録書を元に、簡単に当時のローマ皇族における派閥をまとめてみる事にした。

先ずは皇帝ティベリウスを中心とした「クラウディウス氏族皇帝支持派皇族」。その中には名目上実子のドルスツス叔父様はもちろん、セイヤヌスも腹心として入っている。

次は大母后リウイア様を中心とした「クラウディウス氏族大母后支持派皇族」ここには名目上アントニア様も入っている。どうやらレギアの消化活動を率先して指揮した事が、皇帝支持派との反目という結果を生み出してしまったらしい。

そして最後に、母ウイプサニアを中心とした「ユリウス氏族共和制支持派貴族」。義理の母である立場上アントニア様も協力され、勿論、ドルスツス叔父様も考えではこちらの方になっている。しかし、お母様には決して共和制復興の意図は無く、真のユリウス氏族への帝位奪還が目的。

共和制復興支持派としては、皇帝や母后支持派に対抗すべき勢力として、お母様に集ったローマ市民からの同情や父ゲルマニクス神話にあやかっており、互いの利害関係が一致してる事で、お母様と元老院貴族とで結託されていた。

さて、この頃のクラウディウス叔父様は、頻繁にドルスツス叔父様とお会いされていた。セイヤヌスを中心とした貴族出身以外の拡大する勢力の牽制について、毎晩遅くまで考察されていたようだった。おかげで、クラウディウス叔父様も後に偶発的に皇帝へ帝位された時に、ドルスツス叔父様と過ごされた貴重な時間は役に立ったと語ってらした。

「公共事業費の一部見直し？」

「はい、クラウディウスさん。元老院議員と父からは、膨張している公共事業費の見直しを再度する様に言われたのです。」

「確かに最近の公共事業は、以前に比べて長期に渡るものが多いですね。」

「ええ。彼らがのんびりやっているのであれば、特に問題はないのでしょうけど、問題なのは一人当たりの人件費のコストが、驚くほ

ど高騰している事なんです。見てください、この資料を。」

クラウドイウスは、ドルスツスの持ち込んだ資料を眺めている。特に前年に比べて、作業員の増加は横ばいなものにも関わらず、一人当たりの人件費のコストが二倍以上に膨れ上がっていた。

「これは余りにもずさんな数値ですが、請負業者がこの様な記録を、記録の改ざんなどがされず、正々堂々と報告する方がおかしいですな。」

「いえ、これはあくまでも我々が一つの請負業者を独自に調査した結果なんです。実際の報告では人員は水増しされて報告されていました。さらに、この下には請負業者の存在も否定できないようです。」

「なるほど。下請け業者を増加させて、作業員のコストを下げつつ、納期の延長。これは完全に公共事業費が連中に途中で喰われていきますね。」

「まさに仰る通りなんです、クラウドイウスさん。」

クラウドイウスは立ち上がり、顎に手を置いて何度か擦った後に疑問をドルスツスにぶつけた。

「しかし…。これはドルスツス様ご自身が、馴れ合いの生じている発注元の国家公務員と、受注する側の私営会社であるソテイエタスの両者ともを告訴されれば良い事なのでは？」

「勿論です。引き続き不正を摘発すべく調査を続けますが、今日、ここへやって来てのは、実はここの下請け業者の詳細を、歴史研究家としての観点から調査して欲しいからです。」

「歴史研究家としての…観点から？」

「ええ…。クラウドイウスさんはこの紋章に見覚えが有りますか？」

それは掌くらいの大きさのパピルスに、ハゲワシ、蛇、驢馬、そして何かの翼が描かれた珍しい円紋章であった。下にはキメラと書かれている。

「キメラ…。うーん、見たこと有りませんね。」

「しかし、あのギリシャ神話に出てくるキマエラ、つまりキメラとは違うのです。ほら、ここ最後のRではなくLになっているでしょう。」

「うむ、本当ですね。」

「ええ…。ですから、クラウドイウスさんに見てもらえれば何か分かるかと…。」

「うん？ちよつと待ってください、ドルスツス様。これをそのまま読むのではなく…並び替えをすれば。」

クラウドイウスは、蠟板とスタイラスを取り出した。

「なんですか？それ。」

「これは蠟板と言って、薄い木の板にワックスを塗った筆記用具です。ここにスタイラスで刻む様に文字を書いても、何度も使えるわけです。」

「へえーすごいですね。」

「さて、並び替えてみると…。」

「どうしました？」

「Lauchme…。エトルリア語ですな。我々の語ではLucumoo…。」

「ルクモ。どういった意味なんですか？」

「エトルリアの政治的な地位のある人物を指す言葉です。王政ローマの第五代王タルクイニウス・プリスクスが『ルクモ』と呼ばれていました。」

「では、この円紋章と古典王プリスクスが何か関係あるかと？」

「いいえ、全く関係ありません。既にプリスクス王はエトルリアからローマへ移住されて王になっておりました。」

「やはり、クラウディウスさんに相談してよかった。」

「え？」

「この下請け業者がエトルリア系列である証拠さえ掴めれば、私達は六割勝ったようなものです。」

「まさか…？」

「ええ、そのまさかです。後はこの下請けソティエタスのバックに、セイヤヌスの尻尾さえ掴めれば良いのです。」

だが、これをきっかけにドルスツスは、大いなるセイヤヌスの政治的な陰謀に巻き込まれてしまうのであった。

続く

第八章「暗雲」第百三十二話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルルス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>

アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア(5 - 43年)年の差 + 10歳年上>

アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年-20年）年の差+59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

<教祖キメラ（不明）>

密教「トウクルカ」を束ねる教祖。ドルスツスはセイヤヌスと信じている。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年-62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年-69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

<ティベリ・ゲメッルス（19年-38年）年の差-4歳年下>

俗称ティベリウス・ゲメツルス。ティベリウス帝の遺言より兄カリグラと共同統治を指示されるドルスツスの双子の息子の一人。

<ゲルマ・ゲメツルス（19年 - 23年）年の差 - 4歳年下>
俗称ゲルマニクス・ゲメツルス。ドルスツスの双子の息子の一人。

<ガイウス・アシニウス・ガッルス（紀元前41年 - 33年）年の差 + 56歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの長男ドルスツスの母の再婚相手であり、母ウイプサニアの支援者

<マルクス・コツケイウス・ネルヴァ（紀元前58年 - 29年）年の差 + 72歳年上>

後の五賢帝ネルヴァの祖父で、母ウイプサニアの支援者

第八章「暗雲」 第三百三十三話

キメラ。

ラテン語ではキマエラ。

テュポーンとエキドナの娘。ライオンの頭と山羊の胴体、蛇の尻尾を持ち、口からは火炎を吐くと言われている「牡山羊」である。

ドルスツスは、不正に膨れ上がっていた公共事業費の調査をする中で、「キメラ」の名を冠に持つ材木及び資材調達の下請け業者を見つける。エトルリア歴史の研究者であるクラウドイウスに相談した結果、この社名はエトルリア語で巧妙に細工されたアナグラムであり、王政ローマ第五代王になったエトルリア人のタルクイニウス・プリスクスの愛称を指す「ルクモ」である事が判明。二人はローマ市内北東に居を構える下請け業者「キメラ」の調査に乗り出した。

「ここですね？クラウドイウスさん。」

「みたいですね、ドルスツス様。」

「辺りの治安があまり良くない場所だ。隠れ蓑としては好都合なんでしょうか。」

「確かに……。」

北東テイベリス河付近に位置するこの一帯は、諸外国との貿易に力を入れていた如何わしい商社が多い。道路整備もままならず、酷い所ではまだ沼地に近い状態の所もあった。

「河からの氾濫が起きた時には、なかなか乾きにくい場所なのでしよう。陽射しが悪すぎます。」

「あれ……ですかね？ドルスツス様。」

「ええ、クラウドイウスさん。あのハゲワシ、蛇、驢馬と翼が描か

れた円紋章に間違いありません。」

ドルスツスは十分に警戒しながら、周囲を見渡し、クラウディウスも脚を引きずりながらであるが、せめて足手まといにならぬ様注意した。

「私が先に訪問客の振りをして中に入ります。」

「いや、ドルスツス様では顔が割れてしましましょう。ここは一つ、足に障害を持つ私に任せてもらえませんか？」

「クラウディウスさん…。」

「大丈夫、私は勇猛果敢なローマ人ではありません。危なくなったら降参するか、すぐに助けを呼びますから。」

「あははは…。」

クラウディウスは神妙な面持ちで「キメラ」の扉をノックする。だが、中からは何も聞こえない。ドルスツスは念の為に短刀に手を伸ばすし、クラウディウスに再びノックする様に頷く。クラウディウスもドルスツスに言われ、再度ノックをする。だが、一向に誰の気配も無い。

「どうしましょう？ドルスツス様。」

「参りましたね。」

「扉を開けますね？」

「はい…。」

ドルスツスはさらに注意深く短刀を握りながら、クラウディウスの援護に回った。

「では…。」

クラウドイウスは、ソテイエタスの扉を開けた。だが、中は誰もいなく、暗闇と蜘蛛の巣が覆いかぶさり、床は外と同じくタイルさえも敷かれていない泥だらけの地面で、時折ネズミなどが這いずり回っている始末。

「クラウドイウスさん、誰もいないみたいですよ。全くの無人会社ですかね？」

「いや、そうでもないみたいですよ。」

クラウドイウスはしゃがんで、這いずり回っているネズミを見ている。ドルスツスは不思議そうにそれらをみているが、どうやらクラウドイウスが注目していたのは床の地面であった。

「これです。」

「足跡…ですか？」

「はい。それも、随分とたくさんの足跡が行き来しています。」

「うん？これはカリガの跡では？」

「この脇の部分は確かにカリガつぽいです。」

「うーん、するとこの会社は、下請け業者としての機能とは別に、何かの目的で使われている可能性があるという事でしょうか？」

「少なくとも材木やら資材調達というのは真っ赤な嘘でしょう。」

クラウドイウスは立ち上がって、再度辺りを見渡した。すると、入り口の上の壁に何やら文字が並べられている。しかしラテン語では全くの意味が通じない。

「またアナグラムでしょうか？」

「やってみましょう、これもひょっとしたらエトルリア語かもしれません。」

クラウディウスは蠟板とスタイラスを取り出して、何度も蠟に刻むようにして、文字の入れ替えを行っていく。すると、やはりエトルリア語に辿り着いた。

「我ら、一羽の鷲が主の帽子を持ち去り、その鷲が再び帽子を主に返す事を待つ。」

「?」。何かの格言でしょうか？」

「いいえ、これは有名なエピソードをモチーフにしているのでしょう。」

「エピソード？」

すると、部屋の奥から何かの物音が聞こえた。二人は直感でここにはいない方が良い事を悟り、静かに扉を閉めてその場を離れた。二人はティベリス河を右手に見ながら歩き、ドルスツスはクラウディウスの話を聞いている。

「これもまた、王政ローマ第五代王になったエトルリア人のタルクイニウス・プリスクスに繋がるエピソードです。」

「またもやプリスクス王ですか？」

「はい。王になる以前、一羽の鷲がプリスクスの帽子を奪ったのですが、すぐにその鷲は彼に帽子を返しました。それを見た鳥占いは良い兆候であるとプリスクスに助言し、その助言に導かれるかの如くエトルリアからローマへ移り住み、エトルリア人として初めてローマ王になったのです。」

「なるほど。これで、明らかにあの『キメラ』という下請け業者がエトルリアに関係がある事がはっきりしましたね。」

「確かに、確かにそうなんです。」

「何か引つかかるのですか？クラウディウスさん。」

「はい。」

クラウディウスは河辺の緩やかな階段に腰掛けた。そしてドルスツスも、そばに手すりに腰掛けた。

「エトルリア人は今から108年前のユーリウス法に乗っ取って、ローマ市民権を取得してローマ人と同化したわけですが、何故に今更ながらエトルリア人初の王であるタルクイニウス・プリスクスのモチーフを、しかもあんなアナグラムを使って隠しているのでしょうか？」

「確かに、ラテン語でそのまま書いても問題なさそうな事ですしね。」

すると、二人の頭上に一羽の鷲が気持ち良さそうに空を仰いでいる。

「一羽の鷲…。」

「ですね、クラウディウス…。」

「一羽の鷲…。ドルスツス様、私はどうもこの一連のエトルリア人に繋がる事象が、現代の我々ローマ人には知られてはいけない何かを隠しているように思えてならないんです。」

「分かりました…。引き続き、クラウディウスさんは歴史的観点から調査を続けてください。僕は真っ正面から不正を摘発し、その過程で、この『キメラ』という下請け業者のバツクを突き止めます。」

ドルスツスとクラウディウスは、さらなるエトルリアに関する謎を解くべく立ち上がった。

続く

第八章「暗雲」 第三百三十四話

ドルスツスは見事な手腕で順調に、国家公務員と事業会社による馴れ合いの不正を摘発していく。次々と事業費搾取の隠蔽工作が明るみになっていく中で、下請け業者「キメラ」に関わる関連業者の記録が抹消されている事が判明。影で糸を引く何者かの手に寄って、その実態が次々と有耶無耶にされていった。

クラウドイウスの歴史研究室とは別のインスラに、ちょっとした空き部屋を所有していた。ドルスツスと落ち合う為に、クラウドイウスはわざわざ、その空き部屋を開放した。

「ドルスツス様、日々不正に対する告発、お見事なまでの手腕です。」

「ありがとうございますクラウドイウスさん。しかし、実際にはあと一步の所で、いつもスルリと逃げられてしまいます。」

「『キメラ』に…ですか？」

「ええ…。」

ドルスツスは肩をすくめて現状を話した。

「告発側としては、相手には悟られないように、リストに他の下請け業者と共に載せてます。しかし、クラウドイウスさんと共に調べてきた情報源は一切公表していないのにも関わらず、一歩手前で関連業者の記録は抹消されており、着服していた発注元も受注者も、末端の下請け業者の話になると、現状を把握してないようです。」

「敵も手強いですな…。もし影で糸を引く何者かがいるとすれば、かなり物事を慎重に進めている人物かと。」

「そうなると浮かび上がってくる人物は…。」

「トカゲのセイヤヌス、ただ一人ですかね？」

「ええ…トカゲだけに尻尾切りも早いですけどね。」

「なるほど。」

ドルスツスは椅子に腰掛けて、クラウディウスの調査結果を確認したがっている。

「所で、クラウディウスさんの方は如何ですか？その後、何か分かりましたか？」

「ひよつとしたらドルスツス様、今回の事象は、消えることのない憎しみの連鎖がもたらしたものではないかと？」

「憎しみの連鎖？」

「ええ…。これを見てください。」

クラウディウスは、エトルリアに関する独自で調査した結果を几帳面にパピルスへ残していた。それらの巻物を順々にドルスツスへ見せていく。

「『タルクイニアの乱』…？」

「歴史の闇に隠された一つです。以前にお話ししましたが、現在から108年前に執行されたユーリウス法によるローマ人同化政策の中で、タルクイニウア出身エトルリア人のある一族だけが反発をしました。」

「反発？そんな事があったのですか？」

「ええ、とても小規模でしたけどね。」

「ちよつと待つてください、タルクイニア出身のエトルリア人で有名な人物といえば、ただ一人…。」

「そう、ローマ王政期五代目王のタルクイニウス・プリスクスです。そしてその反発した一族は、ローマ人同化政策の代替えとして、集団的自衛権の権利を有する事を要求し、それが却下されるとローマ

人へ襲つていったというのです。」

「それが…憎しみの連鎖？」

「ご存知ですか？ドルスツス様。五代目王プリスクスは、サビニ系のローマ人から斧で暗殺された事を。」

「暗殺されたのは知っていたが、サビニ系のローマ人とは知らなかった。」

「それだけではありません。エトルリア系列のローマ王は後の六代目トゥッリウス、七代目スペルプスと続きますが、ついには共和政となったローマから追放されています。」

「まさか?!」

「そのまさかです。共和政ローマで名門と駆け上ったサビニ系列のローマ人氏族といえば？」

「我が一族の…クラウディウス氏族!」

ドルスツスは落雷に撃たれたように、驚愕の事実困惑していた。

「『タルクイニアの乱』での、彼らの結束力はユダヤ人もしのぐ強さで、その集団行動は同じエトルリア人同士の中でも、一種の奇妙さを帯びていたそうです。結局は、その一族の殆どが逮捕されましたがね…。」

「では下請け業者の『キメラ』は、そのタルクイニア出身のエトルリア人一族であるか？」

すると、クラウディウスは椅子より立ち上がって、「キメラ」の壁に書かれた言葉を引用する。

「我ら、一羽の鷲が主の帽子を持ち去り、その鷲が再び帽子を主に返す事を待つ」。つまり、「我ら」とは「タルクイニア出身のエトルリア人」。鷲」とはまさしく「ローマ国家」。そして帽子が「ローマの最高権威」を表し、その主こそ、「エトルリア」そのも

のだとしたら、どうですか？」

「なるほど…。つまりサビニ系ローマ人、すなわちクラウディウス氏族からのローマ国家の奪還。これは十分に国家反逆罪ですね。彼らはその意思をエトルリア語のアナグラムで隠したのも頷けますね。」

「そして、この円紋章にこそ、歴史の闇に隠されたもう一つの謎が隠されていたのです。」

ドルスツスは「キメラ」に掲げられていた円紋章をまじまじと眺めた。

「ハゲワシ、蛇、驢馬に翼。これが何か？」

「スペルに違いはあれど、この円紋章にはキメラと書かれています。キメラを表すライオンの頭、山羊の胴体が描かれておりません。共通点は蛇だけでしょうか？」

「確かに。」

「しかし、調べていくうちに古代エトルリア神話に出てくるある者に辿り着きました。その者は、キメラを神として崇拜する側面もあったようです。」

「それは？」

「鼻はハゲワシの嘴、髪の毛は蛇、驢馬の耳を持ち、時折、両腕に蛇を巻き付けた姿で表され、そして大きな翼を背中に持つ魔神…。」

クラウディウスさらに熱っぽく巻物を広げ、その者の姿が描かれた箇所をドルスツスに見せる。

「その者こそ、エトルリアに伝わる地下世界の悪魔トウクルカです。」

続く

第八章「暗雲」第三百二十五話

トウクルカ T u c h u i c h a

エトルリアに伝わる地下世界の悪魔。

両腕に蛇を巻き付けた姿で表される。

鼻はハゲワシの嘴、髪の毛は蛇、驢馬の耳、そして翼を持つ魔神。

しかし、身体は人間と同じ作りになっており、男性衣服のトীগに似た物を着用している。

「トウクルカは、キメラの死の際に、その魂を土の中で葬り去った事により、誕生したとも言われています。すなわち、この説が正しいければ、キメラの死がなければ、トウクルカも誕生しなかったという事になります。」

「クラウディウスさん、しかし、この円紋章に刻まれている文字は、エトルリア語のアナグラムで描かれた『ルクモ』、エトルリアで政治的な地位のある人物、つまりプリスクス王の事を指すと言っていましたよね？」

「はい。」

「では、トウクルカは一体何の存在なのでしょうか？」

クラウディウスは笑みを少し浮かべながら、人差し指を突き出して答える。

「ドルスツス様、キメラがプリスクス王、地下世界の悪魔トウクルカが先ほど申し上げた、タルクイニア出身のエトルリア人のある一族を表していたらどうでしょうか？」

「?!」

「その一族はサビニ系列のローマ人の名門クラウディウス氏族から、ローマ国家と権威の奪還を目論んでいる。自分等の誇り高きエトル

リア人初のローマ王プリスクスを崇めながら、ユダヤ人並みの結束力を持っている。」

「ユダヤ人並の結束力?! といえは…?!」

「そうです!ここに歴史の闇に隠された最後の謎があります。つまり、キメラとはダミーの下請け業者であり、ローマ国家の奪還を目標む一部のエトルリア人が結束した、密教『トウクルカ』です。」

密教…。

クラウディウスがなぜ空き部屋を開放したのかが理解した。現在ローマ国家が把握している密教でも、その数は二桁を軽く超えている。だが、ローマ国家が密教に対して強制捜査に乗り出す事には実は消極的であった。現実的に言っても、余りにも膨大な費用と労力、更には追い込まれた密教の信者による危険な行為が考えられたからだ。

「しかし問題なのは、その目的がどうであれ、なぜ公共事業の下請け業者などに彼らが忍び込んだのでしょうか?」

「やはり、資金調達の為でしょうか?ドルスツス様。」

「いや、クラウディウスさん。それだけの為ならば、いくら末端とはいえ国家と関わりの近い公共事業に近づくにはリスクが大きすぎます。」

「確かにそうですね…。」

二人は暫く考えていた。

「もう一度、キメラに行ってみますか?クラウディウスさん。」

「カリガの足跡があったのも気になります。」

「公的に調査をすれば、彼らはきつと踏み込む前に逃げてしまうでしょう。そこで私の部隊に属する男達を連れていきます。彼らなら必ず我々の護衛にあたってくれます。」

「ありがたい。できる事ならサビニ系列のローマ兵である事を願い

たいですね。」

「フフフ、勿論です。」

ドルスツスはしっかりと頷いて、笑顔でクラウディウスに答えた。

「では、明日の明け方にでも…。」

「ええ、そうしましょう。」

翌朝。

ローマ市内北東に位置する「キメラ」へ、クラウディウスとドルスツス、そして彼の部下であるサビニ系ローマ兵を四人の計六人で訪れた。四人のローマ兵達は、近くの貧民街であるスラブの脇道を固め、クラウディウスとドルスツスは正面から再び入って行く事にした。

「やはり無人ですね。」

「ドルスツス様、これを！」

クラウディウスは、以前床に残されていた足跡が、人為的に消されていた事を発見する。

「敵も我々の存在に気が付いている。そう思っても、間違いはありませんか？クラウディウスさん。」

「ええ。しかし、円紋章やエトルリア語のアナグラムが未だに存在している所を見ると、密教が依然として行われている可能性は否定できませんね。」

「そういえば、以前に我々がここへ来た時に、向こうの奥の方で何かの物音が聞こえませんでしたか？」

「ええ、そうでしたねドルスツス様。」

「裏口は私の部下達が目を光らせていますので、何かあれば、すぐ

に駆けつけるでしょう。」

二人はゆっくりと奥の部屋へと進んでいく。床の地面は更に又メヌメとしている。目に前には一つの大きな棺と、横には二体の偶像が飾られていた。

「クラウディウスさん、これは!」

「右はキメラ、左はトウクルカ。間違いないですね。」

ドルスツスはまじまじと二体の偶像を眺めながら、棺を調べているクラウディウスの元へ近寄った。

「どうですか?」

「この棺にはトウクルカの円紋章が刻まれています。」

「クラウディウスさん、私は思うんですが、この間の物音は、この棺から発せられた物ではないでしょうか?」

「開けてみますか?ドルスツス様。」

「はい。」

ドルスツスはしっかりと短刀を握りしめ、地面を両足で踏ん張って構えている。クラウディウスはゆっくりと棺の蓋をずらし始めると、木材のきしむような音と共に中の様子が垣間見えてきた。

「じ、これは?!」

「階段?!」

なんと、棺でカモフラージュされた、地下へ続く階段であった。

続く

第八章「暗雲」第三百三十六話

密教「トウクルカ」。

クラウディウスとドルスツスの二人は、ついに公共事業の下請け業者キメラにて、地下へ続く謎の階段を発見する。

「クラウディウスさん、これから先は私一人で行きます。」

「何を仰っているんですか?! ドルスツス様! ここまで来たら一蓮托生ですよ。」

「いいえ、私一人で行かせてください。相手はどの位の数が居るのか検討もつきません。それにここら辺はポメリウム外で、彼らが我々と同じように武器を所持していると考えても間違いありません。そうなった時に、失礼な言い方になってしまいますが、クラウディウスさんをお守りできるかどうか分かりません。」

クラウディウスは、この時ばかりこそ、自分の障害である脚を呪った。

「しかし、ドルスツス様だって同じ事が言えますよ。彼らがもし、抵抗をしてきたらどうするのですか?」

「その時の為にも、クラウディウスさんには僕の兵士達を呼んで欲しいのです。」

爽やかな笑顔で答えるドルスツス。

「分かりました…。ドルスツス様の覚悟の意、十分に伝わりました。しかし、くれぐれも無理をなさらないように、お願い致します。」

「はい!」

その返事は、より一層ドルスツスの正義感を醸し出している。彼はゆっくりと脚を棺の中へいれて、ジメジメした階段を一步一步踏み締めて、地下へ続く道のりを辿っていく。

「お気を付けて。」

「クラウディウスさんも！」

妙な静けさと寒さがドルスツスを呪い殺す様に包み込む。沼地のような泥が、あたり一帯に湿った空気をもたらしている。木材の階段が軋むたびに、おどろおどろしい音が響いてくる。

「アーチか…。」

エトルリア人の技術であるアーチ型で全体のトンネルを作っている。しかし、一般的に知られたエトルリア人の誇る高度な技術とはかけ離れ、時折板と板の隙間から泥水が流れ込んでいる。近くのティベリス河があるからなのだろうか、彼方此方から泥水が滴り落ちる音が聞こえている。

「どう見ても、突貫工事並みだ。このままでは長く持たないだろう。」

するとその先からお香の匂いが立ち込めてきた。ようやくドルスツスは階段を下りて、閉まられた扉にたどり着く。扉にもやはり、トウクルカの円紋章にキメラの文字。更に扉の向こう側から、一定のリズムでゆっくりとドラブツカのドラムの音が聴こえ、そして大多数の人間による何かの聲が、滑らかなさざ波の音の様に聞こえてくる。

ゴクン…。

ドルスツスの喉元に、緊張感が流れ込んでいく。この扉を開いた先には一体、何の世界があるのだろうか？恐怖と興味が入り混じる中、彼はその扉を開けた。

「トウクルカの魂を共有する我が亡者達よ！サビニ系ローマ人へ死を！」

一人の男の叫びに、大多数の信者達が歓呼する。

「サビニ系ローマ人へ死を！」

そして再び一人の男が叫ぶ。

「トウクルカの魂を共有する我が亡者達よ！我らエトルリア人の誇り高きルクモ、プリスクス王の復興を願うべし！」

信者の異常な歓呼が響き渡る。

「プリスクス王の復興を願うべし！」

四本の円柱に囲まれ、後ろには大きなトウクルカとキメラの偶像が置かれ、円紋章の下にはプリスクス王の石像が置かれている。その後ろには紅蓮の炎が揺らめき渡り、鼻はハゲワシの嘴、髪の毛は蛇、驢馬の耳を持ったトウクルカの仮面を被った教祖のような一人の男が、二つの蛇に絡まれたような杖の先を地面に叩きつけ、演壇の上から信者に呼びかけている。

「トウクルカの魂を共有する我が亡者達よ！ローマを我々エトルリア人の元へ！」

「ローマを我々エトルリア人の元へ！」

ドルスツスの目に映った光景は、密教トウクルカの信者達によって行われている、国家叛逆罪の信仰と忠誠であった。ドルスツスは円柱に隠れながら、注意深く、その様子を伺っている。教祖は再び杖の先を地面に叩きつけ、更に叫ぼうとした。

「誰だ？」

その声に信者達は一斉にドルスツスの隠れていた円柱へ振り向く。ドルスツスは仕方なく、その姿を堂々と表した。

「我が名は、ドルスツス・ユリウス・カエサル。現皇帝ティベリウスは、我が実の父である。貴様らの行っている行為は、明らかに国家叛逆罪である。」

信者達はドルスツスの言葉に動揺し、水面の波紋の様に散らばっていく。だが、トウクルカの仮面を被った教祖は信者達に広がる動揺をなだめる。

「トウクルカの魂を共有する我が亡者達よ！鎮まれ！エトルリア人の誇り高きプリスクス王を忘れるでない！」

だが、ドルスツスは短刀をしっかりと握り締めたまま叫び返した。

「貴様こそ！108年前に行われたユリウス法案による、ローマ人への同化政策を忘れてはおるまいな？！」

「何を？！」

「同化政策により、市民集会における選挙権及び被選挙権、婚姻権所有権、裁判権とその控訴権！ローマ軍団兵となる権利！エトルリアがローマの属州ではなく、ローマの一部になった事で、自動的に

ローマ人として人頭税や属州民税は課されない！つまり！ローマ法の保護下に入る事で、全てのエトルリア人はローマ人として生活の保証がされたはずだ！」

「ウグググ…。」

「しかし、ここで行われている信仰は、明らかにローマ法の保護下にある人間にとって国家反逆行為である！貴様ら全員が処罰されることを覚悟しろ！！」

教祖は杖の先をつま先で二度ほど叩くと、鞘が見事にすり外れて、中からは鋭い刃が現れた。

「トウクルカの魂を共有する我が亡者達よ！奴こそが我らエトルリア人の誇り高きプリスクス王を抹殺した、サビニ人系列のクラウデイウス氏族の末裔である！！」

すると信者達はエジプトの短刀を取り出した。

「トウクルカの魂を共有する我が亡者達よ！恐るでない！奴を殺せ！！」

信者達はエジプトの短刀を一齐にドルスツスへ向ける。同時に、教祖は思いつきドリルスツス目掛けて杖を槍の様に投げつけた。

続く

第八章「暗雲」第三百二十七話

だが！

ドルスツスは見抜いていた。矢のように放たれた杖を避け、円柱に突き刺さった杖をすぐさま奪い、見事な槍さばきで、お飾り軍人では無い実力を見せる。

「束になってかかってくるが良い！貴様ら全員を、国家ローマの法の下において裁きを下してやる！」

教祖は慄き、自分の信者へドルスツスへ再度襲いかかるよう指示をした。だが、ドルスツスである。一人一人の持つ短刀を見事に弾き飛ばし、戦地で重ねてきた経験をあてつけた。

「グッ！！」

「何人たりとも、私を邪魔する者は、その命に限りがある事を知ることになるぞ！」

教祖はトウクルカの仮面を被ったまま逃げ出そうとした。だが、一瞬の間も見逃さないドルスツスは、キメラの偶像へ己の短刀を投げつけ、教祖への歯止めを効かせた。

「敵前逃亡か？」隊長”さんよ。戦で背を向けて逃げれば死を意味する事を、まさか皇帝へのゴマすりですべて忘れてしまったのではなからうな？」

ドルスツスの発した言葉に、信者達には更なる動揺が広がる。そう、ドルスツスには、この教祖が何者かであるかおおよそ検討がついていたのだ。

「ククク！ドルスツスよ。この状況下において、己の立場が一枚上手であると言いたい所なのだろうが、実際には違つぞ！」

「果たしてそうかな？”隊長”さん。」

すると、ドルスツスの引き連れてきた部下達四人がようやく到着した。彼らは短刀を出したまま、各円柱に陣をとり、密教トウクルカ全員を取り囲んだ。

「あがきは無用だ！」

「おのれ！！！」

だが、最後の手段に出たのは教祖の方であった。カメラの偶像の足を叩き壊すと、凄まじい騒音と共にあたり一帯のアーチが崩れ落ちていく。

「ドルスツス様！」

「クソ！奴を！教祖を絶対に逃すな！」

二度、三度、四度、そして何度も崩れ落ちたアーチから、勢いよく泥水が吹き出してくる。教祖がカメラの偶像を登りいく中で、部屋全体は徐々に泥水が貯まり始めていく。逃げ惑う信者の波に襲われたドルスツスは、教祖を捉える事ができないでいるが、その隙にまんまと教祖は天井にある隠し扉まで辿り着いた。

「ドルスツス様！このままでは危険です！」

「一先ず地上へ避難しましょう！」

「ダメだ！奴を捕らえるんだ！」

しかし、教祖はトウクルカの仮面を被つたまま高笑いしていた。眼

下には溢れる泥水で右往左往している信者達と、こちらにたどり着けずにいら立っているドルスツス。教祖は再び高笑いして言い放つ。

「ドルスツスよ！我が密教トウクルカへの侮辱は決して許されぬ行為！貴様はトウクルカ地下の悪魔の呪いによって、いずれその命を奪われるだろう！」

「待て！セイヤヌス！」

だが教祖は高笑いしたまま、その隠し扉から逃げ出してしまった。暫くすると、被っていたトウクルカの仮面だけが投げ捨てられ、氾濫していく泥水の水面に浮かんでにやけている。

「クソ！」

「ドルスツス様！」

さすがにこれ以上は危険である事を感じたドルスツスは、自分達の部下達に連れられてその場を後にした。紅蓮の炎までもが崩れ落ちたアーチによって消され、水位もドンドン上昇していく。足速にドルスツス達は階段を登るが、壁の至る所から泥水が吹き出しているため、なかなかさきへ進むことがままならない。足元からも水位の上がつてきた泥水がじわりじわり蛇のように迫り来る中で、ドルスツス達は間一髪地上へ辿り着いた。

「?!」

キメラのあたり一帯が大きな地響きをし始めると、棺に隠された階段から信者達が次々と逃げ出してくる。ドルスツス達を待っていたクラウディウスは、その荒波に押されながらも懸命にドルスツスの帰還を待っていた。

「ドルスツス様?!」

「あ!クラウディウスさん!早く!この場から離れて!」

ドルスツスの言葉を素直に聞き入れ、一目散にキメラを後にするクラウディウス。ドルスツス達も泥水にまみれながら逃げ出した。ついに下請け業者キメラの建物は大きな音を立てて崩れ落ち、あたり一帯から泥水が浸水していた。呆然とその様子を見ている信者達。

「彼らは全員取り押さえてくれ。」

「分かりました、ドルスツス様。」

ドルスツスの部下達は信者達を次々と取り押さえていく。教祖の裏切りにあった彼らには、もうすでに抵抗する意思は失いつつあった。泥だらけになったドルスツスは、すぐ近くの噴水で泥を流している。

「すぐ横のティベリス河が流れてきたのでしょう。」

「ええ。地下はそれこそ乱雑で適当な突貫工事に、無造作にアーチで抑えられた壁はほとんど泥まみれでした。首謀者はきつとこんな状態に備えていたのだと思います。」

「なるほど、いつ国家が踏み込んでも一気に証拠の隠ぺいができるよう、崩壊の作業までもしていたとは、用心深い首謀者のやりそうなパターンですね。」

「ですがクラウディウスさん、残念ながら首謀者を取り逃がしました…。」

「そうでしたか…。仕方ありませんよ、ドルスツス様の命があっただけでも感謝です。」

「しかしあの教祖がセイヤヌスである事は間違いないでしょう。その証拠さえあれば、法廷に引きずり出してやれるのに!」

「さすがのトカゲ。逃げ足だけは誰よりも早いのは確かですね。」

「ええ。」

静かに流れるティベリス河に、一羽の鷺が水面を這うように飛んでいる。

その横では、しくしくと泣き続ける泥まみれのエトルリア出身の信者達の姿があった。ひよつとしたら彼ら自身が、セイヤヌスの野望に利用されていた一番の被害者かもしれない。クラウディウスとドルスツスの胸に去来するものは、今回のこの事件が氷山の一角にすぎず、根深い復讐の連鎖を象徴するかのような悪魔トウクルカの姿であった。

続く

第八章「暗雲」第三百三十八話

一ヶ月後。

ドルスツスの見事な手腕により、公共事業における馴れ合い体質の改善はスムーズに行われ、事業自体もペースを上げて再開された。着服していた国家公務員と事業者は当然罰せられ、下請け業者も切り捨てられていった。

「お疲れ様でした、ドルスツス様。」

「いえいえ、ありがとうございます、クラウディウスさん。」

「これでようやくローマにも、正常な事業が行われる事でしょう。」

「確かにそうですね、ゴホツゴホ。」

ドルスツスはまるで喉を枯らしているような、何かが詰まったような咳をしていた。

「大丈夫…ですか？」

「あはは…大丈夫ですよ。しかし、ティベリス河は思ったよりも汚ない河です。あのキメラでは泥水を真面に被りましたからね、二三日健康を害しました。」

「それはそれは！」

「でも、最近はずちの家内が心配そうに看病をしてくれて、助かっていますよ。」

「リウィツラ姉さんが？ですか？」

「ええ。健康回復に効く特効薬など見つけてくれたので、以前よりも夫婦円満ですよ。」

ドルスツスの表情からは、確かに幸せそうな空気が溢れていた。だが、クラウディウスは二つの気掛かりがあった。一つは姉リウィツ

ラの事。彼女はいくら愛する家族の為とはいえ、付き添って看病をするなんて事は、今まで聞いた事は無かった。むしろ、病気になるれば医者呼んで任せて、自分の安心を確実なものにする性格であったので。もう一つは、ドルスツス様の顔色が以前よりも芳しくない事。類は少しこけている感じがする。考えすぎかもしれないが、激務の中で少しやつれたと思えば良いのだが、今までそんなことは一度も無かった。ドルスツス様は適度に休みを入れるお方なので。

「さて、セイヤヌスの勢力をトドメをさすためにも、頑張らなければ。」

「ドルスツス様、あまり無理をなさらずにお願い致します。」

「あははは。大丈夫ですよ、クラウディウスさん。」

「いいえ、今回の事で、その背景がセイヤヌスにしる、そうで無かつたにしる、とてつもないバックがあつた事は確かです。つまり、密教トウクル力は単なる隠れ蓑であつて、あらゆる階級に彼らのような国家の王政復古を願う者が存在しているという事です。それは即ちドルスツス様の身に、いつ危険が来てもおかしくない事態を引き起こす可能性がある事です。」

「え？僕がですか？」

「ええ。ドルスツス様は以前、私の兄にこう仰られてたではありませんか『ゲルマニクス、お前は何をしてもこのローマでは目立つ男なのだ。』つと。」

ドルスツスの表情は、少し険しくなっていた。

「今はこの僕がゲルマニクスの立場だと？」

「ええ…。私は預言者でもなければ、鳥占い師でもありません。未来の事は何も書かれていないパピルスであるとおもっています。しかし、過去の歴史から多くの人間が学ぶ事ができるとすれば、それはバランスだと思います。」

「バランス？」

「あらゆる歴史の中で、光と闇、そのバランスが崩れた時、不思議なリズムと共に繰り返される事があります。ドルスツス様、あなた様は十分に目立つ存在になって、敵勢力に目を付けられている事は確かでございます。」

「ゴホツゴホ。」

「ドルスツス様……。」

「少なくとも、公然では咳をしないように気をつけなければ、ね。」

ドルスツス様の明るい笑顔は、私の心配を覆そうとするものだったが、その御心こそが、敵に隙を与えてしまう要因でもあったかもしれない。

「とにかく、今回をきっかけにこれからクラウディウスさんとは調査をしていきたいと思っています。貴方には、貴方にしかできない、独特な物事の見方がある事が分かりましたので。」

「そうでしょうか？」

「ゴホツゴホ、ええ。ひょっとしたら、人々が安心して暮らせる様になるには、華やかな指導者ではなく、クラウディウスさんのような見方を持った方なのかもしれませんね。」

「なので……でしょうか？」

「ええ……。少なくとも私を含めて、名誉だの派閥などの勢力で争っているうちは、ローマ市民の意向などが介在していない証拠でしょう？。」

運命は時として、悲劇の主人公に未来を語らせることが多い。ドルスツスの何気ない一言は、十分に的を得ている指摘であった。結局、クラウディウスとドルスツスが再び、今回の様に相棒となって事件を追求することは、これより先には一度も無かった。

「では、クラウディウスさん。」
「ではまた、ドルスツス様。」

一つ敢えて挙げるとすれば、二年後のドルスツス亡き後。クラウディウスは独自の見解からドルスツス暗殺説を誰よりも確信していた。志半ばに倒れたドルスツスの無念を晴らす為に、クラウディウスはたった一人で8年もの歳月をかけ、単独で暗殺説を立証すべく健気にも調査し続けていたのであった。

続く

第八章「暗雲」第三百二十九話

もちろん、セイヤヌスのローマに対する野望も、リウィツラ叔母さまのお母様に対する深い憎しみも、まるで分からなかったところで、私は私で、姉として色々悩まされていた。

「おい、アグリッピナ！」

「何？ガイウス兄さん。」

ただ、この頃は、お母様と祖母のアントニア様の仲が、段々と悪くなってきた年である事は覚えている。何故なら、翌年にアントニア様のドムスから私達家族が引越す事になったから。

「イタタタタ！ちょっと！何をやるの！？離してよ！」

私はカリグラ兄さんに耳を引っ張られて、庭の隅まで連れてかれた。

「もう！」

「お前は何度言ったら分かるんだ？自分の事ばかりにかまけてないで、ちゃんと妹のドルシッラの事をみるよ！」

「うっさいな！私はガイウス兄さんの奴隷じゃないんだからね！」

「約束はちゃんと守れよ！」

「こんな酷いことするならお断り！」

するとまたもや私の耳を引っ張って、わざわざ耳の穴のそばで大きな声で叱りつけてきたので、私は咄嗟に逃げ出して離れてた。

「もう！ガイウス兄さんなんか大っ嫌い！どうしてそうやって私はっかりイジメるわけ?!」

「イッヒヒヒ。お前イジメると楽しいからな。」

「ひつどい！」

「とにかく約束は守れよ！じゃなきゃ、今度はこの位じゃすまないぞ！」

そう言うとき意気揚々とどっか行ってしまった。この寝小便バカ兄貴なんか、死んじまえ！って思った。しかし参ったよな。ふう。ドルシツラの本音を探れって言われても、あの子は本当にガードが硬いってどうか、保守的ってどうか。そしてどうしたもんだろ？って思っていると、大体このタイミングでドルシツラは声を掛けてくる。

「姉さん？」

ほら。

「なあに？ドルシツラ？」

「イッヒヒヒ。」

「え？！あ？！あんた？リウィツラ？」

「そうだよ、アグリツピナお姉ちゃんまんまと騙されたでしょう？」

驚いた。

よく姉妹は声が似てるって言うけど、あのドルシツラ独特のソフトな雰囲気まで末妹のリウィツラが真似するなんて。

「あんた、やっぱり九官鳥だわ。」

「え？何それ。」

「声真似が得意って事。」

「それってあたし褒められてるの？」

「あー、そうそう、褒めてるの。」

そういえば、私も今のリウイツラ位の時は生意気盛りでおませだったっけ。赤ちゃん言葉で喋るとガイウス兄さんが馬鹿にするから嫌で嫌で、お母様の喋り方の真似ばかりしてたな。

「リウイツラ、あんた意外に私に似てるのかもよ？」

「へえーどうして？」

「生意気だから。」

「ちよつと！お姉ちゃん、そんな言い方ないでしょ！」

「じゃ？木登りでも勝負するっか？」

「いーよ！絶対に勝てないもん。」

「リウイツラ、あんたは最初っから諦めるんじゃないっつーの。」

「それだけじゃないもん、だって…。」

「だって何よ？」

「ドルシツラお姉ちゃんが怒るんだもん。」

「はあ？ドルシツラが？まさか！」

「本当だよ。すっごく怖い顔して怒るんだよ。」

意外。

ドルシツラはリウイツラには優しい姉で接してるのかと思ったら、怒ってるなんて。

「リウイツラ、ドルシツラは何てあんたに怒るわけ？」

「え？言えないよ。」

「何だよ？」

「だって…ドルシツラお姉ちゃんに怒られるから。」

これはチャンスだと思った。

リウイツラから本音を聞き出せば、カリグラ兄さんに頼まれてる事も達成できるかもしれない！

「あんね、ドルシツラに怒られるからって私に言ってる時点で、あんたは半分以上暴露しているようなもんだよ。」

「ええ?!嘘?!」

「本当だよ。」

「ああーん、どうしよう。」

「バカ…。」

「もう!アグリツピナお姉ちゃんのせいだからね。」

「大丈夫だよ、私が怒られない様にあんたを守ってあげるから。」

「本当に?本当に?」

「あー、本当に本当。」

私はニコツとリウイツラに笑った。するとリウイツラは私の顔を見て安心したのか、突然泣きついてきた。頭をさすってヨシヨシしてあげると、更にギュツと抱きしめてきた。

「ははーん。あんたは口は達者だけど、まだまだ子供だね。」

私もそうだけどね。

しかし、いつものリウイツラなら舌を出してべーっと思地っ張りな姿を見せてくるのに、何だか今日は違ってた。暫くすると身体が震えて怯えてるのが分かった。おかしい…。

「リウイツラ?あんた寒いのか?」

「ううん。」

「何で震えてるわけ?」

「怖いのか?」

「何が?私か?」

「違う。」

「え?」

よく見ると、リウイツラの首より下の背中に小さな赤いアザが三個もあつた。まさか?! 私は直ぐにリウイツラのトウニカを引つ張つてそこを見ようとしたが、気付いたリウイツラに邪魔されてしまつた。

「リ、リウイツラ?!」

「ダメ。」

「あんた…ドルシツラに何かされてるの?」

その瞬間、リウイツラの表情が凍りつくように蒼ざめていった。

続く

第八章「暗雲」第四百十話

「ええ?! ドルシツラが?!」

「シー―っ! ドルスス兄さん! 声が大きいって。」

ドルススお兄様は頭をペコペコ下げて謝った。私はお兄様に、昨日リウィツラの背中に見つけた傷跡の事で、相談を乗って貰っていた。

「しかし、いくらなんでもそれはないだろう? まさかドルシツラがリウィツラを虐待しているなんて…。あいつ、いつも優しく世話してるじゃないか。」

「ふん、私とは違ってでしょ?」

「そうスネルなつて。アグリツピナはちゃんと長女らしく末妹を活発に世話してるじゃんか。」

「フッフ、ありがとうお兄様!」

「あはは。」

あ! いっけない。

自分の事を褒められてのぼせてる場合じゃなかった。

「でも、確かに背中に三箇所、何かでつねられたような赤い斑点があったの。」

「うーん、でもそれが必ずしもドルシツラがやったとは限らないだろう?」

「きつとそう。私だってドルシツラがそんな事するなんて信じたくないけど、ドルシツラの話をした途端にリウィツラの顔が蒼くなつて、氷山にふれたみたいになんかガタガタ震えてたんだから。」

ドルススお兄様は感慨深く色々な事を推敲されている。

「ガイウス…。あいつがお前にドルシツラの本音を聞き出せって頼んだんだな？」

「ええ。ガイウス兄さんなんか、言う事聞かなかつたら私の耳を引っ張るだけすまないぞ！って脅すんだから。」

「そっか、分かった。」

ドルススお兄様はポーンと膝を叩いて立ち上がった。

「兄としては疑いたくないが、そこまでお前が言うなら一度調べてみよう。」

「どうやって？」

「今日からリウィツラとドルシツラの二人だけで寝かせるんだよ。」

お前は、お兄ちゃんところに来い。」

…。

「ドルスス兄さん…。私に変な事しない…？」

「バカ！お前は何一丁前の女みたいな事ぬかしてるんだ？！兄妹でそんな事あるわけないだろ？」

「だって、お兄さんから恋の話とか浮いた話聞かないから…。」

「アグリッピナ…。お前はすぐにそうやって恋の話に結びつける。」

恋していない人を獣みたいに扱うなよ。」

「エツへへ…。」

「誰も一緒に寝ようなんて言ってないからな？いいか、夜までずっとお兄ちゃんとお前で起きてて、ドルシツラがリウィツラに何かやってないか見張るんだよ。」

「あつたまいい！そっか。」

さすがドルススお兄様。

シミュレーションだけでは本当に得意。後はそれとなくリウイツラから、傷の事を聞き出せるかが問題。でも、いつも元気で生意気盛りなリウイツラだけに、重たい話にはなかなか持っていけなかった。ドルシツラはリウイツラを過保護の様にあれこれ躰をしているし。ここは一つ、カリグラ兄さんの真似じゃないけど、長女っていう身分を振りかざして威張ってみるか。

「リウイツラ、あんたちよっこっちおいで！」

案の定、リウイツラの後ろには心配そうなドルシツラが着いてきた。

「アグリッピナお姉ちゃん、何？」

「いいから、ちよっとおいで。」

「アグリッピナ姉さん！リウイツラに木登りやらしちゃダメだからね！」

「ドルシツラ、分かってるって。」

それでも金魚のふんみたいについてくるドルシツラ。

「アグリッピナ姉さん！リウイツラは色々とやる事あるんだから、あんまり連れ回さないでね！」

「分かってるって！うっさいなーお前は。」

「もう！姉さん、そうやって言葉遣い悪くなるんだから。」

私は両目を瞑ってペロツと舌を出した。ドルシツラは口を膨らましてプンブン。私は後ろ手の腰元で両手を組んでスキップ。リウイツラもそれを真似しようとして一生懸命だった。

「お姉ちゃん、全然出来ないよ。」

「片足あげたら直ぐにジャンプするの、やってごらん。」

たははは、まだまだリウィツラは出来ないか。

「ダメ！片足上げたら、地面に足がついちゃうよ。」

「リズムカルにジャンプするの。」

するとリウィツラは身体を左右に揺らしながらも、少しずつ上達していった。

「おおお！お姉ちゃん！お姉ちゃん！できたよできたー！」

「だ〜るー！あんたは私に似てるからすぐできるって。」

「やったー！」

本当にリウィツラは覚えるのが早い。さてと準備は整ったかな？後はドルシツラに禁止されてた木登りをするだけっつと。私はひよいひよいと手前にあつた木に登った。

「あつ！アグリツピナお姉ちゃん…。」

「何？」

「まずいつて。」

「イイからあんたも上がってきなつて。」

「ドルシツラお姉ちゃんに怒られるつて…。」

「そう？」

風になびく木陰の中で、葉っぱを一枚ちぎって笛を作つてピューピューって自慢気に吹いてみせた。

「わあ〜！お姉ちゃんすごい…。」

「ほら、上がつておいで。あんたにも教えてあげるから。」

「うん！」

私はリウィツラに手を伸ばした。
それは同時に、孤独を一人で抱えるドルシツラにも手を伸ばせれば
と、心の中で強く願っていたのだった。

続く

第八章「暗雲」第四百一十一話

木漏れ日の中、私と末妹のリウィツラは、ぱっかりYの字に割れた枝に横たわっていた。リウィツラは一丁前にも私の真似をして、両手を枕にして偉そうに目を瞑ってる。

「どう？リウィツラ。気持ちイイでしょう？」

「うん、風が吹いてきてすごく気持ちイイ……。」

「あんたがお母様のお腹の中にまだいた頃、私はしょつ中木登りして、お母様に怒られてたんだから。」

「あはは、アグリッピナお姉ちゃんらしいや。」

「らしいやって、あんた生意気だよ。」

「べーっだ！」

やっと出てくれた。

リウィツラの意地っ張りな舌出し。これがないと、何となく調子が狂っちゃうんだよね。

「ねえねえお姉ちゃん。さっきのどうやってやるの？」

「ああ笛か、葉っぱ一枚とってごらん。」

「うん、とったよ。」

「よっし、そしたら……真ん中に、ちよっただけ穴あけて、二本の指でこうやって挟んで、後は吹くだけ。」

「うーん。うまく出来ないよ。」

「それじゃ両端を両手で持ってごらん。」

「うん、こっつ。」

「そっそっ。」

すると、勢い良くピューッと抜けるような綺麗な音色が風になびい

た。

「上手い上手い、リウィツラ最高！」

「エへへ。まだ両手だけど、いつかお姉ちゃんみたいに片手でできるようになりたい。」

「こんなの、あんただったらすぐできるよ。これを吹いたら、どんなに眠れないときでも安心して寝れるよ。」

「本当に？」

「ああ。お姉ちゃんが嘘ついた事あるか？」

「ない。」

「じゃあ、もつと吹いてごらん。」

木登りをしていると、心が穏やかになって素直になってくる。だから、私は暫く目を瞑って、リウィツラの心が自然と開くのを待っていた。

「アグリッピナお姉ちゃん。」

「うん？」

「満月の夜これ吹いたら、もう大丈夫かな？」

満月？

何じゃそれ。

「満月の夜にアルテミス様が私の所にやってくるの。絶対に目を開けちゃいけないって言われて、そして私をいじめるの。」

アルテミスとは、ギリシヤ神話に出てくる狩猟・純潔、そして月の女神の事。私はそれほど信心深いわけではないから咄嗟にリウィツラが言っていることが分かった。満月の夜は笑顔のように輝いている。つまりそれはドルシツラ。やっぱりか…。

「うん、その笛を鳴らしたらお姉ちゃんが駆けつけて、アルテミスを追いつ返してやるよ。」

「アグリッピナお姉ちゃんか？」

「ああ！」

私は袖をまくって、男っぽく腕の筋肉を見せた。

「お姉ちゃんの筋肉、ぶによぶによじゃん。」

「うっさいなー！私は乙女なんだから、仕方ないのよ。」

「また恋の話？」

ギク。

妹にも飽きられてる。

「でも、何でアルテミス様は私をいじめるんだろう？あたしちゃんと目を閉じてたんだよ。でもね、ドルシツラお姉ちゃんが嫌がると今度はあたしがつねられるの。」

?!

私は目を見開いてリウィツラの言葉に耳を疑った。ドルシツラが嫌がるってどういう事よ？アルテミスの真似をしてリウィツラを虐待してるのはドルシツラじゃないって事？！

「誰に？」

「満月に。」

そんなわけではない。

風が大きく辺りを騒がせると、私の心もぞわぞわと嫌な予感を思い起こさせる。私の耳を引っ張る人物。嫌がるとさらに喜んでエスカ

レートする奴と言えば、あの未だに寝小便しているバカしかいない。

「あんだ、この前も震えてお姉ちゃんに本当の事言わなかっただろ？ちゃんと言いなよ。」

「…。」

「ガイウス兄さんだろ？」

リウィツラは目を下へ落として涙をいっぱい溢れさせるが、それでも口をへの字にして大きく顔を横に振って違うと否定する。彼女なりの兄をかばう気持ちなのだろう…。私は妹を呼び寄せて背中を摩りながら、もう大丈夫だよと落ち着かせた。

「私そのアルテミスを退治するから、あんたは必ず葉っぱの笛を吹くんだよ。」

「うん。」

けれど、私の心は許せない感情で燃えたぎっていた。許さない。寝小便だけならまだしも、あのバカ兄貴はドルシツラに悪戯して、リウィツラに虐待までしているなんて！それなのに平然と私にドルシツラの本音を探ってこいだなんて偉そうに命令しやがって！絶対に許さない！私は直ぐにドルスス兄さんに相談した。

「何だつて?!」

「シーーーーーっ！もう、相変わらずドルスス兄さんは声が大きいって。」

また、ドルスス兄さんはペコペコと頭を下げて謝ってる。

「でも、ガイウスはまだ9歳だぞ？何だつてドルシツラを襲うんだよ。」

「年齢は関係ないんじゃない？男の人なんてみんなそうよ！」
「バカ、そんな事ないよ。みんながみんな性欲の塊なんかじゃないぞ。」

どっちでも良かった。

それよりもカリグラ兄さんの悪習が許せなかった。だからドルシツラも笑顔で心を閉ざしているんだ。誰にも家族にも相談できないから。

「次の満月まで？」

「後、三日ぐらい。リウィツラにはアルテミスがやってきたら、葉っぱの笛を吹くように言っておいたから。」

「よし、それを合図にお前は窓から、僕は扉から一気に飛び込むんだ。逃げ場を無くしたアルテミスの化けの皮を剥がすんだ。」

「うん、分かった！」

いくら兄妹でも、私は異常な兄カリグラの愛情が許せなかった。いくら癩癩が現れても、私は二人の妹達を守る姉として、今度こそはとっちめてやると本気で思っていた。

続く

第八章「暗雲」第四百二十二話

蒼白く夜空に満月が朧げに浮かんでる。アトリウムの天窓から差し込む月光を浴びながら、今夜私とドルスス兄さんは、屈折した兄カリグラの妹達への異常な愛情を阻む為に立ち上がった。

「アグリッピナ、お前眠たくないか？」

「私は平気。ドルスス兄さんは？」

「へへへ、徐々に緊張して鼻水が出てきそうだ。」

「あはは。」

「いいか？お前は窓から、僕は扉から一気に飛び込むんだぞ。」

「分かった、任せておいて。」

ピューー！

鳴った！リウィツラの助けの笛だ！

私と兄は駆け足でそれぞれの持ち場から、妹達がいる寝室目掛けて突っ込んだ。

「?!」

な、何これ？！

「おい！ガイウス！」

ウゲ！

ひ、酷い格好！

「ガイウス兄さん…？」

兄カリグラはアルテミスの真似をしている。それも口紅を付けて化粧なんかしちゃって、まるつきり不気味なオカマ。兄の腕で口を塞がれたドルシツラの衣服は乱れて半裸状態。隣のリウィツラは、笛を吹いた事によりやっぱりつねられていた。それでも、目を閉じて震えて耐えている。

「ガイウス!!!!!!」

ドルスス兄さんは怒髪天を衝く勢いで、大声で叫んで兄のカリグラを両腕を振り回して殴り付けた。顔面の肉と硬い拳がぶつかり合い、次第に兄のカリグラの顔からよだれと鼻血が吹き荒れてきた。

「ドルシツラ?!大丈夫?」

「あわつわあああ...」

彼女は乱れた服を必死に直して、自分の肌を見せないようにした。

「リウィツラ?!」

「アグリツピナお姉ちゃん!」

「こっちおいで!」

私は二人の妹達をしつかり抱きしめた。その激しいドルスス兄さんの怒り声に、さすが奴隷のパッラスやアントニア様、そしてウィプサニアお母様も起きて来た。

「何事ですか?!」

「ド、ドルスス様?!」

「パッラス!ドルススを止めなさい!」

「はい、アントニア様!」

奴隷のパツラスはアントニア様の指示に従って、兄カリグラを殴りつけてるドルスス兄さんを必死に止めようとしている。アントニア様は、ドルスス兄さんに殴られて失神している兄カリグラの姿を見て驚いてる。

「ドルスス！今すぐやめなさい！！」

母ウイプサニアは私の姿を見るなり、途轍もない剣幕でド叱りつける。

「アグリッピナ！あなたが仕掛けた仕業なの？！」

「違います！お母様！」

「嘘おっしやい！日頃からあなたはガイウスと仲が悪かったじゃないですか！ドルススを使って仕返しだなんて、なんて卑怯な手を使うの？！」

「違います聞いてください！お母様！ガイウス兄さんは、満月の夜になるとアルテミスの女装をして、妹達に悪戯をしているんです！」

妹達は私の腕の中で怯えて泣いている。ようやくパツラスに引き離された兄カリグラは、母ウイプサニアの過保護な腕の中に救われ、言い訳をしながら泣きついた。

「お母様ー！ご、誤解なんです！僕はただ！兄として妹達の笑顔を取り戻したくて！笑かす為にやっただけです！」

「ああ、可哀想なガイウス。きっと貴方の言うとおりだったのでしよう？見なさいアグリッピナ！やっぱり誤解じゃないですか！」

ところが怒ったのはドルスス兄さんだった。

「お母様はどうして？アグリッピナの言う事を聞いてやらないんで

す？！毎日まともに目も合わせないで、いつもアグリッピナを除け者扱いじゃないですか！？今回だって、アグリッピナが教えてくれなければ、ドルシツラとリウィツラは強姦されていたのかもしれないですよ！」

「な、何を貴方は馬鹿な事を言ってるのです、ドルスス！気でも狂ったのですか？！この子達は兄妹よ！！そんな事あるわけないですよ！」

「お母様！」

「ドルスス！貴方は次男だから、先に結婚して成人を迎え住居を構えた長男のネロと、お父様の部隊に勝利祈願のマスコットとしてカリグラと呼ばれた三男のガイウスに嫉妬してるだけなのです！二人に挟まれた自分の存在が、影のように薄くなるからそれを暴力で訴えるなんて！ローマの男がやる事ですか！？」

それでも私はお母様に対抗した。

「お母様！どうしてそうやって偏見の目で私達を見るのですか？！ドルスス兄さんは一度だってそんな風に思ったことないですよ！」「アグリッピナ！口を慎みなさい！大体、貴女は自分の母親めがけて、何て生意気な事を口走っているのか、分かってるのですか？！」

それでも私達はお母様に反抗した。

今日ばかりは今までの様に言い包められたり、逃げたりする事はもうできないから！アントニア様は目を閉じて静観されている。

「お母様！」

「ドルスス！貴方はガイウスが癩癩があるのを忘れた訳では無いでしょうね？！」

「忘れてません！」

「お母様！もしガイウス兄さんの言う通りなら、どうしてこの二人

は笑わず怯えているんですか?! お母様は自分の事で忙しいから知らないでしょうけど、リウィツラの背中傷を見た事ありますか?!

「何を馬鹿の事を言ってるの!! 忙しいのは貴方達の事を思ってるのよ! それを何で子供のあんたに! 非難されなきゃいけないの?!」

身体中を突き抜ける様な怒り。

どうしても母ウィプサニアには言いたい事があった。

「どうしてそうやって! いつも真実から目を背けるんですか?!」

何かを抉られ驚愕した母。

だが、同時に今まで鬱積していた悪感情が、一気に眉間にシワを寄せる怒りの形相へと変化する。

「子供のあんたに何がわかるのよ!!!!」

続く

第八章「暗雲」第四百十三話

初めてだった。

少なくとも母の強烈な怒りで、私の心を粉々にされたのは。その時から、私と母には引き返せない大きな溝ができてきている事に気が付いた。

「あたしはあんた達子供の為を思って今まで一人で何もかもやってきたの！それを！それを！たかが五、六年位しか生きていないあんたに！真実などと偉そうになぜ言われなければいけないのよ！？」

蜘蛛の足の様に右指達を間開き、皮膚に浮き出ている指の一本一本の筋に、母の私への怒りがこみ上げているのが、はつきりと見えて取れた。

「アグリッピナ！あんた実の母に向かって真実などと随分とたいそう立派な言葉を使ったじゃないか？！ええ？！なら、馬鹿な話をしながらのほほんと生きているあんたを、矢面に立って戦って守っているのは誰かい？！え？！あんたかい？！それともあんたの大好きなドルススかい！？」

そこにいる殆どの人間を凍らせた。

ただ一人、目を瞑って静観されているアントニア様を除いて。

「あんたが自分の敵かも分からないような大母后になったつもりで、偉そうに達観してるふりをするよりも！私は大きな責任を常に背負っているわけ！！」

お母様は私を指で差しながら、見下すように高笑いを始めた。

「アハハハハ！真実に目を背けていられるのは、あの人でなしに憧れているあなたの方だって事よ、アグリッピナ！それでもまだ軽々しく口走るのなら、どうぞ丸裸で今すぐ家族の縁を切って出て行きなさい！」

そして再び母は恐ろしい顔に戻って私を睨みつける。

「それが嫌なら！私の目の前で二度と偉そうな意見を述べるんじゃないの！あなたの粗末な命が語る真実なんて、私にはどうでもいい事なのよ！！！」

言葉は鋭い刀。

私の心は砕け散った。全身の力が抜け、必死に妹達を抱きしめていた両腕さえも、ブラリと垂らすのが精一杯。気が付くとショックで私が涙で頬を濡らしている。滲む周りの世界は、程遠く自分の手からスルリと逃げて行くみたい。もうだめ。フラフラしてきて、立っているのもやっと。私は何もかも母ウィプサニアに言い包められ、素直に母が形作った長女という奴隷でいるしかないのだと思った。私は、私は、私の心や存在なんて、母が言う粗末な命でしかないのかもしれない。

「ならウィプサニア！私のドムスから出て行くのはお前の方よ！」

「?!」

「!!」

「お、お義母様?!」

アントニア様だ！

姿は私からは滲んで見えるけど、私を、私の為に…。

「今まで旦那を失った同じ経験がある女性同士として、目を閉じてあんたの今までやってきたわがまを黙っていたけれども、今夜こそはつきりと言わせてもらおうわ！私の孫アグリッピナがあんたに言った事は、寸分たがわず正しい事よ！」

頑張つて涙を拭いた。

母を正々堂々と叱りつけているおばあちゃんのアントニア様が、母によって粉々に砕け散った私の心を、一つ一つちゃんと整えてくれている。

「私の長男ゲルマニクスの名を利用して、真実から目を背けているのは貴女の方じゃない！政治的にゲルマニクスの名を利用する愚かな連中と手を組んで、やっている事と言えば確証もない皇帝テイベリウスによる暗殺説の立証ですって？！それが死者に対する、いいえ、あんたの愛する夫に対して冒瀆とは、微塵も思えなかったのかい？！」

アントニア様は、腰に両手をついて怒り肩でさらに続けた。

「あんたが偉そうにアグリッピナに真実を語らせないのなら！私だってあんたにはこれ以上、息子の名を語らせる訳にはいかないわよ！いい？！ゲルマニクスはねえ、あんたの夫である前に私の実の息子だったのよ！」

母ウィプサニアは私を見ながら歯を食い縛り、次第に目を落とし、うつむいていく。その下で、ガタガタ震えながらしがみついている兄カリグラ。

「今考えれば、ドルスツス様のお母様の葬式の際に、娘のリウィッラが言った事が本当の真実だったのかもしれない。」

憐れむような目で母を見つめるアントニア様は、堪らず寂しそうな声で質問した。

「ウイプサニア。ゲルマニクスが死んでから、あんたはまるで人が変わったよう。それとも…今の貴女が本当の貴女なのかしら？」

そしてお母様は、お母様は…。

両手を顔に当てて突然大泣きをしてしまった。周りの人間の心に引つかき傷を残すような、まるで葬式に雇われるユダヤ人の見窄らしい泣き女のように。母は恥も外聞もない露わな泣き声を上げて泣き出した。

「ウイプサニア…。アグリッピナはあなたの為に、健気にたった一人でローマに残ってくれたじゃないか。寂しい想いを我慢して、幼く甘えたい心を押し殺して、あんたが息子のそばにいたいと言うウイプサニアの為に…。」

だが、母ウイプサニアは狂犬のように噛み付いた！

「ウイプサニアですって?! 私だって家族の誰一人とも離れず、私の可愛いアグリッピナとも一緒に過ごしたかったですよ! それをピソやセイヤヌスやティベリウスは! 私の揚げ足ばかりとって相手にせず、さらに女狐の大母后リウイア様の気まぐれによって! 母としての私と娘としてのアグリッピナを引き裂いたのですよ!!」

アントニア様は、噛み付くような勢いで泣き叫んで訴える母ウイプサニアの姿に、一瞬おののいた。

「その時にお義母さんは何ができたのですか?! ええ?! ただ大母

后様の言葉に従っただけじゃありませんか?! 自分の孫を可哀想と思つなら、どうしてあの時に! 私とアグリッピナの親子の関係を引き裂くような事に加担せず、必死に訴えて下さらなかったのですか?!」

お母様…。

これがずっと私にひたすら隠していた、母ウイプサニアの微かな私に対する愛情だった。私を一人だけ残して、ローマを離れる時のあの時の、優しかった頃のお母様の姿が蘇る。

美しい笑顔。

目尻に涙をためながらも、必死にこらえるお母様は大理石のよう。

”アントニアお婆ちゃんのだうの木は貴重だから、木登りしないでね。”

”はい…。”

”大母后様の言う事は、しっかりと聞くように。”

”それと…。”

突然お母様は私を抱きしめて、わんわんと泣き出した。私はとても泣きたかったけど、我慢してお母様の頭を撫でた。

”ユリア、本当にごめんね…。”

子供のように母を忘れてわんわん泣いたあの涙は、母ウイプサニアの悔しくて悔しくて堪らなかつた涙だったんだ。

「お母様、ごめんなさい…。」

アントニア様は堪えて涙を流した。ドルスス兄さんも涙を流してい

た。すれ違ってしまった私と母の関係を憐れんで、哀しんで、みんな泣いてくれた。私もクシャクシャになった泣き顔を、必死に片手で隠しながら、何度も何度も寂しさばかりを呪うように、声を殺して泣いていた。でも、二度と母とはあの頃に戻れなくなっていた。

続く

第八章「暗雲」第四百四十四話

結局、兄カリグラの奇行は、母ウイプサニアが毎晩添い寝する事で解決され、二人の妹ドルシツラとリウィツラは、私と一緒に添い寝する事になった。兄カリグラがやたらとドルシツラの本音を聞き出そうとしていたのか、それらは有耶無耶になってしまった。

「おはよう、ウイプサニア。」

「おはようございます、お義母様。」

母と祖母のアントニア様が交わす言葉は、毎日たったこれだけ。食事の時間も赤ら様に時間を避け、通り過ぎるときもお互いに奴隷を盾のように視線を外させ、所詮他人であるという息苦しい空気の中で耐えていかなければいけなかった。そんな重たい空気を一変する出来事が、裕福な貴族の初老と共に訪れた。

「ごめんください。」

「あら？お久しぶりネルウア様。」

「おおお！アントニア、元気じゃったかい？」

どうやら見るからに裕福な貴族の初老。後ろには、ティベリウス皇帝と同じくらいの男性を連れ添っていた

「ええ。今日は藪から棒にどうされたのです？」

「いや、ワシらウイプサニアに用があつての。」

「ああ、そうですね。どうぞお上がりください、今呼びますので。」

アントニア様は、物凄く冷淡な表情でパッラスに母を呼ぶよう指示し、避けるようにご自分の部屋へ入られてしまった。

「ネルウア様！」

「おおお！ウイプサニア殿、とても綺麗になられたの、なあ？ガツルス。」

後ろにいた男性は、誰かを懐かしむような嬉しさに溢れていた。

「ええ。本当にネルウア様がおっしゃったように、最愛なる妻そっくりだ。」

「え？」

母ウイプサニアを訪ねた二人は、57年前に執政官を務めた有力者の貴族マルクス・コツケイウス・ネルウア様と、29年前に執政官を務めたガイウス・アシニウス・ガツルス様。そう、ガツルス様は、昨年亡くなられたドルスス叔父様の母親ウイプサニア様の再婚相手だった。

「去年の葬式の際には話す機会が無くてね…。でも、若い頃のあいつと君は本当にそっくりだから、きっとテイベリウス皇帝もビックリだろう。」

「知っていると思うのじゃが、ガツルスの元妻は、アウグストゥス様の命によりテイベリウスと離婚させられたのじゃよ。」

「ええ、存じ上げておりました。共に同じ父親を持つ者同士でしたが、生前は一度もお会いする機会が無く、本当に残念でした。所で今日はどういった御用でしょうか？」

ネルウア様とガツルス様の二人は顔を見合わせて微笑んだ。そしてネルウア様は真剣な目指で答える。

「うむ、実はウイプサニア殿に提案と援助を差し上げたくてね。」

「提案と援助？」

「じゃが、その前に一つ確認もしたいのじゃ。あんたは…本当に共和政支持者なのかい？」

その質問に母ウィプサニアは無表情になった。

「これだけ騒がれているゲルマニクス神話に加えて、共和政支持者の貴族達と集会を開いておられるのだから、ワシらの耳にも容易にその噂は入ってくるのじゃが、その事だけが気になってのう…。」

ネルウア様という初老の方は、その目の奥に隠した野望をキラキラとさせている。しかし母ウィプサニアもそれ以上に冷徹であった。

「もし、私がそうでないとお答えしたら、どうされますか？」

ネルウア様とガッルス様は再び顔を見合わせて微笑んだ。

「ワシらが確認したかったのはその事じゃよ。」

ネルウア様はとっても心地の良い笑顔を見せ、ガッルス様も安堵されている。

「共和政支持者の連中は、この国家ローマを駄目にする人間達だ。彼らを見果てぬ夢を見て、リーダーのいない理想の世界を作ろうとしている。だが、歴史的に見ても、そんな世の中は存在しないじゃろ？」

しかし母ウィプサニアはそれでも何も答えなかった。

「ワシらネルウア家が属するコツケイウス氏族は、ローマの中では

まあまあ財力はある方なのだが、上流氏族の連中には目の敵にされてのう。」

ガッルス様はネルウア様に続いてお話しされた。

「それは、アシニウス氏族の私ガッルスとて同じことなのです。実にテイベリウスは嫉妬深い男でね、私が前妻と結婚した事で妬みがあるのだろうか？税金は上げるわ、職務は左遷に近い状態にさせるわ。」

その話を聞いている母ウイプサニアは、自然と眼差し安らぎが帯び始めている。

「それでもウシは57年前に執政官を務めてアジア総督となり、息子はテイベリウス帝の重臣として今年補充執政官を務めているが、これは、”あくまでも”神君カエサル様に忠義を尽くすことが第一と考えているからなのじゃよ。決して神君カエサルの名を名乗るクラウディウス氏族に媚を売る為でも許容した訳でもないのじゃ！」

初老のネルウア様は、クラウディウス氏族に対して非常にお怒りになられていた。当然、横にいるガッルス様も静かに憤慨されている。

「だからウシらウイプサニア殿に確認したい。」

「返事によつては、私とネルウア様で惜しみない援助をするつもりだ。」

「もう一度聞かせておくれ、ウイプサニア殿。そなたは共和政支持者ではなく、また彼らの傀儡でもなく、正当な神君カエサル様の血脈を引く者こそが、このローマ国家を統率するにふさわしいとお考えをお持ちなのだろうか？」

「どうなんだね？ウイプサニア？」

それを聞いた母ウィプサニアは、突然聖母のような笑顔で答えた。

「ガツルス様、ネルウア様。当然ではありませんか。」

「おおお！」

母ウィプサニアは鋭い眼差しで、二人へしっかりと自分の意見を告げる。

「神君カエサルのは、カエサルのもです！」

続く

第八章「暗雲」第四百十五話

「ならば、ここにずっと留まっではいけない。」
「?!」

ネルウア様は険しい顔で母ウィプサニアへ忠告した。ガツルス様も後に続くように頷いた。

「ワシらはアントニアとは個人的にはもちろん付き合いはあるのじやが、それはあくまでも現皇帝への体裁じゃよ。しかしクラウディウス氏族より、幼い頃から迫害を受けてきたような君が、大母后と精通しているアントニアと合うわけがなかるう。」

母ウィプサニアの眉毛がクイッと動くが、それでもできるだけ冷静でいようと務めている。ガツルス様は静かに俯きながら、そして再び顔を上げて口を開く。

「去年亡くなった私の妻もずっと心配していたよ。母親は違えど、同じ父の血を受け継ぐ者として、ゲルマニクスを失ったウィプサニアはこれからどうするのだろうか?と…。」

母ウィプサニアは目を少し下に落として、感慨深く黙っている。

「できる事なら何かウィプサニアの力になってやれないか?出来ないのなら、せめてウィプサニアの歩く道を整えてあげられないのかと…。」

大きく瞬きをして、雨上がりの葉先に溜る水滴のように、大粒の涙が頬へこぼれる。それを見たネルウア様は、心を握り締められるよ

うな思いをしていた。

「もう、一人で我慢しなくて良いのじゃよ、ウイプサニア殿。一人で肩に力を入れて生きる必要もないのじゃ。後は、このネルウアとガツルスが、ウイプサニアの歩くべき道を舗装しようじゃないか。」
「これは何かの縁。せめて亡き妻の遺言を叶えさせてくれないか？ウイプサニア。」

母ウイプサニアは肩を震わせて、感謝の想いを大粒の涙で伝える。抱きしめてやりたい想いをぐつと堪えて肩に手を添えるガツルス様に対して、抑えきれぬ哀しみに、ネルウア様は目元の涙を手で抑えて堪えている。

「お二人の…陽に照らされた暖かい御心と、大理石を丹念に磨かれた様なお気遣いに感謝いたします。私もお二人がご指摘されたように、いつまでもお義母様の好意に甘えているのは、果たして良き事なのだろうか？と、常日頃思っております。」

鼻を嚙り、母ウイプサニアは目元に涙を溜めながら、それはたいそうにお美しい顔でお二人に媚を売った。

「こんな私で良ければ、お二人のご好意に、甘えさせてもらっても宜しいでしょうか？」

「当たり前じゃないか！」

ガツルス様は元妻の面影を母に見たのか、堪らず涙を浮かべて抱きしめた。それを見ているネルウア様も、安堵に包まれた笑顔を見せられている。こうして、母ウイプサニアは、更なる後ろ盾を手に入れた。

「早速、ウイプサニアの為にティベリス河向こうにドムスを用意し

た。地方にはヴィツラも用意してある。そこを自由に使いなされ。」
「ありがとうございます、ネルウア様。しかし…お義母様の「ゴドムスを離れるのは来年ではダメでしょうか？」

ガツルス様は不可思議な面持ちで母の顔を見たが、ネルウア様は目を閉じてじっくり考えて頷いた。

「その方がええじやろう。物事は急の流れよりも、静かな動きを経て強固な物へと変わる。そして中には、変化を求めない人々がいる事も忘れてはいけない。我々はティベリス河よりも静かな流れを選ぶ事にしよう。」

「しかし…ネルウア様、それではいつウィプサニアが危険に晒されるか分かりませぬぞ。引越しは一刻も早く進めるべきでは？」

「いいや、ウィプサニア殿の考えが良かろう。」

「だが…！」

ネルウア様は非常に険しい表情を見せる。

「ガツルス殿、お主は自分の妻の面影があるウィプサニア殿と面会されて動揺されているだけじゃ。ご自分の心を自重なされ。このドムスは、あのティベリウスの弟の物である事を忘れてはおるまいな？」

「…。」

「それに、ウィプサニア殿の元夫のゲルマニクスは、皇帝ティベリウスの養子であったのじゃぞ。血は繋がらなくとも、ウィプサニア殿とティベリウスは形上親子の関係であるのだ。物事は常に慎重に進めなければならんのだじやろうて。」

「はい…。」

「では、我々はそろそろ退散するでしょう。そしてウィプサニア殿には、惜しまぬ援助をする事を約束しよう。」

その時、母ウイプサニアの口元が少しだけ緩んだように見えた。ネルウア様は微笑んで、母の両手を握った。

「ワシはとても嬉しいのじゃよ、ウイプサニア殿。そなたが単なる夫を失った寡婦としてではなく、実に聡明で一つの目的の為に生きている事を知れた事に感謝すraitたい。」

そして耳元でこう囁いた

「大いに使いなされ、ゲルマニクスの名を…。」

続く

第八章「暗雲」第四百十六話

「アグリッピナ！」

「?!」

この声は?!

ヤロウ…来やがったな。

「高慢ちぎー！」

「はあ？」

「あ、いや、リヴィア。お、ホホホ…。どうしたのよ？」

「いやね、最近アグリッピナどうしてるかなって思ってたさ。」

つたく、馴れ馴れしい。

いや、よそよそしいかな？高慢ちぎのリヴィアが来る時は、敢えていうなら表立って裏がある時。なんか変な言い方だけどまあいつか分つかりやすい性格なのよね、彼女って。

「はい、これあげる。」

「え？」

「この間、誕生日だったでしょ？」

「へ？誰の？」

「目の前の、おバカさんの。」

えええ?!

高慢ちぎがあたしの誕生日覚えててくれたの?!嬉しい!!笑顔でおバカさんつてのは、相変わらず余計な一言だけど…。

「首飾り?!」

「そう。ストラを着る時に、一緒に着けたら？」

嬉しい！！！

これを着けて恋に励める！悔しいけど、リヴィアにしては良いセン
スしてるじゃん。

「ねえ、毒なんか入ってないよね？」

「あのさ。いつまでアグリッピナは私の幼い頃の記憶を引きずる
わけ？」

「だって、リヴィアだったらやりそうだもん。」

「しないって！」

「だって、あんたインチキばかりしてたじゃん。あたしに透明の
桃あげるとかさ。」

「アグリッピナだって！水泳の時、本当は足着いてんでしょ？」

「あのね、あの頃はリヴィアよりあたしの方がチビだったんだよ。
それに海の沖で足なんかつけるわけないじゃん。」

「あ、そっか。」

高慢チキのリヴィアは、どっかトボけて、自分が納得するとすんな
り素直になる。お互い憎まれ口を叩き合っても、やっぱり同じ大母
后リヴィア様のスパルタ教室で学んだ曾孫同士。二人して微笑んで、
昔話に花を咲かせた。

「でもリヴィア、プレゼントありがとう。」

「いいえ、どういたしまして。あ、そうそう、今日もアルテミス・
ゲームでもしない？」

はは、ん、やっぱり。

今日こそ私を負かすつもりで来たのね？受けて立つわよ。私達は私
の寝室でアルテミス・ゲームをやることにした。まあ、絶対に私は

負けないんだけどね。

「リヴィアさん、こんにちわ。」

「あらー！大きくなったわね！」

「いつも姉のアグリッピナがお世話になっております。」

「まあ、とてもお行儀がいいじゃない、ドルシツラちゃん。どっかがさつな女とは大違い。」

「あのさ…リヴィア。ネロ兄さんがいないところで、狼になるのやめたら？」

「何よ？あたしがお淑やかを演じてるって言いたいわけ？」

「いいや、むしろ騙してる。」

「まあ！本当にあんたって私には口の利き方悪いわよね。」

「アグリッピナ姉さん！リヴィアさんに失礼ですよ。本当に、うちの姉ががさつですみません。」

「あははは、別にいいのよ、ドルシツラちゃん。アグリッピナ、少しは妹を見習ったら？」

「っべーっだ！」

結局なんだかんだ、仲が良かったのは確かかもしれない。さてっと、今日もアルテミス・ゲームでリヴィアを負かしてやるか。

「リヴィアが先手？」

「うーん。」

「それとも後手？」

「うーん、どうしようかしら。」

「もう、早く決めてよね、リヴィア。」

「ちよつと待ってよ。この間あんたが先手だった時に私が負けたから、今日は先手にする。」

「後手じゃなくていいの？」

「うーん、やっぱり後手にする。」

「はいはい、どうぞご自由にリヴィア様。」

ゲームをしながら、いつの間に最近の話になってきた。やっぱりお互いに成長してきたのか、話し好きになってきた。

「へえー。あんたつてあの火事の際に大母后リヴィア様と一緒に消化活動してたの?!」

「うん。本当はセイヤヌス所の長女のジュリアを探しに行くだけだったんだけどさ。」

「あの火事つて、結構凄かったんでしよう?」

「凄いなって物じゃないよ。みんなススだらけで水浸し。アクア・リレーして一生懸命やってたんだから。」

「アグリッピナつてがさつだから、消防隊とか似合つてそう。」

「うっさいな〜リヴィアは!はい、アルテミス。」

「あああ!ちよつと待つて、なんでアグリッピナが勝つわけ?」

「だつてしょうがないじゃない。」

「あんた、ズルしたでしょ?」

「してないつて。」

嘘。

つというか絶対に負けない必勝法を知っているだけ。しっかし、たまには負けてやらないと、後々まで呪われそうだから、たまには負けてやるか。

「ところで、アグリッピナ。」

「うん?何?」

「あんた最近うちのお母さんと会つてる?」

それは高慢チキのリヴィアには珍しく、悲壮的な表情を浮かべた深刻な悩みだった。

続
く

第八章「暗雲」第四百七十七話

「どうしたの？リヴィア。」

「うん、最近うちのお母さん変なの。」

「変って？」

「何かいっつも会うとカリカリしてるし、全然笑わなくなっただし。」

お父様とは一緒に寝てないみたいだし。」

「あのリウィツラ叔母様が…。」

私はもちろんこの時、セイヤヌスから強姦された事や、ドルスツス叔父様の気持ちを取り戻そうとして、セイヤヌスから貰った薬剤で、知らず知らずに毒殺に加担しているリウィツラ叔母様の裏事情は知らなかった。

「葡萄酒だって飲まないの。」

「そっか、そうなんだ…。アルテミス。」

「ああ、アグリツピナ。人の悩みを聞きながら、何気に勝たないですよ。」

「え？うそ？」

もう、

あんまりにもリヴィアが弱いから、つい癖で勝っちゃったじゃない。でもそっか…リウィツラ叔母様何かあったのかな？

「多分、アグリツピナが最近お母さんところに行っていないから元気ないんだと思う。」

「え？」

「あたし知ってるの。お母さん、すっごくハグレ者でしょ？だから自分と似たような人にしか、心を許さないの。」

「ハグレ者…か。」

「あんたも意外にハグレ者でしょ？ネ口様から聞いてるわよ。」

「兄さんから？」

「ええ。」

リウィツラ叔母様と、あたしと、それからジュリアが仲良かったのは、多分、それぞれの実の親とうまく行ってなかったからだと思う。結局、ジュリアはセイヤヌスから勘当者でアントニア様の付き人みたいになっちゃったし、私もお母さんと大げんかしても、結局埋められない溝があった事に気がつかされたし。リウィツラ叔母様はどうなんだろう？

「ねえ、今度うちのお母さんを元氣付けさせてよ。」

「あ、あたしが？」

「そういつのって、あんたにしかできないじゃん。」

へえー意外にリヴィア優しいところあるじゃん。次は勝たせてやるか。

「そうかな？」

「そうだって。それこそアグリッピナの下手くそな歌で。」

「ゲ！？なんでそれ知ってるの？」

「だって、旦那のネ口様から聞いたわよ。相当音痴なんだって。」

「音痴って言うなよ！」

「じゃあウンチ。」

「リヴィア…。兄さんの前で、そんなお下品な下らないギャグ言った事無いでしょ？」

「あるわけないじゃ無い。」

こいつ…相変わらず猫被りやがって。

「アルテミス！」

「あ！ズルい！なんでまた、あんたが勝てる訳？」

「リヴィアが弱すぎるからでしょ？」

「一応私は貴女の義理のお姉さんなんだけど…。」

「だから？リヴィア『お姉様』は、インチキしてでも勝ちたいわけ？」

「本当に、ムカつく…。」

それはこっちのセリフよ。

少しでもリヴィアに勝たせてやるうとした、自分の真心が勿体無かった。それにしても、リウィツラ叔母様が…。

「ねえ？もう一回やりましょ、アグリッピナ。」

「うん…。あんた先手ね。」

「ようし！今度は負けないわよ？」

「…」

今度も勝てないわよの間違いでしょ？

それにしても誰と行こうかな…？最近のジュリアは殆ど毎日ウエスタの巫女の館でお手伝いだし、ドルスス兄さんはこの間のお母さんとの大げんかから、来年の成人式に目掛けて猛勉強中だし。うーん。

「はい、アグリッピナの番。」

「…」

色々と頭の中を駆け巡って考えていた。

「ちょっと、聞いているの？」

「…」

「アグリツピナ?!」

「はいはい、アルテミス。」

「ええええ?! また、アグリツピナが勝った! なんで?!」

うーん。

誰もいないな。意外に私って友達少ないのかもかもしれない。困った困った、こんなことなら誰とも恋なんかできないじゃない!

「私が先手だから?」

「そうよ! このままじゃ良くない!」

「え? 先手だと良くないの? それじゃ、次は私が後手になれば勝てる?」

だって、もしこのままじゃ誰とも恋なんかしないで結婚しちゃうじやない。どうせお母さんの事だから、政略結婚させるつもりだろうし。

「イヤ! それだけは避けないと。言いなりになってちゃ良くない。」

「ええ?! やっぱり先手なら勝てる?」

お母さんって子供の事をどう思ってるのかしら? 下手したら自分の目的の為の道具としか思っていないんじゃない?!

「そんな絶対にイヤ!」

「ええ?! どっちなの?! 先手なの後手なの?!」

そうよ、私はゲルマニクスお父様のように、素敵な男性と結婚するんだから! その事も含めてリウィツラ叔母様の所へ、ちゃんと一人で行って相談に乗ってもらおうと。お母さんの言いなりになんか

ぜったいイヤ！

「そうよ、自分で決めないと！」

「はい…アグリッピナ。私が負けたから…いつも通り、先手になります…。」

「うん？どうしたリヴィア、シヨボくれて。」

「だってえ〜。アグリッピナがさっきから先手だの後手だの惑わすからあ〜。」

「はあ？」

どうやら考え事をしていた私に、高慢チキのリヴィアは振り回されちゃったみたい。あははは…。

続く

第八章「暗雲」第四百十八話

めげない私。

そりゃ、矢面に立って戦ってるのは母ウィプサニアだけど、私だつて自分の恋くらい、自分で見つけられるようにならないとね。

「さあ、アグリッピナ様、参りましょう。」

「ええ、パッラス、フェリックス。」

私達は、リウイツラ叔母様のドムスへと出掛ける。とは言っても、そんなに遠くないし、どんなに歩いても昼前には着くかな？パッラスは私の後ろを警備し、フェリックスは…うん。兄カリグラと同じ年で私より上なのに、両手を首に置いて遠足気分。奴隷のクセに昔からマイペースなんだよな。

「フェリックス、最近なんか面白い賭け事見つかった？」

「シー…っ！」

「何だよ？」

「パッラス兄ちゃんに見つかると、最近うるさいんだ。」

「どうして？」

「『奴隷の身分は賭け事は、十二月のサートウルナーリア祭以外は禁止されてるんだからな！』って。」

「パッラスっていつからそんなに頭硬くなったの？」

「知らない。でも、最近一生懸命勉強しているよ。ギリシャ語だって前より上達したし、計算なんか全部頭ん中でやっちゃうんだよ。」

「へえー！」

私は顔だけ後ろを向いて、パッラスの横顔を眺めていた。そういえば、最近パッラスって前と雰囲気が変わってきた。前は手足がひよ

るひよろした瘦身だったけど、肩や腕もがっちりしてきて、たくましくなってきたのかな？

「うん？どうしました？アグリツピナ様。」

「何でもない。」

「ないない…。」

さすがに奴隷とは、あり得ないわね。するとフェリックスが話しかけてきた。

「そういえば、サートウルナーリア祭の時、アグリツピナ様は今年何やるの？」

「何やるって？」

「だって主人と奴隷が入れ替えするんだよ。」

「うっそう?!」

「ええ?! 気付かなかったの？アントニア様、毎年料理を僕達に作ったり給仕やってくれてたじゃん。」

全然気付かなかった。

そんなルールがあるんだ。去年や一昨年はお父様のゴタゴタでそれどころじゃなかったし。そういえば、クラウディウス叔父様ん所の生意気な奴隷ナルキッススと初めて会った時に、パッラスが言われてたっけ？

「まあ、アグリツピナ様は毎年偉そうな解放奴隷の役だから。」

「ええ?! ちよっと、誰が決めたの？」

「さあ？兄さんからじゃない？」

なんですって？

私はなんだかふくれてパッラスに振り向いて聞いたのだ。

「パッラス、私はいつから偉そうな解放奴隷なのよ？」

「え?!」

「私そんなの嫌だから。」

「あの…一体何の話で？」

少しでも奴隷が良く見えた私が馬鹿だった。もう!しばらくパッラスとは口きいてやらないんだから。

「アグリッピナ?!」

「リウィツラ叔母様!」

「あー!ー!ーん!!!どおしたの?!今日は?」

「最近叔母様が元氣無いつてリヴィアから聞きましたので、お勧めの葡萄酒持つてきました。」

「バカ…。子供のクセに気を遣つて。さあさあ上がって上がって。」
思ったより元氣そうで良かった。

確かに叔母様と私つて、リヴィアが言うようにハグレ者同土気が合うのかも。

「最近ジュリアちゃんは元氣にしてるの?」

「ええ、ウエスタの巫女の館で一生懸命お手伝いさんやってますよ。」

「あの娘にとっては、それが精一杯の親に対する反抗なのかもね。」

そっか…。

ジュリアは私や叔母様とは別の階級に生きている。だからますます親のいいなりになる事が多いのかもしれない。その中で敢えて貞操を守る選択は、ある意味ハグレ者なのかも。

「そういえば！この間、ウイプサニアとやり合っただって?!」
「え？叔母様、何処でその話を。」
「こちら辺に住んでれば、あつという間に話は飛んでくるって。」
「あちゃー、お恥ずかしい。」

リウィツラ叔母様だけには恥ずかしくて知られなくなかったな…。

「よくやったよ！私はせいせいしたね。」

「へえ?」

「うちのババアもさすがに堪忍袋の緒が切れたんでしょ？そりゃあそうよ！ウイプサニアがあんなに身勝手なことばかりやってたらね。」

あははは…。

参ったな、叔母様はうちの母が好きじゃないんだ。

「あ、ごめん。私って嘘つけないから。正直、今のウイプサニアは私は好きじゃないの。まだ、ゲルマニクス兄さんが生きてた頃のウイプサニアは、本当に笑ってて、楽しくて、魅力的だったし。」

私もそれは同じかも。

あの頃のお母様は、本当に優しくて、心配性だけど、でも素直に楽しくて笑っていた。怒る時は怒るけど、でも素直な感情を曝け出してくれた。今みたいに、何を考えているのか分からないって事はなかったし。

「リウィツラ叔母様…。私ね、うちの母は…。あの頃の優しかった母は…。きつとお父様と一緒に亡くなってしまったんだと思います。」

「アグリッピナ…。」

続
く

第八章「暗雲」第四百十九話

多分そう、きっとそう。

今でも私はお母様が大好き。でも、一緒に生活している母ウィプサニアでなく…。

大母后様リウイア様は、理解は概ね願望だつて仰つてた。だから諦めなさいと。それもすごく分かる。でも、いつかお母様が、母ウィプサニアではないお母様が、戻ってきて欲しいと願っている。その為なら、私はお母様にお尻を叩かれても構わない。

「そっか…変わってしまったんじゃないかと、亡くなってしまったのか…。」

「はい。そう思わないと、私は苦しくて苦しくて…。でもね？叔母様。」

「うん？」

「そんな好きになれない母だけど、でもこの間ちよこつとだけ、素直になつてくれたんです。母ウィプサニアは、本当は私も離れ離れになりたくなかつたつて。わんわん泣きながら、アントニア様に叫んでいたんです。」

「そっか…。」

「私、それを聞かされた時、お母様もずっと我慢してたんだつて。私の事、嫌つてた訳じゃないんだつて。」

リウイツラ叔母様は黙っている。

そして遠い目でなにかを思い起こしているようだった。

「そう考えると、私はまだまだ幸せかな。子供達も元気だし、ババアも元気だし、リヴィアはアグリッピナのお兄ちゃんネロと結婚し

たしね。」

「そういえば、ティベリとゲルマの双子は元気なんでしょうか？」

「もう、元気なんてもんじゃないわよ。さっきまでよちよち始めてたと思ったら、もう立つちできるようになってちゃって。」

「あははは！」

「アグリッピナ、双子だけは産むのやめた方がいいわよ。私、死ぬかと思っただけだから。」

「へえ。」

「それにガバガバになったら、女として恥ずかしいじゃない？」

「ガバガバ？」

「あ、いつけない。あなたには、まだまだ早い話だわね。」

叔母様は舌先をペロツと出して謝ってたけど、この頃の私はサツパリ意味が分かってなかった。フッフ、叔母様ったら。

「でも叔母様、私は恋がしたいんです！」

「おお、どーんとデカくきたね。」

「色んな人に聞いたんですが、恋すると胸はドキドキするって。でも、私、誰にもドキドキしないんです。」

「そりゃあ困ったな。大体アグリッピナは何で恋したいわけ？」

「え？」

「なんかキツカケがあっただんでしょ？」

「えっと…。何だっけ？」

そういえば、私今年は恋する宣言したけど、何でそんな事わざわざしたんだろう？

「まだまだ成人するまで、後六、七年あるじゃない。それまでにゆつくり探せば。」

「そうなんですけど、でも私は多分母が勝手に結婚とか決めそうで

す。それは絶対に嫌なんです。」

「そうは言ってもね。親戚同士の結びつき強くする為には仕方ないわよね。」

「でも、叔母様とドルスツス叔父様って、まるで恋でもしてるように仲がいいじゃないですか。それでもやっぱりお見合いだったのですか？」

すると、叔母様はすこし困った顔をしていた。

「ううん、私のは偶然。なんて言うのかな？結婚三年目のときに、ウィプサニアのお兄さんであるうちの旦那が、アルメニアで怪我してそのままポックリ逝っちゃったでしょ？私は何だか実感がなくて、ブラブラしてたらドルスツスがやってきたの。」

「へエ。」

「あの頃は、みんな男どもは神君力エサルになるんだって、戦場で勝手に遊んでるばかりだし。あたしそういうの好きじゃなかったから、ズケズケとドルスツスに男の文句ばかり言ってやったの。そしたら『僕は適当にやってるよ、面倒くさいから。』だってさ。話したら本当にヘラヘラして陽気な人で、全然怒らないで謝ってばかり。」

叔母様らしいなって思った。

「でも、ドルスツスが馬に乗った姿を見た時には心底格好良かった。ドルスツスの男らしさって、私の知らないところにあるんだって。それで、ビビビってきたのよ。」

「何ですか??そのビビビって?!」

「そうねえ、何と云うか…。」

「何が来たんですか???」

「全身雷が落ちたように、『あ!この人は私を生涯大切にしてくれ

る』って。お腹で暖かさを感じたの。」

その時のリウィツラ叔母様は、ご自分の腹部を優しくて摩りながら見つめ、慎ましくもお淑やかな優しい顔は、今まで見た事ないくらい綺麗だった。

「それに身体も火照っちゃって、『こんな優しい人に毎晩抱かれたい！』って思ったの。あー恥ずかしい〜。」

叔母様って可愛いなって思った。

「あー！ん！叔母様みたいにビビってなりたいっ！」

「あはははは。」

「身体も火照ってみたい〜！」

「ちよつと、今からじゃ早いだろう・・・。」

「でも、でもですよ、やっぱりそういう刺激がほしいんです〜。」

「アグリツピナはあれだ、結構自分から探しに行くタイプ見えて、実は物凄く奥手だったりね。」

えええ？！

どういう事?!奥手って？

「意外に素直になれなくて、相手に嫌がるような態度取ったりしてね。」

「ええええええ?!」

でも、確かに分からない。

「まあ、素直になる事よ。焦っても変な者掴まされたら、それこそ初恋が台無しになっちゃうわよ。」

「初恋??」

「そう。アグリッピナが初めて誰かに恋をすると、それは初恋になるのよ。」

「初恋って言うんですね? そうなんだ。」

何だか頭の中がピンク色でぼんやりしてきた。お花のいい匂い。綺麗な大理石の神殿。うん? 誰かがこっちに手を振ってる。やだ、何だかホワーンってしてきた。

「仕方ない、私が初恋の極意ってやつを教えてやるから、今日はアグリッピナもトコトン飲むか?」

「え? 叔母様? 私、まだまだ子供なんで、無理ですう。」

「ウソつけ。ジュリアと遊びに来た時、陰で隠れてあたしの葡萄酒のんでたクセに。」

ギク!

やっぱり叔母様には暴露してたんだ。

続く

第八章「暗雲」第一百五十話

「うつひゃ、何だこれ？」

「アグリッピナ様？」

「ぐでんぐでんに酔っ払ってるじゃんか。」

「フェリックス、アグリッピナ様が履いてるソックスを脱がせるんだ。」

「ういっい。」

私はつい勢い余ってリウイツラ叔母様と葡萄酒を飲み過ぎたらしい。足はフラフラ、胸は酔いでムカムカ、頭はガンガン。

「ったく、バツカス様みたいにアグリッピナ様はバカバカ葡萄酒なんて薄めず飲むからだよ。偉そうにしても、やっぱりまだまだ子供だね？パツラス兄さん。」

た、確かにそうだけど。

叔母様が無理矢理薄めず飲ませたようなもの。

「フェリックス、いくら酔っ払ってても俺たちの主人のお孫さんだ。口の利き方に気をつけるよ。」

「ちえ、兄ちゃんはアグリッピナ様の事になると、途端に厳しくなるんだから。」

え？

「お前は先に行って、お兄様であるドルスス様を呼んでくるんだ。いいか？ウィプサニア様に見つからないように呼んでくるんだぞ。」

「あいよ。」

フェリックスはどうやらスタコラサツサと先にドムスへお兄様を呼びに行ったらしい。

「アグリッピナ様、大丈夫ですか？」

「うっぐ…気持ち悪い。」

「仕方ありませんね。」

そう言うと、パッラスは私の背中を摩りながら、イキナリ口の中へ指を二本いれてきた。

「いやら！らりしゆるの？」

「鳥の羽が今は無いので、私がアグリッピナ様を吐かせますので、我慢してください。」

「うっげ！」

やだ…。

吐いちゃった。気持ち悪い。

「もう一回いきましよう。」

「もういい！」

「いけません。ウィプサニア様に見つかっても良いのですか？」

「…。」

うっげ！
もう吐ける物なんかないよ、パッラス。

「よく頑張りましたね？」

そう言うとパッラスは、そばの井戸で手を洗って、手拭いを水で濡

らして、私の顔や口の周りを綺麗に拭いてくれた。

「せっかくお綺麗な顔立ちが、これじゃ台無しですよ、アグリッピナ様。」

「う、うっさいな〜！パッラスは年上だからって、奴隷のくせに一言多いんだよ。」

「はいはい、すみませんでした。」

「ムカツク〜！」

私はつい、手でパッラスの顔を叩いてしまった。

「あ…。」

気がついた時には遅かったけど、でも、彼も動揺している。

「あ、あんたがいけないんだからね、パッラス！」

「分かってますって…。」

「な、何よ？その口の利き方。私があんた達兄弟の命を助けたの忘れたの？本当に感謝しているの？」

その時、アクイリアの存在を思い出した。多分、パッラスもだと思っ。私は余計な事を言ってしまったと思っ、つい、目をそらしてしまっ。でもパッラスはジツと私の顔を見ている。私は何だかモヤモヤしたから、今度はちゃんとパッラスの頬を叩こうとした。

「あんたは素直なのが一番可愛いぜ。」

叩こうとした私の手は、パッラスにしつかりと握られ阻まれている。そして久しぶりの生意気な口の利き方。アクイリアが死んでから、絶対に私には無礼な口の利き方はしてこなかったパッラス。でも今

夜は違った。彼は今でもアルカディア王の末裔である事を、誇りにして生きている。

「アグリッピナ様、あなたはアケイリアの葬式をするときに、涙が流れそうだった俺に対して、首を横に振って堪えるよう命じたではありませんか。高潔な血筋をつまらないプライドで汚しちゃ駄目だよ。」

「…。」
「いくら酔っ払ってても、ワガママになったらおしまいだ。」

パッラスなんかに説教された。

でも、悔しさよりも、なんだか申し訳ない気持ちが出てきてる。

「もう、終わった？手を離してよ…。」

「あ！すみませんでした、アグリッピナ様！」

なんだよ、普通に帰ってるじゃんか。

もう…。私は地面に落ちてる自分のソックスを拾ってパッラスに投げつけた。

「痛っ！何するんですか？」

「して…。」

「え？」

「してよ…。」

「何を？」

口を尖らせたまま、なかなかその先が言えなかった。恥ずかしくて恥ずかしくて。もう一足投げつけたが、今度はかわされた。

「もう！なんなんですか？！アグリッピナ様！」

「おんぶ！」

「え？」

「酔っ払って歩けないから、おんぶしてよ…。」

するとパツラスは私のソックスをちゃんと拾って、腰に手を置いてため息をついたけど、ニコッと微笑んで背中をこちらに見せてしゃがんだ。私は駆け寄ってパツラスの暖かい背中に抱きついた。ギョツと。

「これでいいですか？」

「うん…。」

別に落ちるわけじゃないのに。

ギョツとパツラスにしがみついて、その少し大きな背中に、自分の頬を寄せた。

続く

第九章「初恋」 第一百五十一話

この年のサートウルナーリア祭は、私が覚えている限りで、とつても楽しかった記憶が残っている。もちろん、忘れられない大切な想い出もあるからだけど…。

サートウルナーリア祭とは、農業全般を司る神サトウルヌス様が、慈悲の心で太陽の下降を食い止めてくれた事に感謝し、12月17日から24日まで7日間に渡って冬至の祭りとして盛大に祝う感謝祭。あの初代皇帝アウグストゥス様が、サートウルナーリア祭でのあまりの馬鹿騒ぎに期間を三日間に短縮しようとして、ローマ市民から反発がきたほど、みんなみんなが大好きな冬のお祭り。

このお祭りの間は、公務も商売も学校も全部休みになり、祭壇に供え物をし、常緑樹が飾られ、ローソクや人形などの交換を行ない、サイコロ賭博も許され、何よりも一番の特徴は、奴隷とその主人がこの期間だけ表面上役割を入れ替えて振舞う。私はこの年まで全然気がつかなかったけど…。

アントニア様の解放奴隷リツラとシツラの料理人。彼女達は解放奴隷が被るピレウス帽をいつもしているけど、このお祭りの間は主人のアントニア様が被ってたっけ。

「シツラ様、リツラ様〜。」

アントニア様は今年こそ張り切るわよつと、腕を捲って解放奴隷になり切ろうと、ピレウス帽子を被っている。けど、慣れていないせいなのか、たまにズれたり、走って帽子を落したり慌てておかしい。

「あー、アントニア様、ごゆるりとされてください。私どもがまずはお食事のご用意を致しますので。」
「アツハハ！そうですよ、アントニア様。無理なさらずに。」
「いいのよ、ご主人様。」

嬉しそうにニコニコして奴隷の役割をこなしていた。昨年までは、父ゲルマニクスや親族の相次ぐ死去があったので、それほど盛大に祝う気分になれなかったからかもしれない。

「アグリッピナお姉ちゃん、私もピレウスの帽子を被りたい。」
「リウヰツラ、あなたには解放奴隷がいなくてしょう？」
「被りたい。」
「しょうがないな。うりゃ！」

あたしは自分のトウニカのスカート部分を、リウヰツラの頭から後ろに被せた。

「お姉ちゃん！見えないよ！」
「いつひひひ！」
「真っ暗だよ！」
「ざーまー！」

するとドルシツラがやってくる。
ブンブン怒りながら、遊んでないでお母さんの手伝いをしろと。冗談じゃないから、あたしとリウヰツラは二人で逃げた。

「リウヰツラちゃん。」
「ああ！ジュリアさん。」
「今日わ。」

「今日もウエスタの巫女ですか？」

「いいえ、今日はリウィツラちゃんにプレゼントだよ、はい。」

ジュリアが手渡したのは、お花で編んでくれてお人形だった。とっても可愛くて、お顔も花びらで上手く形どって、何処となくリウィツラに似ている。

「わああ！」

「ほら、リウィツラ。ジュリアにありがとは？」

「ジュリアさん、ありがとう。」

「いいえ、こちらこそ。」

ジュリアの犬のように優しさの滲み出るような笑顔は、私達姉妹にいつも笑顔を与えてくれる。

「アグリツピナ様と、ドルシツラちゃんには、こっち。」

「ええ?! 私にも?」

「もちろんですよ。」

とっても可愛いジュリアお手製のローソク。カラフルで可愛い動物の絵が描かれてて、本当に器用だなんておもう。

「アグリツピナお姉ちゃんもジュリアさんに作ったじゃん。」

「あ! リウィツラ。それは内緒って言ったでしょ?」

「ええ?! アグリツピナ様! 本当ですか?」

「いや、あの...。」

「お姉ちゃんのローソク、ちょうヘンテコなの。」

「リウィツラ!」

「全然イイです、アグリツピナ様。」

「早くジュリアさんに渡したら? お姉ちゃん寝ないで作ってたじゃ

ん。」

「もう、お前は本当に口軽いんだから。」

「フフフ。」

私はジュリアを寝室に連れて、布に被せたローソクを手渡した。

「中を見て良いんですね？アグリッピナ様。」

「うん。でも、笑わないでね。」

「もちろんですよ！」

ジュリアが布を取って見た私の作ったローソクは、メダルぐらいの大きさで、ローマ硬貨のように口ウを円形にさせて作ったローソク。右に私、左にジュリアの横顔を彫った。

「凄い！凄いですアグリッピナ様！」

「ねえー、お姉ちゃんって男らしいでしょ？」

「もう！」

「普通、こんな使いづらいローソク作らないよね？」

「ううん、とつても独創的で格好いいです。あたし、使わないで一生大切に持っておきます！」

「ええ？ジュリア恥ずかしいから、早く使っちゃってよ。」

「いいの！使わないほうがいいですよ！」

しかし、この時ジュリアが使わなかったお陰で、息子とあたしが向き合う硬貨を作らせる原因にもなったのだが。

チロチロリン！

「やった！！！！パッラス兄ちゃん、ドルスス様！僕の勝ちだ！」

「だぁー！クッソ！」

「さつすがフェリックスだな。」

「お前、なんかインチキ使ったんじゃないか?!」

「使っていないもーん!」

それにしても、男ってどうしてサイコロ賭博があんなに好きなのかしら?するとフェリックスがあたしを見かけて話しかけてきた。

「あ!アグリッピナ様。久しぶりに勝負する?」

「え?あたしはサイコロ賭博やった事ないからわからないって。」

「アグリッピナ、大丈夫さ。お兄ちゃん達が教えてあげるよ。」

「ええ、アグリッピナ様ならきつと幸運を運んでくれますよ。」

「ああ、パッラスのいう通りだ。」

パッラスがそう言うなら。

「うん、じゃあやってみようかな?」

サイコロ賭博は、占い師から強運の持ち主と言われた初代皇帝アウグストゥス様でさえ、たった一日で二十万セステルティウスも負けただどめり込み、クラウディウス叔父様にいたっては、サイコロ遊びの研究解説書をお書きになられたほど魅力的な賭事。そして、今まで計算が苦手だった私の人生を、一瞬にして変えてくれた出会いでもあった。

続く

第九章「初恋」 第一百五十一話（後書き）

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年 - 59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス（紀元前15年 - 19年）年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア（紀元前14年 - 33年）年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ（6年 - 31年）年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルスス（7年 - 33年）年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウス・カリグラ（12年 - 41年）年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ（16年 - 38年）年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ（18年 - 42年）年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア（紀元前36年 - 37年）年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィツラ・ユリア（紀元前13年 - 31年）年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>
父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス(紀元前15年 - 59年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セリウス(紀元前15年 - 60年)年の差 + 30歳年上>
父ゲルマニクスの親友

<セルテス(紀元前12年 - 63年)年の差 + 27歳年上>
父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ(17年 - 30年)年の差 - 2歳年下>
父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后(紀元前58年 - 29年)年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

>
<ティベリウス皇帝(紀元前42年 - 37年)年の差 + 57歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス(紀元前14年 - 23年)年の差 + 29歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア(5 - 43年)年の差 + 10歳年上>

アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長

女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年?31年）年の差+35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ジュリア・セイヤヌス（17年-31年）年の差-2歳年下>
セイヤヌスの長女。アグリッピナの親友

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年-29年）年の差+83歳年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年-65年）年の差+16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年-62年）年の差+15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年-69年）年の差+15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

【ユリウス家】

<ユリア・アグリッピナ（15年-59年）>
主人公。後の暴君皇帝ネロの母。

<ゲルマニクス(紀元前15年 - 19年)年の差 + 30歳年上>
アグリッピナの父

<ウイプサニア(紀元前14年 - 33年)年の差 + 29歳年上>
アグリッピナの母

<長男ネロ(6年 - 31年)年の差 + 9歳年上>
アグリッピナから見て、一番上の兄

<次男ドルスス(7年 - 33年)年の差 + 8歳年上>
アグリッピナから見て、二番目の兄

<三男ガイウスⅡカリグラ(12年 - 41年)年の差 + 3歳年上>
アグリッピナから見て、三番目の兄

<次女ドルシッラ(16年 - 38年)年の差 - 1歳年下>
アグリッピナから見て、一番目の妹

<三女リウィッラ(18年 - 42年)年の差 - 3歳年下>
アグリッピナから見て、二番目の妹

【アントニウス家系 父方】

<アントニア(紀元前36年 - 37年)年の差 + 51歳年上>
アグリッピナから見て、父方の祖母

<リウィッラ・ユリア(紀元前13年 - 31年)年の差 + 28歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔母

<クラウディウス（紀元前10年 - 54年）年の差 + 25歳年上>
アグリッピナから見て、父方の叔父

【アントニウス家系の解放奴隷、使用人および奴隷】

<ナルキッスス（1年 - 54年）年の差 + 14歳年上>

父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<パッラス（1年 - 63年）年の差 + 14歳年上>

父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<フェリックス（12年 - 62年）年の差 + 3歳年上>

父方の祖母アントニア及びクラウディウスの解放奴隷

<アクイリア（17年 - 19年）年の差 - 2歳年下>

父方の祖母アントニアの解放奴隷

<シツラ（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>

父方の祖母アントニアの解放奴隷

<リツラ（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>

父方の祖母アントニアの解放奴隷

<クツルス（紀元前15年 - 59年）年の差 + 30歳年上>

父ゲルマニクスの親友

<セリウス（紀元前15年 - 60年）年の差 + 30歳年上>

父ゲルマニクスの親友

<セルテス（紀元前12年 - 63年）年の差 + 27歳年上>

父方の祖母アントニアの解放奴隷

<ペロ（17年 - 30年）年の差 - 2歳年下>

父方の祖母アントニアの飼い犬

【クラウディウス氏族】

<リウイア大母后（紀元前58年 - 29年）年の差 + 73歳年上>
アグリッピナから見て、父方祖父の母親。初代皇帝アウグストウスの後妻

<ティベリウス皇帝（紀元前42年 - 37年）年の差 + 57歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟。初代皇帝アウグストウスの養子、リウイア大母后の長男

<ドルスツス（紀元前14年 - 23年）年の差 + 29歳年上>

アグリッピナから見て、父方祖父の兄弟の息子。二代目皇帝ティベリウスの長男

<リヴィア（5 - 43年）年の差 + 10歳年上>

アグリッピナから見て、父ゲルマニクスの妹の娘。ドルスツスの長女

【ティベリウス皇帝 関係】

<セイヤヌス（紀元前20年？ - 31年）年の差 + 35歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの右腕。親衛隊長官

<ピソ（紀元前44年 - 20年）年の差 + 59歳年上>

二代目皇帝ティベリウスの親友。シリア属州の総督。

<教祖キメラ（不明）>

密教「トウクルカ」を束ねる教祖。ドルスツスはセイヤヌスと信じている。

【後のアグリッピナに関わる人物】

<ウエスタ神官長オキア（紀元前68年 - 29年）年の差 + 83歳
年上>

ウエスタの巫女の長

<セネカ（紀元前1年 - 65年）年の差 + 16歳年上>
アグリッピナの盟友

<ブッルス（1年 - 62年）年の差 + 15歳年上>
アグリッピナの悪友

<アニケトウス（1年 - 69年）年の差 + 15歳年上>
後のアグリッピナ刺殺犯

<ティベリ・ゲメツルス（19年 - 38年）年の差 - 4歳年下>
俗称ティベリウス・ゲメツルス。ティベリウス帝の遺言より兄カリ
グラと共同統治を指示されるドルスツスの双子の息子の一人。

<ゲルマ・ゲメツルス（19年 - 23年）年の差 - 4歳年下>
俗称ゲルマニクス・ゲメツルス。ドルスツスの双子の息子の一人。

<ガイウス・アシニウス・ガッルス（紀元前41年 - 33年）年の
差 + 56歳年上）>

二代目皇帝ティベリウスの長男ドルスツスの母の再婚相手であり、母ウイプサニアの支援者

<マルクス・コツケイウス・ネルヴァ（紀元前58年 - 29年）年の差 + 72歳年上>

後の五賢帝ネルヴァの祖父で、母ウイプサニアの支援者

<アラトス王子（12年 - 25年）年の差 + 3歳年上>
属州アカエアにある小国の王子。アグリッピナの初恋の人。

第九章「初恋」 第一百五十二話

「ルールは簡単、こっちの赤い正四面体のサイコロと、もう一つの青い正六面体サイコロを同時に振ります。それで青いサイコロに書かれたローマ数字と、赤いサイコロに描かれたギリシャ文字を合わせて、その合計で勝負！」

多分、豚の骨か何かで作った指先程度のサイコロだと思う。意外に軽くてとても綺麗だった。

「ただし、アグリッピナ。こっちのギリシャ文字のサイコロの方は、
が25、 が15、 が10を表していて、出た数字と足せるけど、
が出た場合は30引くんだよ。」

「それじゃドルスス兄さん、仮に青いサイコロで6を出しても
出た場合は？」

「いきなり出して持ち点がない場合は、全部1になるんだ。」

「ひえ〜!!!」

するとパッラスが助け舟を出すように言葉を添えてきた。

「ただしアグリッピナ様、3と が出た場合には最高点の33を貰えるんです。」

「すごい!どうして3の場合だけ？」

「まあ3は縁起がいいってことで・・・。」
「なるほど!」

「みんなで一回ずつ振って、三回りした合計数で最高得点を取った人が勝ちになります。」

さらにこのサイコロ賭博のルールは面白くて、賭け金は自由に選択

できるが、自分の財産がなくなつてゲームが続かない場合は、赤いサイコロを投げて が出れば、みんなから借金する事ができるのだ。返済中に借主が借金をする羽目になった場合は、自分の財産は没収されてしまうそうだ。

「じゃ、みんなそれぞれ『財産』を出して。」

みんなそれぞれ硬貨を地面に投げて、手前に自分の財産を出した。さすがフェリックスは賭博士だけあつて財産をいっぱい持つてる。私はおこずかい程度しかないから、チヨロつとしか財産がない。

「アグリッピナ、自分で計算できなかつたら、お兄ちゃんが代わりにやっつてあげるからな。」

「大丈夫、ちゃんと自分でできます！もう、ドルスス兄さんつたら。」

「いっひひひ。」

するとフェリックスが器用に右手で二つのサイコロを指の間で動かしながら、人差し指で人数を数えながら順番を決めた。

「それじゃ、まずはアグリッピナ様から。」

「うわ、すつごく緊張するな。」

「あ、賭け金は先に決めないと。」

「はい、先ずはこんだけ。」

「おお！そんなにいいいの？」

「うん。」

「凄い強気だね。じゃあサイコロ振つて。」

私はフェリックスに手渡されたサイコロを二つ手の中に入れて、どうせなら乙女の気分でサイコロにキスをして、コロコロ転がしながら

らバァー！と振った。

「えつと3と だから…33!!」

「えええええ?!いきなりその数字?!」

「やったー!ドルスス兄さん、いきなり凄いの出ちゃった。」

「アグリッピナ、お前って凄い運がイイな。」

「エッへへ。パッラスもびっくりした?」

「ええ、もちろんですよ。」

フェリックスがそれでもニヤニヤしている。

「よし、僕だって負けないぞ!そりゃあ!」

しかし、フェリックスが出した数字は6と、つまり合計点は1。

「なぬうううう?!!」

続いてパッラスが と5を出して20、ドルスス兄さんが と6を出して31だった。これをあとふた周りして合計点で勝負する。その間に勝負の行方や動向を気にしながら、財産から賭け金を増やしたり減らしたりできる。フェリックスは自分が勝てると思ってガンガン賭け金を増やしてきた。

「やったー!!!!!」

「凄いです、アグリッピナ様!」

「ジュリアアちよう嬉しいよ!」

何と私は三回連続で3と を出して、合計点数が99点になった。もちろん振る前にサイコロへのキスは忘れなかった。

「だーーーーー！負けた！」

「フェリックスって意外にアグリッピナよりも弱いのかもれない。」

「ですね、ドルス様。」

「クツソーー！アグリッピナ様、もう一回！」

「イイわよ。」

何と次の勝負も三回連続で3とを出して全勝。フェリックスは前回掛けた掛けきを取り戻そうとし、大損した。

「えええ？！何で何回も3とを出せるんだ？」

「フェリックス、これってお前が作ったんだろ？」

「うん、おっかしーな。」

結局、この日の勝負はあたしが全勝で快勝。フェリックスの財産は借金の上に全て没収となった。

「フェリックスの奴は、賭博にのめり込むと周りが見えなくなるんだな。」

「うん、そうですね、ドルス様。」

まるでフェリックスの将来を暗示するような出来事だった。

続く

第九章「初恋」第一百五十三話

そういえば、このサイコロ賭博を通して、いつの間にかにローマ通貨の価値も勉強もしてたっけ。これはいつもの如く計算の得意なパッラスに教えてもらった。硬貨の高い順から、金貨のアウレウス、銀貨のデナリウス、青銅貨のセステルティウス、青銅貨のデュポンディウス、そして銅貨のアス。

「イイですか？アグリッピナ様、1アウレウスを得るには銀貨のデナリウスが25枚必要になります。」

「パッラス、その下の1デナリウスだと？」

「デュポンディウスが8枚、もしくはアスが10枚になります。」
「なるほどなるほど、パッラスの説明は分かりやすいね。」

「では．．．2デナリウスだとデュポンディウスは何枚必要ですか？」

「えっと、8枚で1デナリウスだから16枚！」

「正解！アスだと？」

「20枚！」

「大正解！」

どうやら私は通貨の勘定になると途端に頭が冴えて計算が早くなるみたい。ちなみに次の下の1セステルティウスを得るにはデュポンディウスが2枚必要で、1デュポンディウスを得るにはアスが2枚必要となる。

因みに、昨日のサイコロ賭博の勝敗は、私が圧勝で127アス。ドルススお兄様は85アス。パッラスが68アス。そしてビリっけつのフェリッククスが256アス私に借金している。

「だいたいフェリックス、お前は減った賭け金を取り戻そうとして、前回の倍の数を賭けるだろ？それじゃ、どんどん負けるに決まってるよ。」

「でもさパッラス兄ちゃん、アグリッピナ様って侮れないんだよ。いっぱい儲かっているのに突然賭け金少なくなったり。」

「まあ、それは勝負だからしょうがないさ。」

「くっそ〜。昔やったロムルスゲームでは絶対に負けなかったのに。」

「しかも、このサイコロ賭博をやるようになってからのアグリッピナ様は、一枚も硬貨のズレがないようにみんなの賭け金を暗算して賭けているんだよ。」

「えええ?!マジで?」

「お前気付かなかったか?必ず勝者が決まると、賭け金の合計金額を言った後に、みんなの財産の総額を確認してるだろ?」

「あああ!確かに!」

「さすが大母后リウイア様の元でお勉強されただけあるよ。あの人自身気付いていないだろうけど、その場の状況把握と流れを見逃さない。昔はすっごく計算苦手なはずだったのに、お金になると楽々と計算して答えてるしさ。」

「さすが、現金なアグリッピナ様だ…。」

私はパッラスとフェリックスの二人を目掛けて飛んで行くように走った。

「さあ!今日もサイコロ賭博やるよ!」

「えええ?!また今日も?」

「嫌とは言わせないよ、フェリックス。あんたは256アスの借金、私にあるんだからね!」

「何でそんなに細かい所まで覚えてるの?」

パッラスは少し微笑んでいる。

「忘れてたフェリックス。アグリッピナ様は、八十一通りの掛け算も一日で覚えてしまうほど、記憶力と暗記力は誰にも負けない方だった。」

「くそ、借金の金額チヨロまかすつもりだったのに……。」

「あははは、あの人には無理だな。」

結局、二日目のサートウルナーリア祭は、アントニア様とお母様の来客が多くて、楽しみにしていたサイコロ賭博はできなかった。私はいつものようにリウィツラとペロジュリアを引き連れて遊んでいた。パッラスもフェリックスもまだまだ解放奴隷ではないので、来客の給仕で忙しく働いている。

「ドルシツラお姉ちゃんは？」

「さあ。」

「さつき神棚のララリウムで献酒とお香をあげてました。」

「はあ。相変わらず働き者だ。」

「イツシシシ。アグリッピナお姉ちゃんが怠け者だからだよ。」

「なんだと？」

私は大股を開いて、両膝の上に肘を乗せ、儲けた硬貨でジャグリングをしていた。すると、ヘンテコな仮面を被ったカリグラ兄さんがやって来た。

「おい！アグリッピナ！お前は女のくせに股なんか広げて、だらしないぞ！」

つんと面倒くさい兄貴。

あたしは無視して、そのまま硬貨でジャグリングを続けていた。

「おい！聞いてんのか？それにお前がサイコロ賭博で巻き上げた金は奴隷達のものだろう？大体女のくせに賭博なんかやって、お母様が知ったら怒るぞ！」

私はカチンときた。

「だから何よ?!」

「お姉ちゃん…。」

「リウィツラは黙ってな。ガイウス兄さんはいつつもそうやってあたしばかりにいつちやもんつけるけど、口ばかりじゃない。それにこれはちゃんと相手の了承を得て、勝負して、勝って手に入れたの。それをいくら兄さんだからといってもとやかく言われる筋合いはないわ。」

私の勝気な性格は誰から見ても分かりやすいものだったかもしれない。とにかくカリグラ兄さんとは性格が合わない。

「黙れ！奴隷からなけなしの金を巻き上げるだなんて、ローマ人として恥ずかしいから、全部よこせ。俺が返してやる。」

「やだ！どうせ兄さんの事だから、全部自分の物にするんでしょ？それにあたしが勝って羨ましくて欲しいだけでしょ？たく、心が幼いんだから！」

すると一瞬にして私の目の前が、真っ白になった。気が付くと私は床に倒れて、目の前に硬貨がいっぱい広がっている。どうやら私はカリグラ兄さんが被っていた仮面で不意打ちを喰らって倒れたみたい。

「お姉ちゃん!?!」

「アグリッピナ様!?」

「黙れ!リウィツラ!ジュリア!」

私は気が付くと頭から血を大量に流していた。不思議と痛みはない。けれど、カリグラ兄さんは私の髪の毛を掴んでは唾を吐いて脅してきた。

「いいか、アグリッピナ!今度男の俺にそんな態度を取ったら、これだけで済むと思ったら大間違いだぞ!」

すると誰かが、私の髪の毛を掴んだカリグラ兄さんの手を払いのけた。

「ガイウス!やりすぎです。」

仁王立ちして兄カリグラを制止したのは、母ウィプサニアだった。

続く

第九章「初恋」 第一百五十四話

「お、お母様：？」

「ガイウス、あなたは自分で何をしているのか、わかっているのですか？！」

気が付くと、賓客達も何事かと集まってきた。頭から流血しているせいで、私の視界は段々と悪くなっていくなか、母親ウィプサニアはなんと、賓客の前でカリグラ兄さんを堂々を叱りつけて頬を何度も叩いた。

「アグリッピナ様！」

騒ぎにいち早く気が付いたパッラスが、慌てて私を抱えて寝室へと運んでくれた。私はフラフラはしないけど、耳元では大量の血が流れる音が聞こえてくる。

「大変だ！こんなに血が出てる。」

「うん、大丈夫だよ、パッラス。」

すると兄カリグラにつけられた唾を、パッラスは服の布で綺麗に取り除いてくれた。その心配そうな表情と慌てた姿に、私はパッラスへ感謝の言葉を伝えたくなってきた。

「あ…。」

「パッラス。」

「は！ウィプサニア様、何でしょうか？」

「宴会にいるネルウア様に伝えなさい。あの方なら解放奴隷の専門医師を常に連れてるから。後は私がアグリッピナを見ます。」

「は、はい…。」

するとパツラスは一目散に医師を探しに外へ出る。その後ろ姿を見送った母ウィプサニアは、ゆっくりと近付いてくる。いつもの何を考えているのか分からない表情で。

「…。」

私は怖くなって、少しだけ座りながら後退りを、母に気付かれない様にした。だって、またきつと怒られるのだから。母は右手をスツと差し出して頭の傷口を見ようとしたが、とっさに私の身体が反射的に拒否をしてしまった。ほんの少しだけ寂しそうな目つきで、母はゆっくりとため息をついて話し出す。

「傷口を見せてご覧なさい。」

「…。」

母は傷口を見ながら止血をしてくれた。さっきよりは出血が弱まってきた感じがする。

「顔は怪我していない？」

「はい…。」

「そう、良かった。」

久しぶりに…。本当に久しぶりに、母の横顔を間近に見つめると、意外に目尻や口元に微かな小皺が刻まれている。それは笑い皺の様にも繋がって見える。そっか、私には冷たい母だけど、笑っている時もあるんだ。

「どうしたの？」

「うっん、なんでもないです。」
「そう。」

なんだか他人行儀な会話。

でも、母の横顔は口元を緩ませて微笑んでいた。長いまつ毛の下に見える美しい瞳は、キラキラと輝いて笑みを浮かばせている。

「あなたも今年で七歳、来年は八歳になるのですね？」

「はい。」

「顔は大切に下さい。」

「はい。」

「今日のはガイウスが悪いわ。でもね、一つだけアドバイスさせて。」

「」

「…。」

私はまたお説教か、って思った。

「例え貴女が正しくとも、ヤケを起こした男の力は手に負えないわ。だからね、アグリッピナ。口は災いの元って事だけ覚えておきなさい。」

私は母の穏やかな言葉に、妙に納得してしまった。でも、なんだか恥ずかしくて母の目を見る事ができなかった。母もまた、私を真っ正面から見る事はなかった。

「ウイプサニア様！ネルウア様と医師をお連れしました。」

パッラスはマルクス・コツケイウス・ネルウアという老人と、アルテスという解放奴隷の医師を連れてきた。ネルウア様は以前にも見た事がある。コツケイウス氏族の方で、ドルスツス叔父様の母親と

再婚されたガイウス・アシニウス・ガッルス様と一緒に、母ウィプサニアに現皇帝討伐の為の資金提供を申し出た有力な貴族の一人。

「ふむふむ、軽く頭を切った程度じゃな。思ったより血が出ているけど、傷口は浅めだ。アルテス、治療してあげなさい。」

「はい、旦那様。」

解放奴隷の医師アルテスは器用に、温かいお湯で濡らした布で消毒して、前頭部の傷口を抑える為に、両耳と顎をふさぐ様に顔じゅうに布を巻いてくれた。

「ほほほほ、なかなか滑稽な巻き方じゃの。」

「え？」

「ほら、アグリッピナ。ネルウア様にお礼を言いなさい。」

「あ、ありがとうございます。」

「いいんじゃないよ。ウィプサニアの子供はワシらにとっても大切な大切な味方じゃ。何か困った事があつたらいつでも言いなさい。」

私は黙ってお辞儀をした。

賓客達は各々宴会へと愉しみへ戻っていく。気が付くと、周りにはいつものメンバーであるジュリアとリウィッタ、そしてパッラス達 が心配そうに私を眺めている。

「アグリッピナ様、大丈夫ですか？」

「お姉ちゃんいっぱい血が出てびっくりしたよ。」

「でも、コツケイウス氏族のネルウア様がいらして、本当に良かったですね。」

「そうだね、パッラス。」

でも、私は賓客達と宴会へ戻ろうとする母の姿をずっと見ていた。

母の一言が無ければ、私はまだ血を大量に流していたままかもしれない。その時、母ウィプサニアの偉大さを感じた。

続く

第九章「初恋」 第一百五十五話

サートウルナーリア祭三日目。
頭に傷口一つ。

「へへへ、アグリッピナ様、その顔じゆうに巻かれた包帯、結構似合ってるよ。」

「もう！フェリックス。私は恥ずかしくて本当は取りたいの。」

「まあ、しょうがないんじゃない？二三日は傷口がくつつくまででしょう？。」

「はあ。これじゃ恋もできないじゃない。」

「それさ。毎回僕は聞いてるけど、アグリッピナ様は好きな人いるの？。」

ドキッとした。

いない事はないけど、その人は絶対にあり得ないから…。

「分かってるわよ、フェリックス。好きな人がいなければ恋もできないってことでしょう？。」

「おお！学習したね。」

「お前は、奴隷のくせに偉そうなんだよ。」

「だって、僕はアントニア様の奴隷であって、アグリッピナ様の奴隷じゃないもんね。」

「こいつ！。」

きつと他の人には信じられない光景だけど、私とフェリックスは昔から主人と奴隷という間柄を気にせず、ざつくばらんな会話をしていた。後に彼はユダヤ属州の皇帝代官まで上り詰めるのだけど、きつと彼の物怖じしない堂々とした性格があったからかもしれない。

「そういう生意気な事を言いたければ、あたしにサイコロ賭博で勝つてから言いなさい！」

「あー！」

「今夜やるわよ。あんた借金まだ残ってるんだから。」

「ゲツ！まだ覚えてるの?!」

「あつたりまえでしょ？いくら私が怪我をしたからって、フェリックスの借金がチャラになるわけないでしょ。」

「やっぱりか…。」

私も確かにサイコロ賭博で儲けて調子に乗ってたかもしれないけど、普段の性格が怪我のせいで変わらない事も分かった。ただ、兄カリグラとはこれを機にますます仲が悪くなって、同時に兄カリグラ想いのドルシツラとも気まずい雰囲気になっていく。

「あ、ドルスス兄さん。」

「アグリッピナ、傷の方は大丈夫か？」

「ええ、すつかり。」

「しつかし、ガイウスの奴にはほとほと困ったな。一応兄ちゃんからも叱っておこうと思っただけど、お母様に止められてさ。」

「もういいですって、兄さん。それに今夜はネロお兄様がお戻りになられるんでしょう？」

「おお！そうだった。みんなで楽しくワイワイ騒ごう！」

しまった…。

高慢ちきのリヴィアもセットだった。あのアマは場の雰囲気読まないからな。

「アグリッピナちゃん！」

あちゃー。

噂をすれば、この声は。

高慢ちきのリヴィア。ネロお兄様の”一応”奥様。今夜の準備の為に

「聞いたわよ！パッラスから。昨日、サイコロゲームで大損して、ムカついたから頭ぶつけて血を流したって。」

「はあ?!」

あのさ…。

一体どういう解釈したらそんな風になるわけ？あたしが勝ってるのを認めたくない気持ちは分かるけど。

「アルテミス・ゲームでは仕方なくあんたに負けてあげたけど、サイコロ賭博では絶対にあんたなんかには負けないから！」

「そう、楽しみねリヴィア。あたしだって絶対にあんたなんかには1アスだってあげないつもりだから。」

「まあー！年下のクセに相変わらず言葉の使い方がなっていないんだから、あんたって人は。私は一応あなたの義理のお姉さんになるんだけど。」

「それが何か？だからあんたは『一応』姉貴なんでしょう？」

「んもう!!ほんっと、アグリッピナってムカつく!覚えてらっしゃい!!」

高慢ちきのリヴィアは怒ってスタスタ向こうへ行ってしまった。昨日、口は災いの元だってお母様に言われてたのに、懲りてないあたし。

”顔は怪我していない？”

”はい…。”

”そう、良くなった。”

間近に見たお母様の横顔。決して目を合わせようと、お互いにしないのだけれど、それがとっても印象的だった。
私は絶対に怒られるって思ってたのに、たった一言だけ、心配してくれたのかな？

「アグリッピナ姉さん？」

「うん？ドルシツラ？」

「ああ！ここにいたの？」

「どうした？」

「なんだかりヴィアさん、すっごくプンプンしてたけど、また何か言ったの？」

「ちよつとね。」

「姉さんって、本当に懲りない人だね。ガイウス兄さんだって、あのままじゃ可哀想じゃない。」

え？

「姉さんはそれで自分は満足かもしれないけど、それで周りの人がどれだけ傷付いてるか分かってるの？」

「ちよ、ちよつとドルシツラ。確かにあたしは兄さんを怒らすような事は言ったかもしれないけど、でも、怪我までさせたのはガイウス兄さんの方でしょう？傷付いたのは私の方よ！」

「違う！心を傷付けたのはアグリッピナ姉さん。姉さんの無頓着な言葉が心を傷付けるの！」

続く

第九章「初恋」 第一百五十六話

サートウルナーリア祭三日目 夜。
頭に傷口一つ、あと、心にかすり傷。

ドルシツラに言われた一言は、せつかくの馬鹿騒ぎなお祭りの楽しみさえも奪ってしまった。そう言えば、大母后リウイア様からも、先入観を持って接すれば、それだけ相手を理解する事が難しくなると言われてたつけ。駄目だな、あたしって。宴会の喧騒から少し身を引いて、中庭の噴水の近くに一人座って夜空を眺めていた。

「どうしたんですか？アグリッピナ様。」

「うん？あ、ジュリアか。」

「フェリッククスが、今夜こそアグリッピナ様から借金を取り戻すんだ！って息巻いてましたよ。」

「そう…。」

ジュリアは犬の様に首を傾げて、じつと私を眺めていた。心配かけないように笑って返したけど、ジュリアは頬を膨らませてる。

「もう、また無理してる！」

「え？」

「アグリッピナ様って、そうやって時々笑顔で”私は大丈夫よ”って顔をするけど、曇り空のように太陽が隠れていますよ。」

ジュリア…。

「別に何があつたか聞きませんが、無理しちゃダメ。そんな時の笑顔はすぐ暴露ますから。」

あたしの作り笑は曇り空か…。
ジュリアは繊細だから、本当によく分かってるんだな。

「じゃあ、こうやって眉間にシワを寄せてればいい？」

「プツ！何ですか？その変な顔。アツハハハ！口がへの字になっちゃってますよ！」

「変な顔って、ジュリアもひどい言い方するな〜。」

「アツハハハ、だって〜。」

この娘の笑顔に、笑い声に、私は何度助けられてきたんだろうか。本当はジュリアだって婚約者だったダルサスを失って辛いはずなのに。彼女は自分の事より、他人を気遣っている。あたしには無い優しさなんだよね。

「ねえねえ、アグリッピナ様。牡蠣って食べた事ありますか？」

「え？牡蠣？あたし、あんまり魚介類は好きくないから、食べた事無いな。」

「実は牡蠣には媚薬の効能があるらしんです。」

「媚薬？」

「そう、恋の媚薬です。」

本当に？

牡蠣にそんな効能があるなんて知らなかった。

「つまり、好きな人に牡蠣を食べさせれば、イチコロで自分に惚れてくれるわけですね。」

「ジュリア！今夜の料理って何が出るのかな？！」

「フフフ…。何と！炭火焼の牡蠣です！」

あたしの心は一気に舞い上がった。

「魚やエビを塩漬けにし、発酵させた魚醤のガルムはつけない方が、その効能は出るらしいですよ。」

「そっか魚醤のガルムは駄目なのね。それなら、生ならもつと良いのかな？」

「生牡蠣って事ですか？」

「うん。」

「どうなんでしょうか？牡蠣って生で食べれるんですか？」

「知らない…。」

何かと一緒にだったら食べれるんじゃないのかな？そう言えば、ガリアの解放奴隷料理人のシツラとリツラが、台所に調味料をいっぱい作ってたっけ。でも、今はサートウルナーリア祭だからアントニア様が料理の給仕だ！って事は、手薄になってるはず？！

「ジュリア、生牡蠣で恋の媚薬作ってみようよ！」

「うん、面白そう！やってみましょう！」

「お姉ちゃん？ジュリアさん？何してんの？」

あちゃー…。

一番口うるさいリウィツラに見つかった。しょうがない、ここは一つこいつも仲間にして。リウィツラの肩を抱きながら、仲間へ加わるように脅した。

「いいかい？分かった？あんたはお喋りですぐに言いふらすけど、もしそんな事したら、おねしょした事ドルシツラにバラすからね！」「やーん、そんなの暴露たらドルシツラお姉ちゃんに怒られる〜。」「だったら、黙ってあたし達の仲間になるか？」

「うん、仲間になる。あ、もう一人連れてきてもいい？」

「誰？ペロ？」

「うづん、ジュリアさんから貰ったレムス。」

サートウルナーリア祭の初日にジュリアがリウィツラにあげた人形のこと。毎日右手の親指を舐めながら、リウィツラはその人形を抱いて寝ている。

「うわ、リウィツラちゃん大切にしてくれてるの？」

「うん！」

「イイわよ、それじゃその人形も持つてきな。」

「違う！お姉ちゃん、人形じゃない連れて来るでしょ？」

「はいはい。」

どうやらリウィツラは自分が一番下だから、人形相手にお姉ちゃんを演じたいみたいで、弟のレムスを持つてきては、あたしの真似をして注意してた。

「いい？ジュリア、リウィツラ。これから台所に忍び込むから、くれぐれも賓客には暴露ないようにね！」

「はい！」

「はい、お姉ちゃん。いい、レムス分かった？くれぐれも賓客には暴露ないようにね！」

こうして、私達四人（？）は、生牡蠣で恋の媚薬を作る為に大作戦を開始した。

続く

第九章「初恋」 第一百五十七話

サートウルナーリア祭三日目 夜。

頭に傷口一つ、心にかすり傷、そしてスツカリ立ち直って冒険心一つ。

「あちゃー…。」

「やっぱり、アントニア様は出しっぱなし。」

「お姉ちゃん、台所めちゃくちゃじゃん。」

案の定、台所は嵐が吹き荒れた後のようにしつちやかめつちやか。

アントニア様は昔から料理を作る方は大好きなのだが、後片付けは
どうも苦手らしい。

「これって、後でリツラとシツラが片づけるんですよね？」

「うんそうね。まあ、ちょうど痕跡を残してもばれバれないだろうし、いいんじゃない？」

「バレないって？」

「意外にリツラはあんな大きな図体しているけど、とつてもきめ細かくて料理人の鏡だから。パツラスがその昔盗賊だった頃、台所から色々盗んでた時も、何盗まれてたか全部把握していたからね。」

「ええ?!あの陽気のリツラが?」

「うん、フライパンまで振り回して、すばしっこいパツラスを追い詰めて凄かったんだから。」

それにしても、どこに何があるのか検討がつかない。とりあえず私達は二手に分かれて漁りまくった。牡蠣、牡蠣、牡蠣はどこかな?

「しげやー!」

「どうしたのリウイツラ?!」
「頭!！」

駆けつけると、豚の頭がいっぱい入ってる大きな容れ物の前で、リウイツラは腰を抜かしてた。

「なんだ、豚の頭じゃない。おどかさないですよ。」
「だって目ん玉がこっち向いてるんだよ、お姉ちゃん。」
「あなたのお気に入りのレムスに護ってもらえばいいでしょ?」
「あ、そうだった!」

リウイツラは落とした人形抱きしめて、あたしのトウニカの裾にガタガタ震えながらついてきた。

「もう、リウイツラ。腰紐取れちゃうでしょ?引つ張らないですよ。」
「ただただだって、ここここ怖いんだもん。」
「此処は台所なんだから、色々あるに決まってるじゃない。」
「うぎゃ!」
「今度は何?」
「さささ魚の、あたあたあた頭踏んじやった...。」

もう、リウイツラは怖がりなんだから。その点、ジュリアは年上らしくテキパキと探してる。しかも器用に片づけながら...ら?

「ってジュリア!駄目だって。」
「え?なんでですか?だって、やっぱり出しっぱなしは良くないかなって思ってる...。」
「片づけしたら、あたし達が来た事すぐにバレるでしょ?」
「あ、そっか...。」

どこかトボけて天然入ってるんだよね、この娘って…。

「アグリツピナ様！見て見て！可愛い！」

「何？」

「ジュリアさん、何見つけたの？」

「ほら、カタツムリ達。」

そういうと、ジュリアは両手にいっぱいカタツムリ達を抱いていた。リウイッラはカタツムリも駄目らしく、そのまま気を失った。

「リウイッラ？」

「ありゃありゃ…。」

「この娘って、性格は勇ましいけど、意外にビビリなんだよね。」

「はあ…。カタツムリ、可愛いんだけどな。」

「そう言えば、この間、蠅を見ただけでも泣き出すくらい騒いでたな。」

「そうなんです？」

「うん。とにかくしばらく寝かせておこう。ギャーギャー騒がれてもうるさいだけだから。」

「ですね。」

それにしても、リッラとシッラは、一体牡蠣をどこにしまったのだろうか？

「た、大変だ〜！！」

え？

宴会の間から大きな声が聞こえてきた。やたらと騒がしい音が聞こえる。この足音は？ヤバイ、リッラとシッラだ。

「ジュリア！リツラとシツラがやって来るから、逃げるよ！」

「ええ?!」

「ほら！もう、カタツムリなんか腕に付けて遊んでないの！」

「は、はい！」

私はリウィツラと彼女のお人形を抱いて、台所から脱げ出した。カタツムリを外したジュリアも、床に滑りながら一緒について来くる。入れ違いにリツラとシツラが台所に入って来た。その後に、アントニア様も青い顔してついて来てる。何事だろうか？

「もう、アントニア様！どうして食べさせる前に、一言相談されなかつたんですか？」

「だって、媚薬の効能があるって聞いたし、生で見てたらおいしそつだったし…。」

「あー、それは本当に洗浄してから、炭火焼にしてからじゃないと、危ないんです。」

「でも、孫のガイウスに勧めたら、美味しい美味しいって食べるからつい…。」

ガイウス？

まさかカリグラ兄さんの事？

「カリグラ様もどうしてあんなにいっぱい食べたのでしょうか?!」

「あー、やっぱり調子乗ってたのでは？」

「でしようね。」

やっぱりカリグラ兄さんの事だ。

しかし何を食べたんだろう？

「あああ、どうしよう？ガイウス死んじゃう？ねえ？リツラ。」

「死にませんって！ただ、牡蠣は本当に生のままだとしても危険なんです！」

「魚醤のガルムを混ぜても？」

「あつたり前です！」

「あー、ただ、お腹が当たったのでしょうから、二三日は寝込むでしよう。」

「二三日も?!」

「大丈夫ですって。シッラ！温かいお湯もってくから容器を用意して！」

「あー、どこにあるの...?」

「あー！もう！アントニア様！台所めちゃくちゃじゃないですか！」
「だって、後片付けが、つい面倒で...。」

カリグラ兄さん、まさかアントニア様から生牡蠣食べさせられたとか？すると、横でジュリアが目を細めてコツチをジッと見ている。あたしは気まずそうに目を外した。

「アグリッピナ様...。」

「よ、良かったよ、ジュリア。やっぱり生牡蠣は危なかったんだね。」

「ですね...。」

すると、リウイッラがムクムクつと目を擦って起き出した。

「お姉ちゃん？」

「リウイッラ？目が覚めた？」

「リウイッラちゃん？大丈夫？」

「あ、ジュリアさ...。ぎゃー!!!」

またリウイッラは気絶した。

それは、慌てて出てきたジュリアの腕に一匹だけ、カタツムリが残っていたからだった。

続く

第九章「初恋」 第一百五十八話

サートウルナーリア祭四日目 朝。

生牡蠣食べて腹痛の兄一人、食べさせた張本人の祖母一人。そしてカタツムリの夢にうなされる妹一人。

「ネロお兄様?!」

「やあアグリッピナ。元気だったか?どうした?その包帯?」

「ちよつぱりガイウス兄さんを怒らせちゃって。」

「あーあ、ついにやつちまったか。お母様から言われてると思うけど、ガイウスは激情すると何でも投げってくるから気を付けるんだぞ。」

「はい。」

「でも、そのガイウスの奴は生牡蠣食べて寝込んでるそうじゃないか?普通は出されても食べないだろ。あいつは昔から食い意地が張ってるからな。」

「ははは...。」

まさか、アントニア様に食べさせられたとは口が裂けても言えない。それにしても、大人用のトーガを着ていないネロお兄様は、背も随分と伸びて遅しくなっていた。

「そう言えば、昨日はうちの家内のリヴィアがアグリッピナ、お前とんでもサイコロで勝負したかったって言ってたけど。」

あ!すっかり忘れていた。

そうだった。まいつか、高慢ちきのリヴィアだもんね。

「最近、フェリックスやパッラスから教えてもらったサイコロ賭博

なんです。」

「サイコロ賭博?!」

「はい、これが面白いように勝ってしまった。」

しかしネロお兄様は手で顔を塞いで、笑いながら呆れていた。

「参ったな。あれは男がするものだぞアグリッピナ。しかも、皇族の長女が堂々と勝利しているなんて。どこまで男勝りなんだか。」

「だって、勝ってしまうんですもの。しょうがないじゃありませんか?」

「ははは、そっか。」

でも、ネロお兄様だった。

微笑んで私の髪を撫でてくれた。やっぱりお母様と一緒にじゃない時は優しいな。

「それじゃ、今夜はお兄ちゃんも参加して、みんなで勝負するか?」
「ええ?! 本当に?!」

やったー!

私は指をパチンと鳴らして素直に喜んだ。これで高慢ちきのリヴィアが猫被ってくれる。

「しかもチーム対抗戦なんてどうだろう?」

「チーム対抗戦?!」

「ああ、僕にドルスス、パッラスにフェリックス、そしてリヴィアにアグリッピナ。合わせて六人いるだろう? 二人組でチームを作るんだよ。そしてサイコロを振る者と、賭け金を賭ける者で分けるんだ!」

うん？

ネロお兄様…。さっきはあんなだけ私の事をサイコロ賭博をする、男勝りのアグリッピナっとお嘆きになられてましたが、ひよっとしたら、お兄様も根っからの賭博士ですか？

「知ってるか？ユリウス家は、代々賭博で勝てる者と勝てない者に分かれるそうなんだ。」

「へえー、誰がそんな事を言ったんです？」

「初代皇帝アウグストゥス様らしい。」

「…。」

「どうした？」

イマイチ信用ならない言葉だ。だってアウグストゥス様って、一日で二十万セステルティウスもボロ負けしたような方でしょ？それって負け惜しみの言い訳のような気がする…。

「へえーそうなんですな。」

「だから、僕達の家族もどっちかになれるって事だよ、うん。」

私はこの時ネロお兄様の姿を見て、はっきり分かった事が一つある。男性はギャンブルで熱くなるのが好きで、しかも運試しで勝つ事を心の何処かで望んでいる事を。

「それではお兄様、チームはどうやって決めるんですか？」

「そうだな…。」

するとちょうど、パッラスとドルスス、そしてフェリックスが通り掛かった。

「おお！ちょうど良かった！お前たち、こつち置いて。」

「あ！ネロ兄さん！いつ帰って来てたんです？」

「さっきだよ。」

「ネロ様、お久しぶりです。」

「お久しぶりつす、ネロ様。」

「やあ、パツラスにフェリックス。」

そしてネロお兄様から、今夜、チーム対抗戦のサイコロ賭博で勝負する事を提案された。

「それは面白そうですね?!」

「だろ？ドルスス。」

「チーム対抗戦で、しかもサイコロを振る人と賭け金を賭ける人をそれぞれ決めるなんて。」

「なかなかいい案だろ？パツラス。」

「はい、色々な計算と戦略性が生まれそうです。」

みんなは一人を除いて目を輝かせて話している。しかしフェリックスは弱々しく手を上げた。

「でも…。僕の財産は全部アグリッピナ様に取りられちゃったし、借金もあるから無理だよ。」

「え?! そうなの?」

うん?

ひよつとしたら!

「はいはい！ネロお兄様、私はフェリックスとチーム組んでいいですか?」

「ええ?!」

「どうしてアグリツピナ様？」

「フェリックス、あんたは私に借金あるんだから当然でしょ？」

意外にバカみたいに賭け金を掛けてくるフェリックスだったけど、私が参加するまで賭博の才覚が一番あったのはフェリックスだった。

「よーし！それじゃ、僕は家内のリヴィアと組むから、ドルスとパッラスは二人組でチームでどうだい？」

「いいですね！」

「パッラスがいれば百人力だよ、ネロ兄さん！」

パッラスは計算に頼りすぎで、ドルス兄さんは消極的な賭け金しか賭けてこない。ネロお兄様とリヴィアはこの時点で未知数。しかし、さっきのお兄様の発言を聞いていれば、かなりのめり込む性格っぽい。リヴィアは私に対抗意識を燃やして来るから、ネロお兄様はそれを咎めるので戦略性が崩れそう。

「一体、何考えてるの？アグリツピナ様は。」

だから私はフェリックスが自分の敵になるまえに、取り込む事にしなかった。私はフェリックスにこっそり耳打ちをする。

「あんたを絶対に勝たせてあげる為だよ。」

「ええ?!」

続く

第九章「初恋」 第一百五十九話

サートウルナリア祭四日目 昼。

サイコロ賭博に俄然やる気を出してる兄二人、その妻一人、奴隸二人、そして一人必勝戦略を練る私。

「あら？アグリッピナ、もう食事はいいの？」
「はい、お母様。」

私はみんなよりも先に、正午の食事であるケーナを済ませて、中庭にフェリックスを呼んだ。

「ごめんなさい、アグリッピナ様。」

「遅いよ、フェリックス。」

「ちえっ！これでも僕は早く来たんだよ。全く奴隷使いが荒いんだから…。」

「ブツクサ言わないの。」

「はい。」

私はフェリックスから奪った財産を全部返した。びっくりしたフェリックスは慌てて落ちた硬貨を拾ってる。

「ど、どうして？」

「あんたさ、私が入る前にこんだけ勝ってたって事だよ。つまりどういふ事が分かる？」

「さあ？」

「ちゃんと冷静に判断すれば、あんたが一番、サイコロ賭博が強いって事。」

「ええ?!でも、僕はアグリッピナ様にこんだけ負けただってことじ

「やん。」

「あんた、まさか私が運だけで勝ってきたと思うの？」

「え？じゃ、やっぱインチキ？」

「それは、あんたの常套手段でしょ？」

フェリックスは恥ずかしそうにポリポリ頭をかいてる。

「私は此処ぞつて勝負の時に、自分の損失額を減らしたただけなの。」

「へ？どういう事？」

「ほーら、覚えてないでしょ？あんた、私が入る前はバカみたいに賭け金賭けてなかったのに勝てたでしょ？」

「うん…。確かに。」

「気が付いてないの？このサイコロ賭博の盲点を。」

するとフェリックスは必死に考え込んで思い出そうとしていた。そして何か閃いたみたい。

「うん？待てよ？まさか…。」

「そう、サイコロの合計点数で誤魔化されるけど、ようは賭け金で勝敗が決まるわけでしょ？」

「そっか！相手が多く賭け金を賭けてきても、自分が負けそうな場合なら少なくとも賭けて負担額を減らす。何故なら三回目のサイコロ振った時点で勝者だった人が総取りだからだ！」

「正解！つまり、二回目の自分のサイコロを振った時点で、相手との点数の差額を瞬時に計算し、最低の目を出しても30減るわけだから、そこで勝負するかしないか決めればいいの。」

「アグリッピナ様、すんげえ。」

私は更にサイコロを振った時の確率と計算式を地面に書いて、最低ラインの戦略方法をフェリックスに教えた。

「そんな事いつ気が付いたの？」

「あんたが私から自分の賭けた金を取り戻そうとして、前回と同じ金額を賭けた時、私は二回目で振ったサイコロの目では実はあんたに負けてたの。だから賭け金を少なくしてみたらドルス兄さんが勝った。でも、損失額ではあんたには負けてなかったってわけ。」

「ひええ〜。さっすがアグリッピナ様だ。パツラス兄ちゃんも言うてたけどさ、どうしてサイコロ賭博の時だけそんなに計算が早くできるの？」

「え?! 嘘?」

あ、確かにそうだった。

全然気が付かなかったけど、やたらと頭の回転が早くなった気がする。

「やっぱりお金が絡むと女の人は違うのかな？」

「は? なんじゃそら? それよりもさ、実はあんたにはもう一つやってもらいたい事があるの。」

「何?」

「多分、見ている連中も白熱すると思うから、そいつらにも賭けをさせてさ...。」

「ええ?!」

夕方も過ぎると、私達のサイコロ賭博の話は、アントニア様が預かっている、どっかの属州国の王子達にも回っていった。浮き足立ってきた子供達が、ソワソワしてはしゃぎ出す様な感じ。きつと親達も知らなかったわけではないと思う。しかし、そこはサートウルナーリア祭。多少の子供達の戯れは、大目に見られていた。ついにアントニア様のドムスの中庭隅で、ちょっとした戦いが始まるうとしてい

た。

「ドルスス、準備はいいか？」

「ええ、ネロ兄さん。」

「アグリッピナは？」

「もちろんですわ、お兄様。」

いつの間にかに、カエサルの血を引く兄妹対決になってたのも不思議。当時七歳の私は妙に冷静だった。観客は多くの身分階級の子供達がいっぱいで、私の出場に半信半疑の者もいれば、女の私に博打などと笑い出す連中もいた。

「フェリックス…。」

「うん。」

私は賭博の場を盛り上げる為、フェリックスに一世一代のパフォーマンスをさせてみた。観客が乗ってくるのは彼の演技次第だけだ。

「さあさあローマにお住みの属州国の王子様達！今宵、カエサルの血を引く兄妹によるサイコロ賭博が始まるうとしております。」

属州国の王子達は、奴隷であるフェリックスのパフォーマンスに目を奪われて耳を傾けた。

「注目株はやっぱり、あの英雄ゲルマニクス様のご長男ネロ様！昨年には成人を迎えられて、立派に公務に携わっており、更には、あのテイベリウス皇帝陛下のご長男ドルスス様の、ご長女リヴィア様とも華々しくご結婚された事は記憶に新しい事と思います！」

フェリックスはこういう事がとってもうまかった。今考えれば、そ

の道の役者奴隷よりも魅せ方を知っていたのかもしれない。ネロお兄様は、属州国の王子達へ笑顔で対応していた。隣にいる高慢ちきのリヴィアさえいなければな。

「一方！英雄ゲルマニクス様のご次男でらっしやるドルスス様は、来年は成人式を迎えられ、ご長男のネロ様にも引けを取らないほどのご実力！その計算力の早さには、個人的な事ではありますが、私の兄パツラスさえも凌駕するほど！ユリウス家一計算が早いお方です！」

ドルスス兄さんは照れながらも、「これ考えたのお前だろ？」って声に出さずにこっちを見て微笑んでいた。

「さてさて、忘れてはならないのが、長女のユリア・アグリッピナ様！女性でまだ弱冠七歳であられますが、皆様侮られてはなりません！かの初代ローマ皇帝アウグストゥス様の遺産の後継者であり、伴侶であらせられる大母后リウイア様より、幼少の頃からみっちり英才教育を受けられた方でもあります！」

そしてフェリックスはついに本題に入った。

「さあさあ！ローマにお住みの属州国の王子様達！見てるだけでは決してつまらないでしょう？！此処はカエサルを引く兄妹対決に、皆さんも誰が勝つのか、賭けをするのはいかがでしょう？！」

観客はフェリックスの提案に歓呼し、次々と我先にと賭けをする王子達が硬貨を出し始め、自然と場は盛り上がっていった。

「僕はやっぱりネロ様だ！」

「僕もネロ様に賭けるぞ！」

「いや、ドルス様だ！」

「ドルス様こそが、勝者に決まってる！」

ドルスス兄さんは呆れてこっちを見ている。これで私以外の人に賭けられて、フェリックスが私に賭けて、私が勝利すれば、とんでもない額が！！

「では、予はユリア・アグリッピナ様に賭ける事にしよう。」

え？

それは滑らかなギリシャ語を優雅な佇まいで使い、透き通る様な白い肌と品性溢れる顔をした、モエシア属州のアカイアにある小国王子アラトスだった。

続く

第九章「初恋」 第一百六十話

サートウルナーリア祭四日目 夜。

カエサルを引く兄妹三人と高慢ちきな妻一人、奴隷二人と属州の小国王子一人。

「アグリッピナ様？」

「うん？」

「どうしたんですか？ボウっとしちゃって。」

「あ、フェリックス。うん、うんとね。なんでもないの。」

なんて声なんだろうか？

まるで夏のそよ風が耳元で囁くよう。

私は一瞬にしてアラトス王子の声に虜になってしまった。

「アグリッピナ様：大丈夫？」

「だ、大丈夫だって。ほーら、フェリックス頑張るよ！」

でも、アラトス王子の視線がとつても気になって、マトモな考えができていない。ダメだ。彼がじっと私を見つめているのが手に取るように分かる。

「アグリッピナちゃん！今夜は絶対に負けないからね！覚悟しなさいよー！」

いつもなら高慢ちきなリヴィアと口喧嘩できるのに、アラトス王子にそんな恥ずかしい姿は見せたくないって思ったら、なにも言えなかった。

「なんだ？アグリッピナ、お前緊張しているのか？」

「あ、いえ、ネロお兄様。」

「兄さん、観客にも賭けさせる案は絶対にアグリッピナが考えたんですよ。」

「あっははは、知ってるさ。そうでなければフェリックスが、アグリッピナの前であんな勝手な事ができるわけない。」

「どうしよう？」

「なんかあたし変だわ。まるで金縛りにあつたみたいで…。あ！」

”恋すると、ビビビっとね。”

「ウソ！」

「これなの？えええ？！なんでこんな時に？どうしよう？恥ずかしいよ。男勝りだって思われたら。私はチラッとアラトス王子を見た。ふう、良かった。こっちを見てない。」

「あっ。」

「ニコっ。」

「なんなの〜！」

「なんでわざわざ振り向いて笑顔見せるの〜？この王子は。しかも笑顔がとっても綺麗。はぁ〜どうしよう。心臓がドキドキしてきた。」

「うん、やっぱりネロ兄さんの言うとおり、アグリッピナは自分でし掛けといて緊張しているみたいだ。」

「うんうん、チャンス！」

「違っって！」

全然違う緊張だった！もう、お兄様達ったら。パッラスだけが静かに私を見つめていた。あー！恋って面倒くさい。

「では、勝負を始めます！」

観客達は一斉に盛り上がって、それぞれに賭けた相手を応援している。私はさつきからジッとアラトス王子から視線を受けている。その眼差しがとっても穏やかで品が良かったの。

「よっしゃー！」

「うおー！ネロ様いきなり最高点！」

「よーし！僕も負けないぞう！」

「かかって来い、ドルスス！」

結果…。

サイコロ賭博の場は大いに盛り上がり、予想は大きく反せずネロお兄様の圧勝だった。私とフェリックスは最下位。しかもボロボロ負け。おまけにドルスス兄さんに多額の借金もする羽目に。

「アグリッピナ様…。なんで練習通り計算しなかったの？」

「フェリックス、ごめん…。」

「あゝあ！これじゃ当分頑張っても借金地獄だよ！」

私は冷静に判断する事さえできず、もちろん計算もめちゃくちゃ。更には以前のフェリックスと同じく、賭け金を取り戻そうと負担額を増やしてしまった。

「悪いなフェリックス、アグリッピナ。今日はとっても儲かったぜ！」

「ドルス様、気持ちいいですな。」
「うう、パッラス兄ちゃん。」

けど、私は負けたお金なんてどうでも良かった。それよりも、唯一私を信じて私にだけ賭けてくれたアラトス王子に申し訳ない気持ちで、心が引き裂かれそう。俯いて落ち込んでいると、アラトス王子がゆっくり頬笑みながらこっちにやって来た。

「アグリッピナ様、予は貴女様が太后リウイア様の元で、幼い頃から英才教育を受けていたと聞いたので信じたのです。それをサイコロ賭博は遊びとはいえ、男の世界では勝負は真剣にやるのが礼儀残念です。」

そう言うと、またニコッと笑って向こうへ行ってしまった。

ショックだった。なんて事。とつても素敵な声で怒られてしまった。女だからって男の世界では甘えるなですって……。こんな気持ちじゃなければ、文句の一つでも言い返せるのに。はぁー。嫌だ嫌だ。自分が大っ嫌い。

「参ったな〜どうやって借金返そう？アグリッピナ様？」

嫌だ嫌だ。

なんであたしこんなになっちゃったの？気持ちが全くおさまらず歯ぎしりして、しかめっ面していた。

「ア、アグリッピナ様？どうしたの？」

「ううう……。」

「アグリッピナ様？まさか、負けて悔しくて泣いてるの？」

「バカ！違う！」

ポカッ！

勘違いしているフェリックスの頭をげんこつで叩いた。

「痛つて〜！じゃあ？なんで泣いてるんですか？」

「そんなの…。そんなの…。知るわけないじゃん！」

悔しい悔しい。

本当に悔しい。どうしてこんな気持ちになっちゃったんだろ？私は恋をして失敗した恥ずかしい自分に居た堪れなくなつて、思わず地面にしゃがんで両手で顔を塞いで大泣きしてしまった。

続く

第九章「初恋」 第六十一話

サートウルナーリア祭五日目 朝。

ずっと泣き明かした情けない長女一人。

「まあー！珍しいわね。」

「ええ、アントニアお義母様。ずっと一人で部屋に籠って泣いてたそうなんです。」

「あの勝ち気で男勝りのアグリッピナが？信じられない。どうしたのかしら？」

「ネロ、ドルスス。あんた達は兄弟揃って、サイコロ賭博で容赦無くアグリッピナをコテンパンにしたんじゃないの？」

「違いますよ、お母様。なあ？ドルスス。」

「うん、ネロ兄さん。僕達は正々堂々とちゃんと勝負しました。観客のみなんだって証人ですよ。」

「それにしたら、どうして食事も取らないで泣いてるの？あの娘、そんなに賭博で負けたのが悔しかったのかしら？」

「でしょうかね、アントニアお義母様：。」

そんなんじゃないんです、お母様。

母ウィプサニアの声は、しっかりと壁一枚を隔てて私の寝室まで聞こえてくる。みんなが私を心配して、寝室の外で集まっている。本当は泣き過ぎて目が腫れぼったくなってしまっただけで、今度は出るに出来なくなってしまうのです。こんな顔、アラトス王子には恥ずかしくて絶対に見せられない。

「おーい！アグリッピナ。お兄ちゃんと木登りしよっか？」

ネロ兄さん、ごめんなさい。

今はそれどころではありません。

「ダメだな、反応無いな。」

「木登りあれだけ大好きなのに、全く無反応って。」

「おーい！アグリッピナ！果物あるぞ！」

ドルスス兄さん、ごめんなさい。

今は喉に何も通らないほど辛いのです。

「やっぱり引つかからないか。」

「食い意地あるのは、ガイウスの方だしさ、ネロ兄さん。」

「あ、そっか。」

するとそこへカリグラ兄さんがやって来たみたい。

「仕方ない、ネロ兄さん、ドルスス兄さん。僕があいつを怒らせてみるよ。」

「本当か？ガイウス？」

「簡単だよ。あいつは能天気で頭ん中がバカだから、怒らせたなら、すぐに扉開いて怒鳴り散らすって。おーい！おたんこなすアグリッピナ！意気地なし！出て来いよ！」

なんですって？！

もう！カリグラ兄さんっていちいちムカつく。でも、アラトス王子にそんな姿見せたく無い。

「ありやありや？全く返事が無いや。死んでんじやないの？」

「ガイウス！何て縁起でもない事言うの？！」

「ごめんなさい。」

「とにかく、私やアントニアお義母さんは、アグリッピナが元気に

なつてくれさえすればいいから。」

「そうね、普段元気な子が元気が無いと、調子狂っちゃうしね。」

「あの…。」

「なあに？ジュリア。」

「ここは、私に任せていただけませんか？」

「ジュリアさんならきつと大丈夫！」

「本当に？ドルシツラ。」

「うん！お母様、ジュリアさんならお姉ちゃんと仲が良いからきつと大丈夫だつて。」

「リウイツラ、本当に？」

「はい、アントニア様。」

「それじゃ、若い女性の貴女達三人に任せましょう。さあ、ネロ、ドルスス、ガイウス、行きましょう。」

ジュリアとドルシツラとリウイツラを残して、他の人達は去って行ったみたい。ジュリアは音も立てずに扉の隙間から細いかんぬきを取り外して、閉じこもってた私の寝室に侵入してきた。

「アグリッピナ様、入りますよ…。」

「ジュリアアーーーーー！」

私は堪らずジュリアに泣きついた。彼女は優しく私を抱きしめて頭を撫でてくれる。

「まあまあ、こんなに腫れぼったく目を赤らめちゃって。どうしたんですか？」

「恥ずかしいの。もう辛い。苦しくて、生きていけないの。」

「お姉ちゃん、そんなに苦しいんならウンチだしてきたら？」

「こら、リウイツラ！」

ポカッ！

ドルシツラはゲンコツでリウィツラの頭を叩いた。

「アグリツピナ姉さん、ひよっとしたら…好きな人できたんじゃないの？」

ギク！

ドルシツラ、なんて鋭い妹。

「えええ？！そうなんですか？アグリツピナ様？」

「ええ？！私、当てずっぽうで言っただけなんですけど、姉さん本当なの！？」

「お姉ちゃん？！誰誰誰？」

私はとつても恥ずかしくて。

でも、抑えきれないこの気持ちを誰かにも伝えたくて、ボソボソッと呟いた。

「アラトス王子…。」

「え？誰？」

「あああ！昨日お姉ちゃんだけに賭けてたアカイアにある小国の王子だ！」

「あのお方ですね？！とても喋り方に品があつて。」

ジュリア、ドルシツラ、リウィツラは一同に驚いていた。でもしばらくすると、三人は私が高んて寝室に籠っているのか不思議がった。

「そりゃあ、お姉ちゃんは昨日負けちゃって、好きな王子からそんな風に言われたらショックだろうけどさ。だからって部屋に籠って

泣き続ける事無いじゃん。」

「そうそう、リウィツラの言う通りよ、姉さん。好きな人ができたんだから、いつものように堂々と胸はっついていればいいじゃないの、ねえジユリアさん？」

「そうね…。確かにリウィツラちゃんやドルシツラちゃんの言う通りかもしれないけど、フフフ…部屋を出たくない理由はもう一つありそうですね？アグリッピナ様。」

ギク！

さすがジユリアは私の性格を熟知している。私は頷いた。

「きつと腫れぼったくなってしまった目を、アラトス王子様には見られたく無いでしょう。」

「お姉ちゃん…。」

「姉さん…。」

するとジユリアは優しく頷いて、私の背中を摩りながら、ある宣言をしてくれた。

「よし、リウィツラちゃん、ドルシツラちゃん。アグリッピナ様のオシヤレ改造計画を実行しましょう！」

続く

第九章「初恋」 第一百六十二話

サートウルナーリア祭五日目 昼。

立ち直るべく決意した長女一人、それを応援する妹二人、ここぞとばかりに腕をふるう女友人一人。

「私、絶対にアグリッピナ様ってお化粧したら、どの男性からも魅力的に感じる女性になると思うんです。」

ジュリアの自信は漲る勢い。しかし、下の姉妹二人はそう思っておらず。

「でもジュリアさん、姉さんの場合はガイウス兄さんも言ってたけど、勇ましいアマゾネスの女王ペンテシレイア様の印象があるでしょうっ?」

「そうそう、お姉ちゃんってお淑やかなイメージ無いから、きつと無理だよ。」

「甘いですよ、ドルシツラちゃん、リウィツラちゃん。私の手に掛ければ、アグリッピナ様は愛と美の女神ウエヌス様のように美しくなられます。」

「えええ?!お姉ちゃんが?」

「ウエヌス様のように?!」

嘘でしょう...?」

せめて戦の女神ミネルウアくらいだと思ってたけど。ジュリアは犬のように垂れた目で笑顔で答えた。

「まず、アグリッピナ様はとっても眉毛がきつく見えるでしょう?これって角度が鋭いからなんですよ。でも、ちゃんと緩やかな山の

形に整えてあげれば、ガラリと印象が変わります。」

「へえー。」

「へえー。」

へえー。

私達三人はジュリアの化粧方法に感心していた。さらにジュリアの化粧指南は続いていく。そして、自分の化粧道具をいれた木箱を持つてきて、早速取り掛かってくれた。

「ほら、ドルシツラちゃん見てご覧。お姉さんのまつ毛って意外にこんなに長いでしょう?」

「本当だ。」

「これをこの細いくしで少しだけ向きを変えてあげると…。」

「ああ!すごい、目が大きくなった。」

私はなんだか大理石彫刻の像の気分になってきた。ジュリアが一つ一つを丁寧に化粧して行くと、妹達は私の顔を、まるで初めて見るように覗き込んで驚く。

「腫れぼったくなつたまぶたも、白塗りで少しだけ影を付けてあげて…。」

「すごい…。あつという間に綺麗になった。」

「それとアグリッピナ様の顎つて、スつとしてシャープでしょう?」

「うん、男の人みたい。」

「なんだって?リウイッラ。」

「ごめんなさい、お姉ちゃん。」

「でも、実は頬紅も少しだけつけると、こんなにセクシーに見えるのよ。」

「わあ!すごい…。色っばい。」

もう、自分ではどうなってるか分からないから、いくら妹達が感激してもなーって感じ。

「アグリッピナ様、待っててくださいね。もう少ししたら鏡で見せて差し上げますので。」

「うん。」

「お姉ちゃん、きっとビックリするよ。」

「リウィッラ、そう?」

「うんうん、私達だって姉さんがこんなに綺麗になるなんて思ってたかったもん。」

「ドルシッラまでもそんな風に言うの?」

「その言葉には、嘘偽りは無いみたいですよ、アグリッピナ様。さあ！出来上がりました!」

ジュリアは手鏡を二つ持って見せてくれた。彼女はニコニコしながら見つめている。

「だ、誰...?」

「フフフ…。紛れもないユリウス家の長女ユリア・アグリッピナ様ですよ。」

「嘘...でしょう?」

鏡に写っているのは、本当に女神ウエヌス様のようで、お淑やかで美しい女性の顔を持った人物が、コツチを驚いて覗いてる。

「あたし...なの?」

「うんうん、お姉ちゃんだよ。」

「本当に姉さんって品のある顔立ちしていたんだ。唇だっと思って魅力的だし。」

「アグリッピナ様のお顔は首がしつかりされてるから、男性的に見られがちですけど、それを逆に強調する事で女性らしさを醸し出せるんですよ。」

私は瞬きをしたり、顔を動かしてあらゆる角度から覗いて見たけど、やっぱり自分と同じ反応をしている。本当にあたしなんだ…。

「ジュリア、ありがとう…。」

私は嬉しくて思わず泣いてしまいそうだった。

「ああ、お姉ちゃん泣いたら折角のお化粧が取れちゃうよ。」

「あ、いけない。」

「姉さん、リウィッラの言う通りよ。」

「うん、分かった。もう、泣かない。」

するとドルシッラとリウィッラは顔を合わせてモゾモゾし始めた。

「どうしたの？あんだ達。」

「うん、実はね、私達からお姉ちゃんにあげたいものがあるの。」

「え？何？」

するとドルシッラとリウィッラは、とっても綺麗な衣服の蒼いストラを広げた。

「ええ?!」

「姉さんって、いつも赤とかオレンジとかのストラばかりでしょ?でも、この色だったらとってもスッキリした雰囲気になると思うんだ。着てみて!」

あんた達…。

私は思わず泣いて二人の妹達を抱きしめた。微笑んでいたジュリアも呼んで、ギュッとギュッと強く抱きしめた。ありがとう…。本当にありがとう。

続く

第九章「初恋」 第一百六十三話

サートウルナーリア祭五日目 夕方。
妹達や女友達の好意に甘える長女一人。

「アグリツピナお姉ちゃん、こうなったらもう一回！今夜にでもサイコロ賭博して、勝って、アラトス王子にお返ししたら？」
「ええ？」

「そうよ、姉さん。リウィツラの言う通りよ。折角ジュリアさんにこんなに綺麗にしてもらったんだから、自信だっけついたでしょ？」
「で、でも…。」

私はジュリアの方を見た。
彼女も優しく微笑んで頷いてる。

「それこそアグリツピナ様には、大母后リウエア様から教えてもらった多くのものがあるじゃないですか。大丈夫、今はちよつと怖がりになってるだけで、リウエア様から言われた通りにしていれば、心も身体も勝手に動いてしまいますって。」
「そ、そうかな？」

「姉さん、そうだって。ジュリアさんの言う通りよ。」

でもあの声、あの笑顔。

あんなに素敵な姿を前にしたら、私は絶対に顔が真っ赤になって、シドロモドロになっちゃう。

「やっぱり、無理だよ…。」
「もう！お姉ちゃん？」

「姉さん、前に大母后リウエア様から言われたの、忘れたの？」

「え？」

「” 恐怖で目を背けて逃げるのならば、その恐怖を凝視して立ち向かえ” って。」

確かに言われたけどさ。

でも、それって敵とかの場合じゃない。王子は敵とかじゃなくって、なんて言うの。

「そんなの無理。だって、もし頑張っても笑われたらどうする？ きっと幻滅させちゃったから、アラトス王子だって怒ってるし。」

「怒ってないって。元気良く駆けずり回って遊んでるよ？」

「え？ 何処で？」

「中庭で。」

「うそー！ー！此処からめっちゃくちや近いじゃない！？ 私が部屋に籠ってるのばれたらどうしよう？！」

「ってか、もうみんな知ってるって。」

「ええええ？！ 嫌だ！ 恥ずかしい！」

「んな事言ったって、いつも元気なアグリッピナお姉ちゃんが、突然部屋に閉じ籠ってれば、誰だって心配するし、気になるって。」

「あわわわわ、ダメだって。もう、そんな事まで知られたら立ち直れないよ〜。」

私は頭を抱えて泣きそうだった。

だって、本当に心の中でアラトス王子の笑顔がいつぱい。はあく。するとジュリアが私の後ろで妹達に何か合図を送ってた。私は振り向いたけど、咄嗟にその合図を隠された。妹達はニヤニヤし始めて私に近づいてくる。

「ちよ、ちよつと！ あっは！ キヤハハハハハハ！ あんた達、ちよつと！ あはは！ キヤハハ！ やめ、やめてったら！ キヤハハハハハハ！

「キヤハハハハハハ！」

くすぐりの刑だった。

「アグリツピナお姉ちゃん！もう一回頑張る？」

「キヤハハハハハハ！」

「姉さんが、やるって言わない限り、くすぐるのをやめないから！」

「ちょ、ジュリア！やめなさい！キヤハハハハハハ！」

「やめませんよ〜アグリツピナ様！」

く、苦しい！

くすぐつたくて笑いが止まらない。

「キヤハハハハハハ！わか、分かったから！やるって！」

「お姉ちゃん〜本当に？」

「キヤハハハハハハ！やるから、もう、本当だって！」

「後で姉さんがやっぱり無理ってのは無しだからね。」

「キヤハハハハハハ！くすぐるのをやめて〜！苦しい！」

「アグリツピナ様！ユピテル様に誓って？」

「キヤハハハハハハ！うん、誓う誓う！」

もう！

ジュリアってどうしてこういうのが上手いんだろう？なんだかいっぱい大きく笑ったら、さっきまで悩んでた事が吹き飛んだ。

「笑いに勝るものは無し、ですね？アグリツピナ様。」

完敗だった。

女性の美しさを引き出されたうえ、更にはくすぐられてもう一回立ち向かえと誓わされるなんて。そんな事まで出来るのは後にも先に

も、ジュリア以外いない。

「負けた。あんた達の優しさに本当に完敗。というより、本当にありがとうだね。せつかく此処までしてもらっておいて、何もできないのってもつたいないじゃない?」

私は三人にウィンクした。

「お姉ちゃん?」

「姉さんって、やっぱり肝っ玉がどつか違うんだね?」

「アグリッピナ様は、本当に度胸は凄いですから。物怖じなんて誰にもしないんですよ、本当は。」

好きになっちゃった人には別かな?」

「ヨーシ!そうになったら、早速テキパキと開始するっか?」

「え?もう、お姉ちゃん始めるの?」

「あつたりまえでしょ?リウィツラ。まずはフェリックスとのサイコロ・コンビを再結成して、兄さん達にもう一度勝負してもらえるように、懇願を試してみる。」

私は指を鳴らし腕を伸ばして、息巻いた。しかし、ジュリアはクスクス笑いながら、突っ込みをいれてくる。

「アラトス王子にも、ちゃんとご挨拶されるんですよ?」

「あ...」

「アグリッピナ様は、大丈夫ですね?」

「うん。あたし、あの王子に単に憧れてるだけなのか?それとも本当に好きなのか?ちゃんと確かめてくる!」

王子の事、なぜか好きだ！って気持ちはいっぱいある。ちゃんと顔は見れないかもしれない。

「私の体内には神官カエサル様、その右腕アントニウス様、初代皇帝アウグストゥス様、そしてその右腕軍神アグリッパ様の血、そしてローマ国家の英雄ゲルマニクスお父様の血だって流れてるんだから。」

「うんうん！」

「怖いものなんてあるもんか！」

「そうそう！」

「たかがモエシア属州のアカイアにある小国王子一人じゃない！ユリウス氏族のカエサル家の血を引く者として、絶対に負けないわ！ぶちのめしてやる！」

あたしは鼻息も荒く、頑張る宣言を試してみた。

「お姉ちゃん、好きな人ぶちのめしてどうするの！」

「あそつか…。」

「姉さんって、やっぱりどこか極端な性格なんだよね。」

「はい…。」

「アグリッピナ様、たかが属州国って発言は…さすがにアラトス王子には印象悪く与えてしまうような…。」

「そうでした。」

あたしはやっぱり、男勝りなあたしなんだなって思った。

続く

第九章「初恋」 第六十四話

サートウルナーリア祭五日目 夜。

「ええええ?!アグリッピナ様なの?」

「そうよ、フェリックス。」

「う、うわー!」

フェリックスは本当に私だと信じられなくて、身体を震わせてビクビクしていた。生まれて初めての化粧が、こんなにも楽しい事だなんて。

「なんか、見た目はお淑やかなのに、喋るといつものアグリッピナ様だなんて、何か変なの。」

「あら、フェリックスくん、そうかしら?すっかりとした心構えを持ってとお話しすれば、優雅な時間を演出する事だって出来るのですよ。」

「あ、あああわわ。誰…ですか?」

フェリックスはからかうと本当に面白い。自然と彼は礼儀正しく私に接するようになっていった。すると、遠くの方からお兄様達が出て来た。

「うん?どこの属州の女の子だ?」

「とっても上品で綺麗ですね、ネロ兄さん。」

「ああ、あんな娘いたっけか?」

私はさらに面白がって、お兄様達に他人行儀でお話しかけた。

「おや？ユリウス氏族のネロ・ユリウス・カエサル・ゲルマニクス様に、ドルスス・ユリウス・カエサル・ゲルマニクス様でしょうか？初めまして。」

「はは、私達兄弟の事、存じ上げてましたか…。初めまして。」

「どうも、初めまして。ゲルマニクスの息子です。」

「ご聡明なお二方にお会いでき、心より大変光栄です。今宵はとも月が世界を一面に照らし、お二方の出逢いを祝福されているのでしようね。」

「ああ、はい。そうだと良いですね。あはは…。」

しかしドルスス兄さんは、どうも齒切れが良く無くて、不可思議にこっちを見ながらネロ兄さんへ耳打ちしている。

「ネロ兄さん、この娘誰なんだろう？自分の事を全然名乗らないですよ。」

「うん…。本当だな。しかし、聞くに聞けないよ。」

「兄さんは成人迎えたじゃないですか、ちよろつと聞いてみてくださいよ。」

全部筒抜け。

何とも面白いので、このまま騙し続ける事にした。

「ところで、貴女はどちらからいらしたのですか？」

「これはこれは、自分の事を語らずに、大変失礼なご挨拶になってしまった事をお許しくださいませ。私は遙か東方にある小国から参りましたアニピルガでございます。」

「アニピルガ…さんですか。」

「はい。ギリシャ語やラテン語ではいささか発音が難しく、何とも名乗るのに億劫になってしまっていました。」

「はあ、そうでしたか。それはそれはアニピルガさん。」

「アニピルガさんは、東方にある小国からいらしたんですね。」
「はい。」

アニピルガは、アグリッピナの文字を逆さまにしただけ。私は完璧に兄さん達を騙し続けられる確信をしていた。カリグラ兄さんがやつてくるまでは。

「おーい！ガイウス、こっちおいでよ。とっても綺麗なアニピルガさんて女の子がいるぞ。」

「はあ？」

「何でも、東方にある小国からいらしたらしいぞ。」

「アニピルガ？はあ？」

私はカリグラ兄さんにゆつくりと身体を振り向いて、優しい微笑みを携えて頭を下げると、突然笑われてしまった。

「キャハハハハハ！ネロ兄さん、ドルスス兄さん、とんでもない女の子を捕まえましたね？」

「え?!」

「お前、ガイウス！彼女に失礼じゃないか！」

「ええ？全然気がつかないんですか？兄さん達は。」

「はあ？」

「そこのお淑やかな皇女を演じている女は、僕らの妹でおたんこなすのアグリッピナですよ。」

「えええ?!」

「はああああ?!」

ネロ兄さん、ドルスス兄さんは私の顔を何度も覗きながら驚愕していた。

「もう！ガイウス兄さん！おたんこなすは余計でしょ?!」

「ガイウス！お前、どうして分かった？」

「そうだよ！どうして？」

「え、だって身体つきとかちゃんと見ればアグリッピナそのものだよ。」

カリグラ兄さんは、さすがに演技とか好きだから見抜くのが早いのかも知れない。

「大体、アグリッピナはどんなにお淑やかになっても分かるって。

そのでっかいお尻が目印さ。」

「ああ！ガイウス兄さんのエッチ！もう！」

なーんだ、結局私のお尻で判断したのか。カリグラ兄さんらしいな。褒めて損した！もう！

「それにしても…本当にアグリッピナは、化粧だけでこんなに変わるとは。」

「えらい変貌ですね、兄さん。」

「ああ。」

すると、アントニア様に一時的に引き取られている属州国の王子達も次第に集まり、私の変貌ぶり、いや美貌にため息混じりで関心を寄せはじめている。

「あの子、アグリッピナ様らしいよ。」

「ええ？全然印象が違うじゃん！」

「うわー、女神ウエヌスみたい。」

なんと気持ちの良い事なのか。人からの注目というのは。私は不思議

議と背筋をピンっと伸ばしている。その中には、もちろんあのアラトス王子もいた。どうしよう？私って分かるのかな？嫌われてないかな？

”いつでも心は優美でありなさい、アグリッピナ。『心の乱れは、己の醜聞を招く』分かりましたか？”

”はい！”

そうだ、大母后リウイア様も仰つてたじゃない。心の乱れは、己の醜聞を招くと。まさに昨日の私はそうだったじゃない。心は優美であれば、賢くある事ができると。うん、アラトス王子にもう一度認めてもらうため、頑張らないと！私は大母后リウイア様から教わったギリシャ語を、しっかりとしたフォームと共に身体で表した。

「ネロお兄様、ドルススお兄様。先ほどのご無礼をお許し下さいませ。本日、この様な姿になりました理由には、実はこのアグリッピナ、一つの妙案を携えて参った所存でございます。」

「はあ、そ、そうですか。」

ドルスス兄さんは慣れない言葉に困惑していた。ネロお兄様は、さすがに公務に携わるものとして、顔つきを変えて聞いてくださっている。

「その妙案とは、再度、このアグリッピナとサイコロ賭博に興じていただきたく、心よりお兄様達へ懇願しに参りました。いかがでございますよう？」

するとネロお兄様とドルススお兄様、何故かカリグラ兄さんも手を叩いて賞賛してくれている。そして、ネロお兄様が、公務でお使いになっっている流暢なギリシャ語を披露してくれた。

「我が妹ユリア・アグリツピナよ。貴姉の滑らかで優雅な佇まいには、このネロ・ユリウス・カエサル・ゲルマニクス、深く感銘を受けずにはいられない。むしろ、貴姉のその妙案に己の名が載っていた事に、感謝すらしたい。喜んでサイコロ賭博に参加するでしょう。」

私はゆっくり頭を下げると、今度はドルススお兄様も咳払いしながら、ギリシャ語を話し始めた。

「私もだユリア・アグリツピナ。貴姉の実兄として、その妙案に深く感謝をすると共に、一分の魂にも全力を持って闘うが如く、貴姉とのサイコロ賭博に投じる事を誓おう。」

アラトス王子は私を見つめてくれる。今まで以上にとても魅力的な笑顔を向けたまま。そして、彼が再び私に賭けてくれる事を、心から確信できた瞬間でもあった。

続く

第九章「初恋」 第一百六十五話

サートウルナーリア祭五日目 夜。

サイコロ賭博の場は多いに盛り上がった。接戦の末に、私は見事ネロお兄様とドルススお兄様に勝利し、更にはその場を観覧していた属州国の王子達からも、以前の失態を覆して賞賛されるまでに至った。

「我が愛しき妹ユリア・アグリツピナよ。貴姉の持つ潜在的な必勝への能力には、平伏するばかりである。今一度、次回までには貴姉に健闘できるよう、努力を重ねるつもりである。」

次兄のドルスス兄さんも微笑みながら私のおでこを指先でツーンと弾きながら、賞賛の言葉を添えてくれた。

「我が親しき妹ユリア・アグリツピナよ。今夜の闘いは実に正々堂々とし、気持ちの良いものであった。今まで貴姉の苦手と想われていた計算に関する潜在的な能力を、今一度、戦略の一つとして捉えなければならぬ事に気付かされた。ありがとう。」

自然と多くの人達から賞賛を浴びる私。極上の料理を持ってしても、この美味は一生忘れられないかもしれない。私の身体が、自分への賞賛を望んでいるのだから。

「ユリア・アグリツピナ殿？」

あわわわ！アラトス王子！

おっほん、いけない。気を取り直して。

「アラトス王子。前回での私めの失態に対し、どうか貴殿からお許しを頂きたく、今宵は再び全力を持って勝負いたしました。フェリックス！」

「はい、アグリッピナ様。」

私とフェリックスが稼いだ勝利金から、アラトス王子が勝った分を手渡した。

「どうか、このお金をお納めください。これは本来貴方が手にしなくてはならないものであったはずです。」

しかし、アラトス王子はなんと私の気持ちを拒否し、首を横に降つて粹な計らいをしてきたのである。

「アグリッピナ殿、予こそ、貴姉が賞賛されるべき言葉をそれられず、貴姉の心を踏み躪ってしまった事に、深くお詫び申し上げます。どうか、属国の小国程度の王子でありながら、カエサルを引くユリウス氏族の長女である貴姉への言葉をお許し下さいませ。」

彼は私の前で平伏して赦しを被ろうとしている。私の心はそんな事までしなくてもいいのに。って思っているけど、でも礼儀であるから。

「分かりました、アラトス王子。貴女の無礼を赦しましょう。」

「貴姉の御心、ありがたき幸せでございます。」

私は返されたお金をブラブラさせながら、王子にカマをかけてみた。

「王子？あたし、貴方が住むアカイアに今度行ってみたわ。その時

は持て成してくれる?」

「当然です、アグリッピナ様。喜んでお待ちしております。」

やっぱりアラトス王子の笑顔は素敵だった。声も対応の仕方も、何をとつても魅力的。

「アグリッピナ様〜! やっぱりすんげえ〜よ! 本当にどうしちゃったの? 昨日と全然違うじゃん!」

「だ〜り〜? フェリックス。やっぱりジュリアのお陰かな?」

「ジュリアさんの?」

「うん…。あの娘だけは私を本当に理解してくれて、あの娘だけが私の知らない自由へ連れてつてくれる。」

するとその張本人が私の後ろで涙を流している。自分の事以上に、私を心から祝福してくれてる。

「ジュリア…。」

「アグリッピナ様…。」

私は堪らず彼女に抱きついて泣いちゃった。ジュリアもそれを分かっつてか、あたしの頭を撫でながら大泣きしている。鼻水まで出して

「ジュリア。あたし、今日は本当に頑張ったよ! とつても恥ずかしかつたけど、でもさ、大母后リウイア様に言われた言葉を思い出しながら、すっごく頑張ったんだ。」

あたしだつて鼻水まで出して。

「アグリッピナ様〜。私は本当に心から嬉しかったです! きつとできるって信じてたからこそ、その時のお気持ちをお察しすると、本

当に本当に…。」

こうやって思い出しても、パピルスに書いた文字が涙で滲むほど、あの頃の初恋の淡い思い出は、感情を揺さぶられてしまう。他愛の無い、幼い女の子の初恋なんだけど、初めて好きな人に堂々と対応できた事が、私の最高の思い出の一つ。

「アグリツピナ様〜！僕達にもサイコロ賭博の必勝法教えてよ！」
「お願いします、アグリツピナ様！僕達もアグリツピナ様のように強くなりたい！」

属州国の王子達がわんさかと私を取り囲んでくる。ジュリアも良かったですねって微笑んで、みんなみんなが微笑んでいる。その明るい光の中で、私は自分が輝きながら、恋心をしっかりと温めていた。

続く

第九章「初恋」第百六十六話

サートウルナーリア祭六日目 朝。

「えええ?! 一体どういう事よシツラ?! 何で豚がガチヨウになつてるのよ?!」

「あー、完全に養殖場の主人アキニウスが間違えたのよ。」
「どうするのよ? 今夜はサートウルナーリア祭六日目の宴会よ。」

なんだか解放奴隷のガリア出身の料理人リツラとシツラが、朝から忙しく話している。私はみんな寝ていたのに、リツラの大きな声で起きてしまった。そういえば今日はサートウルナーリア祭も六日目。残すところ後一日しかないもんね。

「ふあゝ。おはようリツラ、シツラ。」

「あら、アグリッピナ様おはようございます。」

「あー、アグリッピナ様おはようございます。」

「リツラの声が大きくて起きちゃったよ。」

「あわわ、申し訳ございません、アグリッピナ様。」

「別にいいけどさ、何か困ってたみたいだけど、どうしたの?」

二人は困り果てた顔を見合わせて説明してくれた。

「実は今夜は豚をメインにした料理にするつもりだったのですが、養殖場の親父であるアキニウスが間違えてガチヨウをよこしてきたんです。」

「ガチヨウ?! あの飛べない鳥?」

「それはニワトリですよ、アグリッピナ様。本来ガチヨウは元々ガンを人間が食用にしたもので、昔は飛べていたそうですよ。」

「へえー。」

「あー、ガチヨウの食用の歴史は既にエジプトでは大昔から家禽化されていて、ガリアでもよく私達は食べていました。」

「そうなんだ。でも、それだったら、その養殖場のアキニウスに文句言つて豚に取り替えてもらえばいいじゃない？」

しかしシツラとリツラの顔は、私が適当な提案をして解決できるほど、事態は容易ではない事を、さらに困惑しながら物語っていた。

「どうしたの？」

「いえ、実はもう養殖場には豚が一匹も残っていないんです。他のお店に行つても売り切れでして…。」

「ありやりにや。」

「あー、しかも昨日アントニア様から変な相談を受けましてね。」

「変な相談？つて何？シツラ。」

「あー、豚の肝臓をメインで出してくれと。」

「肝臓?!」

「いわゆる肝つてやつですよ、アグリツピナ様。」

今でこそ、ガチヨウの肝臓も脂で焼いて食べるようになってるが、私が幼い頃の肝臓料理といえば、干しイチジクをたんまり食べさせた養殖の豚の肝臓が基本だった。ガリア人が連れてきたガチヨウの肝臓を食べるなんて前代未聞。

「シツラ、誰だっけ？あの裕福な貴族の…。この間、アグリツピナ様の頭の怪我を治された…。」

「あー、確か…。」

「あ！コツケイウス氏族のネルウア様?!」

「そうですね！アグリツピナ様。その方の提案でしたよ。何でもその方は、普通の食事じゃ満足しないから、できるだけ豚の肝を食べて

「いたいとか。」

豚の肝臓を料理にしたものといえば、こしょう、タイム、ラヴィッツをすり潰し、葡萄酒に魚醤のガラムを添えて、アシで薄切りにし、月桂樹の実を二粒すり潰し、網脂でくるんであぶり焼きにするのが常だった。

「豚の肝臓って美味しいよね。私は何度でも食べちゃう！」

「アグリツピナ様は豚の肝臓料理好きですよね？」

「あと何だっけ？豚の腸に肉詰めた……。」

「ゲルマニアから伝わるソーセイジのサルススですか？」

「そうそう！塩漬けのサルススも、見ているだけでもヨダレが垂れてきた〜。」

「あははは！アグリツピナ様は本当にお肉が好きですよ〜。」

確かに私の食事に対する姿勢は本当に偏っている。牛肉豚肉は当然大好き！特に豚肉の乳房と肝臓は大好物！意外に好きなのは、新鮮なお魚や魚介類。サラダはそこそこ好き。苦手なのはエンメル麦でできた平たい丸いパン。

「あたしはアントニア様のドムスで暮らすようになって、小麦のパンが食べられて幸せだったの！」

「エンメル麦って、パサパサしてますからね。」

「あー、あれは麦も腐りやすくて、小麦の方が高価ですが健康にはいいですよ。」

エンメル麦のパンって何とも胃の奥まで押し込められる気分で、幼い頃残してお母様によく怒られていたっけ。最近は小麦のパンを、卵やチーズ、蜂蜜やラツカーと共に食べれるようになってきた。エンメル麦って、なんであんなにマズイんだろう……。

「ガチヨウの料理で一番といえば、茹でたてのあたたかいガチヨウに冷たいソースと添えるのが一番なんですけどね。」

「あー、アピキウス風冷たいソースをたっぷりね！」

「アピキウス風の冷たいソース？」

「ええ！アグリッピナ様。そのソースはコシヨウ、ラヴィツジ、コリアンダーの種、ミント、ヘンルーダをすり潰し、魚醤のガルムと油を少量注いでよく混ぜたものなんですよ。」

「あー、その後にガチヨウはやけどするくらいに茹でて、熱いうちに付近で水けを取って、そのアピキウス風のソースをかければ出来上がりです。」

私は想像しただけでもヨダレが垂れてきた。

「うわ！それはとっても美味しそうね！今夜のガチヨウ料理はそれにしましょうよ！」

「でも、アグリッピナ様。アントニア様から言われてますからね…。」

「あー、今から豚も取り替えられないですし。」

「そっか、残念だな…。」

シツラとリツラはさすがにため息を吐いていた。そこで私はいつものノリで適当な提案を試してみた。

「ねえねえ、シツラにリツラ？どうせならガチヨウの肝臓を脂で焼いて豚の肝臓として出したら？」

「えええ？！」

「あー、アグリッピナ様、それはいくらなんでも無茶ですよ！」

「そっかな…？」

「当然ですって！豚の脂とガチヨウの脂ではやっぱり違いますって。」

「でも、ガチヨウの肝臓を脂で焼いて食べたら、意外に美味しいかもよ。」

するとリツラはガチヨウの首を掴んだままジツと睨んで、ロバの牛乳に蜂蜜をいれたものを睨んでいる。

「シツラ。このガチヨウを養殖した主人のアキニウスは、干しイチジクを大量にガチヨウに喰わせたって言ったのね？」

「あー、豚の養殖と間違えたって言ってたわよ。」

「いけるかもね！」

「えええ?!」

「ここは一つ、アグリッピナ様の提案に乗ってみましょう！」

こうして、前代未聞のガチヨウの肝臓を脂で焼いた料理への探求が始まった。

続く

第九章「初恋」 第一百六十七話

サートウルナーリア祭六日目 夕方。

「あー、リツラ、先ずは何から行くのかい？」

「そうねえ、牛乳にたっぷり蜂蜜をいれるのシツラ。」

私もなんだか手伝う羽目になり、シツラと一緒に蜂蜜をたっぷり牛乳の中へ流し込んだ。どうやらリツラの話によると、ガチヨウから取り出した肝臓の臭みを取り除くために、料理する直前迄浸しておくらしい。

「うにゃ。ガチヨウの中身ってこんなふうになってるんだ。」

「あー、アグリッピナ様は見ても大丈夫ですか？」

「あたしは全然平気。多分、末妹のリウィツラは泡吹いて倒れると思うけど。」

この間、ジュリアと一緒に忍び込んだ時には、豚の頭とカタツムリ見ただけで失神してたからな。

「あ！そういえば、アグリッピナ様、この間、カタツムリ一匹持っ
ていきませんでした？！」

ギク！

やっぱりリツラは本当に料理に関しては侮れない。

「あははは、暴露た？」

「あー、実際はジュリア様でしょ？」

「え？」

「そうね。ジュリア様なら考えられるわ。」

「あー、ジュリア様は本当にカタツムリがお好きらしく、貝殻取りとか手伝ってくださるんです。」

「へえ。」

「でも、アグリッピナ様がいなければここに入ろうなんて考えないだろうから、ジュリア様一人だけでは無いはず。」

「エッへへへ。」

さてさて、リッラは器用にガチヨウの身体を包丁でさばっていく。びっくりしたのは切り抜いた眼球迄も料理する事だった。

「リッラ、この眼球はかなりいいかもね、匂いかいでごらんよ。」

「あー、クンクン。確かにいい匂いしているわ。」

一見すると、料理するというよりは死体解剖をしているような二人。再びリッラはガチヨウの身体を細かく包丁でさばいていくと、当然傍らでは、シッラがガチヨウの羽根を綺麗にむしっている。

「あー、この羽根も食べたりはしませんが、料理の飾りとして後で使っんですよ。」

「なるほどね。それじゃ、無くしたりしたら大変だ。」

「大丈夫ですって、そんなに細かく羽根の数を数えているのは、あたしぐらいですよ。」

さてさて、リッラのガチヨウ死体解剖が終わると、ようやく内臓の方へと取り掛かる。ひよろつとした首を何度も掴み直しては斬り込みをいれて、サクツサクツと肉ヒダから肝臓を取り出した。

「ほーら！やっぱり！たんまりと脂分が入ってるわ。」

ブヨヨンとした肝臓が、リツラの右手にぶら下がっている。確かに大きな肝臓だった。

「あー、あそこの養殖場のアキニウスはこれからガチヨウの養殖場に変えた方がいいわね。」

「多分糺したんでしょう？大体、ガチヨウと豚を間違えるなんてラテン人じゃないんだから、そんな嘘、誰が信じるのよ。」

するとリツラは肝臓を、先ほどのたつぷり蜂蜜が入った牛乳にボンボン放り込んで手揉みを始める。時折、下に溜まったドロドロの蜂蜜をまぶす様に。

「中の脂分まで蜂蜜と牛乳が染み込んでいけば、かなり想像した以上の旨味が出てくるはずよ。後はまぶす汁を作らないとね。」

「あー、こしょう、タイム、ラヴィツジをすり潰し、葡萄酒に魚醤のガラム、月桂樹の実、他には？」

「オリーブオイル、メント、コリアンダーの種、ラヴィツジもいいわね。」

私は二人の言葉が魔法のように思えた。私は一生懸命牛肉と蜂蜜に浸された肝臓を揉んでいたら、料理部屋の室内が温かくなったせいか、ジュリアが施してくれた私の化粧が汗とともにこぼれ落ちちゃった。

「あああ！ごめんなさい。あたしのお化粧が牛乳の中に入っちゃった。」

「ええ?!」

「本当ですか?!」

確かに白い牛乳には、渦を巻きながらあたしの白塗りが揺れ動いて

る。しかしそれを見てたリッラは何度もかき混ぜて、ついには指先で舐めて味わった。

「リッラ！何やってるの?!」

「あー、化粧の入った牛乳なんか舐めたら危険だって。」

「…間違いない。アグリツピナ様、このお化粧はどなたが?」

「ジュリアがしてくれたの。」

「やっぱり!あの娘はアグリツピナ様のお肌を傷つけない様に、天然の脂分を使っていたみたいね!」

「あー、天然の脂分って?」

「生乳から作った化粧品のバターよ!」

こうして初めて、化粧品だったバターがガチヨウの肝臓料理の為に使われた。

続く

第九章「初恋」第百六十八話

サートウルナーリア祭六日目 夜。

バターといえば、ラテン語でバティルウムという牛のチーズを意味する。皮製の袋に生乳を入れ、棒で周りから打って揺すって作っており、主にガリアなど北部での蛮族が使っていた。私達といえば、この頃の時代の主流の油はオリーブなので、長持ちせず溶けてしまふバターを使う事はなく、白塗りと合わせた化粧品として使う事が多かった。

「ジュリアがバティルウムを？」

「ええ、バターは乾燥した肌には良いのかもしれませんが、やっぱり私達からすると食用油として使うのが一番ですよ。」

「あー、ガリアの北部だとオリーブが中々手に入らないのもあって、そこで私達はバティルウム、バターを食用油として使ってるんです。」

「へえ。」

やっぱり寒い地方とこっちでは気候も違うから、油一つとっても全然違うんだなって思った。

「きっとバターを今夜使えば、とろみが増していいかもね。」

「あー、でもリツラ、バターとオリーブでは感触が違うんじゃない？」

「そこは他のガチヨウの身体を細かく刻めばなんとかなるものよ。」

「あー、例の如く華やかな料理で持たせるパターンね？」

「そうそうー！」

ケーナという夕食の晩餐は、とりわけ美味しさよりも、豪華絢爛な華やかな料理をもてはやます傾向にあったが、それは私達が后妃になってからの話。当時はまだまだ慎ましい食事の名残が残っていて、事実、初代皇帝アウグストゥス様は、生活事態とっても質素で、贅沢とは程遠い習慣をお持ちだったのは、節度の問題ではなく、単純にローマ国家が帝国名義として支配し、まだ間もない頃という時期でもあったから。大母后リウイア様の話では、アウグストゥス様は葡萄酒を水で割っても三杯飲めればいいほどの、下戸だったらしい。

「そうなるここまできたら、当然カタツムリもバター焼きで周りを埋め尽くすのもてだよな？」

「あー、そうだね。ガーリックもあえてみたらどうかかな？どうせアントニア様が給仕されるんだし、私達の出身の料理でもてなすのも手かもしれないね。」

二人がガリア出身の解放奴隷。

しかしその彼女達の舌はローマ人達をうならすほど、味には長けていた。ひよっとしたら皇族お抱えの料理人にもかなわないほど腕前かもしれない。とにかく、料理の見た目だけを重要視するローマ人の舌を、意図も簡単に唸らせてしまふのだから。

「カタツムリの貝殻は全部取ったかい？シツラ。」

「あー、アグリッピナ様の分がまだ残ってますね。」

「ごめんなさい、リツラ。カタツムリってネバネバしてなかなか取れないよ。」

「シツラ！アグリッピナ様、手で直接取ろうとしてるじゃないか！ダメだって。」

「ええ？！手で直接取っちゃダメなの？」

「あー、私達は慣れているからいいですけど、アグリッピナ様は皇族の方ですし、お綺麗な手が荒れてしまっっては台無しです。」

「そっかなあ…。」

「あー、そんなもんです。」

確かにカタツムリのネバネバが乾いてくると、痒くなってきた。すぐに手を洗淨してもらい、手伝うのなら必ず手を汚さない食器を使った方法をする様に進められた。

「貝殻の取り方をアグリッピナ様へ教えてさしあげな。」

「あー、はい。アグリッピナ様、この二つの食器はご存知ですよね？」

「うん、スプーンのリグラとフォークのコクレアルでしょ？」

「あー、実際に晚餐でもお使いになってらっしゃいますもんね。先ずはカタツムリの貝殻を、こうやって…スプーンのリグラで抑えながら、真っ直ぐコクレアルで押し込んで、捻じる様に取り出すと、ほら、こうやって出てきます。」

「うわ！凄いい。」

見事にコクレアルの先にドロドロしたカタツムリがうねりながら取れていた。それをシッラは器用に生乳の中へポイっと入れて、新しいカタツムリを手取る。

「あー、慣れてくると、貝殻を左手で持ちながら、コクレアル一つだけで取り出すことも…ほら！できるでしょう？」

「おおお！さすがシッラ！」

「アグリッピナ様、シッラの元々いたガリアの中北部の地域では、カタツムリの生産が盛んで、幼い頃からそれをやらされるんですよ。」

「へえ…。何気に凄いいんだね。」

シッラやリッラの指先を眺めていると、結構肌も指先もカサカサで、

何度も皮が剥がれた後が生々しく残ってる。そっか、彼女達は幼い頃からやらされているんだ。そんな些細なことでも、私とは階級が違う人達の生活があるんだと実感した。

「あー、アグリツピナ様。カタツムリは私がちやっちやかやっちやいますんで、申し訳ございませんが、カタツムリの入った生乳の、とろみをなくす為にこのヘラで何度かかき混ぜてくださいませんか？」
「勿論、そこにあるチーズもバンバン入れちゃってくださいね！」
「はい！シツラ様、リツラ様！」

そう、今だけは解放奴隷と身分がいれ違うことが許されたサートウルナーリア祭だもん。料理を楽しまないかね！

続く

第九章「初恋」第百六十九話

サートウルナーリア祭六日目 夜。

随分の間に浸したガチヨウの肝臓を揉んでいたら、なんとか臭みが上手く取れてきたみたい。少なくともリツラは十分満足そうな顔をしている。

「うんうん、さすがアグリッピナ様。皇族の方が揉まれると、肝臓もイキイキしてきますね。」

「あー、あたしらみたいな蛮族ですと荒っぽくて旨味が出てこないんですよ。」

本当はおべっか。

でも、彼らは私に気を使う事が当たり前の階級。今夜はなんだか自分がそうだった、気遣いに支えられて生きている事を、すごく意識してしまう気分。やっぱりリツラのカサカサで剥がれ落ちた指先を目の当たりにし、しかもまるで危険物を取り扱う様に、私の指先の肌荒れを気にしてくれたからかもしれない。

「さあ！アグリッピナ様が一生懸命揉んでくれたガチヨウの肝臓を、葡萄酒と一緒に火で炙りますよ。」

「あー、アグリッピナ様！火元からは離れてくださいよ。とっても危険ですからね。」

するとリツラが私の両肩に優しく手を添えて、火元から離れるように距離を取ってくれた。リツラはカコンカコンとフライパンを火で焙りながら、紫煙が全体から出てくると、先ほどのバターを氷の上で滑らす様に転がしてる。

「うわー、面白い。」

「ええ、オリーブだとこういう光景はまず見れないですよ。」

「あー、こーやって満遍なくフライパン全体にバターを溶かす事によって、脂が引かれるわけですね。」

リッラは本当に器用に手首をクイクイと回しながら、あっという間にバターを溶かすと、今度はオリーブとは全然違った匂いが立ち込めてきた。ふんわりとして、なんだか面白い匂い。

「シッラ！ガチヨウの肝臓を。」

「あー、はい。」

シッラが手渡したガチヨウの肝臓が、見事に次から次へとフライパンへ放り投げられると、ジュージューと香ばしい匂いとともに焼かれていった。そこへさらに葡萄酒を注ぐと、見事に火柱がフライパンから上がった。

「うわ！何？火事！？」

「大丈夫ですよ、アグリツピナ様。これは一つの調理方法なんです。」

「あー、でも危険だから、そばによってはいけませんよ。」

さらにボワッと火柱が立つと、リッラはクイクイフライパンを回しながら、ささっと思事に焼き上げて、銀色のお皿へ次々と肝臓を乗せる。

「シッラ！盛り合わせ宜しく！」

「あー、ハイハイ。」

不思議なバティルウムのふんわりした匂いと、ジュージューいつてた香ばしさが、葡萄酒の柔らかい香りと混ぜて、よだれが出てくるほど美味しそうだった。するとリツラが一切れだけつまんで、フーと息を吹きかけてウィンクした。

「アグリツピナ様、お口アーン！」

「ええ?! いいの?」

「あー、熱いからヤケドしないでくださいよ。」

私はガチヨウの肝臓を一切れもらって、自分の口の中へ放りこんだ。ホグホグと熱さと戦いながらも、唾液が次第に周りを包み始め、次第にバティルウムの美味しいとろみと、肝臓の中から溢れ出してくる脂身が、魚醤のガルムと見事に溶け合って、何とも言えない美味しさだった。

「何これ?!?! ウンマ〜イイ!!」

「あははは! 良かった!」

「あー、アグリツピナ様が美味しいと言ってくれば、安心して皇族の方々に出せますね。」

「ええ?! あたしは毒味だったわけね! もう!」

「あははは!」

でも、それにしてもとっても美味しくて、ほっぺがとろけちゃいそう。これなら豚の肝臓料理よりも、すっごくイイかもしれない。すると相変わらず解放奴隷の被るピレウス帽子が似合わないアントニア様が駆け込んできた。

「ねえねえ! 一体なんの香りなの? とっても美味しそう!」

「アントニア様、ガチヨウの肝臓を盛り合わせてみました。」

「ええ?! ガチヨウの肝臓を!?! だって豚じゃなかったの?」

「あー、それが養殖場の主人が間違えてしまつて…。」
「まあ！」

私は困っている二人を助ける為に、ガチヨウの肝臓の美味しさを、
アントニア様へ力説した。

「アントニア様、今回のガチヨウの肝臓ですが、豚の肝臓には手も
足も出ないほどに、とっても美味しくてほっぺたとろけちゃいそ
うでした！ぜひ皆様に味わっていただきたいです！ガリア出身のリッ
ラが秘伝の油を使つたんです！」

「秘伝の油？！一体何それ？！」

「あー、それは…。」

私は咄嗟にシツラの言葉を遮つて、説明した。

「それはトロイアから伝わる、動物性の脂身でして、今回はシツラ
がお得意様になつてるインスラの主人から譲り受けたんです！だか
ら大丈夫ですよ！」

「それは良かった！早く皆さんがお待ちかねよ！」

「はい！後はカタツムリを添えてもつて行きますね、アントニア様
！」

するとスタスタと宴会へ戻つて行つてしまった。

「あー、アグリツピナ様？良いのですか？あんな油の嘘なんてつい
ちやつて。」

「シツラ、バティルウムはローマの女性にとっては化粧品よ！そん
な物が料理に入ってるなんて知つたら、それこそガリアの印象がさ
らに悪くなるじゃない？こんな時は、憧れである神話のイメージを
添えてあげると、喜んで食べてくれるじゃない！」

「はあー！」
「へエ〜！なるほど！」

私はガチヨウの肝臓料理の皿を持って行こうとしたが、一つ気になる事があった。それは名前だ。ラテン語だとイエクル・フィカトウムでそのまんまガチヨウの肝臓で味気が無い。むしろこの神秘的な料理には、ガリア風の神秘的な名前を残してあげなくちゃ！

「ねえねえ！どうせならガリアの言葉でこの料理を紹介したらいいと思わない？」

「フォリ・アグラスなんてどうですか？」

「いいわね！ラテン語っぽいし格好イイわ！」

私は意気揚々と宴会に集まった客人へ、リツラとシツラが作ったガチヨウの肝臓料理のフアリ・アグラスを持って行って紹介した。

「あー、リツラ？フォリ・アグラスって何それ？！」

「料理も名前もインスピレーションとインプロビゼーションよ。」

「あー、フォア・グラね？」

続く

第九章「初恋」第一百七十話

サートウルナーリア祭七日目 最終日。

シツラとリツラが牛のバターを使って作った、ガチヨウの肝臓料理
フォリ・アグラスは、あつという間になくなってしまい。コツケイ
ウス氏族のネルウア様は、これからはガチヨウの養殖場だ！と息巻
いてられた。

「うーん。」

「あ、お姉ちゃん。おはよう。」

「リウイツラ？あんなんでこんな早くから起きてるの？」

「だって、今日はサートウルナーリア祭最終日だよ。ロウソクいっ
ぱい用意しないと。」

「あ、そうだった。」

まだまだ私が幼かった頃は、祭り好きなローマ市民でも厳粛な想い
はあつた様で、サートウルナーリア祭の最終日にはロウソクに火を
灯して、静寂さを楽しむ時間があった。意外に思われるかもしれない
いが、あの派手好きなカリグラ兄さんが現皇帝ティベリウス様の後
に帝位についた後に、サートウルナーリア祭を七日間から五日間に
短縮しようとしたが、市民から猛反対を食らう事になる理由には、
この最終日が当時の市民にとってまだまだ大切な儀式だったからか
もしれない。

「リウイツラ、ジュリアの作ってくれたロウソク、あんまり使いた
くないな。」

「どうして？」

「だって、これとっても可愛いんだもん。」

「ロバの絵に、豚さん、牛の絵って、これって全部生贄の絵じゃん。」

「あはは、本当だ。あの娘らしいな。」

「え、どういう事？」

「ほら、ジュリアは生きている動物をむやみに殺すの好きじゃないでしょ？でも、神々に捧げる生贄は本物でなければいけない。だから、苦肉の策なんだろうね。」

「ジュリアさんて、本当に心優しいんだね。」

あの娘って意外に反抗的なんだよね。自分の信じている物にまつすぐというか、脇見を絶対にしないというか。でも、それが彼女の最期を悲惨なものにしてしまったのも否めないけど。

「お姉さん、リウィツラ、用意はできた？」

「ドルシツラお姉ちゃん、おはよう！アグリツピナお姉ちゃんはジュリアの作ったロウソク使いたくないって言ってるよ。」

何を言ってるの？ってな表情で、ドルシツラは私にため息を漏らしてる。

「お姉さんって、本当に生まれつき贅沢に育ってるんだから。」

「そう？」

「そう。なんでも身の回りには揃ってるのが当たり前って思ってるでしょ？」

「そんな事ないって。」

きつとドルシツラが言いたかった事は、私が考えている以上に深い意味だったのかもしれないけど、私が贅沢ならあんたも贅沢に育ってるんだから。ドルシツラ、あんたはゲルマニクスお父様が亡くなるまであまえられてたでし？私には二度と手に入らない贅沢よ。

「ほら、あんた達！何を喋ってるの？」

既にお兄様達は捧げ物を取りに朝早くから働いているのよ。女は家の守り神ラレース様の為に、祭壇を綺麗に磨いておくのよ。」

母ウィプサニアが私の寝室に慌ただしく手を叩きながら入ってきた。母は私を見つめたまま何も言わなかったが、こんな私でも恋をすれば女である事は母親にはバレバレであり、軟化した彼女の態度が妙にくすぐったい感じ。

「さあ、リウィツラおいで。お母さんと一緒にドムスの掃除を奴隷達にさせるのよ。」

「はい！」

リウィツラはやっぱり未っ子だ。

生意気な言葉遣いだけど、結局母親に抱っこされて連れてかれてるのだから。すると、次女のドルシツラがジッとこっちを見ている。なあに？

「お姉さん、最近お母さんと仲直りしたの？」

「はあ？」

「なんか、最近目を合わせる事が多くなったような気がする。」

こういふ所はあざとい性格の妹。そして決まって私があどけない振りをする。

「気のせいよ。」

「嘘、アグリッピナ姉さんは最近明らかに変わった。やっぱりアラトス王子のお陰？」

「もっ！」

でも、やっぱりそれはあるかも。

アラトス王子のお陰で、私はいつしか自分の心のか弱さを知った。でも、心地よいの。そのか弱さを王子の輝くような笑顔や夏の微風のような声で包んで欲しいの。そう、あのギリシャ語で…。え?!

「だから! パッラスお兄様はそのような対応に、些か不必要な心配事をご自分に課せられ過ぎてらっしゃる。」

「しかし、フェリックス。貴様のあらゆる方面においての不安材料を推敲する思考は、取り越し苦労とも思えぬか?」

「その部分の議論については同意し兼ねます、パッラスお兄様。」

何なのこの二人?!

スラスラと綺麗で丁寧なギリシャ語で会話しているじゃない。しかも、ラテン語ではとっても野暮ったい雰囲気には見えない奴隷達なのに。

「パッラス?」

「あ、アグリッピナ様。」

「え? アグリッピナ様なの? どうしたんです?」

まただ。

ラテン語に戻るととっても野暮ったい。

「あんた達って、まさか?!」

これが後に思わぬ事へ発展していく事になり、パッラスとフェリックスの兄弟を解放奴隷からローマ国家の官僚へと大出世した起因になる。そして、私とパッラスとの、一生涯結ばれる事のない愛の始まりでもあった。

続
く

第九章「初恋」 第一百七十一話

サートウルナーリア祭七日目 昼。

マルクス・アントニウス・パッラスと私の関係は何かと問われれば、公では主人と奴隷でしかなかった。物好きな歴史家達や共和政に入れ込んだ人間から見れば、私を毒婦や悪女に仕立て上げる条件としてパッラスが私の愛人だったと言いたいのでしょうかね。

”あのアグリッピナと奴隷のパッラスはできてるのさ！”

”でなければ無理だろうよ？一度カリグラ帝に流刑されたアグリッピナを皇妃にする事なんてよ。”

”あの女なら、なんでも役に立つものは利用するに決まってるはずだ！”

そうね、確かに私は叔父のクラウディウス様も含め、間接的に自分の手を穢して多くの命を奪ったのは事実。パッラスがいなければ、私も皇妃になれず息子も五代目皇帝になれなかったでしょう。でも、ゲルマニクスお父様に誓って、私とパッラスの間には純粹な愛情以外流れる事が無かった、深くて広い溝があった事を本当の事実として語りましょう。

私の為ではなく、パッラスの為に…。

「パッラス達は、一体どうしてそんなに綺麗に発音ができるの？」

「だから言ったじゃん。僕と兄さんはギリシャのアルカディアから来たって。」

「それって本当なの？アルカディアの王族の血筋があるって。」

パッラスは肩を竦めながらも、優しい眼差しで詳しい話をしてくれた。

「アルカディアはペロポネソス半島中央部でしたが、今から四百年前にアルカディア同盟が成立されて、その中心部にメガロポリスが建設されたんですよ。それによって多くの人たちが行き交う事になり、多くの発展を遂げました。だから僕たちも自然と色々な発声を覚えてきたんです。」

「方言もあるんだよ！でも、アグリッピナ様には難しいかな？」

私は呆気にとられるしかなかった。奴隷とはいえ彼らの話す言葉は、私達が公用語で使わなければいけないギリシャ語。それも彼らの発音はとても綺麗なのに、今まで私の前ではそれさえも披露してくれなかったのだから。

「なんで？」

「え？」

「なんでそんなに綺麗なギリシャ語を話せるのに、私の前では一度も話してくれなかったの?!」

私は少し頬を膨らませ、眉を鋭くさせて問いかけると、二人はお互いに、だってねえと言いたげな顔を見合わせている。

「あのですね、ローマ市民の前では奴隷達は例え喋れるとしても、ギリシャ語を話さない方がいいって、奴隷同士から教わっててもし喋れば嫉妬されて殺されるって。」

「卑下されているユダヤ人にもラテン人にも殺されるって、僕らは教わったんだ。ギリシャ人の奴隷達は常に優遇されるからって。」

ローマには自由人と奴隷という二つの階級で大きく分けられている。

自由人とは人としての権利と義務と自由を有し、奴隷とは自由人に所有され支配される者の事。さらに自由人も二つに分かれ、生来自由人と解放奴隷自由人に分かれる。生来自由人はローマ市民及び属州自由人に分かれる。一方、解放奴隷自由人はローマ市民、手続きを踏まずに解放されたラテン人、解放された戦争捕虜の降伏外人に分かれる。私達皇族は当然、自由人で生来自由人で手続きを踏んだローマ市民。では、パッラスとフェリックスはというと、まだアントニア様からは解放されていないし、戦争捕虜の外人でもないの、そう考えると彼は確かに統治下及び属州下における単なる奴隷階級となる。

「でもさ、アントニア様は本当にあんた達を心優しく迎えてくれたんだから！せっかく綺麗なギリシヤ語で発声できるなら、そっちの方で能力を活かさなきゃ損じゃない。シッラヤリッラのように解放奴隷になる事だつて夢じゃないかもよ。」

「そうは言っても、なあ、フェリックス。」

「うん。別にアントニア様を信頼してないわけじゃ無いけどさ……。」

「何なの？」

「ギリシヤ人の奴隷達は、誇り高い分、用心深い所もあるんです。」

事実、教養や博識のある奴隷階級のギリシヤ人達は、その能力を利用して、大富豪のローマ市民に専属として買われ、いわゆる奴隷階級特有の肉体労働から解放され、一生涯を教師として終える解放奴隷もいた。だが、そんな奴隷は稀な話であつて、それこそアヘノバルブス家に殺されたアクイリアのように、主人の気紛れであつという間に積み上げてきた財産や解放奴隷としての未来を奪われる事は日常茶飯事。中には浪費グセのある主人に隠れて、その妻が奴隷達に将来解放する嘘の約束をし、彼らに支払った分の賃金までもせしめる人さえいたとか。

「ローマ市民が別に嫌いってわけじゃないさ。でも、アヘノバルブス家のような奴もローマ市民としてのさばってるって思うとな。」
「うん…。」

「それに僕らがここで奴隷になる前の頃、路上では本当に虫ケラ当然の扱い。いや、それ以下さ。」

「そうだったね、お兄ちゃん…。」

「アグリッピナ様は知ってるかな？クローアカ・マキシマって。」

「クローアカ・マキシマ?!」

「知らないの?!ローマにある最大級の下水道の事だよ。僕らはアグリッピナ様が見つかるまで、ティベリス河近くにあったクローアカ・マキシマの排水口に住んでたのさ。」

ええ?!

私は絶句した。

続く

第九章「初恋」第一百七十二話

サートウルナーリア祭七日目 昼。

クロアカ・マキシマとは、その名の通り、湿地帯であるローマ市内に作られた最大級の下水道。今から六百年前の王政ローマ時代五代目の王タルクイニウス・プリスクスが、半ば強制的にローマ市民の貧民階級の労働力を使って、エトルリア人の叡智であるアーチ型の技術を結集させてこの公共事業を実現させている。

ティベリス河へ廃水を主にクロアカ・マキシマを利用している施設は、あくまでも公共浴場や公共便所など、大人数の人間が一度に利用しなければならぬ場所のみ。パラティヌス、カピトリヌス、そしてアウエンティヌスの三つの丘の間の平坦にあるフォルム・ボアリウム¹の地下にある下水道に、パッラスとフェリックスの二人はあらゆる排泄物が流れてくる中で切磋琢磨暮らしていた。

「食べ物が無かった僕らは、下水道から流れてくる残り物を洗って食べてたりしてたよ。」

「えええ?!」

「流れてくればいい方さ。」

「ばっちい!」

「流れてこない時は何にも食べれないから、じつと我慢するしかないんだ。他の連中は鼠を捕まえてたけど、あれは焼いても後で死んでしまう孤児が多いから、僕らはどんなに空腹でも食べなかったんだ。」

その話を聞いただけでも、私は気分が悪くなってしまった。しかし、パッラス達の話によると、ローマ市内にはそういった路上生活孤児達がいっぱいいて、その中でも階級闘争や縄張り争いなどもあるの

だと。

「パッラス兄ちゃんは、その中でも群を抜いて誰よりも強かったんだ。誰にも負けなくて、ちゃんと孤児達を統率してたんだ。」

「そうだったな。」

「でも、アクイリアがやって来てからあの娘をこのまま排水溝のクロアカに住ませるわけにはいかないって思って、僕らはインスラの空き部屋に三人で暮らすようになったんだ。」

そこでパッラスは、私が大母后リウイア様から頂いた桃を盗んできたわけだ。

「でも、フェリックス。僕達はアグリッピナ様のお陰で本当に幸運な人生を送っているよな。こうやって奴隷としてちゃんと仕事ももらえてさ。」

「うん。だからギリシャ語を教えられる仕事にありつけなかったって全然平気さ。」

私は自分を恥じた。

先日のガチヨウの肝臓料理を作ったリツラとシツラもそうだったが、ただ、私が皇族生まれただけで恵まれた環境にいること、下層階級との価値観の違いとはいえ、彼らは必要最低限の生けて食べてゆけるだけでもままならないのに、私はさも初代皇帝アウグストゥス様にでもなった気分パッラスとフェリックスを駒として扱ってしまった。

「ごめんなさい。」

「え?!」

「どうしたんですか?アグリッピナ様。」

「貴方達がそんなにも苦労して生きてきたというのに、貴方達の環

境も状況も分からず、ギリシャ語を教える奴隷になればだなんて言
つてしまつて。」

フェリックスは、頭を下げてる私に戸惑いを隠せず、やめてくださ
いとすぐに懇願してきた。でも、年上の、パッラスは違つていた。
仁王立ちしたまま私を静かに見下ろしている。

「アグリッピナ様、あなたは私達が哀れで可哀想だからだと感じ、
そのように頭をお下げになられたのでしょうか？」

「ええ、そうよ。奴隷の中でも貴方達は恵まれない環境の中で必死
に生き抜いてきたのに、そんな事すら知らなかった私はなんて愚か
なんだつて……。」

だが、パッラスは叫んだ。

「ふざけるな！」

「?!」

「に、兄ちゃん?!」

パッラスは齒をジリジリと軋ませながら、眉間にシワをよせて寂し
そうな目を見せている。

「奴隷に憐れみを持つのは主人の勝手だが、だからと言って主人が
奴隷に頭を下げる行為ほど、奴隷にとって、いや、元アルカディア
の王国の血脈を持つ俺には屈辱的で耐えられない！」

ど、どうして?!

私は貴方達が生きてきた環境が余りにも無残だったから、可哀想つ
て思つたんじゃない！申し訳ない気持ちでいっぱいだから謝つたん
じゃない！それを、なんで？

「アグリッピナ様、あなたには本当にアキリアの事も含めて本当に色々感謝している。でも、あなたが俺達に頭を下げる屈辱感だけは受け止めることはできない！」

な、なによ！

「お兄ちゃん…。」

「ちょっと、パッラス！いくらなんでも言い過ぎ無い！あなたはあれだけアントニア様に言われたのに、またもや奴隷のくせにアルカディアの王国の血脈があるだなんて言い出すわけ?!」

「ああ！あなたが分からずやの高慢ちきな娘だからさ！」

「パッラス兄ちゃん、やめなつて！」

なんなの?!

どうして私はここまで言われなきゃいけないわけ?!ふざけないでよ!

「大体奴隷のくせにいつも偉そうに生意気で！」

「な、何だと?!」

「あ、あなたの命なんか！あたしの一言で、どうにでもなるんだからね！」

「この！やれるもんならやってみろよ！アルカディアの誇りにかけて、この命をささげてやるさ！」

パッラスの怒りは頂点に達し、今にも私へ襲いかかろうとする勢い。目が血走ってるパッラスに殺されると思った。

「パッラス！やめろ！」

カ、カリグラ兄さん?!

そこにはフェリッククスと年齢が変わらないのに、凜々しくも堂々と
しているカリグラ兄さんが異様なオーラを放って立ってた。

「ガ、ガイウス様?!」

「パッラス、聞き捨てならない言葉だな。貴様は我ら皇族であるユ
リウス家の長女であり、我が妹アグリッピナの命を奪うつもりか?
!」

「い、いえ!」

「では、野蛮で無礼なその言葉使いはなんだ! 血走った眼光をいつ
までも予に向けるといふならば、貴様だけでなく、貴様の弟フェリ
ックスの命も無いと思え!」

パッラスとフェリッククスの二人は、天高らかに張り上げた威厳ある
カリグラ兄さんの言葉に、奴隷としての身分をわきまえてひれ伏し
ている。カリグラ兄さんが、まさか私を助けてくれるなんて…。

続く

第九章「初恋」第一百七十三話

サートウルナーリア祭七日目 夕方。

私は自分は悪くない。

そう思っていたのに、ムキになって血走ったパツラスの眼光が瞼を閉じても離れない。初めてアントニア様の水井戸から水を盗もうとした、あの死なども恐れない頃のパツラスの鋭い眼光が私を殺そうとしている。

「怯えているのか？アグリッピナ。」

「ううん。」

「強がるなよ。」

「怯えてなんかないもん！ただ、びっくりしただけ。」

カリグラ兄さんは優しく私の肩を摩って落ち着かせようとしてくれたけど、ドルシツラを襲った兄さんなんか、気色悪くて嫌だから腕で払いのけた。

「やめてよ。」

「つたく、相変わらずお前は強情で意地っ張りだな。」

「兄さんなんか、言われたくない。」

「だがよ、ずっとおれは見てたけど、今回はお前が悪い。」

「はあ？な、何で？」

「あんな言い方されれば、奴隷でなくとも頭来るって。」

「わ、私は謝ったのよ！なのになんでよ？！何であんな風に睨まれないといけないの？！」

「お前は、リウィア曾祖母ちゃんのところでお前が奴隷の扱いに関して何を習ってたんだよ？」

「ちゃんと習ったもん！」

カリグラ兄さんはヤレヤレとでも言いたげで、ため息をつきながら腰に手を回してクドクド言い出した。

「アグリッピナ、お前はスパルタクスという花形剣闘士を知ってるか？」

「馬鹿にしないでよ。トラキア人の戦争捕虜だった奴隷でしょ？ローマ国家相手に反抗した奴隷スパルタクス。知ってるわよ。」

「では、その花形剣闘士だったスパルタクスが、何故わざわざ戦まで起こして反抗したか分かるか？」

そんなこと！

あれ？なんだっけ？

「いくら戦争捕虜で奴隷だったとしても、超一流の剣闘士だけ。世界中の人気者だったんだ。入ってくるお金だって莫大だったし、はつきり言っただ奴隷にしては意外に不自由無い暮らししてたんだ。なのにだ、スパルタクスは国家ローマに刃向かった。何故だ？」

本当に分からない。

何でだろう？

「色々な説はあるだろうが、それらはスパルタクスを英雄視したトラキア人や、奴隷を危険視したローマ人が勝手に言ったもの。本当の理由は誰にも分からないんだ。」

「なーんだ。」

ところが、カリグラ兄さんは頬を軽く叩いて叱った。

「痛い！な、何をするの?!」

「いいか、アグリッピナ。奴隷を甘く見るなつて事を忘れるな!」

カリグラ兄さんの目は真剣そのもの。普段のように、私をいじめたりしているわけではなかった。

「いいか？下層階級のやつらには、奴らなりの哲学や美学があつて、俺達上流階級の人間が手荒に扱つて初めて主人と奴隷としての秩序が成立してされるんだ。そうでもなかったら、誰が好んでクロアカ・マキシマに住みたいと思う?」

「...。」

「人の憎しみは、お前が頭下げた所で消え去るようなそんな甘いものじゃない。理屈やルールを超えたところに存在するんだ。それを抑えられるのは、お前自身が奴らに畏敬の念を持たせるほど、巧みに皇族として振舞うことが絶対条件だ。そのバランスが崩れた時、さつきみたいなき事が起こるんだ。」

妙な説得力。

確かに兄カリグラは、幼い頃から父ゲルマニクスと戦場に出てただけある。たとえ過保護な勝利祈願のマスコットだったとしても、その血生臭い戦場で多くの人間の闇や理不尽さを肌で味わってきたんだ。

「いいか、奴隷には絶対に謝るな。奴隷に謝ることは、腹を空かせた虎の口に自分の頭を突っ込むようなものだ。」

生まれて初めて、兄カリグラの正しさを感じた瞬間であつた。

続く

第九章「初恋」 第一百七十四話

サートウルナーリア祭七日目 夜。

多くのロウソクに火が灯され、今までの騒々しさが嘘のように静まり返る。鎮魂歌ともいうべき贅沢な静寂さ。今の時代のように、派手な色で着飾り信仰心も薄れ、ただ時間を無駄に消費する騒ぎ方は違っていた。

「うう、寒。うん？アグリツピナ？」

「あ、ドルスス兄さん。」

私は兄カリグラのキツイ一言が気になって、魂を抜かれた猫のように窓辺から外を眺めていた。

「お前、どうしたんだ？」

「ちよつと…。外を眺めていたの。」

「そっか。」

「今日はお祭り最終日でしょう？いくつものロウソクがゆらゆら揺れているのが見えてて。」

「うん、とつても綺麗だな。」

「綺麗？そっかしら。」「

なんかため息。

でも、交じるのは白い息。

「うん？どうした？」

「ドルスス兄さん、あのロウソクの火には金持ちのもあれば、貧乏人の火もあるし、解放奴隷の火もあれば戦争捕虜奴隷を殺した人の

火もあるのに、どこが綺麗なんでしょう？」

ドルスス兄さんは、随分と返答に困ってた。

「なんだか今夜は、だいぶストア派のセネカみたいな言い方だな。」

「セネカ？セネカって、あのおかしなセネカの事？」

「ああ、この間会ったんだ。今頃はエジプトだろうな。」

「エジプトか……。」

「もっともつと哲学の勉強するってさ。」

「そう……。」

みんなすごいな。

何だか自分だけ取り残されている気分。

「ガイウスに、なにか言われたのか？」

「え？ドルスス兄さん、何で知ってるの？」

「あははは。実はあてずっぽうだ。昔からアグリッピナが落ち込む事といえば、大抵ガイウスと喧嘩した時だからな。」

ふう……。

そんなんだったら、ここまで落ち込まないもん。兄カリグラの言った言葉に、妙に説得力があったから、なんかモヤモヤしている。

「ドルスス兄さんは、奴隷には絶対に謝らない方がいいと思う？」

「その事を……ガイウスに言われたのか？」

「うん。」人の憎しみはお前が頭下げた所で消え去るような、そんなに甘いもんじゃない。”って言われた。”

「パッラスと喧嘩したのか？」

「そう……。」

ドルスス兄さんは勘が鋭くて、直ぐに私の悩みを感じてくれる。どうやらドルスス兄さんはパツラスが普段とは違う雰囲気気が付いていたみたい。

「そうだな、お兄ちゃんだったら謝り方を気にするかな？」

「謝り方？」

「アグリツピナは、奴隷の生活をしているパツラスが哀れだと感じたら謝ったんだろう？」

「うん、そうよ。」

「では、両親が健在している奴隷から『アグリツピナ様はお父さんを幼い頃に亡くしてるから、たとえ皇族でも哀れに思います』って謝られたらどうだろう？」

カチン！

「ドルスス兄さん！？どうしてそんな酷いことを?!」

「物の例えだ。」

「例えでも！私のお父様が亡くなった事で、何で奴隷から憐れみを受けなければいけないわけ?!」

「なあ？怒るだろう？」

あ…。

「きっとパツラスだって、自分達を救ってくれたアグリツピナから、一番自分が気にしている事を言われなくなかったんじゃないかな？」

「二人を、憐れみに思う事を？」

「ああ。だけどお互い人さ。階級が違えど、しゃべって意思疎通ができるわけだ。きっと正しい謝り方は、お前の大好きな大母后リウイア様が、既に教えてくれたんじゃないか？」

大母后リウイア様ならどうするか？

確か…同じような事があったような。あれはリウイア様のスパルタ教室に通ってた頃、用心棒のクツルスとセリウスが育ったインストラでリウイア様から頂いた桃を盗まれた時、その答え方を訂正されたっけ。

”アグリッピナ。ここローマに住む人達は上下階級共にプライドの高い人ばかり。一つの失言が、その人の運命を左右する事だってあるのよ。自分の虚栄心を満たす為だけの行動は、いずれ多くの人々に反感をくらい、自分の命を脅かす事になりかねない。だから、感情に任せて自分を見失ってはダメ。”

そうだった。

奥歯を噛み締めて、大理石のように心を落ち着かせないといけなかったんだった。

「ドルスス兄さん、教えて。」

「うん？何を？」

「今、パツラスはどこにいるの？」

ドルスス兄さんは少し目を閉じて、頷いて、そして何も言わず微笑んで下を指差してる。私は嬉しくなってドルスス兄さんの頬に三回キッスをして、急いでパツラスのいるところへ向かった。

続く

第九章「初恋」 第一百七十五話

サートウルナーリア祭七日目 夜。

私は嫌われなくなかったんだ。

なぜかパッラスだけには、出会った時のままでいたかったのかも。だからムキになるし、自分のことしか考えられなくて謝っちゃった。それも相手のことなんか全く考えられず。

「フェリックス！」

「あ、アグリツピナ様！」

「パッラスはどこ？」

「確か、その辺にいたけど。井戸の方かな？」

「ありがとう！」

フェリックスはポカーンとした表情で見ている。それもそのはず、私は駆け足で家中を探していたから。偶然って重なるもので、そんな時ほどパッラス見つからず、みんなに私が探しているのを宣伝していたようなもの。

「パッラス！！」

「？」

彼は冬なのに素手で水井戸から水を汲んで、その細い指先は真っ赤に腫れていた。私の声に反応するなり、よそよそしくなって、出来るだけ目を合わせないようにしている。でも私は敢えて、人の築いた壁を壊す事に徹し、どんな態度を取られても目を離さない事にした。

「こつちを見なさい、パッラス！」

「あ、はい。アグリッピナ様。」

彼は手を休め、出来るだけ私の顔を見ようとしたが、顔はおどおどして隙があれば私から逃げ出したいような気持ちに見える。

「あんだ、フェリックス置いて逃げる気？」

「え？」

「昨日のこと、気にしてるんでしょ？」

「あ、いや……。」

「いずれ、このままだったらアントニア様の耳にも入るんじゃないかって？」

「……。」

パッラスは耐えきれず、私から目を逸らした。また、昨日の感情的で反抗的な態度になるうとしている。

「あたしを見くびらないで、パッラス。」

「え？」

「たかが言葉のあや、貴方の事を別にアントニア様へ告げ口するほどでも無いでしょう？」

「え、本当ですか？」

「当然じゃない。ガイウス兄さんにも口止めするし、ドルスス兄さんも味方だから平気よ。」

驚いてるパッラスは思わず膝を床につき、布を絞ったような顔で床にうなだれて感謝を表した。

「ありがとうございます！ありがとうございます！アグリッピナ様！」

「あら？まずは主人に謝るのが先じゃない？」

「あ、そうだった！本当にすみませんでした、口答えなんかしてしまい。」

「いいえ、パッラス。元はといえば、私の言葉が原因でした。貴方の立場を尊重せずに、自分の思っている事が正しい事だと思い込んでばかりに。この間、ガイウス兄さんから同じ事で頭を叩かれて、血を流したばかりなのにすっかり忘れちゃって。」

「…。」

「それとも奴隷の貴方にも頭叩かれて血を流してもらった方がいいかしら？」

「え?!何を仰ってるもですか?!」

「だって、あたし頭に血が上りやすいんですもん、フフフ!」

「そんな、やめてください!滅相もございませんよ!」

「バーカ、冗談に決まってるでしょ?」

パッラスは太陽のように輝いて笑ってくれた。そして照れ臭そうに目を合わせ立ち上がった。

「実は、俺が…ギリシャ語を教える奴隷の仕事を選ばないのは、もう一つ理由があるんです。」

「なに?」

「あんたにだけ…。アグリッピナ様、あんたにだけ教えたいからなんですよ。」

え?

「あんたにだったら、それこそアラトス王子と同じ言葉を教えてた方がいい。でも、他のローマの奴らなんかに誰が教えるもんか!」

「パッラス…?!」

「俺はあんなの桃を奪ったのに、アクイリアの為にくれた。俺が捕まった時も、アクイリアが死んだ時も、あんたは俺たちと同じ目線

でいてくれた。」

やだ、どうしたの?!

「だからこそさ！俺はあんたには俺たちのように汚れて欲しくないんだ。あんたには俺を導いてくれる星であって欲しい。真夜中だからこそ、闇世の中でも輝く星に…。」

なんでドキドキするの？

パッラスの実直な表情が、私の少し火照った顔を真っ直ぐ見つめてくれてる。なんて凛々しい顔なの？

「どうしました?」

「ううん、何でもない…。」

だめ、目を逸らしちゃ。でも、見つめられると嬉しいのに恥ずかしい。身体全体が、葡萄酒を飲んだようにフラフラしてきた。いやだ、どうしよう?立ってられない。

「パッラス…!」

「アグリッピナ様?!」

いやだ、あたしったら。思わずパッラス抱きしめちゃった。胸板ってこんなに広がったんだ。恥ずかしい。ドキドキしてるの聞こえてらどうしよう?!

「アグリッピナ様…。」

「パッラス…。」

私は今でもはっきりと覚えてるの。

多くの灯されたキャンドルで彩られたローマの夜、まるで吸い込むように互いを抱きしめ合いながら、生まれて初めて異性の唇に自分の唇を重ねた事を…。

続く

第九章「初恋」第七十六話

サートウルナーリア祭七日目 真夜中。

” ねえパツラス？”

” 何ですか？”

” お鼻とお鼻をくっつけければ、もう一度できるの？”

モニヨモニヨする。

今度はとっても気持ちいい感じ。思い出す度に胸がドキドキするから。

” はあ、パツラス…。”

” あ！アグリッピナ様！ごめんなさ。”

” ダメ。謝らないで。”

” はい…。”

ずっとずっと、あの透き通る綺麗な瞳に、今度は私が虜になっていた。

” ねえ、もう一回だけお願い。”

” はい…。”

するとパツラスはとっても優しい微笑みで私を包んでくれて、じつと目を瞑って私の鼻を避けて唇を重ねてくれた。とっても柔らかくて、まるで皮を剥いた水つ気たつぷりのぶどうを、唇だけで啜えている感じ。

” はあ…。”

”…。”

”ふう…。”

”アグリツピナ様、大丈夫ですか？”

”うん。”

いけない。

これ以上一緒にいたらもっと欲しくなっちゃう。ダメだ。ちゃんと寝ないと。あたし何をやってるんだろう？サートウルナーリア祭の最後の夜は厳粛でないと…。

”パッラス、あたし、もう寝る。”

”あ、はい…。”

”ありがとう。”

けれど今度はパッラスが全く目を合わせてくれなかった。どんなに追いかけても拒絶されているみたいで。のぼせ上がった身体を恥ずかしいように。

”す、すみませんでした！アグリツピナ様！”

”なんで謝るの？”

”だって！自分は身分をわきまえないで、でしゃばって、その…。あの…。”

パッラスって可愛い。

年下のくせに、奴隷のくせに、キスしたくせに、でしゃばったくせに、照れてるくせに。

”パッラス、あたしは貴方との口づけ、大好きだよ！”

”アグリツピナ様。”

”お休み…。”

でも、今度はあたしが寝れなかった。

とつても気持ち良かったせに、ずっと抱きしめて欲しかったせに、もつと見つめて欲しかったせに、もつともつと、ずっとキスしたかったせに。

「はあ〜…。」

隣では寝相の悪いリウィツラが、ガーガーといびきをかきながら寝ている。あんたに乙女の心が分かる？リウィツラ。とろけるようなとつてもすてきな大人の味。初めて黙って葡萄酒を飲んじゃった気分。

「はあ〜…。でも、なんでしちゃったんだろう?」

あんなにアカエアにある小国の王子アラトス王子にベタ惚れだったのに、ううん、アラトス王子はパツラスと全然違うけど、やっぱり格好イイ。でも、私はパツラスとキスをしちゃった。

「はあ〜…。これからどうしよう?」

思い出すだけでも、唇がむず痒くなってくる。この時ばかりは神々に呪われたのかもって思った。いつつため息が出て、掌に顎を乗せて、小指の先で自分の唇を触ってないと落ち着かない。

「アグリッピナ姉さん?」

「はあ〜…。」

「姉さん?!」

「うん?ドルシツラか。」

「もう、お祭り終わったのに、ため息ばかりついて寝れないの?」

「はあ……。そう。」

「もう、またアラトス王子の事考えてんたんでしょ？」

「はあ……。」

「明日は片付けがあるんだから、早く寝たら？もう。」

どうでも良かった。

そんなことよりも、私は気が多いのかな？なんで二人も男の子を好きになっちゃうんだろう。そんな冬の空に輝く星々がとても綺麗で、その煌びやかな美しさに心を奪われまたため息。世の中ってこんなに綺麗だったんだね。

「はあ……。」

「もう！アグリッピナ姉さん！いい加減にしてよ。」

「何よ？」

「ため息ばかりでうるさくて寝れないじゃない！」

もう！ドルシッラっていつからこんなに姑じみてたっけ？

「寝ればいいんでしょう？寝れば。」

そして、この初恋は当然叶うこともなく終わってしまう。そうよね？初恋なんてそんなものでしょう？でも、当時の私は真剣にアラトス王子とパッラスの間で悩んでいたのよ。だってどっちも好きだったから。

続く

第九章「初恋」 第一百七十七話

まるで夢のようだった7日間のサートウルナーリア祭もあつという間に終わり、後は年初めに年神ヤーヌス様を迎えるだけ。出入り口と扉の神だけあつて、前後二つの顔を持つのがヤーヌス様の特徴で、私は幼い頃から人の二面性を表しているようで好きだった。

「おはよう、アグリッピナ。」

「おはよう、ドルスス兄さん。」

「なんだ？目真っ赤じゃないか。どうしたんだ。」

「寝てなかったの、ため息ばかり出ちゃって。」

「何で？」

そりゃあパツラスとキスしたから、

何て言えない。はあ、どんな顔してパツラスに会えば良いんだろう？参ったな。

「おはようございます、アグリッピナ様。」

「ヒッ?!」

アラトス王子！

「お、おはよう、アラトス王子。」

「昨日はグツスリ良く寝れましたか？」

「え、ええ。アラトス王子は？」

「予は煌びやかなキャンデルに彩られたローマの夜に、胸がワクワクして眠ることができませんでした。」

「そ、そう?」

まさか、パツラスとのキスを見られてないわよね？

「毎年あれ程のキャンドルが灯されるのでしょうか？」

私はあたふたしていると、ドルスス兄さんが肩をポンッと叩いて代わりに説明してくれた。

「そうですね。ただ、火事の多いのは事実なので、いずれ取りやめになってしまふ可能性が高いですね。」

「それは残念ですね。」

「はい…。」

するとアラトス王子は私の右手をそつと優しく取って、私に微笑みを浮かべながら素敵な言葉で私を包んでくれた。

「アグリッピナ様、もし、来年のサートウルナーリア祭でもまた、このようなローマの夜に無数のキャンドルが、煌びやかに灯されるのなら、最後の夜は是非とも、私とご一緒できませんでしょうか？」

彼は敢えて謙つた言い方で懇願してきたの。私の指先に彼の指先が触れているだけで幸せだというのに。ああ、もしアラトス王子ともキスができたどんな感じなのだろう？！

「はい、喜んで…。」

ふわふわとした暖かさが心を包み、アラトス王子に笑顔で答えていたら、横目にチラッとみえたのはパツラス。彼は全くこつちを見ることなく、真つ赤になった指先を濡らして働いている。

「アグリッピナ様、私は再びこれから祖国へ帰らねばなりません。」

「え?! 今日なのですか?!」

「はい、ですが、私は貴方を心から思い、手紙でこの気持ちを綴る所存であります。そしていつの日か、貴方に私が育った地中海に広がる海原を捧げたい」

「アラトス王子…。」

でも、私は決して彼の祖国に足を踏み入れる事は生涯なかった。当時から五十一年前、つまり初代皇帝アウグストゥス様がアクティウムの海戦で勝利した後、アカエアとマケドニアと分別されたことによつて、ローマ寄りだったアラトス王子の小国は、ローマに逆恨みを持った部族の逆恨みにあい、彼は王になることもなくこの世を去つてしまう。生きてた王子の素敵な笑顔を見たのは、この時が最後だった。

「アグリッピナ、良かったな。」

「う、うん。」

でも幼かった私は自分の気持ちに素直になれず、また黙々と仕事をしているパッラスの姿が気になつてしまい、王子との名残惜しい時間を無駄にしてしまった。だから私は神々なんて信じないの。心が求めるもの、体が求めるものは、どうしてこんなにも差があるのだろうか。もちろん幼かったから、その差すら分かつてもないなかったけど。でも、パッラスも好きでアラトス王子も好きな私の心は二つに切り裂かれそうだったから。

「では、そろそろ王子行きましょう。」

「はい、セリウス、クツルス。」

本当に本当に今でも後悔してるのよ。

多分、この時が一番素直で正直な時だったからこそ、私が恥ずかし

さを優先した自分を恥じているの。三度もローマ人の妻となり、そのうちの一人は叔父であり皇帝、そして我が息子を今こうやって皇帝に帝位させた母后となっているのに、やり直せない過去があるだなんて。だから、唯一大好きな年神ヤーヌス様が年初めに私に語りかけてくれる気がする。

”アグリッピナよ、お前がいくつになろうとも、今年こそは良い年であることを、心から深く望むのだぞ…。” っと。

続く

第十章「亀裂」 第一百七十八話

翌年になり、私が八歳を迎える年。

私達の家族や親戚同士では、様々な亀裂が生まれていくことになる。昨年ドルスツス叔父様は、現皇帝であるティベリウス様と共に2度目の執政官に就任された。元首の同僚の執政官職はこの時期では特別な意味を持っており、事実上競争相手だった我が父ゲルマニクスが亡くなっていたので、正式な皇帝後継者指名の意味を持つことになる。

さらに、今年は叔父様へ護民官職権の授与が決議され、初代皇帝アウグストゥス様が治世された末期に、ティベリウス様へ与えられた同じ立場を、同じ年齢で与えられる事になった。それでもドルスツス叔父様はよく働き、母ウィプサニアの感情も考え、明白にセイヤヌスにも敵対していたので、私たちの父親代わりになって、ご自分の家庭も顧みずに面倒を見てくれた。

だが、この”ご自分の家庭も顧みず”という意思が、ドルスツス叔父様の妻であるリウィツラ叔母様の逆鱗に触れてしまう。反政府派閥を討伐を目的とするティベリウス皇帝の右腕セイヤヌスと結託した叔母様は、あからさまに母とは対立されてしまうのであった。

母ウィプサニアはというと、亡き夫ゲルマニクス殺害犯の首謀者を現皇帝ティベリウスと断定しており、コツケイウス家のネルウア様とドルスツス叔父様の実母の再婚相手であるアシニウス様を後ろ盾に、打倒皇族派の為、本格的に強固な関係を築き始める。国家反逆罪に問われる事を懸念した大母后リウイア様からは、直々に母へ忠告したのだが、これをことごとく無視。さらにその事がきっかけで、

祖母のアントニア様も距離を起き始めてしまう。

そう、つまり母ウィプサニアやリウィツラ叔母様が、本当の意味で『ローマの魔物』に魂を売った年でもあった…。

さて、その年の始め。

アントニア様はネルウア様達と忙しくしている母ウィプサニアの代わりに、ドルスス兄さんが今年こそ成人式を迎えられるようにと、大母后リウイア様へ年始のご挨拶しに行くことになった。その事を聞きつけた私は早速駄々をこねて、ちゃっかり兄さんのお供をする事が出来たのだ。

「今日は奴隷達と一緒に、大母后リウイア様はアウグストゥス様のドムスを掃除されているみたいなの。」

「へー！アウグストゥス様のドムスに！ドルスス兄さん、私、とってもワクワクしてます。」

「何で？」

「だって初代皇帝アウグストゥス様のご自宅を拝見できるんですよ！」

「そうだよな、あの初代アウグストゥス様のドムスだもんな。」

「どんなに立派で豪華なのでしょう？！」

するとアントニア様は私達二人を眺めて頬んでいる。

「あなた達、ドムスを見たらきつとびっくりするでしょうね。」

私達はアントニア様が何のことを言っているのか、さっぱり見当もつかなかったが、その意味はアウグストゥス様のドムスを目の当たりにして分かった。

「ここよ。」

「え?!」

「ここ、ですか?!」

そこは、パラティヌス丘南西に向かうアポロン通りを登り、ガイウス・オクタウィウス様のアーチをくぐり抜け、目の前に見えるアポロン神殿の右手に曲がった先にある、ひっそりと慎ましく立てられた本当に小さなドムスだった。

「ドルスス兄さん…。こ、これがアウグストゥス様のご自宅なの?!」

「信じられない。アントニア様、これじゃお母様方の祖父であるアグリッパ様の倉庫よりも小っちゃいじゃないですか!」

「う、嘘でしょ?」

「本当よ、二人とも。アウグストゥス様ご自身の宮殿は、戦車の大競技場キルクス・マクシムスを一望できるほど広大ですし、ご自身の神殿や神殿の図書館も立派でしょ?でもお住まいは、まるで最愛家であるアウグストゥス様を象徴するかのようには、リウィア様のお住まいと寄り添うように、ひっそりとされていたのよ。」

「うへえー!」

私とドルスス兄さんは、しばらくずっと口を開きっぱなしだった。

続く

第十章「亀裂」 第一百七十九話

初代皇帝アウグストゥス様が寢床にしていたドムス。

その大きさはアウグストゥス様の宮殿に比べたら、非常に質素で小さな作り。豪華なアトリウムや天窓、雨水を貯めるインプルウィウムも質素で、真紅色を貴重としたコンクリート壁が、ローマ国家の尊厳者という名誉を与えられた威厳と品格を兼ね揃え、大小合わせた15の部屋があり、程よくバランスの取れた配置になっている。

むしろ大人になってから考えれば、敢えてご自分の存在を謙る事で元老院への配慮と威肅した威厳を与えられ、正にローマの尊厳者足り得るアウグストゥスの称号に相応しい、美学に溢れた作りなのかもしれない。

まあ子供心の私達からしてみれば、”これが、あのアウグストゥス様のドムス？”って感じになるのは当然でしょうけどね…。

「あら？アグリッピナ。」

何と、ドムスの中からひょいっと顔を出してきたのは、大母后リウイア様だった。

「ああ、大母后リウイア様！お久しぶりです。」

「やっぱりアグリッピナじゃない。貴女、随分大きくなりましたね？」

「ありがとうございます。最後に大母后リウイア様にお会いしたのは、ウエスタの神殿近くで起こった火事の時でした。」

「まあ、そんなに！今は幾つ？」

「今年で八歳になります。」

「もうそんなになるのねえ。随分とお姉さんぽい顔つきになって、妹達のドルシツラやリウィツラは元気？」

「はい、とても元気です。」

「それと、リヴィアとは仲良くやってる？」

「ええ、まあ、あははは。」

「ダメよ、いつまでも意地を張ってちゃ。もうリヴィアは貴女の義理のお姉さんなんだから。」

確かにそうなのよね。

リヴィアは長男ネロお兄様のお嫁さん。でも、なんか憎たらしくて仲良くなれない。

「ドルスス、元気でしたか？」

「はい、大母后リウィア様。」

「貴方は今年こそ成人式を迎えられるよう、精を尽くして頑張らな
いとね。」

「はい、兄にも劣らぬよう頑張ります。」

「良い心掛けです。でもね、こういう大切な事は競い合うことでは
無い事なのだから、しっかりと自分の身になる事を覚えなさい。」

「はい！」

すると、アントニア様はゆっくりやってきて大母后リウィア様へ抱擁をした。二、三ばかりお二人がお話になると、本当に周りが輝くような雰囲気になってくる。これはきっと、母ウィプサニアの事で私達を心配かけない配慮だと思う。

「ドルスス、アグリツピナ。あんた達は暫くあたしの旦那の家の中
でも見てらっしゃい。」

「？」

「そう、おばあちゃん達はね、大事なお話があるの。」

そうアントニア様が言うと、私達にウイंकをしてスタスタと隣の
リウイア様のドムスへ入られてしまった。そこで私達兄妹は、ニコ
ニコしながらアウグストウス様のドムスへ入ってみた。

「うわぁ、とっても上品！」

「凄いな、アグリッピナ。」

「うん！」

フラスコで描かれた壁画は、とってもローマらしい雰囲気の内柱が
描かれたり、羽をつけた美しい女性の画や、繊細さを表したような
上品な模様が繰り返し描かれており、紅葉したような大理石模様な
どは、失礼を敢えて言わせてもらえば、男性の家とは思えないほど
優美で繊細だった。

「それにしてもアウグストウス様って、ご自分の美学を持ったお方
なんですね？ドルスス兄さん。」

「ああ。それにさつきから気付いたか？アグリッピナ。心地いい風
がちやんと伝わってくるのを。」

「本当だ！凄い。どうなってるんだらう？」

気分が紅葉している私達が尊厳者のご自宅を巡っている頃、アント
ニア様と大母后リウイア様は、やはり母ウィプサニアの処遇につい
て話されていたみたい。

「アントニア……。」

「大母后リウイア様……。」

「いいわよ、もうその名前は。いつも通りお義母さんで。」

「どうしたのです？お義母さんは仮にも神格化されたアウグストウ
ス様の『アウグスタ』でしょう？」

大母后リウイア様は少し疲れた表情で両肩をあげ、溜め息を深くついている。

「ふう……。ウエスタ神殿側で起きた火事以来ね、息子ティベリウスは私をあからさまに邪魔者扱いするのよ。」

「ええ?! どうして?」

「あの子のことを思って、ローマ市民権のある実力者を陪審員団へ入れるように言ったのが始まり。」

「はあ……。」

「ピソ裁判の一件もあって、私は公正な裁判が行われるようにと、皇族派でも共和政支持派でもない、中立な陪審員団を入れるべきだって主張したの。そしたらあの子は『母さんがいつまで私を子供扱いするのなら、この主張は母からの強要でしたと一筆書き足さなければ認めません。』なんて傲慢な態度を取ったのよ。」

「まあ!」

「私もカチンと頭にきたから『あんたがそんな態度を取るなら、あたしの旦那が貴方の事を書いた書物を読んでやるわ!』なんて感情的に読んじやったら、まあ随分と狼狽した表情を見せ出したの。」

「お義母さんにしたら随分と珍しい事をされたんですね。」

「でも、失敗よ。あの子は自分を神格化するような事を一切やめるように元老院へ懇願することで、私が今までのように政治へ介入する事ができないよう、まんまと上手く牽制しちゃったの。」

再び大母后リウイア様は深い溜め息をついた。

「どうしてローマの男共は、根が甘えん坊の癖に格好つけたがるのかしら?」

「それはお義母さんが生んだ、私の亡き夫も一緒でしたよ。」

「あら? あの子は甘えん坊でも素直だったじゃない。でも長男のテ

イベリウスは手の掛からない子だったけど、何を考えているのか、今でも全く分からないんだから。」

「お義母さん、親は死ぬまで子供にとって親でしよう?でも、どこまで親であるべきなのかしら?」

「ウイプサニアとゲルマニクスの妹リウィツラのことかい?」

「ええ。」

母と叔母様の事は、祖母と曾祖母にとって頭を抱える、最も深刻な問題になっていた。

続く

第十章「亀裂」 第一百八十話

「ウィプサニアは、ピソの裁判だけでは飽き足らず、まさか、ゲルマニクスの国葬に出席しなかつた事を未だに恨んでるのかい？」

「恨むなんて、そんな可愛いものではありませんよ。今やセイヤヌスに対立する求心力として、多くの共和政支持派から賛同を得ていますが、コツケイウス家のネルウア様やアシニウス様とも強固な関係を築き始めてるのですから…。」

「ネルウアやアシニウスもかい?!」

「ええ。」

アシニウス様は指導的市民と呼ばれる有力元老院議員の一人で、当時から数えて三十年前には執政官のコンスルにつき、さらに属州総督であるプロコンスルとしてアジア属州に赴いた方。ただ、それだけならば問題無かつたのかもしれない。

問題となつたのは、アシニウス様ご自身が、ティベリウス皇帝にとつて誰よりも愛された最初の奥方の再婚相手であり、そのことが少なからずアシニウス様とティベリウス皇帝の互いに遺恨をもたらしていた。さらに裕福ではあるが上流氏族ではない、コツケイウス氏族に属するネルウア様が、母ウィプサニアの後ろ盾になつているアシニウス様と結託されているのだ。

ネルウア様は、言うなれば皇族派でも共和政支持派でもない有力者だが、莫大な財産を築き上げた手腕と、人柄の良さは現皇帝ティベリウス様にも一目信頼を寄せられてる。

「参つたねアントニア。彼ら二人は単なる共和政支持派では括れないのよ。どうしてこうなる前に、ウィプサニアを近づけさせないよ

うにしなかつたの?」

「申し訳ございません、お義母さん。本当に私の不徳の致すところでした。寡婦としてのウイプサニアの心情を考慮すると、どうしても強く言い出せず、つい…。」

「見て見ぬ振りだったわけね?」

「はい。」

「全く…。」

「それで、次はあなたの実の長女リウィツラだけど、またまた葡萄酒飲み過ぎたのかい?」

アントニア様は目を床に下ろして、未熟な自分の恥を見つめるように話し出した。

「あの娘は、きつと心の病なんです。」

「心の…病?」

「ドルスツス様の実母様の国葬以来、あの娘はドルスツス様とウイプサニアの関係を疑い続けており、二人が対面すれば一触即発にみなりかねないほどに…。」

「まったく、醜い女の嫉妬じゃないの、放っておきなさいよ。」

「いいえ、女の嫉妬だけなら私もここまで頭を悩ますこともありません。まるで何があったのか知らないけど、あの娘、ある時期からピタリと表へ出なくなつて…。あの娘が前夫を亡くした時でさえ、少なからずサートウルナーリア祭にはちゃんと顔を出していたのに、さらにあの娘の奴隷の話では、度々、親衛隊の上官らしき人物が入りしているのを見た者まで…。」

「親衛隊…上官?」

「ええ。」

大母后リウィア様は、頬に右手の掌を乗せて推敲されている。そして、鋭い顔つきでアントニアを見つめた。

「まさか、セイヤヌスじゃないだろうね？」

「セ、セイヤヌスって、あのジュリアの父親が?!」

「だから私は反対したのよ、アントニア。クラウディウスの息子ダ
ルサツスが亡くなった時に、婚約していたジュリアとは縁を切るべ
きだったのよ。いくらジュリアがウエスタの巫女達の手伝いをする
事で、亡き婚約者に貞操を守る為に親から勘当されたとしても、セ
イヤヌスはジュリアにとって親でしょう?」

「はい...。」

「それに忘れたのかい?ジュリアをダルサツスの婚約者に勧めてき
たのは、お前の長女リウィツラじゃないか。」

「ああっ!」

そして、事態がさらに最悪な方向へと及ばないように、ある決断を
下させられた。

「私が直接ウィプサニアとリウィツラと話しましょう。」

「お義母さんが、直々にですか?」

「仮にもゲルマニクスを我が息子ティベリウスが養子にした時点で、
クラウディウス氏族の家族。そして息子ティベリウスの長男と結婚
したりウィツラも家族。氏族同士の混乱はローマ国家にとっても、
決して得策では無いでしょう?」

「そうですね。」

「それに今、ここでウィプサニアとリウィツラの誤解を解いてやら
ないと、隣のドムスにいるこれからのローマ国家を担う彼らが可哀
想よ。」

「孫のドルススやアグリッピナです?」

「それだけじゃないわ、アントニア。多くのまだ生まれぬ子供たち
も含めて、私達やあんだ達の世代は、彼らの安定した未来を不安に
させないための責任があるの。」

アントニア様は、大母后リウィア様の壮大な考えに圧倒されていた。

続く

第十章「亀裂」 第一百八十一話

その頃、母ウイプサニアは、現皇帝ティベリウスの右腕である親衛隊長官セイヤヌスを失脚させるべく密談を続けていた。

「やあ、ウイプサニア。相変わらずお美しい。」

「お久しぶりです、アシニウス様。」

「ウイプサニア、元気じゃったか？」

「はい、ネルウア様。子供達もすくすく育っております。」

「こないだの、なんじゃったかのう？頭を怪我した？」

「アグリッピナでしょうか？」

「おお！男の子の。」

「あ、アグリッピナは長女ですが…。」

「それじゃ殴った方か？カリガだっけか？」

「ああ、いえカリグラです。本名はカエサルと同じガイウスですが…。」

「実にいい。サビニ人を略奪した我らの祖であるロムレスの兄弟達のようなだ。神君カエサルの決断力、そしてゲルマニクスのような華やかさを連想させるのう。」

母は少々ネルウア様の言葉に拍子抜けしていた。何故なら、当時はやはり長男ネロお兄様を皇帝継承者として全てを注ぎ込んでいたから。

「はあ…。」

「確かに、ネルウア様の仰る通り、カリグラくんはとてもいい目つきをしていた。堂々たる佇まいがローマの人々に畏怖の念を持たせるかもしれませぬ。」

「長男のネロも、立派にカエサルの血を受け継ぐ者として異例の出

世をしておりますけど。」

ピシヤリと呟いたウイプサニアに、ネルウア様とアシニウス様は、お互いに顔を見合わせる。母ウイプサニアの機嫌が少し悪くなっている事に気が付いたようだ。

「いやいや悪かったウイプサニア殿。確かに長男のネロくんは頑張っておるのう。」

「これは失礼した、ウイプサニア殿。」

「分かって頂ければ、それだけで十分です。」

この頃の母ウイプサニアは、次第に他人からの忠告などを素直に受け入れられなくなっていたほど、自らの考えに凝り固まっていく。とにかくネロお兄様こそが、ゲルマニクスお父様亡き後の次期皇帝継承者であるという揺るぎない想いに駆られていた。

「では問題に入ろうではないか。現在ウイプサニアを支援する有力な氏族達は、こぞって共和政支持派であり、世襲制である現在のクラウディウス氏族には反感を抱いているが、所詮彼らも平民であるローマ市民たちの声は聞こえてはおらんのだ。」

「確かにネルウア様の言うとおり、ローマの市民たちは、堅実で姿見えなき指導者に従うことよりも、大きな力で世界を煌びやかで色取り取りな世界に塗り替えてくれる血に飢えている。」

ネルウア様は立派な顎鬚をさすりながら、ニヤっとしてある事をウイプサニアに話し出した。

「ウイプサニア殿は覚えているだろうか？今から四年前に小アジアの南西部を大地震が襲った時の事を……。」

「ええ覚えています。サルデイスやマグネシアなどの地方都市が、

大地震による激震で壊滅的な被害を受け、あのエフェソスにあるアルテミス神殿までが余震の被害を受けた年ですよね？」

「そうじゃ。ところが現在の元老院の議員定数は六百人いるなかで、元老院の議決がなければ皇帝は政策を何一つ実行する事ができない。そうじゃったの？」

「はい。」

「では、その理屈でいえば、甚大な被害を被った被災地に被害者は離れたローマにいる元老院達の長い討議の結論が出るのを待つしかなかったわけじゃな？」

「はい。しかし、それが平民の声を聞かないと、どういう繋がりが？」

「若い者はせっかちでいかん。最後まで聞くが良い。そこでティベリウス皇帝は少人数の元老院議員による対策委員会を即座に設置し、緊急援助と設備の再建に一億セステルティウスをローマの国庫から支出、さらには被災者に対し五年間にわたって属州税を免除する事を元老院へ緊急対応策を提出した。つまり、具体的な復興は属州に委ねるといふものだ。これがどういう意味か分かるかろう？ ウィプサニア殿。」

そこへアシニウスは眉間にシワを寄せながら、ティベリウスを痛烈に批判し始める。

「この一見堅実に見える政策も、平民からしてみれば、上のもの達による税金逃れのいう口実となるしかないのです。」

「事実、そうだったし。それにローマ国家の設備を整えるいきっかけになったのも事実じゃ。では、ウィプサニア殿、そんな時に、その政策以外に平民は何が欲しかろう？ 神君カエサルならば、何を平民に与えたと思われるか？」

母ウィプサニアは右手を顎に添えて深く考えてみたが、その答えは

遙か彼方の落日のように感じられた。

「ネルウア様、それはなんでしょう？」

「つまりじゃ、それは誰もががりたくなるような”嘘”じゃよ。」

その”嘘”を母ウイプサニアは生涯つき続ける事になる。それが、彼女の第二の不幸の始まりでもあった…。

続く

第十章「亀裂」 第一百八十二話

「さあ！もう十分でしょ？それとも貴方は、また同じ場所で私を犯すつもり？！」

セイヤヌスはリウィツラ叔母様のピシヤリと解き放った言葉に、口を遮られるしかなかった。

「私は自分の旦那ドルスツスを取り戻したいだけ！あなたの政治的な思想も、ウイプサニアが現皇帝を覆そうとしている野望にも興味は無いの！分かる？」

「…。」

「私の事を二度も抱けると思わないで！今度は本当に全てを、あなたの政敵である旦那に話すわ！」

「それで困るのは、リウィツラ貴様の方だろうか？！」

「もうたくさん！これ以上私があんたに色々な事を協力して、あんたに渡された薬を旦那に飲ませて、ウイプサニアに協力する一方で、むしろ家族を顧みないで協力する一方！エトルリア人の媚薬なんて信じたあたしが馬鹿だった！」

「ぬう！貴様、我らの種族を愚弄するつもりか！」

「ええ！所詮、エトルリア人なんて、ローマの下水道を支えるアーチを考えついたくらいが、ちょうどあつてるんじゃない？結局あんた達は、ローマ最後のタルクイニウス王と共に、ここから追い出されたことがまだ分かっていないのよ！」

セイヤヌスは思わず叔母様の頬を叩こうとしたが、流石の叔母様も素早く避けて、そばにあった皿を投げつける。セイヤヌスは瞬時に拳で皿を叩き割ると、怒りを露わにせざるをえなかった。

「この雌豚め！もう許さぬ！殺してやる！」

だが、リウイツラ叔母様を守ったのは、外で流石の異変に気が付いたセイヤヌスの部下達であった。

「おやめくだされ！セイヤヌス親衛隊長官殿！今ここで血気盛んに殺生をすれば、貴方は現皇帝を敵に回すことになりますぞ！」

「構わぬ！この雌豚の憎き顔を切り刻まなければ、我がエトルリアとしての誇りを！侮辱の処刑台に晒すことになる！」

「それでもです！セイヤヌス長官殿！

お気持ちをお鎮めください！」

「ぬっぐ！ならぬ！」

「我ら、キメラとトウクルカの為にも！」

「…。」

「キメラとトウクルカ？」

リウイツラ叔母様は、奇妙な言葉を耳にした。だが、その言葉に即座に背を向けたセイヤヌス達は、ギラついた目だけをリウイツラ叔母様へ向けている。

『聞こえたか？』

『殺めるか？』

『教祖様、その意思是トウクルカの意思でしょうか？』

『イヤ、貴様たちが語ることがトウクルカ様の意思であり、今は自重すべき事が得策だ。』

『では、後ほど、サビニの血を引くこの雌豚に、真夜中に侮辱を突き返しましょう。』

さらに、リウイツラ叔母様はその者たちの怪しげな雰囲気、暫し嫌悪感を覚える。

「失礼をした、リウィツラ殿。今日の所はこのまま引き下がることにしよう。」

「?!」

先ほどまで殺気立っていたセイヤヌスの顔は、恐ろしいほど安らかに穏やかさに溢れていた。

「セイヤヌス？」

「残りの媚薬も全てここに置くことにしよう。これはほんの詫びだ。」

リウィツラ叔母様は顔をプイと横に向いて、敢えてセイヤヌスの置いた薬から目を背けるが、内心は気になって仕方がないようである。

「では、後ほど。ドルスツス殿に飲まれて効果が出れば、引き続きウィプサニアとその長男ネロの情報を含め今まで通り知らせてください。」

そう言うと、セイヤヌスは深くお辞儀をしたまま顔はリウィツラ叔母様へ見せたままにやけてその場を去っていく。セイヤヌスの急変に戸惑うリウィツラ叔母様だったが、置いていったエトルリアの媚薬が気になって仕方がない。部屋中を歩き回り、先ほど割れた皿を奴隷に片付けさせても、セイヤヌスが置いていった媚薬に手を触れれば、烈火の如く怒り出した。寝室に戻り、媚薬をベッドの向こう側に置いて、ベッドの上からジツと体育座りしながらその媚薬を眺めると、素足の親指の指先同士でくすぐり合い始める。

「本当に…媚薬なのかしら？」

リウィツラ叔母様はついに、一度と戻ることが出来ない魔の二線を、この時始めて越えてしまった。

続く

第十章「亀裂」 第一百八十三話

その頃、帰ったふりをしてリウイツラ叔母様のドムスにあるアトリウムに居続けるセイヤヌスの一団は、リウイツラ叔母様の対処について話していた。

『教祖、先ほど媚薬を置いていったのは、何故なのでしょう？』

『もう遠回りは十分したが、リウイツラは我らの一派に入り込ませるのは無理だ。ならば、何が一番良い方法か？それをトウクル力様へ問いかけたところ、”敵の望む物を与えよ”と申された。』

『それでは、本物の媚薬を手渡したのでしょうか?!』

リウイツラ叔母様は耐え切れず、すぐさまその媚薬の入った小さな小瓶を取り、蓋を開けてみる。

『今までリウイツラに渡していたのは、ドルスツスの心を取り戻すためと偽った少量の毒薬だ。時間は掛かるが、確実にドルスツスを抹殺する為の手法だったのだが、あの様子では疑心暗鬼に駆られてこれ以上ドルスツスに薬を飲まず事はもうないだろう。』

瓶の中から香り立つ匂いに、リウイツラ叔母様は抵抗力を失っている。

『そこで、エルサレムからやってきた商人が、小アジアから取り寄せた本物の性欲を活性化させる媚薬を置いてきた。効果を疑っている雌豚は、馬鹿みたいに気になって自分で試すだろう。』

さも口紅を塗るかのようになり、小指の先に少量の媚薬をつけ、リウイツラ叔母様はそれを舌先で恐る恐る触れてみた。

『トウクル力様は常に仰っている。』人の捨てきれぬ疑いや興味という心は、闇夜や深海のようである”と…。つまり果てしないということだ。興味が無くて、自分の人生に必要な無いものなら突き返すだろう？だが、あの雌豚はしなかった。』

突如、雷が頭から足元まで突き抜けるような刺激がリウイツラ叔母様を支配し、あっという間に身体中の力が抜け、血が激流するような感覚に陥ると、思わず出したくもない喘ぎ声が、次々と胸の奥から吐き出されていく。

『発汗はもちろん、目は昼間の太陽を直視したように冴え、すべての肌は敏感にあらゆるものを捉え、時の流れは遅くなり、囁きさえも北風のように心をかき乱して感じていく。当然今までのように、神々が与えし性欲を抑えることは出来ない。鎮めるものがあるとなれば、それはただ一つ…。』

『ただ一つ…？』
『いいから、貴様達は外を見張っている。』

セイヤヌスはニヤついた。
と、同時になぜ今までこの方法を選択しなかったのかが、愚かな自分を嘲笑するしかない。

「リウイツラ…。」

「はあ！？セ、セイヤヌス？！ど、どうしてお前がここに?!」

「神々が与えられし物に、お前はなぜその豊かな太腿合わせている？」

「い、いや！来ないで！」

「それは神々の意思なのか？それとも、貴様が単に拒否しているだけなのか？」

「やめて！」

「サビ二人を祖とするクラウディウス氏族との混血であるお前が、代々こうやって生き延びてこれたのは、ローマ人に略奪されたからだろう？」

「近寄らないで！！」

「いくらローマ人に略奪されたからといって、お前の祖であるサビ二の女子供は何故ローマ人から逃げなかった？」

セイヤヌスは歯茎を剥き出しながら、眼光は鋭くリウィツラ叔母様の目を捉えている。

「それはお前達サビ二の女達は、大いに淫らに、背の低いローマ人の肉体を、貪り愉しんだからだろう！」

引き裂かれるストラの奥に、三年前に双子の男子を二人産んだとは思えないほど、悩ましいリウィツラ叔母様の生足が姿を表した。

「もう、躊躇はせぬ、リウィツラ！貴様がエトルリアを愚弄するならば、貴様に最上級の悦楽という侮辱を与え、貴様のその憎き顔に、俺の全てをぶちまけてやろう！」

奴隷は縛られることで安心する。

肉体の奴隷になった叔母様は、セイヤヌスより肉体を犯される事で安心してゆき、そしてついには自らセイヤヌスへ身体を求めるようになっていった。目を閉じず、常にセイヤヌスを見下ろし、自らの性を相手の肉体へ君臨させ、ドルスツス叔父様に構われなかった自分自身を擦り付けるように…。

「セイヤヌス、エトルリア人のくせに大した物を持っているじゃない。」

「う、っぐ！」

「もう、果ててしまうのかい？冗談じゃないよ。あんたが先に始めたんだからね。終わらせようとも、逃すものですか。」

「この雌犬め！」

「豚と呼ばれなくて良かったわ。セイヤヌス、あんたも好きにすればいいのに。」

「?!！」

すると叔母様はセイヤヌスの口元に、自分の舐めたエトルリアの媚薬を流し込む。セイヤヌスは計られた事に気が付いたが、もう遅かった。リウイツラ叔母様と同じ症状が雷のように、身体中を突き抜けていく。こうして、リウイツラ叔母様はセイヤヌスとは離れられない関係を重ね、一番愛おしいはずだったドルスツス叔父様を自らの手で殺めてしまうのであった。

続く

第十章「亀裂」 第八十四話

母ウィプサニアと叔母リウィツラの女の性。

共に美しく女性であり、求めるものは違えど、少なくとも私がまだ幼かった頃は、互いに慎ましく尊重し合う女の友情を築いていたはずだったのに…。

一つのローマの煉瓦が無くなると、女の友情は崩れ落ちる水道のように、あっという間に脆く壊れていく。それどころか、互いの領域に踏み込んで、今度は互いの主張を激しくぶつけ合いながら、互いの人格まで貶し合う。私達子供同士の口喧嘩と訳が違う。それによつて親戚同士は分裂してしまうのだから…。

「いい加減に話したらどうなのさ!? ウィプサニア!」

「何をですか?! 大体貴女のような感情的な言い方ばかりしか出来ない人には、何を語れと? 語るに及びません。」

「そうやって澄ましていられるのも! あんたがゲルマニクス兄さんを利用してゐるからじゃない?!」

一度開けられた悪感情の蓋は、互いに尊重し合うことに気がつかなければ、閉じることな無駄とでさえ思つてしまう。

「今度はあたしの旦那ドルスツスを抱え込んで、あわよくば子供でも産もうつて魂胆なんだろう?」

「なんてことを?! リウィツラ! あんたそれでも母親かい?!」

「アントニア母さんは黙つてて! 邪魔したらタダじゃ済まないから!」

あの日のリウィツラ叔母様は、氣迫をほとばしらせて、毒蜘蛛でも飼っていきそうな汚い言葉を吐き出して、他の者を圧倒させていた。その理由は、ご自分が抱えきれないセイヤヌスとの大きな闇を、辺りに怒りをぶちまけて目立たなくさせるためだった。

「あんたのところ家族は昔から股の緩い雌豚ばかりじゃないのさ！あんたの姉も、そして母親も！あのアウグストウス様の血を引くとは思えないほど、だらしない雌豚！ローマの下水道クロアカに流れると豆でも、餌にしているのじゃないか！」

自分の母親がキレた時を見た事があるだろうか？右手を放り投げるように、母ウィプサニアはついにリウィツラ叔母様へ手の甲を使って頬を叩き、ストラの胸元を掴んだ。

「クツルス！セリウス！」

すぐさま、クツルスとセリウスが二人を止めに入っただけで、二人は部屋の両脇に追いやられても、互いの家族、兄弟、子供達を罵り合っている。私はそばで泣いている三女を抱き寄せながら、ただジッと眺めることしかなかったのだが…。

「イタッ！」

「それ以上、母さんの悪口を言っな！」

必死に口をへの字にして今まで涙目で耐えていた次女のドルシツラが、ついにはち切れて近くに転がった梨をリウィツラ叔母様の顔へ投げつけた。

「ドルシツラ?!」

すぐさま駆けつけて押さえたのは兄カリグラだった。だが、今度はドルシツラが今まで見たこともないような形相で、必死に怒りをリウツラ叔母様へぶつけている。

「母さんを何で守ってやらないんだ?! あんたはゲルマニクス父さんの妹だろ?!」

子供から説教を喰らえば、大人だって黙っちゃいない。

「あー! ゲルマニクス! ゲルマニクスって誰も彼もうるさいんだよ! 誰もあんた達なんか可哀想となんか思っちゃいないのさ! ただ、外にいる連中は、情けを掛けてくれるだけで、一体何をしてくれたんだい?!」

リウツラ叔母様が苛立ちを見せながら、私達子供にも毒を吐いてきたけど、最後に目を合わせたのは私の事だった。私は母のことで、あんなに仲が良かった叔母様にこんなにも睨まれなければいけない現状が悔しくて悔しくて。目が合っている間は、叔母様は齒ぎしりしながら涙をためてとどまっているけど、私は叔母様に助けて欲しい思いを込めて笑顔で応えた。

「アグリッピナ...。」

流石に叔母様は、ご自分に嘘をつかれても、私やジュリアと過ごしたはぐれ者達の思い出までには、毒を吐くことが出来なかったみたい。

「リウツラ! もう気が済んだらう? ! とつととお帰り!」

「ええ、そ、そうするわ!」

だが、アントニア様はもう一つ、去り際の叔母様へ言葉を添えた。

「でもね、あなたはどこに行っても、何を言っても、あたしのたった一人の娘なんだよ。何が気に食わないのか知らないけど、それだけは忘れないで頂戴。」

小さく、ほんの小さくリウィツラ叔母様の肩の力が降りたようだったけど、でも何も語らず、そのままゆっくり去って行った。母ウィブサニアを許せない想いと、未だにアントニア様に愛された一人娘としての想い出が、まだまだ叔母様の心でせめぎ合っていたのかもしれない。

「ウィブサニア。」

「はい、アントニア様。」

「単刀直入に貴女には伝えます。もしもこれ以上、貴女が自分の志を曲げないというならば、このドムスから出てって頂戴。」

え?!

どうしてアントニア様!

「あなたは確かに私の可愛い息子の寡婦だよ。孫達だって可愛くて目に入れても痛くないくらい。けどね、どんなに憎まれ口を叩かれようとも、あの娘も私の可愛い一人娘なんだよ。もうこれ以上、火種になるような事は避けたいのさ。」

「そう、ですか…。」

母ウィブサニアは、落胆しているような表情を見せて頭を下げた。だが、三女リウィツラをあやしていた私には、はっきりと見えたことが一つあった。一瞬だけ、たった一瞬だけ、母はこの瞬間を待っているかのように笑っていた。

続
く

第十章「亀裂」 第八十五話

翌日のアウグストウス宮殿。

リウィツラ叔母様の姿は無かった。

「ユリア・ウイプサニア、前へ。」

「はい…。」

祖母アントニアにドムスから出て行くように言われた母だったが、その前に曾祖母であり『国家の母』アウグスタである大母后リウィア様に、面通しを迫られていた。血筋からいっても、母ウイプサニアはティベリウス皇帝の養子であったゲルマニクスの寡婦。つまり法律上は大母后リウィア様の孫の結婚相手なので、大家族においては長寿の者へ伝える義務がある。

「ウイプサニアよ、今一度聞こう。我が実の息子であり現皇帝の組織に対して、対抗馬としての活動を行っている」と聞く。この話は誠か？」

「…。」

母ウイプサニアはジツと大母后リウィア様を見つめて、わざとらしい笑顔を浮かべる。

「いいえ、ただの女の集まりです。」

「そうか…。その集まりが、単なる悪口を言い合うだけの主婦達の集まりならば、私自身が干渉するに値しません。」

しかし、アントニア様は母に真実を語るよう促した。

「ウイプサニア、ちゃんと答えなさい。」
「…。」

大母后リウイア様は母へ少しの安らぎを与えようと、微笑みを見せながらゆっくり答える。

「いいウイプサニア？つまり議論を交わすなら、とことんやりなさいと言ってるの。なにも貴女から目と口を奪い、耳を塞ごうとしているわけじゃないのよ。」

「クラウディウス氏族の方々も交えてつて事ですか？」

「当然じゃない。」

「では、改めて聞きますが、『国家の母』アウグスタを名乗ることを許されなくなった貴女には、私達の集まりに『いちいち』内部干渉する権限はないのでは？」

「ウイプサニア！」

アントニア様は、無礼な母の発言を叱りつけようとした。だが、母は止まる事を躊躇せず、そもそものお定まりを苦言してきた。

「私の意志はたった一つ、現在のローマ国家繁栄は神君カエサルあつてのもの。そして祖父アウグストゥス様の血を引く者こそが、本来皇帝の地位につくべきだと考えております。」

大母后リウイア様、母ウイプサニアの挑発的な発言を皮肉で返した。

「ではなにかい？ウイプサニア。貴女はカエサルの血を引かないクラウディウス氏族には、その資格が無いとでも言いたいのかい？！私はアウグストゥスの妃よ！」

「だったら、『カエサルの物はカエサルに』です！それこそが本来ローマ国家のあるべき姿ではありませんか！カエサルがルビコン

河を渡った時、あなた方クラウディウス氏族は何をされていたのか？！」

母ウィプサニアの勢いは止まらなかった。今まで沈黙して静観し、大母后リウイア様へ一言も答えてこなかったのは、まるで積年の恨みを晴らすべく、今日この日を待っていたかのようだった。

「カエサルの血を引く私の祖父アウグストゥス様は、カエサルの血を引く私の夫ゲルマニクスを！直々に次期皇帝継承者として名指しにされた事を、アウグストゥス様の后として、貴女が忘れたわけはありませんよね？！」

大母后リウイア様は、ふとアウグストゥス様の遺言書を思い出した。

「ところが現状はどうでしょうか？！カエサルの血を引かない、あの牛魔王帝ティベリウスは私の夫ゲルマニクスが帝位するまでの繋ぎだったはずなのに！ずっと居座り続け、ピソをわざわざゲルマニクスとかち合わせ混乱させ、結局、毒殺されて帰らぬ人となってしまった！」

「……。」

「そもその原因は！カエサルの血の引く者達を、ことごとくあなた方クラウディウス氏族から命を奪われ、その繁栄からのおこぼれにもありつけない状態ではありませんか！」

「カエサルの血を引く者たちの命を奪ったですと？！よくもそんな事を！」

「ご自分の胸に手を乗せて、よく思い出せば分かるのではありませんか？！私の大切なアグリッパ父様を含め、私達家族の命をめっちゃくちやにした張本人は、クラウディウス氏族の頂点に君臨するリウイア様、貴女の指示からではありませんか！」

母の言うように、カエサルのものをカエサル家だけにするには、悲劇によって苦境に立たされた家族達の『大義名分』と、民衆の誰もが喜ぶ敵という『嘘』が必要。母ウィプサニアは、ゲルマニクスお父様が死んでからずっと巧みに計算をして、この嘘をつくためにすべてを演出してきたのである。

” いか、ウィプサニア。これはピソ達による毒殺何かでは無い。決して私がこの世を去ることになって、現皇帝ティベリウスは私の父の兄だ。復讐というローマの魔物に己の心を投じず、どうか子供達を育ててやってくれ…”

後に私とクラウディウス叔父様が結婚した門出で調べた結果、父の最後の言葉は、父の宦官であったタルキスによって父の署名と共にウエスタの巫女へしつかりと保管されていた事が分かった。つまり、母は父ゲルマニクスの最後の想いを踏みにじり、『嘘』を誠のように掲げ、まさにルビコン河を渡るが如く一線を越えてしまった。

そして、大母后リウエア様を悪女や毒婦としてのイメージを植え付けようとした最初の人物こそ、ローマの魔物に魂を売り飛ばした私の母ユリア・ウィプサニア・アグリッピナだったのである。

続く

第十章「亀裂」 第一百八十六話

「ウィプサニア！好き勝手に口を開くにもほどがあります！今すぐ訂正なさい！」

「嫌です！アントニアお義母様！今日は黙りません！」

「無礼だと告げているのがわからないのですか？！貴女が今立っているこの場所は、貴女の目の前に座ってらっしゃる大母后リウエア様の…。」

「アウグストウス様と仰るなら！この場所は私にとっては祖父の神殿です！アントニアお義母様だって、アウグストウス様のお姉様であるオクタヴィア様の血筋を受け継いでるではありませんか？！」

「その事は今は関係無いでしょ？！」

「いいえ、多に関係あります！リウエア様が平民どころか、全ての人から何と呼ばれているのかご存知ですか？！」

大母后リウエア様は、少し眉毛をクイッとあげて、大理石になったように奥歯を噛み締めながら答える。

「ウィプサニア、私が女狐とでも…？」

「ええ！何でもかんでも寝とる『女狐』ですよ！今この場で、最もこの神殿で適さない場所に無礼な人間がいるとしたら、それは現牛魔皇帝からも『国家の母』アウグスタを名乗ることを禁じられた、このカエサルも血も引かない『女狐母后』しかありません！」

母ウィプサニアの大母后リウエア様に対する礼節を欠いた無礼で不躰な態度には、さすがのリウエア様も許容の範囲を超えていた。だが、それでも感情的にならず、一つ一つ言葉を選んで確かめるように発した。

「ウイプサニア、確かに貴女が指摘するように、元々私達はカエサル家の血を引かないクラウディウス氏族よ。けれどもいつの時代でも、国家を支えるとなれば、輝かしい部分だけでは当然無理な事も分かるでしょう？時に英雄であった神君カエサルでさえ、その人物に権力が集中すれば、容赦無く暗殺してしまうほど、このローマ国家には魔物が住んでいるのよ。だからこそ、国家には常に舵取りと均等なバランス感覚が必要な。」

「それが牛魔ティベリウス皇帝が帝位に居座る理由と、どう関係あるのですか？！」

「言葉を慎みなさい！ウイプサニア。大母后リウエア様の実子に何てことを！」

「いいわよ、アントニア。今日は何とでも言わせなさい。」

半ば諦め気味の太后リウエア様は、母の為を思つての言動だったのだが、対局側にいる母にとっては誇りを傷つけられた想いだつたのだろうか、怒りと憎しみという紅蓮の炎に身を投じ、更なる侮辱的な言葉を吐き出してしまった。

「何とでもですって？！何たる傲慢！何たる非妥協的！貴女は私が言っていることを理解されているのか？！」

「理解？！人に理解を求めるならば、

礼節を欠かさず敬う言葉を選んだらどうなの？！さつきから好き勝手な事ばかり好きなように並べて！あなた何様のつもりかい？！仮にもあなたは我が子ティベリウスの養子なのよ！それを忘れてはいないでしょうね？！」

「ならば言わせてもらいましょう！その牛魔ティベリウスはユリウス氏族の養子ではないですか！」

「いい加減になさい、ウイプサニア！」

「アントニアお義母様は本当に黙ってて！こうやってクラウディウス氏族の連中は、共和政支持派の元老院を抱きかかえて神君カエサ

ルを暗殺したのですから！」

行き過ぎた言動の後には、決まって静寂と沈黙と気まずさという緊張感が生み出されていく。母は引けぬ所まで行ってしまったのである。

「アントニア、ウィプサニアを下がらせなさい。」

「はい。」

「いいえ！まだ終わってなんか……」

「いい加減に黙りなさい！！！」

だが、腹部の奥深くから発せられた大母后リウエア様の重厚な叱責は、その場にいた全ての人間を圧倒させた。

「血筋を傘に楯突くクロアカネズミの分際で！何を又ケ又ケと気取っている！これ以上の無礼は！例えアントニアの息子の寡婦だとしても！我が愛する夫アウグストウスの孫だとしても！決して許しはせぬ！」

「……」

「よいか？！ウィプサニア！もしこの宮殿で一言でも！今後一切！クラウディウス氏族の方々を侮辱することあらば！お前を裁判のバシリカに掛け！全力をもって！お前を国家反逆罪へ問われるようにやるから心しなさい！」

母ウィプサニアは、ご自分をまさにアッティカの王ペリパースと勘違いされたに違いない。王ペリパースはアポロ様を深く信仰して善政を行ない、その治世が余りにも偉大であったため、人々は王ペリパースをユピテル様と崇めた為に、ユピテル様の怒りに触れ、雷を撃って王ペリパースを滅ぼそうとした。まさに、きつとそこにいた誰もが、今まで見たことも無い大母后リウエア様の激しい形相こそ、

ユピテル様の怒りそのものと言えたのかもしれない。当然ユピテル様と同等とも言える大母后リウイア様の逆鱗に触れた母ウイプサニアは、己の命を差し出さなければならぬほど、顔面蒼白にあからさまに震えて怯えるしかなかった。

「己の分と器をわきまえよ、ウイプサニア！今後のお前の善行次第では、今回の度を超えたお前の礼節を欠いた無礼は、私の胸にしまっておこう。」

結局、母ウイプサニアと大母后リウイア様との深い溝は、互いに譲歩すること無く、このまま互いの生涯を終えるまで、平行線を辿る運命であった。

続く

第十章「亀裂」 第八十七話

ならば、セイヤヌスは当時どうだったのか？

私とクラウディウス叔父様が後に調査した結果を元に、セイヤヌスがどのようにリウィツラ叔母様を騙し、愛するドルスッス叔父様を毒殺させるまでの道のりを歩かせたのかを語ろう。

リウィツラ叔母様には侍医エウデモスがあり、彼は医学界の巨匠テミソンの信奉者の一人である。テミソンとはシリアにあるラオディケイア出身の医学者であり、医学の為の学校を設立したほどの男。だが、エウデモスはとても見栄えのするような人物ではない。背中は猫背気味で、鼻先にはイボが無数にあり、目は誰かに引つ張られたように垂れ下がり、何よりも陰鬱な眼差しがエウデモスの卑屈な性格を表していた。

「リウィツラ様…。」

「なんだ、また侍医エウデモスかい？」

「そのエトルリアの媚薬を使うのはおやめください。」

「どうしてよ？」

「リウィツラ様ご自身を蝕んでいくので、今すぐおやめください。」

「…。」

リウィツラ叔母様は手鏡を持って、ご自分の顔を見つめてみる。セイヤヌスとの性欲に溺れた密会を繰り返してはいたが、その為に顎は引き締まり、目はシャープに鋭くなり、ほんの少しふつくらしていた頬もスツキリとして、ミヨウバンや化粧のノリも良いと感じている。

「何よ？言われるほどじゃないじゃない。」
「しかし…。」

何よりも、あの端正な顔立ちのウイプサニアに、夫であるドルスツス叔父様を取られるわけにはいかない。子沢山でありながら、太るどころすらつと痩せてて、手足は長く、指先も細くて綺麗なのだから。

「セイヤヌスのくれた媚薬は一步一步、若い頃の美しさを取り戻しているような気分よ。」

「蝕んでいらつしやるのは、身体ではなく、リウイツラ様の御心でございます。」

覗き込んでいた鏡に映ったリウイツラ叔母様は、エウデモスの陰鬱な眼差しと目が合ったが、気色が悪くて目を逸らした。

「リウイツラ様は恐水病をご存知ですか？」

「なんなの？恐水病って。」

「獣に惑わされた者は、感覚器官に刺激を与えられて、風の神や水の神を恐れる病気です。恐水病をセイヤヌス様に与えれば、あなた様はこれ以上セイヤヌスなどと付き合う必要がないはずですよ。」

セイヤヌスとの不義をやめるように言ってくるエウデモスだが、鏡越しに見える陰鬱な眼差しは、次第に自分の身体を舐め回すようになっていく。相変わらず気持ちが悪いい男。

「侍医のお前が、私の私生活にとやかく言える立場か?!」

「申し訳ございません！ですがこのままでは、ドルスツス旦那様との関係修復も不可能な所まで…。」

そして、リウィツラ叔母様が振り向くと、その視線はストラに包まれたリウィツラ叔母様の乳房をジッと眺めてばかりいる。気味が悪い！！手鏡はすぐさま侍医エウデモスの顔へと投げつけられた。

「痛っ！！」

「エウデモス！もしもドルスツスにこの事を一言でも漏らしたら、あんた！タダじゃ済まないよ！！お前をわざわざ書類も偽造して、侍医にさせた恩義を忘れたわけではないでしょうね！？」

「わ、忘れてはございません。」

だが、それでもなお、顔に手鏡がぶつかった箇所を抑えた指と指との間から、エウデモスの気色が悪い視線が叔母様の乳房をジロジロ眺めている。

「本当に気色悪い男！下がちなさい！」

エウデモスは腰を低くして礼をしては部屋から出た。するといつものように、忌々しいセイヤヌとすれ違う。チラッと見た後に、存在を消してその場から離れようとしていたが、なぜかその日は、傲慢なエトルリア人に呼び止められることになる。

「待て！」

「ひっ！」

「お前は、確か侍医の……。」

「エ、エウデモスでございます。」

「ああ！テミソンの信奉者の一人であったな？」

「はい！」

「そうか、テミソンか。実は、できれば後で、二人だけで話をしたい。」

「え？！私とでしょうか？」

「そつだ。時間は取らせない。」

妙な胸騒ぎを感じたエウデモスだが、親衛隊長官の誘いを断るわけにはいかない。嫌々ながらも従うしかなかった。

「分かりました…。」

「うむ、後でな。」

セイヤヌスは意気揚々とリウィツラ叔母様の待つ寝室へ入って行くが、エウデモスはこの時間がいつも気に食わない。不義を重ねるリウィツラ叔母様の、耳をつんざくような喘ぎ声が聞こえる度に、叔母様に対する己の欲望が抑えきれなくなるからだ。

「クツソ！クソ！クソ！セイヤヌスめ！リウィツラを強引に犯したくせに！あの悩ましい身体を好きにしやがって！」

彼の醜い性格は自分の怒りを鎮める方法も陰湿。鼻先にある無数のイボを何度も潰し、中から滴り落ちる粘りのある汁を指先に付け、それを啜えるように舐めるのである。そして日陰が長くなった頃、叔母様の寝室からは激しい息遣いは聞こえなくなった。

「セ、セイヤヌス様。」

事を済ませたセイヤヌスは爽快な顔をしている。だが、エウデモスはますます自分のイボの汁を舐めなければ、怒りがおさまらない。身振りは身分の上であるセイヤヌスには慎ましく振る舞うが、心の奥底では罵倒と愚弄の言葉で殺していた。

「フフフ、エウデモス。お前はリウィツラに惚れているのか？」

鷲に掴まれたウサギの気分だった。

な、何故?! そのような自分の想いがこの男の耳に? 許さない! この男は自分を侮辱しているのだ!

「一度だけ、抱かせてやろうか?」

「は?」

「抱きたいのだろうか? あの豊満な身体に吸い付いて、自分の手で穢したいのだろうか? 好きにさせてやると言ってるのだ。」

リウィツラを? 本当なのだろうか?

醜いエウデモスの欲望は、この時半ば、セイヤヌスの奴隷になっていた。

続く

第十章「亀裂」 第一百八十八話

侍医のエウデモスは耳を疑った。

「あの、一体何故にそのような事を。」

だが、忌々しいセイヤヌスは、やけに慣れなれしく肩を組んできては、ボソボソと耳元で呟いてくる。

「己の欲望を隠すことはないだろう？エウデモス。理由が欲しくば、今までいくteだつて、侍医のお前ならいかようにリウィツラを弄ぶ事だつてできた筈なのに、あの女はお前に指一本触れさせやしないんだろう？」

リウィツラ叔母様は昔から醜い物が嫌いだった。唯一エウデモスが侍医になれたのは、リウィツラ様の旦那様であるドルスツス様の恩赦があつたから。そうでなければ、いくら優しい叔母様とて見た目も性格も醜いエウデモスをそばに置いておくわけがない。

「うううう。。。」

「ジツと密かに思い続けた所へ、このエトルリア人が横取りしたもんだから、お前もこの俺が憎くて仕方ないんだろう？」

「いいえ！そんな事はありません！」

「いいから無理をするな。だが、お前の本来憎むべき相手は、リウィツラを横取りしたこの俺でも、醜いお前を相手にしないリウィツラでもなかるう？」

「？」

「そもそものお前の不幸の始まりはなんだ？家庭を奪われたお前に、恩赦という名の階級社会に対する、卑屈な悪感情をお前自身に芽生

えさせた、リウィツラの夫ではないか？」

「だ、旦那様？！ドルスツス旦那様が？！そんなことはありません！旦那様は私のためを思っています。」

「貴様の為を思ってたど？では、何故ドルスツスは、その権力を行使して家族を取り戻すことしてくれないのだ？」

「そ、それは……。」

「お前だって、優しい家族が側にいれば、リウィツラのような雌豚に欲情することもなかったはずだ。」

エウデモスはさすがに堪えた。

今の人生は虐げられているという恨み辛みが、どうしても払拭する事ができず、一つも解消されない欲望ばかりが蓄積されていったからだ。

「お前を助けたい、そして私に協力して欲しい。」

「え?!」

「お前の人生を見えない所で奪い去った人物がいなくなるために、お前はたった一つ私の教えた言葉を答えればいいんだ。」

「何て、言葉をですか？」

「恐水病だとな……。」

恐水病は、酷い症状だと死に至る病。

セイヤヌスのにやけた顔は、ある事を察している。つまりドルスツスの殺害を、病と見せ掛ける事。さすがのエウデモスも察した。

「む、無理です！そんなことは！」

「では、お前はリウィツラを抱く事もなく、家族さえも取り戻すことなく、一生を終えるというのか？」

「しかし……。ドルスツス旦那様を殺すなど！」

「おいおい、何を物騒な事を言ってるんだ？ただ、誰かに聞かれた

ら、そう答えればいいのだ。お前は答えるだけでいいんだ。直接お前が下すわけではないのだから。」

「いいや！」

ダメだ。このエトルリア人を信用してはいけない。私は今までそうやってこいつらに騙されてきたのだから。

「勿論、お前は私を信用していないのだろうか？」

「…。」

「リウイツラと不義を重ねている人間など、信じられないのが当たり前だ。明日、いつも通り私はドムスへやってくる。その時、リウイツラには目隠しをさせるつもりだ。」

「め、目隠しを?!」

「そうすれば、あの媚薬も手伝って、私の代わりに視界を奪われたリウイツラを、お前は好きなのようにできる。それで私を信用して欲しい。それでも信用できなければ、何度でも抱かせてやる。お前の気が済むまでいくらでもな！」

ほ、本当なのか？

いいや、信じてはいけない。だが、断ればこの男が何をしでかすかも分からない。慎重に応えなければ…。

「明日、お待ちしております。」

エウデモスはニヤけて応える。

その顔を見たセイヤヌスも、エウデモスが求めている意思を確認でき、ニヤけて頷いた。こうして、セイヤヌスはまた一人、ドルスツス叔父様を毒殺するべく計画を進めていった。

続く

第十章「亀裂」 第一百八十九話

ドルスツス叔父様毒殺計画。

セイヤヌスは更に、叔父様専属の宦官奴隷リュグドウスも取り込んでいく。

宦官は元々ガツライと呼ばれ、フリギアの女神キュベレーに対する信仰に帰依した熱狂的な男性神官が始まり。彼らは聖なる儀式で己自身を完全去勢し、儀式の後に女性の衣装をまとう事で社会的に女性とみなされる。宦官であるガツライの名の由来は、女神キュベレーに対して最初に仕えたと言われる神官ガツルスであった。

ガツライが最初にローマを訪問したのは、当時から203年前の共和政ローマの元老院が、女神キュベレーを国家が祀る神に正式に加える決定を下したとき。しかし、その後はクラウディウス叔父様が帝位されるまで、ローマ市民がガツライとなることは禁じられていた。ローマ市民は自分の買った奴隷を去勢させて宦官にさせることが常だった。

前の主人から迫害を受けていたリュグドウスも、ドルスツス叔父様の恩赦から救われ、自らの意思で宦官奴隷として務める事になった。

「セイヤヌス様。」

「おお、お前は宦官のリュグドウス。」

「お久しぶりでございます。」

リュグドウスの表情は明るかった。

女神キュベレーに自らを捧げた彼にとって、自分を救ってくれた主に仕えることは極上の幸せだから。一番大切な事は政治的な派閥争

いよりも、ドルスツス叔父様がしつかりとローマで立派に振る舞えるように、雑用係として日々の仕事をこなす事。

「まあ、待て。」

「はい？」

「後で少し話さないか？」

「申し訳ございません、本日はこれよりドルスツス様の民会への参加になりますゆえ…。」

「なあに、時間は取らさない。」

「私は女神キユベレーへ身を捧げた輩でございます。そして女神の意思により、ドルスツス様へお使いする事が全てで生きております。お察し頂ければ光栄でございます。それでは、失礼致します。」

リユグドウスは、俗物に溺れるエウデモスとは違い、身も心も信仰厚き人物。今までのようなセイヤヌスのやり方では通用しない。

「チツ、カマ野郎が気取りやがって！」

「教祖、宦官の奴らは一筋縄では行かないです。やはり弱みを握らなければ。」

「去勢した男に弱みなどあるものか？」

「ありますとも。自分の主人に対する、忠実な愛情が…。」

セイヤヌスは暫し推敲すると、なるほどその意味が見出せてきたようだ。

「トウクルカ様も仰っていたな？」人の言動や行動は、全て快樂原則の支配に従っている」と。

宦官のリユグドウスは本当に心からドルスツス叔父様を愛していた。

それは欲情とは程遠い無条件の愛情であり、主人に尽くすためだけの快樂思考主義。

「では、その高尚なる主人が、自分だけを求められた時、尽くすためだけの快樂思考主義の連中は、己を保つ事ができるのであるだろうか？」

暗がりの街角で、身分を隠したセイヤヌスの部下達が、イスラエルからやって来た偽造が出来る者と、ローマ人を演じる事が出来る者を呼びせ、黄銅貨のローマ硬貨セステルティウスを13枚を渡す。

「否！断る事ができるわけがない。己から最も対局にある欲望が、自ら大手を振ってやってくるのだ。」

リュグドウスだけに当てられたドルスツス叔父様からの手紙。

「今の私の苦しみを取り除いてくれるのは、世界中でたった一人、リュグドウスお前だけだ。今宵、目を閉じたまま、この私に抱かれてくれ。」と……。瞬きを終えた目が見開き、鼓動がドクンとリュグドウスの身体中に響く。

「人は何処かで自分は特別だと願い、己の人生の主人公であると思いついて入っている。だが、大きな過ちをした瞬間を、他人から見られた時にはどうなる？」

宦官の寝室。目を閉じたリュグドウスが全裸になってドルスツスを待ちわびていると、物陰からドルスツス叔父様のような両腕が宦官を抱きしめる。二人は互いを弄り合い、そして、互いの体を慰め合う。

「ああ！ドルスツス様！私はずっとずっとこの日を待ち望んでおり

ました。あなた自身から愛されることを。貴方様の肉体で癒されることを…。」

荒々しいリュグドウスの喘ぎ声の中で、相手は一切声をあげなかった。耐えきれず目を見開いて唇を奪うリュグドウスの目の前には、ドルスツスとは似ても似つかわない男の不敵な笑みがこぼれている。

「はっ?! 一体これは?!」

「フフフフ! ハハハハハ! まんまと引っかかりましたよ、セイヤヌス様!」

「何?!」

全裸のリュグドウスは全てを目撃された。それも、一番見られたくない人物に…。

「そうか…。それが女神キュベレーの為に完全去勢し、主人であるドルスツスへ全てを捧げ生きている、愚かな宦官の真の欲情した姿か。」

イスラエルからの者に偽造された手紙に騙され、叔父様の背丈に似たローマの役者に弄ばれ、そして、その筋書きを書いた張本人に目撃され、リュグドウスはセイヤヌスに踊らされた。

続く

第十章「亀裂」 第一百九十話

いつ何時でも、大母后リウイア様は国母としての自覚は失ってはいない。例え実の子である皇帝ティベリウスが国母を名乗ることに苦言を申し出たとしても…。

一方、一喝された母ウィプサニアは、国母という強大な権力と存在感に己の力の無さと悔しさが入り混じった心境にいた。そして、女である事で損な時があるとすれば、それは自分で抱え切れない不安と憤りを投げつけられた時。

そう、どんなに神君カエサルを考えで振舞ったところで覚悟の無い女はただの女。感情的で現実的にしか生きられない。

「母さん、何故ですか?!」

「我が家族に二人も要らないと言ってるのよ。」

「な、何故ですか?! 今年、僕にとって! 大切な大切な成人式を迎える年ですよ!」

「これは高度な政治的判断が必要になる事なの。今、ユリウス家の人間が更なる注目を浴びれば、あの女狐は必ず貴方の長男ネロを叩きにやってくるはず。」

「そんなの嘘だ! だって僕にとっては、大母后リウイア様は曾祖母ではないですか!?!」

「だからこそなの! 油断したら貴方の命も危なくなるの!」

「誰がそんなこと信じられるもんか! 今から聞いてきます!」

部屋に鳴り響いた嘆きの正体は、次兄ドルススによる落胆と憤りの言葉だった。

「ドルスス、待ちなさい！」

「嫌です！僕は納得できません！ネロ兄さんは13歳で成人式を迎えたのに、何故ですか？！僕は来年で17歳を迎えるんですよ！」

「黙りなさい！！！」

母ウイプサニアによる一喝が、ドルスス兄さんの全身を強張らせ、そして、怯えさせてしまっている。

「ドルスス、貴方はもう16歳じゃない。なぜ自重する事を覚えないのですか？！」

「自重よりも成人式が、僕にとっては大切なんです！」

パチン！

母の冷たく細長い指先が、ドルスス兄さんの頬を容赦なく叩いた。

「ワガママで我慢できない男が、成人式を経てローマ市民に成れると思ったら大間違いよ！」

「嫌だ！！！」

けれどドルスス兄さんは反抗する。

ネロお兄様と比べられる立場に、既に飽き飽きしていたのかも。兄さんは自分の腕力で訴えてきた。割れたグラスを右手で震わせている。

「ああああドルスス！！！おやめなさい！おろしなさい！」

「嫌だ！嫌だ！嫌だ！いい加減にしてくれ！俺はネロ兄さんみたいに、母さんの傀儡になるつもりなんか無いんだ！」

「く、傀儡？！」

「そうさ！自分の考えさえも、母さんと同じようになっちゃって！昔の発明好きだった兄さんのお御影なんか、どこにも無いじゃない

か！」

そうだ。

ネロ兄さんとドルスス兄さんは、私が覚えている限りいつつも仲良しで何かを作ってたっけ。

「母さんはまだ気が付かないのか?!ゲルマニクス父さんが死んでから、何もかもが悪い方へ変わって行ったじゃないか!?母さんはそれでも本当にゲルマニクス父さんを心から愛してるのかよ!!!?」

ドルスス兄さんの言葉が、決して母を傷つけようとしていたわけじゃないのだけれど、昔の優しかった母に戻って欲しくて、きつと、私達兄妹の代弁をしてくれただけだったのかもしれないけど、だが、母は欠けたグラスの鋭い先を突き付けられて、己の覚悟の無さを自覚したんだと思う。

「そうかい、ドルスス!あんたも私の味方をしてくれないんだね?」

「そ、そうじゃないんだよ!母さん!」

「あんたも私を悪者にするんだね?!」

「違う違う!違うったら!!」

「こんな男の子を産んだあたしが馬鹿だったのよ!やるならやりなさい!」

今でも瞼を閉じても刻まれている姿。

それは、母が仁王立ちして恐ろしい形相で、お腹を指差して刺すように挑発をして叫んでいる姿だった。

続く

第十章「亀裂」 第九十一話

「ドルスス！」

「ウツッ！」

ネロ兄さんはドルスス兄さんを思いつきり殴った。振り下ろされた拳は、次から次へとドルスス兄さんの顔へ吸い込まれて行く。でも、ドルスス兄さんも負けてはいない。殴られても気迫を保ち続け、血みどろになつた顔で怒りを露わにした叫び声を上げ、ネロ兄さんの肩や腹部を殴り続ける。

「卑怯者！ちゃんと勝負しろよ！ドルスス！」

「うるさい！」

卑怯者は、成人式を迎えられないドルスス兄さんのお顔に、平気で拳を叩き込むネロ兄さんの方だった。本当は何もかもが嫌になつてはるはずなのに、ドルスス兄さんはそれでも、政治に携わるネロ兄さんのお顔を傷つけまいとされていたから。

「やれ！やれ！もっとやるんだ兄さん達！戦え！争うんだ！」

興奮した兄カリグラは殴り合う二人を煽り始めていた。自分が剣闘士にでもなつたかのように、両拳を振り上げ、振り下ろし、満面の笑みを浮かべて叫んでる。その横で、グツと堪えて口をへの字にしてジツと二人を見つめるドルシツラ。私はというと、怯える末っ子リウィツラを抱き寄せながら、事の成り行きを見守っていた。

「クツッ！」

「ハハハハハ！ドルスス兄さん、鼻血ばっかり出してかつこ悪いな

「もつと、ネロ兄さんの顔をえぐって殴るんだよ！」

「ツク！カリグラは黙ってる！」

「な、何だと！」

この時の私は、全て母のせいだと思っていた。事実、母の狂気じみた統率に振り回される毎日には、私達兄妹は少なからず精神を消耗していき、苛立ちが常に付きまとっている感じだった。更に輪をかけてドルスス兄さんの成人式が延期され、母に不満が爆発し、その矢先に起きた長男と次男による喧嘩。しかし今回も力尽きたのは、気遣いをしていたドルスス兄さんの方だった。

「いいか？！ドルスス！お前は母さんがいなければ何もできないことを忘れるな！」

「クツソ…。」

「いいか？！ゲルマニクスお父様が亡くなった今、この僕が家長だ！それを二度！金輪際忘れるなよ！」

「クソ！」

庭を何度も叩きつけ、その抑えきれない感情を悔し涙と拳で表すドルスス兄さん。兄カリグラは、鼻で息を吐いて見下し、ドルシツラは黙ったまま表情も変えずにその場を離れて行く。冷んやりとした夜が更にあたりを冷たくあしらうと、私はようやくリウィツラと近づくことが出来た。

「ドルスス兄さん…。」

「一人にしてくれ、アグリッピナ。」

「でも兄さん…。」

「一人にしてくれって言うてるだろうが？！クソ！！！」

四つん這いで何度も地面を叩き、悔しがるドルスス兄さんの背中を

見つめるてると、自然と私にも寂しさが募ってきた。どうして、思い通りにいかないんだらう…。

「クッ…！」

切れた口の中から血の混じった唾を地面へ吐き飛ばし、ドルスス兄さんはヨロヨロと一人ドムスの外へ出て行ってしまった。

「アグリッピナお姉ちゃん？」

「リウィツラ、悪いけどお姉ちゃんはちょっと後をつけてくるね。」

「うん…。」

私はドルスス兄さんが気になって、足音を立てずに後をひっそりついていくと、なんとそこには一人の女性が立っていた。

「ドルスス！」

「サルビア！」

二人はギュッと互いを確認し合うように抱擁し、そして大きく互いの唇を奪い合いながら舌を絡ませ始めた。やだ…。恥ずかしい方向くちづけをしているんだ。

「まあ?!ドルススったら顔中アザだらけ。どうしたの?」

「何でもないさ!女のお前には関係ない事だ。」

「まあ可愛い。今夜は私の腕の中でいっぱい甘えていいから。」

兄さんの髪の毛を指先で優しく撫でるその艶っぽい女性は、セイヤヌスの後ろ盾であるルキアス・サルビアス・オトの娘、サルビア・オタであった。

続
く

第十章「亀裂」 第九十二話

外でのドルスス兄さんは、とてもエッチだった。ところ構わずセルビアの身体を求め、セルビアもそれに応えるように兄さんを赤子のように包んでる。

「あ…。さすがアントニウス様の血を受け継いでる殿方なこと、手を動かすのも早いんだから。」

「だって、セルビアが今夜は可愛がってくれて言ったんじゃないか。」

「そうだけど、あ…。こんな外では。」

「外だからいいじゃないか。それに暖かくなるだろう？」

やだ…。

くちづけよりも、もっと凄いのがあるの？私は壁際から両手先を必死に壁につけて、ジッと観察していた。どうしよう？なんだか胸がドキドキしてきちゃった。

「セルビア、僕は君を愛してるよ。」

「私もよ、ドルスス。今年よね？成人式は。」

「…。」

「どうしたの？」

「何でもない。」

「だめ、ちゃんと行って。」

「何でもないよ。」

「言わなきゃ今夜はお預けだよ、ドルスス。」

「わ、分かったよセルビア。」

ドルスス兄さん…。

もう！まるで餌を取り上げられていうこと聞く飼犬みたいじゃない。恥ずかしいな。

「今年も無理なんだ。」

「え?!」

「僕の成人式。」

「はあ?! どうして? あんたの兄さんネロは、二年も前に式をあげてもらったじゃない。一つしか年が変わらないのに、なんで今年も成人式をあげてもらえないのよ!」

「仕方ないじゃないか。母さんがいうには高度な政治的判断だつて...。」

「そんなことで諦めたわけ?!」

「抵抗したさ! でも今度はネロ兄さんもやってきて、喧嘩になつて。」

「それで負けておめおめと逃げてきたわけ?」

「違う! 兄さんの顔を殴るわけにいかなかったからさ。」

「結局、ドルススはお子ちゃまじゃない。言いなりになって、言い訳ばかり。あたしとの約束はどうなるの?!」

約束?

ドルスス兄さんはセルビアと何かを約束されていたんだ。何だろう?

「セルビア、お子ちゃまって言い方は酷いじゃないか。大丈夫、ちゃんと二人一緒になれるさ。」

二人一緒?!

へ? 何なの?

「私、ローマ市民でもない未成年者なんかとは、絶対に婚約しないから!」

そう、いくらローマ市民の子供として生まれたとしても、成人式をあげてもらえなければ、一人前のローマ市民と言えない…って、ドルスス兄さんが結婚?! なっ?! いつからそんなこと?!

「いくらドルススが皇族ユリウス家でも、あたしの父はちゃんとしてないと、絶対に結婚だって許してくれないんだから。」

「分かってるよ。」

「本当に分かってるの? あたしだって、もういい年齢なんだから。早くしてくれないと、いつまでもドルススとはいられないんだからね。」

「え? どういうこと?」

「だって、あたしの方がドルススよりも二つ上なんだよ? 姉さん女房でも、子供産む年齢には限界があるって事。」

「こ、子供産む?!」

もう二人の仲はそんなところまで。

「分かったから、今夜はアントニア様のドムス最後の夜なんだから、思いっきりさせてくれよ。」

「もう! 仕方ないなドルススは。本当に甘えん坊なんだから。真ん中ってやっぱり放ったらかしにされ易いタイプなの?」

「ああ、そうだよ。」

セルビアは床に腰掛けてるドルスス兄さんの上に思いっきり跨がって、くちづけの嵐を受けていたが、何処かドルスス兄さんの最後の言葉が、寂しげに寒空へ舞って行く感じだった。

続く

第十章「亀裂」 第九十三話

「なるほど、それは参りましたな。」

コツケイウス家のネルウア様は、蓄えた髭を摩りながら、ある考えを一つにまとめようとしていた。アシニウス様は怯える母ウィプサニアへ、何度も肩を摩りながら落ち着かせている。

「ネルウア様、やはりここは国母である大母后リウエア様の申される通り自重すべきでしょうか？」

「ホツホホホ、アシニウス殿は国母とは、誰の事をさしておるのだろうか？」

「はい？」

「未来の国母なら、今、我々目の前におるではないか。」

それは、母ウィプサニアを差していた。

「よいか？アウグストウス様がお亡くなりになって、一体何年が経っていると思っているのじゃ？我らは国家の行く末、しいては後々の孫や子供達に何を遺せるのが重要ではないか？」

「はい。」

「それは、権力でも地位でもないのじゃぞ。ウィプサニア殿は、もう既に分かっているよのう？」

「はい、それはカエサルを引いた者たちの、新しいローマ『希望』です。」

「うむ。いつまでも老婆の幻影にすがっていても、いずれローマは何も生まれず、それだけは何としても避けねばなるまい。」

「しかし、このままではクラウディウス氏族からの猛反発を喰らいますぞ。」

「纏まっていればの話じゃろ？」
「？」

ネルウア様の読みはご老体でありながら、鋭い洞察力で的をいていた。明らかに、現皇帝ティベリウスの従う皇族一派と、超保守派閥の大母后リウイア様を中心とした皇帝一派にクラウディウス氏族は分かれつつあった。その理由には、ティベリウス皇帝と元老院議員との微妙な関係が、利害一致して継続していたからだ。あくまでも牛魔としてその恐ろしさを曝け出すのは、後々のセイヤヌスの野望が暴露してからである。

「近々、ティベリウス皇帝陛下は親しき者を集めローマを離れる事になる。その頃には陛下のご意向が何であるかが分かるじやろう。それまでにウイプサニア殿は、やるべき事を成し遂げるべきではなかろう？」

ネルウア様は、いつ何時でもいかように捉えられる物言いが特徴で、つまり逃げ道を常に事前に作ってらっしゃるお方。母ウイプサニアは、この特徴的な言い方に騙されてしまった。それは、ティベリウス皇帝の先妻と再婚されたアシニウス様やティベリウス皇帝も一緒に、アグリッパ・ウイプサニウスの血を引く女性たちに心奪われた者たちの、愚かで醜い争い始まりでもあった。

「ネルウア様、私は長男ネロと共にカエサルを引くユリウス家の代表として、やるべき事を成し遂げる所存でございます。」

「うむ。」

「ウイプサニア殿、私も及ばずながらお力添えになりますぞ。」

アシニウス様は牛魔ティベリウスへの悪感情を隠すことはしなくなつた。もはや吹っ切れたと言っても過言ではないかもしれない。あ

からさまに母ウィプサニアとご自分の元妻と何処か面影を重ねながら、母と共闘する事を願っている表情だった。

「そうなるとじゃ、一番のキーポイントは以前にも言ったがドルスツス様の立ち位置じゃ。あの方ををこちらに引き込むことができれば、かなりの求心力となつて行くことは間違いないぞ。」

するとネルウア様は母の顔をじつと見つめた。その意図にいち早く気が付いたアシニウス様は、慌てて母ウィプサニアを庇うように答える。

「それはなりませんぞ！ネルウア様。仮にもドルスツス様はゲルマニクスの妹の夫ではありませんか？！いくらなんでもそればかりは……。」

「見苦しいのう、アシニウス殿は。すっかりウィプサニア殿に亡き妻の面影を見てるのか？」

「い、いいえ……。」

「では、年寄りの醜い嫉妬心は自重なされ。」

アシニウス様は下唇を噛んで、自分の情けない感情をかみ殺そうとしている。そしてネルウア様は、再び母ウィプサニアへ確認する。

「やれるな、ウィプサニア殿？」

「それが、ローマの『希望』の為ならば。」

こうして母は愚かにも国母になるべく、ドルスツス様を自分の野望の為に、再婚相手として女を武器にしていったのである。

続く

第十章「亀裂」 第九十四話

渦中にある人物。

ティベリウス皇帝の長男ドルスツス叔父様。

「やあ！ユリアちゃん元気か？」

あんなに陽気で穏やかで、あんなに正義感があって、優しさが滲み出る人は誰一人とおらず、父親でありローマの英雄でもあったゲルマニクスお父様の面影さえも敢えて背負い、ご自分よりも人の優しさを常に大事にされる方だった。

「おいおいゲルマニクス。まあそんなに怒るなよ。」

そんな爽やかな性格が、お父様とすごく気が合って、ドルスツス叔父様とゲルマニクスお父様のお二方は、次の明るく煌びやかなローマ国家の明日を担う柱として注目されていた。人々は神君カエサルとアントニウス、いや初代皇帝アウグストゥス様と軍神アグリッパ様のような神々しい関係を浮かべているようだった。

「なぜ、お前が、俺よりも…先に、逝かねばならないんだ…？答えて…くれよ。我が友、ゲルマニクス…よ。」

けれど、お父様がこの世を去ってから全てが一転していく。ピソによる毒殺が世間で叫ばれた時、叔父様の立場は皇帝の実子でありピソの愛弟子という立場であったに、世間の批判を受けてもおおしくなかった。だが叔父様は人の情けに生きて、母ウィプサニアの悲痛な思いを胸にピソ弾圧の為に裁判へ立ち向かった。

「彼らの勢いに後押しされて、我を見失ってはピソとの裁判の本質が掴めなくなる。」

人々は圧倒された。

その優雅な佇まいといちいち最もなピソへの糾弾、そして適切で冷静な判断は、親友を失われてもなお、その信念さえも受け継いだよくなお姿だった。その一方で、ご自分の受け継ぐ血統への配慮も忘れてはいなかった。

「時には友として、時には兄弟として、そして時には競い合う軍人として、共に憧れたアレキサンダー大王の背中を追いかけるかのように、僕らは共に同じ時代を生きてきた。」

祖母のアントニア様がゲルマニクスお父様を喪ったシヨックで倒れ、大母后リウイア様と皇帝ティベリウス様がお父様の国葬不参加を表明された時、大母后リウイア様を中心とした皇族一派はローマ市民からの非難と罵倒を浴び、内戦さえも辞さない状況だった。そこへ颯爽と事態の収集をされたのがドルスツス叔父様。皇族派の代表者として国葬に参加され、もちろん私達家族への配慮も忘れない名演説を残してくださったのだ。

「安心しろ、ゲルマニクス。僕が我が子以上に遺されたお前の子供達を必ず守る。だから、そっちの空がことと同じように蒼く澄み切っているのなら、オリュンポスの神々と共に、僕らをいつまでも見守ってくれ……。」

そのドルスツス様が我が身を削って、どうにかユリウス氏族とクラウディウス氏族の架け橋に成ろうとしている時である。母ウィプサニアはクラウディウス氏族へ対抗すべくドルスツス叔父様を味方へと誘い込み、ドルスツス叔父様の妻であるリウィッラ叔母様は、

セイヤヌスの野望に巻き込まれて夫婦の愛を裏切ってしまう。

「大丈夫ですか？ドルスツス様。」

「ええ、クラウディウスさん。」

「顔色もだいぶ以前よりも良くなっているようには思えません……。」「

「僕のことは良いんだよ、それよりもセイヤヌスの動向さ。あの密教トウクルカから何か尻尾を掴むことが出来ました？」

「いいえ、残念ながら。我が奴隷のナルキツスにその後色々な宗教を監視させてるんですがね。足取りは全く掴めません。ただ、調べていきますとローマに帰化する前のエトルリア人には、高度の技術を用いて医療に通じていた人物がいたのは確かです。」「

「医療に？」

「それもあまり評判の宜しくない、本人にさえ意識させない形で病を施す方法から、精神的な分析を含めた治療法まで。その人物は、医学界の巨匠テミソンにも影響を与えたとか……。」「

「テミソン？」

ドルスツス叔父様は、クラウディウス叔父様の発した言葉を簡単に流す事は出来なかった。

「どこかで聞いた名前だな。」

「ドルスツス様はご存知で？確か、シリアにあるラオデイケイア出身らしく、恐水病を発見した事により、信奉者の数もかなり増えたりらしいですよ。」「

「何処か自分の身の回りで聞いたような気がするんだが、うーん思いつかない。」「

「残念です。ひょっとしたら手掛かりになれたかもしれません。」「

二、三度咳込むドルスツス叔父様は、クラウディウス叔父様に薦め

られた葡萄酒を喉越しへ通らせると、舌鼓をしながらマジマジとグラスの葡萄酒を眺めている。

「うん？これはまさか？」

「そうです、大母后リウィア様ご所望のピッツィノ葡萄酒ですよ。」

「ああ！祖母の葡萄酒ですか?!」

「ええ。うちの母アントニアが、私の引き摺る脚を気遣って幼い頃から飲ますんですよ。」

「私も幼い頃に飲まされましたよ。」

「異氏族とはいえ、私達は同じものを食べて、飲んで育ってきたわけですね。それなのに、リウィツラ姉さんとウィプサニア義姉さんは…。」

二人の間から穏やかな時間を奪い、沈黙という名の牢獄へ押し込めるほどの魔力を帯びた名前であった。

「ところで、頼んでおいた例の物はどの位進みました？」

「既に先ほど作業を終えたばかりですよ。」

続く

第十章「亀裂」 第百九十五話

「これは素晴らしい！クラウドデウスさん、貴方は本当に細部まで徹底的に拘る方だ。」

「いいえ、ドルスツス様が提案されなければ、私は全く気が付きませんでした。」

それは後にクラウドデウス叔父様が帝位されてから行われる、国勢調査と郵便制度の時に役に立つローマの属州を含んだ国土を網羅できる地図だった。

「まだまだ幾分不確かな部分がありますが、私の奴隷達が一つの素晴らしい案をあげてくれましたね。」

「案？」

「ええ、インスラのタヴェルナに集う書簡を届ける者たちへ、酒の飲み代を払う代わりに毎日の天気を事細かに記載してもらうんです。」

「天気をですか？」

「はい。そうすれば、その地域の情勢や何処かどんな状態なのかを把握できるようになります。」

「記載状況によって、奢る酒代も変動するわけですね。」

「もちろん！しかし政務官職で監視官であるケンススの仕事を奪うわけには行きませんかね。」

「表立っては出来なかったのは重要でした。」

「あっははは。」

「私は脚が悪い者ですから、使わずに済む方法を常に探しています。」

「クラウドデウス様ならではの考え方、敬服いたします。」

ドルスツス叔父様は誇らしげに地図を両腕で上げて、ニコニコと微笑みながらその瞳に輝かしいローマの未来を想い浮かべているようだった。クラウディウス叔父様曰く、ドルスツス叔父様もまた、大母后リウイア様とは違った思考を反映させたローマの行く末を気になさっていたという。

「どうだろうか？クラウディウスさん。この地図はこれからの未来の土台とも思えるんですよ。これらに何が必要か、二人で色々考えませんか？」

「いいですね！実はちよつとした色々な模型を作ってみましたですよ、見てくださーい！」

そういつとクラウディウス叔父様は両腕いっぱい城壁や宮殿、兵舎や水道橋を抱えながら持ってきた。さながらお二人は、目を輝かせながら床に寝っ転がって模型遊びに熱中する子供達のようにだった。

「ここの城壁からローマの市内へと水道橋が建築されれば、ローマ市民も浴場に愉しむ事が出来ますよね？ドルスツス様。」

「それならばクラウディウスさん、パラティヌス丘まで一気に伸ばした方が皇族派の方々も喜ぶでしょうね。」

「ああ、確かに！さすがドルスツス様はあらゆる階級に配慮されたバランス感覚に卓越されていらっしゃる。」

「いえいえ…。私はただ、あらゆる階級にとって私自身が架け橋になれることを望んでいるだけなんです。」

「そのように考えられる人は、現在のユリウス氏族でもクラウディウス氏族でも稀でしょうね…。」

しかし、胸を押さえながら喉に唾液が引つかかるような深い咳を、ドルスツス叔父様は二、三度背中を丸めながら苦しそうにし始めた。クラウディウス叔父様の表情は一層険しくなっていく。

その様子を察したドルスツス叔父様は出来るだけ笑顔を浮かべ、頷きながら右手の掌を差し出して大丈夫だと答える。侍医エウデモスから渡されたエトルリア人の処方薬を、先ほどの葡萄酒と一緒に喉へと流し込むドルスツス叔父様。何度か大きな咳をしながらも、徐々に回復へと向かっていった。

「ドルスツス様、大丈夫ですか？」

「ゴホゴホ、まだまだ咳が止みませんが、葡萄酒と一緒に飲む薬になりましたね。どうもエウデモスが処方した薬だけでは苦くて苦くて。」

「でしようね…。」

「全くですクラウディウスさん。我々の祖母であられる大母后リウイア様の長寿の秘訣は、全くもって侮れませんね。」

「正に“太く長く生きる”という代名詞を体現されているのですから、爪の垢でも煎じて我々は見習わなければなりませんね。」

続く

第十章「亀裂」 第九十六話

侍医エウデモスは笑いを堪えられなかった。全てがセイヤヌスの言う通りだったからだ。これほど面白可笑しい事は今までにあっただろうか？

「どうだ？エウデモス、全てはお前の好きにできる事なんだ。」

「ええ、ええ、ひっひっひ。」

目隠しをされ、あるがままの姿にさせられたドルスツスの妻であるリウィツラは、まるで雪を溶かすように普段の機嫌の悪さを汗や喘ぎと共に流していく。

「頼張れ、吸い付くせ！そして今まで貴様が蓄積していった欲情をぶちまけるんだ。」

「当然でっさ！ひっひっひっ！」

「私は私はもう一人の宦官奴隷リユグドウスの様子を見てくる。」

セイヤヌスはリウィツラの寝室を離れ、親衛隊の部下と共に黒外衣を羽織り表へ出て行く。するとちょうど向こう側からゆっくりと自宅のドムスへ帰ろうとしているドルスツスの姿を見掛けた。

「教祖?!」

「マズイ！ドルスツスではないか?!」

「何でこんな早い時に帰宅するんだ?!」

「エウデモスの奴を何とかしなければ!」

「間に合わん！放っておけ!」

「ダメです教祖！奴の口から我らの計画が漏れたりしたら…。」

「クソ!」

『教祖はとにかく姿を隠してお帰りください。』

『後は我々が!』

『うむ、頼む。』

蜘蛛の子を散らすように、彼らはドルスッスに見つからないように姿をくramsすと、部下達のリウィツラとエウデモスの居る寢室へ急いで向かった。

「リウィツラ」。俺がどれほどの間、お前を堪能する日を心待ちにしていたのか分かるうかあああ?」

エウデモスは怒りだけでなく喜びを体現する時も、鷲鼻の先にある無数のイボを潰す癖がある。

「綺麗で美しく、そして妖しく豊満で艶っぽい肉体。それらが全て私の物に…。」

潰した先から垂れる汁を、いやらしくへその周りに垂らすと、全裸の肉体は波紋のように感覚を伝え打つてくねらせ始める。そしてエウデモスは歯茎を剥き出しに笑い、リウィツラの全裸という孤島へと、枯れた枝木のような指先を伸ばしている。

「やっと、やっと…。」

「?!」

だが弾かれた。

黒外衣を羽織ったセイヤヌスの部下達は、エウデモスの首元や両手首を抑え、壁に思いつきり投げ飛ばした。

『今日はこちらまでエウデモス。ドルスッスが既にこちらに向かっ

ている。』

「な、何?! 旦那様が?!」

『このままお前が戯れを続ければ、セイヤヌス様の計画が台無しになる。』

『ドルスツスに今の惨状を見られれば、お前自身が不利になるのも必至。即座に普段の状態へ戻すのだ。』

「ぬつつぐ!!」

あと一步、前に進めればリウィツラの豊満な胸を頬張る事ができるというのに。間の悪さはいつだって同じだ。失う時には常に邪魔だてが入ってくる。いやだ! 冗談じゃない! わしは餌を目の前にぶら下げられた飼い犬のまままで終わってたまるか!

「嫌だ! 手を離せ! 貴様らが旦那様の帰りを止めて来い!」

『何だと?!』

「セイヤヌスの計画がなんだ! 不利なのは貴様らの方ではないか!」

黒外衣を羽織った連中は、手首に力を入れてエウデモスの息の根を止めようとしたが、エウデモスは不敵に笑っただけであった。

「わ、わしを殺したところで、そ、それでもセイヤヌスの毒殺計画は…つつぐ! ドルスツス旦那様に漏れるぞ!」

『何だと?!』

「旦那様に渡してる処方薬は、セイヤヌスがリウィツラから旦那様へ飲まそうと手渡したエトルリアの毒薬なのだ。わしが死ねばリウィツラもいずればれる、そうなればお前達もこのままでは…ウツガ!」

だが、有無を言わせなかった。

所詮は愚か者の浅知恵であるのは明白。瞬時に腹部へ拳を二発ほど

流しこまれ、エウデモスの意識を吹き飛ばされた。醜い人間達はその劣等感故に勘違いをする動物。彼らを人間として見ていない親衛隊の方が何十枚も上手だったのだ。うなだれたエウデモスは外の廊下に放り捨てられ、薬漬けになっているリウィツラの頬を叩き、目隠しされた彼女の自由な時間に緊張感を解き放つ親衛隊は、ドルスツスに目撃されることなく全ての証拠を隠滅した。

「お、お帰りなさい。」

「ただいま、どうした？」

「いいえ、今日はお帰りがとてもお早いのですね？」

「ああ、午前中はクラウディウスさんの所へ行ってきた、その帰りにウィプサニアの所に寄ってきたよ。」

「え！？ウ、ウィプサニアですって？」

今まで気まずい雰囲気であったリウィツラ叔母様の表情は、一挙に険しい表情へと変わっていく。まるでありもしない浮気を疑い、自分の事はしっかり神棚に上げては隠祈る、そんな、愚かで浅はかな女性を演じるように…。

続く

第十章「亀裂」 第一百九十七話

「どうして?! どうしてウイプサニアのところなんか!」

「何度も話したじゃないか! 彼女は寡婦で、ゲルマニクスの子供達も遣われているんだぞ。誰が父親代わりになってあげられるだ?」

「父親代わりですって?! それならたくさんいるじゃないですか! 例えばあなたの父親だって、ゲルマニクス兄さんを養子にしていたのだから! ローマのクロアカ・マキシムに住む孤児なんかよりも立派に育つじゃありませんか!」

「ウイプサニアがそれを許すと思うか? 彼女はクラウディウス氏族に不信感を抱いているのは明白な事実であることぐらい、お前だって分かるだろう?!」

「何を仰ってるんですか?! それで国家に立てついて、十分に国家反逆罪になるような事をしてるじゃありませんか?! あなたは次期帝位継承者何ですよ!!」

「分かってる! だが、ウイプサニアの架け橋が必要だろう!」

「ああああ! 冗談じゃないわ! あなたは口を開けば二言目にウイプサニア、ウイプサニアって! あなたは誰の旦那なのですか?!」

「もちろん、お前の旦那に決まってるだろうが!」

「ひどい! 私の名前は呼んで下さらないのですね!」

「...」

リウィツラ叔母様とドルスス叔父様のすれ違いは、ものの見事に頂点に達していた。互いの持つ淡い期待と不信感が、互いを罵り合うことでしか救われず、今度は優しくありたいという反省も無残に切り裂いてしまう。男は頑固で女は気分屋だから。

「もういい! 最近のお前と話していると面倒くさくてしかたない!」

「はあ?! 面倒くさいってどういうことですか?!」

「自分の意見を主張すれば否定され、お前へ同調すれば、合わせ過ぎだと非難される。私はただ、穏やかな毎日を過ごしたいだけなんだ！」

「あたしだってそうですよ！穏やかな毎日を過ごさせてくれないのは、隙あらば雌豚ウイプサニアのところへ出向くあなたの方じゃありませんか?!」

ドルスツス様はリウイッラ叔母様が母を雌豚と侮辱する行為を許しはしない様子だけど、でも叔母様も自責の念を他責の念へ変えるが如く、叔父様を責める一方だった。

「やめろ。」

「いいえやめません！あたしがどんな気分でああなたの帰りを待っているのか分かりますか?!どれほどウイプサニアが汚らわしく意地汚い女か知ってますか?!」

「リウイッラ！」

「あの雌豚は！あなたがまんまと自分の股ぐらに捕まることを、心の奥底から高笑いして待っているのです！」

「いう加減にしろ!!」

気の強い女を諫める平手打ちが、寢室を共鳴させると、下唇を噛んでギラッと自分の亭主を睨みつける叔母様の猛反撃が始まった。ローマの恥知らず、ゴキブリ、クロアカのドブネズミなどなど。あらゆる罵声と物がドルスツス叔父様へと投げつけられ、枯らした声と詰めた指先で襲い掛かる。さすがの叔父様も見切りをつけてしまったのか、右腕を肩から手の甲を叔母様の頬へと思いつき振りかぶった。

「きゃあ!」

「ハアハア!」

叔父様に殴られた叔母様は床に倒れ、激痛に顔をしかめながらピンク色に頬を腫らして泣いている。

「うづうづ、うづうづう！…！どうして！…？うづうづ、どうして？…！私が殴られなければ、いけないのよ…！」

「…。」

「うづうづ、何も！悪くないのに…！」

夫婦二人の決定的な亀裂が、見事なまでに互いを思いやる慈しみを切り裂いた瞬間だった。

続く

第十章「亀裂」 第百九十八話

断りを一つ入れておかなければならない。

それはドルスツス叔父様が決して女性に手をあげるようなお方ではないからだ。非常に信仰心厚いお方で、優しさに満ち溢れている性格は生まれ持った資質であり、きっかけとなったのは叔父様の両親である皇帝ティベリウス様と実のお母様のお二人が、アウグストゥス様の命によつて離縁をさせられた時から、叔父様は仲裁の女神ヴィリプラカへ毎日お祈りを欠かさないようにしてきたのだ。

女神ヴィリプラカとは別名「仲直りの女神」とローマ人から呼ばれ、この女神の神殿では夫婦喧嘩の調停場になっており、女神の前では次の三つのような条件がある。

- ・ 神体の前では不平不満のある者は皆平等であり、一言でも包み隠す事を禁ずる。
- ・ 神体の前では不平不満のある者は皆平等であり、一人ずつ声に出して伝えること。
- ・ 神体の前では不平不満のある者は皆平等であり、待ち人は一切の邪魔を禁ずる。

つまり夫婦喧嘩が起きた時には片方の報告が終わるまで、もう片方は決つて反論をしてはならず邪魔してもならないということ。大抵のローマ人は関係がこじれた時にとりあえずここでお祈りを捧げ、自分の言いたいことを曝け出してスッキリして帰って行く。これにはよく人間の特性が考えられていて、神官などが相手をすると同意を求めたり味方について欲しいと考えるのが人情であつて、ローマ人にとつての女神像なら物も言わず公平であるため、互いの言い分もある程度納得できるのである。事実、リウィツラ叔母様と揉める

たびにドルスツス叔父様は女神ヴィリプラカの神殿へ二人で必ず出向いていた。大抵のことは、出向いている間に激怒していた気持ちが醒めて、女神ヴィリプラカの前で愛の誓いを交わすのが二人の常だったのだが、そのような信仰心厚いお方が、今回女神ヴィリプラカの神殿へさえ出向く事を忘れ、リウィツラ叔母様の頬へ右腕をしっかりと振りかぶって手を出したのだから、その耐えきれない怒りは相当な物だった事が分かるでしょう。

ところで知つての通り、ゲルマニクスお父様が亡くなつてから、私は神々なんてものへ真剣に信仰をしたことないほど罰当たりな娘だった。御祈りはあくまでも形だけで、それはそれは本当に舌を巻くほど生真面目にお祈りを欠かせないローマ人の習慣に、何処か白けて達観していたくらい馬鹿らしいと思つていた。特に女神ヴィリプラカに関しては、どうせ物言わぬ大理石に吐き出すだけなのだから、ならばここぞとばかりに余計な事まで曝け出し、その結果、後で旦那の怒りを買つたこともしばしば。余りにも、この”聞き上手の女神”を使い過ぎて、周りから私が信仰心厚い古風な人間であると思われていたのは、今でもこうやって思い出すたびに笑がこみ上げてくるわね。ごめんなさいね、騙したつもりは全くないのよ。でも分かるでしょ？これが私ユリア・アグリッピナなんだから。

さてさて、家族や親戚の關係に亀裂が入り始めた頃、私は何をしていたかというと、実は妹ドルシツラと意見がすれ違つてばかりだった。こちらは姉妹同士の喧嘩だから、仲直りも早いのだが、今考へればもっとしっかりドルシツラの事を考へてあげれば良かったと後悔もしている。そうそう、私達姉妹の中で神々に一番の信仰心の厚い古風な人物は実はドルシツラ。あの娘は男性の半歩後ろを歩く女性的な部分を理想にしているけど、何処か融通の効かない頑固さも兼ね備えているから、あんなにリウィツラ叔母様に口をへの字にして楯突いたりもします所がある。あたしは自分の立場が弱ければ、

年上に楯突くなんて無理。どうせ子供扱いされるし、素直に敬語使
って相手を喜ばせているのが無難だと思ってた。

案の定、そんなあたしの性格をしつかり見抜いていたの末妹のリウ
イツラ。不思議とこいつとは気が合って、時には良いパシリに使っ
たり、あたしが言いたくても言えないことを言ってくれたりとなか
なか使える末妹。でも、それは末妹らしい天然でワガママな性格も
あるので、時々こいつの泣き事で巻き込まれる事もあった。とくに
リウイツラは盗み食いが病的的に止まらなくて、自分は一切やって
ないと言い張る癖がある。あたしじゃないよ、アグリツピナお姉ち
やんがやったんでしょ？などとなすりつけられて母ウィプサニアか
らこっ酷く怒られた事もあった。

それにしても妹って本当に面白い。同じ家族で育っているのに、こ
うも別の性格が形成されていくなんて。それこそ神々に答えてもら
いたい不思議の一つ。色情狂神ユピテルだったらなんて答えるんだ
ろう？そんな事どうでもよくて、白鳥か黄金の雨になって女性を追
いかけ回してるのかしら？

「ああ！もう、アグリツピナお姉さんっていつつ寝巻き出しっぱ
なし。なんなの？どうして片付け無いわけ?!」

「片付けたくないから。誰かにやらせればいいじゃん。」

「そうじゃなくて！もう！今日はアントニア様のドムスから出る日
なの。お母様が自分の持ち物は自分で片付けなさいってさっき言っ
たばかりじゃない。」

「だったらあなたの所に入れておいてよ。」

「どうしてよ。何で姉さんの寝巻きまでいれなきゃいけないの?」

ドルシツラはキンキンと甲高い声をあげながら、あたしの寝巻きを
放り投げた。あたしもカチンと頭にきて、ドルシツラの寝巻きをす

くい上げて、ビリビリっと引き裂いた。

「な?!何ことするのよ!酷い!」

「あんたが姉さんであるあたしの言うこと聞かないで寝巻きを放り投げるからじゃない!」

「だからって引き裂くことないじゃない!許せない!」

ドルシツラはすかさずあたしの寝巻きを引き裂こうとしたので、それを取り上げては逃げた。それでもしつこくキンキンと甲高い声をあげてくるので、あたしは思わず頭にきて、頬を平手打ちした。

「あんたね!その甲高いキンキン声をやめなさよね?!」

「もう…。痛いじゃない!お姉さんって本当にワガママ!!何で?

!」

あたしはどうかでイライラしていたのかもしれない。

続く

第十章「亀裂」 第百九十九話

ローマの女の中には、男という虎の威を借りるズルい奴もいる。まあ別にローマに限らずいつの時代でも、どこの世界でもいるだろうけど、顕著だったのはドルシツラだった。

「アグリッピナ姉さんが！！あたしの事を殴った！！」

案の定、ドルシツラはキンキンと甲高い声でカリグラ兄さんに助けを呼びながら泣いている。ドルシツラの泣き声を聞きつけた兄の妹にバカなカリグラ、通称『バカリグラ』は、血の気も多くすっ飛んでくる。

「アグリッピナ！！お前は何でそうやって妹を泣かすんだ？！」

「ドルシツラが勝手に泣いたんでしょ？！」

「ちがうもん！ガイウス兄さん、姉さんは思いつきりあたしの頬を引っ叩いたの！」

「あんたが生意気な事を言うからでしょ？！」

「姉さんがあたしの寝巻を引き裂いたんじゃない！」

「あんたが先にあたしの寝巻を放り投げたからだろうが！」

「違うもん！ガイウスお兄様、アグリッピナ姉さんが全然自分の事をしないから注意したんだもん！」

「ほらみるアグリッピナ！お前がやっぱり一番最初の原因じゃないか！可愛い妹ドルシツラに平手打ちなんかしやがって！同じ痛みを味合わせてやる！」

バカリグラはすぐにわたしに手を出すので、次兄のドルスス兄さんもすかさず私を守るためにやってくる。

「ガイウス！女に手を出すのはやめろ！」

「うつぐぐ！離せよドルスス兄さん！」

「お前がアグリッピナに手を出さないなら離してやる！」

「イテテテ！！分かったよ！分かったから！だから離して！僕の手首はそつちに曲がらねえーんだよ！」

「本当だな？！」

「もう！いってー！よ！骨が折れるよ！母さー！ー！ん！！

すると決まって母は駆けつけて私とドルスス兄さんを叱り飛ばすが、兄さんはずつと成人式をあげさせてくれない母に対し、かなりの反抗期を迎えていた。

「ドルスス！離さない！」

「クソっ！母さんに助けなんか求めやがって。お前はそれでも男かよ？ガイウス！」

「痛い！痛いよ！」

「やめなさい！ケンカにもほどを考えなさい！あなたはガイウスのお兄ちゃんでしょう！？」

ドルスス兄さんは感情任せにカリグラの頭を叩いて離し、母へ猛烈に怒りを露わにする。

「だったら！僕にも成人式をしてくれよ！」

「それとこれは、今は関係無いでしょ！？」

「関係あるさ！冗談じゃないよ！」

「もう！どうしてあんた達は母さんの言うことを聞かないんだい！今日は大切な日だって言うのに！」

そう、母ウイプサニア一人にとってだけの、子供だったあたしには大迷惑だった引越しの日であった。

続
く

第十一章「追憶」第二百話

苦しい事よりも楽しい事を思い出す方が、ピクンと心が痛くなるのはなんでだろう？大人になればなるほど、楽しかった記憶に心は弱くなっていく。私にとって追憶とはそんな感じだったけど、この頃の大人達にとって追憶だけが、唯一現実から逃避できる時間だったのかもしれない。

「本当にウイプサニア、出てっってしまうのかい？」

「はい。これ以上アントニアお義母様にはご迷惑をかけられませんので。」

「そう...。」

母ウイプサニアは丁寧な言葉であったが、とっても冷たい雰囲気でした。いやむしろ、それが当たり前とでも言いたげで。私は何だか私達孫を奪われるアントニア様のお姿が小さく見え、どうしても気の毒に思えて仕方がなかった。横には子犬がクーンと泣くように、アントニア様を見上げるセイヤヌスの長女ジュリアの姿がある。

「さあ、行きましょう。」

カリグラ兄さんとドルシツラはすぐに母と同じようにアントニア様へ背を向けたが、ドルスス兄さんはそんな無神経な母達の姿に憤慨している。末妹のリウィツラは小さな指先で不安そうに私の手を握っている。私は、私は...。

「お婆ちゃん!..!」

思わず叫んで泣き出して飛び込んだ。

アントニアお婆ちゃんの良い匂いがフンワリと優しく包んでくれる。お婆ちゃんもまた、涙を流しながら何度もありがとう、ありがとうってギョツと抱きしめてくれた。リウィツラも一緒に後から泣きながらついて来た。多分、この時だけだったと思う。アントニア様をお婆ちゃんと呼んでしまった事、そしてアントニア様も笑顔で応えてくれたのは。いつもならくすぐりの刑と一緒に、決して自分の事をお婆ちゃんと言わせないのに…。

「いつでも帰っておいで、アグリッピナ、リウィツラ。あんた達のお婆ちゃんはいつでもこのドムスで待つてるからね。」

「はい…。」

「うう、お婆ちゃん。」

「はいはい、よちよち。本当にいいこだねリウィツラは。アグリッピナお姉ちゃんはね、今のあんたぐらいの時に一人でじつと堪えて家族から離れて暮らしてたの。あんたが生まれてからもずっと我慢してね。だからね、ちゃんとアグリッピナお姉ちゃんの言うこと聞くんだよ。」

「はい！」

もうぐつちよぐちよだった。

リウィツラの泣き顔は、彼女の寝小便とかと大差ない泣き顔だった。あたしもいっぱい泣いていた。母ウィプサニアには泣きつけない寂しさを、優しい優しいアントニアお婆ちゃんの腕の中でいっぱい解放して。

「アグリッピナ…。ありがとう。」

「…。」

「あんたは素直な子だね。どことなく小っちゃい頃の女の子みたいに可愛かったゲルマニクスみたいだよ。」

「え？お父様に？」

「お尻もツルツルしてまだまだ可愛かった頃、どことなく面影がアグリッピナに似ているんだろうね。」

「アントニア様……。」

「辛い時はいつでもいらっしやい。大母后リウエア様の所へ連れてってあげるから。」

「はい！」

私達姉妹はもう一度お婆ちゃんと抱き合った。そしてちゃんとお辞儀をして感謝の言葉を告げると、堪らず横にいたジュリアもわーわー泣き始める。いつもなら泣くのはやめなつて偉そうに言えるのに、私がぐしゃぐしゃに泣いてるから台無し。

「ううう、ジュリア、また遊ぼうねええ。」

「わーん、もちろんですわ、アグリッピナ様ああ！」

今から考えれば、引越し先はパラティヌス丘からティベリ河を上つて、ロムルス様のピラミッド墓をウァティカヌス区域へ東にコルネリア通りを歩いた先なのだから、ここまで大袈裟に別れを惜しむ必要が無かったのかもしれない。でも、当時の世論を味方につけた母ウイプサニアの唯我独尊は、私達に永遠の別れかもと思わせるほど、強烈な印象だったことは間違いなかったの。

「あんた達！いつまで泣いているの！」

母の厳しい声が私達の心を引き裂いていく。この頃は母を心底嫌いになっていったが、母もまた、自分の家族以外信用できない現実から嫌気がさし、唯一過去への追憶だけが現実から逃避できる時間だったらしい。

続く

第十一章「追憶」第二百一話

母ウィプサニアの一存で全てが激変していく時代、私はとっても反抗期だった。何かにつけて怒鳴る母に対して、素直になりたくない想いが重ねられていく。母みたいには絶対なるものかと、本気で心に誓った事もあるほど。淡い恋の思い出がいつぱいつまった祖母アントニアのドムスを出て、私はこの時唯一心残りだったのは、初めてキスした解放奴隷のパツラスに、とうとう最後まで目を合わせることが出来なかった事。

「何グズグズしているの?!」

後ろ髪を引かれる想いを断ち切って、コツケイウス家のネルウア様にご用意してくださった邸まで、ティベリ河を船で北へ向かって上っていった。汚いティベリ河には、不満そうな自分の顔が波に歪んで見える。

「もつと嬉しそうな顔をしろよ、アグリッピナ。」

「別に……」

「今度の邸はとっても庭も広くて、お前の好きな木がいっぱいあるんだぞ。」

「あつぞ。」

「可愛げないな、河に突き落とすぞ。」

「すれば?」

「まったくムカつく奴だな。」

兄カリグラとはいってもこんな感じだった。当然ドルス兄さんが兄カリグラに対して目を光らせているので、私に手を出したくても出せないでいる。私はドルス兄さんに甘えてふてくされていた。

「アグリッピナ、気分は大丈夫か？」

「正直、良くないよ。」

「だよな。母さんは自分勝手だし。」

「…。」

「お前は可愛い俺の妹だからさ。俺が守ってあげるからな。」

さっきまで河の波で歪んでいた不満そうな自分の顔は、少しだけ滑らかな波と共に笑顔を取り戻している。

「ありがとう…ね、ドルスス兄さん。」

「気にすんなって。」

「うん、もうスッキリしちゃった。ねえねえ！ドルスス兄さん！今度の邸はどんな感じ何だろう？木がいっぱいあるってことは、木登りし放題かしら？」

「たはは…。お前ってやつは相変わらず、現金で立ち直り早いな。」

「エへへ…。だってこれがあたしだもん。」

今はドルスス兄さんにだけは妹でいられるから、そんな甘えがとつても救いだつた事だけは覚えてる。そう、これがあたしって言葉も、この頃から使い始めてたんだよね。母からは自己主張が激し過ぎるからやめなさいって言われてた気がするけど。

ポチャーン！ポチャーン！

うん？

何かが河に落っこちてる。

「へへん！ドルシツラ。見たか？あんなに遠くまで飛んだぞ。」

「すごい！ガイウスお兄様。」

「もつと遠くまで飛ばしてやるのか？」

ポチャーン！

兄カリグラが何かを外に投げてるんだ。相変わらず子供だな。あんな船のへりに立ってたら河に落っこちちゃうのに。

「ガイウス！船から石を投げるのやめなさい！」

「ええ？！だつてお母様！アグリッピナが何もしないから、僕はドルシツラを楽しませようと思って。」

まっただあたしのせいなの？？

「あんたは全く泳げないのに！船から落ちたらどうするんです！」

「大丈夫です！！」

「言うことを聞きなさい！ガイウス！」

「ほら、大丈夫ですって！」

調子乗って片足で立とうとした兄カリグラだったが、案の定バランスを崩してあつという間にへりから落ちた。

「危ない！」

あれ？

河に落っこちる音がしない。

「へへ〜ん、ここに足場があるのは船を乗る時に承知済みさ。」

意外にあざとい兄カリグラに、私は何だか今までとは違う印象を持った。

続
く

第十一章「追憶」第二百二話

「うわー！！とつても綺麗！」

「見て見て！アグリツピナお姉ちゃん、お庭がとつても広いよ。」

「本当だねえ。よっしゃ！リウィツラ、どっちが先にあの一番奥の木までたどり着けるか？駆けっこ競争だよ！」

「いいよー！」

「行くよー。それ！」

「あつ！ズルい！お姉ちゃん待つてえー！ズルいよー！」

あれだけ引越したくなくて散々ふてくされてた長女が、兄妹の誰よりも新しい邸についた途端にはしゃいでいるのだから、そりゃ母ウィプサニアも全くあんたはなんなの？と怒鳴りつけたくなる気持ちだったのかも。特に自分の息子を持つようになってから、子供の自分勝手さやワガママさを身をもって知ることになった。でも、当時のあたしは大人の人間関係で窮屈な思いをさせられたパラティヌス丘から、伸び伸びと自由に遊べる新しいお母様のヴィツラ邸へ来れたことで、どこかで開放感を味わいたくて堪らなかつたんだ。

「ほほほほ！相変わらず元気じゃのう、アグリツピナ殿は。」

「あ、コツケイウス家のネルウア様！おはようございます。」

「この間の、頭の傷はもう平気かな？」

「はい、お陰様でフラフラもしないで大丈夫です。」

「ほうかほうか、良かったのう。」

「あ、おはようございます。」

「おやおや、そっちのおチビちゃんは末妹のリウィツラ殿かな？」

「はい。」

「二人ともここのヴィツラは気に入ってくれたかい？」

私達二人は満面の笑みで見つめ合い、力強くネルウア様へご返事を
してうなづいた。

「はい！」

「ネルウア様、有難うございます！」

「うんうん、良かった。ほら、遊んでらっしゃい。」

「はい！」

子供って現金だから自分に優しく何かを与えてくれる大人には、いい印象を持たざるを得ない。私とリウィツラは一生懸命走って走って走ったのに、まだまだ庭園はいっぱいに広がっている。ドムスに比べたらお庭の広さは半端なかった。私は何だか昔のお父様達と暮らしていた頃のヴィツラを思い出して、何はなく心が摘ままれたような感覚に陥ってしまい、シュンッと走るのをやめてしまった。

「。。。」

「アグリツピナお姉ちゃん？どうしたの？」

「うん、何でもないよ。」

「何か元気ない。」

「元気だって、な、何言ってるの。」

「本当に？」

「本当だって。ただね、あんたがまだお母様のお腹にいた頃、私は木登りしたんだけど降りれなくなった時があったの。」

「うっそだ！！！！わんぱくなお姉ちゃんが木登りして降りられないわけじゃないじゃん。」

「本当だって。上るのは好きだけど、下りるのは嫌いだったの。」

何処かですつと避けていた事があるとすれば、私がどんなに勝気でわんぱくでもすつと褒めてくださったゲルマニクスお父様の事だ。

「リウィツラ、お父様は本当に優しく、家族の誰もが寂しい思いをしないようにしてくださった方。私がガイウス兄さんと喧嘩して木から降りれなくなった時も、その大きな両腕でしっかりと私を受け止めて抱えてくださったんだから。」

「フーン。そうなんだ。」

ふと、とつても悲しくなった。

今は一体誰が私を無償の愛で受け止めてくれるのかしら？未だにお父様は何処かで勇敢に戦ってらっしゃるだけで、本当はあの時のように颯爽と馬で駆けつけてくれるのでは？

「あたしが木登りして降りられなくなったら、お父様は以前のように来てくださるかしら？」

「え?!」

思い立ったら吉日。

私の両腕はウズウズして、私の両脚はワクワクして、この木の先まで登りたくなっている。そう、もう一度お父様に会えると思えるから！思うよりも先に手が枝を掴み、足が木の足場に乘っかり、先の方が細く見える緑の葉っぱでできた洞窟を抜けて行くように、私はどンドン進んで行った。お父様の笑顔が私を迎えてくれるように、いや、それを願うかのように、私はあの先まで上って、大声でお父様を呼んで、めいっばい飛び降りて、もう一度、もう一度、お父様にお会いするの。やっと、木の先に立てた時、私は大きな風を全身で感じながら、精一杯の大声でお父様の名前を何度も何度も呼んだ。そして、私の耳には不思議とお父様が馬に乗って駆け寄ってくる音が聞こえてきた。お父様が呼んでいる！あの時のように！

「アグリッピナ！」

え！？お父様！！

「やめろ！今すぐやめるんだ！」

「アグリッピナお姉ちゃん！飛び降りるなんてやめて！」

ドルスス兄さん…。

リウィツラが知らせてくれたんだ。でも、なんで？どうしてお父様でないの？

「いいか！？お前が待っているお父様は、もうこの世にいないんだ！」

「うそ！絶対にいらっしやる！私がこうやって木登りして困った時、いつも思いつきりジャンプしたら受け止めてくれたもん！」

そうよ！決まって困った時に、
いつだってお父様は馬に乗って…。

「ゲルマニクスお父様は死んだじゃないか！」

一瞬、お父様の小さな遺灰が頭を過る。

そして死というものが本当に怖くなって足がガクガクして、立って
いられなくなった。高い所にいるからじゃない。ドルスス兄さんは
私をジツと見つめて、降りてこいと言葉に出さずに物語っている。

私は流れ落ちる涙をすすり、大空に散っていく自分の淡い気持ちを
雲達に乗せていた。

続く

第十一章「追憶」第二百三話

「お母様！お願いですからアグリッピナをちゃんと見てやってください！」

「…。」

兄ドルススは腹の底から憤慨している。当時は全く気が付かなかったが、私にも自傷に陥り易い部分があることを、しっかりと祖母アントニア様の系列から受け継いでいた。

「そこまで偉そうに言うのなら、兄であるあなたが妹を見張るべきでしょ？」

「お母様！」

「だまらっしゃい！いい？先ずは自分のやるべき事をしっかりと出来てから、初めて人に文句を言える立場になれるのよ。出来なければ、三倍四倍にして何も言わず努力に務めるものなの。あなたはただ、成人式を迎えたばかりで妹を出汁に使ってるだけじゃない！」

どうして?!

母はなぜ？そのようにしか捉えないのだろ…。

「なんて事を言うのですか?!お母様！それこそ、その話と僕の成人式は関係ありませんよ！」

「なら、ガタガタ文句を言わずやりなさい！私無しでは何も出来ないでしょ？」

「…。」

リウィツラが私の手をとって震えている。私は薄暗い寝室に寝かされ、天井を眺めながら泣いていた。そっか、あたしって母とはもう

合わないから、お父様に会いたがっていたんだ。

「ドルスス兄さん。」

「アグリッピナ、本当にごめんよ。兄さんが不甲斐ないばかりに、お前達を苦しめてしまつて。」

兄さんは悔し涙を流していた。私は嬉しかった。だつて本当に兄ドルススがいなければ、私はどうなっていたか本当にわからないもの。リウィツラも堪らず涙を流してドルスス兄さんに抱きついた。きつと、相当私の行為は怖かつたにしがいない。

「お前達のことは、必ずお兄ちゃんが守つてやるからな。」

「うん。」

「ありがとう…。兄さん、悪いんだけど少し横になつてもいいかな?。」

「疲れたのか?。」

「うん、何だか今はぐっすり眠たい。」

「分かつた。ガイウスが邪魔しないように見張つてるからな。」

「うん。」

そういうと二人は優しく扉を閉めて、こっそりと外へ出て行つた。こんな時に、カリグラ兄さんが偉そうに皮肉の一つでも言いに行つて来たら、私は本当に気が狂いそうになつて発狂してしまふと思う。そうなつたら今度こそ手につけられなくなつてしまふ。薄暗い天井に腕を伸ばしてみたけど、さっきよりなんだかだいぶ手前に迫つてきたような感じがした。きつと気のせいなのかもしれないけど。私は海老のように身体を丸めて横たわり、掛け布団をギュウッと握りしめながら静かに目を閉じた。

”ユリア?ユリア?”

暗闇の中で白い霧模様の影が何かを問いかけてくる。懐かしい響き
なんだけど、でも、どことなく寂しげでやつれているような細かい
声。救いを求めてくるこの声に、私はどうしても近づきたくはな
った。なのに、両脚は懐かしさを求めて今にも走り出したい欲求に
駆られている。

”こつちだよ、ユリア。どっちを見ているんだい？”

”誰？誰なの？”

”ウイプサニアは元気かい？ああ、きつと元気だろうな。”

”お父様？”

でも、その声の主はもつと違う雰囲気だった。懐かしいのにお父様
とは違う。

”アグリツピナ！お前は悪い子だ。”

”ウイプサニアの言うことを聞かないなんて、お前は本当に罰当
りで罪深い人間だ。”

”誰？！誰なの？！”

闇の中を漂う白い霧模様の影は、ギョロ目でこちらを睨みつけ、腐
りかけた肉ひだをボトボト落としながら、頬まで切り引き裂かれた
笑みを返す。そう、この神こそ、あたしがローマの神々の中で最も
毛嫌いする冥界の主プルートーだった。

続く

第十一章「追憶」第二百四話

なんていやらしい神なんだろ。

父の懐かしい声で話し掛けてくるなんて。

” 父親に会いたいのか？ ”

” …。 ”

” 強情な奴だ。 ”

私は幼いながらも、これが決して現実で起きている事だとは感じていなかった。むしろ、何か夢のような雰囲気で自分がそこにいるような感じ。少なくともお父様はそんな喋り方をしない。

” フッフ、そうかそうか。ならば誰がいい？ ”

” …。 ”

” そうか、あくまでも口を開かないつもりか。 ”

お父様の懐かしい声が、今夜はとても凶器に聞こえる。まるであの頃の…。でも、お父様はいないんだ。ドルスス兄さんが言ったように。私は大母后リウイア様から教えられたように、己の中でアイデアを感じ、感情的になりそうだった時には、目を細め奥歯を噛み締め、自分が大理石の彫刻になった気分で決して表情に表さないように務めることにした。

” イデアか？イデアと共に在ろうとするのか？愚かな人間め、冥界の主は無駄な抵抗を…。 ”

” …。 ”

そう、私にはお父様を喪った意識は無い。だって、お父様は既に遺

灰として戻ってらったから。だから平気。

”ならば、アントニアの奴隷で、アヘノバプス家のドミティウスに殺された、アクイリアならどうだ？”

”！！！”

”おねーたん。”

”アクイリア！”

二の腕に激痛が走る。

冥界の主プルートーはガシッと私を力強く掴み、さらに耳まで口を裂きながらニタッと笑って

喜んでいる。そうさ、アグリッピナ。お前は強くなかない。弱い心のお前がそうさせたのだ、と言いたげに。

”おねーたん、なんで？なんで置いてきぼりちたの？”

”あああ！”

酷い！私が最も後悔している事を突いてくるなんて！確かにお父様のご遺体を見ることなく、私はお父様の死を受け容れなければいけなかったのだ、死を体現する事なく過ごさなければならなかった。

”おねーたん……。返事をして？”

”ダメ！見ないで……。”

でも、アクイリアは違う！彼女が布に囲まれて、そして火葬されて行く姿をしつかりとこの目で焼きつかせた。なぜ神々は私達を放っておかないんだろ？！酷い！酷すぎる！！トロイア戦争の時もそう！神々が人々に干渉さえしなければ！なぜ貴方達は気まぐれで邪魔ばかりするの？！

” おねーたんはいつもじゅるいよ。自分勝手に嫌なことから逃げばかりで。”

” ごめんね、アキラリア。わたしは、わたしは…。”
” 本当に痛かったんだよ！ちゅらかったの！”

アキラリアの優しい声が、私の心をザクザクと突き刺していく。私は人の犠牲の元に生きていることを、そして、” たった ” 皇族系列の血筋を引いているだけで、自分の命は守られているのだと必要以上で責めてくるのだ。

” あぐいつぴな様〜！痛いよ〜！”

” アアア！アキラリア！”

” おねーたん！熱いよ〜！”

” やめてえ！！”

プルートルは何度も何度も、二輪馬車であるビガに引きずられるアキラリアの姿を見せたかと思うと、今度は火葬で苦しみ悶えるアキラリアの姿を繰り返し見せる。私は思いつきり泣いた。今生きているお母様の名前を何度も何度も叫んで、死の淵へ私を連れ去ろうとするプルートルから救って欲しくて。

「アグリッピナ！！！！？」

「お母様！！！」

恥も外聞もない。

私は怯えたまま、お母様の腕の中で大泣きした。今は悪夢から覚めているのかもしれないが、瞼の裏に蔓延る闇から、冥界の主プルートルは囁いてくるのだ。

” アグリッピナよ…。いずれお前が死を望む時、予は死の淵への架

け橋となって助けてやるう…。”

私も一步間違えられれば、アクイリアと同じようにローマにある下水道のクロアカ・マキシモの生活を余儀なくされていたかもしれない。私は凍える身体を晒しながら、ひたすら怯えながらお母様にしがみつき震えていた。

続く

第十一章「追憶」第二百五話

決まって高熱を出す時、私は二つの悪夢を見る。一つは冥界の主ブルートーによる死の淵への誘い、そしてもう一つは自分の歩いている道が、後ろから地割れをして追い詰められていく悪夢。どちらも私はかなりうなされ、大体が大泣きして目覚めていた。

「ドルシツラ。しばらくアグリツピナの看護をしてあげて。」

「はい、お母様。」

「熱が下がったらきつと気分も良くなるでしょう。私はネルウア様の侍医を呼んでくるから。」

「お気を付けて。」

「全く、アグリツピナも大人ぶっているけどまだまだ子供ね。しっかりしているのはやっぱり貴女の方だね、ドルシツラ。本当に頼り甲斐があるもの……。」

しっかりと寝室には聞こえていた。

でも、当然と言えばそうかも。あれ程偉そうに言っておきながら、高熱を出して悪夢を見た途端に母へ救いを求めるなんて。悔しいけど、まだまだ子供なんだ。

「姉さん？大丈夫？」

「……。」

「熱はどう？」

「……。」

さらに妹のドルシツラに心配される事が、もっともっと悔しかった。ドルシツラには、私には持っていない古典的だけど、お淑やかさが備わっているから。どうして同じ家族で姉妹なのに、こつも性格が

違うんだろっ？リウィツラ叔母様の双子ゲルマとティベリも違うんだらうか？

「ねえ、姉さん。機嫌が悪いのは、本当は疲れてたからじゃない？」

「え？」

「だって、いつもお母様に片意地張ってるし、ずっと黙ってるし。」

「黙ってる？あたしが？」

「うん、姉さんて結構無口だよ。自分が話したい時だけは洪水みただけ。」

びっくりした。

妹から見て私はそんな風に見られているなんて。

「お母様に話せないことがあるなら、私には話してよ。代わりにはなれないけれど…。」

「そういうのが生意気なんだよ、ドルシツラ。」

「え？」

「あんたがお母様の代わりになれると思うの？大体、あんたまだまだ7歳じゃない。」

「そうだけど、姉さんとは一歳しか変わらないじゃない。」

「だから尚更って言うてんの。」

「私は姉さんと仲良くなりたいたいだけ。そもそも、どうしてお母様と仲が悪くなってしまったの？」

「それは…！」

見つからない。

見つけれないんじゃない、見つけたくないだけ。私はドルスス兄さんみたいに、はつきりとした理由があって反りが合わないってわけじゃない。

「ふう、まあいいわ。」

「…。」

「私が駄目なら、きっとこの人なら話ができるんでしょね。」

するとドルシツラが寝室の扉を開けて、廊下にいる誰かを中へ入れようとしている。けれど、なかなか入ってこようとはしない。痺れをきらしたドルシツラは、その人の腕を掴んで無理矢理中へ連れてきた。

「ジュリア！！！？」

「うううあああああああ、アグリツピナ様——————！！」

たとえジュリアの父セイヤヌスが、母ウイプサニアの政敵であろうとも、ドルスツス叔父様を毒殺する計画の立案者であったとしても、憎むべき対象はセイヤヌスのみであり、その血を引いてたとしても、ジュリアは私の愛すべき親友なのだ。そして、この時初めてジュリアに怒られた。

「もう！アグリツピナ様のバカバカ！三日間も寝込んでなんて！！」

「ええ？！三日も？！」

「そうよ、姉さん。」

びっくり。

だからさすがにお母様も心配して、ネルウア様の侍医を呼びに行かれたんだ。

「アントニア様から、熱が下がったら大母后リウエア様の所へお伺いするようにつて伝言がありましたよ。」

「ええ？！大母后リウエア様の所へ？！」

私はとっても嬉しくなった。
そして、後々の私の生き方に多大な影響を与える事を、大母后リウ
イア様から授かるのであった。

続く

第十一章「追憶」第二百六話

たしかに私と母ウィプサニアは反りが合わない関係だった。考え方も見方も行動も言動も、母のように大々的だったりあからさまに見せつけるようなやり方は嫌いだった。でも、それでもゲルマニクスお父様を愛されているからこそその行動である事は一応に理解はしていた。ドルスツス叔父様とのあの一件が起きるまでは…。

なぜリウィツラ叔母様が、自分の愛すべき夫であるドルスツス叔父様を毒殺されたのか？誰もがセイヤヌスとの乱れた性生活からよるものだと口々にするが、事実は少しばかり違う。母が流刑され亡くなった後に、私が皇后になってウエスタの巫女の館に納められてた彼女の遺書と、ドルスツス叔父様が亡くなった後に、クラウディウス叔父様から聞いた話から、二人に何があったのかを語ることにしよう。

「どうしてですか？！」

「お願いですからドルスツス様、ご勘弁いただけませんかでしょうか？」

「ちょっとだけでいいんだ。自分の愚かな心を清めたいんだ。」

「それならば他の神殿へ向かってくださいまし。ここはあくまでも結婚した男女が二人でやって来る所。男性一人だけで入れる場所はありません。」

「だから必ずリウィツラは後で連れてくるから！頼む！」

「お引き取りくださいまし。」

神官がピシヤリと言い放つと、ドルスツス叔父様は何かをする術を失い、ただ悔しくて齒ぎしりをして立ちすくむだけしかなかった。

ここは「女神ヴィリプラカ」の神殿。喧嘩した夫婦の調停の場でもあるが、この神殿を利用する者は原則として、夫婦で男女が互いを伴っていないといけない。

「くそ！」

「あら？ドルスツス様？」

「うん？」

「やっぱり！ドルスツス様だわ。」

「おおお！ウイプサニアちゃんじゃないか！」

「どうされたんです？」

「いや、何、恥ずかしい話、家内と夫婦喧嘩をしてしまったね、ヴィリプラカの神殿に入ろうとしたんだけど断れたんだよ。」

「まあ？！どうしてですか？！」

「夫婦でなければ清めることや告解は無理だと言われてね。この有様だよ。」

「リウィツラさんは？」

「ダメなんだ。ヘソを曲げて全く来る気配なし。まあ、当然だよね？僕が彼女を殴ってしまったのだから。」

バツの悪そうなドルスツス叔父様に対し、母ウイプサニアはまるで鼻で笑うかのように答える。

「そうかしら？夫に殴られたくらいでヘソを曲げてスネるなんて大気ないわ。私だってゲルマニクスから殴られた事ありましたもの。」

「え？！あのゲルマニクスが？！」

「ええ。フフフ、でもローマ人男性が女性に手をあげる時といえば、よっぽどのがない限りないでしょ？」

「あははは…。」

二人はしばらくの間、はにかんだ表情で見つめ合い、お互いを尊重していた。

「そうだ！ドルスツス様、私がリウィツラさんの代わりに女神ヴェリプラカの神殿にお供しましょうか？」

「ええ?!」

「ちょうどドルスツス様に殴られたのだし、顔をパルラで隠せば神官だって無理強いして私が誰かまで確認されないでしょうに。」

「そ、そんなこと、いいのだろうか？」

「大丈夫。ちょうど私がゲルマニクスに殴られた時には女神ヴェリプラカの神殿には行きませんでしたし、ゲルマニクスの名前を出さずに告解すれば、神官からは辻褃の合う話に聞こえるでしょう。」

「でもね、ウィプサニアちゃん。僕は一応これでも女神ヴェリプラカにはしっかりと信仰している身なんだよ。女神に対してはどうすれば？」

「ちゃんと心の中で互いにお詫びして、互いに相手を持ってこれなかったけれど、告解は本物であればいいのですから。ローマの神々は、エルサレムの神よりも寛容的でしょうし。」

「でも、しかし…。」

「もう！いっつもドルサーは昔から優柔不断なんだから。だからアギーはゲルマと結婚したのですよ!」

「?!」

ドルサー、アギー、ゲルマとは、ドルスツス叔父様、母ウィプサニア、そしてゲルマニクスお父様達の幼き頃のあだ名。三人はいっつも仲良しで、それぞれの家族が親戚同士で集まった時に共に遊んでいたのだ。

「ドルサーにゲルマ、そしてアギーか。懐かしいな…。あの頃は、ちょうど今のアグリッピナちゃんやドルススくんくらいだったかな

？」

「ええ。本当にあの子達位の年齢でしたね。本当にアウグストウス様に可愛がられて。」

「あははは、そのわりにアウグストウス様から心配されていたのを覚えていないでしょう？」

「ええ?!アウグストウス様から?!」

「本当に木登りが好きでお転婆だったから、いつつアウグストウス様は肝を冷やしてて。自分の孫娘が危なっかしいって。」

「ええ?!そうでしたっけ?!」

「ああ。ゲルマと一緒に争ってもいつも一番はアギーだったからな。」

二人の笑顔に、懐かしさの花々達が再び咲き始めようとしていた。

続く

第十一章「追憶」第二百七話

幼馴染の三人はどんなだったのだろうか？今ではそれらを知る術はない。でも、私達がそうであったように、父も母も、そしてドルスツス叔父様も、互いをドルサー、アギー、ゲルマという愛称で呼び合っていたのだから、きつときつと仲が良かったんだと思う。

「そういえば、ゲルマは僕らと違って一個上だったから、何かと威張ってたな。」

「そうそう、なのにドルサーはまるでゲルマを自分のお兄ちゃんのように、いっつもニコニコついて来て。」

「あははは、もう、30年くらい前の話だよ。」

「そうね。」

母の遺書によると、あえてこの日は政治の話をしなかったという。二人は辺りをゆっくり歩きながら、時には串焼きを頬張ったり、ぶどう酒を飲んだり、くつろぎながら終始笑顔が絶えなかったそうだ。

「うわー！見て〜！」

「あはは、これは可愛いな。」

「ドルサー。あたし、一つ欲しい。」

「ああいいさ！これ、一つくださいな。」

「あいよ！」

互いは独身だった頃を思い出すように、自分達が最も幸せだった頃を重ね合わせていた。母は幼い女の子のようにドルスツス叔父様のそばではしゃぎ、叔父様もそれが当たり前のように扱い、二人の想いは本当に混じりっ気の無い純粹さの溢れていた。

「ねえーねえー、神殿の中へ勝手に入っちゃいましょうか？」

「ええ?!」

「大丈夫だって!」

「そうじゃなくて、むしろ。」

「んもう!ドルサーは昔っから頭硬いんだから!臨機応変にね?」

すると外衣の帕ラをスルスルと頭に被せ、內衣のストラの丈を少しだけ短く幕ってはサンダルのソレラをポイポイと抜いで、いきなり裸足で女神ヴィリプラカの神殿へ駆け込んでしまった。

「ったく!アギーは…。」

言葉は面倒くさそうだけど、どこか表情は穏やかで嬉しそうなドルスツス叔父様。眉毛を八の字にして微笑みながら後へ続いた。

「いいでしょ!?ちょっと邪魔しないで!」

「駄目です、規則ですから!」

「冗談じゃありませんわ!今すぐに告解調停の場へ。」

「どこぞの裕福なご婦人だが存じ上げませぬが、ここは女神ヴィリプラカの神殿でございます!故に、どうかお一人では無く相手方もお連れいただきませぬと、調停の場へは…。」

「その者は、私の連れだ!」

「ドルスツス様?!」

「神官、先ほどは無礼は申し訳ない。ようやく連れの承諾を得て呼ぶことができた。」

「では、こちらはリウィツラ様で?」

神官は外衣の帕ラで頭からすっぽり被った母の顔を覗こうとするが、母はさらに深く頭をさされて、嫌がるように神官から顔を逸らした。

「察してやれ、連れは頬を亭主に拳で殴られている。そんな腫れた顔を見られたくないのだ。」

「はあ…。」

さらに神官が覗き込もうとすると、忘れてたように母は右手で右の頬を抑える。

「はて？ドルスツス様は左利きでしたらどうか？」

慌てて左手を左頬に抑える母。その一連の行動に疑いの眼差しを向ける神官であったが、ドルスツスの陽気な性格がその場を上手くかわされた。

「ひゃっ!!！」

「全く、女というものは頬も尻も柔らかいというのに、どうして喧嘩すると頭が硬くなるのだろうか？なあ神官？」

「ははは、そのようですね。」

母のお尻をペロンつと触つてごまかしてみせるドルスツス叔父様は、びっくりして驚いてる母の肩に手を添えて、ここは任せてとウィンクして見せる。

「神官、悪いがしばらくの間、外に出てくれないか？」

「と、申しますと？」

「どうやら事は我が祖母の話までに発展しそうなんだ。」

「何と?!大母后リウィア様までですか?!」

「ああ、神官や他のもの達が聞いてはマズイ話も出てくるだろう。君らの榮譽の為に、しばらく表でも散歩してくれないか？」

「そのようなご事情なら分かりました。」

こうして、ドルスツス叔父様と母ウィプサニアは二人だけで、女神
ヴェリプラカの前である告白をしてしまうのであった。

続く

第十一章「追憶」第二百八話

夫婦喧嘩しているわりには随分とドルスツス様の夫婦は仲が良いこと…。

などと、つくづく神官は思っていたらうに。母ウイプサニアは幼き乙女の気分で、ちょっかいを出すドルスツス様に笑を堪えられずにはしゃいでいた。こんな母の姿を見た時に、私の中では不思議な気分になった。いつも愛に満たされてる優しかった母とも、父を喪つていつも険しく厳しい母とも違っていた。まるで初恋を再び体験しようかとしているような感じだったのだろうか。

「もう！ドルサーったら！エツチなんだから。」

「ごめんごめん！でも、ああでもしないと女神ヴィリプラカの神殿の神官は信用しなかったらうに。」

「突然触ってくるんだもん、びっくりしたって。」

「あははは、やっぱりアギーのお尻は柔らかいな。ゲルマに知られたら殺されるどころじゃ済まないな。」

「そつよ！ドルサー。誰でも女が貴方の誘惑に引っ掛かると思ったら大間違いですよーだ！」

むにゅ。

ドルスツス叔父様は突然母の頬を軽く両手で摘まんでからかった。

「お尻だけじゃない、ほっぺもちゃんと柔らかい。」

「もう！ドルサー！」

誰だって年齢を重ねれば安らぎたい時があるし、泣きたい時だってある。それと同じように、笑って楽しく過ごしたい時だってある。

特に幼い頃の自分を知っている者同士なら、他人には理解されないだろう、緩やかな川だつて流れていることだつてある。二人はただ、そんな川で朗らかにしゃぎたかっただけかもしれない。

「さあさあ、先ずはアギーから。」

「えー!? あたしから告解? やだ、ドルサーやつて。」

「僕からじゃ意味ないよ。それに”殴られた方”が先でしょう? 普通。」

「ふう〜。そういう時だけ口は上手いのね?」

「あははは、まあ、一応政治家だからね。」

でも、母は嬉しかったみたい。

ゲルマニクスお父様が亡くなつてから、妻や母親としての苦しみではなく、一人の女としての純粹な悩みを聞いてくれる誰かが欲しかったから。頬を膨らませ大きく深呼吸すると、腰に手をつけて大きな声で女神ヴィリプラカへ向かつて吠えだした。

「やい! 大体あたしが何であんたなんか殴られなければいけないの?! 女は引つ込んでろつて事?! 何でも自分の思い通りにいくと思つて! あたし達女だつて、時には子ども達の母親の役目だけで見られるんじゃない、一人の女として見られたい事だつてあるんだから!」

ドルスツス叔父様はそれを聞きながらバツが悪そうだった。まるでリウィツラ叔母様の言い分を、母ウィプサニアが同じ口調で代弁をしているようだったからだ。元々、ドルスツス叔父様は女性には優しい方で、決して手をあげる事は皆無だったのだから。自分の信念に反した行動には、何処かで責められたい思いが募っていた。

「あんたはね! とつても女性に優し過ぎて、いっつもいっつも私は

ドギマギしていたんだから。それなのに肝心な私には優柔不断で避けてばかりで、お花を持ってきても手に触れないし、目を覗いても見てくれないし、いっつも自分の事は後でゲルマニクスをお兄ちゃんのように思ってた後ろをくつついて歩いて。」

?!

ドルスツス叔父様は、母ウイプサニアがいつの間にか自分の事を言っていることに気が付いた。そう、幼い頃にゲルマニクスお父様がいたから、ほのかに想いを寄せていた母ウイプサニアを諦めていたのだった。

「例え親が決めようと、例え血脈が続かれようとも、あんたって人はいつまでもゲルマニクスの影に隠れて身を引くような人物じゃないでしょ?! あたし、知ってるんだから。本当はあんたがあたしのことを好きだったのを!」

「なっ?!」

「シーっ! 旦那は妻の言い分を最後まで聞くのが原則でしょう?」

さつき自分のお尻を触ったドルスツス叔父様へ、仕返しと言わんばかりに腰を軽くつねってくすぐる母。

「だからね、女神ウイプリプラカ様。そんな人一倍に他人想いで陽気な性格なくせに、自分の事になるとからっきしな”旦那”の話を聞いてくださいな。」

「アギー…。」

もう、幼い頃みたいに目を逸らさないで。そんな想いが母に淡い恋心を募らせる。

「だってうちの”旦那”は…。」

そして、ドルスツス叔父様もまた、そんな想いに心を響き渡り囁く。

「僕の”妻”が、同じであるように…。」

優しく自分の掌に少女ウイプサニアの指先を乗せ、瞳を麗せながら言葉を添える。

「互いを想いあってるのですから…。」

そこには男女の生々しい欲情や、氏族としての思惑や野望などが入り込む隙間などない。ただ、二人は本当に自分達の幼い頃を取り戻すように、互いの心を綺麗に洗い流したかっただけなんだと思う。

「お、お母様?!」

「ネロ?!」

それが、夫婦喧嘩仲裁の女神ウイリプラカの神殿でなければ、何も問題は無かったのかもしれない。

続く

第十一章「追憶」第二百九話

雲を掴むような話も、雨が降ってしまえばどうなるんだろうか？

一方、愛するドルスツス叔父様から拳で殴られたリウィツラ叔母様も、心のすれ違いをしたまま追憶の日々を送るだけだった。強引だったとはいえ、セイヤヌスに自分を強姦する隙を与えてしまい、ズルズルと不貞の関係を続けてしまい、と同時に、夫が兄ゲルマニクスの寡婦ウイプサニアに奪われてしまうのではないかという不安に苛まれていた。

「ああ、ゲルマニクス兄さん。どうして死んでしまったの？どうしてあんな牝犬ウイプサニアなんかと結婚など！」

エトルリア出身の職人が作った緑色のガラスコップを見つめると、忌々しい気持ちたちが沸騰するように湧いてくる。何度壁に投げつけたことか。だが、その割ると音とも、自分の旦那であるドルスツス叔父様に殴られた記憶が蘇る。

「ああ、貴方。昔の貴方はもつと陽気な性格だったではありませんか。決して強気な女性にも手をあげることなく、死の淵へ誘われていた私を、何も言わずそつと抱きしめては救ってくださいませんでした。ありませんか。」

アウグストウス様の実娘と右腕アグリツパ様の息子であった第一の夫ガイウス・カエサル様が亡くなられた時、リウィツラ叔母様は絶望の闇をさまよっていた。政略結婚だったとはいえ、年端のいかないうい12歳での結婚は何かと情に流されやすい。事実私もそうだったから。”ローマの女性は二度目で愛を知る”とは、実得的を得た言

葉だと思つが、誰が言ったのかは忘れたけど。

「私は忘れてないの。例え過ちを繰り返していようとも！ドルスツス、貴方への愛は今でも変わらないの。」

だからこそリウィツラ叔母様にとって寡婦となつた後にドルスツス叔父様と出会えた事は、まるで太陽で世界を照らすような鮮やかさだつたのだ。

リウィツラ叔母様が遺した遺書には、毎晩、肌と不貞を重ねあつたセイヤヌスの事よりも、自らの手で死の淵まで送つたはずのドルスツス叔父様への謝罪と愛情ばかりが綴られていた。叔父様に毒を盛るまでの毎日は、美しかった二人の思い出ばかりを追憶していたという…。

「リウィツラちゃん？元気かい？」

「あ、ドルスツス様…。」

「曇つた顔は君には似合わないよ。どうだろう？一緒にインストラへ遊びに行かないか？」

「結構です。」

典型的なアントニウスに憧れたローマ人。それがリウィツラ叔母様のドルスツス叔父様に対する第一印象だった。チャラくて女つたらしで遊び人。スマートな兄ゲルマニクスとなぜ仲がいいのか分からない。

「ドルスツス様をお相手する女はいくらでもいらつしやるのでは？私は夫を亡くした寡婦。故に喪に服す必要があるのです。」

「リウィツラちゃん…。」

「あのー失礼ですが、女性にも気安くちゃんを付けて呼ばないでく

ださる？」

「あ、いや。」

「一体どんなおつもりなんですか？」

「あ、別にこれといって意味はないんだけど……。」

「ローマの全ての女性がドルスツス様の思い通りになるなんて、少しでも思わないことに越したことはないでしょうね。何せ身持ちの軽い女性ばかりではないのですから！」

リウィツラ叔母様の言葉は強烈だったが、ドルスツス様は苦笑いしながら、自分の後頭部をポリポリと搔いてるのがやっと。出会いでのリウィツラ叔母様の凍り付いた扉を、ドルスツス叔父様の陽気な性格で開くことにはまだまだ時間が掛かる時期だった。

「また来るよ、リウィツラちゃん。」

もう！

何て失礼な人なの！？嫌だと言っていている事を平気で言うなんて……。こういう勘違いした軽薄そうな音が生き残ってしまうから、私の夫ガイウス・カエサルはアルメニアで負傷したままこの世を志し半ばで去ってしまうのよ！

「いつか、君の笑顔を見るためにね。」

それは意外な所で実現されることになる。

続く

第十一章「追憶」第二百十話

「リウイツラちゃん。今日は君のために花束を摘んできたよ。」

「……」

「何か欲しいものはないかい？」

「……」

「今度、海でも行かないか？」

「いい加減にしてください！」

「リウイツラちゃん……」

「以前にも言いましたが、私は喪している身です。それに寡婦です。どうかお気遣いなさらないように！」

「そうはいつでも一日中部屋の中で籠ってるのも良くないよ。」

「私は好きで部屋に籠ってるのです。貴方みたいにサンサンと太陽が輝く元で、女性たちをはべらかして遊んでいるのとは違うの！」

「パタン！」と寝室の扉を締めるリウイツラ叔母様は、ポンポンと怒ってベットに寝た。廊下ではドルスツス叔父様はふううとため息をついている。

「ごめんなさいね、ドルスツス様。」

「いいえ、こちらこそ。」

祖母のアントニア様が腰を低く、そして丁寧に自分の娘の傲慢な態度を詫びている。

「全くあの子ったら誰に似たのかしら？融通が効かないところが多くて。何というか、頭が硬いというか。」

「あはは……」

「でも、あんな態度をとっていてもドルスツス様にはきつと感謝し

「てるでしょうから。」

「これ、あの良かったら渡してもらえますか？」

「あら葡萄酒？あの子の大好物なのよ。」

「そうでしたか！それは良かった。」

すると祖母アントニアは突然扉越しに叱り始める。

「こら！リウイツラ！ドルスツス様があんたの大好物な葡萄酒持ってきてくれたのよ！顔出して感謝の一言でも言いなさい！」

「うっせーな！ババア！」

「ば、ババアとは何ですか？！実の母親に向かって！」

アントニア様へ悪態をつくりウイツラ叔母様は、昔から相変わらずかわって なかつたらしい。

「あはは、アントニア叔母様。そんなにお気遣いなさらずに。今日の所は退散します。」

「そう？」

ドルスツス叔父様の長所は気長な性格な所。見た目や話し方で軽く見られがちだけど、本当はとっても粘って我慢強い。そうでなければ、イリリクムに派遣されて、あのマロボドウス率いるスエビ族とアルミニウス率いるケルスス族との間に入って、対立調停のためにイリリクムの任務で二年間も辛抱強く待ち、ローマへマロボドウスを亡命に導く成果を挙げるなど不可能。ドルスツス叔父様は別名”泣き落とし”としての異名を持つほど。リウイツラ叔母様の心の壁を開くのに、何と四年間、丁寧に丁寧に積み重ねていった。

「あれ？母さん、今日はドルスツス来ないの？」

寢室から一応ヒョイッと顔を出したまま、辺りをキョロキョロしながら探している。

「何ですか？リウイツラ、寝巻きのままで。」

「そんな事よりも！ドルスツスは？」

「全くそんなに会いたかつたら、自分から会いに行けばいいでしょう？」

「だって…。」

「もう！いい加減あなたの部屋も掃除したいから、中庭に行きなさい！」

リウイツラ叔母様は寝巻きのまま、中庭に出て、奴隷達が寢室の掃除を終えるのを待っていた。どうして今日は来てくれないのかしら？この四年間、戦以外の時にはずっと毎日顔を見せてくれたのに。そんなつまらない顔をしているリウイツラ叔母様の所へ、後ろからある人物が近寄ってきた。

「ああ！ドルスツス?!」

「はあ？誰がドルスツスなんだ？リウイツラ。」

「なーんだ…。ゲルマニクス兄さんか。」

「なーんだ、はないだろう？」

「別に。」

「ははーん、リウイツラ。お前、さてはドルスツスが好きなんだろっ？」

「な、何言っちゃってるのよ!!」

「あいつ、結構マメな性格だし。四年間ずっと通い詰めくれたから惚れたんだな？」

「惚れるわけないでしょう！あんな女つたらし。」

「そうか？あいつは意外に凜々しいぞ。確かピソの付き添いでローマに帰ってきてるから、見てきたらどうだ？」

男性が意識しないで見せる大いなるギャップには、いつでも乙女心をくすぐるものがある。陽気な性格からは想像し難いドルスツス叔父様の凛々しいお姿は、まさにローマ国家を象徴する鷲の爪の如くリウィツラ叔母様の心を掴んだのであった。

続く

第十一章「追憶」第二百一十一話

「ドルスツス様、とつても格好良かったです。」

「そう？本当に？」

「ええ。私はあんなにマジかに見たのも始めてだったし、何よりドルスツス様が輝いてらっしゃった。」

「嬉しいな、リウィツラちゃん。ありがとう！」

ドルスツス叔父様にとってピソは戦術における師弟関係であり、戦いは全てピソから学んでらした。リウィツラ叔母様が初めてドルスツス叔父様の凛々しいお姿を見たのは、ピソが属州総督であるプロコンスルとしてアフリカを統治するため、共に公衆へ出た時の頃だった。

「私の方こそありがとうございます。むしろ今まで大変失礼な言葉ばかりを言ってしまった。」

「あはは、いいよ。気にしないで！剣を向けられたわけではないのだから。それに、僕は貴女の事が大好きで勝手に来ていたのだからね。」

「へ？」

「うん？」

「今、何と？」

「いや、勝手に来ていたのだからねっと。」

「あ！その前！」

「あはは、貴女の事が大好きで？」

「え？本当に？」

「はい。」

その時のリウィツラ叔母様は、まるで少女のように顔を赤らめてい

たという。その言葉だけで幸せを感じ、その響きだけで心を震わせ、その意味だけで自分はこの人の妻になるために生まれてきたのだと。

「あたしも、ドルスツス様。」

「え？」

「もう！二度も言わせないで。」

「いいや、もう一回聞きたいんだ、リウィツラ。」

「ドルスツス…。」

「耳元で囁いて欲しい。これからも、毎日毎晩。そしたらリウィツラ、君は僕の両腕の中で思いつきり泣いていいんだ。」

「ドルスツスですよ…。」

「ああ。もう、僕は二人つきりなのだから…。」

その後のお二人の結婚はとても早かった。事実上は、四年間の交際を経ているのだから充分なのかもしれないけれど。リウィツラ叔母様は毎日毎晩ドルスツス叔父様のために愛を囁き、そしてドルスツス叔父様の腕の中で幸せの涙を流し続けていった。だが、その涙を止めたのは、リウィツラ叔母様を半ば強引に犯し、母ウィプサニアへの憎悪を煽り、そしてついには対抗馬であるドルスツス叔父様を亡き者にしようとするエトルリア出身のセイヤヌス。

「リウィツラ、最近酒の量が多いのではないか？」

「セイヤヌス、あんたはいつからあたしの旦那気取りになったんだ。」

「お前の私生活にはとやかく言うつもりはない。だが、飲み過ぎは身体に毒だぞ。」

「毒ならとつくにあんたと付き合ってたって。それよりも、そのくだらないお喋りな口を塞いでおくれ。」

セイヤヌスはキツッと睨んだが、リウィツラ叔母様は右手の親指を

カリカリと噛んだまま、曲げた両足を抱えてベッドの上から壁の一点を眺めていた。

「クッ…。」

セイヤヌスとはこれ以上関係を続けたくないのに、なぜか彼が訪れると身体は火照って止まらなくなってしまふ。だからリウィツラ叔母様はセイヤヌスとの不義を終えた後、ようやく心の中にしか居なくなつたドルスツスの安らぎに戻れるのだ。

「貴方、貴方、どこにいるの？」

誰も応えない壁に向かって、リウィツラ叔母様は何度も何度もドルスツス叔父様を追い求める。そしてご自分の両腕で必死に自分を抱きしめ、存在の耐えられない軽さから逃避する。

「そう、私達は二人つきりなのですから…。」

微笑んだ叔母様の頬に、大量の涙が大粒となつて流れ落ちる。寂しくて侘しくて心に空いた穴は誰にも埋められないまま、リウィツラ叔母様はいつまでも過去の記憶で迷子のままだった。

続く

第十一章「追憶」第二百十二話

リウィツラ叔母様がご自分の心を病んでいた頃、私も高熱を出しては心を病んでいた。結局体調は元に戻ったのだが、夢に冥界の主を司るプルートルーが現れた以上、パラティヌス丘にある聖堂や神殿で、神々に呪いを解いてもらう必要があった。

「アグリツピナ様〜！」

「フェリッククス！」

「へへーん、なんか元気が無いって聞いてさ。来ちゃったよ。」

「お久しぶりです、アグリツピナ様。」

「パッラス…久しぶり、ね？」

「はい。」

今日は大母后リウィア様の所へ伺う日。私の親友ジュリアと、祖母アントニアの奴隷達パッラスと弟のフェリッククスが迎えに来てくれた。さすがの母も、いつもの反抗的な私でないと調子が狂ってしまったらしく、いつまでも冥界の神に呪われてもらっては困ると考えたのか？敵対している大母后リウィア様の所へ行く事を承諾してくれた。神々へ信心深くない私として、呪いを解いてもらう名目で大母后リウィア様に会えるのだから、こんなに幸運な事はないと心の奥ではしつかり喜んでいた。

「パッラス兄ちゃんはすつごく来るの照れてたんだよ。」

「フェリッククス！バカ！余計な事を言うなよ。」

「だって本当の事じゃん。あ！兄ちゃんの顔、また真っ赤になってる〜！」

「う、うるさい〜！」

もう、フェリックスだったら。

去年のサートウルナー祭でパッラスとキスした事、ガツンと思
い出したじゃないの。あれ以来からパッラスとはちゃんと話してな
かったんだよね。引越しの時もお互いに避けてたし。もう…。

「あ、パッラス…。あたしの荷物持ってきてくれる？」

「あ、はい！」

スタコラサツサと中に入って行こうとしたけど、私はすぐに制止し
た。

「どこに荷物があるのか分かってるの?!」

「あ！いっけねえ。」

「もう。」

「どこにあるんですか？アグリツピナ様。」

「入って左の奥があたしの寝室だから。」

とつかいつの間私の寝室になっている。コツケイウス家のネル
ウア様から母ウィプサニアへ与えられたヴィツラは本当に大きく長
細い建築。

「ジュリア、ありがとうね。」

「いいえ、私はアグリツピナ様の為なら何でもしてあげたいのです。
だって、心配だし。」

「もう、すぐに泣くんだから。」

おかつぱのサラサラした髪を風に靡かせながら、ジュリアは何度も
頷いて私を元気付けてくれた。本当にジュリアって可愛いな。

「ペロは元気？」

「ええ。最近はアグリッピナ様がいらっしやらないので淋しいのか、アントニア様に懐いていますよ。」

「ええ?!あのペロが?!珍しい。」

「アントニア様もいつも『普段はアグリッピナに懐いていたくせに…』って微笑みながらペロから顔を舐められてましたよ。」

「帰りに少しでも会ってみようかな?」

「ええ、その方がきつとペロも喜ぶでしょうね。」

神々に呪いを解いてもらう日数は、早くて三日もあればあつという間に終わる。そろそろ出かけるときになって、なぜかドルスス兄さんを筆頭に次妹のドルシツラ、末っ子のリウイツラ、そしていつも喧嘩しているカリグラ兄さんまでもが見送りに来てくれた。

「なあーに?みんなぞろぞろ揃って見送りにきてくれたの?」

「いや、お前一人で大丈夫か?」

「大丈夫よ、ドルスス兄さん。」

末っ子のリウイツラはドルスス兄さんにしがみつきながら、心配そうにこちらを眺めている。

「リウイツラ、おいで。」

「アグリッピナお姉ちゃん!」

ワーッと駆け出しては私に抱きついて心配がるリウイツラは、今にも泣きそうな瞳でこちらを見上げてくる。

「バーカ!大丈夫だって。」

「でも、でも…。」

こいつに一番心配掛けちゃったのは事実。私は軽く背中をポンポン

と二回叩いて安心させた。するとドルシツラ入れ替わりにやって来て面倒見のいい母親を演じる。

「毎朝ちゃんと顔洗ってね。姉さんは目が大きいから目ヤニがいっぱい溜まるとだらしがないんだから。」

「ドルシツラ、人を野良猫みたいに扱っなっちゅーの。」

「ほら、言葉遣い悪い！もう、普段からお淑やかな言葉遣いが出来てないと、いざっていう時に行儀の悪さが出ちゃうんだから。」

「うるへ〜！目上への礼節は常に心得てるから大丈夫よ。」

最後にカリグラ兄さん。

いつもみたいに憎たらしい言葉でも吐くのかと思つたら、意外や意外、背筋をピンっと伸ばして優雅な足取りでやってくる。人差し指をスラッと空高く伸ばすと、真面目な顔つきで突然声を高らかに上げた。

「我が妹ユリア・アグリツピナに、主神ユピテルの御加護あれ！」

一同はその挙動に慄いた。

だが、私は身を震わせて末兄カリグラの存在感を見せつけられた気がした。

「お前が元気でなければ、俺は張り合いがない。いいな？ちゃんと呪いを解いてもらうんだぞ。」

そしてこの時ばかりは、なぜ三男であるにも関わらず長兄ネロ兄さんや、次兄ドルス兄さんを差し置いて、幼い頃から『カリグラ』とローマ兵達から呼ばれて可愛がられていたのかを、私は何だか妙に納得してしまった。

続
く

第十一章「追憶」第二百十三話

「しっかし、ガイウス様にはびっくりしたな。」

「私も、まさかお兄様があんな事するなんて。」

「ガイウス様つて、戦場でもあんな風にやっつてたのかな?」

「さあ。ただ、ギリシャの文化や美術や芸術が好きなのは確か。」

「発音がとても前より上手くなってたよ。」

「本当に?」

フェリックスの偉そうな態度は相変わらずだった。奴隷のくせに自然体でタメ口なところや、両手を頭の後頭部に乘せて喋り続けるところも。そういった一つ一つが、私を何だが落ち着かせてくれる。

「ところで、最近のアントニア様は元気なの?」

「暫くは寂しいって落ち込んでいたよ。アグリッピナ様とかがいなくなつて僕は仕事の量が減つたと思つたけどさ、やっぱりお金になると計算が早いギャンブル相棒がいなくてさ、へへへへ、つまらないよ。」

「つたく、フェリックスつたら。」

サイコロ賭博か。

あれから一年近く経つんだ。早いな。私の初恋アラトス王子は元気にされているだろうか?あの頃のあたしつて本当に野暮つた感じだった。ギリシャ語もちゃんと喋れなくて格好悪かつたし。

「ネエ?フェリックス。私もちゃんとギリシャ語喋れるようになれるかな?」

「あはは、アラトス王子とまた会いたいからでしょう?」

「ち、違うもん!」

「真っ赤になつてら〜。アグリッピナ様ってすつごく分かりやすい性格だよな?」

「違うの!もう!私はただ、ガイウス兄さんみたいに喋りたいだけ。」

「うっそだ〜。だってローマの女の方はギリシヤ語なんか綺麗に発音が出来なくなつて生きてけるじゃん。別に皇后様とかになるわけじゃないんだし。」

「それはそうだけど、これでも大母后リウイア様からいっぱい教えてもらつてるんだから。」

まさか自分が皇后になつて、さらに母后になり、ローマの国母であるアウグスタに元老院から指名されるとは、この時はこれっぽっちも予想していなかった。大母后リウイア様以外は…。

「おい、フェリックス、馴れ馴れしいのもその位にしておけよ。アグリッピナ様は寛大なお方だから、お前の偉そうな態度も言動も許されているんだからな。」

「あら?パツラス。私は一度も許したことないわよ。」

「そ、そうなんですか?」

「えええ?!僕は許されてるのかと思つてた。」

「バーカじゃない?どこの世界で奴隷にタメ口言われて許す主人がいるのよ。」

「あわわわわ〜、ごめんなさい、アグリッピナ様。」

フェリックスは泣きそう度土下座して謝ってきた。しかし私は堪えきれずたちまち腹を抱えて大笑いした。感の良いジュリアは間髪いれずにフェリックスに種明かしをする。

「あはは、さすがのフェリックスも、アグリッピナ様流の騙しにまんまと引っかかりましたね!」

「あはは！！本当、ばつかみたいに泣きそうになって。」

「えええ？！うつそだったの？！きつたねえぞ！」

「大体あんたが調子に乗って偉そうにしてるから、たまにはお灸を据えないといけないじゃない？」

「そんなのいらぬよ！」

「だったら今から丁寧な言葉遣いに直すか？」

「そんなの無理にきまつてんじゃん。ラテン語むずかしいもん。もう！」

悔しがるフェリックスをよそに、ジュリアとパッラスと私は多いに笑った。少なくともこれが私流の奴隷の扱い。時にはからかい時には頼ったりして、自分が楽しめる時間を一緒に作る。

「さあ！キルクス・マクシムスが見えてきましたよ。」

アウエンティヌス丘とパラティヌス丘に挟まれたローマ最大級の競技場は、途轍もない大きさと存在感を醸し出していた。以前は戦車の音と歓声が空を切り裂くように轟いていたのに、現在はティベリウス川の縮小のお陰で閑古鳥が鳴く始末。私は何だか忍び込みたくなってきた。

「ねえ？ちよつと寄って行かない？」

続く

第十一章「追憶」第二百十四話

CIRCUS MAXIMVS…。

ローマ最大の競技場。

アヴェンティヌス丘とパラティヌス丘の間にあり、王政期ローマの王でエトルリア系のタルクイニウス・プリスクスの命によって建造される。その後、神君カエサルによってさらに拡大され、収容人数十五万人に及ぶ二輪戦車レースの大競技場へと発展していった。後に火事で焼けてしまったが、アウグストゥス様の時代に復旧され、二輪戦車レースはローマにおける娯楽の中心として、正にローマ市民のみならず、誰もが血気盛んに興奮する競技の代名詞となっていた。

「それにしても、何で今は静かなのよ？」

「それは、ティベリウス皇帝陛下の『引き締め』があるからですよ。」

時代は市民に『引き締め』を強要するティベリウス皇帝の治世時代。余興として莫大な資金が消費される戦車レースも、元老院金持ち連中が皇帝の政策に合わせて自粛されているとの事だった。どうにも華やかさに欠けるのは、二輪戦車レースが行なわれていないからなのかも。

「私、生まれてから一回もまだ戦車レース見たことないんだけど…。」

「それはしょうがありませんよ。」

「それじゃ、今なら忍び込めるよね？」

「え？アグリッピナ様?!」

「だ、ダメですよ！アグリツピナ様！」

パッラスの静止に耳を向けず、私はジュリアとフェリックスを引き連れて走って近付いた。まずびっくりしたのは、競技場の周りをいくつもの半月形の短いアーチが列柱廊となつてつなぎ合さり支えている事。しかも競技場の緩やかなカーブに沿って、並べられたアーチもカーブに作られてる。これには本当にびっくり。

「すごい…。」

「あれ？アグリツピナ様つてまじかに見たことなかったんだけ？」

「ドルススお兄様と一緒に、アウグストウス様の宮殿から見下ろした事はあるけど。」

「さすが皇族。」

「なによ、フェリックス。その言い方は。」

「えへへ、下からはなかったんだ。」

短いアーチで支えられた列柱廊の上には、住居のついた店舗が並んでいたらしいけど、今は誰も使っている様子は無し。

「ジュリアは見たことあるの？」

「はい。あの、お父様と幼い頃に。」

「そうなんだ…。」

すると後ろからパッラスが困った顔をして近付いてくる。

「もう、アグリツピナ様！お願いしますから、勝手な行動は謹んでください。」

「何で？」

「こちら辺は今はさほど活気も無くなって、人通りもかなり少なくなつて減りましたけど、競技場の近くは物騒な連中や如何わしい輩

がウロウロしてるから危険なんですよ。」

確かにパツラスの言うとおり。

当時からだいぶ寂れたとはいえ、競技場を囲むアーチの下には、戦車レースがあつた面影としての賭博屋や予想屋の屋台の跡が残っている。現在ではすっかりと寝ている人の居場所っぽい。さすがに住みつきようとしている浮浪者は、競技場警護兵に追い出されていた。

「こらこら！駄目だぞ子供は近づいちゃ。」

私達一行を見かけて、下っ端っぽい競技場警護兵がやって来た。

「ちよつとくらいイイじゃない。」

「駄目だ！どうせお前達は競技場に落ちてる硬貨を拾いに来たんだろ？」

「違つわよ！」

「どうせそつに決まつてる！」

私達を完全に邪魔者扱いしたうえ、フェリックスを見るなり酷い奴隷の扱いをしたので、私は両手を腰に置いて怒鳴り散らした。

「あなたねえ?! さっきから偉そつに指図するけど、あたしを誰だと思つているの?」

「はあ?!」

「私はユリア・アグリッピナ。神君カエサルの血を引くユリウス家の長女よ！」

「ええ?! まさか、あのアグリッピナ様?!」

兜を取つたその競技場護衛兵は、後にセネカと共に私の片腕となるブッルスだった。

「アグリッピナ様！これは大変失礼いたしました！」

「へ?!」

「私でございますよ、ブッルスです！」

「誰？」

「覚えてらっしゃらないのでしょうか？自分がまだ、ガリア・ナルボネンシス属州のウアシオ・ウオコンティオルムから出たばかりの時に、パラティヌス丘側で公共浴場への道程を聞きました…。」

「あああ！あの時の田舎から出てきた新人口ーマ兵ね？」

「田舎から出てきたって…。」

ブッルスは少しカチンときている。それも私が名前をしつかりと覚えてなかったからだ。

「今は軍隊の基礎を習うべく、こうやってキルクス・マキシムスの周りを警備しているわけです。」

「あら、ちようど良かった。せっかくだから私達を中へ案内して頂

戴。」

「ええ、ダメですよ！それはいくらなんでも…。」

「さっきの無礼を詫びる気はないわけ？」

「いいえ、あります…。」

こうして私達は頼もしいブッルスの警護の下、安全を約束されたキルクス・マキシムスの観光ツアーを敢行した。

続く

第十一章「追憶」第二百十五話

「それでそれで?!」

「えっと、確か七月五日から十三日まで行なわれたアポロン祭の中で、そのメイン・イベントとして戦車競技大会が開かれていたのです。」

「へえー。凄いじゃん。」

「ええ、まあ……。この位はこのローマ最大の競技場を警備する者として、あたり前というか……。」

「違うよ、別にブルスを褒めたわけではないの。」

「え?」

「えへへ、うっそ。」

私は相変わらずブルスをからかうのが好きだった。本人はいつも迷惑そうな顔をしていたけど。でも、忠勤で清廉な軍人であることは間違いなく、後に私が彼の後ろ盾になるきっかけとなったのが、この時のキルクス・マクスムス観光ツアーだったのだ。

「それにしても、ブルス。こんなに大きな建築物を一体どうやって作ってるわけ?」

「それはですね、オープス・カエメンティキウムというセメントを使っているからなんですよ。」

「何それ?」

「ローマのコンクリートの事です。」

オープス・カエメンティキウムとは、エトルリア出身の技術者によって開発されたコンクリートで、ネアポリス（後のナポリ）の北にある町プテオリの塵と呼ばれる火山灰とセメントを主成分にしたローマのコンクリートの事を指す。これを使えば、巨大な建築物でも

時が経てば経つほど強度を増していき、ついには数千年先でも長持ちするそうなの。

「フェリックス！千年先の人もきつと、この偉大なローマのコンクリートで作られた建築物に驚いているだろうね。」

「それまでこの大競技場が残っていればの話でしょ？」

「あんた男のくせに夢無いんだねえ。もっと志を高く持ちなつて。」

「

私達はようやく大競技場の入り口へ辿り着いた。もちろん関係者以外は立ち入り禁止になっている。

「アグリッピナ様、本当はダメなんですからね。」

「分かってるって。」

「自分が軍隊から処罰されたら、ちゃんと守って下さいますよね？」

「もう、心配性だなブルスは。もちろんだつて！」

強引な私のリクエストに渋々応えるブルスは、立ち入り禁止の柵を上げると、下を潜るように誘ってくれた。まるで冒険の始まり。手足についた土埃を払いながら、焦る気持ちを抑えて競技場の方へ歩いていった。

「うわー！とつても広い！」

まるでわたしの全身を飲み込むように、大きくて広くて長くて楕円を描いた広大な戦車競技場が飛び込んできた。血沸き肉躍る二輪戦車の競技が、以前はここで行われていたのかと思うと、私の体中の血液が逆流するような感覚になってくる。たまらず私は中央まで駆け出していった。

「すごいよパッラス！でつかいよフェリックス！広いよジュリアー！」
「うわーすっげー！。パッラス兄ちゃんもここから見たのは初めてでしょ？」

「ああ、フェリックス。なんて大きなんだろう。」

周囲には大人二人分の幅と深さの水掘があり、背後には三階建ての列柱廊が作られている。下階は石造座席が階段のように順々に段を連なつて上昇し、上階の二層からは木造座席となつている。ブツルスは私のそばで競技場の大きさを説明してくれて、片側だけでも二輪馬車が横に六台並んでも、まだ十分に空間があるように設計されているとのこと。

「フェリックスー！こつちおいでよー！」

「パッラス兄ちゃん．．．。アグリッピナ様つて冥界の主プルートルに呪われてたんじゃなかったの？」

「ああ、そういう話だったけど。」

「こんなところであんなにキャツキャツ騒いじゃつて。元々男つぱい人だと思つていたけど、本当に呪われていたのかな？」

「さあ。」

競技場の真ん中には数多くのオブジェとかが飾られており、ジュリアも私のそばに寄ってきて色々と眺めていた。今まで彼女は観覧席からしか見たことがなかったので、その圧倒的な迫力にただ呆然としている。特に私達三人をびっくりさせたものは、真ん中に建てられた石造柱である記念碑のオベリスク。これは曾祖父であるアウグストゥス様がエジプトの戦利品として持ってこさせたもので、オベリスクの先には球体のオブジェが刺さつてあり、これはアポロンの神をあらわしているんだとか。私は腰に片手を置いて胸を張り、

偉そうにオベリスクを指差してフェリックスに威張った。

「へへーん。この記念碑、私の曾お爺ちゃんが建てたの。」

「おおお。」

「確かに確かに。」

「そう考えるとアグリッピナ様ってすごい血統なんだよね。」

「でしょ？フェリックス。」

「それにしてもアグリッピナ様。本当にこんなに大きな記念碑のオベリスクを、エジプトからローマへ持って来られたよね。」

指で鼻をかいて威張っていると、横にいるパッラスがずっとオベリスクを眺めながら、ある老人奴隷の話をしてくれた。

続く

第十一章「追憶」第二百十六話

パッラスのしてくれた話は、私の曾祖父であるアウグストゥス様の意外な一面だった。

「昔、アウグストゥス様の記念碑であるオベリスクを移動した年配奴隷から、とつても貴重な話を聞いたことがあるんだ。」

「どんなお話し？」

「普段は奴隷がする移動作業なんかには、わざわざ皇族が顔を出さずとなんて無いのだけど、このオベリスクをエジプトから持つてくるときだけは特別だったらしい……。」

それはそれは何日も掛かる大変な作業だったのだと。だけど、このローマに最大級の記念碑オベリスクが、それもアウグストゥス様の戦利品として運ばれるのであるから、正に国家をあげての大事業となった。アウグストゥス様の命は、”とにかく、一人のケガ人を出さずに作業を行う事”だった。

「でも運悪く、アウグストゥス様が直接視察に訪れたその時に、記念碑はバランスを崩して倒れそうになったんだ。」

「うわ……。」

「多くのローマ市民が見守る中で、作業員の一人である奴隷が、危うくオベリスクの下敷きになるところだった。誰もが奴隷を見捨てて、もう一度バランスを立て直すべきだと思った。ところがアウグストゥス様は、たった一人の奴隷を救うために、みんなが力を合わせるようにと懇願されたんだ。」

「全ての人に……。」

「元老院の方々も貴族の方々も、ローマ軍団のレギオーさえも、全ての人がアウグストゥス様の言動に呆然としたらしい。」

バランスが崩れた記念碑を立て直す事ほど、大変な労力が掛かって難しいこともないらしい。ようやく記念碑のオベリスクがしっかりと建てられると、その奴隷へ周りからは嫌悪感が生まれていった。おべっか好きなある元老院は、アウグストゥス様がオベリスクを立て直させたのは、名誉あるエジプトからの戦利品を汚れた奴隷の血で穢されたくなかったからだと言った。周りもそれならばと納得していったが、アウグストゥス様は、そのおべっか好きな元老院を事もあろうに公の面前で叱責したのだ。

「『よいか！これからは私の悲願でもあった、ようやくローマ国家を頂点とした平和が訪れる。この記念碑は戦利品ではなく、世界中の平和を象徴する記念碑でなければいけない。太陽神アポロの名にかけて、例え奴隷であっても、この記念碑の為に命を奪われてはいけないのだ！』と叱責されたそうなの。」

「それって本当なの？お兄ちゃん。」
「ああ、とんでもなく大きな声でその元老院に叱責され、誰もがアウグストゥス様の声に畏縮されたらしいからね。」

ところがブッルスは不思議そうな顔をして、パッラスに疑問を投げかけた。

「しかし、パッラスとやら。そんな事はローマの日報や月報にも、記録として残ってないぞ。」

「ええ、アウグストゥス様が尊厳者として指名された時に抹消されたようです。」

「出来過ぎた話くないなあー。お前達奴隷の勝手な想像ではないのか？」

「ち、違いますって。」

「いや、曾祖父ならきつとそう言ったに違いないわ。」

「アグリツピナ様…。」

私はなんとなくそんな感じがしたの。少なくともこの大きなオベリスクの存在感からは、そんなアウグストウス様の想いや理想が感じられた。その後、パツラスは続けて話をする。

「そして二輪車競技は、今までの内戦の代理を意味することとなり、よってローマ市民は厳粛にこれを観覧するようにとの事で、一切のお酒を飲みながらの観覧を禁止されたらしいよ。」

「へえー。さすがアウグストウス様だね、アグリツピナ様。」

「うーん、それはちよっと違うかな。」

「何ですか？」

「だって、大母后リウイア様の話じゃ、アウグストウス様はめっっぽうお酒に弱い人だったらしいから。」

みんなは妙に納得して、私の話に頷いていた。

続く

第十一章「追憶」第二百十七話

ようやくパラティヌス丘に戻った。

世界中にとって政治の中心であるフォルム・ロマヌムも、以前よりだいぶ異様な静寂さに包まれている。私は祖母のアントニア様のドムスへ向かい、落ち着く間もなくすぐに大母后リウイア様の元へ連れられた。しばらく大母后リウイア様とは何気ない話をして、こちらへ向う途中にキルクス・マクシムスへ立ち寄ったことも報告した。

「あははは！そうよ、あの人は本当にお酒が弱いから。最もらしく市民には『厳肅にこれを観覧するように』などと言ってるけど、本当は飲みすぎてバツカス様に呪われて公衆の面前で醜態を晒したくない、それだけのことなのよ。」

やっぱりそうだったんだ。

ブルスに頼んで競技場の中まで入いらせてもらい、パッラスからアウグストゥス様の記念碑であるオベリスクの逸話を聞いたことを、大母后リウイア様へお話した。

「でも、その奴隷の…パッラスでしたっけ？その者が言ってる事は本当よ。尊厳者であるアウグストゥスをあの人が元老院から指名された時に、その叱責したことや演説内容を記録から抹消したのよ。」

「どうしてです？」

「色々あるだろうけど、あの人は感情的に湧き上がった理想よりも、元々ある理想を現実にするために、自分がどうあるべきかを生涯問い続けた人なのよ。」

そう微笑んで語る大母后リウイア様だが、以前に比べてだいぶお疲れのように思えた。キビキビと張り詰めたような空気が常に包んで

らしたのに、今では葡萄酒を飲むのにもどこかおぼつかないご様子。私はすぐに葡萄酒を注いだ。

「ありがとう、アグリッピナ。貴女は本当によく気が利く娘だこと。」

「いいえ、大母后リウイア様のお陰です。」

「全く、おべつかまで覚えちゃって。」

「えへへ。」

私が権威や神威に弱いのは昔からだった。カリグラ兄さんは、私がそういうのに媚を売っていると聞いたげだっただけけれど、単純に目上の人を敬う気持ちの表れだと思っただけだな。

「それで？アグリッピナ。貴方自身は一体何があったの？」

「はい、その…高熱に三日間うなされました。」

「アントニアの話じゃ、貴女がうなされている間、夢の中に冥界の主であるプルートーが現れたそうじゃない。」

「はい、はつきりとした姿ではなかったのですが、ゲルマニクスお父様の声や奴隷だったアキリアの声色で私を誘うんです。」

「何処に？」

「死の淵へです。」

「そう…。でも、その前に貴女自身に何かあったのでしょうか？」

「…。」

私はなかなか言い出せなかった。

大母后リウイア様から教えられた事が、しっかりと実践できていないと怒られてしまうのではないかと思ったから。そんな黙りを決めてしまった私を見兼ねたアントニア様は、ことの成り行きを説明して下さった。コツケイウス家のネルウア様が御用意してくださった新居で、お父様を待ち焦がれた木登りの事や、今まで積み重なって

きた母ウィプサニアとの距離感や確執など。アントニア様は私の両肩にそつと手を置いて、私の気持ちを細かく優しく代弁してくれた。

「きつとアグリッピナは、お義母さんの事が大好きで憧れているから、弱気な自分の気持ちを吐き出す事に億劫になっているのだと思います。」

「そうね、アントニア。」

「ひよつとしたら、心の奥では怒られるのでは？とも、おもっているのかもしれないね。」

それを聞いた大母后リウエア様は、いつものように右手の小指の先を啜えながら、色々な事を想定しながら頭に中で何かを考えてらしている。

「一つ聞かせて頂戴、アグリッピナ。貴女は今でも、お父さんの事は亡くなったと思っていないの？」

「…。」

単刀直入に質問をされる大母后リウエア様に対して、私は閉口して頷くかとしかできなかった。その姿を見た大母后リウエア様は、私を不憫そうな表情を浮かべながら見つめている。

「そう。」

そう呟くと大母后リウエア様は立ち上がり、暫く天井を眺めては考えていた。まるで何かを思い出しているように。そして何か意を決した様子で何度も何度も頷き、ようやく私へとっても暖かい表情で語りかけてくれた。

「アグリッピナ。」

「はい。」

「私とあの人の出会いの話を知りたい？」

「へ？」

「私と、貴女の曾祖父であるオクタウィアヌスとの出会いよ。」

私はてつきりスパルタ教室へ通っていた頃に、何か大切な助言を頂けるのかとばかり思っていたので、突然話題が変わったので拍子抜けしてしまった。

続く

第十一章「追憶」第二百十八話

「私とあの人の、ノロケ話には興味ない？」

「あります！あります！聞きたいです。」

心の中ではもちろん聞きたいと願っていたけれど、私が夢で見た冥界の主プルートーとの対処法を、なぜ答えて頂けないのか？不思議でしようがなかった。

「大母后リウイア様が、アウグストウス様とご結婚されたのはいつごろだったのでしょうか？」

「そうね、私がローマに帰還したのは二十歳の八月だったかしら？すでに夏にはミセヌム協定も成立してて、息子のティベリウスも三歳になって立派に歩いてたし、それにアグリッピナにとっては祖父になるティベリウスの弟もお腹にいたのよ。」

「お爺ちゃんか？」

すると横では祖母のアントニアが二度ほど頷いてくれた。

「そう。その頃あの人はガリアに赴いてたでしょう？それから戻ってきたのが、確か9月の上旬。あの人の誕生日頃に私は求婚されて、10月頃には婚約の形で一緒に暮らしていたかしら。」

「たった二カ月う？！早すぎじゃありませんか！？」

「フフフ。ええ、確かにね。周りの人は色々な陰口を叩いてたけど、私にとっては当たり前のことだったのよ。」

あっけらかんと大母后様はそう仰った。まるで運命に導かれているように、アウグストウス様とは再婚されたのだと思っただ。

「それって運命ですか？」

「そうね、運命と言えば格好つけかしらね。もっと地味で、なんてことないものよ。あの人と婚約する五年前、実は初めて会った時から、私はこの人から結婚をしたいって感じたのよ。」

「初めて会ったとき!？」

「ええ。あの時はアントニアの父であるアントニウスもいる宴会だったの。あの人も私も、みんなみんな若かったわ。」

アグリッパもマエケナスもまだまだやんちゃで、あの人は結構短気な青年。それなのに私は惹かれたの。その均整の取れた顔立ちや、身体の内面から溢れ出す神々しいまでの神威にじゃなく、幼い子供のような甘えん坊のような瞳に。そして初めてずっと何度も見つめあつたのよ…。

ガイウス・オクタウィウス・トゥリヌス様。後のガイウス・ユリウス・カエサル・オクタウィアヌス様。そして、インペラートル・カエサル・デーウィー・フィーリウス・アウグストゥス様。私にとって初代皇帝アウグストゥス様は母方家系の曾祖父。そして奇妙なことに父方家系の曾祖父アントニウス様とは敵対関係にもあつた方だ。

大母后リウイア様は当時十五歳で、後のアウグストゥス様であるオクタウィアヌス様は二十歳の年。アポロニアにいた当時のオクタウィアヌス様は、神君であり大叔父カエサルの暗殺を知り、友人であるアグリッパとマエケナスだけを引き連れてローマに潜入された…。

「オクタウィアヌス、これってやっぱりまずいんじゃないか？」

「うーん、確かにだな、オクタウィアヌス。」

「マエケナス、アグリッパ。貴様達がいる限り僕は恐れることは何もない。」

「あのなあ、いくら年下だからって人を当てにするなよな？ トウリ又ス。」

「うーん…。」

「おい、マエケナス。僕はガイウス・オクタウィアヌスだ。その名前はよしてくれ。」

「へいへい、オクタウィウス様。」

「何なんだよ？ その返答の仕方は?!」

「怒るなって、オクタウィウス。マエケナスは君の事をからかって試しているだけなんだ。」

「侮辱しているの間違いではないか？ アグリッパ。」

けれどもアグリッパ様の表情は眉一つ動かさず、しっかりとオクタウィアヌス様の顔を見つめて説得した。

「それが今回ローマへ潜入した君の理由ならばな。だが、今回はアントニウスの様子を探ることだろう？ アントニウスのからかいは、今のマエケナスなんて目じゃない。」

「さすが旧知の友アグリッパだな。冷静な判断だ。オクタウィアヌス、アントニウスを侮るなよ。キケロ様も仰っていたが奴は花園に潜む蛇だ。」

「クツ、マエケナス。貴様は表現がいちいち詩人くさいんだよ。「教養のない奴だな、芸術は心を豊かにしてくれるんだぞ。」」

三人はアントニウスが開いているという宴会場まで、その足をのばしていった。

続く

第十一章「追憶」第二百十九話

「アントニウスの野郎め！きつと大叔父カエサルから盗んだ財産で宴会を開き、周りに多くの女をはべらかせてるに違いない。」

「それは十分にあり得るな、オクタウィアヌス。カエサル様に右腕として忠誠を誓っていたはずなのに、現時点で暗殺を執行した元老院へは何も策を取ろうとしてはいないからな。」

「そうだろうか？アグリッパ。お前がオクタウィアヌスを良き友として同意することは勝手だが、状況はしっかりと見定めなければ、その守るべき良き友の命を失うことになるぞ。」

オクタウィアヌス様は、マエケナス様の言動にしかめっ面を向けた。

「マエケナス、貴様はいちいち棘のある言い方をする天パーだ。」

「天パーだと?!この野郎！私はお前の良き友として、年上なり助言しただけなのに。この甘えん坊!」

「お姉様の事は関係ないだろう?!」

「なんだ？オクタウィアヌスは姉ちゃんに甘えてるのか。」

「とにかく俺の天然パーマも持ち出すなよな。」

「まあまあ二人とも。」

「ちくしょう、オクタウィアヌスめ。見てよ。」

とはいいつつも、ここは自分に任せると胸を叩くマエケナス様は、自ら先頭に躍り出て会場の門番と二三言葉を交わしている。

「全くマエケナスの考えてる事はよく分からない。貴様は分かるか？アグリッパ。」

「自分の中に流れるエトルリア人の血がそうさせていると、この間言ってたよ。」

「エトルリア人の…血？」

「ああ。あいつはエトルリア人の出身であるがゆえに、このローマでの内戦を引き起こした一族の汚名を背負っているんだと。」

「そんなこと…。バカだな、僕は気にしていないのに。」

「あんなチャラついた感じではあるが、オクタウィアヌスだって奴が失敗したところを目撃したことあるか？」

「無い。」

マエケナス様は両腕に三人分のトーガを抱えて戻ってくると、オクタウィアヌス様とアグリッパ様へ、ポイツと渡す。

「お、おい。これは？」

「アントニウスの宴会へ紛れ込むのに、ボロのトウニカのままでもいいわけにはいかないだろう？」

「確かに。」

「だが、僕は一人でトーガを着た事がないんだぞ。」

「そんなもんアグリッパに手伝ってもらえ、アグリッパに。」

「どれどれ。」

「本当に手伝ってやるのかよ？アグリッパ。」

アグリッパ様はご自分のトーガを着るよりも先に、オクタウィアヌス様のトーガを広げた。両腕を水平に伸ばしたオクタウィアヌス様の周りで、力強く、しかしきめ細やかに、一つ一つの折り目を作りながら着せている。

「あの二人には、ローマに潜入した危機感があるのかね？全く…。」

マエケナス様はサツサと自分のトーガを着込んで、近くの草を一本抜いて、イラつく気持ちを抑えるようにブラブラ遊んでいる。ようやくアグリッパ様のトーガが着終えると、二人は誇らしげにマエケ

ナスへ見せた。

「よし、いい感じだ。」

「それでマエケナス、本当に宴会へ入る事はできるのか？」

「ああ、もちろんだとも。ただ、人達の身分は隠してだけだな。」

「身分は隠して？つて事は名前を変えるのか？」

「ああ、アグリツパ。」

「ダメだ、ついくせで言ってしまう。」

「演劇だと思えばいいのさ。」

「演劇だと？あんな野蛮まがいなことできるか！」

「オクタウイアヌスはそうでもないぞ。」

「え？」

意外としつくりと中流階級の振る舞いをして、姿勢を低く保ったままに話しかけてきた。

「あー、あなた様がアグリツパ様でっすか。強靱なお方だと聞いております、はい。」

「オ、オクタウイアヌス。」

「どうだろう？アグリツパ。僕の演技は中々なもんだらう？」

やけに楽しそうに演じるオクタウイアヌスの姿に、アグリツパは仏頂面をしながら啞然とした。

「ははは、オクタウイアヌスは演技の才能もあるのか。政治家としてはとても重要な素質だ。」

「政治家？何を言ってるマエケナス。オクタウイアヌスが政治家とシなんか…。」

「わすれたのか？アグリツパ。奴の名前にカエサルがあることを。」

「いいかアグリッパ。今夜がダメだったとしても、僕らは近い将来、三人で支えながらこのローマの中心にいることになるだろう。お前が軍神を引き連れ、私は外交を任せられ、オクタウィアヌス、奴こそカエサル様がなし得なかつた夢を果たすんだ。」

マエケナス様の描かれた脚本は、見事なまでに現実として演じられていく。そしてアントニウス様の宴会場で、オクタウィアヌス様は、後の大母后リウィア様と衝撃的な出会いをするのであった。

続く

第十一章「追憶」第二百二十話

「な、なんだ？これは。」

「オクタウイアヌス、お前の予想を上回るほど、随分と派手な事をやってるじゃないか、アントニウス様とやらは。」

「ここは、オクタウイアヌスの叔父のドムスではなかったのか？」

「おいおいアグリッパ。そういうセリフは、いざって時に残しておくもんだぜ。」

「マエケナス、そうはいうけど…。」

主賓であるアントニウスの姿は確認できなかったが、今回のカエサル様が暗殺されたことにより、なんとアントニウス様は故人を偲ぶ会を慎ましく行っていた。もちろんローマ中の貴族が呼び出され、暗殺を企てた元老院までもが平然と参加しているのだ。つまりマエケナス様の随分と派手なという意味は、身内を殺されたオクタウイアヌス様にとって皮肉でしかない。

「こ、こんな屈辱的な事があるか?!」

「お、落ち着け、オクタウイアヌス。」

「落ち着けだと?!アグリッパ。家族の名を侮辱している貴族を目の前にして、貴様は落ち着けというのか?!」

「オクタウイアヌス、半分はお前が正解で、半分はアグリッパが正解だ。貴様が単なる田舎出身のボンボンか、神君カエサルの血統を持つ後継者なのかの分かれ道だ。」

「大叔父を暗殺した者たちへ、ローマとの『別れ道』だろうが。」

「粹な表現だ、オクタウイアヌス。憎しみは絶えず心に燃やし続けながらも、その表情には誰にも悟られない仮面をつけている。夜空に輝く星のように、己の周りが闇で包まれるほど、お前の血筋がものを云うんだ。」

「やっぱりやるしかない。」
「え？」

オクタウィアヌス様は外衣の中に何かキラリとした物を忍ばせていたが、マエケナス様もアグリッパ様も気がついていない。彼らを共だつて宴会のあちらこちらをゆつくりとあるいたが、それでも主賓である憎むべきアントニウスの姿は見かけない。

「マエケナスは、あんな風に言ってるが、腸煮え繰り返えているこの気持ちをどうすればいいんだ？アグリッパ。」

「今はじつとするしかないオクタウィアヌス。怒りを抑える時は必要だ。それでも怒りが爆発する時は、俺が全力でお前を守ってやる。」

「アグリッパ、でも貴様……。」

「仕方ないだろうが、これはお前のためじゃ無い。お前が牢獄に入れられたら、俺も付き合う。これは俺のためなんだ。」

「ありがとう。」

「礼を云うのは早い。」

オクタウィアヌスは奴隷から葡萄酒を貰い、一つはアグリッパに渡し、自分の分を取ろうとした時だった。

「ひゃあ！」

「あ……。」

「ちょ、ちよつと！貴方ね……。」

一人の可愛らしい女性に葡萄酒をかけてしまった。キリツとした細い眉がオクタウィアヌスを睨み、だが、その大きな瞳はオリンポスの神々をも彷彿させる輝きに満ち溢れている。若き日の大母后リウイア様だ。

「これは…失礼した。」
「いえ…。あ、あの。」

大母后リウイア様も瞬く間に恋をした。相手が高貴な出身であることも、そしてその宴会場では身分を隠されて参加されていたことも、直感で分かったらしい。それでも十五歳の乙女が二十歳の青年に恋をしたのだ。晩年、葡萄酒を掛けられた事ぐらいは、演劇を司るアウグストウス様の人生の中でも、不本意であつただろうと感じたそう。そしてそれは神のイタズラだったのかもしれないとも。

「どちらの氏族か存じ上げませんが、私も本当に不注意でした。ご無礼をお許しください。」
「…。」

大母后リウイア様はとても無垢で、オクタウイアヌス様の瞳に自分の姿が映ることを恥ずかしく思い、ワザと礼節をする事で瞳を逸らしてしまった。けれどオクタウイアヌス様は違った。

「瞳をこちらへ。」
「はい…。」

オクタウイアヌス様以外の人間にされたのならば、大母后リウイア様もなんと目もくさしく傲慢な態度に思えた。しかしオクタウイアヌス様は平然と大母后リウイア様の顎を指先でクイッと自分の方へ向けさせたのである。

「君は…とても可愛らしい。名は何と申す？」

「リウイア、リウイア・ドルシラです。」

「僕は、ガイウス、ガイウス・オクタウイアヌス。僕の大叔父には

「……」
「オクタウイアヌス！」

間を挟んだのはマエケナスだった。

ここでその名を口にするなつと首をゆっくり横に振る。はつと瞬時に我に帰ったオクタウイアヌス様は、その場をアグリッパ様に急かされ離れられようとされていた。

「リウイア。また、僕と会えるかな？」

「ええ。貴方が望む時なら。」

痺れを切らしたマエケナス様は、オクタウイアヌス様のトーガを無理やり掴んだ。その時、大母后リウイア様はオクタウイアヌス様の懐に忍ばせていた短剣を見かけてしまった。この領域はポメリウム。見つければ死刑どころか、記録抹消の刑にもなりかねない。マエケナス様と共に去っていくオクタウイアヌス様だが、大母后リウイア様は気がでなかった。一方、表に出た三人の中で、オクタウイアヌスの真相を知ったマエケナス様が怒鳴り声を上げてる。

「オクタウイアヌス！なぜ短剣などを持ってきたんだ？！」

「怒鳴るなマエケナス！俺は大叔父様が見過ごされたのはどうしても許せない。」

「だからといって、聖域のポメリウムに短剣を持ってくれば、どうなるか分かっているだろう？！」

「……」
「マエケナス、オクタウイアヌスはアントニウスを刺して自害するつもりだったんだよ。」

「な、何？！」

「……」

「お前はバカか？！その為に俺たちを呼んだのかよ？！アントニウ

スから財産を譲り受ける承諾を得る為じゃなかったのかよ?!」

さすがのマエケナス様も呆れて地面に唾を吐いた。浅はかな考えと幼稚な復讐、まるつきり世の中の情勢が見えていないオクタウイア又ス様の安直な復讐劇にお手上げだった。だが、その場を救ったのは大母后リウイア様だったのである。

続く

第十一章「追憶」第二百二十一話

「あの…。」

アグリツパ様はすぐに振り返って、オクタウエアヌス様の前に立ち
はだかつて身構えた。一方マエケナス様はピタリと動かず、右手の
親指で顎を摩ってこちらを睨んでいた。そう、この三人に声を掛け
たのは、若き日の頃の大母后リウエア様だった。

「き、君は、リウエア？ そうだよな？」

「はい、リウエア・ドルシラです。」

マエケナス様は、少し安心して悪態をついた。

「ケツ、オクタウエアヌスがさっき見つけた女じゃねえか。」

「…。」

「一体、俺たちに何の用だい？ お嬢ちゃん。」

「おい、マエケナス！」

「ガキと付き合っているほど、こっちは暇じゃないんだ。」

「存じ上げております。もし良かったら、その短剣を私に下さらな
い？」

生きた獲物でも殺しそうな、まさしく狼のような二人の眼光が、大
母后リウエア様へ突き刺すように向けられる。だが、若きリウエア
様は右手で精一杯の握り拳を作りながら、必死に怖さを隠しながら
虚勢を張っていた。

「オクタウエアヌス、この娘の始末はどうするんだ？」

「え？」

「ポメリウムで短剣を所持していることが暴露なんだぞ。」

アグリツパ様は微動だしない冷徹な目付きでじっと若きリウイア様を見つめていた。

「アグリツパに殺させるか？」

「…。」

「待ってくれ。」

「？」

命令あらば直ぐにでも、大母后リウイア様へ飛び込む準備ができていたアグリツパ様をしっかりと制止する。

「リウイア、君は僕を助けようとしてくれるのかな？」

「もちろんです。」

美しさが惹きつける力は、時を選ばず気付いた者の前には必ず訪れる。当時のオクタウイア又ス様と若きリウイア様の前にも、神々はしっかりと訪れた。見つめ合う時ではない状況にも関わらず。

「リウイアに任せよう。」

「はあ？な、何を言ってるんだ？オクタウイア又ス。」

「マエケナスの言うとおりだ。」

「いいかあ？今さつき会った女を、どうしたらお前って田舎者は信用できる？」

「僕が気に入ったからさ。」

「はあ？！」

「…。」

「どう考えたって、このまま僕らの力で解決出来る問題じゃない。それならいっそう、リウイアに任せの方が上手くいくかもしれない。」

「オクタウエアヌス、お前って田舎者は都会の女に騙されてるだけだよ。」

「いや、少なくとも、僕の目には曇りは無い。」

言い切った。

オクタウエアヌス様は、胸を張って堂々と二人の前で、そう宣言されたのだ。若きリウエア様が握られていた右手の拳も、その言葉でようやく和らいでいく。

「アグリツパ、お前はどうするんだ？」

「…。」

「ほれみる！オクタウエアヌス。お前の親友も困ってるぞ。」

「いや、マエケナス。オクタウエアヌスが望むなら俺もそれに従う。」

「な、なあんだって?!」

「お前も言ってたじゃないか。『今夜がダメだったとしても、僕らは近い将来、三人で支えながらこのローマの中心にいることになるだろう。』つと。」

オクタウエアヌス様は満面の笑みをこぼしながら、両手を広げている。きつとその一瞬だけはマエケナス様にとって神君カエサル様姿がダブったのかもしれない…。こうして若きリウエア様は、ご自分の下着の中の胸元へ短剣を隠したまま、蔽かに行われた故人を偲ぶ会を堂々と過ごされた。

「アントニウス様？」

「うん？」

リウエア様はそれだけでは飽き足らず、なんと身分を隠したままの

オクタウィア又ス様とアントニウス様を更に偶然を装って引き合わせたのだ。結局、アントニウス様からオクタウィア又ス様はカエサル様の遺産を返却する承諾は得られなかったのだが、その堂々とした佇まいと恐れを知らぬ冷静な懇願には、カエサル様の単なる親戚の小童と思っていたアントニウス様にも十分な印象を与えることとなったという…。

「私があの人を守った事により、それが例え間接的であつたとしても、カエサル暗殺に関与した者達がクイントウス・ペディウスの法により、断罪されて処刑されることは避けられなかったでしょうね。」

「…。」
「当然私の父も追放リストに名前が載り、私たち家族は亡命を余儀なくされてしまったの。」

「リウィア様…。」
「亡命した父は当然カツシウスやブルートウスに加勢し、フィリッポで戦って自決したの。あつという間だったわ。」

少し薄暗いドムスの天井をみつめたまま、大母后リウィア様はご自分の矛盾と混沌をさらけ出してくれた。

「今でも何で私があんな事をしてしまったのか、不思議でしょうがない時もあるのよ。結果的に自分の父の命を奪い、そして父の命を奪ったあの人と結婚していたのだから。」

私は大母后リウィア様が辿られた多くの苦難に、ただ平伏して床を見つめるだけしかできなかつた。

「でもね、アグリッピナ…。」

ところが大母后リウイア様は、わざわざ近付いて私の顔を上げるように微笑んでくださった。

「自分のした事や起きてしまった事に後悔だけはしなかった。どんなに現実の苦境から逃げだそうとしても、冥界の神ブルートーのうに何処までも捕まえようと追いかけてくるわ。」

「リウイア様…。」

見上げる私をしっかりと見つめ、そして当たり前前の事を教えてくださった。

「ユリア・アグリッピナ。」

「はい…。」

「例え死神などに追いかけれようと、それは貴女の弱い心が作り出した幻でしかない。」

「はい。」

「だから私と同じように貴女も、いつでも強く、そして賢くありなさい。」

「え…?」

そばにいたアントニア様も、大母后リウイア様が私に仰る事がどんな意味なのかを理解し、そして口を開いて驚くしかなかった。

「リ、リウイア様…。」

「そのようにあれば、いずれ貴女も、今の私のようになれます。」

威厳や神威だけではない、まるであたかも事実を述べられているような言葉。その言葉は重厚であって安易な気休めでは無い。それは自分の曾孫であっても、轟頂するような女性ではないからだ。父を喪失した私の空洞の心に光が照らされると、暗闇の中から希望に満

ち溢れた顔をした乙女の姿が現れる。国家の母へ憧れを抱くもう一人の私が、ローマに広がる青空を眺めて瞳を輝かせていた。

続く

第十二章「落命」第二百二十二話

そして、あの悲劇が訪れる…。

ドルスス兄さんは悲願である成人式をようやく迎えることができた。成人男性にとつての保護女神ユエンタースから恩恵を受けたお姿は、それまでの子供服のトガ・プラエテックスタから正式の成人服であるトガ・ウイリスへと着替えられたこともあって、とてもとても凛々しく神々しく輝いていた。私はまるで自分の事のように嬉しく、涙を流してお兄様を祝福していた記憶がある。

「ドルススお兄様」。本当に本当に、おめでとうございますううう！」

「おいおい、アグリッピナ。あはははは、お前は大袈裟だって。」

「そんな事ないですよ。だって、私、本当に、自分の事のように嬉しいんですから。」

「あはははは、そっかそっか。ありがとうな、アグリッピナ。」

そう言うと、私の頭を撫でてくれた。

ただ照れているだけだって事もすっかりお見通し。だからこそ、お兄様には素直に喜びと祝福の思いを伝えたかった。これで母ウィプサニアとも衝突しなくなるだろうとも思っていたから。

「ドルシッラ、リウィッラ、ありがとう！」

しかし実情はこうだった。

母ウィプサニアは大母后リウィア様との対立から、政治的にドルスス兄さんの成人式は先延ばしされていた。しかし、この時期だからこそ成人式をあげるべきだと母へ進言されたのは、何を隠そうコッ

ケイウス家のネルウア様だった。あらゆる意味でネルウア様の助言に依存していた母にとっては、もちろんこれを断ることも拒否することもできない。さらにネルウア様のテイベリウス皇帝への根回しは、ネロお兄様の成人時と同様に、ドルスス兄さんにも特例的な顕職で予定財務官であるクアエストルとされることになったのだ。つまり、これによりユリウス家からは若い元老院議員が二人列せられた事になったのである。ネロ兄さんはドルスス兄さんの成人式を、もちろん自分の事のように喜んでいた。

「ドルスス、良かったな。」

「ネロ兄さん。」

「今までお前とは色々あったけど、晴れてお前がこうやって成人を迎えてくれたことで、お母様も心から喜んでくれるはずだ。ユリウス家として共に力を合わせようじゃないか？」

「……。」

けれどネロ兄さんの喜ぶ顔に水を差したのは、他でもない成人式の主人公であるドルスス兄さんだった。

「ドルスス？どうした？」

「悪いけど、僕は兄さんのように母さんの傀儡になるつもりはないよ。」

その小さくつぶやいたドルスス兄さんの一言は、私達兄妹の喜びも氷結させるほどであった。それでもドルスス兄さんが祝福されている中で、ネロ兄さんは何とか取り繕って受答ええようとしている。

「お、おい。まるで狼に狙われたような顔するなよ。」

「狼狽しているのは兄さんのほうじゃないか？」

「ドルスス……。」

「兄さんには自分の考えがあるように見えて、本当はまるっきり全部、母さんの受け売りでしかないじゃないか。」
「何だと?」

異様な空気を察した私は、二人の兄達がこんな公の場で喧嘩になるんじゃないか心配になり、ドルスス兄さんの後ろからできるだけ近づいた。

「ドルスス兄さん……。」

「アグリツピナは黙ってな。ネロ兄さん、僕はね、ちゃんと自分の意見と意志があるんだよ。兄さんと違って、力のある人に尻尾を振ったりはしない。」

しかし、ドルスス兄さんのネロ兄さんへの挑発は終わらない。ネロ兄さんも、ドルスス兄さんの挑発に対し、さっきまで浮かべていた祝福の笑顔を、砂浜に描かれた文字のように消し去られていく。

「兄さんと違って、どんなに感情的になっても、相手の立場を考えて行動することができんだ。」

「ドルスス、それは僕を馬鹿にしているのか?」

「いいや、事実を述べているんだよ。」

「なんだと!？」

「殴りたければ、今、ここで殴ればいいじゃないか。この間のように顔を思いつきりね。」

ネロ兄さんの右手は自然と拳が握られ、ドルスス兄さんへの怒りがこみ上げているようだった。私はそれでも必死でドルスス兄さんの右腕の衣服を何度か振って、どうか言動を抑えてもらおうように懇願した。しかし、ドルスス兄さんの右手はなぜか拳を握られたまま震えていた。

「兄さんは覚えているかい？前に僕と母さんの意見が対立した時に、兄さんは真っ先に母さんの味方をして、僕の意見も聞かずに顔をめがけて拳をぶつけてきた事を。でも僕は、兄さんが財務官である事を踏まえて顔だけは殴らなかつたんだ。わかるかい？わざと殴らなかつたんだよ。」

「...。」

「だが、これからは違う。例え兄さんがユリウス家の家長であつても、成人したローマ市民として、そして元老院議員としても僕らは対等なんだ。だから、兄さんは母さんの受け売りなどせず、自分の意見を持つてしっかり立って欲しいんだ。」

「ドルスス...。」

私の心配は無駄だつた。

ドルスス兄さんは成人したこの日だからこそ、優しすぎるネロ兄さんへ敢えて奮起してほしかったのだ。その証拠に、なぜかドルスス兄さんの目じりにはかすかに何か光るものが輝いていた。そしてネロ兄さんも、声を震わせながら感謝を伝えていた。

「ありがとう、弟よ...。」

でも、母ウィプサニアとドルスス叔父様の秘密は、ネロ兄さんの胸の中にだけ抱えられていた。

続く

第十二章「落命」第二百二十三話

悲劇は高慢ちきのリヴィアの密告から始まる…。

長男であるネロ兄さんの妻は、ドルスツス叔父様とリウィツラ叔母様の長女リヴィア。幼い頃は一緒に大母后リウィア様のスパルタ教室に通っていて、高慢ちきな性格で苦手なタイプ。そんな彼女にも誰にも打ち明けられない秘密があった。それは実の母親に対する服従にも似た異常な愛情を持っていたこと。

一時期リウィツラ叔母様は、母ウィプサニアと険悪だった私に対して、実の娘のように優しく接してくれていた。フレスコ画での透視図法を教えてくれた事もあったのだが、長女の高慢ちきリヴィアはそれが気に入らなかつたらしい。自分は心優しいネロ兄さんと結婚したくせに、私に対しては実の母親を奪われたような想いさえも抱いていたようで。しかし叔母様がセイヤヌスと不義を重ねているうち、母ウィプサニアとも赤ら様に対立していくと、私達からも自然と距離を置くようになっていく。それにより、ようやく実の母親を独り占めできるかのように、高慢ちきのリヴィアはここぞとばかり甘えていた。

「お母様、今日は具合が良くなった？」

「何だよ、リヴィアか。あんたあんまりここに来ちゃダメだって言つたろう？」

「どうして？お母様は最近家に籠ってばかりで表に出てないし、私はお母様が心配なの。」

「実の娘に心配されちゃ、あたしも母親失格だわ。」

「うっん、そんなことない…。」

リヴィアは物欲しそうに母親であるリウィツラ叔母様の腕にしがみついた。そんな姿を見兼ねたリウィツラ叔母様は一つため息をついては呆れてる。

「ふうー。つたく、あなたの甘えん坊は本当にいつまでたつても治らないね。」

「だって、お母様の側にずっといられて嬉しいんだもん。」

「あなたの愛しいアポロ様はどうした？」

「あれは別だって。」

「あれって、あなた自分の旦那のネロくんのことをそんな風に言うもんじゃないの。」

「いたつ。お母様、わざわざおでこ叩かなくなつて…。」

「ネロくんは根がとつても優しくて繊細なんだから。」

「最近酒に頼つてばかり。ネロ様だけは虚勢張る男だと思わなかつたのに…。」

「つたく、何を夢物語をぬかしてるの。結婚なんてそんなもんよ。」

こんな姿をネロくんに見られたら、あなた終いには捨てられるぞ。」

「いいもん、そしたらお母さんとずっと一緒にいる。」

「馬鹿か、お前は。」

毎日、母を看病しに行つてたリヴィア。叔母様と同様に、特別な感情を抱く対象が不幸になればなるほど、その想いは更に強くなつていく。と同時に、母がこうなつたのは、ウィプサニアに入れ込んだ実の父親のせいだとも。なんとか母を救いたいリヴィアにとっては、父よりも自分だけを見て欲しかった。その想いは私だって分らないくもない。

「貴方？」

「おお、リヴィア。まだ起きてたのか。」

「酒臭い、今日も飲んでらしたんですか？」

「ああ、悪いか？」

夫であるネロ兄さんも頭を抱えていた。弟の成人式は喜ばしく、兄を思うが故の自分への指摘は、鋭くネロ兄さんの家長としての誇りを傷付けてもいた。

「ドルススの奴、偉そうに……。」

「またその話ですか？ドルススクんの成人式時には、涙を流して喜んでましたじゃないですか。」

「始めは、そう思ってたさ。けれど僕はお母様の傀儡なんかじゃない。ちゃんと自分の意見だつてあるんだ。」

「だったら、その時にそう仰れば良かったのに。」

「言いたかったさ！でも、あいつの理屈が最も過ぎるんだ。」

「……。」

「リヴィアだつて、そう思うだろ？」

「今夜は早く寝てくださいね、いつまでも片付かないのは嫌ですから。」

確かに高慢ちきのリヴィアは、ネロ兄さんに一目惚れした。けれどそれは、ネロ兄さんの弱い部分までも寛容するほどではなかった。人一倍優しいネロ兄さんにとって、ドルスス兄さんからの指摘や母と叔父の密会は、精神の板挟みで心を圧迫していた。

「リヴィア、お前までも僕を圧迫させるのか？」

「何を言ってるんですか。」

それでもネロ兄さんは泥酔するほど酒を浴びるように飲み続け、頭から離れなかった誰にも言えない悩みを、うっかりリヴィアに漏らしてしまった。

「え?!」

「ぼ、僕だつて、目を疑つた…さ。」

「ネロ様!それをどこで見かけたのです?!」

泥酔しているネロ兄さんの襟元を掴んでは、何度も何度もネロ兄さんの首を振つて問いただすりヴィア。

「たしか、女神ヴィリプラカの…神殿さ。あんな所で、手を…取り合つて、互いに、愛を…囁いてたんだから。」

「いつ?!」

「た、たしか…一ヶ月前の…三日さ。」

「ああああ!両親が大喧嘩して、お父様が初めてお母様を殴られた日!」

実の母親であるリウィツラ叔母様に対して特別な愛情を持つリヴィアは、夜中だというのに泥酔したネロ兄さんを放り投げたまま、リウィツラ叔母様のいるドムスへと駆け足で向かつて行くのであった。

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5575q/>

紺青のユリ

2012年1月6日13時51分発行